KAIZO

改造

八月號

1926

Vitamogen Regd
NERVE TONIC

腦及び神經の食料
ヴィタモーゲン

腦に過度の緊張を與ふるときは、神經中樞を通して全身に反動を來し、頭痛に苦しみ、睡眠は妨げられ、食慾は減じ、仕事に倦み、感情は興奮し易くなります。

この狀態は腦神經細胞の重要成分たる燐その他の物質が過度に消費されて平衡を失した時に起り易き症狀で、鎭靜劑の服用は一時的には良効を奏しますが根本的の療法としてはこの缺乏せる成分を補給しなくてはなりません。

燐は牛卵中の卵黃からも一部を補給するを得ますが、頭腦の肥料として必要なる凡ての成分を最も濃厚に然も同化され易き狀態で含んで居るのはヴィタモーゲンであります。

ヴィタモーゲンは神經衰弱者は勿論、劇務家、學生幷びに頭腦を過度に用ふる人々に對する最上の美味なる榮養食料であります。

「腦力と體力とを增進するには」と題する小冊子御入用の方は總代理店宛御一報次第送呈す



英國ロンドン
製造元 ヴィタモーゲン會社
東京日本橋區本町
代理店 合資會社 田邊元三郎商店

一〇〇瓦入………一円八十錢
二五〇瓦入………[illegible]円

各地著名藥店にあり

VT 21



改造八月號目次

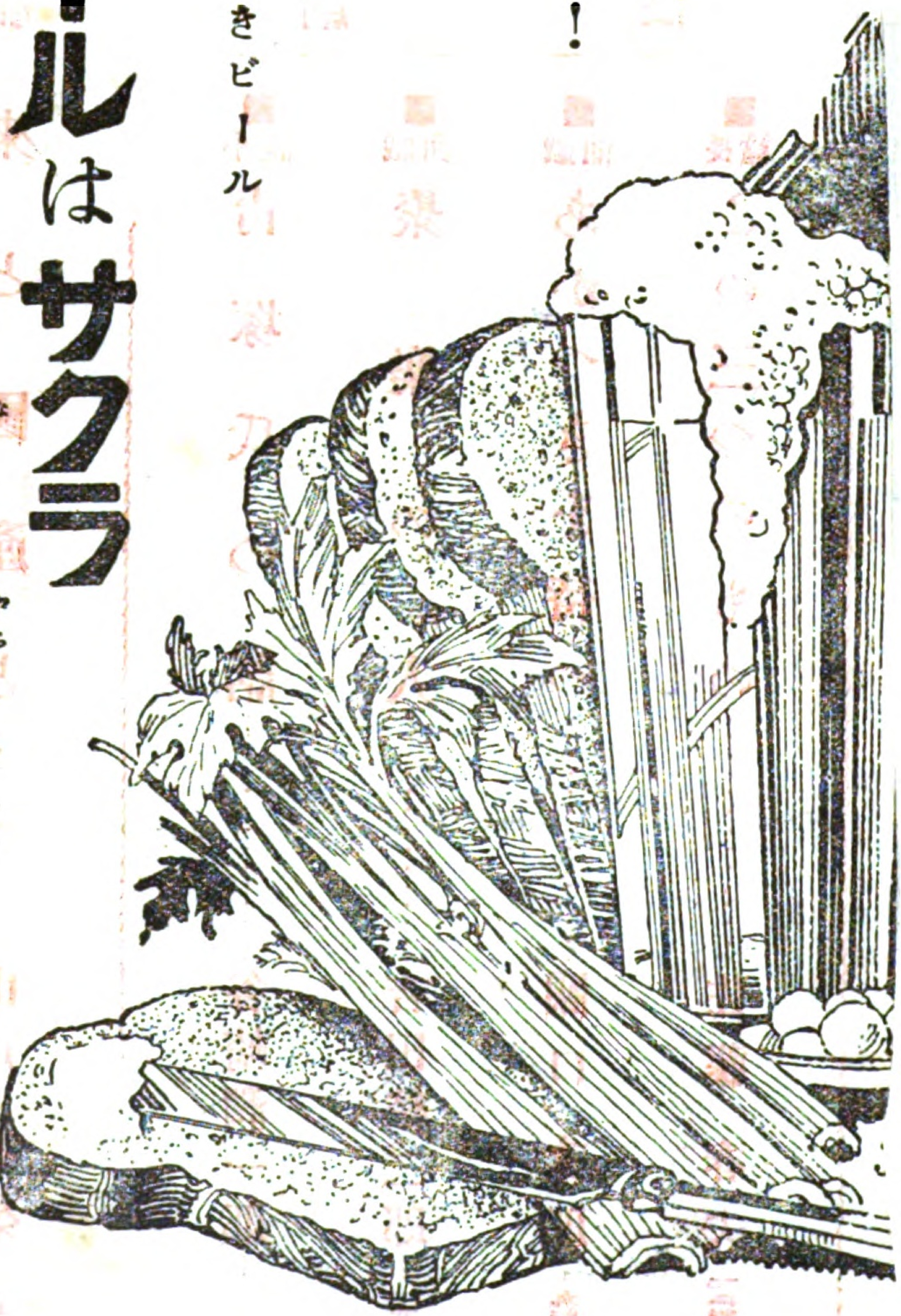
現下の問題

木崎村農民學校問題所感……平林初之輔



改造八月號目次

現下の問題



木崎村農民學校問題所感……平林初之輔



改造八月號目次

現下の問題

「木崎村農民學校問題所感……平林初之輔

東北大學教授 村岡典嗣著

切支丹文學抄

定價參圓 送料十八錢

新刊

今より凡そ三百年以前、當時東海に屹立して絕えて外國文化の恵澤に浴する機會を得ざりし我が民人が、西歐文明の象徵たる切支丹宗に接して、如何に直截に如何に素朴に、驚異と崇敬の念を捧げたか。そは單たる興趣なるのみならず、實に現代文明の淵源を探究する上に必要の事である。而かも當時の文獻は今既に悉く散佚して、之を求むるに由もない。著者は之を蒐集するに於て非常なる苦辛を拂ひ、或る篇の如きは倫敦博物館に珍藏せる世界に唯一冊しかないといふ文獻より筆寫されてある。題して『抄』と謂ふが、切支丹文學も斯くまで廣汎に集大成せられたものは他に一冊もなきのみならず、後日何人に依るとも之れ以上の集成は至難と云ひ得る。實に完成せられたる切支丹文學の精華にして最も系統的なる文獻である。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

松岡靜雄著

日本言語學

四六判・總布製
本文 六〇〇頁
（索引 二八頁
附錄・證歌釋義）

定價 金參圓貳拾錢
送料 書留 貳拾七錢

「ことば」が民族發祥に深き由縁を有ち、一國文化の消長に大なる關係を保つといふことを知る時、今や日本文運復古の機運に際して吾人の先づ第一に着手すべきは自國語の研究でなければならぬ、本書は著者が民族學並に比較言語學の新たなる見地から日本語の源流と國語發達の跡を繹ねて日本語獨特の本質を究明し、在來行はるゝ不自然にして而も難解無味なる國語文法の一大缺陷を指摘すると同時に、「記」「紀」「萬葉」の日本古代語に獨創的新解釋を加へ、國文學上に新天地を開拓した一大論斷である。從來我が小學兒童の軟かき頭腦までに作文修辭上甚しき不安と混迷とを餘儀なくして居た最も親しみ易からざる國語國文は、本書によつて始めて母國に歸りし思ひあらしむると共に、難澁幽遠とのみ信ぜられて居た我が「古語」も終に現代國語とその血脈相通ずるが如き氣易さを讀者の胸裡に懷かしめる。日本古典の研究にも、國學の考證にも、また日語敎授にも苟も日本人の必讀すべき劃期的文獻である。

發兌 東京九段中坂下
中山ビルディング内
電話四谷（三二二三）（五四九六）
振替東京七三一一八
刀江書院

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同しだと云ふ煙草も一度『カロット』を口にすれば

再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本社代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御説明申さう」と云つて主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました。丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好きな方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方「やつ！之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね！」驚いたと仰有いたしました、此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね！」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました。其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

天下堂は銀座、時事新報社に向つて左の通り左側八軒目です。何うか一度誰方も御來店御試しの上**ニコチン**の中毒の害からのがれて下さいまし、兎に角弊堂は確信を以つて發賣致して居りますから御來店御實驗の程願ひます。……

特徴

外見恰も卷煙草を用ゆるに異なざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘い味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を離れて斷じて再び顧みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

送料（內地十八錢 鮮、朝、樺四十五錢）	引替（內地三十錢）送料（鮮、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 **天下堂**

緑蔭の下にて口誦し居れば清涼の氣自ら生じて心神爽快を覺ゆ

日本現代代表自選短歌集

改造社發行

著者	書名	紹介	價	送料
齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	天才歌人茂吉の歌は全く子規・漱石と共に文壇の寳玉である。此歌集は現代歌壇の一大權威。	一・五〇	・一八
島木赤彦著	現代代表自選歌集 十年	赤彦が晩年に自らの作を發表した一粒選りの歌集。歌集にして全集を兼ねたるもの。故人唯一の紀念書	一・五〇	・一八
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のほとり	未だ曾つて歌集を出さざりし氏の處女歌集にして併せて全集。左千夫を師として出藍の偉材。	一・八〇	・一八
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	アララギ新進歌人の隨一、視野に一新境地を發見せり。茂吉、赤彦と併稱せられ潑溂新鋭を以つて鳴る	一・八〇	・二〇
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	尤も幽寂な歌人。此人の歌を誦し居れば身はいつでも深山幽谷にあるの思ひがする。	一・八〇	・二二
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	白樺第一の歌人。信綱を師としその和歌は師の發見せざる一別境を行く此人の唯一の遺書歌集。	一・八〇	・二〇
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	北原氏と共に歌壇の雄にしてその功勞は枚擧に遑あらず。此人の自選歌集は歌壇の一重鎭だ。	一・八〇	・一八
前田夕暮著	現代代表自選歌集 原生林	歌集として見れば此人程以外に立派な歌が集まる人は又他に少ないと思はれる。總てこれ名玉。	一・八〇	・二〇
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	啄木を知るものは哀果を擧げ、哀果を論ずるものは啄木を引合に出す、近時彼に一轉機あり。	一・八〇	・二〇
若山牧水著	現代代表自選歌集 野原の郭公	その恬淡の風格、その和歌共に脱俗して歌道以外の人々まで氏を仰ぎ見る氏が半生の各歌集。	一・八〇	・二〇
窪田空穗著	現代代表自選歌集 槻の木	この人の藝道に於ける境地は近時ますます展けて來た。此一書を讀みて近時に比べば一段の味あり。	一・八〇	・二〇

日本經濟史研究

我日本史を經濟的觀點に立ちて究明せる我國最始の權威ある試みで我知識階級は勿論、我總ての階級に必備の良書、內容空疎なりし我國經濟史の重大な發見的文獻。

社會科學七月特輯

- ■日本經濟史の學理的考察　瀧本誠一
- ■田莊の研究　牧健二
- ■碾磑考　瀧川政次郎
- ■平安朝に於ける貨幣の使用及流通について　西田直二郎
- ■王朝時代に於ける錢貨の流通に就いて　中村直勝
- ■鎌倉室町時代の小作制度　新見吉次
- ■德川時代の概觀　本庄榮治郎
- ■德川幕府初期の外國貿易　渡邊修二郎
- ■江戶時代に於ける諸侯の財政窮乏　土屋喬雄
- ■德川時代の農村奉公人　小野武夫
- ■德川時代の貨幣制度　黑正巖
- ■佐藤信淵氏富國策に就て　口田康信
- ■幕末に於ける社會階級と其鬪爭　猪谷善一
- ■我國資本主義發達の礎石としての維新の土地改革　高橋龜吉
- ■明治六年筑前竹槍一揆　石濱知行
- ■日本資本主義社會の自己批判と日本經濟史の研究　福本和夫
- ■最近社會科學界主要論文及著書解題質疑應答

特價貳圓　送料四錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

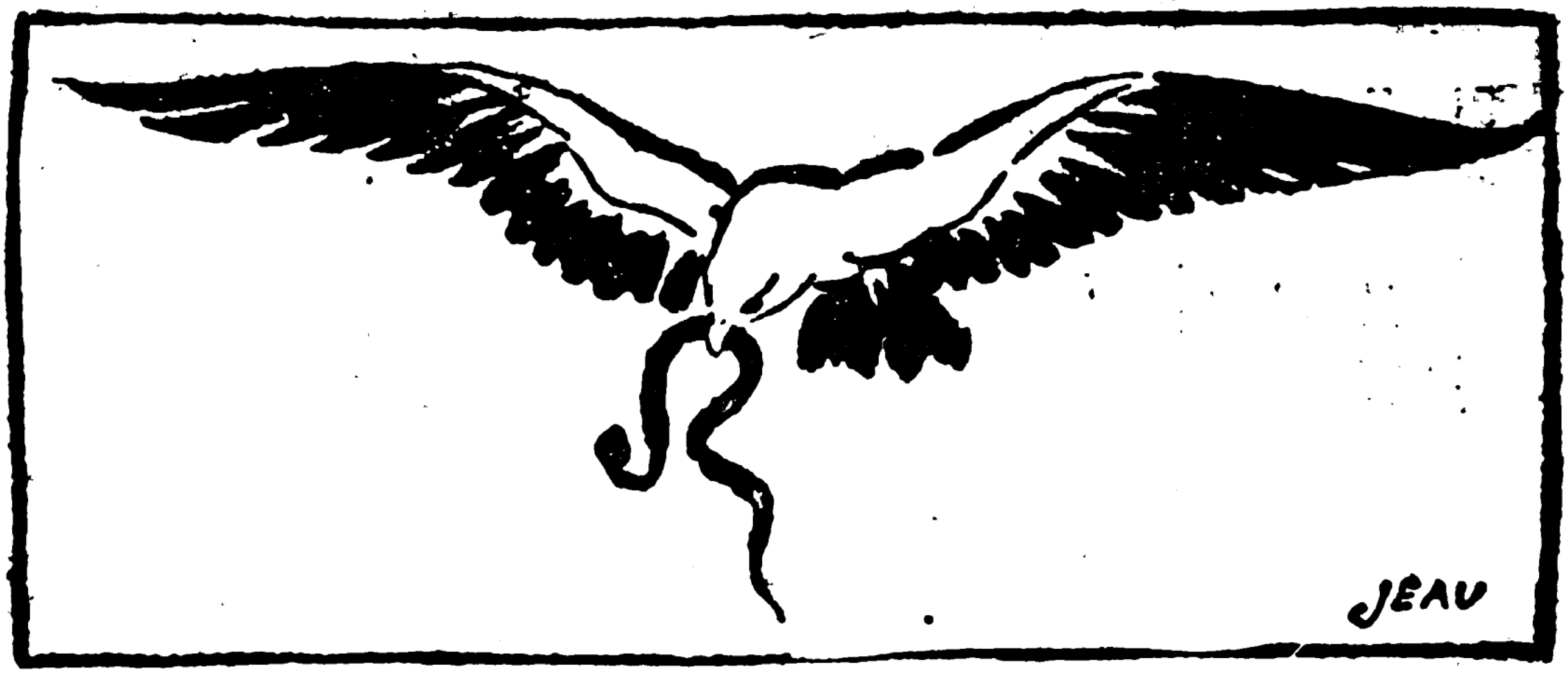
社會科學
七月特輯

日本經濟史研究

我日本史を經濟的觀點に立ちて究明せる我國最始の權威ある試みで我知識階級は勿論、我總ての階級に必備の良書、內容空疎なりし我國經濟史の重大な發見的文獻。

特價貳圓　送料四錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二一番　改造社



（八　月　號）

自治體の政黨化

ダラダラすねた、伊澤君の就任と共に東京市政は完全に憲政會の城廓に歸した。これで後藤閥は退却し、永年全盛を勝誇つた政友閥も野黨に下ることになつた。我等は源平藤橘その何れでもよい、ただ現行法で選擧された市議の推擧する市長がブルの代辯者だから何等の期待ももたない。そうした人間の誰を持つて來ても理想的都市の出來上ろう筈がなく、市民の負擔が輕減さるる譯でもなく、我々の血税の悉くが、プロレタリア階級に直接關渉のない施設に多く使用さるるは火を覩るよりも瞭かだ。後藤、中村、永田、阪谷、奥田等の歴代市長が計畫したる道路、家屋、公園、區劃整理、學校の一々について審かに點檢するならば、そこの施設幹流の悉くが特權階級を標的とされぬ事業はなく、市民の七割以上を占むるプロ階級は殘滓を頂戴するが如き狀態にある。殊に今回の復興事業に於ける道路の擴張、家屋の制限其他に見て一層その感じを深くするものだ。このときサーベル上りの市長が突然憲政會の手をかりて持ち込まれた。我々は呆然としてその云ふべきを知らない。東京市民は總てのことを犠牲にして大東京の復興に血眼になつている、市當局も市民と協同してこの大事業に當面せねばならぬ。それ以上に築港、道路、建築、區劃整理等の雄事業の横はるあり、何ほ前途に生産的の大事業も豫期せらるるとき何等財政、經濟に信用なく、智識なく、手腕なき人を拉するは市民を愚弄するの甚しきものだ。官僚との交渉に貫祿を要するが故に、また、あまたの儀禮にそれぞれの體面を保つ上より親任官上りと云ふやうな格式を要求するなぞ時代錯誤の甚しきもの。如上の諸事業の遂行に外債か内債かを募集するのが焦眉の急に迫りながら、身辯保のこと以外何にも知らぬ門外漢を引き入れる憲政會の無智、無策は憐むべきである。

我等は自治體の政黨化は原則の上より當然の歸結と思ひ、すべての情勢上、早晩かくあるべきを豫期したこととてそれについては世の人と見解を全然異にして今回の如く憲政會のチヤキチヤキが來たことを歡迎する。國政が政黨によつて掌理される原則に同じつつ、自治體のみに政黨化を拒否するは矛盾撞着の極である。

ただ、現下多難の東京市長に伊澤君を、そして助役にも辯務上りを拉致することを寸毫も怪しまぬ市民の無智、そして市政に情熱なきを痛嘆するのみだ。自分の都、我々民族の誇るべき首都の緊要事をかくも無關心に打すておける市民に藝術的都市、美術的設備を期待するの望洋たるを想ふばかりだ。



（八月號）

自治體の政黨化

ダラダラすねた、伊澤君の就任と共に東京市政は完全に憲政會の城廓に歸した。これで後藤閥は退却し、永年全盛を勝誇つた政友閥も野黨に下ることになつた。我等は源平藤橘その何れでもよい、ただ現行法で選擧された市議の推薦する市長がブルの代辯者だから何等の期待ももたない。そうした人間の誰を持つて來ても理想的都市の出來上ろう筈がない、市民の負擔が輕減さるる譯でもなく、我々の血税の悉くが、プロレタリア階級に直接關渉のない施設に多く使用さるるは火を視るよりも瞭かだ。後藤、中村、永田、阪谷、奧田等の歴代市長が計畫したる道路、家屋、公園、區劃整理、學校の一々について審かに點檢するならば、そこの施設幹流の悉くが特權階級を標的とされぬ事業はなく、市民の七割以上を占むるプロ階級は殘滓を頂戴するが如き狀態にある。殊に今回の復興事業に於ける道路の擴張、家屋の制限其他に見て一層その感じを深くするものだ。このときサーベル上りの市長が突然憲政會の手をかりて持ち込まれた。我々は呆然としてその云ふべきを知らない。東京市民は總てのことを犧牲にして大東京の復興に血眼になつている、市當局も市民と協同してこの大事業に當面せねばならぬ。それ以上に築港、道路、建築、區劃整理等の諸事業の横はるあり、尙ほ前途に生產的の大事業も豫期せらるるとき何等財政、經濟に信用なく、智識なく、手腕なき人を拉するは市民を愚弄するの甚しきものだ。官僚との交渉に貫祿を要するが故に、また、あまたの儀禮にそれぞれの體面を保つ上より親任官上りと云ふやうな格式を要求するなぞ時代錯誤の甚しきもの。如上の諸事業の遂行に外債か內債かを募集するのが焦眉の急に迫りながら、身辨保のこと以外何にも知らぬ門外漢を引き入れる憲政會の無智、無策は憐むべきである。

我等は自治體の政黨化は原則の上より當然の歸結と思ひ、すべての情勢上、早晩かくあるべきを豫期したことゝてそれについては世の人と見解を全然異にして今回の如く憲政會のチヤキチヤキが來たことを歡迎する。國政が政黨によつて掌理される原則に同じつつ、自治體のみに政黨化を拒否するは矛盾撞着の極である。

ただ、現下多難の東京市長に伊澤君を、そして助役にも警察上りを拉致することを寸毫も怪しまぬ市民の無智、そして市政に情熱なきを痛嘆するのみだ。自分の都、我々民族の誇るべき首都の緊要事をかくも無關心に打すてておける市民に藝術的都市、美術的設備を期待するの癡拌たるを想ふばかりだ。

闘争手段としての現代教育

森戸辰男

一

蠻人生活を書いた何かの本で、ほゞ、次のやうな物語を讀んだかと思ふ。

たしか南洋のある島の一角に小さな氣象台がヨーロッパ人によつて建てられたことがある。土人はそれを薄氣味悪い怪物であるかのやうに考へ、酋長は島民に命じて、この異様な建物に近づくことを禁じた。のみならず、彼等は更に容易ならざる一發見をなしたといふ。それは氣象台の一端から突出してゐる旗竿の先における異變であつた。即ち晝の間、其處に異様な形態の赤籠が吊されるときに、夜間、其處から赤い光が波の上に照す時に、それに續いて恐るべき暴風雨が全島に襲來するといふ容易ならざる出來事である。この事實から彼等は蠻人らしい單純な結論を引き出した。あ

の氣象台が、あの赤い信號が、暴風雨を島に呼び寄せて、孤島の平和を破るのだ、と。尤も、氣象台の設立以前にも年々暴風雨の慘害を受け來つたのであるが、彼等はそのことをまるで忘れてしまつたかの如く。そこで、蠻人等はこの孤島の平和な生活を紊すために遠い彼方から暴風雨を呼寄せるこの不埒な氣象台をぶちこわすことを決議した。赤い警燈が不安な海面を照してゐた一夜、彼等の決死隊はこの氣象台を襲擊して、凡ての設備を破壞し、わけても、夫の憎むべき旗竿と赤籠と赤燈とを、呪文を唱へながらこなみぢんに打ち碎いて引上げた。蠻人共が此の壯擧を終へ、得意滿面にその部落に凱旋し、これで暴風雨の難を免れたとほつと一息つくやつかないかに、激しい暴風雨が彼等を襲うた。用意を怠つた彼等の損害は稀有の程度に上つたといふ。もちろん、氣象台の破壞後も年々歳々暴風雨はこの孤島を襲うたであらう。果して彼等蠻人は氣象台の信號が暴風雨を呼ぶものでないことをさとり得たかどうか。

吾々文明人はもはや南洋の蠻人ではない。氣象台を破壞する代りに、そこからの天氣豫報を利用して、吾々日々の生活利益を增進しつゝあるのである。

ところで、この天氣豫報が或程度までそれによつて吾々の行動を定める指針になるほどの確率を持つやうになつたのはどうしてであるか。それは、云ふまでもなく、吾々を取圍む大氣現象に對する科學的研究が進步したがためだ。天候の豫知は各地から氣壓、氣溫、濕度、風速、風向、雨量等の氣象上の諸條件に關する報道を集め、この諸條件を土臺にして、氣象學上の一般法則を適用し、その地方の氣象的特異性を參酌しつつ、該地方における來らんとする氣象上の變動を推斷することから成立つ。即ち天候の科學的豫言は一定の氣壓氣溫等の配置から、即ち、一定の客觀的な氣象上の諸條件から一定の氣象上の變動をト知することである。從つて、天氣豫報の正確は、その構成に方つて個々人の——關係技師は勿論、たとへ所屬長官でもの——主觀的な希望や依賴や命令やを全然排斥することによつて期せられる。我國

の中央氣象台は現に岡田文部大臣の監督の下にあるのだが、若しこの氣象台が明日は大臣閣下の御出張だといふので、天候險惡の兆あるにも拘らず、暴風來の警報の代りに「南の風晴」の信號を出したとすればどうであるか。監督長官としての文部大臣はこの氣象台員を「感心な役人」として表彰するか、又は「不都合の役人」として譴責するか。

社會にも氣壓があり、氣溫があり、濕度があり、風向があり、風速がある、否、暴風雨さへもある。これらの各地における社會的氣象の諸條件を闡明し、社會發展の一般原則に基づき、その社會の特異性を參酌しつゝ、來らんとする社會的氣象の變動を豫知して之を社會に知らしめ、社會をしてこの來るべき變化に備へしめることは、社會科學の一重要任務であるとせられてゐる。故に、社會科學の一大役目は社會的天氣豫報であるとも云へよう。

例へば、爰に、社會科學が「人類の歷史は——原始共產體の崩壞以來——階級鬪爭の歷史だ」とか、「資本主義は沒落の運命を擔ふ」とか主張する場合、それは何を意味するか。もちろん、社會科學が「人類の歷史が階級鬪爭の歷史だ」といふたので、人類の歷史が階級鬪爭の歷史に早變りするわけのものではない。その反對に、社會科學は人類の歷史が階級鬪爭の歷史であつたといふ客觀的事實を如實に吾々の認識に把握したに過ぎない。同樣に、社會科學が「資本主義は沒落の運命を擔ふといふたとしても、それで資本主義が沒落するのではない。殘念ながら、社會科學はそんな偉大な魔力を持つてはゐない。そして自覺した社會科學は十分その事實を承知してゐる。唯、社會科學は資本主義の內在的矛盾を示す諸事實の深刻化から、その存立の基礎が日日に危ふされつゝある事實を如實に確認するのだ。だから、社會進化の諸條件を闡明せんとする社會科學の態度は客觀的である。それは個々人は勿論、個々の階級でもの希望や注文やを排斥する。社會科學が「人類の歷史は階級鬪爭の歷史だ」と云ひ「資本主義は沒落の運命を擔ふ」と主張するのは、所屬階級の別たく、、、、、すべき客觀的眞理を言明し、若しくは、せんとしてゐるので、決して一團の人々の、又は特定

階級の、利益若しくは不利益のために、彼等の希望や注文やを科學の形で言表はしたものではない。併し、この客觀的な社會科學的眞理に對する評價と承認は今日の社會の下では階級の異るに隨うて相違してゐる。さうして、其處に、社會科學の階級性の根據があると私は考へてゐるが、今は、この點に立ち入ることはできない。私は唯、社會科學のなすところの社會的天氣豫報は、それがその名にふさはしいものである限り、客觀的な認識であつて、決して學者の又は利害關係者の希望や注文や命令やに基づくものでないことに諸君の注意を喚起すれば、それで十分である。

然るに、文明化した蠻人は、この社會的氣象臺にも譬へ得べき社會科學に對して、夫の孤島の蠻人が現實の氣象臺に對してなしたと相似たことをなし、又はなさんと試みるのだ。彼等は住民に對して、社會的氣象臺の信號を見てはならぬと言ひ、この氣象臺に近づいてはならぬと言ふ。又、社會的氣象の研究はよいが、信號だけは、少くとも警報だけは、掲げないやうにと命ずる。それだけではない、彼等は往々氣象臺を夜襲して之が撲滅を企てる。でなければ、暴風來に先立つて警報を掲げる「危險なる」客觀的技術者を其處から放逐して、この惡氣流を名物とする島帝國に何時も變らぬ「南の微風快晴」の信號を掲げる「健全なる」技術者を以て之を占領せしめやうとするのだ。だが、此の如く改造された氣象臺の存續が、社會にとつては、氣象臺の破壞共者よりも遙かに危險であることは、特に、氣象臺を監督しつつある我が文相には多くの說明を必要としない筈である。

我國の文部大臣は自然的氣象臺を其管下に持つのみならず、社會的氣象臺たる社會科學の學校における教育と研究をその監督下に持つてゐる。我が國の氣象臺が彼の監督の下に所定の豫算を給せられてその機能を續けてゐるところから推して、吾々は夫の氣象臺の夜襲を命令した蠻人酋長を文政の長官として持つてゐないことを聖代に生れた惠澤として常に有難く思つてゐる。文明國日本の文相は少くとも天氣豫報の必要を認め、よき豫報と惡しき豫報とを區別する基礎

の中央氣象台は現に岡田文部大臣の監督の下にあるのだが、若しこの氣象台が明日は大臣閣下の御出張だといふので、天候險惡の兆あるにも拘らず、暴風來の警報の代りに、『南の風晴』の信號を出したとすればどうであるか。監督長官としての文部大臣はこの氣象台員を「感心な役人」として表彰するか、又は「不都合の役人」として譴責するか。

社會にも氣壓があり、氣溫があり、濕度があり、風向があり、風速がある、否、暴風雨さへもある。これらの各地における社會的氣象の諸條件を闡明し、社會發展の一般原則に基づき、その社會の特異性を參酌しつゝ、來らんとする社會的氣象の變動を豫知して之を社會に知らしめ、社會をしてこの來るべき變化に備へしめることは、社會科學の一重要任務であるとせられてゐる。故に、社會科學の一大役目は社會的天氣豫報であるとも云へよう。

例へば、爰に、社會科學が「人類の歷史は——原始共產體の崩壞以來——階級鬪爭の歷史だ」とか、「資本主義は沒落の運命を擔ふ」とか主張する場合、それは何を意味するか。もちろん、社會科學が「人類の歷史が階級鬪爭の歷史だ」といふたので、人類の歷史が階級鬪爭の歷史に早變りするわけのものではない。その反對に、社會科學は人類の歷史が階級鬪爭の歷史であつたといふ客觀的事實を如實に吾々の認識に把握したに過ぎない。同樣に、社會科學が「資本主義は沒落の運命を擔ふといふたとしても、それで資本主義が沒落するのではない。殘念ながら、社會科學はそんな偉大な魔力を持つてはゐない。そして自覺した社會科學は十分その事實を承知してゐる。唯、社會科學は資本主義の內在的矛盾を示す諸事實の深刻化から、その存立の基礎が日日に危ふされつゝある事實を如實に確認するのだ。だから、社會進化の諸條件を闡明せんとする社會科學の態度は客觀的である。それは個々人は勿論、個々の階級でもの希望や注文やを排斥する。社會科學が「人類の歷史は階級鬪爭の歷史だ」と云ひ「資本主義は沒落の運命を擔ふ」と主張するのは、所屬階級の期たく、、、、すべき客觀的眞理を言明し、若しくは、せんとしてゐるので、決して一團の人々の、又は特定

階級の、利益若しくは不利益のために、彼等の希望や注文やを科學の形で言表はしたものではない。併し、この客觀的な社會科學的眞理に對する評價と承認は今日の社會の下では階級の異るに隨うて相違してゐる。さうして、其處に、社會科學の階級性の根據があると私は考へてゐるが、今は、この點に立ち入ることはできない。私は唯、社會科學のなすところの社會的天氣豫報は、それがその名にふさはしいものである限り、客觀的な認識であつて、決して學者の又は利害關係者の希望や注文や命令やに基づくものでないことに諸君の注意を喚起すれば、それで十分である。

然るに、文明化した蠻人は、この社會的氣象臺にも與へ得べき社會科學に對して、夫の孤島の蠻人が現實の氣象臺に對してなしたと相似たことをなし、又はなさんと試みるのだ。彼等は住民に對して、社會的氣象臺の信號を見てはならぬと言ひ、この氣象臺に近づいてはならぬと言ふ。又、社會的氣象の研究はよいが、信號だけは、少くとも警報だけは、掲げないやうにと命ずる。それだけではない、彼等は往々氣象臺を夜襲して之が撲滅を企てる。でなければ、暴風來に先立つて警報を掲げる「危險なる」客觀的技術者を其處から放逐して、この惡氣流を名物とする島帝國に何時も變らぬ「南の微風快晴」の信號を掲げる「健全なる」技術者を以て之を占領せしめやうとするのだ。だが、此の如く改造された氣象臺の存續が、社會にとつては、氣象臺の破壞其者よりも遙かに危險であることは、特に、氣象臺を監督しつつある我が文相には多くの説明を必要としない筈である。

我國の文部大臣は自然的氣象臺を其管下に持つのみならず、社會的氣象臺たる社會科學の學校における教育と研究をその監督下に持つてゐる。我が國の氣象臺が彼の監督の下に所定の豫算を給せられてその機能を續けてゐるところから推して、吾々は夫の氣象臺の夜襲を命令した蠻人酋長を文政の長官として持つてゐないことを聖代に生れた恵澤として常に有難く思つてゐる。文明國日本の文相は少くとも天氣豫報の必要を認め、よき豫報と惡しき豫報とを區別する基礎

的知識を持つことが期待される。だとすれば、吾々は同じ權利を以て、社會科學に關して同樣の期待を文相に要求できぬであらうか。吾々は文明國日本の文政の首座に社會的聾人を持つてゐるとは飽くまで信じたくないのである。

二

岡田文相はその所信を斷行するに勇敢な人格者であると傳へられてゐる。それだけではない、嘗て文相は社會主義並にその研究に對して相當の否、その時代から考へれば過分の、理解を持つてゐた人であるといふ。吉野博士の考證に從ふと【『反響』六月號參照】岡田文相は明治廿一年七月『哲學雜誌』に『社會主義の正否』なる一文を發表し、社會主義に「同情ある理解を寄せて」次のやうに書いてゐる。『西哲曰ヘルアリ、多數ノ人ノ信ズル所ハ徹頭徹尾不理無稽ナルモノニアラズ、必ズ多少ノ眞理ヲ含有セリト。社會主義ハ中興以來歲月未ダ短ク、人ノ此主義ヲ奉ズルモノ未ダ僅少ナリト雖モ、日々盛大ニ趣ク傾向アリト聞ク。社會主義豈獨リ多少ノ眞理ヲ有セザランヤ…』と。若き岡田文相が社會主義を如何に解したかは別として、吾々はこれらの行間において社會主義に關する研究の必要とその自由の要求とを十分推讀し得ると思ふ。

明治二十一年は單に今日からほぼ四十年の昔であるといふに留らない。丁度、その半年以前には六百の青年志士が保安條例の結果皇城三里外に放逐された物騷極まる時代であつたといふ。此の秋に方つて、學的價値はともかく、堂々「社會主義」を評論することは、單にそのことだけでも、吉野博士の言はるる如く「勇氣にみち、學的良心に富んだ標本的青年學徒」の名に値する。さうして私は、青年學徒にとつては、今日、別世界の居住者であるところの耆齡の文相から聞くお役所唄い忠言若くは命令よりも、立志傳中における若き我が文相の行爲による範例の方が、遙かに強く彼等の

良心に訴へるところあるを疑はない。

最近巷間に傳へられる所が眞實であるとすれば、社會科學の教育並に研究に關する文相の態度は、青年學徒としての彼の態度を全然裏切るものの如くである。所謂君子豹變の類歟。尤も其の間に四十年の歳月はあるが。それにしても、彼の態度の斯様な變化は何に原因するか。一部の人々はこの疑問を簡單に片付けて云ふ「それは年のせいだ」と。併しこの老齢說にも二通りある。或者は、四十年の經驗と反省とが未熟無思慮であつた若年の思想を今日の圓熟なものたらしめ?たのだ、と主張する。と、他者は之を駁し言ふ、それは違ふ、青年時代における何よりも先に眞理を探求せんとする好學心と之を阻止するあらゆる障害と戰はうとする勇氣とが、四十年の寄る年波のためにすりへらされた結果に過ぎない、と。

併し、私は斯様な個人的變化の眞僞を批判すべき具體的材料を持たない。唯、私は文相の態度改變に根本的影響を持つたと考へられる一客觀事情を指摘し得るのみだ。それは岡田氏が一青年學徒から、支配階級的見地に立つ一政治家になり畢つたことだ。純眞なる眞理の探求者から支配階級の利益のためにする……………となつたことだ。即ち、岡田氏は四十年間にすつかり自分を支配階級の統治組織の中に組み入れて了ひ、そのイデオロギイを其儘に自分の思想として受容し、この「所信を斷行するに勇敢な人格者」たるに至つたかのやうである。この支配的イデオロギイの雰圍氣の中では、彼の學的良心も不羈獨立な人格もその健全なる機能を發揮せずに、僅かに彼の勇氣と果斷とはその監督下にあつて殆んど防衞力なき稀れなる教育者と青年學徒に對する彈壓として濫りにその歪められた存在を主張するに過ぎない。それ故に、社會科學と岡田文相との問題は、その主要點においては、社會科學と一岡田氏との問題ではない。それは必然に社會科學と支配階級との問題に發展せざるを得ない。

扨て、常識的に考へれば、社會科學の研究が假りに教育程度の未だ低い一般國民に禁止せられてゐる場合――ムロンそれは無茶なことだが――でも、中等教育を經つて更に高等教育の教修に足を踏み入れたものには、その研究が特に許可さるべき筋合のものではなからうか。即ち、高等教育を修めてゐる學生が、社會科學の研究に關して特別扱ひさるべきものとすれば、彼等は一般國民から有利な例外をなすべきものでこそあれ、不利益な例外をなすべきものではないかの如くである。

と同時に、社會科學は現に青年學徒の多大な興味を惹きつつある科學であるのみならず、實にそれは現代が最も緊切にその發達を要望しつつある科學である。普通の常識を以てすれば、現代の切實な要求であり、且つ青年學徒の異常な興味を集めつつある社會科學の研究は、何を措いても此際特に奬勵すべき筈のものではなからうか。それは眞の意味での實學でもあり、そしてまた興味ある學課――現代の教課の倦怠を想ひ見よ――でもあるのだから。然るに、支配階級はこの時代の要望であるところの社會科學の研究をば、而も、之が研究に關して國民中有利な地位にあるところの高等學生に對して、團體的には勿論、個人的にも禁遏せんとしてゐる。これは我國文政上における一大矛盾ではなからうか。過般、福岡の附近で、永代人身賣買に關する文書が發見され、そして、それが、同地の高等學校に寄附せられた。新聞によれば、學校當局は徳川幕府時代における一種の奴隷制度の存在を立證するこの文書を貴重なる資料として大切に保管する旨を聲明した。いづくんぞ知らん、この學校は數ケ月前非常な暴壓的態度を以て『社會科學』退治をやつたので世間の視聽を集めた學校であるのだ。多數民衆と現代文明の生死の運命がそれに係つて居り、その研究が焦眉の急であるところの現代賃銀奴隷に關する社會科學的研究は暴壓的に之を學校より驅除し、同じ奴隷制度の問題のミイラが

代の死文書の形において見出された時に『貴重なる資料』としてそれを學校に迎へ入れる。これは何たる矛盾だ。が、この矛盾極まる學校當局の態度こそ、最もよく支配階級の社會科學に對する態度を象徴してゐるのである。

併し、支配階級の文政上における矛盾は、單に社會科學研究の領域に留まらない。病患はヨリ廣く、ヨリ深い。社會科學に對する文政上の矛盾は、その最近且つ顯著な一例ではあるが、しかし、我國現代の教育、就中、學校教育に含まれてゐる根本的矛盾の一表章であるにほかならない。それ故に、吾々はこの問題の根本的理解のために、我國における支配階級と現代教育との關係に吾々の注意を轉ずる必要がある。

三

我國の支配階級はその支配的地位の獲得以來、教育制度の完備と充實とに多大の注意と努力とを拂つて來た。それは、歐米資本家諸國の激烈なる競爭場裡において、立ち遲れた我國の地歩を引き上げて彼等に伍する一資本家國家たらしめるには、絕對的に必要な一條件であつたからだ。さうして、その結果我國現代の教育は少くとも外形の上では、非常なる盛況を呈してゐるやうに見る。

極めて大摑みに云へば、大正十一年において我國には、官•公•私立を通じて大學より小學校に至る約四萬五千の學校があり、其處には約二十五萬の教師が教育勞働に從事し、約一千百萬の學生生徒がこの教育勞働の素材となり又は消費者となつてゐる。さうして、これがために………年々、國費地方費を合すれば、約四億圓の巨費を投じつゝある。

我國の官營工場は印刷局、專賣局、陸海軍工廠、製鐵所、鐵道等を總計しても、その使用勞働者數はざつと十七、八萬である。だから、我國の學校はこれら物的生産における官營工場の全體よりもヨリ大きな、ヨリ系統的な精神的生産の

大工場であると云へよう。そこでは約二十五萬の教育勞働者が約一千萬の學生生徒の腦裡に日々觀念物の巨大なる分量を再生產しつつあるのだ。資本家國家におけるこのすばらしい分量の工場的觀念生產物は、物的生產におけるすばらしい分量の資本家的商品と相待つて、資本主義的社會關係の再生產にとつての不可缺な一要件であるかに見える。

ところで、資本主義國家の統制の下にあるこの巨大な思想工場から生產され若くは再生產される觀念生產物は果して如何なる品質のものであるか。政府は近頃看板を僞る誇大廣告や分量や品質をゴマかした不良商品を取締ることに意を用ゐだした。誠に結構なことだ。ところが、新聞によると、皮肉にも忠君愛國を景物とする有川ドラッタがこの網に引かかつたらしい。が、このあり得べき事實よりも更に私に面白かつたのは、同店主が新聞紙上でなしたこの記事に對する辯駁文の結句であつた。曰はく「予がこれまで忠孝主義を鼓吹したり、敬老會を全國の都市に開催した立場からしても、そんな不正は出來ぬではないか」と。これは誠に意味深長な辯駁である。我國の思想工場は忠孝主義の旗印の下に、一千萬の消費者の日常消費のために、巨額の觀念產物を供給してゐる。若し、この觀念製品の品質が問題とされたとき、このドラッグ店主と同じ辯明を聞かぬと誰が斷言できよう。だが、幸にして、若しくは不幸にも思想產物は計量もできねば定量分析もできない。從つて、物的產物におけるやうに的確な方法でその品質分量を査定してその正不正を決定することは出來ない。僅かに理論のメスで之を分析し得るに留まる。で、吾々は吾々に許されたこの方法によつて、早速、この官許思想製品の分析にとりかかり、その看板に僞りないかどうかを明かにして見ねばならぬ。

四

現代我國の支配階級によつて國民に與へられつつある教育は如何なる種類のものであるかムロン茲ではその個々の點

を問題にすることはできないから、唯、その標榜する根本的特質の或者について、表看板にウソ偽りがないかどうかを檢覈するに留めなければならぬ。

第一に、國民に施さるべき教育は將來への教育でなければならぬ。教育の使命は次の世代を育て上げることだ、新しい時代にふさはしい新しい人間を造り上げることだ。さうして我國の文政當局も亦學校教育の首要任務が第二の國民の養成にあることを繰返し高調してゐる。ところで、現實にそこで施されてゐる教育、即ち、現に供給されつつある觀念的產物は、果してこの將來への教育にふさはしいものであるかどうか。

將來への教育が可能なるがためには、來らんとする時代に對する豫感若しくは豫識がその一要件をなす。即ち、この豫感若しくは豫識によつて教育は嚮導されなければならない。それでは我國の教育は果して來らんとする時代を見極め、之に適應することをその方針としてゐるか。不幸にして、我國教育の適應せんとするものは、少くともその社會理想においては、將來ではなくして過去である、それは封建の昔であり、更にはもつと古い建國の昔であるのだ。

例へば、吾々が學校で教へられる國民道德の基調は所謂垂直の、上下關係の道德である。…………、殿樣と家來、主人と下僕、親と子、亭主と女房との道德であり、それは…………、專權者と奴隸、命令者と服從者、保護者と被保護者の關係である。それは一方からは、仁俠と愛憐を要望しつつ、實際には屢々驕慢と暴戾とを收獲し、他方からは、從順と畏敬とを要望しつつ、實際には屢々卑屈と奴隸根性とを收獲するところの道德である。

かく、我國の學校教育が道德の封建化若しくは建國化を力說してゐる間に、世界の大勢は何處に流れ行かうとしてゐるか。經濟の領域において、政治の領域において、道德の領域において、それが所謂垂直の關係から水平の關係へ、命令服從の關係から相互連帶の關係へと推移してゐることは、今更之をこと新しく言ふのが却つてヤボな位だ。しかも、そ

大工場であると云へよう。そこでは約二十五萬の教育勞働者が約一千萬の學生生徒の腦裡に日々觀念物の巨大なる分量を再生產しつつあるのだ。資本家國家におけるこのすばらしい分量の工場的觀念生產物は、物的生產におけるすばらしい分量の資本家的商品と相待つて、資本主義的社會關係の再生產にとつての不可缺な一要件であるかに見える。

ところで、資本主義國家の統制の下にあるこの巨大な思想工場から生產され若くは再生產される觀念生產物は果して如何なる品質のものであるか。政府は近頃看板を僞る誇大廣告や分量や品質をゴマかした不良商品を取締ることに意を用ゐだした。誠に結構なことだ。ところが、新聞によると、皮肉にも忠君愛國を景物とする有田ドラッタがこの網に引かかつたらしい。が、このあり得べき事實よりも更に私に面白かつたのは、同店主が新聞紙上でなしたこの記事に對する辯駁文の結句であつた。日はく「予がこれまで忠孝主義を鼓吹したり、敬老會を全國の都市に開催した立場からしても、そんな不正は出來ぬではないか」と。これは誠に意味深長な辯駁である。我國の思想工場は忠孝主義の旗印の下に、一千萬の消費者の日常消費のために、巨額の觀念產物を供給してゐる。若し、この觀念製品の品質が問題とされたとき、このドラッグ店主と同じ辯明を聞かぬと誰が斷言できよう。だが、幸にして、若しくは不幸にも思想產物は計量もできねば定量分析もできない。從つて、物的產物におけるやうに的確な方法でその品質分量を査定してその正不正を決定することは出來ない。僅かに理論のメスで之を分析し得るに留まる。で、吾々は吾々に許されたこの方法によつて、早速、この官許思想製品の分析にとりかかり、その看板に僞りないかどうかを明かにして見ねばならぬ。

四

現代我國の支配階級によつて國民に與へられつつある教育は如何なる種類のものであるかムロン叟ではその個々の點

を問題にすることはできないから、唯、その標榜する根本的特質の或者について、表看板にウソ僞りがないかどうかを検覈するに留めなければならぬ。

　第一に、國民に施さるべき教育は將來への教育でなければならぬ。教育の使命は次の世代を育て上げることだ、新しい時代にふさはしい新しい人間を造り上げることだ。さうして我國の文政當局も亦學校教育の首要任務が第二の國民の養成にあることを繰返し高調してゐる。ところで、現實にそこで施されてゐる教育、即ち、現に供給されつゝある觀念的產物は、果してこの將來への教育にふさはしいものであるかどうか。

　將來への教育が可能なるがためには、來らんとする時代に對する豫感若しくは豫識がその一要件をなす。即ち、この豫感若しくは豫識によつて教育は嚮導されたければならない。それでは我國の教育は果して來らんとする時代を見極め、之に適應することをその方針としてゐるか。不幸にして、我國教育の適應せんとするものは、少くともその社會理想においては、將來ではなくして過去である、それは封建の昔であり、更にはもつと古い建國の昔であるのだ。

　例へば、吾々が學校で教へられる國民道德の基調は所謂垂直の、上下關係の道德である。…………、殿様と家來、主人と下僕、親と子、亭主と女房との道德であり、それは…………、専權者と奴隸、命令者と服從者、保護者と被保護者の關係である。それは一方からは、仁俠と愛憐を要望しつゝ、實際には屢々驕慢と暴壓とを收獲し、他方からは、從順と畏敬とを要望しつゝ、實際には屢々卑屈と奴隸根性とを收獲するところの道德である。

　かく、我國の學校教育が道德の封建化若しくは建國化を力說してゐる間に、世界の大勢は何處に流れ行かうとしてゐるか。經濟の領域において、政治の領域において、道德の領域において、それが所謂垂直の關係から水平の關係へ、命令服從の關係から相互連帶の關係へと推移してゐることは、今更之をこと新しく言ふのが却つてヤボな位だ。しかも、そ

れは不可抗的な力を以て、あらゆる障害を突破して前進しつつあるが如くだ、ムロンこの前進は單純な直線的進行ではないけれども。それ故に、奴隷の道徳から自由人の道徳へ、道具、機械への敎育から自主的人格への敎育の發展こそ、來らんとする時代に適應するものと言ふことができる。

世界とその文化は駸々として進展する。日本はよくその圏外に留まり得るか。現代の日本は黒船來航以前の日本ではない。それは世界經濟の中に、國際政治の中に、しつくりと編み込まれた日本である。飛行機はやがて歐洲との旅程を數日に縮め、ラヂオは無形の通信網を世界に張るであらう。而もなほ我國のみこの世界の大勢の外に立ち得るであらうか。經濟生活の領域においては、資本主義が西洋から移植されてもう一本立ちになつてゐるではないか。やはり、舶來の議會政治は曲りなりにも我が國土にアタロマタイズされた。法律も、裁判も、行政組織も、軍隊も、學校も大體において、少くともそのよささうな所は、西洋式である。このすばらしい物質的、制度的大變化の唯中において、その中に生息する個人の精神のみが、觀念の世界のみが、道徳の王國のみが、何等の影響なしに、超然として舊の如く留まり得るであらうか。

だが、それは恐ろしいことだ。何となれば、かくては過去への敎育を主眼とする我國の敎育方針は全然その據つて立つべき根底を覆されて了ふことになるから。そこで、聰明なる愛國論者は二つの思想的、、によつてこの危機から遁れようと試みるのである。その第一は、之を特殊國主義と呼んでもよからう。色々な有難い文句を抜きにして端的にその要領を云へば、かうだ。日本は特別の國だ、神の國だ、それは世界の上にある。世界がどう動かうが、文明がどう變らうが、世界の上に超然たる日出づる帝國には何ら關する所がない。世界は變る。が、日本は變らないと。

だが、眼で見、耳で聞く現實の日本は世界と共に急速な變化を、世界中稀に見る急速の變化を、なしつつある。この事實

を前にして超然の日本。不變の日本を說くのは、凡人の持ち得ぬ勇氣とゝ、さとを必要とする。そこで彼は止むなく局面を轉換する、さうして玆に彼等の所謂精神主義が生れるのである。彼等は言ふ。成程、世界の大勢は我國をも餃してゐる、が、それは物質日本のことである、眼にて見、耳にて聞くところの形而下の日本のことである。しかし吾等の日本は左樣な卑しいものではない。それは眼もて見る能はざる日本、耳もて聞く能はざる日本だ、精神の世界だ、靈の王國だ。そここそ永劫不變の日本があるのだ。世界の大勢の波濤が、物質生活の洪水が、如何に押し寄せて來ても、この聖域には觸れることを許されないと。これら特殊國主義と精神主義こそ我國國民教育を濃厚に彩つてゐる二つの色彩である。

所謂、特殊國主義の高調はその奥底には、世界の無視を、屢々その蔑視をかくして居り、所謂、精神主義の力說は、物質生活の閑却を屢々その蔑視を藏してゐる。が、他方、我國開國以來の國是は、我國を近代的世界のレベルに引上げること、即ち、世界の大勢に順應することであつたことは誰人もよく知つてゐるところだ。更に又、我國死活の問題が胃の腑に入る食物では營養不足から、大和魂への營養のみはその營養過多から、苦しみつつある夥しく多數な民衆を、この資源に乏しくて狹少な國土の上でどう養つて行くべきかにあることは、これまた識者を待たずして明かなことだ。これは所謂物質生活の問題の緊切を語るものでなくて何であらう。此くの如き時代の要求、而も、官的とさへ云つて差支のない、時代のこの要求と、世界の大勢に逆行せんとする所謂特殊國主義並びに物質生活を蔑視する精神主義は、どう調和するのであるか。が、それはいらぬおせつかいであつて、彼等にとつてはどうでもよいことなのだ。彼等にとつては、唯、穢れたる世界は變化する、が、選ばれたる神國日本は變らない。形而下の物質日本は變る、が、形而上の精神日本は變らない、といふことにさへなれば、それでよいのだ。さうすれば、永劫不變の精神日本には封建の昔の、建國の昔の、神代の昔の、精神法則、社會法則が依然として其儘に適用されるであらうから。

れは不可抗的な力を以て、あらゆる障害を突破して前進しつゝあるが如くだ、ムロンこの前進は單純な直線的進行ではないけれども。それ故に、奴隷の道德から自由人の道德へ、道具、機械への敎育から自主的人格への敎育の發展こそ、來らんとする時代に適應するものと言ふことができる。

世界とその文化は駸々として進展する。日本はよくその埒外に留まり得るか。現代の日本は黒船來航以前の日本ではない。それは世界經濟の中に、國際政治の中に、しつくりと編み込まれた日本である。飛行機はやがて歐洲との旅程を數日に縮め、ラヂオは無形の通信網を世界に張るであらう。而もなほ我國のみこの世界の大勢の外に立ち得るであらうか。經濟生活の領域においては、資本主義が西洋から移植されてもう一本立ちになつてゐるではないか。やはり、舶來の議會政治は曲りなりにも我が國土にアタロマタイズされた。法律も、裁判も、行政組織も、軍隊も、學校も大體において、少くともそのよささうな所は、西洋式である。このすばらしい物質的、制度的大變化の唯中において、その中に生息する個人の精神のみが、觀念の世界のみが、道德の王國のみが、何等の影響なしに、超然として舊の如く留まり得るであらうか。

だが、それは恐ろしいことだ。何となれば、かくては過去への敎育を主眼とする我國の敎育方針は全然その據つて立つべき根底を覆されて了ふことになるから。そこで、聰明なる愛國論者は二つの思想的、、によつてこの危機から遁れようと試みるのである。その第一は、之を特殊國主義と呼んでもよからう。色々な有難い文句を拔きにして端的にその要領を云へば、かうだ。日本は特別の國だ、神の國だ、それは世界の上にある。世界がどう動かうが、文明がどう變らうが、世界の上に超然たる日出づる帝國には何ら關する所がない。世界は變る。が、日本は變らないと。

だが、眼で見、耳で聞く現實の日本は世界と共に急速な變化を、世界中稀に見る急速の變化を、なしつゝある。この事實

を前にして超然の日本を說くのは、凡人の持ち得ぬ勇氣と、、さとを必要とする。そこで彼は止むなく局面を轉換する、さうして玆に彼等の所謂精神主義が生れるのである。彼等は言ふ。成程、世界の大勢は我國をも侵してゐる、が、それは物質日本のことである、眼にて見、耳にて聞くところの形而下の日本のことである。しかし吾等の日本は左樣な卑しいものではない。それは眼もて見る能はざる日本、耳もて聞く能はざる日本だ、精神の世界だ、靈の王國だ。そこにこそ永劫不變の日本があるのだ。世界の大勢の波濤が、物質生活の洪水が、如何に押し寄せて來ても、この聖域には觸れることを許されないと。これら特殊國主義と精神主義こそ我國國民教育を濃厚に彩つてゐる二つの色彩である。

所謂、特殊國主義の高調はその奥底には、世界の無視を、屢々その蔑視をかくして居り、所謂、精神主義の力說は、物質生活の困却を屢々その蔑視を藏してゐる。が、他方、我國開國以來の國是は、我國を近代的世界のレベルに引上げること、即ち、世界の大勢に順應することであつたことは誰人もよく知つてゐるところだ。更に又、我國死活の問題が胃の腑に入る食物では營養不足から、大和魂への營養のみはその營養過多から、苦しみつゝある夥しく多數な民衆を、この資源に乏しくて狹少な國土の上でどう養つて行くべきかにあることは、これまた識者を待たずして明かなことだ。これは所謂物質生活の問題の緊切を語るものでなくて何であらう。此くの如き時代の要求、而も、官的とさへ云つて差支のない、時代のこの要求と、世界の大勢に逆行せんとする所謂特殊國主義並びに物質生活を蔑視する精神主義は、どう調和するのであるか。が、それはいらぬおせつかいであつて、彼等にとつてはどうでもよいことなのだ。彼等にとつては、唯、穢れたる世界は變化する、が、選ばれたる神國日本は變らない。形而下の物質日本は變る、が、形而上の精神日本は變らない、といふことにさへなれば、それでよいのだ。さうすれば、永劫不變の精神日本には封建の昔の、建國の昔の、神代の昔の、精神法則、社會法則が依然として其儘に適用されるであらう。

斯様の如くにして、現代の教育は、世界の、そして又我國の、明日に眼を蔽うて、否、之と抗爭しつつ、次の世代を過去に結びつけようと懸命な――併し無益有害な――努力をなしつつある。しかも、將來への教育をその表看板に押立てながら。

五

第二に、國民の教育は全體のための教育でなければならぬのであつて、決して全體の犠牲において部分を利益するが如きものであつてはならない。これまた、殆んど教育當然の社會的使命として、恐らくは萬人の均しく承認するところであらう。ところで、この點に關する我國教育の現狀はどうであるか。

先づ學校教育の受益者、即ち、思想工場における觀念産物の消費者の方面から考へて見よう。我國の學制においては、夙に國民の義務教育の制度が實施せられ、國民學校は大體統一學校の形を備へ、高等諸學校の門戸も――女子を除けば――一般人に開放されてゐる。それは明かに全體の利益のために存するが如き外觀を呈してゐる。

國民は均しく小學校における所謂國民教育の課程を修める。而もその就學率は九九%以上である。が、彼等は果してそこで給與せられる觀念産物を消化する均等な能力を持つてゐるであらうか。これら觀念物の種別や、殊に其心的營養價については今は立入つた詮索をしない。それはいづれにせよ、それらが消費者の肉や血になるのは、これら消費者の消化能力如何によることは、口腹の食物と聊かの變りもない筈だ。ところで、幾百萬に上ぼるこれら消費者の消化能力は均等であるであらうか。否、それには非常な差等がある。私は爰ではこの心的消化力の生れついた個人的差別のことを云うてゐるのではない。これは先づ以て如何ともすべからざるものとして、私の問題とするのは、各人の持つて生れたこ

の相異なる能力がそれぞれの天資に應じて遺憾なく育てられ、働かされてゐるかどうかと云ふ點だ。遺憾ながら、小學生徒の多數はその親の社會的地位のために、彼等の、、と、、、狀態のために、屢々彼等の肉體でさへが營養不良であるやうに、彼等の心的攝取能力も亦著しく不具化されてゐるのである。國民の、少くとも就學兒童の、經濟的社會的地位が……されぬ限りは一均等なる國民敎育といふことは、單なる表面上の形式に就いて云はれるだけだ。現實には國民は決して均等なる敎育の最少限を確保されてゐるのではない。國民敎育はこの最小限の範圍ですらが、實質上、支配階級には高くて、被支配階級に低いのである。

更に、この不平等は、敎育の階梯を登れば登るほど、一層明白になる。例へば、大正十一年度には、全國の小學校には約九百萬の兒童がゐたが、中學校女學校には約四十萬の生徒がゐたのみであり、更に、大學になると僅か三萬五千人ほどの學生しかない。勿論、在學年限の同一でないところの諸學校群の生徒數に就いてのこれらの數字を相互に比較しても、決して精確な結果には到達し得ないが、大づかみに各學校群における各年級の平均生徒數をそれぞれ百萬、十萬一萬と概算しても、たいして不都合はあるまいかと思ふ。假りに、さうすると、百人の小學生のうち、中等敎育を受け得るものは僅かに十人であり、更に大學の課程を踏み得る幸福者はたつた一人しかないわけになる。さうして、この敎育の梯子段を斯樣にヨリ高く登り行き得るものは、大體において、中等階級以上の子弟であらう。して見ると中等敎育高等敎育の門戶は凡ての國民に開かれてゐるとは言ひ條、この門戶をくぐり得るものは原則として選ばれたる階級の子弟に留まるといふわけだ。爰にも亦形式的な所謂機會均等に蔽はれた階級的特權がその正體を露はしてゐる。

しかし、私が特に讀者の注意を喚起したいのは、これら一千萬の消費者の精神的食物としてその日用消費のために供給せられつつあるところの、又は將來の使用の爲に彼等の頭の中に再生産されつつあるところの或種の觀念產物の品質

斯様の如くにして、現代の教育は、世界の、そして又我國の、明日に眼を蔽うて、否、之と抗爭しつつ、次の世代を過去に結び付けようと懸命な——併し無益有害な——努力をなしつつある。しかも、將來への教育をその表看板に押立てながら。

五

第二に、國民の教育は全體のための教育でなければならぬのであつて、決して全體の犧牲において部分を利益するが如きものであつてはならない。これまた、殆んど教育當然の社會的使命として、恐らくは萬人の均しく承認するところであらう。ところで、この點に關する我國教育の現狀はどうであるか。

先づ學校教育の受益者、即ち、思想工場における觀念產物の消費者の方面から考へて見よう。我國の學制においては、夙に國民の義務教育の制度が實施せられ、國民學校は大體統一學校の形を備へ、高等諸學校の門戶も——女子を除けば——一般人に開放されてゐる。それは明かに全體の利益のために存するが如き外觀を呈してゐる。

國民は均しく小學校における所謂國民教育の課程を修める。而もその就學率は九九％以上である。が、彼等は果してそこで給與せられる觀念產物を消化する均等な能力を持つてゐるであらうか。これら觀念物の種別や、殊に其心的營養價については今は立入つた詮索をしない。それはいづれにせよ、それらが消費者の肉や血になるのは、これら消費者の消化能力如何によることは、口腹の食物と聊かの變りもない筈だ。ところで、幾百萬に上ぼるこれら消費者の消化能力は均等であるであらうか。否、それには非常な差等がある。私は爰ではこの心的消化力の生れついた個人的差別のことを云うてゐるのではない。これは先づ以て如何ともすべからざるものとして、私の問題とするのは、各人の持つて生れたこ

の相異なる能力がそれぞれの天資に應じて遺憾なく育てられ、働かされてゐるかどうかと云ふ點だ。遺憾ながら、小學生徒の多數はその親の社會的地位のために、彼等の、、と、、、狀態のために、屢々彼等の肉體でさへが營養不良であるやうに、彼等の心的攝取能力も亦著しく不具化されてゐるのである。國民の、少くとも就學兒童の、經濟的社會的地位が……されぬ限りは、均等なる國民教育といふことは、單なる表面上の形式に就いて云はれるだけだ。現實には、國民は決して均等なる教育の最少限を確保されてゐるのではない。國民教育はこの最小限の範圍ですらが、實質上、支配階級には高くて、被支配階級に低いのである。

更に、この不平等は、教育の階梯を登れば登るほど、一層明白になる。例へば、大正十一年度には、全國の小學校には約九百萬の兒童がゐたが、中學校女學校には約四十萬の生徒がゐたのみであり、更に、大學になると僅か三萬五千人ほどの學生しかない。勿論、在學年限の同一でないところの諸學校群の生徒數に就いてのこれらの數字を相互に比較しても、決して精確な結果には到達し得ないが、大づかみに各學校群における各年級の平均生徒數をそれぞれ百萬、十萬一萬と概算しても、たいして不都合はあるまいかと思ふ。假りに、さうすると、百人の小學生のうち、中等教育を受け得るものは僅かに十人であり、更に大學の課程を踏み得る幸福者はたつた一人しかないわけになる。さうして、この教育の梯子段を斯樣にヨリ高く登り行き得るものは、大體において、中等階級以上の子弟であらう。して見ると中等教育高等教育の門戶は凡ての國民に開かれてゐるとは言ひ條、この門戶をくぐり得るものは原則として選ばれたる階級の子弟に留まるといふわけだ。爰にも亦形式的な所謂機會均等に蔽はれた階級的特權がその正體を露はしてゐる。

しかし、私が特に讀者の注意を喚起したいのは、これら一千萬の消費者の精神的食物としてその日用消費のために供給せられつつあるところの、又は將來の使用の爲に彼等の頭の中に再生產されつつあるところの或種の觀念產物の品質

についてである。我國の××××工場には色々な特産物があるが、その中でも、特に有名なのは武士道若しくは大和魂と國家主義若しくは國家萬能の思想とだ。そこで、吾々は進んでこれから特産品の品質を分析に取りかからう。

武士道は——その名前が既にそれにまぎれもない階級的極印を捺してゐるにも拘らず所謂我が國民精神の精華であるとは全國民の事項であつて、斷じて特殊階級のためにするものではないかに考へられる、そして實際にも亦左様に考へられてゐるのである。

二三ケ月ほど前、イタリアの首相でファッショ主義の主義の首領ムッソリーニ氏は都下の大新聞の廣告欄においてメッセージを發表し、「聰明なる日本の青年男女諸君」によびかけて次のやうに言うてゐる。「諸君は世界幾多の國民を驅つて不安と窮迫とに陥らしめたる民衆煽動の唯物主義的言論を輕信し禮讃して多年涵養し來りし建國の大精神に汚點を印するが如き浮薄と危激とを取らざるべし。……忠君愛國の心、長幼上下の別、義務の觀念、訓練の徹底等凡その如きを根抵とする我がファッショ主義は、恐らくは、日出處帝國の尊貴と威力とを強大に堅固に維持し宣揚し來りし日本の武士的精神と一脈の通ずるものあるを誰か否定し得んや。イタリア青年の魂がファッショ主義に依つて活氣づけられつつあるが如く、日本の青年男女諸君の胸に建國の精神を活躍せしめ、武士道の精華を開發せしめよ」と。

これらの文字が高い感激で盛られてゐるにも拘らずイタリア魂とファッショ主義と更にそれが遠いローマの都からムッソリーニ氏によつて話かけられたといふこと以外には、何等の新味も珍味も持つてゐない。それは吾々が幼少の時より百萬遍も繰返し聞かされたところであり、最近に至つてはジャズバンドの如くに耳騒しく諸方で反覆せられつつあるところに外ならぬ。唯、このメッセージが吾々に教える注意すべき一事は、イタリアに於ける反動ブルジョアジイの代表者が、我が武士道と建國の精神とにおいてファッショ主義と相列ぶところの反動的ブルジョアジーの恰好な精神的武器を

見出してゐることだ。サスガに黒襯衣宰相のお蔭で、我が支配階級が『國民的』風袋の下に提供しつゝある大和魂と武士的精神との階級的性質について豫期せざる啓蒙を受けたことを吾々は大に德とせねばならぬ。

反動的ブルジョアジーの代表者たるムッソリーニのこの大ミエを切つたメッセージに對して、維新當時における進歩的ブルジョア思想の偉大なる代表者福澤翁の、同じ問題に關する山げの少い坦々たる文字を對照することは色々な點で頗る興味のあることだ。彼は云ふ。「古來、日本にて討死せし者も多く、切腹せし者も多し。いづれも忠臣義士とて評判高しと雖も、其身を棄てる由縁を尋ぬるに、多くは…………………係する者か、又は主人の敵討等に由て花々しく一命をすてたる者のみ。其形は美しきに似たれども、その實は世に益することなし。己が主人のためと云ひ、己が主人に申譯なしとて、唯一命さへ棄てればよきものと思ふは、不文不明の世の常なれども、今文明の大義を以て之を論ずれば、是等の人は未だ命のすてどころを知らざる者と言ふ可し。」彼等忠臣義士の討死や敵討は文明促進のためではなく「唯因果づくにて旦那へ申譯までのことなるべし。旦那に申譯にて命をすてる者を忠臣義士と云はゞ、今日も世間に其人は多き者なり。權助が主人の使に行き、一兩の金を落して途方にくれ、旦那へ申譯なしとて思案を定め、並木の枝にフンドシを掛て首を縊るの例は世に珍しからず。今此義僕が自ら死を決する時の心を酌んで其情實を察すれば、亦憐れむべきに非ずや。使に出でゝ未だ歸らず、身先づ死す、長く英雄をして涙を襟に滿たしむべし。主人の委託を受けて自ら任じたる一兩の金を失ひ、君臣の分を盡すに一死を以てするは、古今の忠臣義士に對して毫も耻づることなし。其誠忠は日月と共に輝き、其功は天地と共に永かるべき筈なるに、世人皆薄情にしてこの權助を輕蔑し、碑の銘を作つて其功業を稱する者なく、宮殿を建てゝ祭る者なきは何ぞや。人皆云はん、權助の死は僅に一兩のためにして其事の次第甚だ些少なり、と。然りと雖も、事の輕重は金高の大小、人數の多少を以て論ずべからず、世の文明に益あると否とに由

て其輕重を定むべきなり。然るに、今、かの忠臣義士が一萬の敵を殺して討死するも、この權助が一兩の金を失うて首を縊るも、其死を以て文明を益することなきに至つては、正しく同樣の譯けにて、何れを輕しとし、何れを重しとすべからざれば、義士も權助も共に、命の棄所を知らざる者と云ふ可なり」（學問のすゝめ、第七篇）

吾々はこの平明なる文章の中に、封建的イデオロギイに對する新興ブルジョア思想の痛烈なる批評と挑戰とを讀むことができる。殊に、武士の主君に對する關係を權助と店主との關係に較べ、その討死を「因果づくでの旦那への申譯」といふたのは非常に面白い。吾々はこの比喩を一層突き進め、之を階級的に解釋することによつて、福澤翁に未だ啓かれなかつた新なる眞理に到達することができるのである。吾々ムツソリーニの所謂「民衆煽動の唯物主義的言論を輕信し禮讃」するの徒は、屢々物事のツヤ消しの的見方をする。そして武士道もその例に洩れない。義は泰山の重きに比し、命を鴻毛の輕きに比す。海行かばみずく屍、山行かば草むす屍、おほぎみのへにこそ死なめのどには死なじ。一體、此の如き精神の華は如何なる現實の地盤から生え出たか。答は頗る簡單である。武士が主君の配下にあつて彼から知行米御扶持米を頂戴してゐたからだ。即ち武士は……………………に與かることによつて、主君に對して搾取における連帶關係に立つてゐたからである。若し、この搾取關係が破綻を來すならば、その主君と共に、武士も亦その生計の手段を奪ふことになる。だから、武士はその生命を賭しても主君をそして彼の搾取關係を擁護しそれによつて間接に、搾取階級としての彼等自身の存在を維持したのである。

ところで、この封建諸侯の搾取關係を脅すところの二つの勢力があつた。一つは外部から彼の搾取關係を脅す競爭者としての他の封建諸侯主であり、他は被搾取階級である百姓、町人等の庶民階級である。だから、對外關係のことを除いて考へれば、武士は百姓町人の反抗に對して侯伯の搾取關係を擁護するものであり、かくして自ら搾取階級の一部を構成

するのである。さうして武士道はこの搾取關係の連帶の上に築かれた搾取階級の道德にほかならぬ。從つて、被搾取階級であり、被壓階級であるところの百姓町人の生活利益は、重要點において武士階級のそれと相背反してゐる。然るに侯伯を引きくるめて、武士階級が當代の支配階級であつたところから、彼等の道德は支配道德となり所謂『國民的』道德となり、かくてその階級性は蔽ひ隱されて了つたのである。被壓被搾取階級が搾取關係維持をその一主要動機とする搾取階級の道德を彼等自己の道德とし理想とし讃仰随喜することは、常に繰返される歷史的事實ではありながら、皮肉にして而も悲慘な運命の戯れと云ふべきであらう。而も、現在、斯くの如き『階級的』イデオロギイは『國民的』といふ假裝の下に、批判力の發達しない數百萬の柔かな次世代の頭腦に强制的に注入されつつあるのである。

更に他の一例は第二の特產品『國家』主義だ。基礎的素材を產出する小學校は勿論のことであるが、學術の蘊奥を極むべき精製品工場たる大學においてすら、その蘊奥が極められるべき學術は國家に樞要なものでなければならず、其上「特に、國家思想の涵養に留意」しなければならぬといふ。

然らば、一體、謂ふところの『國家』主義とは何か。之を最も合理的な意味に解すれば、國家は全國民の協力團結であり、『國家』主義はこの全國民の利害休戚を至上とする意義に外ならない。誠に結構である。が、果してほんとうにさうなのかどうか。

東洋の一隅から遅ればせに列强の世界競爭に參加した日本が善かれ惡かれ、その今日の地步を得るに至つたのはたしかに我が民族の團結協力のお蔭だ。從つて、國民の團結協力が我國民の意識において非常に高く評價せられるには十分の理由がある。ところで、この國民の團結協力はその時代時代に特有な特定の形式の下で行はれる。ために、この民族

の協同的活動の偉力は、ひたすらその特殊な形態に歸せられがちである。かくて、民族の團結其者とその特殊な階級的構成たる國家とが混同せられ、爰に『國家』の萬能化、國家の神聖化のイデオロギーが生れ出でる。現實的基礎に密着せずして而も絶大な勢力を歸屬せしめられるところのものは、何よりも先づ、イデオロギイの世界において萬能化され、神聖化されねばならぬ。ところで、斯様に萬能化され、神聖化されたものの次の運命は、色々な連中によつてかつぎ廻られることだ、丁度、日吉の御神輿のやうに。暴力團に長く關係してゐた或人の述懐談よると、「國家」とかそれに類似した名稱をつけてさへ置けば、先づ大體食ひはぐれはないといふことだ。私にはそれが非常に面白いことに思へた。社會主義でも國家の二字をその頭に冠らせば、少くとも建國運動に仲間入りする資格を得る世の中である。學校の教授諸先生でも、學識が何であれ、學的良心が何であれ、いくら粗製濫造でも、國家のスタンプさへ捺れない思想製品さへ産出してゐれば、その榮達や疑なしである。『國家』の二字は我國の社會ではしかく偉大な、力を持つてゐるのだ。

だから、此の如き社會では常にその萬能な國家の背後に何が居るかを見極めることが特に肝要である。何となれば、全國民でないところの或者がこの全國民を標榜する國家のお面を被つてゐるからだ。――一般に歐米の階級社會では、特定の支配階級が全國民的な國家のお面の背後にゐて其の名において要求せられる國民の供物を、こつそり、又は堂々と失敬して了ふといふことがよくあるのだ。我國の國家主義がこの種のカラクリにまで墮してゐないだらうことは私の切に希ふ所である。が、少くとも我が國の所謂『國家』主義の教育が上記の危險と――即ち、國民全體の名において、同時にその犠牲において、小數特權者團の階級的利益を增進せんとする教育に墮する危險と境を接してゐることは動かすことのできぬ事實である。

全國民のための教育は、その表看板にも拘らず、茲にも、亦、部分たる特權者層のための教育たるの根本の特質を示してゐるのである。

六

第三に、國民の教育は眞理への教育でなければならない。教育はウソを教へてはならない。當代の科學的研究の成果であるところの本當のことを教へなければならない。これも亦苟くも教育と名乘るからにはあたりまへのことだ。さうして我國の學校教育もムロンそれを標榜してゐるのである。

吾々は學校で2×2=4と習ひ、2×2=5とも2×2=3とも教はらない。化學でも物理でもさうだ。一般に、自然を取扱ふ諸科學では、客觀的立場から最近の科學的成果を誤りなく傳へようとする努力がなされてゐるかに見える。ところで、吾々ヨリ直接な人間社會に關する諸科學上の知識に就いて、同樣の努力がなされてゐるかどうか。

或る友人から聞いた話だが、某女學校の物理教室でのことだ。先生が切りに物體の比重を説明して、輕い物體は上に昇り重い物體は下に落ちるとやつてゐる最中、突然、一生徒が立つて質問して言ふには、「…………………………りの以前には空氣のそれより輕かつたのですか」と。この突飛な質問に教師はしばし面喰つてゐたやうだが、やがて雷喝一番「馬鹿！物理と歴史とは違うぞ」と叱りつけたと言ふことだ。吾々はこの女學校教師を笑うてはならない。「物理と歴史とは違うぞ」この一句こそ現代支配階級の科學に對する態度を最もよくシムボライズしてゐるものである。自然科學においては研究はどこまでも主觀的な獨斷なしに、客觀的な態度で窮極まで押進められなければならぬ。が、歴史科學、社會科學においてはさうでない。それには常に超ゆべからざる嚴守すべき一定の限界がある。客觀的研究の許され

ろのは、唯この與へられた限界の範圍内においてのみだ。さうしてこの限界といふのは、いふまでもなく、研究自體認識自體がその性質上どうしても承認せざるを得ない諸限界ではなく、研究とは内的關係のない支配階級の利益が學問研究に置くところの天降り式の、惡行的な限界である。のみならず、更に、ひどいのになると、價値哲學を履き違へて、一般に社會科學には自然科學的な客觀的研究なんていふやうなものはありはしないと主張する。なぜなら、社會科學の世界は精神の世界であり、價値の世界であり、理想の世界であり、結局は信仰の世界であるのだから、と。要するに、「物理と歴史とは違ふ」のだ。自然科學の研究は自由だが、社會科學の研究は禁止され、制限され、少くとも監督善導されなければならぬのだ。

社會科學においては單にその研究の自由が制限されてゐるばかりではない、この領域においては屢々誤つた社會的眞理が先入的偏見として柔い小供の頭に注入される。尋常小學校用の修身の卷二に『ベンキヤウセヨ』といふ次のやうな一課がある。羽織、袴の堂々たる紳士が悠々と大道を歩み、その傍の木の根には貧苦にやつれた男が見すぼらしい姿を休ませてゐる繪がその主題だ。本文の說明によれば、この二人はもと同じ學校にゐたのだが、一人は先生の戒を守らず怠けてばかりゐたのでこんな憐れな人となり、他の一人はよく先生の教へを聞いて勉强したので、こんな立派な人となつたのださうだ。編纂者は「蒔かぬ種子は生えぬ」の一句を以てこの章を結んでゐる。

扨て、この章は一體小供の頭に如何なることを教へんとするのであるか。勿論、この章の主意は、よく先生の教を聞き、よく勉强せよといふことにあるのだらう。が、この主意を教へ込むために、同時に誤つた社會的知識が小供の頭に注入されるのである。即ち、彼等は社會的成功といふ果實は學校における勉强と先生への從順といふ「蒔かれた種子」

に賣るものであると敎えられるのだ。若し學校でこの一課を習つた勞働者の小供が再び彼等の勞働町に歸つて來ると、彼等は、鈍い頭の持主でない限り、きつと次の發見をするだらう。此處に住んでゐる人たちは、――自分の親も含めて、――そして又、あの工場の門から出て來るリス穢い人の群は、みんな學校時代に怠けて先生の云付を聞かなかつたために、現在その蒔いた種子から當然の收獲をやつてゐるのだ、といふことを。折しも、その側を立派な自動車が王者の如く通り過ぎる、そしてその中には肥滿した立派な服裝をした紳士が鷹揚に坐つてゐるとする。この威風堂々たる姿を瞥見した小供はまた考へるに違ひない「これだ！　修身書に書いてあるのは。學校の先生の敎を聞いて、勉强した人は此の通りだ」と。かくて、彼等の頭には、無産者の貧困と不幸とは學校時代の不勉强と不從順との必然の因果であり、富者大官の富貴と權勢とは同じ時代の精勵と從順の必然の應報である、と深く肝銘せられるのである。それが誤つた社會的眞理であることは殆んど說明の要すらないであらう。

更に、同じ修身書の卷五の第十三課には、『勤勞』と題して農夫作兵衞の成功の話が載せてある。伊豫の筒井村の作兵衞は祖先からの借金で、その日〱を生活にさへ苦んでゐた。が、彼はその苦境を切拔けるために一生懸命に努力して、村人の手本となるまでに夜晝一心に働き拔いた結果、だんだん家の生計も樂になり、長い間の借金も殘らず返してしまひ、其上に幾分かの田地も買ふことができた。尤も、この田地は村役人すら年貢を收めさせるのを氣の毒に思つたほどに地味が惡くて收獲が少ないものであつたが、彼は毅然として――一倍高いのではなからうが少くとも人並の――年貢を收めることを主張した。さうしてそれを理由づけて彼がいふには「どんな田地でも骨折つて作つたならば、決してよくならないことはありますまい。此の村に荒れた田地の多いのは、私どもの骨折が足らないためだと思ひます。私こできるだけ働いて惡い田地をよい田地に仕上げ、村の爲になるやうにしたいと思ひます」と。村役人だちは作兵衞の

掛に感心した。更に、修身書は幸福なる結末を以て作兵衛の生涯を飾ることを忘れない。「其後、作兵衛は、はたしてその田地をよい田地に仕上げました。其の上に、なほよい田地を澤山買ふことが出來ました。」——修身書は茲で終つてゐるが私は必然の結論として次の一句をつけ加へる權利がある——「さうして彼は大地主になりました。」勤勞は、勞働は實に不思議な有難いものである。勤勞！　此者こそ借金を返し、生計を樂にし、家族を喜ばせ、惡田を良田にし、村には十分な租税を、地主には十分な年貢を、支拂はせ、村のためになりつつ最後に作兵衛に大地主なるの幸福をも與へる。「勉强せよ」の一課を「蒔かぬ種子は生えぬ」と結んだ釣合から云へば、この「働け」の一課は是非とも「稼ぐに追付く貧乏なし」といつた句で締めくくられなければならぬところである。

作兵衛に關することの判斷は、一見、人間社會的生活の繁榮には勞働が必要だといふ自明を理由を說くだけのことであるが如くにして、實は同時に二つの重要な社會的知識——正確に云へば社會的誤謬——を媒介してゐるのである。その一つは、今日の大地主、大資本の富が恰も彼の個人的勤勞からの成果であるかの如き印象を與へることだ。即ち、大資本家大地主は異常なる勞働者であり、彼等の資本や土地はその個人的勞働の集積であるとなすことによつて、これらの大所有を道德的に辯護しようとするのである。資本家を勞働者へ、資本を勞働へ、還化することによつて彼等とその富とを辯護せんとすることの試み、それはブルジョア經濟學者のマルクスの勞働價値說に對する論擊と極めて興味ある對象をなすものと云へよう。これが一つ、その次に、この作兵衛の話の中には、貧乏の原因は少くとも貧乏から脫却し得ない原因は、その人の怠惰だといふ社會的知識が說示されてゐることである。即ち、貧乏な人は精出して働きさへすれば、その苦境から脫却し得るのに、若し、彼が依然貧乏であるならば、それは誰の罪でもなく一にその人自身の責任だといふのだ。故に、この主張に稍々象徵的な表現を與へれば富者は即ち勤勞者、勞働者、貧者は即ち不勞者、怠惰者であると

いふことになるわけである。

併し、社會的眞理としてはこれほど間違つたものはない。現今の社會では、何の皮肉か、勞働者と云へば、その上に冠せられるものはきまつて「無産」といふ文字だ。二六時間中勞働の中に生き、屢々勞働の中に死に行くものこれ無産者である。之に反して、富者と云へば先づ遊んで喰つて行ける人と相場がきまつてゐる。勿論、富者と雖ども二六時間安逸無爲に月日を送つてゐるとは限らない。併し、富者を富者たらしめる者は彼等のこの勞働ではなくて、彼等の不勞所得である。勞働する者は富まず、富める者は勞働しない。現代は勞働と云へば、直ちに無産を聯想し、富貴と云へば、直ちに不勞不働を思ひ合はす世の中だ。此の如き社會的事實の唯中にあつて、富者即勞働者、貧者即怠惰者といふが如き社會的知識を注入することは、それが社會的欺瞞でなくて何であらう。特に、農村問題が我國の焦眉の問題となり、農民運動がその鬪爭的發展をなしつゝある現代においては、この作兵衞の立身談は無邪氣なる伽噺の域を脱して……階級的偏見となるのである。この修身談で薫陶された現代の模範農民作兵衞は農民運動の參加を拒んで答へるだらう。「この農村が疲弊し荒廢して行くのは、私どもの骨折がまだ足らないためだと思ひます、私は田地が惡くても收穫が少くても、地主には十分な年貢を、高利貸には十分な利子を、村には十分な租税を支拂ひます。地代引下げ運動だの耕作權の確立なんかいふやうなことは以ての外のことで、私は出來るだけ働いて惡い田地をよい田地に仕上げ、村のため國のためになるやうにしたいと思ひます」と。恐らく、村役人のみではなく、小作調停官より內務大臣閣下に至るまで、この作兵衞の心掛に感佩されるであらう。但し、この現代の作兵衞が修身書の作兵衞の如く「よい澤山な田地を買ひ」得るかそれとも、過勞と營養不良でのたれ死するか、その前に村から夜逃げをするか、それは私の保證し得る限りではない。

一年ほど前私の子供は『勤儉力行』と書いた紙片を學校から貰つて來て、それを門口に張れと私にせがんだことがある。『勤儉力行』の宣傳もまた同じ流儀の思想的欺瞞の他の現はれにほかならない。貧乏人は懸命に長い勞働時間を働きさへすれば貧乏線を突破して、遂には富者に――誰が？彼が？或は資本家が？――もなれる。國家は個人の集りだ。だから貧乏した國家は國民が『勤儉力行』しさへすれば、それでこの窮地を切拔けることができるのだといふ。世界戰爭とこれに續く經濟的混亂によつて行詰つた資本主義は、世界到る處にこの同じ局面打開策に訴へたのである。『勤儉力行』を産業戰の言葉に譯せば、即ち、勞賃切下げと勞働時間の延長とだ。少し前、世界の視聽を集めたところの英國同盟罷業の導火線となつたものが炭坑業主の強要的『勤儉力行』策であつたことは周知の事實である。

この思想はどんな社會的眞理を背景としてゐるか。その主要點はかうだ。即ち、經濟的停頓の根本的な禍源は現代の政治組織や經濟組織の不備にあるのではない。この淵源するところの主因は民衆の怠惰、奢侈、不從順、無規律である。故に、彼等の勞働時間を延長せよ、彼等の生活程度を低下せよ、而して軍事的訓練によつて彼等に服從の精神と規律とを養へ。其處にこそ救ひの道が横はつてゐるのだ。と、現代諸制度の合理的理解でなくして、この無批判的讃美と境を接する此の如き主張が、現代社會科學の客觀的研究の成果と相容れ難きものであることも亦、多く説明を必要としないであらう。

要するに、眞理への教育を標榜しつつある現代の教育は少くとも社會科學の關する限り、その最も社會的に緊切な問題においては、其實、眞理を隱蔽し又はゴマ化す教育となつてゐるのである。

七

以上述べ來つたところによつて、現代における思想大工場によつて生産される觀念物の特質が大體明かにされたと思ふ。繰返して云へば、現代教育は將來への教育を標榜しつつ、その重要點において過去の教育たるの事實を示して居り、全體のための教育を標榜しつつ、その重要點において全體の犠牲においてする部分のための教育たるの實を有し、眞理への教育を標榜しつつ、その重要點においては、眞理を隱蔽し若しくはゴマ化す教育たる實を持つて居る。玆に現代教育の二重性があり、矛盾があるのである。

併し、現代教育は、丁度この二重性のために長い間合理的なものと考へられ信ぜられて來た。といふのは、それが明らかに、將來への教育であり、全體へのための教育であり、眞理への教育である一面を備へてゐるからである。人々が單に、現代教育をこの一面からのみ見てゐる間は、勿論、二重性があり得よう筈もなく、從つて、根本的な不合理も矛盾もそこに存在しなかつたのである。吾々が現代教育における上記の二重性を認識するに至つたのは、現代教育にその標榜する所と異る他の一面の存在することを發見するやうになつてからのことだ。而も、この他の一面の看破は、その當初においては決して容易なことでなかつたに違ひない。併し、今日ではもう現代教育はその表玄關からだけでなく、その裏口からも見られるやうになつて、その二重性、矛盾に關する認識も亦漸次その地歩を占めるに到つた。而して、この認識が一部の目醒めた小數の教育者――廣い意味での――を驅つて現代教育に反旗を飜えさせ、その二重性を克服して、眞の教育を樹立せんとの努力に向はせつつあることも亦極めてあり得べきことである。彼等目醒めたる教育者の認定したる事實は誤りなく、その追求する目標も正しきものの如くである。だがこの正しき目標を達成するために、彼等はどんな方法によらうとするのであるか。

一言にして云へば、彼等は純粹なる――現實的な社會運動を超越した意味での――教育の方法に寄らうとするのであ

る。即ち、一つには從來の教育の不條理と過誤とを曝露し、眞の教育の何者なるかについて世人を啓發することだ。二つには、今日の階級的偏見から人々を救ひ出し、彼等の中に、人間愛、人道的精神を喚起するのだ。さうしてこれら凡てを成就するためには、何よりも先きに教育者の自覺が必要である。選ばれたる教育者の心に偉大なる教育的精神を覺醒すること、これが第一の要件だ。即ち、彼等に從へば、教育なるものが社會の上に超然として立ち、其處から社會を教導するのであり、從つて教育の自己改革の程度に應じて、社會が、從つてその不合理な教育制度も亦、改善せられるのである。

その理所が何であれ、若しこの純粹教育の方法が實際上に有効なるものであれば、それでも結構なのであるが、しかし、吾々の知る限り、それはこの領域において失敗の歴史を持つてゐる。社會制度の矛盾、不合理の克服をば、社會的推進力としての階級鬪爭といふ現實的地盤の進展から切離して、單なる教育の方法――それはムロン狹く學校教育といふ意味に、又、所謂、個人主義的な、又、精神主義的な意味に、限局さるべきではないけれども――によつて、歸着するところ、所謂『人心の改造』によつて、達成しようとする意識的努力が、偉大なる將來を約束しつゝ歴史の舞臺に現はれたのは、フランス革命の以後においてゞあり、そして一部分はその現實的障害に對する人道主義的反動としてゞあつた。吾々はこの光輝ある歴史的雄圖の戰士をユートピヤン社會主義者において持ち、またドイツ古典哲學の代表者の或者において持つてゐる。彼等はそれぞれの方面において、卓拔なる業績を殘して、特に人類の精神的文化の成長に大なる寄與をなしたにも拘らず、吾々の問題としてゐる事柄における彼等の努力は――この問題の重要を覺らせて、この問題に對する世人の注意を喚起し、更に彼等の解決方法の無効であつたことによつて吾々に大なる消極的教訓を殘してはゐるが――結局、失敗に終り、彼等がみづからの方法で解決しようと志した課題を未解決のまゝに吾々の時代に殘

したのである。勿論、今日と雖も、彼等と同じ立場からこの問題を解決しようとする努力が繰返されないのではない。併し、階級鬪爭の發達程度がそれ以上の社會的洞見を不可能ならしめてゐた夫の時代における浪曼的な『偉大さ』はもう失はれて了つた。プロレタリアの成長とそれに伴ふ階級鬪爭の發展が新なる展望を吾々の歷史的前途に啓いた今日、ひたすらその社會的土壤を失うた昔日の『偉大』にすがらうとするのは、時代錯誤的なエピゴーネンフウムたるの譏を免かれないであらう。

我國においても、教育の領分を越えずして現代教育の二重性を克服しようとの眞面目な企圖が試みられてゐる。が、彼等は何時も資金といふ無氣味な、が最も緊切な現實問題にぶつかつて、階級的力の殘忍なる鐵腕を經驗する。彼等のロマンチツクな超階級的ユートピアはその第一發程において、既に手ひどき痛棒を喰はされるであらう。かくて、彼等の事業はその計畫が形の上で榮える場合には、結局、彼等の最も希はざる富有階級の不良兒のお守機關となつて了ふ。若し、彼等が此樣な墮落をいさぎよしとしない場合には、彼等の事業はその形の上で成立し得ぬものになり、さうして彼等はその初志に忠信なる限り、恐らくは社會運動者の群に投ずるに至るであらう。兩者いづれかの運命が彼等を待つてゐるかに見える。

然らば、彼等の努力の斯の如き失敗は何に由來するか。私の見る所によれば、それは彼等が絶對不能な目標を追求してゐるからでもなければ、彼等の眞面目な努力が足らないからでもない。その眞の原因は、現代教育の二重性の由來に關する彼等の見方が間違つて居り、從つて、この誤つた認識に基いた彼等の克服方法が失當なものであるからである。

る。即ち、一つには從來の教育の不條理と過誤とを曝露し、眞の教育の何者なるかについて世人を啓發することだ。二つには、今日の階級的偏見から人々を救ひ出し、彼等の中に、人間愛、人道的精神を喚起するのだ。さうしてこれら凡てを成就するためには、何よりも先きに教育者の自覺が必要である。選ばれたる教育者の心に偉大なる教育的精神を覺醒すること、これが第一の要件だ。即ち、彼等に從へば、教育なるものが社會の上に超然として立ち、其處から社會を教導するのであり、從つて教育の自己改革の程度に應じて、社會が、從つてその不合理な教育制度も亦、改善せられるのである。

その理解が何であれ、若しこの純粹教育の方法が實際上に有効なるものであれば、それでも結構なのであるが、しかし、吾々の知る限り、それはこの領域において失敗の歴史を持つてゐる。社會制度の矛盾、不合理の克服をば、社會的推進力としての階級闘爭といふ現實的地盤の進展から切離して、單なる教育の方法——それはムロン狹く學校教育といふ意味に、又、所謂、個人主義的な、又、精神主義的な意味に、限局さるべきではないけれども——によつて、歸着するところ、所謂『人心の改造』によつて、達成しようとする意識的努力が、偉大なる將來を約束しつゝ歴史の舞臺に現はれたのは、ソランス革命の以後においてゞあり、そして一部分はその現實的障害に對する人道主義的反動としてゞあつた。吾々はこの光輝ある歴史的雄圖の戰士をユートピヤン社會主義者において持ち、またドイツ古典哲學の代表者の或者において持つてゐる。彼等はそれぞれの方面において、或偉大なる業績を遺して、特に人類の精神的文化の成長に大なる寄與をなしたにも拘らず、吾々の問題としてゐる事柄における彼等の努力は——この問題の重要を覺らせて、この問題に對する世人の注意を喚起し、更に彼等の解決方法の無効であつたことによつて吾々に大なる消極的教訓を殘してはゐるが——結局、失敗に終り、彼等がみづからの方法で解決しようと志した課題を未解決のまゝに吾々の時代に殘

したのである。勿論、今日と雖も、彼等と同じ立場からこの問題を解決しようとする努力が繰返されないのではない。併し、階級闘爭の發達程度がそれ以上の社會的洞見を不可能ならしめてゐた夫の時代における浪曼的な『偉大さ』はもう失はれて了つた。プロレタリアの成長とそれに伴ふ階級闘爭の發展が新なる展望を吾々の歴史的前途に啓いた今日、ひたすらその社會的土臺を失うた昔日の『偉大』にすがらうとするのは、時代錯誤的なエピゴーネンツウムたるの譏を免かれないであらう。

我國においても、教育の領分を越えずして現代教育の二重性を克服しようとの眞面目な企圖が試みられてゐる。が、彼等は何時も資金といふ無氣味な、が最も緊切な現實問題にぶつかつて、階級的力の殘忍なる鐵腕を經驗する。彼等のロマンチツクな超階級的ユートピアはその第一發程において、既に手ひどき痛棒を喰はされるであらう。かくて、彼等の事業はその計畫が形の上で榮える場合には、結局、彼等の最も希はざる富有階級の不良兒のお守機關となつて了ふ。若し、彼等が此樣な墮落をいさぎよしとしない場合には、彼等の事業はその形の上で成立し得ぬものになり、さうして彼等はその初志に忠信なる限り、恐らくは社會運動者の群に投ずるに至るであらう。兩者いづれかの運命が彼等を待つてゐるかに見える。

然らば、彼等の努力の斯の如き失敗は何に由來するか。私の見る所によれば、それは彼等が絶對不能な目標を追求してゐるからでもなければ、彼等の眞面目な努力が足らないからでもない。その眞の原因は、現代教育の二重性の由來に闘する彼等の見方が間違つて居り、從つて、この誤つた認識に基いた彼等の克服方法が失當なものであるからである。

八

マルクスは「人間の表象、意見及び概念、一言にして蔽へば、彼等の意識」に對する彼の洞見によつて、吾々に新なる觀方を開いてくれた。彼に從へば、「支配階級の思想は、各々の時代において、支配思想である。即ち、社會の支配的た物質的勢力であるところの階級が、同時に、支配的な精神的勢力なのだ。物質的生產に要する諸手段を支配するところの階級は、それによつて同時に、精神的生產に要する諸手段を支配する。そしてその結果、それによつて同時に、おしなべて云へば、精神的生產に要する諸手段を持たない人々の思想がこの階級――即ちこれらの諸手段を持つ階級に――隷屬せしめられる。支配思想とは、單に支配的な物質的諸關係の觀念的表象であり、思想として把握せられた支配的な物質的諸關係であり、從つて、まさに特定の一階級を支配階級たらしめるところの諸關係、從つてこの階級の支配の思想であるにほかならない。支配階級を構成する個人は、就中、また意識を持つて居り、それ故に思惟する。だから、彼等がその時代の全擴がりに亙つて支配し、從つて、就中、思惟する者としても亦支配し、思想の生產及分配を規律するといふことは、それ故に、彼等――即ち支配階級――の思想がその時代の支配思想である、といふことは、わかりきつたことである。」〔獨逸的觀念形態。『我等』第八卷第五號一一八頁〕

即ち、物的生產に必要な手段を支配するところの支配階級が、同時に精神的生產に必要な手段を支配し、その結果、思想の生產者としても亦支配し、思想の生產及分配を規律するのだ。さうして現代における支配思想の生產及分配の機關の最要なるものの一つが、諸種の教育施設、就中、莫大な資金と勢力との投下された大仕掛な思想工場であるところの學校である。此の處において、現代における支配的な「表象、意見、概念」が大量的に生產され分配されるのであ

る。

教育が支配階級的思想の生產及び分配の機關であるといふことは、他面から見れば、それが階級鬪爭の一手段であることを意味する。支配階級は……………によつて敵對階級を擊破し若しくは、壓伏して置くだけではない。同時に、彼等は心的手段によつて即ち、敵對階級の階級的支配を擁護支持する思想感情を論破し、彼等の階級的支配に適應する思想感情を被壓階級に注入し彼等を精神的に馴致することによつて、彼等の搾取關係支配關係を確立し擁護せんと努める。斯様な心的手段の最も有力なものは嘗て宗教と教會であつたのだが、不信的傾向の增大しつつある現代においては、教育と學校とがまさに之に代らうとしてゐる。この見地から觀るときに、教育は決して社會の上に超然として、その高處から社會に働きかけるものではなくて、社會の現實的地盤の上に生じ、社會の中に織り込まれてゐるものである。教育が社會進化の方向を定めるのではなくて、反對に、社會によつて教育の方針が定められてゐるのである。

之を歷史的に見ても、ヨーロッパにおける近代教育は新興ブルジョアジイの封建的勢力に對する鬪爭の心的手段の一つであつた。實際、近代教育學の偉大なる貢献者たちの多くは——ルッソオ、カント、シラア、ゲーテ、ペルタロッチを見よ同時に新興ブルジョア思想のための鬪爭者であり、彼等の提唱した新なる教育は民衆を舊制度の懐から奪うて、新興ブルジョアの夢みた新なる世界への旅程に立たしめる主要な手段にほかならなかつたのである。

封建階級の勢力は漸次に傾き、ブルジョアジイの階級支配は之に代つてその地歩を固めた。が、それと同時に、ブルジョアジイの世界即ち、資本主義は、その中に包藏するプロレタリアをその敵對階級として育成した。このプロレタリアの擡頭によつてブルジョアジイは背腹兩面に敵を持つに至つた。即ち、背後には、再び昔日の權勢を挽回しようと努める封建的反動勢力を、そして前面には、ブルジョアジイの……………………………

八

マルクスは「人間の表象、意見及び概念、一言にして蔽へば、彼等の意識」に對する彼の洞見によつて、吾々に新なる観方を開いてくれた。彼に從へば、「支配階級の思想は、各々の時代において、支配思想である。即ち、社會の支配的な物質的勢力であるところの階級が、同時に、支配的な精神的勢力なのだ。物質的生産に要する諸手段を支配するところの階級は、それによつて同時に、精神的生産に要する諸手段を支配する。そしてその結果、それによつて同時に、おしなべて云へば、精神的生産に要する諸手段を持たない人々の思想がこの階級――即ちこれらの諸手段を持つ階級に――隷屬せしめられる。支配思想とは、單に支配的な物質的諸關係の觀念的表象であり、思想として把握せられた支配的な物質的諸關係であり、從つて、まさに特定の一階級を支配階級たらしめるところの諸關係、從つてこの階級の支配の思想であるにほかならない。支配階級を構成する個人は、就中、また意識を持つて居り、それ故に思惟する。だから、彼等がその時代の全擴がりに亘つて支配し、從つて、就中、思惟する者としても亦支配し、思想の生産及分配を規律するといふことは、それ故に、彼等――即ち支配階級――の思想がその時代の支配思想である、といふことは、わかりきつたことである。」〔獨逸的觀念形態。『我等』第八卷第五號一一八頁〕

即ち、物的生産に必要な手段を支配するところの支配階級が、同時に精神的生産に必要な手段を支配し、その結果、思想の生産者としても亦支配し、思想の生産及分配を規律するのだ。さうして現代における支配思想の生産及分配の機關の最要なるものの一つが、諸種の教育施設、就中、莫大な資金と勢力との投下された大仕掛な思想工場であるところの學校である。此の處において、現代における支配的な「表象、意見、概念」が大量的に生産され分配されるのである

る。

教育が支配階級的思想の生產及び分配の機關であるといふことは、他面から見れば、それが階級鬪爭の一手段であることを意味する。支配階級は……………によつて敵對階級を擊破し若しくは、壓伏して置くだけではない。同時に、彼等は心的手段によつて即ち、敵對階級の階級的支配を擁護支持する思想感情を論破し、彼等の階級的支配に適應する思想感情を被壓階級に注入し彼等を精神的に馴致することによつて、彼等の搾取關係支配關係を確立し擁護せんと努める。斯樣な心的手段の最も有力なものは嘗て宗教と敎會であつたのだが、不信的傾向の增大しつつある現代においては、敎育と學校とがまさに之に代らうとしてゐる。この見地から觀るときに、敎育は決して社會の上に超然として、その高處から社會に働きかけるものではなくて、社會の現實的地盤の上に生じ、社會の中に織り込まれてゐるものである。敎育が社會進化の方向を定めるのではなくて、反對に、社會によつて敎育の方針が定められてゐるのである。

之を歷史的に見ても、ヨーロツパにおける近代敎育は新興ブルジョアジイの封建的勢力に對する鬪爭の心的手段に一つであつた。實際、近代敎育學の偉大なる貢獻者たちの多くは——ルツソオ、カント、シラア、ゲーテ、ペルタロツチを見よ同時に新興ブルジョア思想のための鬪爭者であり、彼等の提唱した新なる敎育は民衆を舊制度の懷から奪うて、新興ブルジョアの夢みた新なる世界への旅程に立たしめる主要な手段にほかならなかつたのである。

封建階級のの勢力は漸次に傾き、ブルジョアジイの階級支配は之に代つてその他步を固めた。が、それと同時に、ブルジョアジイの世界即ち、資本主義は、その中に包藏するプロレタリアをその敵對階級として育成した。このプロレタリアの擡頭によつてブルジョアジイは背腹兩面に敵を持つに至つた。即ち、背後には、再び昔日の權勢を挽回しようと努める封建的反動勢力を、そして前面には、ブルジョアジイの……………………………………………

……プロレタリアを。

ブルジョアジイの實生活におけるこの二重の階級的地位は、必然に、彼等のイデオロギイに反映せざるを得ない。後等が被壓階級の大衆を背後に率ゐ、彼等の代表者として封建的壓迫階級に反逆した場合には、彼等の思想は强い非階級的な人道的色調によつて彩られざるを得なかつた。從つて、彼等の教育も亦保守的封建階級に對する場合には、將來への教育、全體のための教育、眞理への教育を標榜する大旆を高く揭げたのであつた。やがて、國民の大多數をなすところの無產大衆が漸次自分の階級的地位と利益とに覺醒し始めた。彼等はブルジョアジイの提唱した形式的な人道的主張をば、ブルジョアイの階級的利益の限界を越えて、即ち、プロレタリア階級的利益にまで現實に適用しようと試みるに至つた。ここに至つてブルジョアジイは彼等の階級的精神を明白に暴露する。即ち、彼等は、この民衆の進步的な解放の要求を斷乎として斥け、自己の特權的地位の確保に全力を注ぐやうになつた。從つて、彼等の教育も亦、この部面にあつては、最早將來の教育、全體のための教育、眞理への教育たり得ない。否、その反對に、彼等の教育は此の如き教育に對する挑戰となり、過去への、少くとも現狀維持の教育となり、部分のための教育となり、眞理をゴマ化す教育たるべくよぎなくされるのである。

以上はヨーロッパにおけるブルジョア階級の發展と之に照應する教育の發展の大筋であるが、近代の我國においても、ほゞこれと相似た道行が繰返された。明治革新は封建的舊勢力に對する强力的掃蕩であつたが、この强力的變革手段と列んで、封建的イデオロギイに對する思想的鬪爭が行はれた。そして、それが我國現代教育の思想的發端をなしてゐるが如くである。夫の五ケ條の御誓文には「舊來の陋習を破り天地の公道に基づく」べきことと「廣く知識を世界に求む」べきことが宣明されてゐるではないか。この同じ意味において、福澤氏は彼の『學問のすすめ』を次の有名な一節

を以て書き始めてゐる。

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり。されば、天より人を生ずるには、萬人は萬人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく、萬物の靈たる身と心との働を以て天地の間にあるよろづの物を資り、以て衣食住の用を達し、自由自在、互に人の妨をなさずして、各安樂にこの世を渡らしめ給ふの趣旨なり。されども、今、廣く此の人間世界を見渡すに、賢き人あり、愚なる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、其有樣雲と泥との相違あるに似たるは何ぞや。その次第甚だ明なり。實語教に、人學ばざれば智なし、智なきものは愚人なりとあり。されば賢人と愚人との別は、學ぶと學ばざるとによりて出來るものなり。」而して世の中の貧富貴賤の差別は「その本を尋ぬれば、唯其人に學問の力あるとなきとによつて其相違も出來たるのみにて、天より定めたる約束にあらず。諺に曰く、天は富貴を人に與へずして、これを其人の働きに與ふるなり。されば、前にも云へる通り、人は生れながらにして貴賤貧富の別なし、唯、學問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり、富人となり、無學なる者は貧人となり下人となるなり。」と『學問のすゝめ初編』この學問のすすめは明治五年二月の初より始めて同九年十一月の第十七編に至つて終り、この發兌の全數編は十三年までに約七十萬冊だと云ひ、初編だけでも、眞僞版本を合すれば、流布二十二萬冊を下らないといふ——當時の人口を三千五百萬とすれば百六十名に一冊の割——古來稀有の發兌であつたといふ。吾々はこの單なる一事實からでも封建の惡夢から醒めた新日本の精神的要求が何邊にあつたかを推知し得るかに思ふ。

けれども、明治革新前後における封建的イデオロギイに對する闘爭は、其後、徹底することなくして終つた。何となれば、明治革新は一種の……であつたのみならず、その勝者自身において過分に反動的封建的要素を含んでゐたのだから。從つて、明治政府の基礎が漸く固くなつた明治十年頃から、新なる支配階級は反動的舊勢力と妥協して、民衆的傾

向に向ひつつあつた自由民權の運動に峻嚴なる彈壓を加へるやうになつた。ムロン、其後と雖も、封建主義に對する鬪爭は形式の上では依然として標榜されてゐた。併しそれはほんの形ばかりのことで、これといふ眞劍な努力は殆んどなされなかつた。と同時に、その裏では、封建階級とその庇護の下に成長したブルジョアジイとの妥協が完成された。そしてこの聯合支配階級と國民の多數をなす無產大衆との對抗が準備されるに至つたのである。けれども、久しく階級的意識に目醒め得なかつた無產大衆は未だこの敵對關係を十分に意識するに到らなかつた。そこで一方では封建的反動的勢力との妥協、他方では前進的無產大衆の無自覺、此の如き事情の繼續する間、我國の實社會には社會的平和時代が支配した、そしてそれは教育の世界においても亦同じ平穩なる統一安定の時代を投影したのである。

然るに、最近に至つて我國の資本主義的發展と世界戰爭と之に續く經濟的、政治的、社會的世界變動との結果として、我國の無產大衆は漸次階級的に目醒めて來、支配階級に對する彼等の對立關係を漸次意識するやうになつた。プロレタリア的勢力は經濟並に政治の領域における階級鬪爭の戰線と列んで、イデオロギイの場面における文化鬪爭にその戰線を張つた。かくて、吾々はプロレタリア的見地に立つ幾多の新聞雜誌、所謂プロレタリア文藝、プロレタリア的見地に立つ社會科學、獨立勞働者教育等々、の躍進的發展を目前に見る。

併し、支配階級にとつては、此の如き危險なる觀念產物の密造は到底之を默視するに忍びない。……

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………

……………………………………………………………………

……。

我國現代教育は上述の如き現實的社會關係の精神的反映である、從つてその二重性も亦此の如き見地に立つて始めて十分その眞實な起源と正體とを理解することができるのだ。だから、現代教育の二重性の根本的克服はその根底たる現實的社會關係の變革なしには到底望み難ない。それがために要せられるものは、單なる人性や、教育學者や、教育者の意識やの獨立的個々的改造ではない、……………………。それ故に、……………………。

……………………………………………………

九

かくの如くにして、現代教育は階級闘爭の一手段としてのその特質を一層明瞭に示し來つてゐる。と同時に、之に對する反抗運動、即ち、教育の二重性を克服し研究の自由を確立せんとする運動も亦、階級闘爭の一領域として理解せられるやうになりつゝある。即ち、教育反動に對する解放闘爭は、今日の階級社會においては、支配階級的思想に對する一般的解放思想のためにする闘爭の流れに沿うて、更に、根本的にはプロレタリアの自己を解放し、依つて以て人類を解放せんとする階級闘爭の流れに沿うて行はれるのである。

世界は今やその階級關係の………に立つてゐる。これは恐らくはその文化史的意義において、曾て人類が經驗した極めて少數の大變革にもくらべらるべきものであらう。さうして、この…………………は、時代に敏感なる者の意識に新なる精神的………を惹き起す。爰から新なる眞理、新なる科學、新なる理想、新なる世界に對する欲求、と熱意とを生ずるのである。若し、現代の最要の任務が時代を固定化することではなく、その………合理的な方法で、即ち最小の…………さを以て行ふことにありとするならば、この運命的變動の思想的

向に向ひつつあつた自由民權の運動に峻嚴なる彈壓を加へるやうになつた。ムロン、其後と雖も、封建主義に對する闘爭は形式の上では依然として標榜されてゐた。併しそれはほんの形ばかりのことで、これといふ眞劍な努力は殆んどなされなかつた。と同時に、その裏では、封建階級とその庇護の下に成長したブルジョアジイとの妥協が完成された。そしてこの聯合支配階級と國民の多數をなす無產大衆との對抗が準備されるに至つたのである。けれども、久しく階級的意識に目醒め得なかつた無產大衆は未だこの敵對關係を十分に意識するに到らなかつた。そこで一方では封建的反動的勢力との妥協、他方では前進的無產大衆の無自覺、此の如き事情の繼續する間、我國の實社會には社會的平和時代が支配した、そしてそれは教育の世界においても亦同じ平穩なる統一安定の時代を投影したのである。

然るに、最近に至つて我國の資本主義的發展と世界戰爭と之に續く經濟的、政治的、社會的世界變動との結果として、我國の無產大衆は漸次階級的に目醒めて來、支配階級に對する彼等の對立關係を漸次意識するやうになつた。プロレタリア的勢力は經濟並に政治の領域における階級闘爭の戰線と列んで、イデオロギイの場面における文化闘爭にその戰線を張つた。かくて、吾々はプロレタリア的見地に立つ幾多の新聞雜誌、所謂プロレタリア文藝、プロレタリア的見地に立つ社會科學、獨立勞働者教育等々、の躍進的發展を目前に見る。

併し、支配階級にとつては、此の如き危險なる觀念產物の密造は到底之を默視するに忍びない。……………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

…。

我國現代教育は上述の如き現實的社會關係の精神的反映である、從つてその二重性も亦此の如き見地に立つて始めて十分その眞實な起源と正體とを理解することができるのだ。だから、現代教育の二重性の根本的克服はその根底たる現實的社會關係の變革なしには到底望み難ない。それがために要せられるものは、單なる人性や、教育其者や、教育者の意識やの獨立的個々的改造ではない、…………………………。それ故に、………………………………………………………………。

九

かくの如くにして、現代教育は階級鬪爭の一手段としてのその特質を一層明瞭に示し來つてゐる。と同時に、之に對する反抗運動、即ち、教育の二重性を克服し研究の自由を確立せんとする運動も亦、階級鬪爭の一領域として理解せられるやうになりつゝある。即ち、教育反動に對する解放鬪爭は、今日の階級社會においては、支配階級的思想に對する一般的解放思想のためにする鬪爭の流れに沿うて、更に、根本的にはプロレタリアの自己を解放し、依つて以て人類を解放せんとする階級鬪爭の流れに沿うて行はれるのである。

世界は今やその階級關係の………に立つてゐる。これは恐らくはその文化史的意義において、嘗て人類が經驗した極めて少數の大變革にもくらべらるべきものであらう。さうして、この………………………………は、時代に敏感なる者の意識に新なる精神的……を惹き起す。爰から新なる眞理、新なる科學、新なる理想、新なる世界に對する欲求、と熱意とを生ずるのである。若し、現代の最要の任務が時代を固定化することではなく、その…………合理的な方法で、即ち最小の…………さを以て行ふことにありとするならば、この運命的變動の思想的

表現の一つであるところの學生の社會科學的研究を禁遏又は阻害せんとする企圖の如きは、流れに堰して之を激せしめるの愚擧たるにほかならない。それにも拘らず、支配階級はこの無益……………を最後まで繰返すかも知れない。——これは現代の政治が人間的道理と人類的理想によつて動かされずして、階級的利害によつて動かされてゐる一つの證據である。——のみならず、かくの如き支配階級の彈壓政策は屢々さし當りの成功を收める場合があり得るが、窮極の勝利は常に、歴史の現實的變動に沿ふところの階級と共に闘ふ者に期する。これが歴史の吾々に敎ふる所である。

歴史を尊重するといふことは、歴史を神棚に祭り上げることではない。吾々にその解決を迫りつつある現代の諸問題に對して、それから活ける教訓を引き出すことが眞に歴史を學ぶといふことである。反動主義者は口を開けば、二口目には我國の歴史を云ふ。が、……………ある建國の歴史よりも、吾々の記憶に最も新しい變革の歴史である明治革新の歴史からヨリ多くを學び得ないであらうか。

今日はもう既に「健全」なる支配思想になつてゐるところのブルジョア思想の擡頭に對して、封建的イデオロギイを代表する當時の反動階級は如何に振舞ふたか。切支丹の禁制や禁書の制は姑らく措き、明治維新の前後においてさへも、洋學の名において代表されてゐた當時のブルジョア思想は不斷の迫害を被つたのである。屢々引合に出すところのこのブルジョア思想の大戰士であつた福澤翁は當時を回顧して次のやうに云うて居る。「外國の書を讀んでヨーロッパの制度文物をそれこれと論ずるやうな者は、どうも彼輩は不埒な奴じや、畢竟奴等は嘘を吐いて世の中を瞞着する賣國奴だといふやうな評判がソロソロ行はれて來て、それから浪人の鋒先が洋學者の方に向いて來た。」殊に「井伊大老の事變後は世上何となく殺氣を催して手塚律藏、東條禮藏は洋學者なるが故に、長州人に襲撃せられ、塙二郎は國學者にして

不臣なりとて何者かに首を斬られ、江戸市中の唐物屋は外國品を賣買して國を損害するとて苦しめられるといふやうな風潮となつて來た。」即ち「洋學者は賣國奴だ」と云ふのでつけ脱はれるので「怖がらずにはゐられない、又眞實怖いこともある。凡そ維新前文久二三年から維新後明治六、七年頃まで十二三年の間が最も物騒な世の中で、此の間私は東京にゐて夜分は決して外出せず、餘儀なく旅行するときは、姓名を僞り、荷物にも福澤と記さず、コツソリして往來する其模様は、欠落者が人目を忍び、泥棒が逃げ廻るやうな風で、誠に面白くない。其とき途中で廻國巡禮に出逢ひ、其笠を見れば何の國何郡、何村、何某と明白に書いてある。『扨々羨ましい事だ、乃公もア、云ふ身分になつて見たい』と自分の身を思ひ、又世の有様を考へて妙な心持になつた云々。」〔福翁自傳三六六―八頁〕維新前後におけるこの洋學者の運命は、大正の今日においては、程度と態樣こそ違へ、闘爭的社會科學の研究者たちの運命であるかに見える。

同じ福澤翁は嘗て、幕府の勘定方の役人の依頼でチエンバアの經濟論を譯したことがある。其時、彼が competition に『競爭』の譯字をあてたところ、役人はこれを見て爭の字がどうも不穩だからどうかならぬかと言ふ。そこで、彼は、競爭といふことは甲が品物安く得れば乙はもつと安い値段をつける、或る金貸が金利を低くすると、隣りの金貸はそれをより一段と低利で貸出す、といふ具合に商賣上の駈引で相競ひ相爭ふのだと說明した。すると役人は「成程さう云へば分らないことはないが、何分どうも爭と云ふ文字か穩かならぬこれではどうも御老中方へ御覽に入れることが出來ない」と頑張つた。福澤氏はその馬鹿らしさが誠に業を煮やしたと見えて次のやうに書いてゐる。「其樣子を見るに、經濟書中に人間互に相讓るとか云ふやうな文字を見たいのであらう。。例へば商賣をしながらも、忠君愛國、國家のためには、無價でも賣るとか云ふやうな意味が記してあつたらば、氣に入るだらうが、夫れは出來ないから『ドウも爭と云ふ字がお差支ならば、外に飜譯の致しやうもないから、丸でこれは削りませうと云うて、競爭の文字を眞黒に消して目

録書を渡したことがある。」〔自傳三〇六—八頁〕開明の日本の峻嚴なる檢閲官と雖も、頑迷度すべからざる幕府の役人は頭のふるきを憫笑するに違ひない。實際、自由競爭と帝國主義との戰爭とは今日でも早………文字なつてゐるのである。が、この自由さは、資本家的な競爭と戰爭とに對する闘爭についても亦認められてゐるかどうか。吾々は不幸にして、今日なほ屢々純粹なる社會科學的術語である。「階級闘爭」、『革命』、『獨裁』などの文字の代りに、「眞黑」にや××でや消された個所を見出す。今日なほ當局は、これらの不穩な文字を「御老中方へ御覽に入れる」わけには行かぬと考へてゐるか否かは不明であるが、少くとも社會科學中に階級相爭ふといふ「穩かならぬ」文字の代りに、階級相讓り相協調するといふ文字を見たいのだといふことは動かし難き事實である。

それはともかく、近代世界の運命となつたところの資本主義は、日本をしてその超然孤立の特殊的地位に留まることを許さなかつた。それは既に經濟的にも行詰つてゐた封建日本の資本主義日本への發展を強制した。始めには宣教師とその齎した切支丹宗門を通して後には黒船とその背後にある武力によつて。此の如き現實的形勢の土臺の上に、新なる意識新なる欲求が生れた。洋學とそれによつて特に代表されたブルジョア思想は一方ではこの現實の運命的な發展に照應する新なる意識の要求に應ずるものであると共に、他方では、斯樣な新なる意識の生成發展を刺戟すべき使命を持つてゐたのである。

大平洋の彼方にはさうしてヨーロッパの天地には、既に資本主義文明がサン然として榮えてゐた。多くの深遠な學理を俟たずとも、唯、この厳然たる事實に目を開きさへしたなら、彼等は洋學の根本的に克服し得ざるは勿論、進んで之を受容すべき所以をも理解し得たに違ひない。それにも拘らず、彼等は國民的となつてゐたところの階級的偏見によつて眼を蔽はれてゐたために愚なる彈壓を洋學に加へ、無用なる犠牲を生ずると共に、我國の文化的進歩に不幸なる制動

機をかけたのである。若し、吾々が歴史から學ぶべきでありとするならば、少くとも吾々はこの有害にして無益なりし洋學迫害の歴史から學ぶべきであらう。而して、維新時代の洋學は即ち現代の社會科學である。

現代資本主義文明は凋落の運命にある。それは何によつて代られようとしてゐるか。…………………………が、吾々は未だその現實の姿を見得ない。封建日本はそのやがて行き着くべき資本主義日本の姿を既に現實の形において、歐米諸國において持てゐたのであつた。が、資本主義日本は、未だ、世界の何處にもその將來の姿を持つてゐない。而も、新しき世界は戸の外に近づきつゝある。夢幻的な想像で勝手にその姿を描くことを以て滿足し得ない者は社會科學の光を採らねばならぬ。…………………………………にも拘らず、支配階級はこの光を採らうとしない。彼等は目を蔽ひ扉を鎖して、近づき來るこの新なる來訪者の姿を見ざらんことに努めてゐる。彼等を隔てる扉が永久の耐久力を持つ障壁であるかに信ずるものの如くに。

其の間に彼方の水平線上には暴風雨を孕んだ一抹の黒雲が既に肉眼を以てさへ見得るまでに擴がりつつある。この濁氣味惡い天候の唯中に、支配階級の氣象台上には依然として『南の風晴』の信號がヘンポンとして飜つてゐるのだ。この誤れる信號を引き卸して暴風來の警燈を高く揭げんとする者、彼等は果して我が民族の生存を危地に陷入れるものであるか、はたまた、備えなくして陷らんとしてゐる危難から之を救ひ出さんとするものであるか。

（本稿は六月廿七日京都帝大講演部及び七月一日九大辯論部においてなした講演の手控えに基づいて起草したものである。）

相續思想と改正英國相續法

高柳賢三

一　はしがき

一九二六年一月一日から英國の相續法は改正せられ、長子相續 Primogeniture の原則が斷然廢棄せられるゝに至つた。

長子相續制は封建社會のコロラリーとして歐洲諸國に廣く行はれて居つた制度であつたが、封建制度の崩壞した近代國家に於ては、其存續理由を失つたものとして歐洲大陸諸國に於ては早くより廢棄せられ、又英國法を繼受した北米合衆國に於ても、長子相續は米國憲法の精神に背反するものであるとして採用せられず、均分制度に依て置き換へられたのであつた。

英國に於てもヂエレミー・ベンタムが、其「立法原理」その他の論文の中に均分制を主張したるを初とし、從來長子相續制度に對し攻擊を加へる者が少からずあつたのであるが、保守的な英國は本年一月一日に至つて初めて此の改正が實現せらるゝに至つたのである。

長子相續制の廢止―歐米人の多くは恐らく、今日に至つて初めて之を行ふのむしろ遲きに驚き、此の立法に對し一顧

の價なきものと冷笑するかも知れない。

然し、世界列强中此の制度を維持する我國としては、唯一の好侶伴たる此の西歐の友邦が今此の主義を捨てた事に對し、ある種の寂しさを感ずると共に、我國の將來進むべき途に就て考察すべき契機が與へられたものと云はねばならぬ。

英國相續法の改正中最も顯著なものは長子相續制の廢止であるが、此の外、男女の不平等待遇の徹底、生存配偶者の厚遇、相續權者の範圍の縮少等注意すべき幾多の改正が實現されてゐる。

從て、私は以下英國改正相續法の内容を説明し、更に之に就て幾分の論評を試みんとするのである。

二　改正英國相續法の大要

英國相續法の改正は、英國不動産法の大改革の一部分として實現せられたのである。そして、それは主として「一九二五年遺産管理法」The Administration of Estates Act, 1925 の中に規定されて居る。

此の法律は五部より成り、第一部は不動産遺産の移轉 Devolution of Real Estate、第二部は遺言執行者及遺産管理人 Executors and Administrators、第三部は遺産管理 Administration of Assets、第四部は殘餘遺産の分配 Distribution of Residuary Estate、第五部は補足 Supplemental であつて、全部で五十八條から成つて居る。此の外、第一表 First Schedule 及第二表 Second Schedule が附錄として追加せられて居る。

右の法文を分析して之を詳説することは餘りに專門的、技術的に亙る恐れあるが故に、此處には之を試みることを控へる。私は只遺産の分配を中心として、改正英國相續法の大綱を左に摘記しよう。

改正法は遺産全部を所謂「人格代表者」Personal Representatives の手に歸せしめる。人格代表者と云ふのは、被相續人が指定した遺言執行者 Executors 及び被相續人の指定した遺言執行者無き場合に、裁判所の選任する遺産管理人 Administrators を云ふのである。人格代表者は全遺産を一つのジェネラル・ファンドとし、其中より葬式費用、被相續人の債務、遺産管理の費用及び死亡稅を支拂つた後、其殘額を大體下の如き順序で分配する。

一　被相續人が夫又は妻を殘して死んだ場合には、其間に生れた直系卑屬が殘されてある場合と否とを問はず、生存配偶者は、左の遺産を取得する。

1凡ての人的動産 Personal Chattels

此處に人的動産とはいふのは、馬車、馬、厩の裝置、器具(營業上の目的に使用せられざる)、自動車及附屬裝置(營業上の目的に使用せられざる)、庭園用道具、家畜、金屬製器具、リネン類、瀬戸物、硝子類、書籍、繪畫、版畫、家具、寶石類、家庭又は個人的の使用裝飾物、樂器、化學的裝置、酒類其他の消費物を云ふのであつて、被相續人死亡の當時營業の目的の爲に使用して居つた動産、金錢、有價證券等は此の中に含まれて居らない事に定義されて居る。

人的動産は絕對に生存配偶者に屬する。

2千ポンド及び死亡の當時より起算して、支拂の時迄の年五分の利子

右の金額は死亡稅及び費用をその中から差引かるゝ事のないネット・アマウントである。そして又、右の金額も亦人的動産と均しく絕對に生存配偶者に歸屬する。

右の人的動産及び千ポンドを除いた殘餘財産の分配は、配偶者の間に子孫が存する場合と然らざる場合とに依て異る。生存配偶者の間に生れた直系卑屬なき場合に於ては、生存配偶者は生涯其殘餘財産全部の上に受益權を有する。此

の場合に於て、人格代表者は受託者として其遺産を管理するのである。又被相續人に兩親其他下に列記する親族なき場合には、生存配偶者は全財産の絕對所有權を取得する。

生存配偶者の間に生れた直系卑屬有る場合に於ては、生存配偶者は其生存中殘餘財産の半額に就て受益權を取得する。

右の受益權を除くと左の財産が殘る。

1處分せられざる財産の半分。

2生存配偶者の生涯受益權が消滅する場合に發生すべき將來の權利。

右の二種の權利に就ては被相續人の人格代表者は、直系卑屬を受益者として其權利の受託者となるのである。此の信託關係を成文法上の信託 Statutory Trusts と呼んで居る。此の子孫の爲にする成文法上の信託の內容は、此殘餘財産を被相續人の死亡の當時生存する子供の間に均分することに存するのであつて、其分配は子が廿一歲に達し、又は婚姻をなして居る場合に行はれるのである。被相續人より以前に死亡した子の受くべき分は、所謂代位相續の原則に基いて其子の直系卑屬に歸屬する。但し其分配も亦右の子孫が廿一歲に達し、又は婚姻をなしたる時に行はるる。

右の如く、分配は子孫が廿一歲に達し、又は廿一歲に達せざるも婚姻をなしたる場合に初めて行はれるのであるが、人格代表者は未成年の子孫に就ては、扶養、敎育等の爲に豫め分配額中より金錢を支出することが許されて居るのである。

二　被相續人が直系卑屬を殘して死亡し、しかも生存配偶者なき場合には、全遺産に就て「成文法上の信託」が發生し、「成文法上の受託者」たる人格代表者は右に示したと同一の方法に依て直系卑屬間に財産の均分を行ふ。

三　被相續人に直系卑屬なく兩親が生存する場合に於ては、生存配偶者は人的動産千ポンドの外、遺産の全部に就き生涯受益權を取得する。そして生存配偶者の死亡に依て發生する將來の權利は父母の間に均分せらるゝものであつて、人格代表者は生存配偶者の生存中父母を受益者とし、受託者として之を管理するのである。

生存配偶者なき場合に於ては全財産は父母の間に均分せられる。

父母の一方が無い場合には全遺産は生存せる父又は母に行くのであるが、此場合に於ても右に述べた生存配偶者の相續權の制限を受けるのは勿論である。

四　被相續人に直系卑屬も兩親も無い場合には、遺産は生存配偶者の相續權の制限の下に左の順序に從つて分配せらるゝ。

1 全血兄弟姉妹
2 半血兄弟姉妹
3 祖父母
4 全血伯叔父母
5 半血伯叔父母
6 生存配偶者

此所に全血 of the whole blood と云ふのは、兄弟姉妹又は伯叔父母の兩親共被相續人と血族關係を有する場合を云ひ、半血 c the half blood と云ふのは、兩親の一方のみ被相續人と血族關係を有する場合を云ふのである。

右の中、1乃至5に就いては均分主義、代位相續主義、成年又は婚姻を分配時期とするの原則、及び成文法上の信託

の原理の適用がある。

五　被相續人が生存配偶者及び右に列擧した血族を殘さなかつた場合には、遺產は無主財產 Bona vacantia として國家(クラウン)に歸屬する。但し國家は被相續人の血族たると否とを問はず、被相續人に依つて衣食して居つた者に遺產が殘されなかつた場合には、之に對して遺產の全部又は一部を與へることを得る。

三　寡婦の優遇

改正英國相續法を讀んで先づ眼につくのは生存配偶者の異常な優遇である。

改正前と雖英國の相續法は生存配偶者に薄いものではなかつた。此の點に關して英國に於ても、妻の特有財產の問題と共に幾多の變遷を經て居るのであるが、一九二六年の相續法改正以前に於る法律狀態は大體下の如くであつた。

一　夫が遺言をなさずして死亡したる場合に於ては、

1　妻は夫の持つて居つた不動產の三分の一の上に生涯用益權を得た。之は所謂 dower の權利である。

2　夫の動產に就ては直系卑屬ある場合と無き場合とを區別し、直系卑屬ある場合に於ては其三分の一、直系卑屬なき場合に於ては其半分を絕對に取得する。夫に相續をなすべき血族がない場合に於ても妻は之れ以上取得することは出來ない。從つて殘餘財產は國家に歸屬する。

3　直系卑屬なき場合に於て、夫の遺產が五百磅を超えない場合には全部妻に歸屬する。又遺產額が五百磅を超ゆる場合には、妻は遺產中より五百磅の支拂を受くる權利を有する。そして此の金額は不動產及動產の價格に應じて負擔せらるべきものとなつて居つた。（一八九〇年九月一日無遺言者遺產法第一條乃至第三條で認めらるるに至つた權利であ

る。）

二　妻が遺言をなさずして死亡したる場合に於ては、

1　夫は婚姻より生じた直系卑屬が生れたる事を條件として、——生存して居ると否とを問はない——妻の不動產の全部の上に用益權を有する。此の權利は所謂 Curtesy と稱せられるものである。

2　妻の動產に就ては、直系卑屬あると否とを問はず全部夫の有に歸する。

改正前の法律は大體以上の如くであつて、法規の內容は合理的であるよりも寧ろ沿革的であり、夫と妻との相續權に就て不合理なる區別を設けて居つた。然しながら實際上の結果に着眼するならば、英國法に於る生存配偶者の相續權は他の法制に比較して決して遜色ありしものと云ふことを得ないのであつた。相續の順位から着眼しても、生存配偶者は第一順位の相續權者として直系卑屬其他の親族に優先するし、又相續分に就ても決して少くはなかつた。改正相續法は大體に於て配偶者を相續の中心點とする思想を繼承し、夫と妻との間に存する沿革的な差別を撤廢して之を一層合理的な基礎の上に置き、且つ其相續分に就ても更に之を增大することを敢てした。

改正相續法のシステイムは生存配偶者の相續權を中心として組立てられて居る。此の點は歐洲大陸諸國の相續法に於て生存配偶者が直系卑屬と同一順位に置かれ、或は其一人分の相續分を得、或は又遺產の四分の一、三分の一等を相續するシステイムとは其趣を異にしてゐる。改正英國相續法に於ては、生存配偶者は直系卑屬、直系尊屬、其他の相續權者に優先して相續權を有し、所謂人的動產と千磅及其利息とは絕對に生存配偶者に歸屬するのであるが故に、小家族で家具と公債一萬圓位しかない樣な遺產に就ては生存配偶者が全部之を取得して、直系卑屬其他の親族は一切遺產の分配に與らないこととなる。

生存配偶者が受くる相續分も可成り大きな割合であると云はねばならない。家庭用の動産全部及千磅を絶對に相續する外、被相續人に直系卑屬ある場合には、遺産殘額の半分の上に生涯收益權を持ち、直系卑屬なき時は遺産殘額の全部に就て生涯收益權を持つ。又法定の相續人が無き場合には、全遺産は生存配偶者に歸屬する仕組みとなつて居るのであるから、生存配偶者の相續分は歐洲大陸諸國の生存配偶者相續分に比して著しく厚いものであると云はねばならぬ。生存配偶者が有する生涯收益權は一生涯の生活を保障することゝ、其死後當然他の相續權者の手に歸することは便利であるが、或場合には不便を來すことがないでもない。從て改正法は人的代表者に生存配偶者の生涯收益權を買取つて、金錢を以て之に代へる權限を認めて居る。

改正法は從來認められた dower 及 curtesy、即ち不動産に關して認められた生涯收益權及生存の夫に付ては全部、生存の妻に付ては三分の一乃至二分の一といふ動産に關する相續規定の區別を全廢した。之は動産不動産に關する法理を同一ならしめんとした、一九二六年實施に至つた不動産に關する五つの法律を通ずる大方針の一表現に過ぎないのであつて、之に依て封建的雰圍氣の裡に生れそして發達した法理を一掃したのである。

英國の改正相續法を眺めて我國に於る生存配偶者の相續法を顧る時に、我々は其處に著しきコントラストを見出さゞるを得ない。

我民法では家督相續と遺産相續とを分ち、

一　家督相續、即ち戸主たる夫の死亡の場合の相續に於ては、先夫たる戸主に、同一戸籍内に在る家族たる直系卑屬があれば之が獨りで家督相續人となり、寡婦は少しも先夫の財産を得ない。又戸主に法定家督相續人たるべき直系卑屬がない場合には、戸主が、生前の指定又は遺言に依て、誰でも家督相續人に指定することが出來る。此の場合寡婦が家督

る。)

三、妻が遺言をなさずして死亡したる場合に於ては、

1　夫は婚姻より生じたる直系卑屬が生れたる事を條件として、——生存して居ると否とを問はない——妻の不動產の全部の上に用益權を有する。此の權利は所謂 Curtesy と稱せられるものである。

2　妻の動產に就ては、直系卑屬あると否とを問はず全部夫の有に歸する。

改正前の法律は大體以上の如くであつて、法規の內容は合理的であるよりも寧ろ沿革的であり、夫と妻との相續權に就て不合理なる區別を設けて居つた。然しながら實際上の結果に着眼するならば、英國法に於る生存配偶者の相續權は他の法制に比較して決して遜色ありしものと云ふことを得ないのであつた。相續の順位から着眼しても、生存配偶者は第一順位の相續權者として直系卑屬其他の親族に優先するし、又相續分に就ても決して少くはなかつた。改正相續法は大體に於て配偶者を相續の中心點とする思想を繼承し、夫と妻との間に存する沿革的な差別を撤廢して之を一層合理的な基礎の上に置き、且つ其相續分に就ても更に之を增大することを敢てした。

改正相續法のシステイムは生存配偶者の相續權を中心として組立てられて居る。此の點は歐洲大陸諸國の相續法に於て生存配偶者が直系卑屬と同一順位に置かれ、或は其一人分の相續分を得、或は又遺產の四分の一、三分の一等を相續するシステイムとは其趣を異にしてゐる。改正英國相續法に於ては、生存配偶者は直系卑屬、直系尊屬、其他の相續權者に優先して相續權を有し、所謂人的動產と千磅及其利息とは絕對に生存配偶者に歸屬するのであるが故に、小家族で家具と公債一萬圓位しかない樣な遺產に就ては生存配偶者が全部之を取得して、直系卑屬其他の親族は一切遺產の分配に與らないこと丶なる。

生存配偶者が受くる相續分も可成り大きな割合であると云はねばならない。家庭用の動産全部及千磅を絕對に相續するの外、被相續人に直系卑屬ある場合には、遺産殘額の半分の上に生涯收益權を持ち、直系卑屬なき時は遺産殘額の全部に就て生涯收益權を持つ。又法定の相續人が無き場合には、全遺産は生存配偶者に歸屬する仕組みとなつて居るのであるから、生存配偶者の相續分は歐洲大陸諸國の生存配偶者相續分に比して著しく厚いものであると云はねばならぬ。生存配偶者が有する生涯收益權は一生涯の生活を保障することゝ、其死後當然他の相續權者の手に歸することは便利であるが、或場合には不便を來すことがないでもない。從て改正法は人的代表者に生存配偶者の生涯收益權を買取つて、金錢を以て之に代へる權限を認めて居る。

改正法は從來認められた dower 及 curtesy、即ち不動産に關して認められた生涯收益權及生存の夫に付ては全部、生存の妻に付ては三分の一乃至二分の一といふ動産に關する相續規定の區別を全廢した。之は動産不動産に關する法理を同一ならしめんとした、一九二六年實施に至つた不動産に關する五つの法律を通ずる大方針の一表現に過ぎないのであつて、之に依て封建的雰圍氣の裡に生れそして發達した法理を一掃したのである。

英國の改正相續法を眺めて我國に於る生存配偶者の相續法を顧る時に、我々は其處に著しきコントラストを見出さゞるを得ない。

我民法では家督相續と遺産相續とを分ち、

一　家督相續、即ち戶主たる夫の死亡の場合の相續に於ては、先夫たる戶主に、同一戶籍內に在る家族たる直系卑屬があれば之が獨りで家督相續人となり、寡婦は少しも先夫の財産を得ない。又戶主に法定家督相續人たるべき直系卑屬がない場合には、戶主が、生前の屆出又は遺言に依て、誰でも家督相續人に指定することが出來る。此の場合寡婦が家督

相續人に指定されるチャンスは有るのであるが、我國の風習として斯ることは極めて稀であると云はなければならない。戸主に直系卑屬たる家督相續人もなく、又戸主が家督相續人の指定をして置かなかつた場合には、民法では被相續人の父又は母、又は親族會をして(1)家女たる配偶者、(2)兄弟、(3)姉妹、(4)家女ならざる配偶者、(5)兄弟姉妹の直系卑屬の順序で、家族中から家督相續人を選定せしめることゝして居る。即ち先夫が入夫とか又は婿養子で其家の戸主となつたと云ふ場合には、寡婦たる家付の娘、即ち所謂家女は第一次に選定される權利があるが、寡婦が他家から入つた女である場合には、被相續人の兄弟姉妹の爲に優先されることになる。

若しも家督相續が單に家名相續に過ぎずして財産相續を必然的に伴はないものであるならば、右の如き規定は寡婦に取つて痛痒を感ぜしむることが極めて少いことであらう。然し乍ら我國に於る家督相續は必然的に財産相續を伴ひ、被相續人の財産全部は他の凡ての近親を排除して、獨占的に家督相續人に繼承せられるのであるが故に、此の場合に於る寡婦の地位は極めて不安である。

二、遺産相續、即ち家族たる夫が死んだ場合の相續の場合には、其特有財産の相續が行はれる。此の場合に於ては(1)直系卑屬、(2)配偶者、(3)直系尊屬、(4)戸主といふ順序で相續が行はれる。即ち配偶者は第二順位の遺産相續人として夫の全遺産を相續するのであり、且つ寡婦が相續人である場合には、遺留分として被相續人の遺産の三分の一は得られることになつて居る。

以上遺産相續の中、直系尊屬や、戸主や兄弟姉妹（全然相續權がない）に先だゝしめて寡婦に遺産を獨占せしめる樣にしたのは一大英斷であらう。然しながら家督相續、遺産相續を通じて直系卑屬ある場合に、全然遺産を寡婦に與へないのは頗る酷である。元來遺産の問題に就て圓滿に解決がつかない場合に、相續權といふ權利の問題で爭が起るので

ある。子が未亡人を充分に世話するといふ古來の美風は、其子が先妻の子であり、又は養子である場合には必ずしも守られないのであつて、斯る場合に於て寡婦は直系卑屬として、或は又家族として扶養を請求し得るのではあるが、斯る扶養は單に生活の必要限度を保障するに止り、且つ扶養を請求し得る權利は單に債權的な性質を有し、必竟訴訟及强制執行の手段を經なければ實現出來ないのであるし、又相續人が財産を蕩盡して無資力になつてしまつた場合に於ては結局實現し得ないことになる。

之を要するに英國の改正相續法と我國の現行民法とを對比する時に、寡婦の財産的保護に於ては極端と極端とを示して居るかのやうに思はれる。我國の寡婦は戸主權に依て統一せらるゝ家の相續の觀念と、子を第一に置く思想との爲に著しく不利益なる地位に置かれて居る。之に反し英國に於る寡婦の地位は直系卑屬に優先し、其他の近親者に優先し、第一位の相續人として遺産を繼承するのである。直系卑屬其他近親への遺産分配は、生存配偶者の需要が充分に滿されたる後初めて行はれる趣旨となつて居る。歐洲大陸諸國の相續法は此の兩極端の中間に位するものであつて、寡婦は直系卑屬と共に遺産の一部分を受くる制度となつて居る。

我國に於る寡婦の相續權が薄きに過ぐることは幾度か我國の學者に依り論じられ、判決例の結果に依り示され、又世上幾多の悲劇的事實に依て論證されつくされて居る。何等かの改正が加へられなければならぬことは既に輿論の趨向である。英國の改正相續法は、此點より着眼すれば最も進歩せる立法であると云ふことを得よう。然しながら我國の輿論は未だ此の程度迄は進んでは居らない。從て改正は恐らく直系卑屬其他の相續人と共に幾分の相續分を認むるといふ歐大陸に於る寡婦相續權の例に倣ふ程度に於て行はれることであらう。

然し兎に角、英國の此の相續法は我々をして強く此の問題を考へしめずには止まない。

四　長子相續主義の廢止

次に、改正英國相續法は斷然長子相續主義と男子及び男系優先主義とを放棄した。

ジエレミー・ベンタムは一八二六年ウエストミンスター リヴユーに投書した「私權に關する法律―ハンフリー氏不動産法典註釋」Law as to Civil Rights. Comment-ry on Mr. Humphrey's Real Property Code と云ふ論文の中で、「家督相續人 Heir-at-law は考古學協會にお任せすべきである Abandoned to the Society of Antiquaries」と喝破した。ベンタムの意は無遺言相續の場合に於て、長子(其他の法定相續人)が獨占的に被相續人の不動産を繼承するといふことは、當時の時勢に於て既に時代錯誤であることを示さんとしたのである。一八二六年に爲されたベンタムのこの豫言が、丁度百年を經過した一九二六年から實現するに至つたことは頗る趣味あることであると云はねばならぬ。

ベンタムが此の論文を書いた頃に於ては、尚長子相續制を維持することが英國の貴族制度を維持するに必要であるといふ議論が相當に有力であつたやうに見える。一九一九年不動産改正委員會の第一報告書の中には、下のやうな文句が見出される。

「遺言處分なき場合に於ては、土地の全部は息子其他の男子相續人に移轉する。之は長子相續主義と呼ばれるものであるが、長子相續主義の方が之と反對な均分主義よりも英國の組織及慣習に遙かに適應するやうである。もしも英國が均分相續法を採用するならば、數代にして英國の貴族制度は破壞せられ、土地の際限なき分割を惹起し、畢竟、農業に不利益であり國家の利益を害するに違ない。」

右の委員會の主張する所論は、英國の貴族制度を維持してゆくといふことが英國の一般的の福利であるといふことを

前提として組立てられて居る。然るに一九七八年、英國の法律史家として令名あるフレデリック・メートランド、が同じくウエスタミンスター・リヴユーに執筆した不動産法Law of Real Propertyと云ふ論文に於て此と同じ問題を論ずるに當つて、長子相續制維持論者にして現行社會秩序を維持するに長子相續制が必要であるといふ議論を眞面目に主張す者はないといふことを前提して改正論が進められて居る。彼は下の如くに說いて居る。

『長子相續の維持論者が、長子相續制の存在は我現行社會秩序の維持に取つて必要である。長子相續人は國家、教會其他の制度の柱石である土眞面目に主張する者があるならば、我々は（皮肉ではあるが）長子相續を中心となす法律組織其ものが、改造に依て一層要へ得べきものとなし得るのではないかを考究せねばならぬであらう。然し斯くの如き主張をなす者はない。長子相續制維持論者は、土地有所者で遺言をなさずして死ぬ者は殆どないのであるから畢竟長子相續の問題は小問題であるといふ。そしてこれが彼等の好んでなす辯明である。之に對して我々は斯う答へる。否、弊害は決して少きものではない。「長子相續人」の爲に我法律學の全體を混亂に陷れ、婦人を男子よりも後らせんがために、又何人も作る事を好まない遺言を作る爲に、我々は我々の法律を專門家以外の人に分らないものとして仕舞ふ。」と

メートランドは、長子相續制あるが爲に英國の財產法を混亂せしめると云ふ法律技術的な着眼點よりして、長子相續制へ向けて攻擊を加へて居るのであるが、然し一八二九年動產改正委員の第一報告が示した論點、即ち長子相續制は貴族制度を維持するに必要だといふ論點を殆ど一顧の値なしとしたのは、當時の時代思潮が此の點に於て一大變化を來したのであることを示すものであると云はねばならぬ。此の制度が一九二六年に至る迄維持せられたることは、英國民の保守的であると云ふ理由以外に求むることを得ないであらう。

之を要するに、長子相續制及之と密接なる關係を有する男子優先主義は、軍事上其他の義務が貴族又は家長にのみ課

せられる封建制度の下に於ては、一種の合理性を其の中に包藏するものであると云ふことを得る。然しながら封建制度が破れ、凡ての人が法律の前に平等に取扱はれ、均しく權利の主體となり義務の主體となる現代の社會に於ては、到底之を維持することは不公平なる結果を來たさざることを得ないのである。

改正前の英國相續法に於る家督相續人の地位も、我國に於ける家督相續人程財産獨占の地位にはなかつた。我國に於ては無遺言相續の場合には動産たるとを問はす、被相續人の所有して居つた全部の財産が家督相續人に歸屬するのであるが、英國に於ては家督相續人が單獨に相續し得る財産の範圍は不動産に限られ、動産に就ては均分制度が行はれて居つたのである。かく動産と不動産とに依て相續規定に區別が生じたのは、動産に關する相續は永く宗教裁判所の管轄に屬し、不動産に就てのみ國王裁判所（キングスコート）の管轄に屬して居つたといふ沿革的な理由に基くのである。斯る理由よりして動産相續法はローマ法の影響をうけて極めて近代式であつたに拘らず、不動産相續法は封建的色彩を多分に其儘殘して居つたのである。左に其大要を述べて置かう。

不動産に就ては所謂家督相續人Heir-at-lawが其の全部を取得する――生存配偶者の權利を除き――ので、誰が家督相續人であるかを見出すことに就て封建的な規則、即ち長子相續制及男子、男系優先主義に基く煩瑣なる規則が存して居つた。即ち、

一　不動産相續は最後の不動産取得者を起點として家督相續人を求むる。即ち起點は必ずしも被相續人ではなくして、最後の取得者 last Purchaser である。此處に取得者Purchaserと云ふのは、相續人に依らずして不動産を取得したる人を云ふのである。

二　不動産は最後取得者の直系卑屬に移轉する。そして男子は女子に優先し、又數人の同一親等の男女在る場合には

最年長の男子が優先する。若し男子たる直系卑屬なき時は、同一親等に在る女子たる直系卑屬が土地を平等に共有者として受くる。

三　生存する直系卑屬は其子孫を排除する。然し死亡した直系卑屬の子孫は之に代位する。

四　取得者に直系卑屬なき場合には、直系尊屬の間より家督相續人を見出さねばならぬ。此の場合に於て、父及び其子孫及其祖先は、母及び其子孫及祖先に優先する。より遠き男子たる直系尊屬及其子孫は、より近き男子たる直系尊屬及其子孫に依て排除せられる。然しより遠き男子たる祖先の母及其子孫は、より近き男子たる祖先の母及其子孫に優先する。

五　半血々族關係に立つ者は、共同祖先が男子たる場合には、全血親族の後、共同祖先が女子たる場合には、女子たる共同始祖に次いで家督相續人となる。

六　取得者より起算して家督相續人を見出すことが出來ない場合には、最後の不動産權利者を起點として再び如上の如き順序で家督相續人を求めるのである。

以上は土地所有權に關する規則であるが、此の外他の種の不動産物權に就て特則がある。

以上の如く改正英國相續法以前の相續規則は極めて煩瑣であり、專門家が多くの時間を費して之を研究したければ之を明らかにする事が困難であり、一般人には之を理解し得ざる程の規則である。然し此の煩瑣なる規則を貫く原則は、長子相續主義と男子及男系優先主義であると概言する事を得る。

動産に就いては右の如き煩瑣なる規定はなく、極めて分り易き相續規定である。即ち被相續人の血族は生存配偶者の相續權を除き、下の順序に於て相續をする。

一　遺産は長幼男女を問はず被相續人の子の間に均分せらるゝ。子が被相續人に先だつて死亡したる場合には、孫が其子の相續分を繼承する。

二　被相續人に直系卑屬なき時は、被相續人の父が全遺産を繼承する。

三　父が死亡したる時は、遺産は兄弟姉妹及母の間に均分せられる。死亡したる兄弟姉妹の子は兄弟姉妹に代位する。半血兄弟姉妹は全血兄弟姉妹と同一相續分を取得する。右の相續人なき時は、遺産は其他の近親の間に分配せらるゝ。此の場合、近き血族は遠き血族を排除する。數人が親等を同じうする場合には、父の血族たると母の血族たるとを問はず、又全血たると半血たるとを問はず遺産は其間に均分せられる。又、兄弟姉妹より遠き血族に就ては代位相續を認めぬ。

以上の如く、動産に關する相續規定は大體に於て簡明であり、且父に過大なる權利を與へる外均分主義を貫くものであつて、頗る近代的であつた。從て改正論者の間には、不動産に關する相續法を動産法と同一にすべしと云ふ議論が多かつたのであるが、今回の改正は更に一歩を進めて、男女長幼を問はず、同一親等に在る者の間に均分することを徹底せしめた簡明なる規定を、動産、不動産に通じて適用することゝしたのである。

顧つて我國に於る長子相續制に就て一瞥を與へよう。

我國に於る家督相續人が、ベンタムの云ふやうに「考古學會にお任せする」時代はまた程遠いやうに見える。

我國に於ては家の存續を可能ならしめ、之に便宜を與へんが爲に、從來の英國法と等しく長子相續主義に基いた家督相續を認め、被相續人の財産全部を家督相續人が繼承することにして居る。而も英國に於て廣大なる範圍に於る生存配偶者の權利及動産に關する均分主義を認めるに反し、我國に於ては生存配偶者の要請を無視し、動産と不動産とに拘ら

ず、一切長子が之を繼承することになつて居る。斯る相續法は、所謂家を存續する精神よりすれば極めて合理的なる制度であると云はねばならぬ。

然し乍ら、家督相續制度が是認せらるゝ前提要件は、所謂「家の存續」が可能であるか、「家の存續」が望ましきものであるかの問題に依て定つて來る。

封建時代に於ては、家長に依て支配せられた家の子郎黨が、平・戰共に重要なる社會的の單位として意義深きものであつたことは勿論である。然し乍ら現在の如く職業の自由と個人所有權とが認められ、他面に於て國家の職能が擴大した社會に於ては、民法の豫定する戶主に依て統一せられたる家族と云ふ意義に於る家の存續は頗る困難となつた。現在に於ては多くの場合に於て、「家」よりも寧ろ「家庭」が社會的の單位となつて來て居ることは殆ど疑の余地を許さない。又經濟上の變化のみならず、帝國憲法が「信教の自由」を認めたことは、舊來の意義に於ける家の存續を困難ならしめた有力な原因を爲す。家の存續の背後には、祖先祭祀を斷たないといふ考を潜在して居つた。然るに此の思想は今尙我國に於て相當な勢力を有するのであるが、祖先崇拜は宗教的な色彩が濃い爲に、之を否認する者も蓋し少しとしない。そして祖先崇拜を否認して別個の宗教を信ずることは、恐らく帝國憲法の保障したる信教の自由の中に含まれるであらう。憲法上の權利の問題は之を別とし、祖先崇拜の思想が多くの人の心に訴へないやうになつて來たことも事實である。そして之は、舊來の意義に於ける家を崩壞せしめる一要因であると云はねばならぬ。

斯くの如く一面に於て、個人の精神的及經濟的覺醒と國家機能の發達とは、封建的の家の存續を著しく困難ならしめる有力なる原因をなして居る。從て從來の意義に於る家を强制的に存續せしむることは一面に於て著しく個人の人格を無視すると共に、他面に於て國權に對する反逆の傾向を誘起する。そして、現在の實情としても、民法が規定したるが

如き家は脫け殼の家となつて來て居る。それは單に戸籍上の家となり、國民の實生活には何ら緣の遠いものとなつて來て居る。國民の生活は民法の規定する家よりも遙に小さな「家庭」を中心として動いて來て居る。

右の現象に對して之を憂慮するものは我國の淳風美俗の精神に立返つて、此の個人主義的な外來の惡思想を覆さんと試みて居る。從て例へば家庭の維持に關する戸主の義務等を課することに依て、古來の家族制度を維持せんと主張する者もある。之に對し他の人達は此の推移を寧ろ樂觀して、家庭生活を中心とする制度の方が一層妥當なるものであると考へて居る。斯くの如く二種の家族制度觀が對立して居るのは、其背後に於て既に民法上の家と社會生活の中心をなす家庭との離隔を來して居ることを示すものである。又現在に於ても所謂「位牌爭ひ」なるものが訴訟に現れることがあるのは、外形上祖先祭祀の念が未だ盛であることを示すやうではあるが、此の種の事件に於て多くの場合は其實質に於て「資産爭ひ」であつて、單純なる「位牌爭ひ」ではない。それは移りゆく家族制度の消息を雄辯に物語る事實である。

斯る狀態に在る我國としては、先に述べた一八二九年英國不動産改正委員會の第一報告に示された「長子相續制は英國の貴族制度を維持するに必要であるが故に、均分主義を採用することは英國の福利に反するものである」とした考に類似する思想、即ち長子相續制は我國の淳風美俗である家族制度を維持するに必要缺くべからざる施設である。均分主義を採用するが如きは徒らに外國制度の模倣であつて、我國の國情に合せず、我家族制度を破壞するものであるが故に、極力排除すべきものであると云ふ思想が相當に根强く勢力を得て居ることを發見する。

以上の如き理由からして、我國で現代思想家の間には此の點に就き三つの潮流が流れて居ると見られる。即ち

一　長子相續制度は我國の淳風美俗たる家族制度維持の爲に必要缺くべからざるものであるが故に、之を存續しなければならない。均分制度の如きは西洋個人主義の國に於る制度であつて、我國に於て之を採用するが如きは到底不可

能のことに屬する。

二　長子相續制は封建制度の遺風であつて、現代に於ては維持すべき理由を失つたものである。現代の社會は、家の維持よりも寧ろ家庭の維持を必要とする。完全なる家庭が社會生活の基礎にすることが望ましい。此の目的を達成せんが爲には、遺産はなるべく廣き範圍内に於て分配せられることが必要である。此の點から見て、我相續法も又長子相續制より均分相續制に遷るを可とする。それが社會生活並に國家生活の健全なる發達の爲に必要であるばかりでなく、諸子の間の經濟的正義に合致する。

三　相續制は有産階級の財産問題で、これが長子相續制度にならうと、均分制度にならうと無産階級には無關渉の事柄である。出來るなら相續財産は全部國庫に歸屬せしめたい。然し、それが當分不可能であるならば、むしろ、長子相續制の方をとる。ドクター・ジョンソンの云ふ樣に「長子相續は馬鹿者を一人丈で濟ませる」効果がある。それ許りでなく均分制度になると、プティ・ブルジョアが殖えて……………に事面倒になつて來る。米國の如きは其顯著な例である。むしろロシヤのやうに長子相續制度が行はれて、財産が少數人の手に……………………

……………………。

我國に於る長子相續制度に關する思想は、以上の如き極端から極端に走つて居るが、第一説と第三説とは出發點を異にして結論を同うするものである。然しながら、家庭制度に關する社會的變遷の事實は、第一説を採る者も第二説中に、ある或限度迄の合理性を否認することが出來なくなつて來た。從て近き將來に於て達成せらるべき我國相續法の改正は、寡婦及次男以下の子供の要請に、或程度迄の讓歩をなした第一説の採用と云ふ結果になるであらう。

五　相續權者の範圍縮少

第三に改正英國相續法が達成した改革は相續權者の範圍を限定した點である。

元來相續法の基礎觀念は(1)祭祀の繼續又は封建的義務の履行を目的とした家の存續、(2)血族關係、(3)被相續人の扶養義務の延長の三つを其主たるものとする。そして個人主義の財產制度が確立するに至つた後に於ては、第二の思想が殊に各國の相續法に於て高調せられた。血緣關係のある者の中に於ても、被相續人の直系卑屬及其兩親が、被相續人の財產を相續することは當然なことゝして多く爭はれない。然しながら傍系の血緣者、殊に被相續人が平常交際もせず、又は顏も見知らないと云ふ遠い血緣者が被相續人の財產を相續することの不合理であると云ふことは、屢々論じられたところである。商店の番子が、遠い親戚が死んだ爲に忽ちにして百萬長者となると云ふやうな例が西洋では屢々新聞に傳へられ、又小說の題材に使用せられるところである。斯くの如き相續人を獨逸人は「笑ふ相續人（デア・ラッヘンデ・エアベ）」と呼んで居る。我國に於ても斯くの如き事例が時々新聞などに傳へられる。斯くの如き場合に於て、被相續人の愛情と云ふ方面から見ても、むしろ其住んで居つた市、町、村乃至國家の方が餘程親みがあるとも云へよう。從て斯くの如き遠い血緣者を相續權者とすることなく、むしろ國家又は市、町、村に遺產を歸屬せしめることが適當であると云ふ意見は屢々述べられたところである。

英國に於てもジエレミー・ベンタムは其「私法原理」に於て模範的相續規則を論ずるに當つて、兄弟姉妹及其子孫以外の傍系の血緣者及祖父母の相續權を否認し、斯る場合に於ては國家に遺產を歸屬せしめることを提議して居る。又ジョン・スチュワート・ミルは其「經濟學論理」に於て同じ問題を論ずるに當つてベンタムの意見に大體贊成して居るが、彼

は更に進んで傍系の血族には何等の相續權を認るべきでないとし、直系尊屬又は直系卑屬を持たない人の財產は國家に歸屬すべきであると說いたのであつた。然るに、今囘の英國相續法の改正はミルの論が採用せられなかつたのは勿論、ベンタムの意見の程度迄も行かなかつた。然しながら從來の如く苟くも被相續人と血緣ある者が存する以上は、其距離が如何に遠くとも之に相續權を認ると云ふ主義を廢棄し、直系尊屬及傍系の血緣者の中では兄弟姉妹及其子孫、祖父母、伯叔父母及其子孫を其限度とするに至つた。そして以上の血緣者なき場合には、遺產は無主財產として國家に歸屬することゝしたのである。

此等の問題を論議する場合に於て、相續權者の範圍問題は論者が個人主義的思想に傾くか、或は又、社會主義的思想に傾くかに依て其結論を異にするのであることは云ふまでもない。例へばフランスのサン・シモンの弟子バザールは被相續人の財產は全部之を國家が沒收し、其財產を最もよく利用し得べき人に與ふべきであるとした。彼は、財產の所有權は公職の如きものであつて、恰も公職は最も適任者を之に與ふべきであつて世襲たるべきではないと等しく、財產も又子々孫々之を傳ふべきものではなくして、最もよく之を利用し得べき人に與ふることが當然であるとして居る。又アントン・メンガーは其「新國家論」に於て下の如く述べて居る。

「民衆的勞働國家に於ては相續權に徹底的制限を加へることによつて、疑もなく我が今日の法律狀態の最も暗黑なる陰影面が除去せられるであらう。何となれば、功績と報賞との相互關係を根本的に否認し、人間の運命の經過を偶然なる家系の犧牲とすること、正にこの相續權の如く甚しき制度はないからである。

この制度を擁護する者は勿論曰ふであらう。親の活動は、その子の給養を慮ることによつて高められること非常に大であると。去りながら現に目擊する所はこの反對を證明するものではないか？社會にて正に最も活動的の階級たる賃銀

勞働者、學者、藝術家、官吏、軍人等か報酬を受くるはその生存中のみ。最もうまく行つて、その寡婦と孤子とに僅かばかりの扶助が行はれるに過ぎないではないか？唯經濟的企業家のみが土地資本の獲得によつて、その子孫に末長く不勞所得を保證し得るといふ境遇にある。されぱゲーテの如き偉人の子孫も甚だみぢめな境遇にある一方、運のよい靴墨製造人の子孫等も悧巧に儉約にやれば、幾百年の間には、勞働知らず心配知らずの生活を爲し得る、といふやうな不思議な現象が起るのである。個人が得た財産を所有し享樂することを、その生存中のみ保證する社會制度にして容易に實行し得るものを打ち建てることが可能であるならば、下層階級はかくの如き提案を拒絶することは殆どなからう。か今日の形に於る相續權の友となることは、いつ迄經つても決してなからう。（河村又介氏譯—アントン・メンガー新國家論一二八—九參照）—

以上の如き社會主義的思想家に依れば、死者の財産は原則として國家が繼承すべきものであるといふ結論を導き出すものであつて、この理論は勞農ロシヤの民法典の相續權に關する規定に實現されて居る。即ちそれは左の通りである。

四百十六條　次條以下の規定に從ひ法律及遺言に基き死者の全債務を控除したる殘餘財産價格一萬金ルーブルを超えさる限度に於て相續をなすことを得

註　國家機關と個人との間に締結せられたる契約（租借・利權・工作地上權等に關するもの）に基く權利は契約期間内本條に定めたる制限額に拘らず、相續手續に準據し法律及遺言に基き移轉するものとす。

四百十七條　相續財産の總額が一萬金ルーブルを超ゆる場合には國家を代表する財務部及其機關と法律及遺言に基き相續權を有する個人との間に於て相續財産を分割又は清算し制限額を超ゆる部分を利害關係を有する國家機關に與ふるものとす

相續財産の分割が其組成するものゝ性質により經濟上不利益にして且不適當なる場合には國家機關と個人との間に共同占有をなし若しくは國家の利益上支障なき時は當該部分を國家又は個人に於て買收するの權利を設定することを得

四百十八條　四百十六條に規定したる二個の根據に基き相續權を有する者は死者の直系卑屬（子、孫、曾孫）、及生存配偶者並に死者の死亡前一個年以上事實上全然死者により扶養せられ居たる勞働能力なく且資産なき者に限る。

註　相續人たることを得る者は被相續人の死亡の當時生存する者及被相續人の生前懷胎せられ其死亡後生れたる子に限る

四百十九條　遺言によりて變更せられざる限り凡て四百十六條に規定したる範圍內に於て法定相續が開始せられる

四百廿條　法定相續の場合に於ては相續財産は四百十八條に揭げたる凡てのものゝ間に人數に應じ平等に分割す

四百廿一條　四百十八條に揭げたるものゝ中死亡者と共に生活しゐたるものは奢侈品を除く家庭の日常生活の財産に就きては之を四百十六條の制限額中に加へずして相續することを得

以上の諸條文に依て明かであるが如く共産主義を國是とする勞農ロシヤに於ては、血族及近親の間に分配せらるべき遺産の額は、一萬金ルーブルに限られ、且死者と共同生活をして居つた者は、奢侈品以外の家庭用の財産を右の額に加算せずして、相續をなすことを得るのみであるが故に、遺産の大部分は國家に歸屬することゝなる。又相續權者の範圍も極めて極限せられたるものであつて、傍系の血族を包含せざるは勿論、直系尊屬をも包含して居らない。只之等のものは、四百十八條に所謂「死者の死亡前、一個年以上事實上全然死者により扶養せられ居たる勞働能力なく資産なきもの」である場合には相續權を有する者となるだけである。

遺産の國家歸屬の範圍は、ロシヤ民法に於いて、最も極端に社會主義思想家の諸說が實現せられて居るのである。然

勞働者、學者、藝術家、官吏、軍人等が報酬を受くるはその生存中のみ。最もうまく行つて、その寡婦と孤子とに僅かばかりの扶助が行はれるに過ぎないではないか？唯經濟的企業家のみが土地資本の獲得によつて、その子孫に末長く不勞所得を保證し得るといふ境遇にある。さればゲーテの如き偉人の子孫も甚だみぢめな境遇にある一方、運のよい靴製造人の子孫等も悧巧に儉約にやれば、幾百年の間には、勞働知らず心配知らずの生活を爲し得る、といふやうな不思議な現象が起るのである。個人が得た財産を所有し享樂することを、その生存中のみ保證する社會制度にして容易に實行し得るものを打ち建てることが可能であるならば、下層階級はかくの如き提案を拒絶することは殆どなからう。か今日の形に於る相續權の友となることは、いつ迄經つても決してなからう。(河村又介氏譯ーアントン・メンガー新國家論一二八ー九參照)ー

以上の如き社會主義的思想家に依れば、死者の財産は原則として國家が繼承すべきものであるといふ結論を導き出すものであつて、この理論は勞農ロシヤの民法典の相續權に關する規定に實現されて居る。即ちそれは左の通りである。

四百十六條　次條以下の規定に從ひ法律及遺言に基き死者の全債務を控除したる殘餘財産價格一萬金ルーブルを超えざる限度に於て相續をなすことを得

註　國家機關と個人との間に締結せられたる契約（租借・利權・工作地上權等に關するもの）に基く權利は契約期間内本條に定めたる制限額に拘らず、相續手續に準據し法律及遺言に基き移轉するものとす。

四百十七條　相續財產の總額が一萬金ルーブルを超ゆる場合には國家を代表する財務部及其機關と法律及遺言に基き相續權を有する個人との間に於て相續財産を分割又は清算し制限額を超ゆる部分を利害關係を有する國家機關に與ふるものとす

相續財産の分割が共組成するものゝ性質により經濟上不利益にして且不適當なる場合には國家機關と個人との間に共同占有をなし若しくは國家の利益上支障なき時は當該部分を國家又は個人に於て買收するの權利を設定することを得

四百十八條　四百十六條に規定したる二個の根據に基き相續權を有する者は死者の直系卑屬（子、孫、曾孫）、及生存配偶者並に死者の死亡前一個年以上事實上全然死者により扶養せられ居たる勞働能力なく且資産なき者に限る。

註　相續人たることを得る者は被相續人の死亡の當時生存する者及被相續人の生前懷胎せられ其死亡後生れたる子に限る

四百十九條　遺言によりて變更せられざる限り凡て四百十六條に規定したる範圍内に於て法定相續が開始せられる

四百廿條　法定相續の場合に於ては相續財産は四百十八條に揭げたる凡てのものゝ間に人數に應じ平等に分割す

四百廿一條　四百十八條に揭げたるものゝ中死亡者と共に生活しゐたるものは奢侈品を除く家庭の日常生活の財産に就きては之を四百十六條の制限額中に加へずして相續することを得

以上の諸條文に依て明かであるが如く共産主義を國是とする勞農ロシヤに於ては、血族及近親の間に分配せらるべき遺産の額は、一萬金ルーブルに限られ、只死者と共同生活をして居つた者は、奢侈品以外の家庭用の財産を右の額に加算せずして、相續をなすことを得るのみであるが故に、遺産の大部分は國家に歸屬することゝなる。又相續權者の範圍も極めて極限せられたるものであつて、傍系の血族を包含せざるは勿論、直系尊屬をも包含して居らない。只之等のものは、四百十八條に所謂「死者の死亡前、一個年以上事實上全然死者により扶養せられ居たる勞働能力なく資産なきもの」である場合には相續權を有する者となるだけである。

遺産の國家歸屬の範圍は、ロシヤ民法に於いて、最も極端に社會主義思想家の諸說が實現せられて居るのである。然

し傍系の血族、殊に遠い傍系の血族よりもむしろ國家を優先せしむべしと云ふ議論は、ベンタムの如き個人主義的思想家も又之に一致するものであつて、個人主義的見地よりするも國家を優先せしめることが一層合理的であるやうに考へられて居る。改正英國相續法は、此の點に於て極めて徹温的ではあるが、所謂傍系相續に斧鉞を加へたものである。但し遺産が國家に歸屬する場合被相續人の血族たると否とを問はず、被相續人に依て衣食して居つた者に遺産が殘されたかつた場合には、之に對して國家は遺産の全部又は一部を與へることを得ることになつて居るが故に、此の規定によつて間接に傍系の血族で被相續人の世話になつて居つた者には遺産を受くる機會が殘されて居る。

我國では家族の死亡したる際に起る遺産相續に就ては、被相續人の直系卑屬なき場合には(1)配偶者、(2)直系尊屬、(3)戸主の順序で相續が行はれ、而も直系尊屬に就ては所謂代位相續を認めないのであるが故に、「笑ふ相續人」の發生する機會は少い。又兄弟姉妹をも相續權者として認めて居らない。只最後に戸主を相續權者として認めて居るが故に、遺産が國庫に歸屬すると云ふ機會はないわけである。之に反して戸主の死亡に依て起る家督相續の場合には、家の存續と云ふ思想の上からして屢々「笑ふ相續人」の現象が發生する。即ち法定の家督相續人たる直系卑屬も又被相續人の指定した指定の家督相續人も無い場合に於ては原則として、(1)家女なる配偶者、(2)兄弟、(3)姉妹、(4)家女ならざる配偶者、(5)兄弟姉妹の直系卑屬の中から所謂選定相續人が選ばれ、又右に列擧の者がない場合には直系尊屬の中最も親等の近い者が相續人となり、更に直系尊屬もない場合には、被相續人の親族、家族、分家の戸主又は本家若しくは分家の家族中から選定家族相續人が選ばれるのである。從て被相續人とは頗る緣の遠い者が其財産全部を承繼して、「笑ふ相續人」となる場合が可成り多い。しかも此等の者も無い場合には「他人」の中から家督相續人を選定することになつて居るので、最も極端な形で「笑ふ相續人」を生ずる機會が與へられて居る。此の程度まで、所謂「家」を保存する必要が現代

の如き家庭本位に推移しつゝある日本の社會として必要であるかと云ふことは甚だ疑はれて居るところである。此の點から見て、改正英國相續法に於ける相續權者の制限は我國としても考究に値するものである。

六　遺言自由の原則及び家産設定の慣行

改正英國相續法の規定する法定相續の規則は、大體以上の如くである。然し之に關聯して、私は英國に存する遺言自由の原則と家産設定の慣習とを之に關聯せしめて考察せねばならぬ。

英國に於ては完全なる遺言自由 Liberty of Testation の原則が行はれて居る。日本では所謂遺留分制度なるものが存し、家督相續に就ては法定家督相續人たる直系卑屬は被相續人の財産の半額、其他の家督相續人は三分の一、又遺産相續に就ては遺産相續人たる直系卑屬は被相續人の財産の半額、遺産相續人たる配偶者及直系尊屬は三分の一を遺留分として受くることになつて居る。この遺留分は、被相續人が遺言に依て自由に處分することを得ざる部分である。此の種の制度はローマ法の傳統に基き、歐大陸諸國並にスコツトランドに行はれて居る。又北米合衆國に於ては、社會政策的見地よりして、所謂「差押ゆ可からざる物件」に關する原理の擴張として、ホーム、ステツド、其他の物件を當然寡婦及未成年の子に行くものであるとし、遺言の自由を制限して居るところもある。然るに英國に於ては、遺贈をなすの自由は財産權に伴ふ當然の權利として何等の制限を受けて居らない。勿論歴史的に觀察する時は、英國に於ても又土地に就ては全然遺言を許さず、動産に就ては、妻子有る場合に於ては三分の一に付てのみ遺言を許すといふやうな時代もあつたのであるが、近代英國に於ては斯る制限は一切除去せられて、完全なる遺言自由の原則が確立するに到つたのである。そして此の點は他の法制に對する英國法の一大特色をなしたのであつた。

英國民の間には他の國民に比して遺言を爲す慣習が殊に廣く行はれて居る。我國に於ては或は病床に一家族を集め教訓を與へ後事を託し、或は又遺言狀を作成して、其中に子女の人事關係等に就て命令を與へるやうなことはするけれども、此等は遺言の法定要件を欠くので、法律上正式の遺言にはなつて居らない。然るに英國民には、遺言を作る慣習が深く其國民生活に織り込まれて居るやうである。其原因は、一面宗教上の關係からして財産——動産の一部を教會に與へて死後の冥福を祈つて貰ふと云ふ慣習が昔から存し、從て遺言を作らないで死亡するのは一の罪悪であると云ふ考が存して居つたことも一因であらう。又「私法自治」の精神、即ち自己の財産に關する事項に就ては自ら計畫を立てゝ行くといふ精神、即ち英國民の自治の觀念の一方面たる私法自治心も此の習慣を誘起する一因をなすのであらう。然し又他面に於ては、英國の相續法が極めて時代精神に合しない封建的なものであつたといふことも、此の私法自治心を働かしめなければならない誘因をなしたのではないかと思はれる。

兎に角廣汎なる範圍に於て認められたる遺贈自由の原理は、封建的な相續法を排除する意味で屢々利用せられたのである。英國改正相續法は此等の遺言の大多數に現れた遺贈者の意志表示を參照して制定せられたるものであるとも云へるのである。又英國に於て、所謂私生子問題が歐洲大陸諸國に於るが如く喧しく論じられないのは、遺贈の自由に依て多くの場合私生子に對する保護が自發的になされておつたからであらう。

改正英國相續法は英法の特色である此の遺言自由の原則に對しては一指をも染めなかつた。

從て一面に於て大多數の人は、法定相續で差支ないといふ理由により、遺言をなす必要を感しないやうになるかも知れない。又舊來の家の存續を希望する少數の人は、この自由を利用して長子相續權を遺言に依て設定するものもあらう。或は又改正せられたる相續規定も既に舊式であるとし、異つた相續方法を遺言の中に規定することもあらう。此の

廣汎なる範圍に於て認められたる遺言の自由が如何に運用せらるゝかは將來の問題であつて、時代思潮の變遷と共に其內容を異にして來るであらう。斯くして又新しき相續法への材料を提供するに至るであらう。

相續に關して遺言と同時に考へなければならないのは所謂家産設定の慣習である。此の慣習は貴族其他の有産者の間に廣く行はれて居るところであつて、土地其他の財産を永く子々孫々に傳へんとする仕組である。其方法にも種々あつて、之を詳說することは余りに專門的になるから此處には省略するが、畢竟長子制度を骨子とし、生存配偶者に生涯收益權 Jointure 、長男以外の子供には一定の金額 Portions を與へ、土地は長子に傳つて行く仕組に出來て居る。

改正英國相續法は家産設定に關する法理の技術的方面に於ては修正を施して居るけれども、此の制度其物には何等の斧鉞を加へなかつたのであるが故に、當分の間大地主の土地が改正相續法に依て細分せらるゝ見込は少ないものであると云ふべきであらう。しかし、此の制度に依て土地を子々孫々長子に傳へて行く趣旨を貫徹する爲には、各相續人毎に家産設定を革新すること Resettlement を必要とすることになつて居るからして、相續人の思想が變化して來て家産尊重の貴族的精神が失はるゝに於ては、此の制度も亦廢頽に了るであらう。然しそれは將來の問題である。

七　英國相續法の將來

改正英國相續法は、或意味に於て、ジエレミー・ベンタムの提議の實現したものであると云へる。ベンタムの提議は、當時にあつては、野に叫ぶ豫言者の聲として一般から顧みられず、又權力者より嫌惡されたのであらう。そして保守的な英國に於ては百年を經過して初めて、この豫言者の提議が實現せらるゝに至つたのである。

現在の英國に於て青年學徒の思想に相當強き影響を與へて居るものと見る可きロンドン大學政治學の教授のハロルド

●ラスキーが、一九二五年即ち改正英國相續法が實施せらるゝ前年に於て公けにした「政治學綱要（グラマー・オヴ・ポリティックス）」に於て、相續權の問題に關して述べてゐる。其所說は、現代英國人の輿論であると云ふことは出來ないであらうが、將來を卜するに就ての一資料となすことを得るであらう。

ラスキーは私有財產權に就て所謂職能主義を採つて、私有財產權を正當とする唯一の原則は職能の遂行にあるとする。從て或人に財產權が認めらるゝ爲には、其人が之に依て社會に奉仕することを必要とすると說く。即ち、或人が財產權を有するがためには、其人が社會に奉仕することを理由とせねばならぬのであつて、其人以外の人が奉仕したことを理由とすべきではない。從て或人が如何なる性質の財產、如何なる範圍の財產を有すべきかは其人の奉仕の性質、範圍に依て決定せられねばならない。勿論此の標準を實際的に決定するのは容易ではないが、然し結局我々は之を見出すことを努めねばならぬと說くのである。

財產權の根據が奉仕に求めらるべきであるならば、無制限の遺贈なるものは許し得ない。遺贈權は一箇の方面に於て制限せられなければならない。即ち遺贈し得べき財產の額は其一であり、遺贈を受くる權利を有する人の範圍に對する制限は其二である。財產額に對する制限の第一は全財產に對する制限であり、此の點よりすれば一定額以上の遺產に就ては、凡て國家が一般繼承者たる地位を帶びねばならぬ。その第二は特定の個人が相續し得べき額に對する制限である。

彼は更に進んで說く——

以上の範圍の遺贈制限内に於る相續は三つの方面から考察することが出來る。即ち第一は妻及び子の相續問題、第二は傍系の親族並に友人の相續問題、第三は公益遺贈の問題である。

妻及び子の相續の問題は、一面に於て、子が幼年なる場合と、一人前の人間となつて居る場合とを區別して考へなけ

ればならないと同時に、他面、妻に就ても獨立に生活を營み得る場合と然らざる場合とを區別して考へなければならない。

先づ最も簡單な場合に、即ち妻が夫に賴つて生活をして居り、子供が凡て弱年である場合に就て觀察しよう。此の場合に於ては、妻は夫の生存中營んで居つた生活の程度を維持するに必要なる收入を相續に依て取得すべきである。然し此の收益は妻の生存中或は再婚までのみ繼續すべきであつて死亡の場合には國家に歸屬すべきである。又再婚の場合には、第二の夫の收入と合算して再婚前の生活程度をなし得るが如き程度の收入を得べきものとすべきである。若しも、第二の夫の收入が寡婦としての彼の女の收入以上である場合には。收入は國家に歸屬すべきことを當然とする。

子供に就ては、彼等が一人前の人間になるまでは、最もよき敎育を授かる丈の扶養料を受くべきである。父の早死の爲めに打擊を受けないで、子が人生の戰に入ることを得るようにさすべきである。然し子供は其成年期を終つても、尙引續き遺產所有權に依て生活すべきでない。彼等は不勞所得の權利を有しない。即ち如何なる子も努力をなさずして生活し得るが如き狀況に置かるゝことを、其親より要求する權利を有するものでない。蓋し斯る要求は社會の寄生蟲たらむとする要求であるからである。勿論社會は子が成年に達したる頃に於ても、全然勞働を不必要とする程度でなく、單に幾分安樂に暮すことを得しむる小收入を受くる程度までは讓步し得る。然しかゝる讓步を爲すとしても、子供は相續財產を資本としてでなく收入としてのみ受けるのであつて、死亡と共に相續財產は國家に歸屬する事を適當とする。其子供が更に自分の子供に與ふべき扶養料は其者が自己の勞力によつて供給しなければならぬ。遺產なるものを永久のオルガニズムとし、人間が其無職能な附屬物となるが如き遺產觀は到底許すべからざるものである。

父の死亡の當時子供が既に一人前の人間となつて居る場合はどうであるか。此の場合に就ても、其子供は自己の努力

に依て生活を營んで居ることもあらう。其場合には其子は社會が適當とする報酬を既に受けて居るのである。又或場合には、子供は全然父に依て寄食して居ることがある。例へば未婚の娘の如き之である。第一の場合は、其子は幾分安樂に暮せる程度の收入を遺産の中から受けるだけで好い。第二の場合には、一定の期間內、其娘を自活し得るやうに訓練するに足る丈の收入を與へるか、或はそれが不能の場合には、其生涯相當に安樂に暮し得る收入を與ふべきである。

以上の原則は父の遺贈をなしたると否とに拘らず正當なものであると思ふ。父が遺言なくして死亡した場合には、以上の程度の遺産に就て、子は均しく分前を受くべき權利をもつ。又父が遺贈をなす場合に於ても、父は以上の意義に於る收入を妻子より不當に奪ふべきではない。只子が既に自己の努力に依て生活して居る場合には、父が遺言に依てかゝる子を排除することは許さるゝ。

彼は更に所謂傍系相續の問題に關して云ふ――

傍系相續に就ては問題は全然異つて居る。人は其子の經濟的福利に就て、直接の休戚を感ずるものと推定し得るが、從兄弟や甥に就ては單に一般的な好意をもつ以上に、子に就て有すると同樣の感情を持つとは想像されない。從て死亡の當時子供がなく、而も遺言をなさないで死んだ場合に、遺産を傍系の親族に與ふると云ふ理由は之を見出し得ない。遺産は彼等のために蓄積せられたと推定されるべきではないのであつて、若し特定の場合に斯る事實あるとせば、それは遺言の提出に依てのみ證明せられるべきである。傍系の親族は多くの場合、相續を豫期すべき權利を有しない。多くの場合斯る相續は「もつけの幸」である、「棚からぼた餅」である。從て原則としては、被相續人が子供を殘さなかつた場合には、國家をして其遺産を取得せしむべきを正當とする。

然し又被相續人が遺言をなした場合には幾分事情が異つて居る。此の場合には友人より受けた恩義、又は親戚の愛情

に報いんとする希望があるであらう。從て斯る場合を決定すべき原則は次の二つでなければならぬと信ずる。

第一に小額の遺贈で、受遺者をして遺産に依て、生活し得る程度に達しない收入の增加を來す場合には遺言通りにしても差支ない。又斯る遺贈は遺贈者の感情の問題を離れて見ても社會的に價値がある。例へば、二百ポンドの遺贈を受けた學校の教師は、之に依て年來の宿望たる有益な旅行をなすことが出來るようになる。斯る場合には國家の關涉は全然不必要である。又數年間同棲して居つた姉妹や姪に遺贈するやうな場合にも、國家は之を放任して差支ない。相當の收入を遺して生前の恩義に報いるといふことは當然なことであつて、只受遺者の死亡と同時にそれが國家に歸屬するようにすれば差支ない。

第二に遺贈額が非常に大きい場合には國家の干涉が必要である。殊に英米の社會に於ては、斯る場合には受遺者の行爲を著しく制限するが如き條件を伴つて居ることがある。例へば、一定の期間内に婚姻をなすことを條件とし、或は受遺者が宗教を變更せざる事を條件とする遺贈の如きは之であつて、かゝる遺贈は之を無効とすべきである。蓋し死者の意志に依て生存者の意志を拘束することは、殊に忌むべき精神的奴隸に導くものであるからである。

從て一般論としては、友人又は傍系の親族に對する遺贈は以上の如き條件を伴はないものであることを要し、且受遺者が其努力に依て生活することを不必要とする程度の額でないことを必要とする。

ラスキーは更に公益遺贈の弊害とその矯正方法を論じて後、下の如く結ぶ――――或は云ふであらう。以上の如き提議は企業心を衰頽せしめて、社會は之が爲に不利益を蒙るであらうと。之に對して私は此う答へる。多數人の努力の動機が、其子供の爲を計ると云ふ欲求であることは私も之を否定しない。然し此の動機に對しては、自ら努力して生活を必要としない階級の發生を防止すると云ふ社會的利益が對立することを忘れてはならぬ。更に又子供以外に就ては、他人に財産を殘すといふ欲望は顧るに足る丈の重要さをもつた動機ではないと私は信ずる。又子供に就ても「多くの場

に依て生活を營んで居ることもあらう。其場合には其子は社會が適當とする報酬を既に受けて居るのである。又或場合には、子供は全然父に依て寄食して居ることがある。例へば未婚の娘の如き之である。第一の場合は、其子は幾分安樂に暮せる程度の收入を遺產の中から受けるだけで好い。第二の場合には、一定の期間內、其娘を自活し得るやうに訓練するに足る丈の收入を與へるか、或はそれが不能の場合には、其生涯相當に安樂に暮し得る收入を與ふべきである。

以上の原則は父の遺囑をなしたると否とに拘らず正當なものであると思ふ。父が遺言なくして死亡した場合には、以上の程度の遺產に就て、子は均しく分前を受くべき權利をもつ。又父が遺贈をなす場合に於ても、父は以上の意義に於る收入を妻子より不當に奪ふべきではない。只子が既に自己の努力に依て生活して居る場合には、父が遺言に依てかゝる子を排除することは許さるゝ。

彼は更に所謂傍系相續の問題に關して云ふ——

傍系相續に就ては問題は全然異つて居る。人は其子の經濟的福利に就て、直接の休戚を感ずるものと推定し得るが、從兄弟や甥に就ては單に一般的な好意をもつ以上に、子に就て有すると同樣の感情を持つとは想像されない。從て死亡の當時子供がなく、而も遺言をなさないで死んだ場合に、遺產を傍系の親族に與ふると云ふ理由は之を見出し得ない。遺產は彼等のために蓄積せられたと推定されるべきではないのであつて、若し特定の場合に斯る事實あるとせば、それは遺言の提出に依てのみ證明せらるべきである。傍系の親族は多くの場合、相續を豫期すべき權利を有しない。多くの場合斯る相續は「もつけの幸」である、「棚からぼた餅」である。從て原則としては、被相續人が子供を殘さなかつた場合には、國家をして其遺產を取得せしむべきを正當とする。

然し又被相續人が遺言をなした場合には幾分事情が異つて居る。此の場合には友人より受けた恩義、又は親戚の愛情

に報いんとする希望があるであらう。從て斯る場合を決定すべき原則は次の二つでなければならぬと信ずる。

第一に小額の遺贈で、受遺者をして遺産に依て、生活し得る程度に達しない收入の増加を來す場合には遺言通りにしても差支ない。又斯る遺贈は遺贈者の感情の問題を離れて見ても社會的に價値がある。例へば、二百ポンドの遺贈を受けた學校の教師は、之に依て年來の宿望たる有益な旅行をなすことが出來るようになる。斯る場合には國家の關渉は全然不必要である。又數年間同棲して居つた姉妹や姪に遺贈するやうな場合にも、國家は之を放任して差支ない。相當の收入を遺して生前の恩義に報いるといふことは當然なことであつて、只受遺者の死亡と同時にそれが國家に歸屬するようにすれば差支ない。

第二に遺贈額が非常に大きい場合には國家の干渉が必要である。殊に英米の社會に於ては、斯る場合には受遺者の行爲を著しく制限するが如き條件を伴つて居ることがある。例へば、一定の期間内に婚姻をなすことを條件とし、或は受遺者が宗教を變更せざる事を條件とする遺贈の如きは之であつて、かゝる遺贈は之を無効とすべきである。蓋し死者の意志に依て生存者の意志を拘束することは、殊に忌むべき精神的奴隷に導くものであるからである。

從て一般論としては、友人又は傍系の親族に對する遺贈は以上の如き條件を伴はないものであることを要し、且受遺者が其努力に依て生活することを不必要とする程度の額でないことを必要とする。

ラスキーは更に公益遺贈の弊害とその矯正方法を論じて後、下の如く結ぶ――――或は云ふであらう。以上の如き提議は企業心を衰頽せしめて、社會は之が爲に不利益を蒙るであらうと。之に對して私は此う答へる。多數人の努力の動機が、其子供の爲を計ると云ふ欲求であることは私も之を否定しない。然し此の動機に對しては、自ら努力して生活を必要としない階級の發生を防止すると云ふ社會的利益が對立することを忘れてはならぬ。更に又子供以外に就ては、他人に財産を殘すといふ欲望は顧るに足る丈の重要さをもつた動機ではないと私は信ずる。又子供に就ても「多くの場

合に於て、大財産を殘すよりは僅の財産を殘す方が社會的にも、各個人に就ても好いのである。」と云つたミルの言は今尙妥當であると信ずる。即ち子供は、世間に出る時によいスタートを與へらるゝことを要求する權利はある。然し全然子供が努力を要しないやうにすることは社會的腐敗である。一般的に云へば、子供を保護するといふ親の動機以外に就ては、財産蓄積の眞の目的は實は「力」である。そして、斯る財より來る力は、其性質上不當であつて、それは何等の道德的原理に基くものでない。かゝる財より來る力に支配された社會よりは、何人も努力なくして生活資料を得ることが出來ないといふ社會の方が、よりよき、より富んだ社會である。我々は今日の狀態、即ち少數者の浪費及多數人が斯る浪費を模倣せんとして狂人の如く努力する狀態を避けなければならない。少數人の不合理な贅澤を社會的地位の淵源とすることは、社會に於て無意味なる浪費の道を增加するものである。我々は我々の行動の規範を以上とは異つた他の標準に求めねばならぬ。

ラスキーの相續權に關する論說は大體以上の如くである。ラスキーはベンタム程法律家の素質を有せざる爲でもあらうが、其說くところは稍々粗雜である。然し、彼の云はんとするところは明かである。彼は、妻子及近親・友人等に對する遺産の分與は、それ等の人の需要を滿す限度、而もそれ等の人の努力を不必要とせざる程度に於て之を正當とするのであり、且此等の財産は之を資本として與へずして收入として與へんとするのである。此等の人達の需要が滿たされたる後に於ては、其財産はそれ等の人に歸すべき理由を失ふのであるが故に、當然國家に歸屬すべきものと說くのである。

ラスキーの說くが如き趣旨の相續法が、近き將來に於て英國に實現されるとは考へられない。革命に依るの外、英國は單に、所謂「死亡稅」と「相續稅」とを高率に課する事に依て、財の分配平均を確保する方面に向ふのであらう。一九二六年一月一日より實施せられたる改正相續法は畢竟あらゆる封建的遺物を除去し、個人主義的經濟組織に基く合理的な相續法を實現したに過ぎない。更に百年後の英國が、ラスキーの提案に近き提案を採用するや否やは、英國の經濟組織が其期間内に於て個人主義的經濟組織より社會主義的經濟組織に推移するや否やに依て決定せらるゝ問題である。

（一五・七・四）

植民界に於ける二大運動に就て

高岡熊雄

一

植民政策上より見れば現時の植民界には種々なる潮流が流れて居るが其の內最も大なるものが二つある。此の二大潮流は全然其の方向を異にし互に逆流して御互に他を脅かしつゝあつて植民界延ては世界の平和をも攪亂せんとする恐がある。

二大潮流とは何であるか

一　海外に於ける植民地の擴張運動

二　植民地に於ける民族自覺運動

即ち是である。先づ第一の運動に就て論究し、後ち第二の運動に及ばう。

二

人類が此の世の中に生れ出でゝ以來の歴史は人類の移動の記載に外ならずと評せし學者のある如く、植民事業は一面より見れば極めて舊き事業である。然しながら我々が現時見るが如き程度に植民界の發展したるは實に近時の出來事であると言はざるを得ない。詳述するまでもなく上古より行はれし植民事業は十五世紀の末に至りて一新紀元を開き全世界を以て植民的活動の舞臺とし一時は歐洲大國にして斯業に關係を有せざるものは殆んど無かりしと云ふが如き有樣であつた。然るに十八世紀の末頃よりして斯くも旺盛を極めし植民熱は漸次冷却し始め當時植民國の內には彼等の領有する植民地を失ひたるものも少なくなく前世紀の半ば頃に至れば獨り英吉利のみが廣大なる植民地を有し其の他の國は植民國としては殆んど論ずるに足らざる有樣となつたのである。

當時植民事業に關する社會一般の意向を尋ぬるに一大植民國たる英國に於てすら尙且つ植民地を更に一層擴張することを好

合に於て、大財産を殘すよりは僅の財産を殘す方が社會的にも、各個人に就ても好いのである。」と云つたミルの言今尚妥當であると信ずる。即ち子供は、世間に出る時によいスタートを與へらるゝことを要求する權利はある。然し全然子供が努力を要しないやうにすることは社會的禍である。一般的に云へば、子供を保護するといふ親の動機以外に就ては、財産蓄積の眞の目的は實は「力」である。そして、斯る財より來る力は、其性質上不當であつて、これは何等の道德的原理に基くものでない。かゝる財より來る力に支配された社會よりは、何人も努力なくして生活資料を得ることが出來ないといふ社會の方が、よりよき、より富んだ社會である。我々は今日の狀態、即ち少數者の浪費及多數人が斯る浪費を模倣せんとして狂人の如く努力する狀態を避けなければならない。少數人の不合理な贅澤を社會的地位の淵源とすることは、社會に於て無意味なる浪費の道を增加するものである。我々は我々の行動の規範を以上とは異つた他の標準に求めねばならぬ。」

ラスキーの相續權に關する論說は大體以上の如くである。ラスキーはベンタム程法律家の素質を有せざる爲でもあらうが、其說くところは稍々粗雜である。然し、彼の云はんとするところは明かである。彼は、妻子及近親・友人等に對する遺産の分與は、それ等の人の需要を滿す限度、而もそれ等の人の努力を不必要とせざる程度に於て之を正當とするのであり、且此等の財産は之を資本として與へずして收入として與へんとするのである。此等の人達の需要が滿たされたる後に於ては、其財産はそれ等の人に傳すべき理由を失ふのであるが故に、當然國家に歸屬すべきものと說くのである。

ラスキーの說くが如き趣旨の相續法が、近き將來に於て英國に實現されるとは考へられない。革命に依るの外、英國は單に、所謂「死亡稅」と「相續稅」とを高率に課する事に依て、財の分配平均を確保する方面に向ふのであらう。一九二六年一月一日より實施せられたる改正相續法は畢竟あらゆる封建的遺物を除去し、個人主義的經濟組織に基く合理的な相續法を實現したに過ぎない。更に百年後の英國が、ラスキーの提案に近き提案を採用するや否やは、英國の經濟組織が其期間内に於て個人主義的經濟組織より社會主義的經濟組織に推移するや否やに依て決定せらるゝ問題である。

（一五・七・四）

植民界に於ける二大運動に就て

高岡熊雄

一

植民政策上より見れば現時の植民界には種々なる潮流が流れて居るが其の内最も大なるものが二つある。此の二大潮流は全然其の方向を異にし互に逆流して御互に他を脅かしつゝあつて植民界延ては世界の平和をも攪亂せんとする恐がある。二大潮流とは何であるか

一、海外に於ける植民地の擴張運動

二、植民地に於ける民族自覺運動

即ち是である。先づ第一の運動に就て論究し、後ち第二の運動に及ばう。

二

人類が此の世の中に生れ出でゝ以來の歴史は人類の移動の記載に外ならずと許せし學者のある如く、植民事業は一面より見れば極めて賤き事業である。然しながら我々が現時見るが如き程度に植民界の發展したるは實に近時の出來事であると言はざるを得ない。詳述するまでもなく上古より行はれし植民事業は十五世紀の末に至りて一新紀元を開き全世界を以て植民的活動の舞臺とし一時は歐洲大國にして斯業に關係を有せざるものは殆んど無かりしと云ふが如き有様であつた。然るに十八世紀の末頃よりして斯くも旺盛を極めし植民熱は漸次冷却し始め當時植民國の内には彼等の領有する植民地を失ひたるものも少なくなく前世紀の半ば頃に至れば獨り英吉利のみが廣大なる植民地を有し其の他の國は植民國としては殆んど論ずるに足らざる有様となつたのである。

當時植民事業に關する社會一般の意向を尋ぬるに一大植民國たる英國に於てすら尚且つ植民地を更に一層擴張することを好

まなかつた。彼が領有せし植民地の如きも却つて國家に對し無益なる負擔を爲すものなりとて之を厄介視する有様であつた。是れ斯國の政治界には自由黨が勢力を有し經濟界に於ては自由放任説が廣く行はれて居つた時代であつたからである。

歐洲大陸に於ても英國と等しく植民地無用論が一時勢力を有して居つた。彼のチユルゴーが植民地は果實の如きものにして成熟するときは樹より墜つと説きたるは人の能く知る所である。十九世紀に入りてより正統學派に屬する經濟學者や自由派の政治家は英國に於ける同主義者と等しく植民地の擴張に反對の説を盛んに唱道した。當時歐洲大陸に在る諸國はナポレオン一世の世界統一策が敗れて後は長く繼續した戰爭に實際疲れ果てゝ殆んど國外に手を出す餘裕なく爲めに一時は稍平穩無事の狀態であつた。其の後前世紀の半ば頃には革命黨が起つて其の及ぼした影響は頗る廣く且つ大であつて諸國の政治的勢力は主として國内に於ける爭亂を鎮定し國力の發展と充實とを促がすことにのみ集注せられて未だ眼を遠く歐洲以外の地方に向ける丈けの餘裕が無かつたのである。彼の鐵血宰相と呼ばれ不世出の英傑であつたビスマークの如きすら彼が政治に携はりし初めの頃は統一せる獨逸聯邦を組織するを以て彼の終生の大事業なりとして全力を之に注いだと云ふを以ても他を推知するに難くない。さればフリードリツヒ・リストが其の著國民經濟學に於て獨逸國民に向つて海外發展の必要なることを痛論したるも何等の反響なく彼の説は遂に世の容るゝ所とならず獨逸が生んだ此の偉大なる經濟學者も極めて不幸なる生涯を送つた。

歐洲に於ける一般の空氣が前述せる如くなりしかば十九世紀の上半期に於て西班牙及び葡萄牙に所屬せし中米及び南米の植民地が續々として母國の羈絆を脱し獨立して新たに國家を形成したるにも拘はらず之に向つて干渉を加ふるものもなく全然之を其の成り行きに放任して顧なかつた。されば當時海外に於て新たに領土を擴張したるものは極めて少なく植民界は全然沈衰の狀態に陷つた。

三

然るに斯くの如く一時冷却したる植民熱は前世紀の半ば頃よりして再び勃興し始め世界に於ける強國は競ふて植民地の擴張に努力し盛んに自國の勢力の海外發展を促がし遂に植民界に於ける一大運動となるに至つた。其の變化の甚しき實に驚くべきものがあつた。是れ畢竟歐洲に於ける政治的思想に一大變化を來したのが主なる原因である。曩きに述べし如く十八世紀の末葉よりして盛んに唱道せられたる自由主義に對して新たに國家

主義或は國民主義を唱へ政治は須らく統一したる國家及び國民に依りて行はれなければならぬと主張するものが漸次增加し爲めに國民的思想國家的觀念が次第に强固となり遂に內に在ては國內の統一を計り外には海外に向つて大に國力の發展すべき機運を作るに至つた。

今之を二三の事實に徵するに一八六一年ヴヰクトル・エマニユエルは伊太利を統一して伊太利王國を建設し續いて一八六六年には墺普戰爭起りて其の結果普魯西は獨逸民族の牛耳を掌握するに至つた。降つて普佛戰爭ありて遂に獨逸帝國が成立した。斯くして歐洲に於ける强國の內政は次第に治まりたるを以て政治的勢力を國內に施すべき餘地は次第に縮少した。而し他の方面を顧れば露佛の二國同盟に相對して獨墺伊の三國同盟が成り立ち歐洲に於ける列國間の勢力は次第に均衡を保ちて互に相乘ずべき機會が減少した。然るに多年鍛へ上げたる勢力は到底永く爲す事なくして國內に蟄伏し得るものではない。早晚何れの處にか其の鋒先を現はさねばならぬ立場であつた。其の鋒先は比較的勢力の薄弱にして反抗力の弱き地方に向ふのは當然であつて歐洲諸國は未開のもの若くは半開のものに依りて占有せらるゝ地方に彼等の勢力を扶殖し擴張せんとしたのである。是れ恰も十五六世紀頃に西班牙及び葡萄牙が國內に在りし異教徒を國外に追放して餘れる勢力を以て更に進んで新大陸を發見し廣く植民事業に從事したると其の揆を等うするものである。

英國に於ても前世紀の半ば頃までは植民事業に對し悲觀說が勢力ありしことは既述の通りであるが前世紀の下半期に入るや多數の先覺者が出でゝ盛んに植民思想を皷吹し始めた。一八八七年には第一回の植民會議が倫敦に開催せられて斯國の植民界に一新紀元を開きチエンバレーン等の唱道する帝國主義と相俟つて英帝國をして强固なる一結合體たらしむる必要を一般に認識せしむるに至つた。加ふるにセシル・ローズの南阿に於ける大活動の如きありて益英國人の植民熱を煽つたものである。

十九世紀の下半期以降に於て國家主義及び帝國主義が盛んに唱道せられたるは獨り歐洲許りではない新興國たる北米合衆國に於ても亦我が帝國に於ても等しく之を認むる。大統領ルーズベルトの如き獨のカイゼルウイルヘルム第二世と共に十九世紀の末葉が生んだ一大帝國主義者であつた。

斯くの如く最近數十年間に於ける政治的思想の變化は歐米諸國の經濟的實力の充實や人口の增加や交通通信機關の發達等種々經濟上及び社會上の原因と相俟つて曩きには植民地を無用視し厄介視し甚しきは有害視したるにも拘はらず列國は恰も餓たる犬が肉を爭ふが如く或は洪水の堤防を決潰して流し出づるが

まなかつた。彼が領有せし植民地の如きも却つて國家に對し無益なる負擔を爲すものなりとて之を厄介視する有樣であつた。是れ斯國の政治界には自由黨が勢力を有し經濟界に於ては自由放任說が廣く行はれて居つた時代であつたからである。

歐洲大陸に於ても英國と等しく植民地無用論が一時勢力を有して居つた。彼のチュルゴーが植民地は果實の如きものにして成熟するときは樹より墜つと說きたるは人の能く知る所である。十九世紀に入りてより正統學派に屬する經濟學者や自由派の政治家は英國に於ける同主義者と等しく植民地の擴張に反對の說を盛んに唱道した。當時歐洲大陸に在る諸國はナポレオン一世の世界統一策が敗れて後は長く繼續した戰爭に實際疲れ果てゝ殆んど國外に手を出す餘裕なく爲めに一時は稍平穩無事の狀態であつた。其の後前世紀の半ば頃には革命黨が起つて其の及ぼした影響は頗る廣く且つ大であつて諸國の政治的勢力は主として國內に於ける爭亂を鎭定し國力の發展と充實とを促がすことにのみ集注せられて未だ眼を遠く歐洲以外の地方に向ける丈けの餘裕が無かつたのである。彼の鐵血宰相と呼ばれ不世出の英傑であつたビスマークの如きすら彼が政治に携はりし初めの頃は統一せる獨逸聯邦を組織するを以て彼の終生の大事業なりとして全力を之に注いだと云ふを以ても他を推知するに難くない。されぱフリードリッヒ・リストが其の著國民經濟學に於て獨逸國民に向つて海外發展の必要なることを痛論したるも何等の反響なく彼の說は遂に世の容るゝ所とならず獨逸が生んだ此の偉大なる經濟學者も極めて不幸なる生涯を送つた。

歐洲に於ける一般の空氣が前述せる如くなりしかば十九世紀の上半期に於て西班牙及び葡萄牙に所屬せし中米及び南米の植民地が續々として母國の羈絆を脫し獨立して新たに國家を形成したるにも拘はらず之に向つて干涉を加ふるものもなく全然之を其の成り行きに放任して顧なかつた。されば當時海外に於て新たに領土を擴張したるものは極めて少なく植民界は全然沈衰の狀態に陷つた。

三

然るに斯くの如く一時冷却したる植民熱は前世紀の半ば頃よりして再び勃興し始め世界に於ける强國は競ふて植民地の擴張に努力し盛んに自國の勢力の海外發展を促がし遂に植民界に於ける一大運動となるに至つた。其の變化の甚しき實に驚くべきものがあつた。是れ畢竟歐洲に於ける政治的思想に一大變化を來したのが主なる原因である。曩きに述べし如く十八世紀の末葉よりして盛んに唱道せられたる自由主義に對して新たに國家

主義或は國民主義を唱へ政治は須らく統一したる國家及び國民に依りて行はれなければならぬと主張するものが漸次增加し爲めに國民的思想國家的觀念が次第に强固となり遂に內に在ては國內の統一を計り外には海外に向つて大に國力の發展すべき機運を作るに至つた。

今之を二三の事實に徵するに一八六一年ヴヰクトル・ヱマニユニルは伊太利を統一して伊太利王國を建設し續いて一八六六年には墺普戰爭起りて其の結果普魯西は獨逸民族の牛耳を掌握するに至つた。降つて普佛戰爭ありて遂に獨逸帝國が成立した。斯くして歐洲に於ける强國の內政は次第に治まりたるを以て政治的勢力を國內に施すべき餘地は次第に縮少した。而し他の方面を顧れば露佛の二國同盟に相對して獨墺伊の三國同盟が成り立ち歐洲に於ける列國間の勢力は次第に均衡を保ちて互に相乘ずべき機會が減少した。然るに多年鍛へ上げたる勢力は到底永く爲す事なくして國內に蟄伏し得るものではない。早晩何れの處にか其の鋒先を現はさねばならぬ立場であつた。其の鋒先は比較的勢力の薄弱にして反抗力の弱き地方に向ふのは當然であつて歐洲諸國は未開のもの若くは半開のものに依りて占有せらるゝ地方に彼等の勢力を扶殖し擴張せんとしたのである。是れ恰も十五六世紀頃に西班牙及び葡萄牙が國內に在りし異教徒を國外に追放して餘れる勢力を以て更に進んで新大陸を發見し廣く植民事業に從事したると其の揆を等うするものである。

英國に於ても前世紀の半ば頃までは植民事業に對し悲觀說が勢力ありしことは既述の通りであるが前世紀の下半期に入るや多數の先覺者が出でゝ盛んに植民思想を鼓吹し始めた。一八八七年には第一回の植民會議が倫敦に開催せられて斯國の植民界に一新紀元を開きチエンバレーン等の唱道する帝國主義と相俟つて英帝國をして强固なる一結合體たらしむる必要を一般に認識せしむるに至つた。加ふるにセシル・ローズの南阿に於ける大活動の如きありて益英國人の植民熱を煽つたものである。

十九世紀の下半期以降に於て國家主義及び帝國主義が盛んに唱道せられたるは獨り歐洲許りではない新興國たる北米合衆國に於ても亦我が帝國に於ても等しく之を認むる。大統領ルーズベルトの如き獨のカイゼルウイルヘルム第二世と共に十九世紀の末葉が生んだ一大帝國主義者であつた。

斯くの如く最近數十年間に於ける政治的思想の變化は歐米諸國の經濟的實力の充實や人口の增加や交通通信機關の發達等種々經濟上及び社會上の原因と相俟つて甚しきには植民地を無用視し厄介視し甚しきは有害視したるにも拘はらず列國は恰も餓たる犬が肉を爭ふが如く或は洪水の堤防を決潰して流し出づるが

如き凄じき勢を以て植民地を更に恢復し或は一層之を擴張した。長き間暗黑世界として世人が捨てゝ顧ざりし亞弗利加大陸の如き極めて短年月の間に悉く分割し盡され今や世界何れの處と雖も反抗力の薄弱なる處にして列強の進撃を被らざるはなく植民界の情勢は全然一變した。遂に歷史家トライチケをして『各國民の世界に於ける地位如何は植民事業の盛衰と相關聯する。若し一の植民地をも有せざる國あるときは假とひ他の點に於ては如何に有力なりとも最早歐洲大國の内に列すること能はざるは明白である』と論ぜしむるに至つた。

四

近時に於ける植民地擴張運動が實際如何なる成績を現はしたるか之を事實に徵せん。即ち左の表は一八七七年と一九二五年とに於ける植民地の面積及び人口數であつて過去五十ケ年間に於ける植民界の趨勢を明かに示す。

	植民地ノ面積 一八七七年(平方哩)	植民地ノ面積 一九二五年(平方哩)	植民地ノ人口 一八七七年(人)	植民地ノ人口 一九二五年(人)
西班牙	一六〇、六二六	一二九、四七〇	八、〇六六、八〇〇	七八六、三九一
葡萄牙	七一九、〇九六	九三六、二六四	三、三八一、七二九	八、七三七、八五三
和蘭	六七五、四九八	七八八、〇〇〇	二四、四八〇、九〇〇	四九、五三四、六二八
佛蘭西	三七二、八九五	三、九三三、六五二	五、九九七、六〇〇	五四、四六三、九九五
合衆王國	八、一三四、〇四五	一三、二八二、四九六	二〇三、九四一、七六六	四〇五、三八五、〇〇〇
丁抹	三四、一四五	四六、七四〇	四七、四〇〇	一四、三五五
露西亞	六、二五九、九七五	—	八、〇七九、〇八〇	—
伊太利	—	七七九、七五四	—	一、九五三、四二六
白耳義	—	九〇九、六五四	—	八、五三〇、〇三七
北米合衆國	—	七〇八、九四〇	—	一二、九二一、〇一九
日本	—	一二三、八〇三	—	二三、二八三、三五七
計	一六、三五六、二八〇	二一、六一七、七三三	二五三、九二五、二七五	五六三、五七九、〇五一
全世界		五七、二五五、〇〇〇		一、七四七、〇〇〇、〇〇〇
全世界ニ對スル植民地		三八%		三三%

備考 一八七七年分はファレンチン著『近代ノ植民史』一九二五年分は政家年鑑に依る

前表に據れば一八七七年には植民國は西班牙、葡萄牙、和蘭、佛蘭西、合衆王國、露西亞及び丁抹の七ケ國に過ぎずして植民地の總面積は千六百三十六萬平方哩其の人口は二億五千四百萬人である。然るに一九二五年即ち昨年は植民國として伊太利、白耳義、北米合衆國及び我が日本が加はり其の數十ケ國となつた。植民地の總面積は二千百六十二萬平方哩にして之を一八七七年に比すれば五百二十六萬平方哩を增加し若し之れに白耳義等露國の植民地六百萬平方哩を加ふれば一千萬平方哩以上の增加である。人口は五億六千五百萬人にして一八七七年に比し二倍以上に增加した。現在の植民地面積を以て世界の總面

積五千七百萬平方哩に比すれば恰も三十八%にして人口は全人口十七億五千萬人の三十二%に相當する。換言すれば全世界の面積の五分の二と人口の三分の一とは十ケの強國の支配の下にあるのである。而して植民地の現在數は次表の如く百三十五にして其の内合衆王國に屬するもの五十九にして第二位の佛蘭西は三十を有す。我が日本に屬するもの六なるは云ふまでもない。

植民地ノ數及分布（一九二五年）

	計	亞細亞	亞弗利加	歐羅巴	亞米利加	南洋
合衆王國	五九	一三	二三	三	一二	八
佛蘭西	三〇	七	一七	―	四	二
和蘭	一二	一〇	―	―	二	―
葡萄牙	九	四	五	―	―	―
北米合衆國	七	一	―	―	三	三
日本	六	五	―	―	―	一
西班牙	五	―	五	―	―	―
伊太利	五	―	五	―	―	―
丁抹	一	―	―	一	―	―
白耳義	一	―	一	―	―	―
計	一三五	四〇	五六	四	二一	一四

五

是れに由て之を観れば現今地球上に在る土地の所屬別は明白にして之が色分けは極めて鮮明となり最早主無き土地を見出すことは出來ざる有樣となつた。而も是れは主として最近四五十年間に於ける強國の努力の結果に外ならざるを思へば植民事業其のものの起原は既に述べし如く極めて舊きに遡り得べきも現在吾人が目撃するが如き程度にまで植民界の發展したるは比較的新しき出來事であつて海外に於ける領土の擴張運動は最近植民界に於ける一大運動なることを證明する。而して此の種の運動は業既に其の目的を充分に能く貫徹し植民地の分布は現狀の儘にて長く繼續するであらうか是れ將來に關する一大問題である。一八八四年に初めて植民界に乘り出でゝ亞弗利加及び南洋に於て多くの植民地を獲得し遂に一時は世界に於ける第三の植民國となつた獨逸が植民國としての生命が僅かに三十五ケ年にして其の植民地の全部を失ひ何等其の跡を留めざるに至らうとは恐くは世界戰爭前には何人も之を想像することが出來なかつたであらう。而かも之れは事實として吾人の眼前に現はれたのである。歷史は常に繰り返すと云ふ。有爲轉變常なかりし植民界は今日と雖も決して安定したりと稱することは出來ない。今尚國力を海外に發展せしめて世界的勢力たらんとする運動は陰に陽に盛んに行はれつゝあつて植民界に於ける二大運動の一を

如き凄じき勢を以て植民地を更に恢復し或は一層之を擴張した。長き間暗黒世界として世人が捨てゝ顧ざりし亞弗利加大陸の如き極めて短年月の間に悉く分割し盡され今や世界何れの處と雖も反抗力の薄弱なる處にして列強の進擊を被らざるはなく植民界の情勢は全然一變した。遂に歷史家トライチケをして『各國民の世界に於ける地位如何は植民事業の盛衰と相關聯する。若し一の植民地をも有せざる國あるときは假とひ他の點に於ては如何に有力なりとも最早歐洲大國の内に列すること能はざるは明白である』と論ぜしむるに至つた。

四

近時に於ける植民地擴張運動が實際如何なる成績を現はしたるか之を事實に徵せん。即ち左の表は一八七七年と一九二五年とに於ける植民地の面積及び人口數であつて過去五十ケ年間に於ける植民界の趨勢を明かに示す。

	植民地ノ面積		植民地ノ人口	
	一八七七年（平方哩）	一九二五年（平方哩）	一八七七年（人）	一九二五年（人）
西班牙	一六〇、六二六	一三九、四七〇	八、〇九六、八〇〇	七八六、三九一
葡萄牙	七一九、〇九六	九三六、二六四	三、二八一、七二九	八、七三七、八五三
和蘭	六七五、四九八	七八八、〇〇〇	二四、四八〇、九〇〇	四九、五三四、六一八
佛蘭西	三七二、八九五	三、九三三、六五三	五、九九七、六〇〇	五四、四六三、九九五
合衆王國	八、一三四、〇四五	一三、二八二、四九六	二〇三、九四一、七六六	四〇五、三八五、[illegible]
丁抹	三四、一四五	四六、七四〇	四七、四〇〇	一四、三[illegible]
露西亞	六、二五九、九七五	—	八、〇七九、〇八〇	—
伊太利	—	七七九、七五四	—	一、九九三、四二六
白耳義	—	九〇九、六五四	—	八、五二〇、〇三七
北米合衆國	—	七〇八、九四〇	—	一二、九二一、〇一九
日本	—	一一三、八〇三	—	二三、二八二、三五七
計	一六、三五六、二八〇	二一、六一七、七三三	二五三、九三五、二七五	五六三、五七九、〇五一
全世界		五七、二五五、〇〇〇		一、七四七、〇〇〇、〇〇〇
全世界ニ對スル植民地		三八%		三三%

備考　一八七七年分はフアレンチン著『近代ノ植民史』一九二五年分は政家年鑑に依る

前表に據れば一八七七年には植民國は西班牙、葡萄牙、和蘭、佛蘭西、合衆王國、露西亞及び丁抹の七ケ國に過ぎずして植民地の總面積は千六百三十六萬平方哩其の人口は二億五千四百萬人である。然るに一九二五年即ち昨年は植民國として伊太利、白耳義、北米合衆國及び我が日本が加はり其の數十ケ國となつた。植民地の總面積は二千百六十二萬平方哩にして之を一八七七年に比すれば五百二十六萬平方哩を增加し若し之れに西比利亞等露國の植民地六百萬平方哩を加ふれば一千萬平方哩以上の增加である。人口は五億六千五百萬人にして一八七七年に比し二倍以上に增加した。現在の植民地面積を以て世界の總面

積五千七百萬平方哩に比すれば恰も三十八%にして人口は全人口十七億五千萬人の三十二%に相當する。換言すれば全世界の面積の五分の二と人口の三分の一とは十ケの強國の支配の下にあるのである。而して植民地の現在數は次表の如く百三十五にして其の内合衆王國に屬するもの五十九にして第二位の佛蘭西は三十を有す。我が日本に屬するもの六なるは云ふまでもない。

植民地ノ數及分布（一九二五年）

	計	亞細亞	亞弗利加	歐羅巴	亞米利加	南洋
合衆王國	五九	一三	二三	三	一二	八
佛蘭西	三〇	七	一七	—	四	二
和蘭	一二	一〇	—	—	二	—
葡萄牙	九	四	五	—	—	—
北米合衆國	七	一	—	—	三	三
日本	六	五	—	—	—	一
西班牙	五	—	五	—	—	—
伊太利	五	—	五	—	—	—
丁抹	一	—	—	一	—	—
白耳義	一	—	一	—	—	—
計	一三五	四〇	五六	四	二一	一四

五

是れに由て之を觀れば現今地球上に在る土地の所屬別は明白にして之が色分けは極めて鮮明となり最早主無き土地を見出すことは出來ざる有樣となつた。而も是れは主として最近四五十年間に於ける強國の努力の結果に外ならざるを思へば植民事業其のものの起原は既に述べし如く極めて舊きに遡り得べきも現在吾人が目擊するが如き程度にまで植民界の發展したるは比較的新しき出來事であつて海外に於ける領土の擴張運動は最近植民界に於ける一大運動なることを證明する。而して此の種の運動は業既に其の目的を充分に能く貫徹し植民地の分布は現狀の儘にて長く繼續するであらうか是れ將來に關する一大問題である。一八八四年に初めて植民界に乘り出でゝ亞弗利加及び南洋に於て多くの植民地を獲得し遂に一時は世界に於ける第三の植民國となつた獨逸が植民國としての生命が僅かに三十五ヶ年にして其の植民地の全部を失ひ何等其の跡を留めざるに至らうとは恐くは世界戰爭前には何人も之を想像することが出來なかつたであらう。而かも之れは事實として吾人の眼前に現はれたのである。歷史は常に繰り返すと云ふ。有爲轉變常なかりし植民界は今日と雖も決して安定したりと稱することは出來ない。今尚國力を海外に發展せしめて世界的勢力たらんとする運動は陰に陽に盛んに行はれつゝあつて植民界に於ける二大運動の一を

なして居る。

六

植民地擴張運動に相對抗して起りたる一大運動は植民地に於ける民族自覺運動である。元來民族の自覺とは或る民族が他の民族に對する自己の地位の如何なるものなるやを覺り之れを向上發展せしめんとする努力であつて此の種の運動も決して新しきものではない。世界の歴史は見様に依つては自覺せる民族の競爭の記載であるとも稱し得るのである。殊に十九世紀以降歐洲に於ける民族的自覺は實に目醒しきものがあつた。既に述べたる伊太利王國及び獨逸帝國の統一の如きも畢竟民族的自覺の一の結果に外ならない。強大國に於ける民族自覺は延いては小國の民族自覺となり一國内に在る種々なる民族の自覺となり遂に進んでは植民地に於ける民族の自覺となつた。民族自覺の結果は一方には國家をして能く強固なる團體たらしめたると共に他方には内政上に於て幾多の困難を生じ植民界に於ては海外に於ける國力の發展運動を脅かすに至つた。民族自覺の結果は果して如何なる程度まで進むであらうか殆んど推測し難き有様となつた。

七

植民地に於ける民族自覺運動に就ては三つの場合を考ふることが出來る。

第一は植民地の住民が母國民と同一民族より成り立つ場合である。此の場合には植民地の住民と母國民とは共に同一民族なるを以て植民地は恰も母國の延長の如く見做すことが出來る。斯る民族の自覺は即ち單純民族より成れる一の獨立國に於ける民族自覺と其の結果が同様であつて若し母國の植民地に對する政治其の宜しきを得るときは植民地と母國との聯鎖は民族自覺の爲めに破壞せられずして却つて益々強固となり得るものである。

第二は植民地の住民が母國民と同一民族たるの外に尙ほ他の民族をも混ずる場合である。此の場合に於ては異民族に屬するもの丶數及び文化の程度如何等に依りて民族自覺の結果は自から異なるものである。若し異民族に屬するもの丶數が極めて少なきか或は文化の程度が低きものなれば主要民族は能く彼等を同化し得る可能性がある。少なくとも植民地の統治上餘り大なる妨ともならず又妨とならざる如く彼等を治むることも不可能ではない。

然しながら異民族に屬するものゝ數は相當に多く且つ文化の程度高きものが自覺するときは植民地の統治上幾多の困難を生ずる。加奈陀の如きは其の一例である。加奈陀の住民の主要部分は英本國民と同一系統に屬するものなるも尙ほ人口八百八十萬人の內二百四十五萬人は佛蘭西系のものである。而かも彼等は主としてオンタリオ及びクエベックの兩州に住するを以て此の二州に於ては住民の常用語は英語よりは寧ろ佛語多く官用語は英佛兩語を用ひて居る有樣である。佛蘭西系に屬するものは佛蘭西に其の然らざるものは英吉利により多くの同情を有するは蓋し人情の然らしむる所である。過般の世界戰爭の際は英佛兩國が共に聯合國に屬したるを以て加奈陀に於ても兩民族は相一致して聯合軍を援助したるが若し此の戰爭が英佛兩國の爭であつたなれば加奈陀は內政上に於て非常なる困難に陷つたに違ひないとは過般彼地に遊びたる際當路者の一人の直話であつた。植民地に於ける民族自覺運動の影響の最も大なるは以上述べたる二つの場合よりは

第三の場合卽ち植民地の住民が主として母國民族と異なれる民族より成れる場合である。現在ある百三十五の植民地の大多數は此種の部類に屬し何れも皆な熱帶或は亞熱帶圈內に存在する。氣候風土の關係上歐羅巴人は斯る地方に永住土着することが出來ないが故に主として資本と技術とを持ち來り先住者たる異民族の勞力を利用して以て天然の富源を開發しつゝあるのである。先住民族中には尙ほ全然野蠻未開のものあり半開のものあり或は既に發達したる一種の文化を有するものもあつて其の種類は決して一樣ではない。未開のもの半開のものは兎も角既に或る程度まで進める文化を有するものに對し植民國がなしたる多年努力の結果として敎育は一般に普及し文化的施設は次第に出來上り經濟的實力も充實するに至つたものがある。此等異民族は漸次母國民族に對する彼等の地位の如何なるものなるやを認識し他民族の爲めに統治せらるゝを以て不愉快とし之れに對して不滿足を感じ不平を抱き遂に彼等に關する事は總て彼等自から之を行ひ他よりの干涉を除き去らんと欲するに至る。斯くの如き程度まで植民地の民族が自覺するに至れば母國民族との間に次第に民族的競爭が起り遂に進んでは民族の獨立運動ともなるのである。是れ吾人が今日「埃及は埃及人の埃及であり」「印度は印度人の印度であり」「フイリピンはフイリピン人のフイリピンである」との聲を聞く所以である。更に近年に至りては「安南は安南人の安南である」との叫さへ聞くに至つた。而して埃及人の如きは既に稍彼等の爲せる運動の目的を達することが出來て將來植民地に於ける民族自覺運動は果して如何な

なして居る。

六

植民地擴張運動に相對抗して起りたる一大運動は植民地に於ける民族自覺運動である。元來民族の自覺とは或る民族が他の民族に對する自己の地位の如何なるものなるやを覺り之れを向上發展せしめんとする努力であつて此の種の運動も決して新しきものではない。世界の歴史は見様に依つては自覺せる民族の競爭の記載であるとも稱し得るのである。殊に十九世紀以降歐洲に於ける民族的自覺は實に目醒しきものがあつた。既に述べたる伊太利王國及び獨逸帝國の統一の如きも畢竟民族的自覺の一の結果に外ならない。強大國に於ける民族自覺は延いては小國の民族自覺となり一國内に在る種々なる民族の自覺となり遂に進んでは植民地に於ける民族の自覺となつた。民族自覺の結果は一方には國家をして能く強固なる團體たらしめたると共に他方には内政上に於て幾多の困難を生じ植民界に於ては海外に於ける國力の發展運動を脅かすに至つた。民族自覺の結果は果して如何なる程度まで進むであらうか殆んど推測し難き有様となつた。

七

植民地に於ける民族自覺運動に就ては三つの場合を考ふることが出來る。

第一は植民地の住民が母國民と同一民族より成り立つ場合である。此の場合には植民地の住民と母國民とは共に同一民族なるを以て植民地は恰も母國の延長の如く見做すことが出來る。斯る民族の自覺は即ち單純民族より成れる一の獨立國に於ける民族自覺と其の結果が同樣であつて若し母國の植民地に對する政治其の宜しきを得るときは植民地と母國との聯鎖は民族自覺の爲めに破壞せられずして却つて益々強固となり得るものである。

第二は植民地の住民が母國民と同一民族たるの外に尚ほ他の民族をも混ずる場合である。此の場合に於ては異民族に屬するもの丶數及び文化の程度如何等に依りて民族自覺の結果は自から異なるものである。若し異民族に屬するもの丶數が極めて少なきか或は文化の程度が低きものなれば主要民族は能く彼等を同化し得る可能性がある。少なくとも植民地の統治上餘り大なる妨ともならず又妨とならさる如く彼等を治むることも不可能ではない。

然しながら異民族に屬するものゝ數は相當に多く且つ文化の程度高きものが自覺するときは植民地の統治上幾多の困難を生ずる。加奈陀の如きは其の一例である。加奈陀の住民の主要部分は英本國民と同一系統に屬するものなるも尙ほ人口八百八十萬人の内二百四十五萬人は佛蘭西系のものである。而かも彼等は主としてオンタリオ及びクエベックの兩州に住するを以て此の二州に於ては住民の常用語は英語よりは寧ろ佛語多く官用語は英佛兩語を用ひて居る有樣である。佛蘭西系に屬するものは佛蘭西に其の然らざるものは英吉利により多くの同情を有するは蓋し人情の然らしむる所である。過般の世界戰爭の際は英佛兩國が共に聯合國に屬したるを以て加奈陀に於ても兩民族は相一致して聯合軍を援助したるが若し此の戰爭が英佛兩國の爭であつたなれば加奈陀は內政上に於て非常なる困難に陷つたに違ひないとは過般彼地に遊びたる際當路者の一人の直話であつた。植民地に於ける民族自覺運動の影響の最も大なるは以上述べたる二つの場合よりは

第三の場合即ち植民地の住民が主として母國民族と異なれる民族より成れる場合である。現在ある百三十五の植民地の大多數は此種の部類に屬し何れも皆な熱帶或は亞熱帶圈內に存在する。氣候風土の關係上歐羅巴人は斯る地方に永住土着することが出來ないが故に主として資本と技術とを持ち來り先住者たる異民族の勞力を利用して以て天然の富源を開發しつゝあるのである。先住民族中には尙ほ全然野蠻未開のものあり半開のものあり或は既に發達したる一種の文化を有するものもあつて其の種類は決して一樣ではない。未開のもの半開のものは兎も角既に或る程度まで進める文化を有するものに對し植民國がなしたる多年努力の結果として教育は一般に普及し文化的施設は次第に出來上り經濟的實力も充實するに至つたものがある。此等異民族は漸次母國民族に對する彼等の地位の如何なるものなるやを認識し他民族の爲めに統治せらるゝを以て不愉快とし之れに對して不滿足を感じ不平を抱き遂に彼等に關する事は總て彼等自から之を行ひ他よりの干涉を除き去らんと欲するに至る。斯くの如き程度まで植民地の民族が自覺するに至れば母國民族との間に次第に民族的競爭が起り遂に進んでは民族の獨立運動ともなるのである。是れ吾人が今日「埃及は埃及人の埃及であり」「印度は印度人の印度であり」「フイリピンはフイリピン人のフイリピンである」との聲を聞く所以である。更に近年に至りては「安南は安南人の安南である」との叫さへ聞くに至つた。而して埃及人の如きは既に稍彼等の爲せる運動の目的を達することが出來て將來植民地に於ける民族自覺運動は果して如何な

る程度まで發展し行くや殆んど計り知ることが出來ない有様で植民界に於ける他の一大運動たる海外に於ける勢力の擴張運動と全然反對の方向に向つて進みつゝある一大運動となつたのである。

八

若し此等二大運動を其の儘放任し置いて自由に活動せしむるときは遂に彼等は正面衝突を爲して植民界延ては世界の平和をも攪亂する恐があるのである。出來得べくんば何等かの方策を樹てゝ之が衝突を避くる必要切なるものがある。是れ植民政策上重大なる問題にして識者の頭を惱ましつゝある大問題である。之が對策の一として考へらるゝは

植民地の住民が民族的に自覺すればこそ二大運動が起りて互に相衝突する恐れがあるのであるから彼等をして宜く民族的自覺を起さしめざるのである。民族的自覺を起さゞらしめんと欲すれば民を愚にするのである。換言すれば植民地の住民をして出來得る丈け永く程度の低き文化の下に置きて之を統治し易からしむるのである。然しながら是は全然消極的の政策と云はなければならない。若し植民地の住民に必要なる教育を施さずして其の文化の發展を阻止するときは植民地の富源は之を充分に開發することは出來ない。若し富源にして開發せられざれば植民地の經濟的價値は何に依りて促進することを得るやである。現今列國が植民地の經營をなすは十七八世紀頃の佛蘭西が少數の虛榮者や野心家の滿足を買ふ爲めに植民地を獲得したるとは其の趣を異にし植民事業も一の經濟的活動である。出來得る丈け天然附與の富源を開發し能く之を利用してこそ玆に始めて植民地領有の目的の幾分を達することが出來るのである。富源の開發をなさんとするには母國よりして多數の植民者が移住土着し能はざる所にては先住土人の勞力を利用するより他に方法がない、彼等の勞力をして有効ならしむるには彼等に教育を授けなければならない。而して教育なるものは佛蘭西の植民學者が嘗て論ぜし如く一度其の門戸を開くときは再び之を閉鎖するとは全然不可能である。教育の普及するに伴ひ土人は益々教育の發展を切望し且つ之を實現せんと努力して殆んど際限なきものである。加之元來植民事業の目的は單に經濟上の利益を擧ぐるのみではない更に一層高尚なるものである。植民事業は文化の程度の高き民族が其の程度の低き民族を教化して他の文化國民と同一の程度にまで其文化を進めんとする一の人道的行爲でなければならない。吾々が我が國民の内に文化の程度の低きものゝあるを好まずして常に出來得る丈けの力を盡して之を向上

發展せしめんと努むる如く我々人類の内に文化の程度の尚ほ低きものあれば等しく之を教化誘導するは文化國民の有する重大なる責務であつて植民事業の高遠なる目的でなければならない。されば植民地の發展するに隨ひ民族的自覺運動の起るのも決して偶然ではなく文化發展の當然の歸結とも考へらるゝのである。吾人は今日直ちに總ての植民地の住民が自覺運動を起すとは言はない。然しながら是れ恐くは時の問題であつて相當なる土地の面積と人口とを有する植民地であれば住民の教育が普及し經濟的實力が充實し其の上他の民族が自覺運動を起して其目的を貫徹したる實例を眼前に目撃するときは自から之に倣つて同一の方向に奮進する樣に努めるであらう。

九

若し果して植民界に於ける民族自覺運動が植民地の發展に伴つて起るものとすれば植民國は時到れば彼等の運動を是認し植民地の獨立を承認すべきであらうか。嘗て北米合衆國が同文同種の英本國より分離して獨立したるとき大植民地は時期到來すれば早晩獨立するものであるとして一時歐洲に於ては植民地放棄論が盛んに唱道せられたることは既に述べた。一八五〇年ジヨオン・ラッセルが英國議會に於てなせる植民政策に關する演説は有名なもので能く當時の輿論を代表して居る。氏は曰く『植民地に於ける人口が次第に增加し富は增殖し遂に何れの日か本國に向つて吾人の勢力は既に英國より獨立するに充分である。現在の如き關係は却つて種々なる不利を醸すを以て我々植民地は本國より獨立し而して母國と從來の植民地とは親密たる關係を結ばんことを宣言するであらう。今日直ちに斯る日が來る可しとは信ぜざるも早晩必ず來るものなれば吾人は寧ろ植民地をして自治を行ひ得べき道を開き他日人口增加し富增殖するときは吾人は進んで其の獨立を許容し吾々大國民は世界の幸福の爲めに働けりとの觀念を以て自からを慰むべきなりと』斯くの如き議論が廣く一般に唱道せらるゝ時代には植民地の住民が民族的自覺の結果獨立運動を起すときは母國は必ずや悅んで之が要求を承認するであらう。

然しながら現今は既に述べし如くラッセルの時代とは植民界の狀況が一變し民族自覺運動とは正反對の運動がより大なる勢力を有して居る。列國は政治上、經濟上及び社會上の必要に迫られて廣く手を海外に延ばしつゝあれば植民地の住民の民族自覺運動を其の儘承認せしむることはより大なる勢力ある運動をして他の運動に屈服せしむることゝなりて中々容易に行はるゝものではあるまい。

一〇

植民地の放棄策とは全然反對に植民事業が文化のより高き國が其の程度の低き國に及ぼす一種の行動であるからして兩者の關係は動ともすれば治者と被治者との關係となり征服者と被征服者との立場となりて權威を以て植民地の住民に臨まんとするものがある。十八世紀までの植民國の採れる政策は何れも皆な然りと稱しても差支へない。現今に於ても尙斯る實例は決して乏しくない。植民地の文化が極めて幼稚なる時代なれば兎も角既に其の住民が民族的自覺運動を起さんとするが如き程度にまで進みたるものに對して斯る主義に則れる政策を施すは百害あつて一利なきものである。

一一

或は又殖民地は母國の延長なりとなし殖民地に住する異民族を母國民族の文化に同化して善良にして且つ忠良なる住民たらしめんと努めるものがある。ラテン系に屬する國の內には此の種の政策を採れるものが多い。同化政策は其の名は眞に美なれども却つて其の實件はさるものがある。既に或る程度まで進みたる文化を有する民族を同化して他の民族の內に消化し盡さんとする政策は獨立國が單純民族より成らず幾多の異民族を包含する場合に屢々試られた者である。然るにも拘らず其多くは不成効に歸して異民族同化の極めて困難なることを明證して居る。例へば世界戰爭前の澳太利、洪牙利の如き其の一例である、澳太利國民は主として獨逸民族にして洪牙利人はマギアール族より成る。此等兩民族は言語習慣歷史等を異にし且つ澳太利は動ともすれば治者の地位にあるが如き有樣なりしかば多年ハップスブルヒ王家の下に在りしにも拘はらず兎角相融和せずして互に相反目して居つた。加之此等兩國內にも又種々なる民族あり澳太利は約十二洪牙利は約七の民族より成り立つて居つて此等異民族も亦互に相爭つた。就中獨逸民族とボヘミヤ民族マギアール民族とクロアチアン民族の爭の如きは最も劇しく時としては流血を見るが如きとすらあつた。只幸ひにヂョセフ老帝の德望に依つて其の爭が餘りに極端に走らなかつたのである。世界戰爭が此等民族競爭に如何なる結果を齎らしたか此所に述ぶる必要はあるまい。又彼の愛蘭土問題の如き大英國の癌と稱せられたるものであるが畢竟愛蘭土人と英人との民族的軋轢であつて愛蘭土人が英人の壓迫を脫して自からの政治は自から之を行ふべしとの自覺より來つたものである。曩きにグラッドストンは之が對策を講じて失敗し、後ちアスクイスも亦同一の運命に陷

つた。近年中央政府が愛蘭土に自治を許さんとするや愛蘭土の北部住民は盛んに之に反對し遂には兵力に訴へる迄之を阻止せんとするに至つた。是れ愛蘭土の北部地方は主としてアングロ・サクソン民族より成り基督新教を信ずるもの多く彼等は南部地方の愛蘭土民族と共に自治を行ふことを好まず寧ろ依然として國王の直接政治の下に立たんことを欲したのである。斯くの如く所謂愛蘭土問題は最初は英人に對する愛蘭土人の反抗より起り後には愛蘭土に於ける英人の愛蘭土人に對する反抗となりて其の解決は益困難となつた。而して遂にロイド・ヂョージの手に依りて北部愛蘭土とグレートブリテンとを相併合してグレートブリテン及北愛蘭土合衆王國を組織し愛蘭土の南部地方を愛蘭土自由國として恰も北米加奈陀の如き自治領たらしめた。斯くして所謂愛蘭土問題もアングロ・サクソン民族と愛蘭民族との分離に依りて始めて解決することが出來たのである。百有餘年來相共同して一の王國を組織し而かも其の一方は他民族の同化する力の最も強きものと稱せらるゝものなるにも拘はらず此等二民族は遂に相融合することが出來ず互に分離したるを見ても民族の自覺するに從ひ如何に異民族を同化するの困難なるやを明かに證明する。

一國内に於ける異民族の競爭を最も露骨に出演したるものは世界戰爭前の獨逸であらう。斯國内には戰爭前には東北に波蘭土民族あり北には丁抹人あり西方には佛蘭西人ありて何れも皆な獨逸民族の爲めに征服せられたるものである。獨逸は多年之を獨逸化せんと努めたるも其目的を達することが出來ず遂に波蘭土民族に對しては其の勢力を打破し之を撲滅するより他に策なしとし種々畫策する處ありたるも其の效果上らず（拙著「增補農政問題研究」參照）遂に此等三民族に依りて占められたる地方はヴエルサイユの平和條約に依りて獨逸の羈絆を脫して夫々祖國に復歸したるを見ても異民族の同化の困難なるを知る。其の外一九一九年にフインランドが露西亞より獨立して一共和國を組織したるも要するにスラブ民族に對するフイン民族の自覺の結果である。

以上略陳したる三四の實例を見ても既に或る程度まで文化の進みたる異民族は之を同化したり或は之を撲滅することは極めて困難にして其の效果は少なく却つて益民族の自覺を促がし民族的反抗となり遂には或は獨立し或は他國内に在る同一民族と相合同し易きものであつて如何に民族的固有の力の偉大なるかを知るに足る。是れ獨り獨立國内に於ける民族的關係許りでなく母國對植民地の場合に於ても亦然りである。植民地の先住民族を自國の文化に同化し以て民族的自覺運動を起さゞらしめん

一〇

植民地の放棄策とは全然反對に植民事業が文化のより高き國が其その程度の低き國に及ぼす一種の行動であるからして兩者の關係は動ともすれば治者と被治者との關係となり征服者と被征服者との立場となりて權威を以て植民地の住民に臨まんとするものがある。十八世紀までの植民國の採れる政策は何れも皆な然りと稱しても差支へない。現今に於ても尙斯る實例は決して乏しくない。植民地の文化が極めて幼稚なる時代なれば兎も角既に其の住民が民族的自覺運動を起さんとするが如き程度にまで進みたるものに對して斯る主義に則れる政策を施すは百害あつて一利なきものである。

二

或は又殖民地は母國の延長なりとなし殖民地に住する異民族を母國民族の文化に同化して善良にして且つ忠良なる住民たらしめんと努めるものがある。ラテン系に屬する國の內には此の種の政策を採れるものが多い。同化政策は其の名は眞に美なれども却つて其の實伴はさるものがある。既に或る程度まで進みたる文化を有する民族を同化して他の民族の內に消化し盡さんとする政策は獨立國が單純民族より成らず幾多の異民族を包含する場合に屢々試られた者である。然るにも拘らず其多くは不成効に歸して異民族同化の極めて困難なるとを明證して居る。例へば世界戰爭前の澳太利、洪牙利の如き其の一例である、澳太利國民は主として獨逸民族にして洪牙利人はマギアール族より成る。此等兩民族は言語習慣歷史等を異にし且つ澳太利は動ともすれば治者の地位にあるが如き有樣なりしかば多年ハップスブルヒ王家の下に在りしにも拘はらず兎角相融和せずして互に相反目して居つた。加之此等兩國內にも又種々なる民族あり澳太利は約十二洪牙利は約七の民族より成り立つて居つて此等異民族も亦互に相爭つた。就中獨逸民族とボヘミヤ民族マギアール民族とクロアチアン民族の爭の如きは最も劇しく時としては流血を見るが如きとすらあつた。只幸ひにヂョセフ老帝の德望に依つて其の爭が餘りに極端に走らなかつたのである。世界戰爭が此等民族競爭に如何なる結果を齎らしたか此所に述ぶる必要はあるまい。又彼の愛蘭士問題の如き大英國の痼と稱せられたるものであるが畢竟愛蘭士人と英人との民族的軋轢であつて愛蘭士人が英人の壓迫を脫して自からの政治は自から之を行ふべしとの自覺より來つたものである。曩きにグラッドストンは之が對策を講じて失敗し、後ちアスクイスも亦同一の運命に陷

つた。近年中央政府が愛蘭土に自治を許さんとするや愛蘭土の北部住民は盛んに之に反對し遂には兵力に訴へる迄之を阻止せんとするに至つた。是れ愛蘭土の北部地方は主としてアングロ・サクソン民族より成り基督新教を信ずるもの多く彼等は南部地方の愛蘭土民族と共に自治を行ふことを好まず寧ろ依然として國王の直接政治の下に立たんことを欲したのである。斯くの如く所謂愛蘭土問題は最初は英人に對する愛蘭土人の反抗より起り後には愛蘭土に於ける英人の愛蘭土人に對する反抗となりて其の解決は益困難となつた。而して遂にロイド・ヂョージの手に依りて北部愛蘭土とグレートブリテンとを相併合してグレートブリテン及北愛蘭土合衆王國を組織し愛蘭土の南部地方を愛蘭土自由國として恰も北米加奈陀の如き自治領たらしめた。斯くして所謂愛蘭土問題もアングロ・サクソン民族と愛蘭民族との分離に依りて始めて解決することが出來たのである。百有餘年來相共同して一の王國を組織し而かも其の一方は他民族の同化する力の最も強きものと稱せらるゝものなるにも拘はらず此等二民族は遂に相融合することが出來ず互に分離したるを見ても民族の自覺するに從ひ如何に異民族を同化するの困難なるやを明かに證明する。

一國內に於ける異民族の競爭を最も露骨に出演したるものは世界戰爭前の獨逸であらう。斯國內には戰爭前には東北に波蘭土民族あり北には丁抹人あり西方には佛蘭西人ありて何れも皆な獨逸民族の爲めに征服せられたるものである。獨逸は多年之を獨逸化せんと努めたるも其目的を達することが出來ず遂に波蘭土民族に對しては其の勢力を打破し之を撲滅するより他に策なしとし種々畫策する處ありたるも其の効果上らず（拙著「増補農政問題研究」參照）遂に此等三民族に依りて占められたる地方はヴェルサイユの平和條約に依りて獨逸の羈絆を脫して夫夫祖國に復歸したるを見ても異民族の同化の困難なるを知る。其の外一九一九年にフインランドが露西亞より獨立して一共和國を組織したるも要するにスラブ民族に對するフイン民族の自覺の結果である。

以上略陳したる三四の實例を見ても既に或る程度まで文化の進みたる異民族は之を同化したり或は之を撲滅することは極めて困難にして其の効果は少なく却つて益民族の自覺を促がし民族的反抗となり遂には或は獨立し或は他國內に在る同一民族と相合同し易きものであつて如何に民族的固有の力の偉大なるかを知るに足る。是れ獨り獨立國內に於ける民族的關係許りでなく母國對植民地の場合に於ても亦然りである。植民地の先住民族を自國の文化に同化し以て民族的自覺運動を起さざらしめん

とするも蓋し又難いかなである。加之植民政策上先住土人の固有の文化を全然破壊して他の民族の文化を輸入し之を同化せんとするが如きは當該民族に採りては進歩にあらずして却つて退歩となり得る所失ふ所を償ふ能はざる恐がある。人道に反するが如き風俗習慣は無論漸次之を改善せしむべきであるが極端なる同化政策は須らく之を避け寧ろ先住民族に固有なる文化を徐ろに助長發展せしむべきではあるまいか。植民政策上常に同化主義を採り來りし佛蘭西が近年に至りて其の方針を改むるに至りたるも多年の經驗上其の不利なるを能く了解したるが爲めである。

十二

斯く論じ來れば植民地を統治するに當り先住民族を懇にする事も出來ず彼等の獨立運動に承認を與ふることも出來ずさりとて權威を以て彼等に臨むも不可であり同化政策も其の當を得たるものにあらずとせば植民界に於ける二大運動たる先住民族の自覺運動と强國の海外發展運動とを衝突せしむることなくして能く之を進行せしむるには他に何等かの方策があるであらうか。是れ植民國が大に頭を惱ましつゝある問題である。

吾人の考ふる處に依れば植民事業なるものは從來の植民國が植民地統治の方針となしたる如く主として植民國の利益を倍增せしむる爲めに行ふ利己的事業でもなく又植民地の住民の福祉を增進せしめんとする他愛的の事業でもない。植民事業は母國民と植民地先住民との共存共榮の事業たらしむべきものである。換言せば兩者の利害關係を共通ならしむるのである。母國は植民地ある爲めに政治上經濟上及び社會上に利する處があり植民地の住民も亦母國と密接なる關係を保つが爲めに始めて彼等の文化は發達し住民の福利は增進するものにして若し兩者共に其の一を欠くときは共に失ふ所多くして利する所少なしと云ふが如き關係にあらしむるのである。若し植民母國と植民地との間に斯くの如く共存共榮の實が上るときは植民地に在る先住民族の起す民族的自覺運動は最早植民地の分離獨立を目的と、せずして母國と植民地とを合したる一帝國の發展を促がすを以て其の目的となすに至るのである。此れ將來の植民政策として最も注意を要する點である。從來の植民國は動ともすれば植民地をして母國に忠實ならしめんとした。然るに母國と同一民族より成れる植民地すら民族自覺の結果は最早此の種の植民地をして母國に忠實ならしむることは困難となつた。何となれば斯る政策は植民地をして母國に服從せしめんとするものであるからである。母國と植民地とをして治者と被治者との關係に置か

んとするものであるからである。英本國と加奈陀、濠洲、新西蘭土、南阿聯邦等の如き所謂自治的植民地との關係は明かに之を證明する。此等植民地は英本國と同文同種の國なれども彼等は最早英本國に對しては忠實なりと稱し難い然しながら英帝國の發展に向つては母國と一致協同して努力しつゝあるのである。況んや全然異民族より成れる植民地の住民をして歷史風俗習慣思想等を異にする母國を愛し之に忠實ならしめんとするが如き殆んど不可能である。若し斯る植民地が母國と總ての點に於て利害關係を共通にし進んで相共に强固なる一帝國を建設せんとするに至れば現時植民界に於ける二大運動の如きは左に衝突することなくして能く進展し得るであらう。

十三

然らば母國と植民地として能く共存共榮たらしむるには如何になすべきや。其の方策としては

一、植民地に於ける教育の方針を改善するのである。

從來植民國が植民地の先住民に授けし教育を見るに多くは文藝教育である而も母國に於て授け來りしものを直ちに風俗習慣思想歷史等を異にする他の民族に其の儘若くは多少の改善を加へて適用したものである。其の結果として植民地に在るものは授けられたる教育を充分に能く咀嚼することが出來ず兎角空理空論に走り徒らに實現し得ざることを夢みて勤勞を輕んじ之を爲すを厭ふが如き風習をなした。印度の如きは之が最適例である。斯くては到底植民地の富源を開發して先住者の經濟的境遇を改善したり又母國の經濟的利益を進むることも出來ずして只徒らに母國の政治に反抗し何とかして之が羈絆を脫せんとするものを出すに至る恐がある。

されば植民地の先住者には文藝教育の代りに、主として實業教育を授けて產業に關する智識を與へ勤勞の重んずべきを悟らしむるのである。換言すれば教育の力によりて民族的自覺を刺激して政治的方面に向はしむべき代りに、寧ろ其の自覺心を彼等の經濟的實力の充實に轉化せしむる方針を以て教育するのである。斯くして母國より輸入する資本及び技術と植民地の住民の技術と勞力とが互に相提携して天然の富源を開發し經濟上の利益を擧げ若し其の一を欠ぐときは他も亦其利益を收むる事を難からしむるやうになすときは植民事業は自から母國民と植民地の先住民との共存共榮の事業となるであらう。

二には多數の母國民を植民地に移住土着せしむることである。從來溫帶地方に在る植民地は移住植民地とも稱せらるゝ如く多數の母國民が手を携へて移住土着して其の富源を開發し

た。然るに熱帶或は亞熱帶地方に在る植民地は植民地の大多數を占むるにも拘らず母國よりして其の所に永住土着するものが極めて少ない。是れ改めて言ふ迄もなく此等の地方の氣候は頗る炎熱にして歐洲人殊に西歐羅巴人の永住に不適なるが爲めである。されば從來は少數のものが資本と技術とを持ち來り短年月の間丈け植民地に活動し後ち再び母國に歸り去つたものである。官吏の如きも多くは一定の期間を以て更迭する。植民者と云ひ官吏と云ひ何れも皆植民地を以て彼等の墳墓の地となさず只一時の出稼地と爲すが爲めに從つて植民地を愛するの念も起らず又母國と植民地との關係を能く考慮して永遠の策を樹つる樣な事も少ない。多數の先住者の間に僅か許りの植民者が唯一時の出稼人として入り來り出來得る丈け多くの利益を成る可く早く獲得せんとする故先住民族との間柄が自ら治者と被治者の如き又は征服者と被征服者の如き關係となりて兩者の意思が兎角疏通を欠ぎ自然と相反目するに至る。從つて先住民族の間に教育が普及して彼等が自覺するときは母國民の行動に反對の運動となるは與に理の當然である。

熱帶或は亞熱帶圈内に在る植民地には一般に多數の土人が住し從來植民者は彼等の勞力を利用しつゝありしも此等植民地には尙彼等の手の行き屆かざる富源が極めて多く存在し人の來つて手の觸れしことを待ちつゝあるものがある。されば土人の經濟的基礎を脅かさゞる程度に母國民を移住土着せしむるのが一策である。若し母國よりの植民者が植民地を以て單に一時の出稼地となさず之を以て彼等の墳墓の地となすときは彼等は一時的の利益にのみ惑はされずして永遠の利益を擧げん事を努むる樣になり自から植民地を愛し土人に相親しむに至るのである。先住土人も亦植民者を以て彼等の師範とし指導者とし好き仲間として互に相信し互に相助け合つて植民地の開發を計るに至るであらう。斯くして母國民と植民地の先住民とは互に共存共榮の實を擧げ得るのである。

斯く考へるときは將來の植民事業は主として熱帶若くは亞熱帶地方に在る植民地の開發にあれば其の事業に成功するものは能く此等の地方の氣候に耐へ其の所に、永住土着して活動しその子孫も亦能く其の所に繁榮し得る民族でなければならぬと云ふ結論に到着するのである。從來の經驗に依れば白晳人種は斯る炎熱なる氣候の下には永く繼續して活動することが出來ない。之に反して我が大和民族はマレイ人種の血液を混ずと稱せらるゝ如く能く炎熱なる氣候に耐へ得る民族である。南洋諸島に於て布哇に於て墨西哥に於てアマゾン川の流域に於て既に能く之を實證しつゝあるのである。されば若し國家及び社會の施設指導其の宜きを得るときは我が同胞は熱帶或は亞熱帶地方に永住土着し土人と相提携して天然の富源を開發し得る民族であつて現時植民界に於ける二大運動を能く調和して植民事業の發展を計る衝に當ることが出來るのである。此の意味に於て植民者としての大和民族の前途は頗る有望なるものであると言はざるを得ない。(大正十五、五、二五)

總同盟罷業

英國勞働運動史に記錄すべき九日間

在倫敦　蠟山政道

總罷業の前夜

メーデーの翌々夜、ロンドンのキングス・ウエー・ホールに勞働黨倫敦支部の主催で「國際軍縮問題」の演説會が開かれることになつた。時恰も炭坑爭議は停頓より破裂に瀕し、總罷業の開始まで殘るところ僅かに數時間と云ふ際であつた。軍縮問題に興味惹かれたと云ふよりも、將に來らんとする總罷業に就いて意見を聽くべく、私は出掛けたのであつた。

總罷業は五月一日の午後メモリアル・ホールに於て開かれた勞働組合執行委員總會に於いて、三日を期して行はれることに宣言されてゐる。罷業の指令者は勞働組合會議總務委員會であり、その目的は、炭坑夫組合への關係からの同情罷業であるとも、又その範圍の一般的なる點から總罷業とも言はれるが、肝心な點は、かうした事柄が會議の一片の決議によつて決行されるやうになつてゐた事にあらう。この事は極めて重大なことである。例の三角同盟の失敗した一九二

一年四月十五日の『闇の金曜日』は、最早再び英國勞働運動史の上に現れることは無くなつた。三角同盟の場合には、その構成組合の上を支配する、中央機關が存在してゐなかつたから、各個の場合に、その組合の行動には、自由裁量の餘地が多かつた。今日は夫れと事情が全く異る。總務委員が、その規約第八條、及び第十一條によつて提出する總罷業の宣言に、多數の贊成ありたる場合には、各個の組合はその自由行動を拘束されることになる。かやうな組織上の變化こそは、假令それが世人の注意を惹かない裡に、組合年次大會の記錄に載せられてゐたに過ぎぬにしても、眞個に革命の名に値する。組織とは劇的事件をも、ルーテイン・ウオークに化することに外ならぬ。かくて保守黨政府が、やれ憲法破壞だとか、やれ政治的革命だとか宣傳して止まない。如何にも大げさな事柄が、一片の議事日程として、單なる手續として行はれたのだ。この事の意義を知らんとする人は、其の夜の議事錄を讀む前に、先づ昨年の九月のスカーバラ大會の報告書に赴くべきである。

ここに勞働黨がある。それは勿論總罷業の當事者ではない。しかし、勞働黨と勞働組合との關係を知るものとしては、勞働黨が、この罷業に對しては如何なる態度と行動とを執るかは、注視に値する事であると考へられやう。と同時に、此頃多くの論者が指摘する、所謂「勞働組合の左傾化」と云ふ事柄の本當の程度を知る機會でもある。勿論勞働黨の幹事であつて、同時に組合總務委員であるトマスのやうな人もゐるから、この二つの團體の意見を個人によつて區別することは不可能である。が、前陣五月一日（土曜日）の大會の際、マクドナルドとヘンダーソンが出席し、恐らく勞働黨を代表する意味に於てであらう。マクドナルドがその意見を述べてゐる。次の句は、彼が如何なる意味に於て、この罷業宣言の止むを得ないかを述べると共に、その時尙ほ調停成立の餘地あることに、一縷の希望を認めてゐたことを示すであらう。

私はこの事件に關してはヘンダーソン氏と共に後方の席に坐つて終始することを望んでゐた。然るに、政府の決定は全然それと異る所に出てゐた。政府は、民衆の生活標準に挑戰すべく決定してゐた。從つてその戰は議會の床上を避けることは出來なかつた。今朝ある新聞は、恰も我々が戰を欲する者であるかの如く報じてゐる。神聖視するあらゆるものの名に於いて、又私の得たる最大の良心的信念の名に於いて、私は告げる、英國の公衆に告げる、私は未だ曾つて、私が過去數日の間、俱に働き來れる同僚の如く、しかく忍耐強く且つ根強い希望を以て、平和を來らすべく、又得べく、努力し、奮闘せる一團の人々と共働せることは無い。

如何にして交渉は破裂したか。勞働者側がそれを拒絕したが故ではない。ハアーヴアート・スミス（炭坑組合長）は、交渉の開かるる前

に、或は反對者側と會見する以前に、賃銀の削減に應ずるべく要求された。彼の返答は、かかる要求に對しては、何人と雖も當に爲して然るべきものであつた――否定これである。承諾は交渉の後に來るべきものであつて、それ以前に來るべきものでは無い。私は依然として斯式の人間かも知れないが、英國の輿論の公正に信頼を置くものである。時既に遅れたかもしれないが、私は政府の中にも昨夜の事を慚愧してゐる人々のあることを信ぜざるを得ない。國民の中にも、亦、私と政見を異にする人々の中にすら、炭坑夫が他の如何なるものにも先んじて、その人道的要求を提出することの權利ありとする意見に、同意せられるものがある事を信じたい。

政府をして、彼等が捨て去りし處より再び開始せしめよ。彼等をしてハアーヴアート・スミスの言葉を信頼せしめよ、私の兩側に坐せる人々の頭腦の力を信頼せしめよ、ピユを議長とする總務委員會を信頼せしめよ、そして交渉を持續しめよ。私は少しく感傷的に過ぐるかも知れないが然し、若し、月曜日になつても、依然として返答が無いならば、この國の人々の有する人格について、悲しくも失望を感ずる一人の人間が存することとなるであらう。若し何事も爲されないならば、我々は議會に於いて質問を提出せねばならぬ。我々は我々の立場に立つであらう。この點に就いて誤解されてはならぬ。我々は炭坑夫の立場に立つのである。なぜなら、それは公正なる、名譽ある立場であるからである。今日如何にあらうとも、過去のそれが重大である。我々が從來努力し來れるものは、勞働者階級の全生活を舉げて、社會の敵たらしめることで無く、その最良の友人たらしめることにあつたのだ。炭坑夫、機械工、田園に於ける勞働者、善良にして有能なる勞働大衆は、社會公共に實質的に貢獻しつつある彼等の生活をして、名譽あり、光輝あり、而して價値あるものたらしむることこそ、我々の努め來れるものである。それは勞働黨の理想であり、その精神に於いて又その目的の確乎さを以て、我々は彼等の立場即ち諸君の立場に立つであらう。諸君がこの方法に於いて我々の助力を要求されるならば、我々はこれを爲すであらう。我々は月曜日に議會に於いて討論する積りである。そして望むらくは又信ずらくは、それより以前に何事か起りて、それに依りて我々は再び來るべき週日間、歡喜と希望とに滿ちて仕事に就くことの出來得んことを。若し然らずんば、我々は潔よくその責任を頒ちつつ、公正と正義とが實現される最後の時まで、諸君と共に戰場に立つであらう。

月曜日（三日）の午後が來た。マルクドナルドの希望した交渉は遂に開かれずに、最後の機會は來た。首相ボルドウインが、政府の努力の無効なりし次第を述べて、交渉斷絶の止むなきことを議會に告げたる時、マクドナルドはトマスの後を承けて、危機に際しても失はざるパシヒストとしての彼一流の冷靜さを以て、最後の訴へを爲したのであつた。坑夫側が、雇主側の主張した賃銀の地方別決定に反對した理由の正當なること、サムエル報告の改造案を別にして、先づ賃銀削減を要求せる雇主側の主張の不當なることを痛論したる後、政府が之に對して無爲荏苒、遂に機會を失したることを責め、彼及びその同僚の主張し來れる調停方針の、左の如きものなることを述べた。

斯くの如きが今日まで働き來れる觀念である。即ち現狀維持の下に

二週間持續し、その間に於いて一種の協定を成立せしめ、一定の賃案的協約を作成し、その中に賃銀問題を正直に取扱ふやうにする。その協定には一定の期間を附し、その期間の終る後には炭坑案をしてその負擔を負ひつつ、その窮境を脱せしめるやら自給自立のものたらしめる。

斯の如きがざつと言ひて、その觀念であつた。私は、夫れが終滅したものとは思はぬ、又最後の實際まで押しつけられてゐるとも考へぬ。金曜日から日曜日の夜まで、政府はハンドルを握んだが、坑夫側に對して金曜日の午後一時十五分から同日一杯までの中に、最後の返答を求めたことは最大の禍惡であらねばならぬ。なぜなら他方、雇主側の返答を求むることに對しては、四月十三日から四月三十日までの猶豫を與へてゐたではないか。午後一時十五分から夜の十二時まで、その間に組合側の委員は、平和を得る爲めの、困難なる仕事に努力せねばならなかつたのだが、その時刻が過ぎれば、ロックアウトの通告期間は經過するのだつた。委員達の仕事は、既に最後の點に到達してしまつてゐるか。私はそれを知らぬ。彼等はその最善の努力を盡した、而も尙ほそれを繼續するものと思ふ。私自身もその爲し得る最善を盡した。總罷業や、ボルシエヴイズムやその他類似の事柄に關する議論に就いては、私は何等關ずるところが無い。私は憲法を尊重する點に於いて、(前辯者)ロバート・ホーンの人後に落るものでない。炭坑夫は云ふ「我々の生活標準を防衞しなければならぬ」と。

私は政府の最後の所見が、總罷業がやつて來るならやつて來るがよい、と云ふ底のものであるかどうか知らぬ。假令、政府の執れる態度が正しいものであるにせよ、我々は、よしや無效であるにしても、何人を裏切ること無く、國民的利益の見地から、良心に背くやうな忠告を試みること無く、更に交渉を開き、探索を求めることに同意したい。なぜなら我々は如何に巨大なる產業的混亂の發生し來るかを豫知してゐるからである。就中、我々の意見の如何なるにせよ、公平なる振舞と常住の正義を發現せしむべく、我々をしてこの問題の交渉に立入らしめよ。

右のマクドナルドの發言を——この時試みたトマスの演說をも合せ見るならば一層明瞭に——檢せられるならば、如何なる讀者と雖も、勞働黨の幹部は、絕對に總罷業を好まなかつたことを察知せられるであらう。彼等の消極的な、平和主義的態度を攻擊する者は、彼等が政府の前に、三拜九拜して平和を乞ふた姿を罵詈して止まないのである。その攻擊の正否は暫く別として、事實は正にその通りであつたのだ。然しながら私が、ここに、總罷業前夜の事實を語る場合、その罷業の當面の中心者たる勞働組合側の事情を語る前に特に、マクドナルド一派の「軟弱」なる平和的態度に就いて誌せる所以のものは、英國勞働運動を全體として見る時に、そこに斯くの如き一派の存することが、罷業の性質並びにその成否を大局より判斷するに、決して看過すべからざる要素であることを示さんが爲めである。私が特に圏點を附せる箇所を注意せられるならば、院內勞働黨が、今回の總罷業に對して、如何なる立場と態度とを執れるかが明瞭になるであらう。

私が五月三日の夜キングス・ウエー・ホールで、マクドナルドの口から、彼が今將に數時間の後に來らんとする、英國の歷史に最初の出來事たる、總罷業に對する意見を聽いた時は、旣に彼は右の二箇所に於いて、その所見を公にした後であつた。而してその時は彼の調停說は破れ、萬策旣に盡きて、彼は一種の絕望の人であつた。迷へる指導者としての彼の姿には、パシヒストの運命を象徵する何物かがあつた。こゝに再び、彼の當夜の意見を操返す必要はあるまいと思ふが、私の耳朶に今尙ほ殘れる彼の二句を揭げて置かう。

> 私は總罷業を好まぬ。私はその意見を今も尙ほ變更してはゐない。私は議會でも、そう言つて來た。私はそれを好まぬ、正直に言つて、私はそれを好まぬのである。しかし、正直であると言つて、何の役にも立たぬ。
>
> 私は、總罷業が長く續くかどうか、諸君に語ることは出來ぬ。それが成功するかどうか諸君に語ることは出來ぬ。しかし、我々は罷業の側に立たねばならぬ。

彼マクドナド個人の意見について、更に多くを語る場合でない。がしかし　序を以て、彼の總罷業に關する意見は、單に彼のパシヒズムの信念のみから來てゐるのでなくて、彼の社會觀と、近代各國の社會運動に關する比較研究から生ずる、理論的根據を有するものたることを附言して置きたい。彼が一九一二年に著した『サンヂカリズム』――彼が最も明瞭にこれを表はしてゐる。しかし乍ら、時代は變轉しつゝある。英國の勞働運動組織的發展と、その資本制經濟の社會的能力との衝突は、最早マクドナルドの如き、政治的指導者の意見と政策とを、全く舊式な時代遲れのものたらしめてゐるのであらうか。これは確かに究明を要する重大なる問題である。而して、今日の總罷業の實際的經過とその結末とが、此の問題に對して何等かの答解を與へるかも知れぬ。我々は進んで、本舞台の展開に急がう。

總罷業の爭點

勞働罷業は、爭議の兩當事者が、その各個の立場から條理を以て交涉したる後、不調に終れる場合に、何等かの實力に訴ふる事によつて、その主張を貫徹せんとする方法である。勿論就業を罷むることをもつて、直に實力に訴ふるものとなすことには、聊か當らざる所もあるが、結局は、經濟的精神的その他の力に賴ることによつて、その各自の正當と信ずる主張を貫徹せんとするものである。總罷業は、その動機が同係組合又は同一階級の主張に同情し、それを援助する點に於いて、又その範圍の大小はあつても、重要なる產業の一般的罷業たる點に於いて、單なる一組合又は一產業の罷業と異る所がある。その異な

る點の存することにより、總罷業によつて爭はんとする論點の何たるかは、當然にその總罷業の直接原因たる一組合又は一產業の場合と異る所がなければならぬ。

今回の總罷業は、炭坑組合の爭議に關して、その炭坑組合を包容する勞働組合會議が當事者となつて、新に、一定の順序並びに範圍を以て、罷業を宣言したるものである。然らばその爭點は如何なる點に存するか。これを明白にして置く事は、總罷業そのものの意義を批評する場合に最も必要なる事柄でなければならぬ。なぜなら、これ無き場合には、總罷業によつて卷き起さるる種々なる問題を混同して、議論は本末顚倒され、枝葉によつて根幹を評するの愚を行ふ結果となるからである。然らば總罷業の爭はんとする論點は何處に存するか。その爭點の對象は、個々の產業の雇主なるか、又はその打つて一丸とする資本家階級なるか、又は社會一般及びその名目上の代表者たる政府なるか。之は實に單純なる抽象的議論の決し得ざる所であつて、社會進化の事情とその當時の四圍の狀況とを前提としてのみ判定し得られるのである。從つてここに產業的經濟的に見て興味ある問題が存し、又政治的法制的に見て曖昧なる點が存するのである。私は、先づこの點に論及して見たい。

總罷業の開始された五月四日、デーリー・ヘラルド紙は、左の如き主張を以て、勞働組合會議の意見を發表してゐる。デーリー・ヘラルドは、人も知る如く、勞働組合會議の經營の下にある英國勞働運動の唯一の機關紙である。

「我々はケーザアよりケーザアに權力を與へたる人に、訴へるのである」と、マクドナルドは、昨日議會に於いて、全勞働運動を代表して述べた。トマスその他の勞働議員の發言も國民に向つて爲されたのである。

政府は國民的利益よりも、寧ろ階級的及び黨派的利益を考慮してゐる。然しながら、國民が最後の審判者である。而して國民が如何に考へるかに就いては何等の疑は無い。

ボールドウイン氏は、その大失策と不誠意とによつて、又この困難なる問題に當面して處理する能力を缺如してゐることによつて、彼自身の名聲のみならず、トーリー黨のそれをも失つた。

我々は信ずる、頭の混亂した首相によつて、勞働組合の上に押しつけられたこの產業戰の結果が、如何にあらうとも、それは必ずやトーリー主義を時代遲れの信仰の捨場たる、地獄の邊境に放逐する時期となるであらう。

この鬪爭の一方の側には、次の如き意見を有する人々がある。即ち小數の人々のみが一民族の華を代表して居り、從つてあらゆる物の最も善き部分と、安易なる生活と、相續的利益のあらゆる種類を享有する權利があり、しかもそれらを提供すべく、大衆は、辛うじてその生存を維持するに足る賃銀を得る爲めに勞働せねばならぬと。

反之して他の側には、總ての人類が平等の權利を有すること階級的區別の代りに友愛の情を以て社會關係の基礎となすこと、又昨日のタイムス紙に揭げられたウインチエスター及びサウスウアークの僧正達

の表明した意見に、深い眞理のある事等を信ずる人達の總てが居る。

この二個の相容れざる見解の何れが、結局に於いて勝利を得るものなるかに就いては何等の疑も存せぬ。然かも我々はこの信念を擁護する爲めには、今正に我々の眼前に展開し來れる困難なる紛爭を有たねばならぬ。

若し、我々が勝利を得る前に先づ苦悶せねばならぬとするならば、我々は我々の偉大なる大義の爲めに、欣然として苦しまねばならぬ。若し我々は犧牲を拂はねばならぬとするならば、豐かなる酬ひの來る事を望みつつ、進んでそれを拂ふであらう。

そは個人的報酬の故ではなく、寧ろ我々は、進歩と停滯との間、クリストとサタンとによつて表徴される二種の力の間、光明と暗闇との間に存する永遠の戰に處して、常に撓ゆます進み來りし事を知るが故である。

修辭的な抽象的な右の文字によつては、未だ具體的にその論點の明白なるを得ないとするならば、更に總罷業の當面の責任者たる、勞働組合會議總務委員會の發表せる聲明を檢する必要がある。この目的の爲めに私は二つの聲明を左に掲げて見よう。その一は五月三日のデーリー・ヘラルド紙上に掲げられた總務委員會の宣言であつて、そは廣く一般公衆に向つて述べられたものと推測される。その二は、五月四日總罷業第一日目に、總罷業中の機關紙として特に發行されたる『英國勞働者』第一號に掲げられた、主として勞働者階級に向つて發せられたと見らるべき「傳達（メッセージ）」である。

その一に曰く。

勞働組合總務委員會及び全英炭坑組合聯合會の連續的努力も、遂に炭坑爭議の滿足なる解決を齎らす事に失敗した。

この異常に重大なる事態は、百萬以上の炭坑夫に閉出しを食はせた炭坑主の行爲と、炭坑業を改造する期間炭坑夫の生活標準及び勞働條件を從來よりも一層低下すること無くして、その事業を繼續せしむる爲めに承認せられ得べき提案をも爲すことなかりし政府の失敗に由る。

總務委員會は、その構成組合の代表者の承認と協同とを以て、炭坑夫の賃銀に犧牲を拂はせることによつて、炭坑問題の解決を强要せんとする企圖に對して、組織的反抗を企劃するの餘儀無きに至つたのである。

過ぐる木、金、土の三日間に於ける勞働組合執行委員特別會議に於いて總務委員會の手によつて、交通業、印刷業及び一定の生産業に於ける就業の休止を齎らす企圖を爲すことが決定された。

勞働組合會議が炭坑夫組合に向つて、その受諾を勸說するに足ると思考せられ得る解決が月曜日中に得られないならば、右の重要産業及び勞働者は罷業に出づるであらう。

勞働組合は今や發生せんとする災厄に對する一切の責任を拒否する。彼等の行爲は公衆に向けられてゐるもので無い。この一大罷業の結果として避け得ざる諸結果に對する諸々の責任は、全然炭坑主と政府とに存する。

炭坑問題の公開的決定に對する何等の提案も、炭坑主によつて、その閉鎖し通告期間の消滅する數時間前に至るまで、その時は既にその

通告の下に、數千の坑夫が坑内を去るの止むなきに至れる瞬間まで爲されなかつたのである。政府はその閉出通告を撤回して交渉の繼續を可能ならしむることを、炭坑夫が豫め先づ賃銀削減を許諾すると云ふ條件を除いては之を拒絶することによつて、勞働組合側の代表者に對して、妥當なる解決に力を致さしむることを不可能ならしめたのである。

爭議の全體を通じて、特にその交渉の後段に於て、勞働組合代表者は、可能なる解決方針の論議の爲めに、政府に向つて借すに更に餘日を以てせんことを訴へた。炭坑夫側も亦、同時に炭坑主又は政府によつて爲される全國的協定の提案に對しては、之を協議するの意思あることを明白に闡明したのであつた。

炭坑業の根本的改造に對する委員會の提案を採用することを以て條件とする、協商に達せんとする凡ゆる努力も、それに關する自由なる側から拘束されざる、論議を無視せる政府の態度によつて、總て妨げられて了つた。

今日、交通及び生産業の罷業が目睫の間に迫れる場合にも尙ほ且つ、勞働組合代表者は妥當なる解決の遂げられるべきことを信じてゐる。

然し乍ら、彼等の意見は、炭坑夫に向つて交渉に先んじて、賃銀の削減に應すべしとする政府の要求の撤回せられねばならぬことは絶對的に必要であり、閉出し通告も亦事件をして豫め斷定すること無くして交渉を進行せしむる爲めに撤回されねばならぬと云ふ點にある。

既に業に熱心なる努力の爲されしことと、勞働組合代表者が委員會報告をその全體として論議するに吝かならざることを顧みるならば、何故に炭坑夫が閉出を受けねばならぬか、又重大なる總罷業の決議をして遂に實現するの外無からしむるかに就いて、當然とする何等正當なる理由は存せぬ。

若しその實現の曉には、責任の所在は政府と炭坑主とに存する事を繰返へし强調せねばならぬ。

その二に曰く、

勞働組合會議總務委員會は、之の總罷業が飽くまで産業爭議なる事實を强調せんと欲する。之に參加する各員が、その行動に於いて模範的であり、警察の干渉に餘地を與へざらんことを期す。如何なる騷擾の發生も、この爭議成功を以て終るべき前途に對して、障碍を與へるであらう。

總務委員會は、見張り役が特に妨害行爲を避け、嚴にその合法的義務の範圍に止まらんことを希求する。

この二箇の聲明をば、額面通りに受取るに就いては、多少の異議があらう。そこには事實を一定の政略又は懸引によつて粉飾せる部分もあらう。又勞働組合全部の意見が、これと同一であるとは言へぬ。しかし乍ら、全體として一應、之を以て勞働組合會議の幹部の意見と見ることは決して不當では無い。而して、これによつて我々の知り得ることは、總罷業の主動者たる勞働組合會議は、炭坑主及び政府を等分若しくは一體視して、――その兩者に對する理由は個別的に異るが――之に對して一定の事態の實現を要求する爲めに、總罷業を行へるものであることである。一定の事態の實現とは、彼等が見て以て、炭坑夫

組合に勸說するに足ると思考する交渉條件の實現に外ならぬ。總罷業の爭點がこの一點に存することは、この事件の研究批評を試みんとする者の明記して置かねばならぬ所である。

そこで我々の探究せねばならぬ問題は凡そ次の如くであらう。(1)組合會議の總務委員が見て以て、炭坑夫組合にその採用を勸說するに足るとする一定の條件とは、何であつたかの內容、(2)この條件の實現が何故に炭坑主及び政府の承認し得ざりし所であつたかの事情、(3)この實現なかりしが故に總罷業に出でたる結果、法制上及び政治上如何なる論議を惹起せしかの事實である。これ等の諸點を總罷業の顚末を語る際に、明かにして見たい。

低氣壓の中心

九日間全英國を、颱風の席捲する所とならしめた抑もの原因たる低氣壓の中心は何處に存したか。勞働組合會議が、炭坑組合と協力して、その爭議の解決に盡力し、その結果、遂に總罷業の發生を見るに至つた事が、大まかに言つてこの低氣壓を醸生せしめたものであるが、その中心は何處に存せしか。私は、この問題に對しては、一方炭坑組合が自己の要求を勞働組合會議に提出し、その主張の貫徹に組合會議全體の協力を要求せしに對し、他方組合會議がその要求を檢覈し、その主張を容認したる場合に、兩者の意見の合致點を以て答へんとする。この點こそは、總罷業の發生原因であると共に、その終熄事情をも知る要點であると思ふ。

この點を究明する場合に、先づ必要なるは、組合會議の構成と任務の如何なるものなるかを知ることである。當面の問題に必要なる範圍に於いて、これを明かにして置かう。組合會議が全國各種組合又はその聯合會を統一的に包容し、初めて、英國勞働組合の最高團體たる基礎を築いたのは、一八六八年であつて、當時の參加團體の總員數僅かに一一八、三六七人なりしに反し、第五十七回の年次大會を開かれたる昨年（一九二五年）の夫れは四、三五〇、九八二人の多數に上つてゐる。今日英國の勞働大衆の概數を男子八百五十萬とし、女子を四百萬とするならば、その三十五パーセント以上の勞働者は、この强固なる一大組織に包含されてゐると見て差支ない。未だその勞働大衆の全體の半にも達せざるは勿論、この會議に加はらざる勞働組合も他に存するを以て、全英勞働組合の全部を包含し居らざるは明白であるけれど、今日の英國勞働運動の產業的活動は、この會議を最高團體として統一されてゐると見るも決して失當ではない。

しかし乍ら、この會議が中心となりて全體の運動の指令的立場に立つに到りたるは極めて最近の事例に屬する。シドニー・ウェッブが、その『勞働組合史』を著せる時、(一八九三年)この會議に就いて、勞働組合の行列、意見の交換所たる以外、獨立の職能を有せざることを指摘せることは周知の事柄である。各組合より一定の標準によりて、選任せられたる總務委員の權限は極めて微少のものであつて、何等中央機關たる資格を有するものでは無かつた。しかし時代の進展と共に、次第にこの中央機關の發展が要求せられた。一九〇〇年の勞働黨組織がこの會議を中心とせしものなることは絮説の要はあるまい。爾後共總務委員と勞働黨幹部とは毎月例會を開きて、主として法制的及び政治的方針の決定及び執行に與つて來たが、戰前に於いてさしたる發展を見なかつた。一九二〇年に勞働黨及び院內勞働黨との聯合協議會を見るに至つて、その機關の常設的性質を具備し始めた。これと同時に注目すべきは、組合會議內部の行政的職能の增大であつて、この必要に應じて、前陳の總務委員が、單に勞働黨との聯合機關たるの職分の外獨立の執行機關たる權限を與へられたることである。これ英國勞働運動組織の革命である。しかしその革命は徐々に行はれたのである。總て、政治及び經濟上の組織に於いて、聯合體の發達は、比較的長年月を要し種々なる階段を通過するのが常である。しかし、自由と統制、發意と服從との調和を可能ならしむる妙趣を有する點に於て、單一體の夫れに優れる長所を有する。或る人が此の英國勞働組合會議總務委員會の發達を、北米合衆國に於ける聯邦政府の發達に比したのは、興味ある觀察と言ふべきである。始め一九一九年の鐵道罷業の時、所謂「參謀本部の必要」が痛感され、その翌年のポーツマス大會の決議に於いて、從來の對議會委員とは全く別箇の機關とも見るべきものが創設されることになつた。爾來毎年の大會に於いてその構成方法即ち役員の選出標準たる產業の區分が變更され、その權限も次第に增加されたのである。今回の總罷業に際してその總務委員會が指令者の立場に立つ義務と權限とを與へられたるは、全く一九二四年のハル大會及び昨年のスカーバラ大會の決議に基くと言へるのである。今は、この、總務委員會を全體として說明する場合でないから他の點は暫く省きて、右の總罷業に關する義務及び權限が如何なる理論の下に、昨年の大會に於いて與へられたかの點を少しく詳細に說いて見たい。又それによつて、總罷業に對する各組合の態度も幾分たりとも間接に知り得られようと思ふ。

該大會の會長であつたスウェールスが會議の當初に述べ

長として演說中に左の一句がある。

會議は總務委員に對して我々の敵對者のあらゆる運動と鬪爭するに必要なる機關を創設する充分なる權限を與へねばならぬ。一九二二年のサウスポート大會に於いて、總務委員が産業發展に處すべきより大なる權限の賦與を要求したのも之が目的に應ぜんが爲めであつた。その要求は拒絕せられにけれども、昨年のハル大會は、假令未だ局限されたものであるにせよ、上よりの大なる權限を與へた。炭坑夫はその權限を實行すべく總務委員に要求したが、私はその結果が極めて我々を鼓舞するに足るものであつたと考へる。又諸君の會長として、私が各箇の團體に對してその構成規約に對して、深甚なる考慮を拂はれんことを要求する事を是認するに足るものと思ふ。

構成規約なるものは、全體の運動の利益の爲めに行はれる要求に對して、直ちに應じ得られるやう變通自在のものたらしめねばならぬ。來るべき年に於いて是等の總べての障礙を除去し、來年の大會には勞働組合會議總務委員會をして、總ての大問題に對して全英勞働運動の中央的統制及び指導の機關たらしむべき、具體的機關の創設を通過せしむるやう用ゆすべきである。總務委員會が困難なる事情の下に鬪はざるを得なかつた炭坑問題の休息は、その事情を明白に我々の視野に齎らした。若し、我々にしてその事情を全く明瞭のものたらしめることに失敗したならば、我々は會議に對する義務に缺くる所があつた事とならう。

スウエールスは、パーセル、ヒックス及びクック等と並び稱せられ、所謂左翼の幹部が、一九二四年勞働內閣に入りし結果として總務委員の地位より卸きし後を承けて、勞働組合の左傾化」を齎らすに與へてりありし人物である。このスウエールスの演說中にある右の一句が、炭坑爭議を眼中に置きつゝ、總務委員會の權限擴張の必要を說きし事は、容易に看取せられ得る所である。

スカーバラ大會に於て決議されたる總務委員會の權限擴張に關する議案は、該委員會自ら提出せるもので無く、最初全國車輪製造組合によつて提出せられたものを中心として、他の二、三の組合の提出にかゝるものと合成して左の如き內容に於いて討議されたのである。

本組合會議は、左の如き一定の權限を總務委員會に與へる時機既に熟せりと思考す。

一、總ての參加團體に向つて徵金する權限を有すること。

二、勞働組合の根本原則を防衛に當面せる組合を援助する爲めに參加各團體又はその支部を通して、罷業に應ずる事を要求し、罷業又は類似の行動の場合食糧の配給その他の準備につき消費組合部（C.W.S）と協議する權限を有すること。

三、本會議は如上の事態を規定化する必要上各組合に於いて各自の規約に變更を與ふることを要請すること。

この決議案の討議に際して、炭坑組合のクックと鐵道組合のトマスとが論戰を交したことは、同會議を通じて、最も興味ある場面であつた。前者が、この決議案に贊成を表して極力その

通過を圖り、後者がその阻止に努めたることは、多くの說明を須ひずして容易に察せられるであらう。この二大組合の思想的態度は、恐らく全英勞働組合運動に於ける左右の兩極端を示すものであつて、爾後の組合は恐らくその中間に介在するものと見て差支あるまい。しかも總罷業の場合の如きには、三角同盟の歷史が示す如く、又今回の事例が實際に示した如く、この二大組合の完全なる協調を絕對に必要とするのである。この意味に於いて、同會議に於けるクックとトマスの演說中から、興味ある文句を二、三此處に引用するものも決して徒事ではあるまい。クック曰く

產業爭議を處理せる經驗あるものには、若し雇主側がその爭議に敢て挑戰し來れる場合は、當該組合の爭議としてのみ解決し得られる時期は既に過去のものとなり終れるとは明々白々である。又或る一組合が新協定の交涉に當れる場合には、その行動は必然的に他の組合にも影響を及ぼさざるを得ない時期に到達してゐるの事實は最早如何なる勞働組合員と雖も承知してゐる事である。昨年、勞働運動史上最初の事として、我々は總務委員に一定の權限を與ふるの決議をした。その決議の行はれたる事に對しては、炭坑組合には大なる誇りを感ずる。しかし、それは如何なる權限であつたか。行動の權限ではなく、協調の權限であつた。炭坑爭議に何が起つたか。炭坑夫が總務委員に面接してその援助を乞ふた時、總務委員は直ちに「イエス」と答へる用意があつた——なぜなら炭坑夫は戰ひの開始される以前即ち交涉が危險期に達する以前に既に總務委員の許に赴いたからである。そこで總務委員は他の組合に面接してその許諾を求めたからである。若しそれ無かりせば、如何なる意志を以てするも、總務委員は炭坑夫を助くるに無力であつたのである。……我々炭坑夫がその助力を得たのは、鐵道員と、ドック人夫の好意の故ばかりである。若し此處の會議で、自分の組合の自律を有つてゐたいと主張しながら、外部では團結の效能を說き、外部の人々に向つては勞働組合は一致團結してゐると叫んだ所で何の役に立つか。彼等は彼等だけの自由行動を欲してゐるのだ。なぜなら、彼等は自分達丈けの利益に專念してゐるからだ。我々は勿論自分達の利益の何であるかは知つてゐる。しかし我々がどれ丈それを獲得するかは他の人が決するのだ。我々はその最善なるものを得ることが出來ぬであらう。なぜなら、他の人がそれを得させぬだらうから。同志諸君、現實を重んぜよ。力のみが問題であることを知れ。總務委員會が每日、每週、あらゆる問題に、諸君を驅つて總罷業に追ひ込むものと心配する必要があらうか。總務委員會だと言つて、こゝにゐる各組合の代表者に外ならぬでは無いか。我々は敢て言ひたい、總務委員會がその權能を有つてゐると云ふことが總罷業を避け得る所以であると。權能に就いての私の觀念は諸君が爭議を避ける爲めにそれを使用せよと云ふにある。

このクックの主張に對して反對すべく、トマスは起つた。先づ、この合成議案に就いて彼の代表する鐵道組合は、未だ充分熟慮する暇を有せず、それに賛否を表する權能を有しないから、今之に採決を與へることを延期して貰ひたいと主張したる後、議案そのものの內容に對する彼自身の意見を述べた。

諸君は、ヘクック氏の權能に關する意見を聽いた。私は全くそれに同意する權能は肝要である、しかし常識も時に必要である、そして私はこの事實に對して會議の注意を惹きたい。總務委員會は、いま聽かれた如き功績を擧げた、又實に美事に果したが、全運動をその指揮の下に有し——その團結した運動を——それを既に有する權能の下に行ひ來つたのである。若し彼等にして更により大なる權能を慾するならば、彼等こそ自らそれを要求すべき人々である。しかも御存じの如くこの決議案は總務委員會の名の下に提出されてゐない。彼等はこれ以上の權能を要求しないのである。彼等は滿足してゐる、正常にも亦賢明にも所有の夫れにて滿足してゐるのである。……私は會議に向つて曰ふ、我々は我々の運動を感情の上に築く事は出來ぬ。如何なる妙何も我々をして我々の困難より脫せしめる事は出來ぬ。組合自身すら一致の出來ぬ場合に、總務委員會に對して、干涉する權能を與ふると云ふ協定の出來やう望があらうか。炭坑爭議の場合に總務委員會が組合から贏ち得た應援は實にすばらしいものだつた。それは個人に對する應援では無く、それは「我々勞働組合員としてかゝる條件を他の組合の上に課せしむることを許さぬ」と云ふ、より健全なる運動の精神であつたのだ。この精神、この行動は常に正しき時に發動するであらう。諸君はこの機會を濫用しては無らぬ。勞働運動の感情を誤解してはならぬ。そして固からざる土臺の上に建築することを試みてはならぬ。組合は各自その困難を有する。我々はその各個にとつて何が最善であるかを知つてゐる。私はクック氏が炭坑夫のためにそれを知ることを望む。兎に角、我々お互を助け合ふことは、我々の爲すべき所であらう。しかし、自分が世界で一番賢い人間だと思ひ込む樣な誤りをし給ふな。

かやうに氷炭相容れぬ二個の主張に對して、妥協的な主張を以て、將に混亂に陷んとした議場の救手として現れたものは、三角同盟以來炭坑及び鐵道組合に對して方三の役割を占めて來た交通組合であつた。一般組合のクラインズと交通組合のベビインである。前者の意見がトマスに同情し、後者の意見が稍クックに近接してゐる點は、敢えて特筆するまでもないが、後者ベビインの立場は、最近彼の組合發展に盡したる功績の顯著なると、彼の有する建設的手腕の非凡なるとよりして、目下組合會議に於ける彼の聲望は甚だ大である。這次の總罷業に於いても、彼は正に帷幄の將たるの地位を占めてゐた。ベビインの妥協案は左の如きものであつた。

敢てトマス氏又はクック氏に限らず、會議を信頼すると云ふ命題に對して幾多の理論的のナンセンスが論議されたことは甚だ遺憾である。私は若し總務委員會が職め、今日會議に臨んで、より大なる權限を要求したならば、恐らく彼等は既に頭が膨脹し過ぎて困つてゐるのではないかと答へられたことであらう。要するに、團結なるものは一般の人々から生じ來らねばならぬ。總務委員會が炭坑問題を處理するに成功したからと云つて、全組合運動が總べて生じ來る問題を處理する力無しと斷ずることは、私の見る所を以てすれば、全運動の地位を誤認するものである。多くの組合は何等の組織をも持たなかつた人々が起つ上つて造り上げたものである。しかもその組合がやつて來て彼等に命じて云ふのである、組織を發展せしめよと。彼等は最近「[illegible]

リテイ」の如き例證を持つた。勞働運動は評判のよくない問題をも取扱はねばならぬだらう。そして評判のよい問題と然らざる問題とを區別せねばならぬ所に非常な困難が生ずるのである。新聞の輿論で不評判であるからと言つてそれに對して運動を阻止せよと言はるべきでは無からう。なぜなら輿論が彼等の味方で無いからと云つて、必ずしも彼等が不當であるとは謂はれないからである。從つてこの問題は愼重に研究する事が肝要なのである。この點に於いて私はクラインス氏の意見に贊成である。私は、これ等の決議案とその討議とを總務委員會に附託したる上、その全局面を詮議し、各組合執行委員と商議し、この會議の樣な性質のものに提出する代りにこの重要な問題に就いて投票し得る全權を委ねられた代議員會議を特に召集することを指示したいのである。……私はこの問題の解決さるる事を希望するが、それが強いられることを求めない。或人は總務委員會に權能を與へることを求めるであらうが、團體的意義から見た全運動は未だそこまで進む用意が無いかも知れぬ。この會議の中一百萬人の人々又は二百萬人の人々は、爾餘の人々よりは數歩進んだ態度がとられるであらう。しかしそれは團結と必ずしも一致せぬ。總務委員と云ふ軌道を中心として、慣例や習俗や傳統に從つてゐる人々をば、その軌道の上に爾餘の人々よりば更に廣大なる步調に出でしめ得るやうな組織を創造することも不可能ではあるまい。しかし、私は强制された團結と見ることを好まない。私はその一百萬人又は二百萬人の人々が爾餘の人々と意見が合致しないからと言つて之を壓倒することを好まない。總務委員會がより大なる權能を擴大し勞働運動を改造することは固より私の欲する所であるが、それには職業別組合と産業別組合との間に多くの論議が存するのである。各職業別の傳統を依然として尊重することは決して在り得べからざることでもない、從つてそれに反對は出來ない。道路夫もその職業を誇りとすることは機械工と異らない、そしてそれは保存するに値することである。この問題を檢討するに當りては全局面を調査せねばならぬ。從つて、若し、それが日程に上し得るならば、この全問題を總務委員に附託し、それを檢討した上報告を作成することを指示し、その場合商議を開き、特別會議を召集して、その目的以外他に議題のないその會議に報告する權限を賦與せんことを動議したいと思ふ。

右のベヴィンの提案は、恐らく當日の會議の大多數の意見であつたらうと思ふ。即ちトマスの如き、非常に遲れた樣式の組合主義が、最早勞働運動の當面しつゝある事態の要求に添はざるものであることは認めつゝも、尙又總務委員會と各組合との關係を如何に組織するかに就いて、クックの如き政略的な急激な主張の遙かに實行し得ざることを認めてゐるのである。而して之れは、今日全英勞働運動の立てる方向と程度とが奈邊に存するかを知る好箇の指針たるのみならず、この會議より九ケ月の後に行はれたる總罷業の內面的事情を伺ふ有効なる目安であらうと考へる。兎もあれ、このベヴィンの動議に基き、この決議案は今會議の議事日程委員の手によつて、改めて左の如き該委員の勸告の形式によつて決議される事になつた。

總務委員會の權限に關する合成議案第二及びその修正案は之を總務委員會に附託し、その問題の關係する一切の事項を討究し、その場合

諸君は、今クック氏の機能に關する意見を聽いた。私は全くそれに同意する。機能は肝要である、しかし常識も時に必要である、そして私はこの事實に對して會議の注意を惹きたい。總務委員會は、いま聽かれた如き功績を擧げた、又實に美事に果したが、全運動をその指揮の下に行ひ來つたのである。若し彼等にして更により大なる權能を欲するならば、彼等こそ自らそれを要求すべき人々である。しかも御存じの如くこの決議案は總務委員會の名の下に提出されてゐない。彼等はこれ以上の權能を要求しないのである。彼等は滿足してゐる、正當にも亦賢明にも所有の夫れにて滿足してゐるのである。……私は會議に向つて曰ふ、我々は我々の運動を感情の上に築く事は出來ぬ。如何なる妙何も我々をして我々の困難より脫せしめる事は出來ぬ。組合自身すら一致の出來ぬ場合に、總務委員會に對して、干渉する權能を與ふると云ふ協定の出來やう筈があらうか。炭坑爭議の場合に總務委員會が組合から贏ち得た應援は實にすばらしいものだつた。それは個人に對する應援では無く、それは「我々勞働組合員としてかゝる條件を他の組合の上に課せしむることを許さぬ」と云ふ、より健全なる運動の精神であつたのだ。この精神、この行動は常に正しき時に發動するであらう。諸君はこの機會を濫用しては無らぬ。勞働運動の感情を誤解してはならぬ。そして固からざる土臺の上に建築することを試みてはならぬ。組合は各自その困難を有する。我々はその各側にとつて何が最善であるかを知つてゐる。私はクック氏が炭坑夫のためにそれを知ることを望む。兎に角、我々お互を助け合ふことは、我々の爲すべき所であらう。しかし、自分が世界で一番賢い人間だと思ひ込む樣な誤りをし給ふな。

かやうに氷炭相容れぬ二個の主張に對して、妥協的た以て、將に混亂に陷んとした議場の救手として現れたものは、三角同盟以來炭坑及び鐵道組合に對して方三の役割を占めて來た交通組合であつた。一般組合のクラインズと交通組合のベビインである。前者の意見がトマスに同情し、後者の意見が稍クックに近接してゐる點は、敢えて特筆するまでもないが、後者ベビインの立場は、最近彼の組合發展に盡したる功績の顯著なると、彼の有する建設的手腕の非凡なるとよりして、目下組合會議に於ける彼の聲望は甚だ大である。這次の總罷業に於いても、彼は正に帷幄の將たるの地位を占めてゐた。ベビインの妥協案は左の如きものであつた。

敢てトマス氏又はクック氏に限らず、會議を信頼すると云ふ命題に對して幾多の理論的のナンセンスが論議されたことは甚だ遺憾である。私は若し總務委員會が徹め、今日會議に臨んで、より大なる權限を要求したならば、恐らく彼等は既に頭が膨脹し過ぎて困つてゐるのではないかと答へられたことであらう。要するに、團結なるものは一般の人々から生じ來らねばならぬ。總務委員會が炭坑問題を處理するに成功したからと云つて、全組合運動が總べて生じ來る問題を處理する力無しと斷ずることは、私の見る所を以てすれば、全運動の地位を誤認するものである。多くの組合は何等の組織をも持たなかつた人々が起ち上つて造り上げたものである。しかもその組合がやつて來て彼等に命じて云ふのである、組織を發展せしめよと。彼等は最近「ソ

リテイ」の如き例證を持つた。勞働運動は評判のよくない問題をも取扱はねばならぬだらう。そして評判のよい問題と然らざる問題とを區別せねばならぬ所に非常な困難が生ずるのである。新聞の輿論で不評判であるからと言つてそれに對して運動を阻止せよと言はるべきではないからう。なぜなら輿論が彼等の味方で無いからと云つて、必ずしも彼等が不當であるとは謂はれないからである。從つてこの問題は愼重に研究する事が肝要なのである。この點に於いて私はクラインス氏の意見に贊成である。私は、これ等の決議案とその討議とを總務委員會に附託したる上、その全局面を詮議し、各組合執行委員と商議し、この會議の樣な性質のものに提出する代りにこの重要な問題に就いて投票し得る全權を委ねられた代議員會議を特に召集することを指示したいのである。……私はこの問題の解決さるる事を希望するが、それが强いられることを求めない。或人は總務委員會に權能を與へることを求めるであらうが、團體的意義から見た全運動は未だそこまで進む用意が無いかも知れぬ。この會議の中一百萬人の人々又は二百萬人の人々は、爾餘の人々よりは數歩進んだ態度がとられるであらう。しかしそれは團結と必ずしも一致せぬ。總務委員と云ふ軌道を中心として、慣例や習俗や傳統に從つてゐる人々をば、その軌道の上に爾餘の人々よりば更に廣大なる步調に出でしめ得るやうな組織を創造することも不可能ではあるまい。しかし、私は强制された團結と見ることを好まない。私はその一百萬人又は二百萬人の人々が爾餘の人々と意見が合致しないからと言つて之を壓倒することを好まない。總務委員會がより大なる權能を擴大し勞働運動を改造することは固より私の欲する所であるが、それには職業別組合と產業別組合との間に多くの論議が存するのである。各職業別の傳統を依然として尊重することは決して在り得べからざることでもない、從つてそれに反對は出來ない。道路夫もその職業を誇りとすることは機械工と異らない、そしてそれは保存するに値することである。この問題を檢討するに當りては全局面を調査せねばならぬ。從つて、若し、それが日程に上し得るならば、この全問題を總務委員に附託し、それを檢討した上報告を作成することを指示し、その場合商議を開き、特別會議を召集して、その目的以外他に議題のないその會議に報告する權限を賦與せんことを動議したいと思ふ。

右のベヴィンの提案は、恐らく當日の會議の大多數の意見であつたらうと思ふ。即ちトマスの如き、非常に遲れた舊式の組合主義が、最早勞働運動の當面しつゝある事態の要求に添はざるものであることは認めつゝも、尙又總務委員會と各組合との關係を如何に組織するかに就いて、クックの如き政略的な急激な主張の遙かに實行し得ざることを認めてゐるのである。而して之れは、今日全英勞働運動の立てる方向と程度とが奈邊に存するかを知る好箇の指針たるのみならず、この會議より九ケ月の後に行はれたる總罷業の內面的事情を伺ふ有効なる目安であらうと考へる。兎もあれ、このベヴィンの動議に基き、この決議案は今會議の議事日程委員の手によつて、改めて左の如き該委員の勸告の形式によつて決議される事になつた。

總務委員會の權限に關する合成議案第二及びその修正案は之を總務委員會に附託し、その問題の關係する一切の事項を討究し、その場合

各參加組合の執行委員と協議し、該問題に關する勸告を各組合執行委員特別會議に報告する。

炭坑夫組合が、その來るべき五月を豫想して、全勞働運動の援助を要求し、鋭意、總務委員會の權限擴張に贊成したる結果、右の如き曖昧なる、しかし前年ハル大會の決議よりは一歩を進めたる決議となつた。即ち、總務委員會は單獨に、總罷業を決定し指導する權限は未だ與へられざれど、その必要ある場合にはその案を具して各組合執行委員の贊意を求め、多數を得た場合には、總罷業を決行し得る事となつたのである。この意味に於ける總務委員會の指令と各組合の構成規約とが如何に一致するか、それが爲めに後者の上に如何なる變更が行はれねばならなかつたかは、各組合を個別的に研究して始めて知ることであり、私は未だその材料を有してゐない。がしかし、それは今回の總罷業の場合に實際化した。その實際に現れたる內容こそは、現行法制との關係上、新なる諸種の問題を惹起することとなつた。而して、そは今後解決さるべき問題である。目下の場合、總罷業が如何にして行はれたかを知る爲めには、右の程度に於いて、最近一年間に於ける組合會議の組織に變更ありたることを知れば足りよう。

他方に於いて、この組合會議及びその總務委員と提合して、總罷業を發生せしめた低氣壓の中心を構成する他の要素たる全英炭坑夫組合の組織に就いて、一言して置くことは、事の釣衡上無用な記述ではないであらう。この組合は未だ嚴密なる意味に於ける產業別組合ではないが、殆んどその理想に近きものであつて、炭坑業に從事する凡ゆる種類の職業組合を包有する、英國組合の特色たる聯合會型の重要なる一例である。而して、そは二十の地域的團體に別たれ、歷史的には各地方團體が最初に聯合體として發生し、最後に全國的組織となれるものである。今日雇主側と勞働條件の交涉に當る場合には、主としてこの全國的機關が之に當るのであるから、一箇の全國的組合と稱するも不當で無い。從つて、その勞働條件が賃銀の問題であれ、時間の夫れであれ、全國的協定の要素が何等かの形式に於いて包含さるるに非ざれば、その全國的組合たる充分なる職能は果されない。每回の爭議に於いて、坑主側が地方別決定を主張するに反し、坑夫側が全國的決定の保持に努める所以のものは、若しそれの失はれる場合は、全國的組合の解體を意味するからである。即ち、この原理は彼等にとつて死活の問題なのである。因に、炭坑夫は、この全國的組合の形式に於いて、前記の勞働組合會議に加入してゐる。その會員數は約八十萬である。

その代議員年次大會は毎年七月に催され、その場合重要なる政策が決定される。この代議員大會が、最高機關であるが、その年次大會の開催さるる中間期に於いては、各地方團體の會員數に比例して選出さるる執行委員會が、その權限を執行する。各地方團體は千人に就き一磅の入會金を納め、會費は一年六片である。執行委員は必要なる場合には金錢の課徴を爲す權限を有つてゐる。各地方團體は、その內部の問題に就いては、完全なる自治權を有し、全國聯合會の承認の下に、罷業する場合には、全國聯合會執行委員はそれを援助する爲めに、課徴する。全國的罷業の場合には、各會員の投票を必要とし、その三分の二以上の贊成ありたる時に限る。旣に罷業の開始されたる後、その投票の行はるる場合は、投票者數の三分の二の贊成ありたることによつて、その罷業は續行される。この全國組合會は、政治運動の場合にも、各地方團體を代表し、各地方團體から特にこの爲めに釀出されたる基金によつて、炭坑議員の選擧費を支出し、その四分の一を勞働黨の基金に寄出してゐる。

右に述べた勞働組合會議とその一分子たる炭坑夫組合の如き二箇の團體の意見が一致したる時、今回の如き總罷業は行はれるのである。然らば這次の總罷業に於いては、具體的に如何なる經過を取つて、その意見の一致を見たか。換言すれば低氣壓の中心は如何にして構成されたか。

メモリアール・ホールの決議

總罷業開始に直接關係する會議は、四月二十九日メモリアール・ホールに開かれた各組合執行委員特別大會に始まる。この會議の目的は、それ以前より繼續され來つた炭坑爭議の調停に奔走せる組合會議特別產業委員會の行動を報告し合せて今後の行動の指令を仰がん爲めである。その會議に於いて、議長アーサー・ピユの述べた爭議調停經過の報告中我々の注目すべき價値ありと認むべき文句を左に摘錄して置かう。彼の報告は、昨年七月の爭議が、政府の補助金支出と調査委員會の任命とによつて、延期されたことから始まつてゐる。

以上が昨年七月の事態である。今日の事態は異る。なぜなら、我々は我々の前に委員會の報告を有するからである。その報告に就いては後に一言するが、その報告を別にしては雇主側の提案によつて惹起された問題は昨年七月のそれと大體變りがない。そこで我々は再びその問題に當面しつつある坑夫組合を如何にして最もよく助け得るかを考慮すべく要求されてゐるのである。

しかし、委員會の報告は新らしき要素である。その報告の發表（三月十日夕、筆者註）されて以來發生した問題を簡單に敍述することは、炭坑事情を考慮する點に就いて本會議を指導するに有用であらう。出來る限り簡單に述ぶるならば委員會は炭坑業が根本的に改造せられね

ばならぬと云ふ結論に到達した。……又炭坑主側の提出してゐる現存事情の救治策も力強く拒絶されてゐる。しかし、同時に既定期間の終了後補助金の繼續を中止することを勸告してゐる。その結果生ずべき事態に處する爲めには、炭坑夫に向つて永久的に賃銀の削減に應ずべしとは云はないが、數千萬の失業者を出すことを防ぐ爲めに暫時の修正を考慮すべしとの結論である。しかし、來る五月の事態に處せんが爲めの提案として次の明白なる條件を下してゐるのである。

「この事業に從事する者に向つて犧牲を要求する前に、兩者の間に、事業組織を改善し、その能率を擧げる爲めに實行せられ得る一切の方法が各自の事情の許す限り、可及的迅速に採用さるべしとする明確なる協定が存しなければならぬ。」(サムユエル報告二二九頁、筆者註)

措て明かに總ての論議はこの條件に支配されねばならぬ。この點からこの交渉は出發されねばならぬ。

報告が發表された時我々の多くはこれに直接關係せる當事者達が、この報告の判定及び勸告をして實效あらしむる爲めに、私が右に引用した言明の精神に依つて、協同的に努力することを希望してゐた。不幸にして委員會の報告に關する論議中賃銀問題のみが拔き出され、先方に押出されて、改造に關するより根本的なる、より徹底的なる勸告が不問に附せられた。兎も角、實際、炭坑主はそれらを無視し賃銀削減の提案に論議を集中したと言つても誤りではない。

四月八日我々(特別産業委員)は、炭坑組合代表者と協議して、該委員が遂行し來れる政策を表明する左の決議を通過した。

「炭坑組合の代表者と炭坑業の現在事情を、特に調査委員會の報告に關する坑主側の聲明と關連して、討究したる上本委員會はこの難局の公正なる解決を獲んとする坑夫組合の努力に助力を與ふる從前の宣言を再び確認する」(筆者註、この從前の宣言とは二月二十六日該委員の發表したるもので、昨年七月の場合の如く、賃銀削減、時間延長及び地方別協定の三點に反對する文句がある。この宣言は炭坑組合への一種の誓約と見らるべきもので、その文字通りの解釋から離るる時は、それはこの誓約の破棄とも做され得る。クックが、この點を力說して、後日總委員會の態度を詰れるは これが爲めである)

(次に二項があるが、交渉の繼續を希望したものである。譯出を省く)

この決議は、炭坑組合幹部に送られ四月九日の全國炭坑組合代議員會に發表された。

議員諸君の記憶せらるるが如く該會議は左の決議を通過した。

「(a)勞働時間を延長せんとする如何なる提案にも贊成を與へざること。

(b)全國的最低賃銀を含む全國賃銀協定の原理を飽くまで固執すること。

(c)賃銀は既に低きに過ぐるを以て、如何なる削減案にも應ぜざること。

右に摘錄した數句が示す如き方針の下に、ピユを議長とする總務委員會の特別産業委員は、坑夫組合と協力して、炭坑主協會及び政府への交渉の任に當つた。そして四月二十九日の執行委員會の當日も依然として、その交渉は進行中であつた。從つて、この日右の會議は、ピユの報告を聽取したる後、トマス及び

ベヴインの提議に從つて、（一）その交渉委員の過去の行動を認め、（二）尙更に、そのロック・アウトの通告を取消すを條件として交渉を繼續すること、（三）その結果を待つ爲めに會議を延期すること等三項の決議を通過したに止つた。その夜特別委員はこの決議の下に、炭坑組合代表者と共に首相と會見したが首相の口から雇主側の提案を知ることが出來なかつた。

翌四月三十日はロック・アウト通告期間の最後の日であり、補助金支出の中止さるる日である。此の日に於ける總務委員會の產業特別委員と首相ボルドウインとの會見は一應記述して置く必要がある。午前九時に至つて漸く左の首相の署名せる手紙が炭坑組合長スミスの許に送られて來た。

一、均一八時間制の下に於ける一九一四年の標準賃銀を超加する二十パセントの均一賃銀、地上勤務者に對する時間はそれに準ずること。（政府は同時に一九二九年十二月三十一日以前に於いて七時間制に復歸し得る程度に炭坑業が改善されたりや否を申告すべき調査委員會を設立する）

二、全國最底賃銀を包含すべく改定されたる炭坑主の起草案に從ふ全國的協定。

この提案には、全國的協定の原理に就いて、雇主側の多少の讓步を見たが、その賃銀條件は勞働組合側の到底、承認し得ざるものであつた。午後二時を過ぐる頃、炭坑委員と特別產業委員とは、首相を訪ねて、ロック・アウトの通告を取消すに非れば、交渉開始に應じ難き旨を報じた。勞働組合側の意見を代表して、トマスは、委員會報告を全體として論議し採用することを坑夫側に勸告するの擧に出でん事を首相に要請したるに、首相は依然として、先づ坑夫側が賃銀削減に應ずる保證を與ふべし、と要求した。この時、バークンヘッド及びウイルソン兩氏の起草せる政府側の要求が、交渉委員に手交された。それには「報告書二三六頁の冒頭に記されてゐる賃銀に關する調査委員會の勸告を採用して、交渉に入ることを坑夫側より保證を取ることが出來るか」とあつた。これに對して、炭坑夫組合は書面を以て答へ、交渉委員は坑夫代表者と商議したる上、再び首相その他に商談して坑夫側の意見として改造を行ふ豫備として賃銀削減に應ずることは絕對に不可能であるが、政府の發意する改造に伴つて直接に生ずる困難に就いては、これを充分考慮する用意のあることを述べた。政府側はこの漠然たる聲明に滿足せず、更に坑夫組合長スミスに向つて、炭坑組合は「現在その首腦となつてゐる「執行委員會の決議に拘束さるることなく、自由に討議に入ることが出來るか、と問ふた。この露骨な問ひに對して、スミスの答へたる所は、我々の記憶して置くべき價値がある。曰く「我々は執行委員會に全然拘束されてゐない。若し政府

ばならぬと云ふ結論に到達した。……又炭坑主側の提出してゐる現存事情の救治策も力強く拒絶されてゐる。しかし、同時に既定期間の終了後補助金の繼續を中止することを勸告してゐる。その結果生ずべき事態に處する爲めには、炭坑夫に向つて永久的に賃銀の削減に應ずべしとは云はないが、數千萬の失業者を出すことを防ぐ爲めに暫時の修正を考慮すべしとの結論である。しかし、來る五月の事態に處せんが爲めの提案として次の明白なる條件を下してゐるのである。

「この事業に從事する者に向つて犧牲を要求する前に、兩者の間に、事業組織を改善し、その能率を擧げる爲めに實行せられ得る一切の方法が各自の事情の許す限り、可及的迅速に採用さるべしとする明確なる協定が存しなければならぬ。」（サムュエル報告二二九頁、筆者註）

措て明かに總ての論議はこの條件に支配されねばならぬ。この點からこの交渉は出發されねばならぬ。

報告が發表された時我々の多くはこれに直接關係せる當事者達が、この報告の判定及び勸告をして實效あらしむる爲めに、私が右に引用した言明の精神に依つて、協同的に努力することを希望してゐた。不幸にして委員會の報告に關する論議中賃銀問題のみが拔き出され、先方に押出されて、改造に關するより根本的なる、より徹底的なる勸告が不問に附せられた。兎も角、實際、炭坑主はそれらを無視し賃銀削減の提案に論議を集中したと言つても誤りではない。

四月八日我々（特別產業委員）は、炭坑組合代表者と協議して、該委員が遂行し來れる政策を表明する左の決議を通過した。

「炭坑組合の代表者と炭坑業の現在事情を、特に調査委員會の報告に關する坑主側の聲明と關連して、討究したる上本委員會はこの難局の公正なる解決を獲んとする坑夫組合の努力に助力を與ふるとの宣言を再び確認する」（筆者註、この從前の宣言とは二月二十六日該委員の發表したるもので、昨年七月の場合の如く、賃銀削減、時間延長及び地方別協定の三點に反對する文句がある。この宣言は炭坑組合への一種の誓約と見らるべきもので、その文字通りの解釋から離るる時は、それはこの誓約の破棄とは看做され得る。クックが、この點を力說して、後日總委員會の態度を詰れるはこれが爲めである）

（次に二項があるが、交渉の繼續を希望したものである。譯出を省く）

この決議は、炭坑組合幹部に送られ四月九日の全國炭坑組合代議員會に發表された。

議員諸君の記憶せらるるが如く該會議は左の決議を通過した。

「(a)勞働時間を延長せんとする如何なる提案にも贊成を與へざること。

(b)全國的最低賃銀を含む全國賃銀協定の原理へ飽くまで固執すること。

(c)賃銀は既に低きに過ぐるを以て、如何なる削減案にも應ぜざること。

右に摘錄した數句が示す如き方針の下に、ピュを議長とする總務委員會の特別產業委員は、坑夫組合と協力して、炭坑主協會及び政府への交渉の任に當つた。そして四月二十九日の執行委員會の當日も依然として、その交渉は進行中であつた。從つて、その日右の會議は、ピュの報告を聽取したる後、トマス及び

ベヴインの提議に從つて、（一）その交渉委員の過去の行動を認め、（二）尙更に、そのロック・アウトの通告を取消すを條件として交渉を繼續すること、（三）その結果を待つ爲めに會議を延期すること等三項の決議を通過したに止つた。その夜特別委員はこの決議の下に、炭坑組合代表者と共に首相と會見したが首相の口から雇主側の提案を知ることが出來なかつた。

翌四月三十日はロック・アウト通告期間の最後の日であり、補助金支出の中止さるる日である。此の日に於ける總務委員會の産業特別委員と首相ボルドウインとの會見は一應記述して置く必要がある。午前九時に至つて漸く左の首相の署名せる手紙が炭坑組合長スミスの許に送られて來た。

一、均一八時間制の下に於ける一九一四年の標準賃銀を超加する二十パセントの均一賃銀、地上勤務者に對する時間はそれに準ずること。（政府は同時に一九二九年十二月三十一日以前に於いて七時間制に復歸し得る程度に炭坑業が改善されたりや否を申告すべき調査委員會を設立する）

二、全國最低賃銀を包含すべく改定されたる炭坑主の起草案に從ふ全國的協定。

この提案には、全國的協定の原理に就いて、雇主側の多少の讓歩を見たが、その賃銀條件は勞働組合側の到底、承認し得ざるものであつた。午後二時を過ぐる頃、炭坑委員と特別産業委員とは、首相を訪ねて、ロック・アウトの通告を取消すに非れば、交渉開始に應じ難き旨を報じた。勞働組合側の意見を代表して、トマスは、委員會報告を全體として論議し採用することを坑夫側に勸告するの擧に出でん事を首相に要請したるに、首相は依然として、先づ坑夫側が賃銀削減に應ずる保證を與ふべし、と要求した。この時、バークンヘッド及びウイルソン兩氏の起草せる政府側の要求が、交渉委員に手交された。それには「報告書二三六頁の冒頭に記されてゐる賃銀に關する調査委員會の勸告を採用して、交渉に入ることを坑夫側より保證を取ることが出來るか」とあつた。これに對して、炭坑夫組合は書面を以て答へ、交渉委員は坑夫代表者と商議したる上、再び首相その他に面談して坑夫側の意見として改造を行ふ準備として賃銀削減に應ずることは絶對に不可能であるが、政府の發意する改造に伴つて直接に生ずる困難に就いては、これを充分考慮する用意のあることを述べた。政府側はこの漠然たる聲明に滿足せず、更に坑夫組合長スミスに向つて、炭坑組合は「現在その首相となつてゐる」執行委員會の決議に拘束さるることなく、自由に討議に入ることが出來るか、と問ふた。この露骨な問ひに對して、スミスの答へたる所は、我々の記憶して置くべき價値がある。曰く「我々は執行委員會に全然拘束されてゐない。若し政府

並に坑主が改造を行ふ意志があるなら、私はそれに價値を置く用意がある。又我々の委員會に提案もするであらう」と。このスミスの意見が如何なる形式に於いて答へられたものか、私はそれを判定する材料を持たぬ、當日最後の會談であつた午後九時五十五分より開始せられた産業特別委員と政府代表との會談には、スミスも出席し、その際右の意見を更に明瞭にしてゐる。「若し政府の意味する所が、直に我々が賃銀を削減せしめられねばならぬと云ふのなら、我々はそれに應じ得ぬ、しかし報告書の一頁から最後まで論議する用意はある、恐らくそれは賃銀の削減を檢べることであらうけれど」と。これと同じ言明をスミスは、翌日の組合執行委員大會で述べてゐる。がしかし、これと雖も依然として曖昧なるを免れぬ、或人は改造を條件としてスミスが賃銀の削減に應ずる意志ありしものと忖度してゐる。現にマクドナルドの如きは之を後日（三日）議會にて言明してゐる。しかし、スミス自身、この意味を以て、報告書をその儘採用する意思でも無く、況んや賃銀削減に應諾するものではなかつたと釋明してゐる。斯くの如き交渉に於いては、その懸引は極めてデリケートならざるを得ない場合であるから、その應答の文句からのみ、確實な意思を忖度することは困難である。寧ろ、その時の交渉を支配してゐた心理狀態、相互を信賴しない疑心の蟠つてゐた事情が、その解釋に最後の決定を與へたのである。現に、この時バークンヘッドは、スミスの言葉を以て、改造の進行中賃銀の削減に應ずる保證となる價値無きものとし、ボルトウインは、最早この交渉を續けるも何等得る所無いから、今夜はこれで打切る方がよいと言明したのであつた。その時午後十時五十五分であつた。その結果は直にそれを待ちつつあつた。組合會議執行委員會及び炭坑組合代議委員會に報ぜられた。要するに、賃銀削減を改造の完成前に行ふことに承諾するや否やの一點が、この交渉の暗礁であつた。この時非常權力法は批准され全英を襲はんとする颱風の雲行は益々激しくなつた。この停頓の責任何れに在りや。讀者宜ろしく自ら判斷すべきである。

翌日、メーデー正午メモリアール・ホールに開かれた各組合執行委員會議の決議こそは、今次の總罷業の斷行中、最も記錄するに足るものである。昨夜の交渉の雲行は、流石のトマスにとりても最早絶望と見えたらしくその責任、深く政府にありと、かくなりては最後の手段に出るの外無かるべしと彼の如きすら深く決意する所あつた。況んや他の組合幹部の意思は推して知るべきである。そこへ午前中その代議委員會を開ける炭坑組合側の幹部が入場し來り、ビュ議長席に就き會議は開かれたのである。約一時間程は秘密會であつたので、その議事錄の發

表せられない爲め、如何なる論議の行はれたるや、未だ知る由もない。が會議の性質上、又前段詳述せる如き勞働組合會議の構成規約の點よりして、この時炭坑組合側の提出する要求を聽取したる上、それに應ずるや否やの論議あり、最後に總務委員會の提出せる總罷業計畫の説明並びに採決のありたるものと想像せられる。(因に來る六月二十五日に開かるべき勞働組合執行委員會特別會議及びその後に於いて、その詳細なる經過發表のある由なるが故に、この點の記述に就いて再び訂正補筆する機會を持つであらう)。やがて會議の公開されたる時、その結果が議長より發表されたが、總務委員の總罷業計畫に賛成せる者三、六五三、五二七、反對せるもの四、九五二であつた。缺席せるもの三九〇、〇〇〇あり、賛成投票中にも一定の條件を附せる組合若干あつた。最初に總務委員會を代表して、交通組合のベヴインが總罷業計畫の止むをなき所以、その方法及び内容に就いて公に發表した。

私は總務委員會を代表して執行委員諸君が極めて迅速に、昨日眞夜過ぎに、渡された提案を審議し、且つその審議の結果驚嘆すべき應諾を與へられたことを感謝する。更に私は、事態を惡化せしむる行動を避ける爲め、これ等の提案並びに諸君の受取れる形式に於ける書類は各組合の書記長に渡されないやうにして頂きたい。少くとも非常權力法が裁可され、O・M・S(筆者註罷業破り團)が準備書類の印刷に着手する迄は、私は過去に於いて人々が事件の進行に無知であつて、その政府がその内幕にありて戰はんが爲めに、ひそかに暴力を動員しつつありしことを悟らなかつた時のあつたことを憶ふ。その後の事件の成行を見れば、それは正當なる結論と言はざるを得ぬ。しかし、時往々にして劍を抜ける者は劍によりて滅ぶのである。昨夜の政府の行動は有名な、ロウド・ノースとジョーヂ三世の痴愚を一所にしたものに匹敵すべく、その結果は我國の歴史に於けるジョーヂ三世の行動の失れの如きものを齎らすであらう。

私は諸君の注意を覺書の上に惹くやうに命ぜられてゐるが、その覺書は極めて急速に起草されたものであることを直ぐに悟られることであらう。我々が何等戰ひに就いて思ふことも無く、總務委員會の總べての人々が平和の結ばれねばならぬとは信じて居り、又諸君は組合會議としてあの合理的な決議を爲してゐたやうな状況裡にありて、誰れか苟も政府たるものが平和を見出す爲めに又此大産業を改造する爲めに最も賞讃すべき道を提供せるものとして、あの文書及び其の後の議論を採擇するであらうことを想像しなかつたのであらう。諸君はこの書類よりして交通業及び重要産業の事業は休止するけれど我々は進んで少くとも食糧の配給等はその勞務を提供すべく企ててゐるとに氣付かれるであらう。總務委員會を代表して、私は思ふ、又諸君の名に於いて、炭坑夫も我々も人民と何等爭はんとするもので無いことを公言する。我々は人民に向つて戰を宣しやうと云ふのでは無い、戰は政府によつて我々に向つて宣言されたものであり、卑賤な資本主義によりて挑まれたものである。然りとするならば、O・M・Sの必要はなく、我々は食糧必需品の配給を準備すべきである。我々はこの鬪爭が如何に長びかうとも常設勞働組合によりて組織された自發的手配の下に實

行し、且つその配給の公正なるやう心掛くることを申出るのである。

又罷業に出づるものと然らざるものとを決定せる事柄に關しては議論の起らざることを希望する。諸君は指導の責任ある我々が我々の力の許す限り最善の指導を諸君に與ふるものと信じて、その命令を受取つて服從して貰ひたい。

諸君は又この書類の中に、一定の重要産業を撰んで、第一線の衝に當らしめられてゐることを認められるだらう。その第一級に屬する以外の多くの人々すらが、「諸」と言ふ呼び聲に應ぜられた、今日も亦今後も、そこに最早運解があつては無らぬ。我々は諸君の「諸」を以て諸君の總べてを、この偉大なる運動の聖壇に捧げられたものと見做すのである。然る後に於いては、諸君の總べての金錢と財産とが、失はれやうとも歴史は結局誌すであらう。我々は炭坑夫が奴隷の如く沈淪せしめられるのを見るよりも、寧ろ如何なる犠牲をも拂ふべき覺悟あるべきことを。

私の公衆及び政府に告ぐべき最後の言葉は次の如くである。——我々は總務委員として、諸君がこの爭議を處理する權能を我々に與へられた瞬間より、單にこの鬪爭に於ける我々の側を組織するばかりでなく、我々の敵對者の頭腦と心臟の不完全なるに鑑みて——それは既に起り來れる事實を考慮して云ふのだ——我々の運動の有する最善の頭腦を捧げて、我國の爲めにこの大問題の解決に資しようとするのである。そして如何なる時期に於いても、この解決を實行する責任を負ふのである。

最後に申上ぐべきは、嚴粛なる發言である。第一級に屬する人々は、火曜日の午前に始まる仕事時間からは、仕事に着手してはならぬ。その意味は、若し、その時まで事件の解決がつかなかつたならば、この鬪爭に從事すべく要求されてゐる人々は、月曜日の夜の作業の終る後は、仕事を罷めねばならぬと云ふことである。我々は、その終了時間の各自異れるを以て、その時刻は指定せぬ。私は、總務委員會の名に於いて、それらの事業に於ける總べての男女が、勞働の精魂と、炭坑夫の救援の爲めに戰ふべきことを信頼する。

ベヴインの後を承けて、鐵道從業員を代表して、その「機關夫及び火夫合同組合」のブロムレーが起つて曰く、

我々は勞働組合の鼓吹すべき呼應と、この會議の示した忍耐の表明に對して、誇りを感ずるものである。私自身の組合に關する限りに於いては、それは特種の地位に置かれた一團であつて、あらゆる會員が例外も無く、一時に職場に投げ出されるのである。そは寧ろ誇るべき地位である。彼等は少くとも突撃の部隊の一部分である。しかも彼等はそれを徒に誇示しようといふのではない。なぜなら、彼等はその後方部隊より受ける援護の、大なるべきを自覺してゐるからである。それは彼等に光榮と信頼とを與ふる。なぜなら、彼等は他の組合の僚友が同じく勇敢に、又熱心に、その勤務を果すべきことを自覺してゐるからである。

最後に、炭抗夫組合のスミスの述べた所を紹介して置かう。

私は何等の心殘りもなく、倫敦を去ることが出來る。なぜなら、この事態を救ふべくあらゆる事が爲し果されたからである。……今回の炭坑調査委員會が報告を發表してから、その報告の眞個の意義を發見することに困難を感じた。なぜなら、同一の事項も章を異にするに從つて、異つた説明があるからである。私は炭坑組合を代表して、その報告の第一頁より最後に至るまで取り上げ、それを全體見たる上、そ

の判定を採用することに同意した。しかも私の受けたる要求は、炭坑夫が先づ第一撃を受けねばならぬこと、——即ち賃銀の削減——であつた。私は政府がその誤れることを悟らんことを希望し、その委員會に向つて、「我々はこの報告を始めから終りまで見通して、その判定を採用する覺悟のある」ことを申送つたのである。……私は、この會議に申上げたい、諸君は實に重大な行動を既に執られた。諸君は餘儀なくそれを執らせられたのであるが、諸君は炭坑夫の沈淪は、やがて諸君の場合となることを思はねばならぬ。

炭坑夫組合は、既に一切を擧げて總務委員會に委せた。ただその「ピストル」丈けは——この場合は我々の舌を意味する——は除いてある彼等は彼等自身の側にも、亦他の側にも、誤りの無からんが爲めに、その忠言を與へ又受けんことを欲した。例へば、時間の延長の如きは、如何なる時も、恰も諸君自身に突きつけられた場合の如く、「否」と云ふであらう。この點は明白である。我々は先日白耳義に赴いて、大陸の友人達と商議し、その援助を與へらるることを約して來たが、戰の第一線は此處に在る。炭坑夫の妻及び兒童を代表し、私は他の組合に感謝し、今となりても戰の無用となることを希望して止まぬ。

この次ぎにマクドナルドが勞働黨を代表して、その意見を述べた事は本文の最初に彼の態度を述べた場合に、紹介して置いたからこゝで再言しない。たゞ私の感想として一言して置きたい事は、右の數氏の演説で見られる如く、その言辭は極めて曖昧模糊たる處あり、その「戰はんか」又は「妥協せんか」の境涯が極めて不明瞭であり、炭坑組合との關係に就いても何處までが委任及び協力の範圍かが不明である。しかも、その事が反つて、この日勞働組合執行委員會に於いて總務委員が如何なる立場に立つてゐたかを示すことになるであらう。

が、兎も角も、右の決議は通過されたのである。そして時間は刻々として通過する。總罷業の開始さるべき日まで、僅かに一日を殘すのみである。我々は、ここで總罷業の政策及び陣容とそれに對する政府の「罷業破り」對策とを、攻究する順序となるのだが、その前にこの最後の交渉の一幕が、如何にして無効に終つたかを述べて置かう。(未完)

現下の問題

關稅會議失敗の原因

米田實

一

「まことに惜しいことをした」予は北京の關稅會議が七月三日午後零時十五分散會のオランダ公使館内、各國全權會議で全員一致の形式で「一時打ち切り」を決定し「支那政府の全權委員が會議に於て諸外國全權と共に諸種問題の討議を再開し得るに至らん」ことを希望したのを見て、覺えず斯く獨語したのであつた。

何故である乎、昨年十月二十六日以後八箇月半に亘つた列國會議の努力が成果を收めずに終つた爲めである乎、否なそれ丈けでは無い、淡白に言ふと、今度の關稅會議位ゐ最初の六ヶ月間能く支那の爲めに圖り得たと思はるゝ會議は無かつたからである、加ふるに我日本の外交は往々其の陷つたこともある偏狹な我利々々主義を放棄し、正道に準據し、飽く迄支那の道理ある主張を援助したが、此正當なる活動こそ却つて自ら我國の利益ともなることを充分に證明し來つたのも、亦た此會議であつたのである、

日本のことは之を措く、何が故に此會議は最も善く支那の爲めに圖つた乎と言ふと、それは過去二箇月以前イギリスが支那の時局を理由として、豹變（?）する迄の同會議の事業を見るものゝ、容易に首肯し得る所であらう、けだし、同會議は支那に有利の三箇の事項を大體決定する迄に進んで居たのである、三箇とは外でも無い、第一、三年後即ち一九二九年一月に於ける關稅自主權の回復、第二、右關稅自主權回復の時機まで行はる可き暫定差等稅率の採用、第三、暫定差等稅率實施が準備出來るまで、差當りワシントン關稅條約規定の附加稅の實施、是れ

である、換言すると、列國は今より三年後に支那が多年熱望せる稅權回復を實現せしむることにし、それ迄の處は二分五厘より二割二分五厘に達する差等附加稅率（現行の五分率に加ふるもの）を實施し、以て支那をして九千萬元見當の增收を得せしめ、その財政窮乏を救ひ、又た釐金廢止、外債整理を行はしめんとするのであつた、その附加稅率として傳へられたものは、二分五厘、五分、七分五厘、一割、一割二分五厘、一割七分五厘、二割二分五厘等であるが、我日本の貿易品は二分五厘のもの六割、五分のもの二割で、大部分低率に當るが、英米品は中間程度のもの多く、フランス品等は高率に當るものが少くなかつた、故にフランス等の不平はあつたけれども、日英米三國は大體一旦協定して居たと言ふことが出來る。思ふに支那の關稅自主權回復期まで、一九二二年ワシントン會議決定の附加稅二分五厘同贅澤品五分を適用するのも、一案であつたが、之では支那の增收三千四百萬元見當なのだから、目下の財政窮乏援助も、釐金撤廢準備も出來なくなるのであつた。故に此暫定差等稅率は支那の爲めに圖るに頗る忠實なる案であつたと言へる、併し此案は新計畫だから條約の新規定として、列國政府の批准手續を終らねば、效力が發生し得ない、故に新條約批准完了、效力發生迄即ち一年か一年半位ゐの間、支那を現在のまゝにするのも氣の毒なので、幸ひにワシントン條約で已に決定して居る附加稅率を實施し、差當り支那に三千四百萬元見當の增收を得せしめて置かうと言ふのが、實に今年四月段政までの會議の傾向であつたのである、

如何なる案でも、批評すれば批評はあらう、併し各種周圍の事情に照して、上記の案は支那にとりて目下最善のものであつたに違い無い。

次ぎに我日本から見ると今度は英米追隨の衡套を脫し多少の犧牲を覺悟して支那を友として支那國權回復の鬪士となつたのであるが、然かもその結果は、却つて我犧牲を少くす可き形勢を持ち來たのである。即ち差等稅率では我が貿易品は支那人の需要品たる關係から低率に置かれ、又た關稅自主權の回復につきては、我國は日支互惠條約でその利益を擁護し得る形勢となつたからである。

然るに此支那に執りて有利に、我國に執りても根本的に考へて不利とは言はれぬ形勢に在つた同會議が四月イギリスの態度一轉、「今のやうな支那政局の醜態では、自主權も差等稅率も駄目だ。差當りワシントン會議で既定となつて居る附加稅二分五厘、贅澤品附加稅五分の實行丈けの協定丈けに止めやう」と主張せるによつて、日英の衝突となり停頓し、最後に七月支那の

時局を理由とする全員一致の一時打切り決議で蹉跌したのは、抑々何と恨む可き成行であらう。

二

然らば此關稅特別會議が失敗を見たのは、如何なる原因である乎。

七月三日列國共同のコムミユニチは支那政府委員が列國委員と會議諸問題を討議し得るに至つて居らぬことを理由として居る、換言すれば支那刻下の政局を理由とし、罪を支那一國に歸し、列國は責任無きもの丶如く裝つて居る然もコウ言ふことになると、容易に得られ無い列國の全員一致が得られたのである。

此責任を支那に嫁した見地は正當かどうかと言ふと、無論それが少くとも原因の一として數へられ得べきは疑ひが無い、蓋し北京警衛司令であつた國民軍系の鹿鍾麟は吳佩孚、張作霖の聯合を破りて國民軍系の苦境を救ふのを窮餘の策として、本年四月九日深更、クデータを企て、執政邸を包圍し、段氏公使館區域に遁亡した、その後鹿鍾麟失敗退京と共に十七日段氏執政邸に歸り、十九日吳佩孚の段反對の聲明があり、張作霖も段氏を支持せざることと判明したので段退位に決し、二十日執政會議を最後とし、段系一連天津に去つたのである、かくて列國が事實上の政府として認めて居たものが一年半の生命で沒落し、關稅會議の支那側全權も之を指名して居た政府が無くなつたので、列國は玆に支那委員を交へざる非公式會議を開くこととなつたのである。形式的に言ふと、此事實がイギリス側のワシントン會議決定附加稅の實施のみで打ち切らうと言ふ論やら、又最近の一切無決定のまゝの會議打ち切りに一つの論據を與へたには相違ないと言へるのである、否な之ばかりでは無い。段沒落後の吳佩孚と張作霖とが骨肉相嚙ひ、斷金相結ぶの風を示しては居るもの丶、實際を見ると、互に權力を求めて紛爭があり、例の護憲、護法の問題も爭ひとなつた、又彼等の關稅會議に對する態度も非常に冷淡を極めて居たことも、列强の注目を惹かぬ譯にはいかなかつたのである、(尤も列國が大體會議打ち切りに傾いた後には國民運動の兆があり張吳の態度も變し、同會議繼續希望が述べらる丶やうになつたのである、)加ふるに一方四月北京を捨てた國民軍はドウかと言ふと、彼等は毫も戰敗したもので無く、兵力を少しも損ぜず退去したので、捲土重來の形勢がある、斯くの如き狀態は列國側に會議打ち切りの理由若くは口實の一を與ふるに到るものあつたことは、予も遺憾乍ら認むるに吝ならざるものである。

併し乍ら予をして言はしむると、列國は今更支那の政局を云

々して、會議を打ち切るにつきては、大に反省せねばならぬ點があつたである。何ぞや、支那の軍閥の爭ひは、中華民國設立後、第一代大總統袁世凱が自己の勢力を維持する爲め、その門下生若くは弟分たる軍人を諸省に配置し將軍とし（後ち督軍となつた）次で彼れ自身病沒した以來繼續し、年中行事のやうになつて居る、之は刻下のところ「常態」である。若し之を理由にして關稅會議を中止する位ゐならば昨年十月初から同會議を開催せぬ方が善かつたであらう。況んや同會議開會以前已に孫傳芳が蘇洲に兵を擧げて居り、天下又た亂るゝの勢が判明して居たでは無いか。人或は段政府が「事實上の政府としての承認」を得て居たことを說くかも知れぬが、最初から不安定であつた段政府に「事實上の承認」を與へた列國は、如何なる新政府にも同じ程度の承認を與へ得ぬ道理があらう乎。

又た支那の新政府が一時關稅會議に冷淡であつたと難ずる論につきては、予は之が近頃支那の一部殊に靑年間に現はれてゐる「列國會議の不信用」論に原因せる點あるを考へて貰ひ度い、何ぞや、支那人は之迄の苦き經驗の結果、列國會議を信用し無くなつて、支那の國權回復も、日本が曾つて行つた通りに一國一國別々の交涉に依るにあらざれば駄目だと考へ出して居る。蓋し會議になると、列國が巧みに懸引の爭ひの裡に責任を誤魔化すと言ふのである。此點は關稅問題につきても、治外法權問題につきても同樣である、コウ言ふ空氣は靑年間に存在し靑年の言議は老人連にも政客にも影響を及ぼして居る。最近の吳佩孚が「支那は勝手に關稅自主權を回復せんのみ」と傲語せるも、コウ言ふ氣持の現はれてある。過般訪日支那實業團の余日章君なども、列國會議反對論者であつた。各國と別々に交涉す可しとの論者であつた。併し已にワシントン會議決定の行懸りから、事實問題として列國會議を經ざるを得無くなつて居る以上、支那人も考へねばならぬが、列國も亦た一は支那をして列國會議を信用せざるに至らしめた自己の罪を反省し、一は寛大以て支那を誘導する先進の義務を思ひ、支那の難局に乘して、不公平の利得を長くするの狡策を捨て、速かに公正な道義的な大策を決定することこそ、至當てはあるまい乎。

思ふに列强だにその意あらば、一寸の忍耐で、段政府程度の政府を代表する關稅會議支那側委員の出現も望み得たに違ひ無い。故に予は列强の所謂支那政局を理由の一とは見るけれども、最重なる原因は列國側の事情にあることを考へねばならない。

三

列國側の事情とは何ぞ、彼等が公正の主義に適ふと否とに拘らず、之迄支那で占めて居た地位、權利、利益の放棄を欲し無いことである、之が爲めに苟くも支那の國權回復延期の口實となる可き事項發生すると、彼等は愁然、内心では欣然踴躍して之を捕へんとするのである、顧みると、我國の如き明治二十七年法權回復の條約改正、明治二十七年及四十四年稅權回復の條約改正で、西洋列强の此頑强な態度を散々經驗したのでは無かつた乎。

此態度は一二の强國に限らず、すべての國に亘つて居る、だが其魁たるはイギリスである。それは周圍の事情がイギリスをして最も早く支那に來つて地盤を造らしめ、今日でも最大の地位と利權を有せしめて居るからだ、蓋しイギリスは例の阿片戰爭で支那を擊破し、一八四二年の江寧條約第三條で香港を奪取した外に同條約第二條で支那をして廣東、厦門、福州、寧波、上海の五港を開かしめ、英人の居住と貿易を確保した、又た今日支那の「關稅一率五分」も同條約第十條を本として翌一八四三年に作つた通商章程で定められたので、言はゞ今日の問題も源をイギリスに發して居るのである、此外、矢釜しい問題たる「租界」も翌一八四三年イギリスが造つた江寧條約追加條款第七條に淵源し、今の支那に不利な片務的治外法權制度もイギリスが最も早く設定した(即ちイギリスは一八四三年、アメリカ、フランスは翌一八四四年、ロシアは一八五八年、日支間はずつと遲く日淸戰爭後の通商條約で片務制を採つたのである)、コウ言ふ具合で列國の先頭となつたイギリスは、支那國内に經濟的發展をなすことも亦た早く、殊に長江一帶を自己の勢力圈視し、日英同盟の際、日本にも讓歩を强ゐた程であつた、英人の鐵道借款、若くは鑛山に於ける地步、稅關及鹽政に於ける地位など、人の知る所である、玆に詳述する遑は無いけれども、兎に角も從來支那に優勝的地位を占め來つたイギリスが、最近支那に於ける諸種の國權回復運動を見て、その地位の動搖を憂ふることは、洵に自然であらねばならない、殊に一昨一九二四年十一月以後イギリスの政治が保守主義者、既得權利地位固持論者、國威發揚論者たる統一黨系ボルドウイン內閣に掌握せられつゝあるに照して、益々然らざるを得無いのである、

就中今度の關稅會議の經過は　イギリスをして中心面白からず感ぜしめたものがあつた。第一、支那關稅自主權回復の主張は、平素英米追隨を事とした日本が舊態を破り、開會劈頭、日置全權の口をして呼號せしめ、十一月三日　日置氏の「三年以內に於ける自主權回復」主張で列國原則承認の大勢を造り、十一月十三日伊、丁、瑞諸國が逆轉の色を示すと、又た〳〵日本

全權の大奔走となり、十九日漸く列國全權の同意を見たのであつた。イギリスは支那に對する政略から、表面自主權に反對し兼ねたけれど、其利害關係を考ふると、之は不利であつた。何ぞやイギリスは米國と共に多少の税率引上には異論が無かつた。英米品は支那國産の競爭が無いので、多少税率を引上げても、いづれ支那の消費者は之を購買す可く、即ち税率増加する丈けは支那人の肩上に轉嫁せらるゝと考へたからである。それで附加税をワシントン條約の二分五厘及五分程度から引上げて五分、七分五厘、一割とし以て支那財政の便を圖るには異存が無かつた。然かも支那に自主權回復を許すことになると、支那はそれ以上に勝手に税率を引上げ得ることとなるのである。それはイギリス品に對する支那人の需要を少くするであらうと考へられたのである。次ぎに此自主權回復は、自然税關行政に堅き地盤を造つて居るイギリスの地位を動かすのである。蓋し支那の海關は一八五四年に英人ウエード氏が中心となつて以來、レー氏　サー・ロバート・ハート氏サー・ロバート・ブレドン氏　並びに今のサー・フランシス・アグレンと變化したが、英人が總税務司に續任し、事實上之が支配者となり、之が支那の利益にもなつたが、又た如何ばかり支那に於けるイギリスの經濟的發達の便宜となつたかも知れぬ、此特殊的地位の動揺は英人の欲せざる所であらねばならぬ。その上に支那側に約せしめた「釐金廢止即ち貿易の邪魔物たる内地課税の廢止が、能く行はれ得るかドウか、之が支那の政局の爲め疑はしくなつて居ることも、英人の此傾向に油を注いだものたるは疑ひが無かつたのである、

否な自主權問題丈けでは無い。英人の態度を動した他の助因には、暫定差等税率の決定と共に之より生ずる收入の使途並びに保管方法が問題となつた點もあらう　使途は姑らく之を措き、日本等が關税收入の保管を英人系に占有せしめず、公平に各國銀行に分配せんと主張し、之が多數の同意を得る形勢となつたのは、矢張り英人の從來の地位を動かすものの一であつた。又た支那が税關に就て支那人副總税務司の任用を求め、日本側も日本人税關吏増加を求むるの意があり、自主權回復期以前にイギリスの地位の動揺が始まる可き狀態にあつたことも、英人の心を刺戟したのであらう。かくてイギリスは四月俄然ワシントン條約附加税程度の案に復歸し、同時に一切の變化を最小限に止むるの案を立て、之が日本の同意を得ぬと、最後に一轉無決定のまゝの會議打ち切りに移つたのであつた。

予は大分イギリスの事を説いた、併し之はイギリス丈けのことでは無い。他の列國も比較的利害關係の輕いと言ふ丈けで、

大體既得の狀態を維持したいとの希望には變はりが無い、殊にフランスの如きは關稅自主權にも中心、憂慮を持つが、暫定差等稅率には一層不平だ、何となればフランスの對支輸出品は贅澤品が多く、高率を課せられねばならず、今日の從價五分に比するも、一大躍進となる危險があるからである。否な々々、その他の諸國も、理義上支那の自主權回復に反對するの不公正なるを知るので、止むを得ず之に同意しつゝあるも、關稅率の引上を歡迎するものは無い。延期が出來るなら、成る程延ばさうと考へて居るのである、アメリカ全權の如き、公正の理論をなすけれども、在支米商人で關稅引上を欣ぶものは一人もない。コウ言ふ列國の空氣だから、イギリスが段政府沒落時局紛糾に乘じ打ち切り論を稱へると、遂に共鳴者續出、打ち切りの實現となつたものに外ならないのである。

要するに支那軍閥の紛々たる私鬪が支那を禍ひする大なるは勿論だ、彼等の責任は閑視するわけには行か無い。然かも「好機來る」と踴躍して之を捕ふる列國の利己主義と狡猾とは、予が同會議失敗の大原因とする所である。

四

予は上述のやうに今度の成行を見て居るのである。

併し此の際一言を加へ度いことがある、それは英米側に現はれた日本中傷の聲だ、關稅會議打切りとなり、支那側が不平の色を示すと、例に依り列國間に「責任の讓り合ひ」が始つた。たとへば英紙オプサーヴア、米紙トリビュン等に現はれた日本の狡猾論の如き是れである。此等は或は日本を以て外面支那に味方するの態度を執り乍ら、其實「自主權を與へざらん」と巧妙な駈引をなしたと誣ひ、或は「日本を以て關稅會議協定を邪魔したと說いて居る、その「協定の邪魔」云々はイギリスの「ワシントン關稅條約程度」に止めんとしたのに日本が反對したのを指すものであらう。

之は論議する迄も無い、併し日本を以て表裏反覆なるが如く說ける米紙の所論につきては、我國民も注意を要するものがある、何ぞや今回北京會議に於ける日本全權の行動は、同じく東洋民族たる帝國の使命と正義公道とに基いて立て直された新外交に副ふたものであつた。予等は過去に於ける舊式外交に對比して歡喜措く能はざるものがあつた、併し我が商人連になると、果して能く此覺醒があつたであらう乎、日支共存共營の永遠的利益を忘れて、差當りての些細の利害に捕はれ過ぎたものが無かつたであらう乎、尤も暫定差等稅率を見ると、我が貿易品に品は影響少い方であつた、我對支貿易中四割三分を占むる綿製

を始め約六割近くは二分五厘即ち最低率に當り、紙其他一割餘は五分率に當つたからである、砂糖が七分五厘率に當り、その他茶、革、絹織物、酒類等が影響を受る側にあつた。併し商人としては西洋商人同樣稅率增加期の遲延を欲するものあつたことは自然の成行でもあつた、こう言ふ民間の一部の事情の存在こそ、動もすれば東洋人に對し邪推多き歐米人をして右の如き言議をなさしめたのではなかつたらう乎、予は斯く考へるとき、我外交當局の覺醒狀態が延いて我對支關係の商人連にも遺漏無く及ばんことを切望せぬ譯にはいかぬ、これは一は外界の邪推を防ぎ、一は眞に我が公正なる新外交を此後確固にする所以だと信ずる。殊に支那關稅問題は遠からず再び列國外交の題目となるだらうと思はれるに於て、予は特に此希望を高調せねばならぬ。

「ロカルノ」條約と歐洲の經濟復興

栃倉正一

一

歐洲經濟復興問題も、それが眞に經濟的見地から考慮さるゝならば、容易に解決されるのであるが、歐洲には幾世紀の間積いな傳說的な政治的葛藤と、それに由來する怨恨と恐怖とがある爲に、さうした純經濟的解決が、得られないとは、屢々喝破せられたところである。吾にはかうした斷定の眞理を、長い間行き惱んでゐた獨逸賠償問題の經過の中に、明かに認めることが出來る。「政治的纏綿」は實に歐洲の癌であつた。これこそ米國が「光榮ある孤立」といふ利己的政策をとつて、歐洲の救濟に與みしなかつた口實であつた。

ところが最近この事情は、根本的に變化したやうな形勢に轉じた。一九二四年七月倫敦會議はドーズ案を採擇して、獨逸賠償問題を解決の緒につかしめた。更に一九二五年十月、「ロカル

ノ」會議は、歐洲の政治的安定を保障する條約を締結し、歐洲が相協力して經濟的復興に力を注ぎ得るの道を開いた。これは實に驚異すべき進展と云はねばならない。

されば「ロカルノ」條約が成立した時、歐洲の輿論が熱狂して之を讃美したのは無理もない。波蘭首相スキルゼンスキー伯は、"London Morning Post," 紙上に於て、「ロカルノの大功績は條約にあらずして、新に生れた大勢力である、ロカルノ精神は近代外交の誇りであり、民族の希望である」と述べた。佛國下院外交委員長ジョーセフ・バースルミーは、一九二五年十一月十日、巴里の Revue Politique et Parlementaire, に於て、「ロカルノ條約は政治上の功業といふよりも寧ろ新精神の表現である」と論じた。直接「ロカルノ」條約の成立に盡瘁したルーテル、ストレゼマン、ブリアン、ヴアンダーヴエデ、シアロヤ、ベネスなどが、いづれも得意で自分達の功績を、當時の新聞や、議會に於て吹聽したものである。米國輿論も、それはドーズ案の運行を確保するものであるとして其成功を祝福した。米國に於ける歐洲問題の權威フランク・サイモンズの如きは、「ロカルノ」條約の成立は、歷史上一時期を劃し新、歐洲、新時代の出現を、象徵するものであるとさへ讃美したほとであつた。(The Literary Digest Dec 23 1925; The Current History, Jan. 1925; The American Review of Reviews, Dec. 1925

然るに何事ぞ。さうした劃時代的な「ロカルノ」條約の墨痕未だ乾かざるに、歐洲はまた紛亂の危機に瀕した。それは「ロカルノ」條約が獨逸の國際聯盟加入を條件としてゐるために、國際聯盟は本年三月八日ジユネーヴに臨時總會を開催し、獨逸の加入問題を審議したのであるが、ブラジル、ポーランド、スペインの三國が獨逸と同様に常任理事國とならんとする要求を提出したので、臨時總會は大紛擾を來たし、結局九月迄延期となつたことである。來るべき九月の聯盟總會に於て、獨逸の國際聯盟加入問題は再び審議せらるゝ筈であるが、しかし獨逸の加入が實現されないとすれば、それこそ「ロカルノ」條約は一片の紙屑である。歐洲が「ロカルノ」條約を謳歌したのも束の間、今や再び不安の陰影に掩はるゝに至つた。米國の保守主義の一誌は皮肉つて言つた「國際聯盟は歐洲の紛爭をさへ處理することが出來ないから、況んや世界問題などを取扱ふ能力はない。聯盟總會の失敗は、最初より豫期せられたところで、米國が聯盟の圏外に立てるは先見の明があつたと云はねばならない」と。

二

歐洲の政治的不安の中心は、佛國の歐洲政局に於ける孤立と獨逸からの復讐に對する恐怖である。「ラインランドは歐洲の瘤であつて、ラインランドが歐洲の地圖から消え失せない限り、獨佛間の爭は止む時はない」とは、佛獨の爭鬪と歐洲の政治的不安との關係を適切に斷じてゐる言葉である。ライン河を以て佛獨の國境とすることは佛國の傳統政策であつたが、獨逸に云はすればライン地方は、久しい以前から獨逸のものであつた。アルサス・ローレン地方は、第十七世紀のウエストフアリア平和會議以來、佛國のものとなつたが、普佛戰爭の終りに獨逸から取り上げられた。巴里の平和會議では、佛國は之を獨逸から取戻したが、今後獨逸が回復して來れば、必ず佛國から奪ひ返さうとするに違ひない、とは佛國が片時も忘れない恐怖である。

佛國のかうした恐怖は、歐洲に於ける佛國の孤立的地位により一層强められた。佛國は獨逸を抑へるために、夙くから親露政策を行つたが、革命後の露國は寧ろ獨逸を援助せんとした。これに對抗する意味で波蘭を味方に入れたが、現在の波蘭は尙ほ弱國に過ぎない。おまけに國境問題から、露獨は波蘭を惡しく憎んだ。また遠き以前より英國とスラヴ民族とは近東及ボルチック地方に於て衝突し、不俱戴天の敵となつてゐるので、これが英國の同盟國である佛國に對する反感となつて現はれたことは自然である。他方に於て唯一の同盟國である英國との間にも、休戰以後、對獨政策及近東政策などに於て、利害の衝突を來たした。英國は、戰後重大なる經濟的危機に瀕してゐる。これを救ふの道は經濟的考慮を外交の先決條件とすることであつた。この點から云へば、英國はどうしても獨逸を復興させ、歐洲の經濟的回復を計つて、昔日の大市場を開拓しなければならない。米國が佛國の賴りにならぬことは云ふ迄もなく、戰後かへつて幾多の感情衝突の「インシデント」を引起したほどである。佛國が實際孤立の恐怖に惱まされたのは無理もない。

このために佛國は隨分藻搔いた。一方に於て獨逸を壓服し、獨逸の復興を妨げ、獨逸をして永久的に弱國の地位に置かんと苦心し、他方に於て白耳義、波蘭、チエツコスロヴアキアと同盟條約を締び、又羅馬尼、チエツコスロヴアキア、南スラヴ國より成れる小協商を組織して、墺、匈、勃等の舊敵國の侵略に備へた。

然しこれ丈けでは佛國は安心が出來なかつた。どうしても獨逸の侵略に對して佛國の安全を保障する同盟が欲しかつた。此

所謂安全保障問題は休戰後幾多の紆迂曲折を經たが、最近獨逸からの提案によつて、遂に「ロカルノ」條約に結晶したのである。

所謂「ロカルノ」條約は九個から成立つて居るが、其中で最も重要なのは安全保障條約である。それは、獨、白、佛がヴエルサイユ條約に定めた西部國境及緩衝帶地（Demilitarized Zone）の非侵略を約束し、すべての紛爭を平和的に解決することを誓約し、英伊二國は保障者となり武力的援助を約したものである。東部國境即ち佛波、佛チエコ間の安全保障條約には、英伊は直接利害關係がないので之に參加せず、佛國が單獨で保障者となり、相互の武力的援助を約してゐる。この外に、獨白、獨佛、獨波、獨チエコ間には、紛爭を仲裁裁判に依り平和的に解決するといふ仲裁條約が締結された。是等の條約はいづれも獨逸が國際聯盟に加入することを前提條件としてゐるもので、聯合國は獨逸を大國の地位に引上げて、常任理事國とすることを內約した。

三

「ロカルノ」條約に依り、佛國は安全を保障されたから、佛國の恐怖は消滅した譯であつた。從つて獨逸の國際聯盟加入問題はスラ／＼と運んで、容易に結了を見ること〻思はれたのに、事實はこれに反し、ブラジル、波蘭、西班牙等の常任理事國割込運動のために、聯盟總會は決裂するに至つた。これは一體何故であらう。歐洲問題の專門家はいづれも、是等三國の背後には、大國の陰謀と指金とがあるといふに一致してゐる。本年二月二十日の倫敦 New Statesman の如きは、「三國を教唆して茲に至らしめたものは佛國である。佛國が三國を操縦して理事會に割込ましめんとするのは、三國を佛國政策の手先と爲し、獨逸に當らしめんとする魂膽に外ならない。三國割込の事由は口實辯柄であつて、實は佛國が猶ほ獨逸を恐怖憎忌し、三國を爪牙として自家の用に供せんと欲するものである云々」と評してゐる。これが事實とすれば佛國の恐怖と怨恨は安全保障條約によつても尙ほ消滅しないのである。

歐洲政局の確執を深く詮索するのは本文の目的ではない。茲では、歐洲は尙ほ傳統的な政治的纏縛から脫し得ない。歐洲がかうした桎梏の下にある限り、其經濟的回復は到底期待し得ない、といふことを力說すればよい。

モールトンはかう言つてゐる。（America and the balance Sheet of Europe: Ch XVII）歐洲の政治思想は經濟思想よりも、其發達がよほど後れてゐる。過去四十年間に於て、生產は大規模となり、工業は驚くべきほど進步し、それと同時に諸國家間の

經濟關係は益々密接を加へて來たが、しかし政治思想の發達は著しく停滯し、その經濟的發達を甚しく防害してゐる。即ち政治思想は今尙ほ經濟發達が今日のごとく諸國を密接に關係せしめなかつた昔のまゝの狀態にある。歐洲大戰の結果、歐洲の經濟狀態は極度に惡化し、戰後の復興は經濟上の國際主義によつてのみ、はじめて實現さるゝのである。しかるに平和克復が齎したものは、じつに諸國間の憎惡と復讐と不信だけである。歐洲政治家の陰蔽、虛僞、猜疑から出づる利己的政策は、歐洲の經濟上及び社會上の回復はおろか却つて其混亂を、ますく深くするばかりである。歐洲の民主政治の指導者は今や、再び「默示錄の四騎士」(The Four Horsemen of the Apocalypse)——勝利、戰爭、饑餓、死亡——の手に陷らんとしてゐる、と。これは必ずしも酷評といふことは出來ない。

四

歐洲各國の經濟力の度合は、決して同一でない。しかし歐洲全體は一つの經濟的單位である。一國の興廢はやがて他國の興廢である。歐洲諸國は畢竟一つの船に乘つてゐるのである。もし波蘭、芬蘭、匈牙利、チエコスロヴアキア、バルカンが經濟に衰微すれば、その產業及貿易に於て、大部分東部歐羅巴市場に依據してゐた獨逸が、甚しい打擊を受けることは云ふ迄もない。そして獨逸がその爲に、又自國の困窮の爲に、中歐又は東歐の道を辿るとすれば、中立國又は聯合國の經濟及政治生活が——それによつて受くる影響は實に深大であらう。

歐洲經濟の有機的相關性は、近代獨逸の經濟的發達及び其影響の中に、最もよく例證せられる。十九世紀の後半、二十世紀の初頭に於ける獨逸の財政經濟組織の驚くべき進步は、この時期に於ける歐洲諸國の異常なる經濟的發達に、大なる力を與へた。獨逸產業發達の結果、獨逸人口は一八七〇年の四千萬から一九一四年の六千八百萬に增加し、それと共に國民の生活程度も驚くほど向上した。これは歐洲中立國及聯合國に、非常の好影響を與へた。一八七〇年前には、獨逸は大部分自給自足の貧しい農業國であつた。然るに其後數十年間に豐饒國と化し、伊、佛、蘭、スカンデナヴイアン、英、米等の輸出品の主なる購買國となつた。獨逸は其工業に必要な原料品の大部分を外國から輸入し伊、佛、白等から多くの精製品と贅澤品とを輸入した。同時に自國の精製品を歐洲の東西南部に輸出したから、獨逸の繁榮は他の歐洲諸國にとつて大なる利益であつた。獨逸の輸出貿易は、獨逸の保護主義者に依つて大なる攻擊をうけたけれども、これ獨逸をして莫大の輸入品の購買を可能ならしめたもの

所謂安全保障問題は休戰後幾多の餘迂曲折を經たが、最近獨逸からの提案によつて、遂に「ロカルノ」條約に結晶したのである。

所謂「ロカルノ」條約は九個から成立つて居るが、共中で最も重要なのは安全保障條約である。それは、獨、白、佛がヴエルサイユ條約に定めた西部國境及緩衝帶地 (Demilitarized Zone) の非侵略を約束し、すべての紛爭を平和的に解決することを誓約し、英伊二國は保障者となり武力的援助を約したものである。東部國境即ち佛波、佛チエコ間の安全保障條約には、英伊は直接利害關係がないので之に參加せず、佛國が單獨で保障者となり、相互の武力的援助を約してゐる。この外に、獨白、獨佛、獨波、獨チエコ間には、紛爭を仲裁裁判に依り平和的に解決するといふ仲裁條約が締結された。是等の條約はいづれも獨逸が國際聯盟に加入することを前提條件としてゐるもので、聯合國は獨逸を大國の地位に引上げて、常任理事國とすることを內約した。

三

「ロカルノ」條約に依り、佛國は安全を保障されたから、佛國の恐怖は消滅した譯であつた。從つて獨逸の國際聯盟加入問題はスラ／＼と運んで、容易に結了を見ること丶思はれたのに、事實はこれに反し、ブラジル、波蘭、西班牙等の常任理事國割込運動のために、聯盟總會は決裂するに至つた。これは一體何故であらう。歐洲問題の專門家はいづれも、是等三國の背後には、大國の陰謀と指金とがあるといふに一致してゐる。本年二月二十日の倫敦 New Statesman: の如きは、「三國を教唆して玆に至らしめたものは佛國である。佛國が三國を操縱して理事會に割込ましめんとするのは、三國を佛國政策の手先と爲し、獨逸に當らしめんとする魂膽に外ならない。三國割込の事由は口實辭柄であつて、實は佛國が猶ほ獨逸を恐怖憎忌し、三國を爪牙として自家の用に供せんと欲するものである云々」と評してゐる。これが事實とすれば佛國の恐怖と怨恨は安全保障條約によつても尙ほ消滅しないのである。

歐洲政局の確執を深く詮索するのは本文の目的ではない。玆では、歐洲は尙ほ傳統的な政治的纒綿から脫し得ない。歐洲がからした桎梏の下にある限り、其經濟的回復は到底期待し得たい、といふことを力說すればよい。

モールトンはかう言つてゐる。(America and the balance Sheet of Europe: Ch XVII) 歐洲の政治思想は經濟思想よりも、其發達がよほど後れてゐる。過去四十年間に於て、生産は大規模となり、工業は驚くべきほど進歩し、それと同時に諸國家間の

經濟關係は益々密接を加へて來たが、しかし政治思想の發達は著しく停滯し、その經濟的發達を甚しく防害してゐる。即ち政治思想は今尙ほ經濟發達が今日のごとく諸國を密接に關係せしめなかつた昔のまゝの狀態にある。歐洲大戰の結果、歐洲の經濟狀態は極度に頽廢し、戰後の復興は經濟上の國際主義によつてのみ、はじめて實現さるゝのである。しかるに平和克復が齎したものは、じつに諸國間の憎惡と復讐と不信だけである。歐洲政治家の隱蔽、虛僞、猜疑から出づる利己的政策は、歐洲の經濟上及び社會上の回復はおろか却つて其混亂を、ますます深くするばかりである。歐洲の民主政治の指導者は今や、再び「默示錄の四騎士」(The Four Housemen of the Apocalypse)——勝利、戰爭、饑餓、死亡——の手に陷らんとしてゐる、と。これは必ずしも酷評といふことは出來ない。

四

歐洲各國の經濟力の度合は、決して同一でない。しかし歐洲全體は一つの經濟的單位である。一國の興廢はやがて他國の興廢である。歐洲諸國は畢竟一つの船に乘つてゐるのである。もし波蘭、芬蘭、匈牙利、チエコスロヴアキア、バルカンが經濟的に衰微すれば、その產業及貿易に於て、大部分東部歐羅巴市場に依據してゐた獨逸が、甚しい打擊を受けることは云ふ迄もない。そして獨逸がその爲に、又自國の困窮の爲に、中歐又は東歐の道を辿るとすれば、中立國又は聯合國の經濟及政治生活が、それによつて受くる影響は實に深大であらう。

歐洲經濟の有機的相關性は、近代獨逸の經濟的發達及び其影響の中に、最もよく例證せられる。十九世紀の後半、二十世紀の初頭に於ける獨逸の財政經濟組織の驚くべき進步は、この時期に於ける歐洲諸國の異常なる經濟的發達に、大なる力を與へた。獨逸產業發達の結果、獨逸人口は一八七〇年の四千萬から一九一四年の六千八百萬に增加し、それと共に國民の生活程度も驚くほど向上した。これは歐洲中立國及聯合國に、非常の好影響を與へた。一八七〇年前には、獨逸は大部分自給自足の貧しい農業國であつた。然るに其後數十年間に豐饒國と化し、伊、佛、蘭、スカンデナヴイアン、英、米等の輸出品の主なる購買國となつた。獨逸は其工業に必要な原料品の大部分を外國から輸入し伊、佛、白等から多くの精製品と贅澤品とを輸入した。同時に自國の精製品を歐洲の東西南部に輸出したから、獨逸の繁榮は他の歐洲諸國にとつて大なる利益であつた。獨逸の輸出貿易は、獨逸の保護主義者に依つて大なる攻擊をうけたけれども、これ獨逸をして莫大の輸入品の購買を可能ならしめたもの

である。かうして獨逸及他の工業國は、專門生産と交換の過程を通じて大に繁榮した。

また獨逸金融財政の發達は、ライン河以東の歐洲諸國の人口及び生産能力の增加の主なる要素となつた。獨逸は墺地利とともに、大戰前の數十年間は、東歐並に南歐諸國の經濟發達に必要な金融を引受けた。これらの諸國の經濟生活は、伯林、ハンブルグ、フランクフオート、維納の金融中心市場より流れ出たのである。獨逸の海運及商業組織が、中歐及東歐の經濟發達に大なる利益を與へたことも見逃してはならない。

これによつて見ても歐洲諸國が如何に密接な相互關係依據關係を有するかを認めることが出來る。したがつて歐洲諸國が、戰爭心理や、傳來の政治的怨恨や、復讐の恐怖のために、互に排他的利己政策をとつて相對峙してゐることは甚だ惜しむべきことである。歐洲は相戮力して戰後の復興といふ大事業に精進すべき喫緊の必要に迫つて居る。

現在の如き國際經濟の時代に於ては　歐洲の經濟的回復が世界各國の經濟回復に重大の關係を有することは明白な事實である。國際經濟の有機的相關性については、吾々は多くの實例を必要としないであらう。かの一八八〇年代のアルゼンチンの大投機熱が、巨額の不換紙幣の發行を餘儀なくし、一八九〇年に至り遂に恐慌をひき起した時は、その爲に英國の大國際銀行の一たりし「ベエアリング・ブラザース」會社は破産し、それは延いて歐洲の一般的危機を導かんとし、米國の金融市場も甚しい害毒をうけた。又一九〇六年の日本及埃及の恐慌は、一九〇七年の米國恐慌の原因を助成し、米國の恐慌は當時世界のいたるところに反響した。例へば中央亞弗利加より、サハラ沙漠を經て、トリポリーに至る行商貿易の如きさへ、痛烈な影響を被つたさうである。現下の世界的不景氣の如きは、先づ大正九年春の日本の市場崩落にその端を發し、それより米國に走り、南米に飛び、中米に至り、遂に歐洲、濠洲、埃及、印度、カーペー植民地、暹羅にまで及んだ。これは不景氣の實例であるが、近代に於けるいろ〱の時期に起つた景氣が　世界の到る處に反響した例は、吾々が列國經濟史を繙く時には、各所に發見することが出來る。從つて、若し歐洲が政治的確執と爭鬪とに見切りをつけて經濟的復興を成就し得るならば、世界各國の經濟はその特典に浴するに違ひない。

三

吾々は來るべき九月の國際聯盟總會が、獨逸加入問題を無事に解決して、「ロカルノ」條約を維持せんことを勸奬して已まな

い。ロカルノ條約は決して佛國人と獨乙人とが完全に和解したことを意味しない。兩國民を分離した傳統的な態度、猜疑心、野心、憧憬は、さう急激に、又根本的に消滅しまい。限りなき世紀の間、歐洲を分離した民族的葛藤は、マヂオール湖畔で調印された一片の文書によつて、直に分解するものでなからう。しかし「ロカルノ」條約は、歐洲が戰勝者に取つても、戰敗者にとつても、等しく致命的な無政府混亂の狀態から脫し、その紛紜を決濟して生き殘らんとする決意を象徵するものである。それは歐洲の自殺からの再生である。それは歐洲の諸民族が齊しく衰頽に瀕したるに氣付き、もしさうした相反せる野心、憧憬を追求し、怨恨を養ひ、從來のやうな膺懲手段を執つてゐるならば、歐洲全民族は遂に滅亡の底に沈む外はないといふことを了解し初めたことを意味する。休戰以來約七ケ年の悲慘なる經驗に鑑み、歐洲の眞の經濟的回復は、協同行爲によつてのみ可能である、即ち共同利益のために、古き衣を脫ぎ捨てゝ新生し、共同の机を圍んで、相互の確執を調和し、相互の經濟的復興をなさうと誓約したことを意味する。

かうした「ロカルノ」精神は、いくたの好結果を産むに違ひない。第一に佛獨は、從來不安と猜疑とが一掃さるゝ結果、過去二ケ年間政治的葛籐のために行き惱んでゐた佛獨經濟協定を確保し得るであらう。そして佛、白、獨の鐵と石炭とは、新たなる經濟的結合をなすであらう。又各國特に獨波の感情的な關稅戰爭、通商障害の如きも撤廢さるゝであらう。有名なジユネーヴ議定書の草案者にして、チエコスロヴアキア外相エドワード・ベネス博士は、本年一月號"Foreign Affairs"に於て、「ロカルノ條約の心理的、道德的影響を敘した後、露國も全歐洲と協定して第二の「ロカルノ」條約を産むは、遠きにあらざるべく、米國もまた將來に於て歐洲に對する從來の態度方針を變更するに違ひないと豫想してゐる。

サイモンヅは一九二五年十二月號"Ameican Review of Reviews"に於て、「ロカルノ」條約はドーズ案の實行を完成せんとするものであると述べてゐる。「ロカルノ條約はドーズ案が經濟的に實現したることを、政治的に實行した。ロンドンとドーズ案、ロカルノと安全保障條約、これは歐洲が正氣に歸つた二つの目標である。ドーズ案は既に遠大なる變化を開始した。安全保障條約の効果は此後の問題なるも、この二つは相聯合して歐洲の經濟的回復を大に促進するものである」と。（一九二六・七・一〇）

木崎村農民學校問題所感

平林初之輔

新潟縣木崎村の小作爭議は、地主側の頑强なる暴壓的態度と、小作人側の鞏固なる階級的團結と、更に全國の無産階級諸團體の熱誠な應援とによつて、益々鬪爭の性質と範圍とを發展せしめた。とりわけ、小作人が獨立の小學校を經營して、ブルジョア教育に…………現實に、具體的に發表したことは、吾が國の階級鬪爭史上に於て劃期的の出來事であるといはねばならぬ。

この出來事は、いろ〳〵な方面から考察するに足る重要性を、たしかにもつてゐる。何となれば、それは鬪爭の過程に於て、殆んど自然に起つて來た事實であつて、何人の煽動や使嗾によるものでもないからである。そして、それは、吾々が平常何の氣なしに「國民」教育と呼んでゐるものゝ、階級的性質を、實際に於て示したものだからである。

勿論、小學兒童を同盟休校せしめたことは、最初は、…………として、勝利の手段としてゞあつたらうと私は思ふ。こゝで、何も知らない兒童を階級鬪爭の渦中へひきいれることの可否が問題になる。そして、それは實際一部の人の間では問題になつたのである。私は、この問題を、單に戰術として見る限りに於ては、かくの如き事態に至つたことを悲しむものであり、また、今後の鬪爭がさういふ過程をふまないことをさへ希望するものである。恐らく木崎村の小作人諸氏もさうであつたらうと思ふ。彼等は涙を呑んで此の擧に出でたのであらうと思ふ。何となれば、かくの如き戰術は彼等にとつて………だからである。彼等は此の一擧によりて、單に地主のみならず自治團體及び國家の行政當局を相手として戰はねばならぬからである。そして、今日の狀態では、かくの如き公共勢力を密接に地主の勢力と結合させることは、小作人側にとつて非常に不利な形勢をかもすからである。しかしながら、この不利はまだ忍ぶことができても、一時たりとも兒童の教育を中絕することは、よし、それが好ましからぬ教育を含んでゐる場合でも、父兄と

しては涙なきを得なかつたであらうと思ふ。

然るに彼等は、此等の事情にも拘らず…………………ことを敢へてしたのである。それは、彼等が全く爭議の武器を奪はれてゐるといふ事實を見ずしては解けない謎である。彼等に與へられた武器は、たゞ團結だけである。彼等には金力もなければ、暴力も封ぜられてゐる。商議によつて解決されない時には、たゞ團結によつて、横暴な地主と一切の接觸を斷絶すること以外に方法はないのである。然るに、有力者即ち地主若しくはその藥籠中の人物に圍繞されてゐる小學校に、兒童を通はせておくことは、地主側に學校を利用されるおそれが十分にある。それは、彼等にとつて誰一の武器である團結の破綻を意味する。彼等が、涙を呑んで、兒童の同盟休校を決行するに至つたのは實に……………すといふ場合に立ち至つてゐたのである。私が、原則的に、理論的に、「兒童を爭議の渦中に投ずる」ことに反對しつゝ、彼等の行動を……せざるを得ないのはそのためである。吾々は、さういふ抽象的な議論に興味をもつ前に、彼等の心事に一掬同情の涙をわかつべきであらう。

二

併しながら、その後の爭議の發展は、この問題を、單なる爭議の戰術、勝利のための手段として解することを不可能にした。少なくとも不十分にした。それは、漸次明確な一つの目的を形成しつゝある。彼等は、彼等自身で學校を經營して、彼等自身の子弟を教育しようといふ決心を抱くに至つたのである。それは正に階級鬪爭の戰線の教育への擴大にほかならぬ。それは兒童の教育を階級爭鬪のために犧牲にするのではなくて、兒童のための階級鬪爭となつて來たのである。教育の拒絶ではなくて、新しい教育の建設になつて來たのである。さうなつて來ると、階級鬪爭を認める人にとつては、是非の問題ではなく、たゞ、ひたすら、その成功を希ふべき問題となつてしまつたと見なければならぬ。何故かなら、今日の教育の背後に、支配階級の姿を發見しないためには理性を拋棄してしまふ必要があるからである。そして、その當然の結論は、無産階級の獨立教育に外ならぬからである。

けれども、實際問題としては、これには容易ならぬ困難が伴ふことを十分に認識しなければならぬ。そして、木崎村の小學校は、現にその困難に逢着してゐるのだ。第一は敷地の問題である。小作人には土地がない。しかるに學校は土地の上に建設しなければならぬ。今回の場合では、新學校敷地の所有者某

は問題の地主眞島某と結托して、或はその使嗾によりて、件の敷地に立入禁止を執行したといふことである。土地の使用權よりも土地の所有權を重視して制定された今日の法律では（私は法律のことはわからぬが、）この地主の行爲は合法的となつてゐることだらうと私は思ふ。若しさうであるならば、地主側が、飽までこれを楯にして頑張る場合には、此の問題は立法問題と關聯して來るであらう。そして小作人は、まづ、立入禁止の如き手段を禁止する法律を獲得しなければならぬだらう。もとより、これは爭議の政治問題への發展であるから、今回の木崎村の場合が、何等かの形で解決されても、それとは獨立に、全無產農民の運動として續行さるべきものであらう。

第二に、當局者が、地主側の運動に動かされて、この種の小學校を認可しないといふ場合も考へ得られる。これは、私立の小學校が認可されてゐる以上、法的に根據のないものであらうから、小作人側は、現在の法律に於て、十分に戰ふことができるであらう。富豪の經營する　若しくは富豪の寄附金によりて經營する小學校が認可されて、小作人の經營する小學校が認可されないといふことは、明かに立法の適用の平等性と矛盾してゐる。だから、かういふ場合は考へ得られるといふに止まり、恐らく實際には起るまいと思はれる。

三

最後に、私は幸にして新學校が愈々開校の運びに至つた場合を豫想して、そこで如何なる教育をさづくべきかの問題を考究して見ようと思ふ。

これは換言すれば、無產階級の…………………………の意味如何といふ一般的性質を帶びた問題となる。尤も、現在の小學校令の範圍を出られないといふ制限は當面の問題としては、理論と實際とを少なからず異つたものにするではあらうが。

私は或る人々の主張するやうに、小學校の教育に極端な階級的觀念を皷吹することは不必要だといふ意見に傾いてゐる。たゞ今日の教育から、階級的要素を排除するといふ消極的な程度で十分であると考へてゐる。かう言へば、或る人は兒童のうちから明確な階級意識を植ゑつけておかなければ、階級戰爭に於ける有力な鬪士は得られないと反駁するかも知れない。けれども、社會の階級的性質を理解することは、兒童の頭腦には、あまりに過重な負擔である。これに反して、ブルジョア的偏見のない頭になら、相當の年齢に達してからでも、階級社會の矛盾を理解することは容易である。

それればかりではない。教師に適當な人が得られない場合は、斯くの如き教育は、兒童の純なる頭腦を、不必要な偏見を植ゑつけることにならぬとも限らぬ。さうして、階級意識の代りに個人的憎惡を植ゑつけられ、却つて眞の階級闘爭に好ましからぬ結果を及ぼすやうなことになるかも知れぬ。

私は、小作人の兒童なるが故に、地主の子供に媚びたり、これを恐れたり、あがめ奉つたりして、自分を卑下するやうなことを希まないと同時に、小作人の兒童なるが故に、地主の子供を憎んだり、輕蔑したりすることものぞまない。小作人の子供も地主の子供も平等に、手を握りあひ、その間に何等の成心もないやうな狀態をのぞむものである。それは正に今日の狀態の正反對である。それは階級意識の麻痺ではなくて、階級意識の徹底であると私は信ずるのである。特に兒童の場合には、少しでも誤つた偏狹な階級意識よりも、寧ろ階級意識のないことをよりのぞましいと私は思ふのである。勿論階級意識がないといふことは、ブルジョアジイの支配下に無産階級が獨立の意識を……させられてゐる今日のやうな狀態をさすのでないことだけは誤解のないやうに繰り返してのべておく。

無産兒童教育に於ける、私のこの考へ方には相當異論があると思ふし、私自身も、確乎たる判断に到達してゐるわけではない。たゞ私の現在の氣持ちは、以上のやうな言ひ表はし方を私に適當と思はせたのである。

その他、木崎村の農民小學校の問題は、上級教育機關との聯絡の問題等の如き、重要な實際問題を含んでゐると同時に、この問題が他の地方へ波及してゆく可能性如何の如きも考へて見る必要があるであらう。けれども、私は、今は最も重要と思はれる二三の點について愚見をのべるにとゞめることにしておく。（完）

は問題の地主眞島某と結托して、或はその使嗾によりて、作の敷地に立入禁止を執行したといふことである。土使の使用權よりも土地の所有權を神聖視して制定された今日の法律では（私は法律のことはわからぬが）、この地主の行爲は合法的となつてゐることだらうと私は思ふ。若しさうであるならば、地主側が、飽までこれを楯にして頑張る場合には、此の問題は立法問題と關聯して來るであらう。そして小作人は、まづ、立入禁止の如き手段を禁止する法律を獲得しなければならぬだらう。もとより、これは爭議の政治問題への發展であるから、今回の木崎村の場合が、何等かの形で解決されても、それとは獨立に、全無産農民の運動として續行さるべきものであらう。

第二に、當局者が、地主側の運動に動かされて、この種の小學校を認可しないといふ場合も考へ得られる。これは、私立の小學校が認可されてゐる以上、法的に根據のないものであらうから、小作人側は、現在の法律に於て、十分に戰ふことができるであらう。富豪の經營する　若しくは富豪の寄附金によりて經營する小學校が認可されて、小作人の經營する小學校が認可されないといふことは、明かに立法の適用の平等性と矛盾してゐる。だから、かういふ場合は考へ得られるといふに止まり、恐らく實際には起るまいと思はれる。

三

最後に、私は幸にして新學校が愈々開校の運びに至つた場合を豫想して、そこで如何なる教育をさづくべきかの問題を考究して見ようと思ふ。

これは換言すれば、無産階級の…………………の意味如何といふ一般的性質を帶びた問題となる。尤も、現在の小學校令の範圍を出られないといふ制限は當面の問題としては、理論と實際とを少なからず異つたものにするではあらうが。

私は或る人々の主張するやうに、小學校の教育に極端な階級的觀念を鼓吹することは不必要だといふ意見に傾いてゐる。たゞ今日の教育から、階級的要素を排除するといふ消極的な程度で十分であると考へてゐる。かう言へば、或る人は兒童のうちから明確な階級意識を植ゑつけておかなければ、階級戰爭に於ける有力な鬪士は得られないと反駁するかも知れない。けれども、社會の階級的性質を理解することは、兒童の頭腦には、あまりに過重な負擔である。これに反して、ブルジョア的偏見のない頭にならば、相當の年齡に達してからでも、階級社會の矛盾を理解することは容易である。

そればかりではない。教師に適當な人が得られない場合は、斯くの如き教育は、兒童の純なる頭腦を、不必要な偏見を植ゑつけることにならぬとも限らぬ。さうして、階級意識の代りに個人的憎惡を植ゑつけられ、却つて眞の階級鬪爭に好ましからぬ結果を及ぼすやうなことになるかも知れぬ。

私は、小作人の兒童なるが故に、地主の子供に媚びたり、これを恐れたり、あがめ奉つたりして、自分を卑下するやうなことを希まないと同時に、小作人の兒童なるが故に、地主の子供を憎んだり、輕蔑したりすることをものぞまない。小作人の子供も地主の子供も平等に、手を握りあひ、その間に何等の成心もないやうな狀態をのぞむものである。それは正に今日の狀態の正反對である。それは階級意識の麻痺ではなくて、階級意識の徹底であると私は信ずるのである。特に兒童の場合には、少しでも誤つた偏狹た階級意識よりも、寧ろ階級意識のないことをよりのぞましいと私は思ふのである。勿論階級意識がないといふことは、ブルジョアジイの支配下に無產階級が獨立の意識を……させられてゐる今日のやうな狀態をさすのでないことだけは誤解のないやうに繰り返してのべておく。

無產兒童教育に於ける、私のこの考へ方には相當異論があると思ふし、私自身も、確乎たる判斷に到達してゐるわけではない。たゞ私の現在の氣持ちは、以上のやうな言ひ表はし方を私に適當と思はせたのである。

その他、木崎村の農民小學校の問題は、上級教育機關との聯絡の問題等の如き、重要な實際問題を含んでゐると同時に、この問題が他の地方へ波及してゆく可能性如何の如きも考へて見る必要があるであらう。けれども、私は、今は最も重要と思はれる二三の點について意見をのべるにとゞめることにしておく。（完）

岸田國士著

（再刷出來）

言葉・言葉・言葉

價壹圓八十錢
送料金二十錢

新感覺派の眉

我文壇で一ばんの新空氣。華かな含蓄のある言葉、なんと素破らしい言葉だろう、新感覺の美しき眉といふ形。新感覺とは何ぞ！かくの如きものを云ふ！あの顔、あの聲、巴里素描、夏の夕、女優、ふらんす役者、玉突、チロルの旅！等、等二十八篇の一つ一つが若々しき異常の光を發す。ここに描かれた甘美の世界、大正十五年にこれほど輝かしい、そしていきいきするはなやかさを齎らした文人が又と他にあろうか。本書は出版後旬日にして再刷するに至つた。氏の隨筆は新進作家中全く他に類なき偉材である。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

共産村めぐり

松川二郎

共産村といふ言葉がおもしろくなければ、經濟上の共同生活を爲しつゝある村としてもよい。我が國に於ける、共産村の實例として、おのおの異つた歴史と、異つたカラアとを有する

熱海町初島
伊豆御藏島
上總三島村
伊豆白濱村

に就て、視察したる處を有のまゝに、少しも誇張する所なく報告する。社會研究家に取つては、何程か參考ともならうと考へたからである。コマゴマと數字を入れたのも、全くそれが爲である。殊に白濱村では、私は或る大なるショックを受けた、殆んど理想に近い生活である。特に御研究を願ひたいとおもふ。

熱海初島の共産生活

共産制に絡む戀のロマンス

共産村と云へば、『伊豆の初島のことか』といはれる位有名な小島である。明治二十一二年頃三浦謙之助氏に依つて、同三十四年には内田銀藏氏によつて、調査報告せられたことがあり、更に二三年前に至つて茅原華山氏が内觀といふ雜誌に書かれた相であるし、報知新聞も五六回に亙つて連載した　之と前後して私も亦讀賣新聞紙上で紹介したことがある。しかし本誌の讀者の凡てが、それ等の内の一つを讀んで、すでに初島の共産生活の如何なるものであるかを知つて居らるるとは豫定し難いから、他の共産村との比較研究上、私は更めて爰に初島の共産生活について、大要を記述するの必要を感ずる。

初島は熱海や伊豆山温泉から東南方（約十基米）、伊東温泉からは東北（約十基米）の海上に眺められ、この方面の温泉客に取ては古くからお馴染の島で、直徑ほぼ一基米、ぐるりと一巡りしても一里には足りない離れ小島である。行政上は熱海町に屬してゐるが、郵便は網代局の所管で隔日一回の集配が行はれてゐる。網代が一番近く、正東八基米の距離にあつて、漁獲物

岸田國士著（再刷出來）

言葉・言葉・言葉

價壹圓八十錢
送料金二十錢

新感覺派の眉

我文壇で一ばんの新空氣。華かな含蓄のある言葉、なんと素破らしい言葉だろう、新感覺の美しき眉といふ形。新感覺とは何ぞ！かくの如きものを云ふ！あの顏、あの聲、巴里素描、夏の夕、女優、ふらんす役者、玉突、チロルの旅！等、等二十八篇の一つ一つが若々しき異常の光を發す。ここに描かれた甘美の世界、大正十五年にこれほど輝かしい、そしていきいきするはなやかさを齎らした文人が又と他にあろうか。本書は出版後旬日にして再刷するに至つた。氏の隨筆は新進作家中全く他に類なき偉材である。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

共産村めぐり

松川二郎

共産村といふ言葉がおもしろくなければ、經濟上の共同生活を營しつゝある村としてもよい。我が國に於ける、共産村の實例として、おのおの異つた歴史と、異つたカラアとを有する

熱海町初島
伊豆御藏島
上總三島村
伊豆白濱村

に就て、視察したる處を有のまゝに、少しも誇張する所なく報告する。社會研究家に取つては、何程か參考ともならうと考へたからである。コマゴマと數字を入れたのも、全くそれが爲である。殊に白濱村では、私は或る大なるショックを受けた、殆んど理想に近い生活である。特に御研究を願ひたいとおもふ。

熱海初島の共産生活

共産制に絡む戀のロマンス

共産村と云へば、『伊豆の初島のことか』といはれる位有名な小島である。明治二十一二年頃三浦謙之助氏に依つて、同三十四年には内田銀藏氏によつて、調査報告せられたことがあり、更に二三年前に至つて茅原華山氏が内観といふ雜誌に書かれた相であるし、報知新聞も五六回に亘つて連載した、之と前後して私も亦讀賣新聞紙上で紹介したことがある。しかし本誌の讀者の凡てが、それ等の内の一つを讀んで、すでに初島の共産生活の如何なるものであるかを知つて居らるるとは豫定し難いから、他の共産村との比較研究上、私は更めて爰に初島の共産生活について、大要を記述するの必要を感ずる。

初島は熱海や伊豆山溫泉から東南方（約十基米）、伊東溫泉からは東北（約十基米）の海上に眺められ、この方面の溫泉客に取ては古くからお馴染の島で、直徑ほぼ一基米、ぐるりと一巡りしても一里には足りない離れ小島である。行政上は熱海町に屬してゐるが、郵便は網代局の所管で隔日一回の集配が行はれてゐる。網代が一番近く、正東八基米の距離にあつて、漁獲物

岸田國士著

（再刷出來）

言葉・言葉・言葉

價壹圓八十錢
送料金二十錢

新感覺派の眉

我文壇で一ばんの新空氣。華かな含蓄のある言葉、なんと素破らしい言葉だろう、新感覺の美しき眉といふ形。新感覺とは何ぞ！かくの如きものを云ふ！あの顔、あの聲、巴里素描、夏の夕、女優、ふらんす役者、玉突、チロルの旅！等、等二十八篇の一つ一つが若々しき異常の光を發す。ここに描かれた甘美の世界、大正十五年にこれほど輝かしい、そしていきいきするはなやかさを齎らした文人が又と他にあろうか。本書は出版後旬日にして再刷するに至つた。氏の隨筆は新進作家中全く他に類なき偉材である。

發行所
東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二二番
改造社

共産村めぐり

松川二郎

共産村といふ言葉がおもしろくなければ、經濟上の共同生活を營しつゝある村としてもよい。我が國に於ける、共産村の實例として、おのおの異つた歷史と、異つたカラアとを有する

熱海町初島
伊豆御藏島
上總三島村
伊豆白濱村

に就て、視察したる處を有のまゝに、少しも誇張する所なく報告する。社會研究家に取つては、何程か參考ともならうと考へたからである。コマゴマと數字を入れたのも、全くそれが爲である。殊に白濱村では、私は或る大なるショックを受けた、殆んど理想に近い生活である。特に御研究を願ひたいとおもふ。

熱海初島の共産生活

共産制に絡む戀のロマンス

共産村と云へば『伊豆の初島のことか』といはれる位有名な小島である。明治二十一二年頃三浦謹之助氏に依つて、同三十四年には內田銀藏氏によつて、調査報告せられたことがあり、更に二三年前に至つて茅原華山氏が內観といふ雜誌に書かれた相であるし、報知新聞も五六回に亘つて連載した。之と前後して私も亦讀賣新聞紙上で紹介したことがある。しかし本誌の讀者の凡てが、それ等の內の一つを讀んで、すでに初島の共産生活の如何なるものであるかを知つて居らるるとは豫定し難いから、他の共産村との比較研究上、私は更めて爰に初島の共産生活について、大要を記述するの必要を感ずる。

初島は熱海や伊豆山溫泉から東南方（約十基米）、伊東溫泉からは東北（約十基米）の海上に眺められ、この方面の溫泉客に取ては古くからお馴染の島で、直徑ほぼ一基米、ぐるりと一巡りしても一里には足りない離れ小島である。行政上は熱海町に屬してゐるが、郵便は網代局の所管で隔日一回の集配が行はれてゐる。網代が一番近く、正東八基米の距離にあつて、漁獲物

の賣却、日用物資の購入等は凡て網代港に於て行はれ、三月から七月に至る間は日日朝夕二回の便船があるから、もし初島を視察せんとする人は、網代から行くのが一番便利である。

實朝の歌に『箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ』とある沖の小島は、即ち此初島のことであつて、その「お濱場のような」島影を望みつつ、旅客は誰でも一度は次のような一條のローマンスを聴かされたに相違ない。

ーー昔、初島の少女が、網代の青年に戀をした　毎年七月下旬釣鐘草が灌木の間に咲みだれる頃に、島内唯一の神祠である初木神社の祭禮が行はれて、此日は神輿が渡る、山車が出る、青年達は白衣に小倉の角帯を締め白足袋に麻裏草履といふ揃ひの派手姿（？）で、名物の『鹿島踊』を踊る。鉦と太鼓で囃し立てつゝ、金紙銀紙で貼つた黄金柄杓や白紙の御幣などを手に持つて、五人宛五列になつて、

千早振る、神々も勇むなればソリアー
彌勒なれば彌勒踊れ、目出度いな
　　ハンヤ、ハアハアハアハア。
十七が、澤におりてヨホホイ
黄金柄杓で水を汲む。ソコヤレ、ハアハア。

などゝ唄ひ乍ら踊る、一種の盆踊りで、此の日こそ島内に於ける一番樂しい日である。その鹿島踊の日に島の乙女お初は、踊を見物に來た網代の青年を見染めて、戀に落ちたのであつた。しかし島には、島外の男女とは結婚ができないと云ふ悲しい掟があつた。毎夜、網代の青年は濱邊に出て合圖の篝火を焚いた。少女はその火の光を目標に、二里の海を泳いで男に會ひに行つた。そして甘い戀を囁き合つて、夜の明けない間に、復た海を泳いで島へ還つて行つた。この事が何時しか網代の港の噂に立つと、他の若者どもはスコ焼にやけた、そして或る暴風雨の夜、妬んでゐた若者どもは濱邊に出て、いつも男がするようにどんどと火を焚いた。遙かに其の火光を認めたお初は、『こんなあらしの夜にも、男は妾に波を乘切つて來いといふのか』と、寧ろ殘忍にちかい男の熱烈な戀をうれしく思ひ、何の躊躇する所もなく、さんぶとばかり身をその狂瀾怒濤の間に投じた。が間もなく、雨と風とは濱邊の火を消してしまつた。ーー少女は蠟のような屍體となつて、翌朝淋しく網代の濱に打揚げられてゐた、といふのである。かうしたローマンスは、絶海の孤島にはむしろ附き物の傳說であつて、敢て初島にとどまらず、又日本特有の傳說形式でもない。初島の故老達は却つて、さう云ふ口碑をさらに聞傳へぬと云つて居る。恐らく一場の作話にすぎないであらう。が此の一條の傳說は、この島に古くか

ら行はれて來た一種の共産制度、及び之に伴ふ人口制限の制度と關聯して、私達の興味をそゝるには充分の價値あるものである。

孤島に於ける株式的共産制

島内には昔から四十二戸の家族が住んでゐる。その數は、增加もしなければ減少もしない、乃ち貞享年間の「初島村鏡」に、

去る亥天和三年癸亥の御改家四十一軒

とありて、今日も尙依然として四十二戸である。島内の土地は、畑地十五町二反歩、山林十八町歩で是亦今も昔も變りなく、之を各戸に均分して一戸平均宅地二畝、畑地三反六畝、山林四反三畝餘と定められてゐる。特に富裕な家もない代りに、特に貧乏な家もなく、家屋の構造や大さまでが、殆んど一定して居ると言つてもよい。無論海上の孤島の事とて農業三分漁業七分の割合で、生活の基本が漁業にあることは言ふ迄もないが、その漁業收入も各戸殆んど平均されてゐる。何故ならば、初島地先の海中には天草、アワビ、サザエ等の繁殖が頗る盛んであるが、その漁獲權を年々競爭入札に據つて賣渡し、その料金を四十二戸に均分する、金額は年によつて多少異るけれども大抵三千圓内外で、一戸當七十餘圓になる。それから夏季になると、毎日『イサギ網』と稱する共同漁業が行はれる。乃ち法螺貝の音を合圖に、毎戸一人宛の男が出て、船に乘つて漁に出かけ、漁獲物の賣上代は各戸に均分する。病氣その他の事故に因つて出役し得ぬ場合でも、その配當に漏れることはない。同時に各戸單獨に出漁することは決して此島では許されないのである。毎戸の年收は五六百圓と觀られてゐる、無論彼等は富裕ではないが、日日の生活に苦慮するような者は一軒もない。島内には唯一戸の日用雜貨商店があつて、此の商店經營は比較的收益が多い、そこで常に不幸つゞきなどにて貧窮に陷つた者をして其の營業に當らしめて收入の增加を圖り、經濟むきが良くなれば又他の貧困者をして之に代らしめる規定である。「規定」と云つても島内には何等の成文規約はない、凡てが不文律——即ち舊來の慣習に由つて行はれてゐる。彼等の中には、ルビ附の新聞紙すら滿足に讀過し得る者は、殆んど一人も居ないのであるから……。

かかる共産生活は何時の頃、如何して始まつたか？それは可なり興味深い問題なのであるが、遺憾ながら餘り明瞭でない。天正年間に天角と稱する一禪僧が本島に植民し、戸數を四十二戸と定め、共産生活の制度も亦此僧の遺範であると傳へられてゐたが、それには文祿四年の「豆州初島御繩打水帳」なるもの

の賣却、日用物資の購入等は凡て網代港に於て行はれ、三月から七月に至る間は日日朝夕二回の便船があるから、もし初島を視察せんとする人は、網代から行くのが一番便利である。

實朝の歌に『箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ』とある沖の小島は、即ち此初島のことであつて、その「お裏場のような」島影を望みつつ、旅客は誰でも一度は次のような一條のローマンスを聴かされたに相違ない。

――昔、初島の少女が、網代の青年に戀をした毎年七月下旬釣鐘草が灌木の間に咲みだれる頃に、島内唯一の神祠である初木神社の祭禮が行はれて、此日は神輿が渡る、山車が出る、青年達は白衣に小倉の角帯を締め白足袋に麻裏草履といふ揃ひの派手姿（？）で、名物の『鹿島踊』を踊る。鉦と太鼓で囃し立てつゝ、金紙銀紙で貼つた黄金柄杓や白紙の御幣などを手に持つて、五人宛五列になつて、

千早振る、神々も勇むなればソリアー
彌勒なれば彌勒踊れ、目出度いな
　ハンヤ、ハアハアハアハア。
十七が、澤におりてヨホホイ
黄金柄杓で水を汲む。ソコヤレ、ハアハア。

など〻唄ひ乍ら踊る、一種の盆踊りで、此の日こそ島内に於ける一番樂しい日である。その鹿島踊の日に島の乙女お初は、踊を見物に來た網代の青年を見染めて、戀に落ちたのであつた。しかし島には、島外の男女とは結婚ができないと云ふ悲しい掟があつた。毎夜、網代の青年は濱邊に出て合圖の篝火を焚いた。少女はその火の光を目標に、一里の海を泳いで男に會ひに行つた。そして甘い戀を囁き合つて、夜の明けない間に、復た海を泳いで島へ還つて行つた。この事が何時しか網代の港の噂に立つと、他の若者どもはスコ焼にやけた。そして或る暴風雨の夜、妬んでゐた若者どもは濱邊に出て、いつも男がするようにどんどと火を焚いた。遙かに其の火光を認めたお初は、『こんなあらしの夜にも、男は妄に波を乘切つて來いといふのか』と、寧ろ殘忍にちかい男の熱烈な戀をうれしく思ひ、何の躊躇する所もなく、さんぶとばかり身をその狂瀾怒濤の闇に投じた。が間もなく、雨と風とは濱邊の火を消してしまつた。――少女は蠟のような屍體となつて、翌朝淋しく網代の濱に打揚げられてゐた、といふのである。かうしたローマンスは、絶海の孤島にはむしろ附き物の傳説であつて、敢て初島にとどまらず、又日本特有の傳説形式でもない。初島の故老達は却つて、さう云ふ口碑をさらに聞傳へぬと云つて居る。恐らく一場の作話にすぎないであらう。が此の一條の傳説は、この島に古くか

ら行はれて來た一種の共産制度、及び之に伴ふ人口制限の制度と關聯して、私達の興味をそゝるには充分の價値あるものである。

孤島に於ける株式的共産制

島内には昔から四十二戸の家族が住んでゐる。その數は、增加もしなければ減少もしない、乃ち貞享年間の「初島村鑑」に、

去る亥天和三年癸亥の御改家四十一軒

とありて、今日も尙依然として四十二戸である。島内の土地は、畑地十五町二反歩、山林十八町歩で是亦今も昔も變りなく、之を各戸に均分して一戸平均宅地一畝、畑地三反六畝、山林四反三畝餘と定められてゐる。特に富裕な家もない代りに、特に貧乏な家もなく、家屋の構造や大さまでが、殆んど一定して居ると言つてもよい。無論海上の孤島の事とて農業三分漁業七分の割合で、生活の基本が漁業にあることは言ふ迄もないが、その漁業收入も各戸殆んど平均されてゐる。何故ならば、初島地先の海中には天草、アワビ、サザエ等の繁殖が頗る盛んであるが、その漁獲權を年々競爭入札に據つて賣渡し、その料金を四十二戸に均分する、金額は年によつて多少異るけれども大抵三千圓内外で、一戸當七十餘圓になる。それから夏季になると、每日『イサギ網』と稱する共同漁業が行はれる。乃ち法螺貝の音を合圖に、每戸一人宛の男が出て、船に乘つて漁に出かけ、漁獲物の賣上代は各戸に均分する。病氣その他の事故に因つて出役し得ぬ場合でも、その配當に漏れることはない。同時に各戸單獨に出漁することは決して此島では許されないのである。無論彼等は富裕ではないが、日日の生活に苦慮するような者は一軒もない、島内には唯一戸の日用雜貨商店があつて、此の商店經營は比較的收益が多い、そこで常に不幸つゞきなどにて貧窮に陷つた者をして其の營業に當らしめて收入の增加を圖り、經濟むきが良くなれば又他の貧困者をして之に代らしめる規定である。「規定」と云つても島内には何等の成文規約はない、凡てが不文律――即ち舊來の慣習に由つて行はれてゐる。彼等の中には、ルビ附の新聞紙すら滿足に讀過し得る者は、殆んど一人も居ないのであるから……。

かかる共産生活は何時の頃、如何して始まつたか？それは可なり興味深い問題なのであるが、遺憾ながら餘り明瞭でない。天正年間に天角と稱する一禪僧が本島に植民し、戸數を四十二戸と定め、共産生活の制度も亦此僧の遺範であると傳へられてゐたが、それには文祿四年の「豆州初島御縄打水帳」なるもの

に、或る者は『三十四筆、總反別一町歩餘』、或る者は『一筆、二畝歩餘』などあつて、當時土地均分の實のなかつたことは明かである。即ち今日の如き社會制度は、それ以後に於て始まつたものとも見られるし、又もつと歷史を古く觀て、文祿前後はたま〳〵その制度の紊れて居つた時代とも推測し得られぬことはない。何れにしても、約二百年前に於て已に、現制度と大差なき組織が確立して居たことだけは、前掲「初島村鏡」の記錄によつて推定し得るようであるが、最初からこゝに四十二戸の漁民が移殖せられたとは、考へ難い。

福岡縣糸島郡西ノ浦から海上五十基米、玄海洋の只中に、その名も「小呂島」といふ小さな島がある。今から二百五十年前の正保年間、藩命によつて西ノ浦の漁民孫右エ門、吉左衛門、三左衛門等五名のものが妻子を連れて移住したのが始まりで、其の五家族の血統連綿として今日に及んでゐるが、戸數二十六軒、人口約三百と限つて增加もせず、減少もしない。こゝに初島の如き共產制度の行はれて居るや否やを知らぬが、初島も矢張り同じ樣な發達の徑路を取つたに相違なく、最初先づ五七戸の漁民が移住し、漸次その子孫が增殖して行つた、然し乍ら一定の土地——殊にかゝる孤島の上に、無制限に人口の增加することは、直に相互の生活を脅威する結果に陷いる、丁度四十戸內外、人口にして二百二三十人位に達した時、先づ是が初島に生活し得る人間の最大限度、——ではないとしても、少くもそれが「最適度」であるとして、戸數制限問題が起つて、初めて規約が結ばれ、一個の不文律となつて、嚴重に實施されてきたものであらう。結婚は島內に於てのみ行はれ、且產兒制限を目的とする墮胎、次男以下の結婚禁止といふ如き非文明的行爲の、その裡面に行はれつゝあつたことは想像に難くない

四十二戸と定めて、一戸も減少せざる理由は　もし其の中に死亡又は其他の不幸が原因となつて、絕家の悲運に陷らんとするものがあれば　他戸こぞつて力を協せ、未だ全滅に到らぬ間に救濟するが爲である。

飛驒白川村との比較

茅原華山氏は初島を批評して、『原始的家族制度の上に立てる共產村』と言はれた相である。私は實はその論說を讀んでゐないから、どう云ふ意味かはつきりとはわからぬが、若し其の文字通りを敷衍したものであるならば、私の所見とは、大變ちがつた見解である。我國の家族制度なるものには、少しも、人口制限の意味が含まれてゐるとは思へないからである。

「原始的家族制度」なる語によつて、直に聯想されるのは飛驒の白川村である。その白川村の中でも特色の顯著なのは平瀨、

長瀬、御母衣、牧の四部落であつて、曾て三百十一戸に就て調査した所に據れば、十人以下の家族を有する者二百一戸、同十人以上のもの八十九戸、二十人以上のもの十六戸、三十人以上のもの五戸を算へ、最も大なる家族は四十一人から成つて居たといふ事である。しかし此の原始的家族制度の特徴と觀るべきは、

（一）家長の權利の頗る強大なること

（二）相續者（即長男）以外の者は公然の結婚及び分家、獨立を許されざること

の二點であつて、他家に出稼する女子を除いては、男の兄弟も女の姉妹も凡て長男の統裁の下に隷屬的生活を送らなければならぬ運命である。然しその間に、人口制限の意味は毫も含まれてはゐない、分家及び獨立こそ許されてゐないが 内緣的結婚は自由であつて、生れた子は母の家の戸籍に入つて、その戸主の扶養を受ける。その結果二十人三十人といふ大家族が出來るのである。かかる組織は今日でこそ珍らしくも感ぜられるが我國の上代は凡て此の家族制度で、正倉院文書中の戸籍斷片を觀れば少きも二三十名、多きは九十六名などいふ大家族が發見せられるが、上代に於ても、矢張り人口制限の意味は毫も含まれぬのみか、次男以下も公然結婚を許されて、その妻子は、家長の家族として入籍せられ、且奴僕の如きも戸籍に列なつて、且數の大は寧ろ家門の繁榮を證する一の「誇り」でさへあつた。飛驒の白川村と初島とは、ただ次男以下の結婚を許さなかつたと云ふ點が わづかに類似して居るにすぎなくて、而もその目的に至つては全然異つてゐた。

故に初島は寧ろ『人口制限の上に立てる共産村』と云ふ方が適當であらう。從つてその四十二戸といふ戸數制限も、口數制限を伴はなければ殆んど無意味に終る。次男以下の結婚禁止や産兒制限は、此の必要によつて實行せられて來たのである。初島の戸には、白川村の如き大家族はなく、何れも小人數である。然しその人口は

明治廿一年（三浦氏調査）	二三〇人	一戸當	五・五
同　卅四年（内田氏調査）	二八五人	同	六・八
大正十年（國勢調査）	三二四人	同	七・七

漸增の趨勢を示してゐる。これは時勢の進運は斯かる世外の世界にも幾分か影響して、農業漁業に對する技術の進步を來たし、その生活に餘裕を生じた結果と觀るべきであらう。私は初島を『貧しき武陵桃源』と呼びたい。生活難の刺戟がないから、人情は純朴だが無智だ、殊に數理の觀念はゼロといふことであるが、兎に角今日は、村有の發動機船を有する位の程度には發達

に、或る者は『三十四筆、總反別一町歩餘』、或る者は『一筆、二畝歩餘』などあつて、當時土地均分の實のなかつたことは明かである。即ち今日の如き社會制度は、それ以後に於て始まつたものとも見られるし、又もつと歴史を古く觀て、文祿前後はたまたまその制度の紊れて居つた時代とも推測し得られぬことはない。何れにしても、約二百年前に於て已に、現制度と大差なき組織が確立して居たことだけは、前掲「初島村鏡」の記錄によつて推定し得るようであるが、最初からこゝに四十二戸の漁民が移殖せられたとは、考へ難い。

福岡縣糸島郡西ノ浦から海上五十基米、玄海洋の只中に、その名も「小呂島」といふ小さな島がある。今から二百五十年前の正保年間、藩命によつて西ノ浦の漁民孫右工門、吉左衛門、三左衛門等五名のものが妻子を連れて移住したのが始まりで、其の五家族の血統連綿として今日に及んでゐるが、戸數二十六軒、人口約三百と限つて增加もせず、減少もしない。こゝに初島の如き共產制度の行はれて居るや否やを知らぬが、初島も矢張り同じ樣な發達の徑路を取つたに相違なく、最初先づ五七戸の漁民が移住し、漸次その子孫が增殖して行つた、然し乍ら一定の土地――殊にかゝる孤島の上に、無制限に人口の增加することは、前に相互の生活を脅威する結果に陷いる、丁度四十戸內外、人口にして二百二三十人位に達した時、先づ是が初島に生活し得る人間の最大限度、――ではないとしても、少くもそれが「最適度」であるとして、戸數制限問題が起つて、初めて規約が結ばれ、一個の不文律となつて、嚴重に實施されてきたものであらう。結婚は島內に於てのみ行はれ、且產兒制限を目的とする墮胎、次男以下の結婚禁止といふ如き非文明的行爲の、その裡面に行はれつゝあつたことは想像に難くない

四十二戸と定めて、一戸も減少せさる理由は もし其の中に死亡又は其他の不幸が原因となつて、絕家の悲運に陷らんとするものがあれば 他戸こぞつて力を協せ、未だ全滅に到らぬ間に救濟するが爲である。

飛驒白川村との比較

茅原華山氏は初島を批評して、『原始的家族制度の上に立てる共產村』と言はれた相である。私は實はその論說を讀んでゐないから、どう云ふ意味かはつきりとはわからぬが、若し其の文字通りを敷衍したものであるならば、私の所見とは、大變ちがつた見解である。我國の家族制度なるものには、少しも、人口制限の意味が含まれてゐるとは思へないからである。

「原始的家族制度」なる語によつて、直に聯想されるのは飛驒の白川村である。その白川村の中でも特色の顯著なのは平瀨、

長瀬、御母衣、牧の四部落であつて、曾て三百十一戸に就て調査した所に據れば、十人以下の家族を有する者二百一戸、同十人以上のもの八十九戸、二十人以上のもの十六戸、三十人以上のもの五戸を算へ、最も大なる家族は四十一人から成つて居たといふ事である。しかし此の原始的家族制度の特徴と觀るべきは、

（一）家長の權利の頗る强大なること
（二）相續者（即長男）以外の者は公然の結婚及び分家、獨立を許されざること

の二點であつて、他家に出稼する女子を除いては、男の兄弟も女の姉妹も凡て長男の統裁の下に隷屬的生活を送らなければならぬ運命である。然しその間に、人口制限の意味は毫も含まれてはゐない、分家及び獨立こそ許されてゐないが　內緣的結婚は自由であつて、生れた子は母の家の戸籍に入つて、その戸主の扶養を受ける。その結果二十人三十人といふ大家族が出來るのである。かかる組織は今日でこそ珍らしくも感ぜられるが我國の上代は凡て此の家族制度で、正倉院文書中の戸籍斷片を觀れば少きも二三十名、多きは九十六名などいふ大家族が發見せられるが、上代に於ても、矢張り人口制限の意味は毫も含まれぬのみか、次男以下も公然結婚を許されて、その妻子は、家長の家族として入籍せられ、且奴僕の如きも戸籍に列なつて、員數の大は寧ろ家門の繁榮を證する一の「誇り」でさへあつた。飛驒の白川村と初島とは、ただ次男以下の結婚を許さなかつたと云ふ點が、わづかに類似して居るにすぎなくて、而もその目的に至つては全然異つてゐた。

故に初島は寧ろ『人口制限の上に立てる共產村』と云ふ方が適當であらう。從つてその四十二戸といふ戸數制限も、口數制限を伴はなければ殆んど無意味に終る。次男以下の結婚禁止や產兒制限は、此の必要によつて實行せられて來たのである。初島の戸には、白川村の如き大家族はなく、何れも小人數である。然しその人口は

明治廿一年（三浦氏調査）	二三〇人	一戸當	五・五
同　卅四年（內田氏調査）	二八五人	同	六・八
大正十年（國勢調査）	三二四人	同	七・七

漸增の趨勢を示してゐる。これは時勢の進運は斯かる世外の世界にも幾分か影響して、農業漁業に對する技術の進歩を來たし、その生活に餘裕を生じた結果と觀るべきであらう。私は初島を『貧しき武陵桃源』と呼びたい、生活難の刺戟がないから、人情は純朴だが無智だ、殊に數理の觀念はゼロといふことであるが、兎に角今日は、村有の發動機船を有する位の程度には發達

してゐる。白川村の所謂原始的家族制度の破壊せられつゝある如くに、初島に於ける不自然な人口制限も、今日は最早行はれてゐない。過剰な人口は島外に去つて、自由に幸福な天地を求めてゐるが、島内の共産生活は可なり徹底的なものである。

御蔵島の共産生活

その沿革

伊豆七島の中では、御蔵島が、一種の共産島として知られてゐる。

御蔵島は三宅島と八丈島との中間に在る小さな島で、東西、南北ともに各約五粁、周回十三粁ばかりで、全島火山岩よりなる——と云ふよりも火山の山頂のみがぽつりと波の上に現れて出來た島といふ方が適當である（伊豆七島は何れも此式の構造であるが）、從つて島内には殆んど平地といふものがなく、傾斜地を開墾して僅少の山畑がある外、總面積の九十九%は山林であつて、海上の離れ島でありながら、林産物をもつて其の主産物として居るのは、此の御蔵島と八丈島ばかりである。即ち御蔵島の土地別は、

		町 反 畝
私有地……七〇・町五段七畝	畑	四・六・九
	宅地	四・八
	山林	六七・六・九
島有地……六二二、七、（山林）		
社寺有……二九、七、（山林）		
官有地……三、七、（畑及雑地）		

右の如くであつて、その一部分を各自で分割してる外、全島の八十%は島民の共有に屬し、その山林からは種々の良材を産するが、就中黄楊は材質の堅緻なることと全國に冠絶すと云はれ、「御蔵黄楊」の名は、古來夙に我が林業界に喧傳し、此の黄楊材を中心として島民の共産生活が行はれてゐるのである。

傳ふる所によれば、御蔵島は元三宅島に屬し無人島であつたが、建保の頃（七百餘年前）栗本四郎兵衛といふ者三宅島より移住し、其の血族專ら島内に増殖して今日に至つたといふ。共産生活は何時の頃から始まつたか分明せぬが、正德年間島代官河原清兵衛に申請して島民獨立を企てたが容れられず、適々幕府の侍醫奥山某といふ者本島に流竄せられ罪を赦されて歸府の後、某の周旋によつて遂に享保十四年分離獨立の素志を達したと云ふ、島民が獨立を希望した所以は、當時すでに一種の共産制度が行はれてゐて、三宅島とは社會組織を異にしたが爲だと觀られる。即ち御蔵島の共産生活は少くも二百餘年、或ひは三百年餘の歴史を有するものと推定することができる。

文政中の記錄（島役人の報告書らしい）に、

御藏島黄楊伐出の儀は、年々四月中勝手よろしき時節、村中老若男女罷出で、村近邊或は西山の邊より、黄楊伐出し出精仕候。背負賃の儀は、拾貫匁に付米一升宛の割合を以て差遣し、男一人に付日雇米七合五勺宛、女一人に付麥一升二合五勺宛、子供一人に付麥七合五勺宛、遣し申候。

右は便船次第江戸表へ積出し、御會所に於て問屋共へ入札被仰付、御買揚下され候。此代金を以て米穀、小買物買入れ、殘金は凶年の備として御會所へ御預り被置候。積入れ候品々、歸島の節、島方人別に應じ、無甲乙割付相渡し遣し候。併し十五歳以下、六十歳以上の者は男たりとも女に準じ、男一人の半額を相渡し遣し候云々。

此の遺制は今日も尙、そのまゝ實施せられてゐるのである。

その現狀

島情を察知するには、歲入出豫算に據るのが最も簡明と思ふから、私は此の方法を採る。御藏島の人口は、

	（戶數）	（人口）
明治四十二年	七八	二八〇
大正　四年	七九	三五八
同　十三年	七九	三四〇

であつて、最近十年間には殆んど變化なく、しかも其歲出入額は明治四十二年の七千八百餘圓（一戶當約百圓）から、十七年後の今日は二萬六千餘圓に增加し、その一戶當の額は三百二十圓に上つてゐる。此內には各戶が利益配當として受くる金額をも含んでゐるから、其を控除すると實際の負擔額は一戶二百八十九圓となるが、何れにしても全國に比類なき尨大な經費である。然し之が爲に一厘も村稅を徵收して居らぬ、島民は殆んど全く無稅である。即ち歲入の內容を檢すれば、

一、基本財產收入　二三、二三五圓
　1. 樹木賣拂代　一九、五二九圓
　　黄楊材一萬二百七十八貫五百匁賣拂　代金　一貫匁一圓九十錢。
　2. 預金・債務利子等　三、七〇六圓
二、夫役及現品　一、四一一圓
　1. 夫役　一、二七五圓
　2. 現品　一三六圓
三、手數料、義務教育國庫補助金、其他
　雜收及繰越金　一、六六七圓

夫役といふのは道路掃除、護岸工事、水道修繕、及び山林手入等に要する勞働で、一人一日一圓五十錢と換算して延人員五百五十人、現品と云ふのは海岸用の滑木と水道修繕に使ふ竹のことで、是だけが村民直接の負擔となるにすぎないのである。

翻つて、此金額が如何に使用せられるかを調べて見る。

役場費　四、七二一圓
小學校費　二、九九七圓
　内一・九二〇圓は本科正教員二名の給料月額一人八十圓代用教員一名月額十五圓其他省略
補習學校費　一二七圓
醫院費　三、三五六圓
　内二・三四〇圓は醫員給料月額百九十五圓
土木費水道費二、五五一圓
　基本財産造成及管理費　一、二九五圓
扶持米給與費二、七三五圓
　男八十五人　一人十一圓宛
　女百〇五人　一人十圓宛
　小兒百五十人　一人五圓宛
雜支出　五、八三〇圓
　1　林産物産出費　四、六八八圓
　山出費‥‥林産物（黄楊　賣上代百分の十
　輸送費‥‥同百分の六
　販賣手數料‥‥同百分の八
　2　其他汽船扱所費、繰替費、需用費等

右の外會議費、勸業費、警備費、傳染病予防等コマゴマした費用　二、四六六圓
歳出合計二六、〇七八圓

「扶持米給與費」とあるのが古來の慣例に基く島民一般への配當金で、賣上高の一割五分がその標準額となつてゐる。雜支出の「山出費」は即ち黄楊材の伐採及び運般費で、文政文書に所謂『背負賃の儀は十貫匁に付米一升宛』に相當するものである。船賃及び販賣手數料をも豫め金額で何程と定めないで、賣上高の何程として居るのも、同じく舊來の慣例を踏襲してゐるのだが、さう云ふ所に一寸おもしろ味がある。

八十戸に足らぬ小村であり乍ら、村立の醫院を設けて年俸二千三百餘圓の高給で醫師を招聘し、島民は單だ藥料の實費を拂ふのみで無料診療をうくることが出來る。六十名内外の學齡兒童の爲に三名の教師（内二名は正教員で平均月俸八十圓）を置いて、補習教育まで行ひ、その教育費は兒童一人に付五十圓强に當つてゐる。その他、原始的なものではあるが水道設備があつて、船木山の中腹に湧出する清泉を約二基米の間引いて來て、各戸の飲料水に宛てゝゐるが、此の費用も一戸當五圓ぐらいにはついてゐる。是等の諸經費を合計すると、どうしても一戸當

二百二十餘圓にのぼる。故に島民が、直接配當として受けとる金額は、扶持米料の三拾五圓餘と山出料の貳拾五圓餘と、併せて六十圓ばかりにすぎないが、事實は一ヶ年に二百八十圓內外を、共有山林から利益の配當を受けて居ると同じ勘定になるのである。神津島は御藏島に比すれば七八倍の人口を有して居るに拘らず、その敎育設備や、衛生設備は御藏島とは比較すべくもあらず、しかも島民は尙ほ年に一戶當四五十圓の村費負擔をなさねばならぬ狀態である。遠隔の小島に於ては、それが寧ろ普通のことなのである。

共產ならざりせば

共產島の有難味を一層明瞭ならしむる爲に、御藏島の山林が島民の共有でなくして、或る二三の富豪の私有地であつた場合を想像して見る。島民は農業漁業等の餘暇に、單なる勞働者――日傭者として彼等の爲に雇はれて、極めて僅少な勞賃を支拂はれるにすぎない。その支拂はれる金の總額を、右の豫算面から推定するのに、

山林の管理手入費　約六百圓
同山出し費　約千九百圓

合計二千五百圓餘にすぎないであらう。否山出しの費用として恐らく千九百圓は支拂はれないであらう。しかして賣上金一萬九千五百二十九圓の中から、右の諸費用及び汽船賃と地租一ヶ年三圓九錢とを差引いた殘りの金額全部は、夫等二三地主の所得となるべきものである。島民が山林から獲る所は、一戶當三十圓內外の勞銀にすぎなくして、他面には多額の村費を負擔しなければならぬ。島民は、少數の所謂搾取者と多數の被搾取者とに分れて、そこに事實上の御藏島王と、之れに隷屬する島民との小社會が成立して居つたに相違ないのである。

御藏島民は「惠まれたる島民」である。人爲的に惠まれて居るのみでなく、自然的にも頗ぶる惠まれてゐる。伊豆七島は悉く火山島であるから、土地磽角にして農作に適せず、山林に乏しい、從つて飲料水に苦しまぬ處はすくなくない。然るに八丈と御藏島だけは例外で、うつそうたる森林が全島を蔽ふて、島內には溪流があり、瀑布がある。乃ち御藏島內にあるもの大島分川、平淸水川、大舟戶川の三を數へ、海拔六百米突の高處には周圍三百メートルの「御代ケ池」があつて四時淸水の涸るることなく、島の南西側斷崖に懸れる「白瀧」は、高さ十五米突を有し、能く數海里の海上から遠望することができる。耕地面積は極めて少く、五町步に足らぬ畑地ではあるが、麥・甘藷・馬鈴薯等の生育は甚だ良く、殆ど是等の副食物を島外に仰ぐの必要はない。斯の如き事實は、八丈島の產物の第一は木炭でその年

産額百萬貫に達するといふ事と共に、殆んど奇蹟的に考へられるが、それは全く此の二島が、黒潮の流れに圍繞せられて居るが爲で、氣候は特に暖かく(緯度から云へば御藏島は筑前の博多、土佐の高知等と略ぼ同一線上にあるのだが、同溫線から云へば薩南の種子島と同一線上にある)、雨量と濕量との多いおかげである。

三島村の共産生活

上總の山奥は金の湧く村

是は本年二月上旬都下の一新聞に、『上總鹿野山から九十九谷につゞく山奥に、珍らしい大金持の村が發見せられた。それは千葉縣君津郡三島村で、天然林を伐採して全戸が無稅。現代稀れな理想鄕。村の金が使ひ切れないところから、其の公益的使途に就て懸賞募集をしようとして居る』といふやうな意味で、三段ぬき初號見出しで大々的に報道せられたものである。處でその財源は？　といへば、山林といふことだ。山林ではとても事は急速に運ばぬ。早くても二三十年はかゝる、是は例の誇張記事だなとは思つたが、全村一齊に平均の富を築くべく、努力して居るとあるのが、すくなからず私の興味をそゝつて、早速實地踏査と出かけたのであつた。

三島村といふのは木更津町から東南へ二十七八基米(約七里)も隔たつた山奥の寒村で、小糸川の水源地に當り、三百米突餘の低山性の山脈を一つ越せば、其處はもう安房國である。明治二十年頃迄は周准郡に屬し、日笠、二入、辻森、正木、大岩、奥米、宿原、豊英、旅名、怒田澤の十村に分れてゐたのが、同廿一年合併して三島村となり、村制を敷かれたところである。萬葉集第十四卷「上總末珠名娘子を詠める歌」に水長鳥、安房再繼有、梓弓、末之珠名者云々とあるその周准郡で、我國私娼の元祖ともいふべき、彼の珠名といふ一視同仁主義のなまめいた女が出た地方なのである。木更津から秋元へ走る自動車の中で、私は不圖その歌をおもひ出して、『金門にし、人の來立てば、夜中にも、身はたなしず、出でゝぞ會ひける』てふ珠名娘子の國に、今日三島村のごとき共産村の現れ出たことを、頗ぶる面白いと感じたのであつた。秋元からは五基米ばかりで三島村役場のある大岩部落に達する。十部落にわかれてゐるが、其の總戸數は僅かに三百二戸で、五十戸と纏まつた部落はなく、「黄金湧く」ところが、つい三四年前迄は麥と粟を主食として居たやうな寒村である。遠路はるばる訪ねて行つても、泊るべき一軒の旅舍さへ無いところである。

一箇年の村費は一萬三千餘圓で、その内

三分一は……基本財產收入（林木賣拂代）
三分一は……村稅
三分一は……手數料、交附金其他の雜收入

と云つた割合である。即ち「全戸無稅」及び「年々十人宛の帝大生を出す事」等は、今日まだ一の理想たるに止まつてゐるが、村民はすでに各戸均等に一町五反步宛の地所持ちとなり、發展の第一步として、村内を南北に通ずる縱貫大道路の開設に着手した。それが完成すると共に、その廣大な山林から伐出さるゝ村木は、自動車に依つてドシドシ搬出されようし、電燈も點ぜられようし、村中が一時に明るくなるであらう

さて、その沿革を尋ぬるに、當地方は幕政時代には曾根左膳と云ふ旗下の士の所領に屬し、御川木炭の製產地として、村民は年々若干の御川木炭を上納する以外は、自由に山林に出入して秣及び薪炭材を伐採し、專ら其の收入に由て生活をしてゐた。前にも云つた如く當地は小糸川の水源地で、右を見ても森林、左を見ても森林、峰を蔽ひ谷を埋めて東西四基米、南北は十基米に及んでゐる。明治維新の際一旦官有林に編入されたが、村民一同より從來の入會關係を主張して拂下を願出で、明治八年に至り豐英村外九ケ村（鎌田安次郎二百五十八名）に拂下げられたものである。當時の記錄を見ると、その拂下價格は一反步に付金三十五錢、卅七錢五厘、四十錢、五十錢の四種で、何でも全體で三四百圓ぐらゐのものであつたらしい。爾後右十箇村の共有林として管理し、村民一同從前の通り入會を續けて來たが、追々權利の賣買が行はれ始めて、共有權の一部が他町村民に移轉するようになつたので、是では拂下當時の主旨に反するとあつて、明治十八年八月關係者一同協議の結果、權利賣買防止の目的で村の公有地に編入してしまつた。次で同二十一年町村制の施かれると同時に、豐英村外九ケ村は合して三島村となり、山林も亦三島村の村有林と云ふことになつたのである。

然し乍ら其は共有林から、村有林へと名儀が變つたのみで、實質には何等の變化もなく、村民は依然自由に出入して薪炭材の伐採を行つて居た。唯だ伐採るのみで、伐採つた後に造林する者は誰もない、林業の書物を觀るとかういふのを『掠奪林業』と稱する相だ。是ではならぬとあつて、三十七年かに各部落へ使用區域を割當つることゝし、次で村有財產を無料で使用せしめるのは不可いと云ふ議論が出て、一箇年一戸當金三十錢づゝの山林使用料を徴收する事にした。然しこんなことで、濫伐の止む譯がない。而も全村民木炭製造を以て主業とし、それが各自に濫伐をやるのであるから、森林の荒廢や想ふべくして、

產額百萬貫に達するといふ事と共に、殆んど奇蹟的に考へられるが、それは全く此の二島が、黒潮の流れに圍繞せられて居るが爲で、氣候は特に暖かく(緯度から云へば御藏島は筑前の博多、土佐の高知等と略ぼ同一線上にあるのだが、同溫線から云へば薩南の種子島と同一線上にある)、雨量と濕氣との多いおかげである。

三島村の共產生活

上總の山奧は金の湧く村

是は本年二月上旬都下の一新聞に、『上總鹿野山から九十九谷につゞく山奧に、珍らしい大金持の村が發見せられた。それは千葉縣君津郡三島村で、天然林を伐採して全戸が無稅。現代稀れな理想鄕。村の金が使ひ切れないところから、其の公益的使途に就て縣賞募集をしようとして居る』といふような意味で、三段ぬき初號見出しで大々的に報道せられたものである。處でその財源は? といへば、山林といふことだ。山林ではとても事は急速に運ばぬ。早くても二三十年はかゝる、是は例の誇張記事だなとは思つたが、全村一齊に平均の富を築くべく、努力して居るとあるのが、すくなからず私の興味をそゝつて、早速實地踏査と出けたのであつた。

三島村といふのは木更津町から東南へ二十七八基米(約七里)も隔たつた山奧の寒村で、小糸川の水源地に當り、三百米突餘の低山性の山脈を一つ越せば、其處はもう安房國である。明治二十年頃迄は周准郡に屬し、日笠、二入、辻森、正木、大岩、奧米、宿原、豐英、旅名、怒田澤の十村に分れてゐたのが、同廿一年合併して三島村となり、村制を敷かれたところである。萬葉集第十四卷「上總末珠名娘子を詠める歌」に水長鳥、安房再繼有、梓弓、末之珠名者云々とあるその周准郡で、我國私娼の元祖ともいふべき、彼の珠名といふ一視同仁主義のなまめいた女が出た地方なのである。木更津から秋元へ走る自動車の中で、私は不圖その歌をおもひ出して、『金門にし、人の來立てば、夜中にも、身はたなしず、出でゝぞ會ひける』てふ珠名娘子の國に、今日三島村のごとき共產村の現れ出たことを、頗ぶる面白いと感じたのであつた。秋元からは五基米ばかりで三島村役場のある大岩部落に達する。十部落にわかれてゐるが、其の總戶數は僅かに三百二戶で、五十戶と纏まつた部落はなく、「黄金湧く」ところが、つい三四年前迄は麥と粟を主食として居たやうな寒村である。遠路はるばる訪ねて行つても、泊るべき一軒の旅舍さへ無いところである。

一箇年の村費は一萬三千餘圓で、その內

三分一は……基本財産收入（林木賣拂代）
三分一は……村税
三分一は……手數料、交附金其他の雜收入

と云つた割合である。即ち「全戸無税」及び「年々十人宛の帝大生を出す事」等は、今日まだ一の理想たるに止まつてゐるが、村民はすでに各戸均等に一町五反歩宛の地所持ちとなり、發展の第一歩として、村内を南北に通ずる縱貫大道路の開設に着手した。それが完成すると共に、その廣大な山林から伐出さるる材木は、自動車に依つてドシドシ搬出されようし、電燈も點ぜられようし、村中が一時に明るくなるであらう

さて、その沿革を尋ぬるに、當地方は幕政時代には曾根左膳と云ふ旗下の士の所領に屬し、御用木炭の製産地として、村民は年々若干の御用木炭を上納する以外は、自由に山林に出入して薪及び新炭材を伐採し、專ら其の收入に由て生活をしてゐた。前にも云つた如く當地は小糸川の水源地で、右を見ても森林、左を見ても森林、峰を蔽ひ谷を埋めて東西四基米、南北は十基米に及んでゐる。明治維新の際一旦官有林に編入されたが、村民一同より從來の入會關係を主張して拂下を願出で、明治八年に至り豐英村外九ヶ村（鎌田安次郎二百五十八名）に拂下げられたものである。當時の記録を見ると、その拂下價格は一反歩に付金三十五錢、卅七錢五厘、四十錢、五十錢の四種で、何でも全體で三四百圓ぐらゐのものであつたらしい。爾後右十箇村の共有林として管理し、村民一同從前の通り入會を續けて來たが、追々權利の賣買が行はれ始めて、共有權の一部が他町村民に移轉するやうになつたので、是では拂下當時の主旨に反するとあつて、明治十八年八月關係者一同協議の結果、權利賣買防止の目的で村の公有地に編入してしまつた。次で同二十一年町村制の施かれると同時に、豐英村外九ヶ村は合して三島村となり、山林も亦三島村の村有林と云ふことになつたのである。

然し乍ら其は共有林から、村有林へと名儀が變つたのみで、實質には何等の變化もなく、村民は依然自由に出入して薪炭材の伐採を行つて居た。唯だ伐採るのみで、伐採つた後に造林する者は誰もない、林業の書物を觀るとかういふのを『掠奪林業』と稱する相だ。是ではならぬとあつて、三十七年かに各部落へ使用區域を割當つることゝし、次で村有財産を無料で使用せしめるのは不可いと云ふ議論が出て、一箇年一戸當金三十錢づゝの山林使用料を徴收する事にした。然しこんなことで、濫伐の止む譯がない。而も全村民木炭製造を以て主業とし、それが各自に濫伐をやるのであるから、森林の荒廢や想ふべしで、

產額百萬貫に達するといふ事と共に、殆んど奇蹟的に考へられるが、それは全く此の二島が、黒潮の流れに圍繞せられて居るが爲で、氣候は特に暖かく（緯度から云へば御藏島は筑前の博多、土佐の高知等と略ぼ同一線上にあるのだが、同溫線から云へば薩南の種子島と同一線上にある）、雨量と濕氣との多いおかげである。

三島村の共產生活

上總の山奥は金の湧く村

是は本年二月上旬都下の一新聞に、『上總鹿野山から九十九谷につゞく山奥に、珍らしい大金持の村が發見せられた。それは千葉縣君津郡三島村で、天然林を伐採して全戶が無稅。現代稀れな理想鄕。村の金が使ひ切れないところから、其の公益的使途に就て懸賞募集をしようとして居る』といふような意味で、三段ぬき初號見出しで大々的に報道せられたものである。處でその財源は？　といへば、山林といふことだ。山林ではとても事は急速に運ばぬ。早くても二三十年はかゝる、是は例の誇張記事だなとは思つたが、全村一齊に平均の富を築くべく、努力して居るとあるのが、すくなからず私の興味をそゝつて、早速實地踏査と出けたのであつた。

三島村といふのは木更津町から東南へ二十七八粁米（約七里）も隔たつた山奥の寒村で、小糸川の水源地に當り、三百米突餘の低山性の山脈を一つ越せば、其處はもう安房國である。明治二十年頃迄は周准郡に屬し、日笠、二入、辻森、正木、大岩、奥米、宿原、豐英（トヨフサ）、旅名、怒田澤の十村に分れてゐたのが、同廿一年合併して三島村となり、村制を敷かれたところである。萬葉集第十四卷「上總末珠名（スヱノタマナ）娘子（オトメ）を詠める歌」に水長（シナガ）鳥（ドリ）、安房（アワ）再繼（ニツギタル）有、梓弓（アヅサユミ）、末之珠名（スヱノタマナ）者（ハ）云々とあるその周准（スヱ）郡で、我國私娼の元祖ともいふべき、彼の珠名といふ一視同仁主義のなまめいた女が出た地方なのである。木更津から秋元へ走る自動車の中で、私は不圖その歌をおもひ出して、『金門（かなど）にし、人の來立てば、夜中にも、身はたなしず、出でゝぞ會ひける』てふ珠名娘子の國に、今日三島村のごとき共產村の現れ出たことを、頗ぶる面白いと感じたのであつた。秋元からは五粁米ばかりで三島村役場のある大岩部落に達する。十部落にわかれてゐるが、其の總戶數は僅かに三百二戶で、五十戶と纏まつた部落はなく、『黃金湧く』ところが、つい三四年前迄は麥と粟を主食として居たやうな寒村である。遠路はるばる訪ねて行つても、泊るべき一軒の旅舍さへ無いところである。

一箇年の村費は一萬三千餘圓で、その內

三分一は……基本財産收入（林木賣拂代）
三分一は……村税
三分一は……手數料、交附金其他の雜收入

と云つた割合である。即ち「全戸無税」。及び「年々十人宛の帝大生を出す事」等は、今日まだ一の理想たるに止まつてゐるが、村民はすでに各戸均等に一町五反歩宛の地所持ちとなり、發展の第一歩として、村内を南北に通ずる縱貫大道路の開設に着手した。それが完成すると共に、その廣大な山林から伐出さるる村木は、自動車に依つてドシドシ搬出されようし、電燈も點ぜられようし、村中が一時に明るくなるであらう

さて、その沿革を尋ぬるに、當地方は藩政時代には會根左膳と云ふ旗下の士の所領に屬し、御用木炭の製産地として、村民は年々若干の御用木炭を上納する以外は、自由に山林に出入して薪及び新炭材を伐採し、専ら其の收入に由て生活をしてゐた。前にも云つた如く當地は小糸川の水源地で、右を見ても森林、左を見ても森林、峰を蔽ひ谷を埋めて東西四基米、南北は十基米に及んでゐる。明治維新の際一旦官有林に編入されたが、村民一同より從來の入會關係を主張して拂下を願出で、明治八年に至り豐英村外九ケ村（鎌田安次郎二百五十八名）に拂下げられたものである。當時の記錄を見ると、その拂下價格は一反歩に付金三十五錢、卅七錢五厘、四十錢、五十錢の四種で、何でも全體で三四百圓ぐらゐのものであつたらしい。爾後右十箇村の共有林として管理し、村民一同從前の通り入會を續けて來たが、追々權利の賣買が行はれ始めて、共有權の一部が他町村民に移轉するやうになつたので、是では拂下當時の主旨に反するとあつて、明治十八年八月關係者一同協議の結果、權利賣買防止の目的で村の公有地に編入してしまつた。次で同二十一年町村制の施かれると同時に、豐英村外九ケ村は合して三島村となり、山林も亦三島村の村有林と云ふことになつたのである。

然し乍ら其は共有林から、村有林へと名儀が變つたのみで、實質には何等の變化もなく、村民は依然自由に出入して薪炭材の伐採を行つて居た。唯だ伐採るのみで、伐採つた後に造林する者は誰もない、林業の書物を觀るとかういふのを『掠奪林業』と稱する相だ。是ではならぬとあつて、三十七年かに各部落へ使用區域を割當つることゝし、次で村有財産を無料で使用せしめるのは不可いと云ふ議論が出て、一箇年一戸當金三十錢づゝの山林使用料を徴收する事にした。然しこんなことで、濫伐の止む譯がない。而も全村民木炭製造を以て主業とし、それが各自に濫伐をやるのであるから、森林の荒廢や想ふべしで、

產額百萬貫に達するといふ事と共に、殆んど奇蹟的に考へられるが、それは全く此の二島が、黒潮の流れに圍繞せられて居るが爲で、氣候は特に暖かく（緯度から云へば御藏島は筑前の博多、土佐の高知等と略ぼ同一線上にあるのだが、同温線から云へば薩南の種子島と同一線上にある）、雨量と濕量との多いおかげである。

三島村の共產生活

上總の山奥は金の湧く村

是は本年二月上旬都下の一新聞に、『上總鹿野山から九十九谷につゞく山奥に、珍らしい大金持の村が發見せられた。それは千葉縣君津郡三島村で、天然林を伐採して全戸が無税。現代稀れな理想鄉。村の金が使ひ切れないところから、其の公益的使途に就て懸賞募集をしようとして居る』といふような意味で、三段ぬき初號見出しで大々的に報道せられたものである。處でその財源は？　といへば、山林といふことだ。山林ではとても事は急速に運ばぬ。早くても二三十年はかゝる。是は例の誇張記事だなとは思つたが、全村一齊に平均の富を築くべく、努力して居るとあるのが、すくなからず私の興味をそゝつて、早速實地踏査と出かけたのであつた。

三島村といふのは木更津町から東南へ二十七八基米（約里）も隔たつた山奥の寒村で、小糸川の水源地に當り、三百米突餘の低山性の山脈を一つ越せば、其處はもう安房國である。明治二十年頃迄は周准郡に屬し、日笠、二入、辻森、正木、大岩、奥米、宿原、豊英（トヨフサ）、旅名、怒田澤の十村に分れてゐたのが、同廿一年合併して三島村となり、村制を敷かれたところである。萬葉集第十四卷「上總末珠名娘子（スヱノタマナオトメ）を詠める歌」に水長（シナガ）鳥、安房再繼有（アワニツギタル）、梓弓（アヅサユミ）、末之珠名者（スヱノタマナハ）云々とあるその周准（スヱ）郡で、我國私娼の元祖ともいふべき、彼の珠名といふ一視同仁主義のなまめいた女が出た地方なのである。木更津から秋元へ走る自動車の中で、私は不圖その歌をおもひ出して、『金門（かなど）にし、人の來立てば、夜中にも、身はたなしず、出でゝぞ會ひける』てふ珠名娘子の國に、今日三島村のごとき共產村の現れ出たことを、頗ぶる面白いと感じたのであつた。秋元からは五基米ばかりで三島村役場のある大岩部落に達する。十部落にわかれてゐるが、其の總戸數は僅かに三百二戸で、五十戸と纒まつた部落はなく、「黄金湧く」ところが、つい三四年前迄は麥と粟を主食として居たやうな寒村である。遠路はるばる訪ねて行つても、泊るべき一軒の旅舍さへ無いところである。

一箇年の村費は一萬三千餘圓で、その內

三分一は……基本財産收入（林木賣拂代）
三分一は……村稅
三分一は……手數料、交附金其他の雜收入

と云つた割合である。即ち「全戸無稅」。及び「年々十人宛の帝大生を出す事」等は、今日まだ一の理想たるに止まつてゐるが、村民はすでに各戸均等に一町五反步宛の地所持ちとなり、發展の第一步として、村內を南北に通ずる縱貫大道路の開設に着手した。それが完成すると共に、その廣大な山林から伐出さるる村木は、自動車に依つてドシドシ搬出されようし、電燈も點ぜられようし、村中が一時に明るくなるであらう

さて、その沿革を尋ぬるに、當地方は藩政時代には曾根左膳と云ふ旗下の士の所領に屬し、御用木炭の製產地として、村民は年々若干の御用木炭を上納する以外は、自由に山林に出入して秣及び薪炭材を伐採し、專ら其の收入に由て生活をしてゐた。前にも云つた如く當地は小糸川の水源地で、右を見ても森林、左を見ても森林、峰を蔽ひ谷を埋めて東西四基米、南北は十基米に及んでゐる。明治維新の際一旦官有林に編入されたが、村民一同より從來の入會關係を主張して拂下を願出で、明治八年に至り豐英村外九ケ村（鎌田安次郎二百五十八名）に拂下げられたものである。當時の記錄を見ると、その拂下價格は一反步に付金三十五錢、卅七錢五厘、四十錢、五十錢の四種で、何でも全體で三四百圓ぐらゐのものであつたらしい。爾後右十箇村の共有林として管理し、村民一同從前の通り入會を續けて來たが、追々權利の賣買が行はれ始めて、共有權の一部が他町村民に移轉するやうになつたので、是では拂下當時の主旨に反するとあつて、明治十八年八月關係者一同協議の結果、權利賣買防止の目的で村の公有地に編入してしまつた。次で同二十一年町村制の施かれると同時に、豐英村外九ケ村は合して三島村となり、山林も亦三島村の村有林と云ふことになつたのである。

然し乍ら其は共有林から、村有林へと名儀が變つたのみで、實質には何等の變化もなく、村民は依然自由に出入して薪炭材の伐採を行つて居た。唯だ伐採るのみで、伐採つた後に造林する者は誰もない、林業の書物を觀るとかういふのを『掠奪林業』と稱する相だ。是ではならぬとあつて、三十七年かに各部落へ使用區域を割當つることゝし、次で村有財產を無料で使用せしめるのは不可いと云ふ議論が出て、一箇年一戸當金三十錢づゝの山林使用料を徵收する事にした。然しこんなことで、濫伐の止む譯がない。而も全村民木炭製造を以て主業とし、それが各自に濫伐をやるのであるから、森林の荒廢や想ふべしで、

小糸川の治水上からしても、最早黙視し難き程度に立至つて居たものらしいのである。

山林の分割と整理

仍で村民もほんとうに考へたのである。第一村有林の面積は、役場の臺帳には三百八町九段七畝とあつて、その内五十八町歩は、共有林當時から山向ふの安房郡吉尾村及主基村へ貸付けて、年額七十圓の使用料を收めて居るのであるが、廣袤東西一里南北二里半てふ大地積の大部分を覆ふてゐる大山林の面積が、三百町歩や五百町歩であるべき理由がない、と云ふので縣の山林技手を頼んで實測して貰つた處、

各部落貸付林	九九八町九段七畝
安房郡貸付林	四四二町五段四畝
殘餘	四〇二町二段四畝

即ち村有の總山林面積は一千八百四十三町歩強といふ、驚く可き廣大なるものであることが判明した。同時に、之を此の儘荒廢に委して置くのは眞に寶の持腐れだ、是を適當に經營して行くならば、全戸を無税とする位はおろか、如何なる理想的施設をも爲し得べきであると悟つて、村有林の大整理を決行すると共に、縣の産業課に囑して適確なる施業案を樹てゝ貰ひ、今や正に着々實行中である。

一、從來慣行の入會を全廢すると共に、各戸均等に一町五段歩宛の山林——特に立木の豐富な個所を選んで——を分配して、村民一同を先づ土地所有者とした。無償交付は面白くないと云ふので、表面は反當五圓、即ち總額七拾五圓で賣渡した事になつてゐるが、その七十五圓といふ價格が已に無料同樣である上に、十箇年賦で而も「夫役を以て之に替ふる事を得」とある。詰り實際は今後引續き行はれる村有林の造林人夫として、一年に五日か六日間出て働けばよい事になるので、全く無償交付に等しいものである。しかして林理事者達は、村民一同を一樣の地所持とする事は、思想上にも、將た村治上にも、必ず良い結果をもたらすであらうと期待して居る。

二、總面積の約四分の一を村民に分配したが、千四百三十餘町歩の山林が村有として殘り、安房郡貸付の分を控除しても、尚九百八十九町歩が殘つて居る。之を二部に分ち約三百町歩を人工造林に依て杉柏類の喬木林（六十年輪伐）とし、他の六百八十九町歩は現在生育しつゝある櫟樫其他の雜木を保護撫育して薪炭林（十五年輪伐）として、その雜木は專ら村民に賣却する。

三、安房の二村に貸付たる山林は五十年間の契約となつてゐ

るから、速急に回收はできないが、使用料を相當に增額すれば年額三千圓位を得られる。

整理及施業計畫の大體は斯樣なものであつて、雜木林の收入だけで一年少くも一萬七八千圓を得らるるから、是で村費を負擔して餘りある上に、喬木林の方が伐期に達した曉には、年々十一萬餘圓の收入がある可く、貸付林の使用料を合算するときは、三島村の基本財産收入は一箇年十三萬圓を降らぬことになる。無論その十三萬圓と云ふは、現在の物價を標準としての想定であるから、今後物價が騰れば收入額も從つて增加する。村民の教育・衞生・娛樂等に就て如何に充分なる設備をも成し得やう。金の使途に困つて年々剩餘金を村民に配當するような時代も來ぬとは云へない。「捕らぬ狸の皮算用」てふ評はかかる整然たる計畫の下に遂行せらるゝ事業に對して用ふべきものではない、山火事の如き不測の禍に合せざる限り、其の理想は實現するに相違ない。

尤、地方町村の基本財産と云へば、「山林」と相場の定つたものではあるし、林業家の眼から觀たら、是も數多き「入會林整理」の一たるにすぎぬかもしれないが、此の三島村の如きは、著しく、善き意味に於ける共產性を帶びて居る點に、時代思潮の現れを認めぬ譯にゆかぬ。敢て其の造林計畫などを褒賞し紹介する譯ではない。

白濱村の共産生活

模範村、卽ち共産村

白濱といふ村は處々の海岸にあるが、こゝに紹介するのは、伊豆國賀茂郡——下田港の東方四基米にある「模範村」白濱村である。

白濱村と名に負ふ如く、一帶の海岸は雪かともまがふ純白の砂濱で、試みに其の砂を手に掬つて見れば、悉くが石英砂と貝殼の細末である。石英砂は純白であるが、貝殼の細末は必ずしも白くない、個々には種々の美しい色彩を有つてゐるが、それ等が太陽の光線を受けて反射する時、砂濱は一様に白く輝やいて見えるのである。汽船で伊豆半島を一周した人は知つてるであらう、伊豆半島は殆ど全部が火山熔岩によつて構成せられ、其の海岸線は矗々たる斷崖、絶壁を成して海に臨めるところが多く、景勝頗る雄大、岩は暗黑色にして土は悉く赭色、これが此の半島の特色である。その間にひとり白濱の海岸だけが、黑とセピアとの單一な暗い色調を破つて、白く明るく輝いて見える。と云つても、單に白い砂濱ばかりが何處までも何處までも續いて居るような、平板な海岸ではない。その間には黑い礁濱

小糸川の治水上からしても、最早黙視し難き程度に立至つて居たものらしいのである。

山林の分割と整理

仍で村民もほんとうに考へたのである。第一村有林の面積は、役場の臺帳には三百八町九段七畝とあつて、その内五十八町歩は、共有林當時から山向ふの安房郡吉尾村及主基村へ貸付けて、年額七十圓の使用料を收めて居るのであるが、廣袤東西一里南北二里半てふ大地積の大部分を覆ふてゐる大山林の面積が、三百町歩や五百町歩であるべき理由がない、と云ふので縣の山林技手を頼んで實測して貰つた處、

各部落貸付林	九九八町九段七畝
安房郡貸付林	四四二町五段四畝
殘餘	四〇二町二段四畝

即ち村有の總山林面積は一千八百四十三町歩强といふ、驚く可き廣大なるものであることが判明した。同時に、之を此の儘荒廢に委して置くのは眞に寶の持腐れだ、是を適當に經營して行くならば、全戸を無税とする位はおろか、如何なる理想的施設をも爲し得べきであると悟つて、村有林の大整理を決行すると共に、縣の産業課に囑して適確なる施業案を樹てゝ貰ひ、今や正に着々實行中である。

一、從來慣行の入會を全廢すると共に、各戸均等に一町五段歩宛の山林――特に立木の豐富な個所を選んで――を分配して、村民一同を先づ土地所有者とした。無償交付は面白くないと云ふので、表面は反當五圓、即ち總額七拾五圓で賣渡した事になつてゐるが、その七十五圓といふ價格が已に無料同様である上に、十箇年賦で而も「夫役を以て之に替ふる事を得」とある。詰り實際は今後引續き行はれる村有林の造林人夫として、一年に五日か六日間出て働けばよい事になるので、全く無償交付に等しいものである。しかして林理事者達は、村民一同を一様の地所持とする事は、思想上にも、將た村治上にも、必ず良い結果をもたらすであらうと期待して居る。

二、總面積の約四分の一を村民に分配したが、千四百三十餘町歩の山林が村有として殘り、安房郡貸付の分を控除しても、尚九百八十九町歩が殘つて居る。之を二部に分ち約三百町歩を人工造林に依て杉桧類の喬木林（六十年輪伐）とし、他の六百八十九町歩は現在生育しつゝある楢櫟其他の雜木を保護撫育して薪炭林（十五年輪伐）として、その雜木は專ら村民に賣却する。

三、安房の二村に貸付たる山林は五十年間の契約となつてゐ

るから、速急に回收はできないが、使用料を相當に増額すれば年額三千圓位を得られる。

要理及施業計畫の大體は斯樣なものであつて、雜木林の收入だけで一年少くも一萬七八千圓を得らるるから、是で村費を負擔して餘りある上に、喬木林の方が伐期に達した曉には、年々十一萬餘圓の收入がある可く、貸付林の使用料を合算するときは、三島村の基本財産收入は一箇年十三萬圓を降らぬことになる。無論その十三萬圓と云ふは、現在の物價を標準としての想定であるから、今後物價が騰れば收入額も從つて増加する。村民の教育・衛生・娛樂等に就て如何に充分なる設備をも成し得やう。金の使途に困つて年々剩餘金を村民に配當するような時代も來ぬとは云へない。「捕らぬ狸の皮算用」てふ語はかかる整然たる計畫の下に遂行せらるゝ事業に對して用ふべきものではない、但火事の如き不測の禍に會せざる限り、其の理想は實現するに相違ない。

尤、地方町村の基本財産と云へば、「山林」と相場の定つたものではあるし、林業家の眼から觀たら、是も數多き「入會林整理」の一たるにすぎぬかもしれないが、此の三島村の如きは、著しく、善き意味に於ける共産性を帶びて居る點に、時代思潮の現れを認めぬ譯にゆかぬ。敢て其の造林計畫などを紹介し紹介する譯ではない。

白濱村の共産生活

模範村、卽ち共産村

白濱といふ村は處々の海岸にあるが、こゝに紹介するのは、伊豆國賀茂郡——下田港の東方四基米にある「模範村」白濱村である。

白濱村と名に負ふ如く、一帶の海岸は雪かともまがふ純白の砂濱で、試みに其の砂を手に掬つて見れば、悉くが石英砂と貝殼の細末である。石英砂は純白であるが、貝殼の細末は必ずしも白くない、個々には種々の美しい色彩を有つてゐるが、それ等が太陽の光線を受けて反射する時、砂濱は一樣に白く輝やいて見えるのである。汽船で伊豆半島を一周した人は知つてるであらう、伊豆半島は殆ど全部が火山熔岩によつて構成せられ、其の海岸線は矗々たる斷崖、絕壁を成して海に臨めるところが多く、景勝頗る雄大、岩は暗黑色にして土は悉く赭色、これが此の半島の特色である。その間にひとり白濱の海岸だけが、黑とセピアとの單一な暗い色調を破つて、白く明るく輝いて見える。と云つても、單に白い砂濱ばかりが何處までも何處までも續いて居るような、平板な海岸ではない。その間には黑い礁濱

もあれば、蒼い松林もある、御神釜の奇勝あり、龍宮島の佳景あり、尙海上には大小無數の岩が碁布して、陸から眺めても、海上から望んでも、さながら「描ける如き美しい漁村」である。自然の風光が美しいばかりでなく、村の人たちの心持は、その自然美にも增して一層美しいものがある。風俗は素朴にして、人情は純眞そのものである、其の純なり朴なりは、普通山間の寒村等に用ひらるゝ純朴さとは、些か趣きを異にして、實にリファインされた美しさである。――詳しくは尙後に、具體的に說く機會があるであらう。

白濱村の生命は、その雪の如き白砂ではない、岸に遠く近く波間にうかぶ無數の黑い岩と、水面下に沈める一帶の暗礁とが、此の村の寶である。その岩の根に附着し成育する寒天原料の「天草」が、此村を日本一の模範村とし、又世にも珍らしき共產生活の理想境として實在せしめて居るのである。と云つて「天草」は決して白濱の海岸に特產の海草ではない。稻取から下河津、白濱、濱崎、南崎邊まで南伊豆一帶の海岸地では、何處でも採收せられて居るし、外房の白濱、根本地方及び八丈島等に於ても、盛んに採收せられて居るものである。異るところは、外の村では村民個々に之を行ひ、白濱村では村の共同經營として居る點である。年々約三千圓といふ採藻稅を、村から縣に納めて、採收から乾燥、賣捌に至るまで一切を村營でやつて居る、卽ち共同經營に由る一種の大共生活を實行して居るのである。その結果、我國に於ける「天草」相場は白濱村に依つて左右せらるるまでの勢力となり、且つ村民は之に由て莫大な――恐らく他村民に二倍三倍する――利益を收めて居るのである。

一ケ年の財政三十五萬圓

白濱村は原田、長田、板戶の三部落から成り、その總戶數四百十戶、人口二千二百六十六人（大正十二年末現在）といふ、獨立の自治體としては、寧ろ甚だ小さな村に屬するのであるが、一箇年の財政は每に三十四五萬圓に達して居る。卽ち、

△一般會計

	（歲入）	（歲出）圓
大正十二年	五七、一四六	五〇、二四三
同　十三年	五九、九六六	五八、〇一一
同　十四年	六二、一八七	六一、九三一

△專用漁業特別會計

	（歲入）	（歲出）圓
十二年	二四八、二七九	二四八、二七九
十三年	二八六、七七九	二八六、七七九
十四年	二七九、五五五	二七九、五五五

驚くべき尨大な財政であつて、恐らく斯樣な村は日本に二つと

とないであらう。無論それは村民の經濟生活の半を占むる天草採集を村營でやつて居る結果ではあるが、一般會計の六萬圓といふのが、すでに四百戸ぐらゐの小村の財政としては、先づ比類のない所で、村民一戸の負擔額は百五十六圓に上つてゐる。――御藏島の如く洋上の離れ島で、而も共産生活の行はれて居る處は例外として、

村の財源の大きいことは、必ずしも自慢にならぬが、白濱村では此の多額の費用を支出するのに、村民からは一厘一錢も税を徴收して居らぬ。全くの無税鄕である。しかして其の財政の基礎の重因なることは、實に驚嘆に値ひするものがある。

大正十四年度歳入内譯

一、財産收入　五萬二千四百六十圓

1. 基本財産收入　二三・五一四圓
 - △預金利子　一四・〇八四
 - △公債社債利子　七四七三
 - △株式配當　一・六七〇
 - △小作料貸地料等　二八四
2. 小學校基本財産收入　二・三九一
3. 專用漁業收入　二六・五五八

二、國庫及縣よりの交付金　二千五百二十七圓

三、前年度繰越金　五千圓

四、其他の雜收入　二千二百圓

內二〇〇〇圓は當座預金利子

賢明なる讀者に對して、冗々しい說明の要はない。總歳入の九十五%は林有財産より生ずる收入にして、殘りの五%は國庫及び縣より當然交付又は補助せらるべき金額であり、且財産收入の一半は天草收入よりの繰入金、他の一半は預金利子及び公債社債等より生ずる利子であつて、此の點に大いに留意を要する。乃ち白濱村の林有財産を檢するに、

現　金　二十一萬二千三百十三圓

國庫其他の債券　十一萬九千九百七十三圓

株　券　二萬四千三百三十八圓

土地及建物　三萬一千三百八十圓

合計三十九萬七千〇五圓

（大正十三年三月末日現在）

今日は更に少くも二三萬圓を增加してゐる筈であるが、財産の過半は現金で所持し、他の四割も亦、現金に準ずべき債券株券で持つてゐるのである。一度山火事に逢へば悠忽にして、烏有に歸する如き基本財産に比して、頗ぶる力强い所がある。

顧つて支出の方を一瞥する。

大正十四年度歳出內譯

一、役場費及會議費　七千六百六十九圓
二、小學校費　一萬三千七百三十圓
三、實業補習學校費　四千六百九十九圓
四、衛生及病院諸費　四千四百八十圓
五、基本財產造成費　一萬一千八百九十七圓
六、其他諸費　五千四十圓

以上經常部、以下臨時部

一、小學校費　三千八百五十圓
二、農牧奬勵費　一千三百三十圓
三、公會堂及講堂建築積立金　五千圓
四、教育、自治、奬兵業に對する寄附並補助金　二千九百十六圓
五、其他諸費　一千四百二十圓

經常臨時合計六萬一千九百卅一圓

乃ち經常歳出の約四割は教育費、二割五分は基本財產への繰入、一割が衛生費、役場費と會議費は併せて一割五分である。かうした按分に由つて、如何に理想的施設が行はれ、共產的氣分が横溢し、而して村民一同が、如何に幸福な生活を樂んでゐるか?、其の點は少しく說明をしないと解らない。

採草益金の均一配當

村營の「專用漁業」中には、鮑や螺蠑の漁獲も加はつて居るが、その收入たるや一ケ年千圓內外のもので、殆んど問題にはならない、事實天草の採收が專業で、其の年收（賣上高）は明治三十年頃には僅々二三萬圓に過ぎなかつたが、卅四年以降五萬圓に増加し、四十三年から大正七八年にかけては十四五萬圓乃至十七八萬圓を上下して居たが、大正十一年に至り一躍二十五萬圓となり、近年は二十七八萬圓の收入を上げて居る。是は理事者及び村民が協力して、鋭意天草の保護増殖に努力した結果である。

今、大正十四年度の專用漁業豫算について、その收支計算を對照して見るのに、

總收入　二十七萬九千五百五十圓
內、生產費　十萬八千七百五十七圓
稅　金　二千九百九圓
臨時土木費及び借入金利子　八百圓
村民配當　十三萬二千七百九十一圓
村費育英資金其他の繰入金　三萬三千百九十八圓
豫備及積立金　一千一百圓

乃ち生產諸費合計三割八分、純益六割二分といふ事になる。而

して其の益金の八割は、村內各戸に、均一配當せられるのである。天草採收に參加すると、爲ざるとに論なく、村民は其の配當に與ることが出來るのである。

白濱村四百十戸（大正十三年三月末）の職業別を見るのに、

	（本業）	（副業）
農	三五一戸	一四戸
商	一八戸	―
工	七戸	三戸
漁	四戸	三五七戸
雜	三〇戸	七戸

本業「農」三百五十一戸と、副業「漁」三百五十七戸とは、實は二にして一で、男は專ら百姓をやり、女は主として天草の採收、調製に從事しつゝあるのである。乃ち總戸數の九割迄に、天草採收に從事して居るが、約一割は之に參加して居らぬ。それでも利益配當は受ける。且つ面白いのは、他の共產村では、何れも因習的に戸數增加を制限して居るが、白濱村では分家、獨立業に就て何等制限を加へぬのみか、他町村から新たに轉籍して來たものをも（一定年限を經過すれば）、利益配當に均霑せしめて居ることである。此點は特筆して置かねばならぬ。

年々何程の金額が配當せられて居るかと云へば、一戸當――

大正十一年度　三百三十三圓八錢
同　十二年度　四百四十圓卅四錢
同　十三年度四百十圓
（十三年度は十二月末迄の分にて春季配當を含まず、今少しく增加の筈）

決して少額なりと云ふことはできぬ。參考として配當に關する規定を抄錄して置く。

白濱村專用漁業益金配當ニ關スル規程

第一條　本村ハ從來ノ慣行ヲ維持シ每年地先水面使用漁業益金拾分ノ八ヲ配當金トシテ之ヲ村民ニ配當給與ス

配當金ハ每年十二月一日現在帝國臣民ニシテ本村ニ本籍ヲ有シ本村ニ住居シ村ノ負擔ヲ分任シ及本村ニ一戸ヲ構ヘ家屋ヲ有シ尙引續キ以上ノ要件ヲ具備スルモノニハ左記各號ニ依リ給與ス

但家督相續ニ就テハ被相續人ノ年數ヲ積算ス

一、滿十ケ年ニ至リシトキ一人別配當額ノ十分ノ五
二、滿二十ケ年ニ至リシトキ一人別配額ヲ給ス
三、他町村ヨリ分家及轉籍シタルモノハ滿二十ケ年ニ至リシトキ一人別配當額ノ十分ノ五、滿三十ケ年に至リシトキ一人別配當額ヲ給與ス

（中　略）

第二項ノ要件ヲ缺クル處アルモ其情狀ニ於テ酌量スベキモノアルトキハ一人割配當額十分ノ五以下ヲ給與スルコトヲ得

第二條　配當金ハ賣渡及讓渡其他擔保ヲ供スルコトヲ得ズ

第三條　村ノ必要支出ニ不足ヲ生シタル場合ニ於テハ村會ノ決議ヲ以テ第一條第一項配當率ヲ減ズルコトヲ得

此規程に據ると、家屋を有せざる者は配當に與る事が出來ないかに見えるが、本年二月の調査によれば總戶數四百十六戶の中、九十九%強は家屋所有者であつて、家屋を有せざる者は僅に四戶、而も其の人口は學校教師とか醫師とか、村から舍宅を給せられて居る者で、此村には家屋を有たぬやうな貧乏人は、事實一人も居ない相である。

尙爰で天草採收及び益金配當に關する歷史を述べて置く必要があらう。餘り古い時代のことは記錄がないから判然せぬが、慶長年間すでに採草の行はれてゐた事は明らかで、ずつと降つて寛政七年より文政四年に至る間（代官江川太郎左衛門）、引續き採草益金として年々永九貫五百文宛を上納して、採收權を得て居たが、其の頃は專ら田地肥料として使つてゐたのである。然るに文政五年江川氏から水野出羽守の手に移ると共に、「出羽守御手捕」となつて海面使用を禁ぜられ天草は水野氏の手で[illegible]せられて、寒天原料として大阪方面へ販賣せられた。此時村民等は始めて天草が寒天の原料となることを知つたのである。村民は肥料を失つて大いに困難し、種々出羽守へ掛合つた結果、年々肥料代として三十兩宛下附せらるゝ事となり、之を村民一同に分配して來た。然るに明治元年以降不作不漁が續いて、村方一同困窮に陷つたので、天草採收權の讓與を願出たが、願意は聽屆けられず、肥料代として七十圓を增して、明治三年以後年額百圓を下附せらるゝ事となつた。次で翌四年廢藩置縣となつたので、此の機を逸せず韮山縣令に對して、再び天草採收認可を稟請し、猛烈な運動を試みた結果、遂に其の目的を達し、年稅八百圓を上納して採收權を認めらるゝに至り、爾後多少の變遷はあつたが、天草は常に當村經濟の原動力となつてゐた。

明治二十四年から同廿九年に至る六年間、東京市の大野某及當村長谷川某の兩名に、其の採收權を賣渡したことがあつたが、生憎連年の不作續きにして、右兩名は匙を投じ、三十年以後再び村營で採收する事になつたが、村の直營に復すると同時に豐作となり、年を追ふて今日の盛況を觀るに至つたのである。

即ち益金配當は、肥料代分配時代の遺制で、その分配法も元は均一割でなかつた。分配法に就ては、村民が二派にわかれて、

殆ど血を流さんばかりの激しい爭ひをした事もあつた相であるが、結局平等主義が最後の勝利を占めて、今日の如き理想的制度が生れるに至つた。「均一配當」は慣習に非ずして、正に當村民が新思想の現れである。

共産生活の基本は婦人

村民が專用漁業から受くる收入は、無論この利益配當金だけではない。直接その生産に參加した者には、それ〴〵相當の報酬が支拂はれるのである。村長が總指揮官で兩名の助役之れを補佐し、別に專用漁業の爲に特設されてある。

總務員	三名	（年酬各二百八十五圓）
取扱員	十四名	（同　各二百十一圓）
專務取扱員	一名	（同　三百六十圓）

が幹部となつて、天草採收期たる四月下旬から十月中旬迄ほぼ半歳に亘る間、村内の壯年男女は殆んど總動員の姿で、此の仕事に從事する。鮑取りや海藻採りは、何處の地方でも海女の仕事と一定して居るやうであるが、白濱村に於ても、矢張り其の採收に從ふ者は婦人であつて、男子は海女の採草作業を援助する位置にある。だから白濱村の共産生活は、專ら婦人の力に依つて、營まれるるとも云へぬではなからう。

天草採收に二つの方法がある。一は海採り、一は陸採りである。海とりと云ふのは水夫二人海女四人が一組となつて、船に乘つて一基米乃至一基半米も沖へ出て採收するもので、大部分は此の方法に據り、日々百餘隻の小舟が出て活動して居る。陸とりといふは、陸岸乃至二三百米突の近距離を泳いで行つて採收するので、是は船を用ひず、海女の單獨作業である。天草にもいろ〳〵の種類があつて、採草（とりくさ）、鬼草、平草（ひら）、ドラ草等の品質によつて價格も異るが、その採收料は分量制度で、普通の天草は生草の一貫匁に付海女へ十二錢五厘、水夫（二人）へ九錢の割合で支拂はれる。陸採りの方は收獲が少い代りに、水夫への分配がないから、一貫匁に付廿一錢五厘が海女へ支拂はれる。此の外暖をとる間の薪代として、海一人に付一日八錢宛支給せられる。その薪は晩秋から冬にかけて、附近の山に行つて伐つて來て置くのであるから、全然海女の收入となる譯で、海女一日の勞働賃は平均一圓七八十錢となる由である。乾燥・調製等については、一日七十五錢乃至一圓の割合で、賃銀が支拂はれる。兎に角生産役總額十萬七千圓は、或は給料、或は日傭賃、或は採收料、或は勉勵賞與等名目はいろ〳〵であるが、直接生産に參與した人々の間に分配支給せられるもので、之を三百六十戸に割當てると、丁度一戸當三百圓となる。しかも其は約半歳間の所得であるから、陸上勤務に從ふ取扱員及び總務

（中　略）

第二項ノ要件ヲ缺クル處アルモ其情狀ニ於テ酌量スベキモノアルトキハ一人割配當額十分ノ五以下ヲ給與スルコトヲ得

第二條　配當金ハ賣渡及讓渡其他擔保ヲ供スルコトヲ得ズ

第三條　村ノ必要支出ニ不足ヲ生シタル場合ニ於テハ村會ノ決議ヲ以テ第一條第一項配當率ヲ減ズルコトヲ得

此規程に據ると、家屋を有せざる者は配當に與る事が出來ないかに見えるが、本年二月の調査によれば總戸數四百十六戸の中、九十九%强は家屋所有者であつて、家屋を有せざる者は僅に四戸、而も其の人口は學校教師とか醫師とか、村から舍宅を給せられて居る者で、此村には家屋を有たぬやうな貧乏人は、事實一人も居ない相である。

尙爰で天草採收及び益金配當に關する歷史を述べて置く必要があらう。餘り古い時代のことは記錄がないから判然せぬが、慶長年間すでに採草の行はれてゐた事は明らかで、ずつと降つて寶曆七年より文政四年に至る間（代官江川太郞左衛門）、引續き採草益金として年々永九貫五百文宛を上納して、採收權を得て居たが、其の頃は專ら田地肥料として使つてゐたのである。然るに文政五年江川氏から水野出羽守の手に移ると共に、「出羽守御手捕」となつて海面使用を禁ぜられ天草は水野氏の手でせられて、寒天原料として大阪方面へ販賣せられた。此時村民等は始めて天草が寒天の原料となることを知つたのである。村民は肥料を失つて大いに困難し、種々出羽守へ掛合つた結果、年々肥料代として三十兩宛下附せらるゝ事となり、之を村民一同に分配して來た。然るに明治元年以降不作不漁が續いて、村方一同困窮に陷つたので、天草採收權の讓與を願出たが、願意は聽屆けられず、肥料代として七十圓を增して、明治三年以後年額百圓を下附せらるゝ事となつた。次で翌四年廢藩置縣となつたので、此の機を逸せず韮山縣令に對して、再び天草採收認可を稟請し、猛烈な運動を試みた結果、遂に其の目的を達し、年稅八百圓を上納して採收權を認めらるゝに至り、爾後多少の變遷はあつたが、天草は常に當村經濟の原動力となつてゐた。明治二十四年から同廿九年に至る六年間、東京市の大野某及當村長谷川某の兩名に、其の採收權を賣渡したことがあつたが、生憎連年の不作續きにして、右兩名は匙を投じ、三十年以後再び村營で採收する事になつたが、村の直營に復すると同時に豐作となり、年を追ふて今日の盛況を觀るに至つたのである。即ち益金配當は、肥料代分配時代の遺制で、その分配法も元は均一割でなかつた。分配法に就ては、村民が二派にわかれて、

殆ど血を流さんばかりの激しい爭ひをした事もあつた相であるが、結局平等主義が最後の勝利を占めて、今日の如き理想的制度が生れるに至つた。「均一配當」は慣習に非ずして、正に當村民が新思想の現れである。

共產生活の基本は婦人

村民が專用漁業から受くる收入は、無論この利益配當金だけではない。直接その生產に參加した者には、それ〳〵相當の報酬が支拂はれるのである。村長が總指揮官で兩名の助役之れを補佐し、別に專用漁業の爲に特設されてある。

總務員　三名（年酬各二百八十五圓）
取扱員　十四名（同　各二百十一圓）
專務取扱員　一名（同　三百六十圓）

が幹部となつて、天草採收期たる四月下旬から十月中旬迄ほぼ半歳に亙る間、村内の壯年男女は殆んど總動員の姿で、此の仕事に從事する。鮑取りや海藻採りは、何處の地方でも海女の仕事と一定して居るやうであるが、白濱村に於ても、矢張り其の採收に從ふ者は婦人であつて、男子は海女の採草作業を援助する位置にある。だから白濱村の共產生活は、專ら婦人の力に依つて、營まれるるとも云へぬではなからう。

天草採收に二つの方法がある。一は海採り、一は陸採りである。海とりと云ふのは水夫二人海女四人が一組となつて、船に乘つて一基米乃至一基半米も沖へ出て採收するもので、大部分は此の方法に據り、日々百餘隻の小舟が出て活動して居る。陸とりといふは、陸岸乃至二三百米突の近距離を泳いで行つて採收するので、是は船を用ひず、海女の單獨作業である。天草にもいろ〳〵の種類があつて、採草、鬼草、平草、ドラ草等の品質によつて價格も異るが、その採收料は分量制度で、普通の天草は生草の一貫匁に付海女へ十二錢五厘、水夫（二人）へ九錢の割合で支拂はれる。陸採りの方は收獲が少い代りに、水夫への分配がないから、一貫匁に付廿一錢五厘が海女へ支拂はれる。此の外暖をとる間の薪代として、海女一人に付一日八錢宛支給せられる。その薪は晩秋から冬にかけて、附近の山に行つて伐つて來て置くのであるから、全然海女の收入となる譯で、海女一日の勞働賃は平均一圓七八十錢となる由である。乾燥・調製等については、一日七十五錢乃至一圓の割合で、賃銀が支拂はれる。兎に角生產役總額十萬七千圓は、或は給料、或は日傭賃、或は採收料、或は勉勵賞與等名目はいろ〳〵であるが、直接生產に參與した人々の間に分配支給せられるもので、之を三百六十戶に割當てると、丁度一戶當三百圓となる。しかも其は約半歲間の所得であるから、陸上勤務に從ふ取扱員及び總務

員等の年額二百十一圓乃至二百八十五圓は、決して過當の報酬とは云へない。——陸上で萬年筆や天秤を持つてブラ〳〵して居る者が、海中に潜つて勞働する者よりも、多額の報酬を得ると云ふ如きことは、此の村では許されないのである。

專用漁業の外一般會計の方にも、桑園・養蠶・牧畜業の奬勵費、消防夫手當、雜役人夫等、直接村民の頭上に落つべき費目が一萬三千圓ばかりある、之を三百六十戸に割當つれば、一戸當三十七圓となる。尚此の外農產物が十三四萬圓に達し、牧畜・養蠶も多少行はれて居るし、山林も少々はある。故に村民の約九割を占むる農漁兼業者三百六十戸に就て、その年收額を推定して見るのに、

一金四百圓　農產收入
一金三百圓　天草採收料
　　　　　　又は之に準ずるもの
一金百　圓　其他の雜收入
一金四百圓　專用漁業配當
　合計　金一千二百圓（各戸平均年收）

甚だ大まかな計算であるが、極めて內輪に見積つてある。白濱村の人口は一戸當六人となつて居るが、此の標準口數（內二人は學齡以下の小兒と觀る）を有する家であらば、少くも一箇年是だけの收入はある筈である。しかも此の平均額は或者は一萬圓以上、或者は僅かに五六百圓と云ふ如き、較差の大きい數字から出た平均額ではなくて、是より多いにしても少いにしても、其の差は極めて小さい筈である。即ち「平均された」平均收入である。白濱村民は、特別に惰けるか又は病氣にでも罹らない限りは、一箇年一千二百圓の最低收入を、保證せられて居ると云つていゝのである。

教育上の施設と抱負

この點でも私は、特に白濱村民に敬意を拂ひたいと思ふ。何れの町村でも、小學校費の負擔に苦しんで居らぬところはないが、特に子弟教育の完備に熱心な努力を捧げてゐる白濱村では、經常歳出四萬七千圓の內一萬八千餘圓——即ち其の三割九分を教育費で占めてゐるのである。

海を見晴らして、眺望のひろびろした高臺地に、二階建の立派な尋常高等小學校が建つてゐる。いかにも堂々としてゐるが、內容も頗るよく整つて居る。第一に「善い先生」を集めることに苦心してゐる。生徒數は三百八九十人で（不就學兒童は一名もない。）、尋常科六學級、高等科二學級、併せて八學級のところに、職員は校長以下十名で、その內ただ一名の補助教員が加はつてゐる外、九名までは正教員を揃へてゐる。最年な土

地へ善い教師を招かうといふのだから、自然高い俸給を支拂はねばならぬ。即ち正教員九名の平均給料は六十六圓で東京市の教員の俸給よりも高くなつてゐる。靜岡縣下で一番高いことなと[redacted]は[redacted]言ふ迄はない[redacted]俸給が高いから善い教師が集まるとは限らぬが、私は一夜白濱小學校長石原金藏氏と語つて、その人格に推服した。實に典型的な好小學教師である。氏は齡未だ不惑に達せず、靜岡市に於て、小學教師としては、最も樞要な、且つ多望な位置に就いて居たのを、玄德が三度孔明の草廬を叩いた熱心さで、招請して來たものだと、村の理事者達も得意顏であつたが、成る程金で動きそうな人物とは見えない。『村長以下、教育といふ事に就て深き理解を有つて居らるゝやうで、此地ならば、或ひは自分の理想の一端を實現し得らるるかも知れぬと思つて、それを樂みに赴任して來ました』と、氏自らも亦謙讓な態度で其の意氣を語つた。氏の赴任後直ちに一萬餘圓を投じて、上下二段に分れてゐた敷地が平らに整理せられて、運動場が擴張せられた上に、小さな動物園までが設けられた。然し氏の所謂理想が、新樣な外觀的なものでないであらう事は、勿論で、其の效果は十年或ひは二十年を經て、始めて少し許り現れてくる底のものでなければならぬ。――少しく賞めすぎて居るかも知れぬが、私は本村が他日必ず、教育上に於ても模範村と稱せらるるに至るであらう事を、密かに期待して居る者である。

小學校費は、兒童一人に付一箇年四十五圓强に當つて居る外、別に實業補習學校があつて、その經費が四千七百圓、この方は生徒が[redacted]に上つて居るが、自村の生徒は勿論、隣村から入學して居る者に對しても、凡て無月謝である。職員は校長以下兼任四名、專任三名、囑託一名で、他村の補習校の如く夜間教授でなく、晝間教授を行つて居る。義務教育を卒へて高等小學に入り、尙進んで補習校に入ることに依つて、略ぼ中等程度の教育は自村内で行ふと云ふのが、村民達の意嚮であるのみならず、今回新たに教育上の「機會均等」の途が開かれて、品行方正、學術優等の兒童は、中學校、高等學校から最高學府の大學までも、或は高等工業なり高等商業なり、當人の希望に從つて、村費で教育をすることになつた。學費の一部を補助すると云ふ如き、微温的なやり方でなく、全部を村費で負擔せんとする徹底した計劃である。

給費ハ左ノ條件ヲ具備スルモノニ限ル

一、性行、學歷、體格等優良ナルモノニテ

二、本村ニ五ケ年以上本籍ヲ有シ

三、縣稅戶數割年額二十圓以下ノ者ノ子弟タルコト

此の目的の爲に大正十二年以降育英資金（十萬圓）の積立を開

員等の年額二百十一圓乃至二百八十五圓は、決して過當の報酬とは云へない。――陸上で萬年筆や天秤を持つてブラ〳〵して居る者が、海中に潜つて勞働する者よりも、多額の報酬を得ると云ふ如きことは、此の村では許されないのである。

專用漁業の外一般會計の方にも、桑園・養蠶・牧畜業の獎勵費、消防夫手當、雜役人夫等、直接村民の頭上に落つべき費目が一萬三千圓ばかりある、之を三百六十戸に割當つれば、一戸當三十七圓となる。尙此の外農產物が十三四萬圓に達し、牧畜・養蠶も多少行はれて居るし、山林も少々はある。故に村民の約九割を占むる農漁業業者三百六十戸に就て、その年收額を推定して見るのに、

一金四百圓　農產收入
一金三百圓　天草採收料
一金百　圓　其他の雜收入又は之に準ずるもの
一金四百圓　專用漁業配當
合計　金一千二百圓（各戸平均年收）

甚だ大まかな計算であるが、極めて內輪に見積つてある。白濱村の人口は一戸當六人となつて居るが、此の標準口數（內二人は學齡以下の小兒と觀る）を有する家であらば、少くも一箇年是だけの收入はある筈である。しかも此の平均額は或者は一萬圓以上、或者は僅かに五六百圓と云ふ如き、較差の大きい數字から出た平均額ではなくて、是より多いにしても少いにしても、其の差は極めて小さい筈である。即ち「平均された」平均收入である。白濱村民は、特別に惰けるか又は病氣にでも罹らない限りは、一箇年一千二百圓の最低收入を、保證せられて居ると云つていゝのである。

教育上の施設と抱負

この點でも私は、特に白濱村民に敬意を拂ひたいと思ふ。何れの町村でも、小學校費の負擔に苦しんで居らぬところはないが、特に子弟教育の完備に熱心な努力を捧げてゐる白濱村では、經常歲出四萬七千圓の內一萬八千餘圓――即ち其の三割九分を教育費で占めてゐるのである。

海を見晴らして、眺望のひろびろした高臺地に、二階建の立派な尋常高等小學校が建つてゐる。いれものも堂々としてゐるが、內容も頗るよく整つて居る。第一に「善い先生」を集めることに苦心してゐる。生徒數は三百八九十人で（不就學兒童は一名もない。）、尋常科六學級、高等科二學級、併せて八學級のところに、職員は校長以下十名で、その內ただ一名の補助教員が加はつてゐる外、九名までは正教員を揃へてゐる。學歷は土

増へ善い教師を抱かうといふのだから、自然高い俸給を支拂はねばならぬ。即ち正教員九名の平均給料は六十六圓で東京市の教員の俸給よりも高くなつてゐる。靜岡縣下で一番高いことなどは言ふ迄はない。俸給が高いから善い教師が集まるとは限らぬが、私は一夜白濱小學校長石原金脈氏と語つて、その人格に推服した。實に典型的な好小學教師である。氏は齢未だ不惑に達せず、靜岡市に於て、小學教師としては、最も緊要な、且つ多望な位置に就いて居たのを、玄德が三度孔明の草廬を叩いた熱心さで、招請して來たものだと、村の理事者達も得意顔であつたが、成る程金で動きそうな人物とは見えない。『村長以下、教育といふ事に就て深き理解を有つて居らるゝやうで、此地ならば、或ひは自分の理想の一端を實現し得らるるかも知れぬと思つて、それを樂みに赴任して來ました』と、氏自らも亦謙讓な態度で其の意氣を語つた。氏の赴任後直ちに一萬餘圓を投じて、上下二段に分れてゐた敷地が平らに整理せられて、運動場が擴張せられた上に、下さな動物園までが設けられた。然し氏の所謂理想が、斯樣な外觀的なものでないであらう事は、勿論で、其の效果は十年或ひは二十年を經て、始めて少し許り現れてくる底のものでなければならぬ。――少しく賞めすぎて居るかも知れぬが、私は本村が他日必ず、教育上に於ても模範村と稱せらるるに至るであらう事を、密かに期待して居る者である。

小學校費は、兒童一人に付一箇年四十五圓強に當つて居る外、別に實業補習學校があつて、その經費が四千七百圓、この方は生徒が三十名足らずで、一人當が百六七十圓に上つて居るが、自村の生徒は勿論、隣村から入學して居る者に對しても、凡て無月謝である。職員は校長以下兼任四名、專任三名、囑託一名で、他村の補習校の如く夜間教授でなく、晝間教授を行つて居る。義務教育を卒へて高等小學に入り、尙進んで補習校に入ることに依つて、略ぼ中等程度の教育は自村内で行ふと云ふのが、村民達の意嚮であるのみならず、今回新たに教育上の「機會均等」の途が開かれて、品行方正、學術優等の兒童は、中學校、高等學校から最高學府の大學までも、或は高等工業なり高等商業なり、當人の希望に從つて、村費で教育をすることになつた。學費の一部を補助すると云ふ如き、微温的なやり方でなく、全部を村費で負擔せんとする徹底した計劃である。

給費ハ左ノ條件ヲ具備スルモノニ限ル

一、性行、學歷、體格等優良ナルモノニテ

二、本村ニ五ヶ年以上本籍ヲ有シ

三、縣税戸數割年額二十圓以下ノ者ノ子弟タルコト

此の目的の爲に大正十二年以降育英資金（十萬圓）の積立を

始して、

一、專用漁業益金ノ中ヨリ其百分ノ四

二、歳計剩餘金の全部若クハ一部

を以て之に充當し、其の金額すでに三萬圓に達したので本年度から愈々給費を實行して居る。

「俺は貧乏だから、充分の教育を受くることが出來ない」といふ不幸は、すくなくも白濱村に於ては無くなつた。しかも其の目的は、高等教育を受けたいと希望する者に、希望するだけの教育を授けたいと云ふだけのことで、給與規程の第九條に、

學費ノ給與ヲ受ケタリトモ卒業後何等ノ義務ヲ負フコトナシ

と明瞭に規定されてゐる。

衞生、其他の諸施設

教育に次で衞生上の設備も甚だ行屆いてゐる。從前は村内に醫者が居ない爲、一里八町を隔てた下田町迄出かけるか、迎へるかしなければならなかつた、急病には間に會はぬ上に、經費は多額を要する。仍て數年前村立病院を建て、村醫として帝大醫學士松本重治氏を招聘した。年俸二千四百圓で別に俥と車夫とを提供し、病院の一部が住宅に充ててある。藥價の實費を支拂ふ外は、診療ともに無料で、急病なら如何に夜中でも俥で駈付けてくれる。傳染病患者は隔離病舍に收容して、村費で看婦を附ける。

産婆も村費で傭つてあつて、常に姙婦の家をめぐり歩いて、産前・分娩・産後一切の世話を燒いてくれる。これも無論無料。

警備設備としてはガソリンポンプを有し、各區に用水タンクが設けてある。消防服だつてお揃ひでなか〳〵華々しい。——火事は殆んど無いそうであるが。

專用漁業用としては最新式のモーターボートを有し、專任技手を置いて絶えず財源の調査・保護・増殖に任じ、精密な海底地形圖を作製して、居ながらにして地先海底の狀況、さながら掌を指すの概がある。

いろ〳〵の設備が整つて居るが、小料理屋飲食店の類は一軒もない。全く蕎麥屋一軒ないところである。それに由ても青年の風紀の一端が窺はれる。公會堂を建て丶、村民一般の會合や娯樂場とし、又青年の爲には講堂をつくつて講習會や演武會を開かうと云ふので、昨年から建築費を積立て丶ゐる。これが出來上つたら、月に二回ぐらゐは活動寫眞でもやつて、村民の慰安に供するそうである。

一昨春、東宮殿下の御成婚の際には、記念として、村で、梅の苗約一千本を購入して、各戸に四本づ丶配り、殘りは學校、役

場業の庭に、一齊に植付けた。金のある村であるだけに、大抵のことは村費で片付けるから、村民の生活は想像以上に内福であるらしい。一箇年の村費六萬二千圓の内、五萬九千五百圓は普通ならば村税に據らなければならぬもので、一戸當百五十圓乃至百七十圓となる、故に白濱村民は專用漁業一配當金四百三四十圓に此の金額を加算したるもの、即ち一ケ年約大百圓の配當を受けつゝあると同じ勘定である。

此村治の圓滿を見よ

しかし、利益配當といふ事は株式會社でもやつてゐる。年一割五分も配當をすれば、重役連は大威張である。白濱村の天草採取も株式組織と観るならば、村民各戸は各四千圓の株主で、白濱村は資本金百五十萬圓の會社、村長飯田銀次郎氏は其の專務取締役、助役は常務と云ふ所である。專務の月給は二百圓、重役賞與として一萬圓を御手盛りで控除する位は、尋常茶飯のことに屬する。町村長は元來名譽職で、無給を原則としてゐるが、今日は最早左樣なことは流行致さず、寧ろ出來るだけ高級を拂つて、有能の士を得んことに力めてゐるのが實情である。白濱村長の如きは、一面に於て村政の理事者たると同時に、一面に於ては年々十六七萬圓の純益を擧げつゝある白濱天草株式會社の大番頭なのである。相當の高給を拂つてよろしく、又白濱村には充分之を支拂ふ資力がある。

それ程重大な責任を有し、且單に名儀上の村長でなくて、專實日々その職務に鞅掌しつゝある白濱村長は、幾何の報酬を受けて居るか?。

左に、村長以下役場吏員全部の給料を掲げる。

村長報酬	月額	四十二圓
助役報酬	同	三十八圓
有給助役	同	四十圓
收入役	同	三十八圓
書記(二名)	同平均	三十五圓
小使	同	三十圓

大體に於て非常に過少のみならず、村長と小使との俸給の差額は僅かに十二圓である。同じく共産村でも、御藏島村長の月給は七十圓、小使は十圓で、六十圓の差がある。三島村長の報酬は三十八圓で白濱村より低いが、小使の十七圓に對して、尚二十一圓の差がある。

村長の報酬四十二圓も、昨年四月以來のことで、それ迄は四十圓であつた。且つ單り校長の報酬のみが增加されたのではなく、同時に海女の採草料は一貫匁に付十錢より十二錢五厘に(百分の二十五)、小使の給料は二十六圓より三十圓に(百分の

始して、

一、專用漁業稼金ノ中ヨリ其百分ノ四

二、歳計剩餘金の全部若クハ一部

を以て之に充當し、其の金額すでに三萬圓に達したので本年度から愈々給費を實行して居る。

「俺は貧乏だから、充分の教育を受くることが出來ない」といふ不幸は、すくなくも白濱村に於ては無くなつた。しかも其の目的は、高等教育を受けたいと希望する者に、希望するだけの教育を授けたいと云ふだけのことで、給與規程の第九條に、

學費ノ給與ヲ受ケタリトモ卒業後何等ノ義務ヲ負フコトナシ

と明瞭に規定されてゐる。

衛生、其他の諸施設

教育に次で衛生上の設備も甚だ行屆いてゐる。從前は村內に醫者が居ない爲、一里八町を隔てた下田町迄出かけるか、迎へるかしなければならなかつた、急病には間に會はぬ上に、經費は多額を要する。仍て數年前村立病院を建て、村醫として帝大醫學士松本重治氏を招聘した。年俸二千四百圓で別に俥と車夫とを提供し、病院の一部が住宅に充ててある。藥價の實費を支拂ふ外は、診察ともに無料で、急病なら如何に夜中でも俥で駈付けてくれる。傳染病患者は隔離病舍に收容して、村費で看護婦を附ける。

産婆も村費で備つてあつて、常に姙婦の家をめぐり歩いて、産前・分娩・産後一切の世話を燒いてくれる。これも無論無料。

警備設備としてはガソリンポンプを有し、各區に用水タンクが設けてある。消防服だつてお揃ひでなか／＼華々しい。——火事は殆んど無いそうであるが。

專用漁業用としては最新式のモーターボートを有し、專任技手を置いて絶えず財源の調査・保護・增殖に任じ、精密な海底地形圖を作製して、居ながらにして地先海底の狀況、さながら掌を指すの概がある。

いろ／＼の設備が整つて居るが、小料理屋飲食店の類は一軒もない。全く蕎麥屋一軒ないところである。それに由ても青年の風紀の一端が窺はれる。公會堂を建てゝ、村民一般の會合や娯樂場とし、又青年の爲には講堂をつくつて講習會や演武會を開かうと云ふので、昨年から建築費を積立てゝゐる。これが出來上つたら、月に二回ぐらゐは活動寫眞でもやつて、村民の慰安に供するそうである。

一昨春、東宮殿下の御成婚の際には、記念として、村で、梅の苗約一千本を購入して、各戸に四本づゝ配り、殘りは學校、役

場案の庭に、一齊に植付けた。金のある村であるだけに、大抵のことは村費で片付けるから、村民の生活は想像以上に內福であるらしい。一箇年の村費六萬二千圓の內、五萬九千五百圓は普通ならば村税に據らなければならぬもので、一戸當百五十圓乃至百七十圓となる、故に白濱村民は專用漁業一配當金四百三四十圓に此の金額を加算したるもの、即ち一ヶ年約六百圓の配當を受けつゝあると同じ勘定である。

此村治の圓滿を見よ

しかし、利益配當といふ事は株式會社でもやつてゐる。年一割五分も配當をすれば、重役連は大威張である。白濱村の天草採收も株式組織と擬るならば、村民各戸は各四千圓の株主で、白濱村は資本金百五十萬圓の會社、村長飯田銀次郎氏は其の專務取締役、助役は常務と云ふ所である。專務の月給は二百圓、重役賞與として一萬圓を御手盛りで控除する位は、尋常茶飯のことに屬する。町村長は元來名譽職で、無給を原則としてゐるが、今日は最早左樣なことは流行致さず、寧ろ出來るだけ高級を拂つて、有能の士を得んことに力めてゐるのが實情である。白濱村長の如きは、一面に於て村政の理事者たると同時に、一面に於ては年々十六七萬圓の純益を擧げつゝある白濱天草株式會社の大番頭なのである。相當の高給を拂つてよろしく、又白濱村には充分之を支拂ふ資力がある。

それ程重大な責任を有し、且單に名儀上の村長でなくて、事實日々その職務に鞅掌しつゝある白濱村長は、幾何の報酬を受けて居るか?。

左に、村長以下役場吏員全部の給料を掲げる。

村長報酬　月額四十二圓
助役報酬　同　三十八圓
有給助役　同　四十圓
收入役　同　三十八圓
書記（二名）同平均三十五圓
小使　同　三十圓

大體に於て非常に過少のみならず、村長と小使との俸給の差額は僅かに十二圓である。同じく共産村でも、御藏島村長の月給は七十圓、小使は十圓で、六十圓の差がある。三島村長の報酬は三十八圓で白濱村より低いが、小使の十七圓に對して、尙二十一圓の差がある。

村長の報酬四十二圓も、昨年四月以來のことで、それ迄は四十圓であつた。且つ單り校長の報酬のみが增加されたのではなく、同時に海女の採草料は一貫匁に付十錢より十二錢五厘に（百分の二十五）、小使の給料は二十六圓より三十圓に（百分の

十五强）、而して村長の報酬が百分の五だけ増加せられたのだつた。年末賞與なるものも、村長以下吏員（七名）勉勵賞與として二百圓が計上せられて居るのみで、各一箇月分の給料の七割にしか當らない。年俸二千四百圓の村醫を傭ひ、小學校教師に對して縣下第一の高級を拂つてゐる白濱村の理事者としては、自ら奉ずること餘りに薄しと云はねばならぬ。天草より受くる利益配當は、村長も、小使も、各一口分である。こゝらに白濱村の「共産的努力の氣分」が、最も濃厚に、鮮かに、現はれてゐると思ふ。

私は又、村役場を訪問した時に、彼の人たちが晝の辨當を食べる光景を目撃した。村長は呼リンを叩いて『小使、茶を持つて來い』とは云はなかつた。『どうぢや、お晝にしようぢやないか』と云つて、辨當の包を持つて立上ると、他の吏員も同じく辨當を抱えて、彼れの背後に從ひ、小使部屋に集つて爐を圍んだ。小使は茶を汲んで配つて、自分も亦一緒に其處で飯を食つた。

飯がすむと、小使は何處からか饅頭を貰つたと云つて、重箱のまゝで其處へ差出した。

『やあ、そいつは一つ御馳走にならう』と村長が先づその一個を採り、他の吏員も亦一つづゝ食べた。それから又茶を飲んで、二三の雜談を交へて、おの〳〵椅子に還つた和氣あいあいとして、宛ら一家團欒の趣きがある。

こんな偶然の、極めて小さな出來事によつて、私は却つてほんとうに、白濱村の氣分が解つたような氣がした。

此村には飛びぬけた富豪も居ない代はりに、たいした貧乏人も居ない、全體の九十九プロセントまでが家屋所有者であることは、前に述べたが、尚ほ土地について調べた所では、

土地を所有するもの　三六二人
土地を所有せざるもの　五九人
最も多く所有する者（畑）二町二段九畝
最も少く所有する者（畑）一畝七歩

全數の八十六プロセントは、兎にも角にも土地所有者である、尚此村では今後ます〳〵、此の富の差額は小さくなり、平均されて行くのではないかと思はれる。

新聞之將來

島谷亮輔

三　新聞經營の改善

さて電信と云はず電話と云はず、通信機關が改良され、完備の域に達したと假定し、我國に於ける新聞の將來如何と云ふ問題に到達する。

現在の狀態はと云ふと、一言すれば東京なり大阪なりの大都會の新聞が地方に其販路を擴張するに汲々たる有樣である。地方新聞は中央新聞に蠶食されはしないかと云ふ懸念が必ず一部にあるに相違ない。

英國ではロンドンの新聞がかなり遠方まで讀まれて居る。此事は中央新聞の賣高を以ても知られることである。之れに反して米國では新聞の販賣區域には自然の制限があつて紐育なり市俄古なりの新聞の賣行はあまり遠くには及ばない。之れは英國は土地が狹く、米國は土地が廣いと云ふ確定不動の事實に起因する。佛國の狀態は英國よりも尙ほ一層中央新聞の勢力が多きい。之れは地方に大都市の數が少いことが其原因であつて、第二の原因は日本と能く似て地方版を何回と無く印刷し遠方の地方には翌日の新聞を午後の四時頃から積み出す結果である。

此地方版なるものの將來は頗る面白いものと自分は思ふ。東京大阪の新聞が競ふて地方版なるものを作り出したのは十年を出でないことである。普通東西の新聞社では地方へ送る新聞の編輯を其日の四時頃に締切つて印刷に附し、夕刊のあるものは夕刊と合せて之れを汽車（又は汽船）で積出す。翌日の日附があるが其實は此新聞には前日の二時か三時か迄の事件しか報道されて居ない。甚だしいのになると其朝の新聞と內容の異ならぬものに日附丈けを變へて、其日の夕刊と合せたものを地方の讀者に讀ませる。之れが第一版と稱せられ、朝鮮滿洲九州の如き遠隔の地に送られるものである。以下版を重ねるにつれて

十五強)、而して村長の報酬が百分の五だけ増加せられたのだつた。年末賞與なるものも、村長以下吏員(七名)勉勵賞與として二百圓が計上せられて居るのみで、各一箇月分の給料の七割にしか當らない。年俸二千四百圓の村醫を傭ひ、小學校教師に對して縣下第一の高級を拂つてゐる白濱村の理事者としては、自ら奉ずること餘りに薄しと云はねばならぬ。天草より受くる利益配當は、村長も、小使も、各一口分である。こゝらに白濱村の「共産的努力の氣分」が、最も濃厚に、鮮かに、現はれてゐると思ふ。

私は又、村役場を訪問した時に、彼の人たちが晝の辨當を食べる光景を目撃した。村長は呼リンを叩いて『小使、茶を持つて來い』とは云はなかつた。『どうぢや、お晝にしようぢやないか』と云つて、辨當の包を持つて立上ると、他の吏員も同じく辨當を抱えて、彼れの背後に從ひ、小使部屋に集つて爐を圍んだ。小使は茶を汲んで配つて、自分も亦一緒に其處で飯を食つた。

飯がすむと、小使は何處からか饅頭を貰つたと云つて、重箱のまゝで其處へ差出した。

『やあ、そいつは一つ御馳走にならう』と村長が先づその一個を採り、他の吏員も亦一つづゝ食べた。それから又茶を飲んで、一二三の雑談を交へて、おの／＼椅子に還つた和氣あいあいとして、宛ら一家團欒の趣きがある。

こんな偶然の、極めて小さな出來事によつて、私は却つてほんとうに、白濱村の氣分が解つたような氣がした。

此村には飛びぬけた富豪も居ない代はりに、たいした貧乏人も居ない、全體の九十九プロセントまでが家屋所有者であることは、前に述べたが、尚ほ土地について調べた所では、

土地を所有するもの　三六二人
土地を所有せざるもの　五九人
最も多く所有する者(畑)二町二段九畝
最も少く所有する者(畑)一畝七歩

全數の八十六プロセントは、兎にも角にも土地所有者である、尚此村では今後ますく、此の富の差額は小さくなり、平均されて行くのではないかと思はれる。

新聞之將來

島谷亮輔

三　新聞經營の改善

さて電信と云はず電話と云はず、通信機關が改良され、完備の域に達したと假定し、我國に於ける新聞の將來如何と云ふ問題に到達する。

現在の狀態はと云ふと、一言すれば東京なり大阪なりの大都會の新聞が地方に其販路を擴張するに汲々たる有樣である。地方新聞は中央新聞に蠶食されはしないかと云ふ懸念が必ず一部にあるに相違ない。

英國ではロンドンの新聞がかなり遠方まで讀まれて居る。此事は中央新聞の賣高を以ても知られることである。之れに反して米國では新聞の販賣區域には自然の制限があつて紐育なり市俄古なりの新聞の賣行はあまり遠くには及ばない。之れは英國は土地が狹く、米國は土地が廣いと云ふ確定不動の事實に起因する。佛國の狀態は英國よりも尙ほ一層中央新聞の勢力が多きい。之れは地方に大都市の數が少いことが其原因であつて、第二の原因は日本と能く似て地方版を何回と無く印刷し遠方の地方には翌日の新聞を午後の四時頃から積み出す結果である。

此地方版なるものの將來は頗る面白いものと自分は思ふ。東京大阪の新聞が競ふて地方版なるものを作り出したのは十年を出でないことである。普通東西の新聞社では地方へ送る新聞の編輯を其日の四時頃に締切つて印刷に附し、夕刊のあるものは夕刊と合せて之れを汽車（又は汽船）で積出す。翌日の日附があるが其實は此新聞には前日の二時か三時か迄の事件しか報道されて居ない。甚だしいのになると其朝の新聞と內容の異ならぬものに日附丈けを變へて、其日の夕刊と合せたものを地方の讀者に讀ませる。之れが第一版と稱せられ、朝鮮滿洲九州の如き遠隔の地に送られるものである。以下版を重ねるにつれて事

件の報道が新たになつて來ると同時に發送の目的地が短かくなつて來る。所謂市內版と云ふのは最後のもので其日の記事の限りを盡したものが市內及び其郊外の讀者に提供されるわけである。其版の數は七版八版に達するを普通とし、大抵は其新聞紙が早朝に地方の讀者に配布されるやうに順序が立てられてある。之れが特長は何段かの記事をかぎり其地方に起つた記事が掲載されてあつて其地方の讀者を引きつけるやうに仕向けられて居ることとである。

此やり方は今日の處成功であると云つてよい。地方新聞が此の大新聞の威力の爲めに苦しんで居ることは事實である。然し自分の疑問とする所は通信機關が自分が說明し來つたやうに發達した場合に於ける此地方版なるものの効果如何と云ふことにある。

例へば五時迄に締切つた地方版があるとする。之れが販賣區域にある地方新聞は五時以後十二時迄に起つた記事を其翌日其讀者に提供し得るが、所謂中央新聞によつては讀者は此記事を求めることは出來ない。七時に締切つた地方版とても同樣である。七時以後の事件は理論上地方の新聞によつて求めるの外はない。此距離の差は或る意味から見れば、地方新聞の防禦壁であると云へる。大阪の新聞が門司以西に其勢力を擴張せんとする努力は今日迄非常なものであることは、何人も能く承知して居る所である。然し土地の遠隔の爲めに福岡日々の勢力を殺ぐには至らない。大阪の新聞の多大な競爭にも關せず、同紙は盛んになり行くも、衰ろへはしないのは、中央新聞が如何にあせつても、此距離と云ふ地理的原則を左右し能はざるからである。若し將來通信機關が自分の希望の如く發達し、デーリー・メールやデーリー・クロニクルの如く門司に東京や大阪同樣の新聞が發行されたとすれば、福岡日々は今日の如く枕を高ふして眠ることは出來なくなるかも知れない。

五六年前の事である。大阪の新聞の名古屋での賣高を聞いて自分は驚ろいたことがある。名古屋には支局なるものが設立されて何人かの記者が駐在して居り、無論地方版なるものが發行されて居る。それにも拘らず其賣高は四五千枚に過ぎなかつた。之れでは支局の費用を償ふに足らないこと勿論である。其後大阪の二大新聞が猛烈に競爭を開始し、其販路の擴張にかゝつたと云ふことであるが、其後の成績は果して、其勞を報ひるに足りるものであつたかどうか。

名古屋と大阪との距離は四時間乃至六時間に過ぎないが、大阪から積出し得る汽車便は八時頃以後には求め得られない。從て名古屋に行く大阪の新聞は舊聞たるを免れない。名古屋新聞

の强味は主として玆にあるのではあるまいか。若し十一時乃至十二時以後に汽車積の便宜あつたとしたならば如何。名古屋新聞の受ける大打擊は蓋し今日よりも甚大なものがあつたに相違ない。

其他の地方でも同樣の現象が起つてゐるに相違ない。

夕刊新聞の場合に地方新聞は大なる利益を蒙つてゐる。

ロンドンの夕刊新聞は、發行される社は同じでも朝刊とは別になつて居る獨立のものである。（日本のやうに朝刊と合せて賣るやうなことは英米佛ともに無い。獨逸でも今日では無いと思ふ）、午前十時から版を出す、之れは英國特有の事情から來て居るので四頁大の競馬の番附に過ぎない。英國人が如何に競馬の賭博に熱心で、或る意味から云へば腐敗の方向に進んでゐるのではないかと觀察されるが、然し此版の賣高は少くない。それから午後三時乃至四時頃迄に（夏は日が永いから最終版が遲く且つ夕刊の賣行は冬に比し二三割方多い）四版は少くとも出すことになつて居る。所で此販賣の區域は時間の關係があるので遠方には達し得られない。ロンドンから二時間離れてゐるバーミンガムにはバーミンガム・ポストなる立派な夕刊新聞があつてロンドンの夕刊の壘を摩するを許さない。

福岡日日の如きもの迄が夕刊を出し始めたのは蓋し故ある哉

で、地方新聞の中央新聞に對抗する一策は此夕刊政策であると思はれるが、之れには前提として通信機關の改善を急としないわけには行かないと云ふ結論に到達する。

自分個人の淺い經驗から割出せば、自分は此地方版の發達は新聞そのもの の發達を妨げるものと思つて居る。品位のあり、權威のある新聞は今日の如き制度では到底得られるものでない。新聞を作るものは新聞記者に外ならないが、今日の如く夕刊に材料の提供を要求され、且つ夕刊以後の材料と雖も第一版に間に合ふやうにセツカレては立派な落ちつきのある材料を提供する譯には行かない。大抵の新聞記者は此リポーター時代に勉强出來ず、馬鹿になつてしまう。速拙主義の結果として、新聞が誤報を連發し、夕刊に出たのと朝刊に出たのとは反對の記事が表はれて讀者を迷はして居ることは、今日普通のことのやうになつて居るが、これでは新聞の價値を高める所以ではないのである。

又同樣の理論で夕刊と朝刊とを合せ販賣する如きも贊成すべきことでは無い。現に大都會以外には朝刊と夕刊とは合併されて配達され、矛盾した記事が併せ掲載されて居るのは稀のことではないやうだ。

ロンドンの新聞は第一版なるものを大抵十一時半に締切

之れは議會が勉强して、日火水木の四日を午後二時四十五分から十一時迄の間開いて居り、時には翌朝五六時頃も討論して居る結果でもあるが、第一版の締切が遲いと云ふことは記者に對して材料選擇と思想を練らさせる余裕を與へる效果がある。從て記事に無駄と云ふものが少ない。誤報もまた少ないと云ふことになる。最近張作霖對郭松齡の戰況の報道の日本から來るものは北京から來るものよりも誤報と誤れる予報が多かつた。之れは日本の新聞記者に記事を選擇する余裕を與へない結果が與つて力あると思ふ。今日のやうに推し進んで行くと、日本からの報道に就いては世界の信用を失墜すると云ふ結果を齎すかも知れない。

締切が已に十一時半であるから印刷を開始するのが十二時で、出來上つたものは、蘇格蘭其他地方行の汽車に積出され之が近郊迄及ぶ。市内版の締切は午前二時半であるが、時には三時半にも四時にもなることがある。加藤首相の薨去は午前八時半であつたが、時差關係が八時間半あるのでロンドンの時刻から云へば薨去の時間は午前零時に當る。ロイター社の特派員が東京から迅速に報道した結果と此頃は電信狀態の良好であるのと相まつて、日本と同日發行のデーリーメール丈けに此事實が掲載され且つ小傳も附記されてあつた。メールの勉强さ加減も之れでわかるが、同社は二百台以上の大形荷物自動車を持つて居るから、他社と比較すれば市内の輸送力に於ても傑出して居るに相違ない。

大都會の新聞が地方版を發行して地方の讀者の誘引に汲々たることが目下の現狀であるが、所謂大新聞が其莫大な資力を以て、此方法をとるのは今の處適當な營業政策であるかも知れない。然し比較的發行の少い新聞までが同一の方法をとつて居ることの賢明なやり方であるか、自分は疑つて居る。日本の新聞には大なる特長と云ふものが無い。又報道の機敏と云つても大した甲乙はないのである。大抵似たりよつたりと云つてよい。之れは別にも述べるが、同じ品物であつて見れば盛りの澤山な方が賣行がよいに定つて居る。そこで東京では東京日日や朝日や報知が此盛り澤山な新聞を地方に賣り廣めて成功し、地震の大打撃を受けた他の各新聞が其殘食を歎つて居ることに不思議はない。同じ戰法を用ひれば、兵數の多い方が勝つに定つて居る。

そこで發行部數の少い新聞は此際營業方針を一變するの必要がある。それは共同又は協同の方法によつて地方新聞と提携することにある。以下に其理由を述べる。

產業界の趨勢は個々の企業團體が次第に合同又は共同の經營

に移りつゝある。例へば汽船會社の合同の如き、電力供給の會社の合同の如きは、其著しき例である。英米の新聞界には此趨勢が能く表はれて居る。日本の新聞は其成立の最初が二三を除くの外は、經營が主要な目的でなく、政治上の目的、又は營業以外の目的がむしろ主であつた關係上、其經營者に近世的な企業的頭腦のあるものが稀である。比較的利益を生んでる大新聞社の經營の內情に見ても、無駄が有り、浪費が有ることは爭はれない。唯是等の社は社會發達の順潮に乘じ帆をあげて居る爲め、其經營振りは舊式であり、無駄と浪費との多いのにも拘らず、外界から見て異常な發展を呈して居るのに止まるのである。

合同又は共同經營の具體的事實を擧げると英米を通じ、同じ文章なり小說なりが同時に數個の新聞に表はれて居る。例へば最近の大事件であつた埃及に於けるツータンカーメン王の古蹟の發掘の記事と寫眞はタイムス新聞社の斡旋で英國の各新聞佛蘭西や米國の各新聞に同時に掲載された。此金額は百萬圓以上を要したのであるが、各社が共同分擔したのであるから、一社の負擔は大したことにはならなかつた譯である。米國では斯る例は多い。例へばローゼヴエルトやタフトの大論文は米國の新聞に各地方で同時に掲載された。此種の論文や各方面の記事や漫畫を取扱ふ一種の通信社が英米には澤山ある。朝日新聞で取扱つてる『親爺教育』の漫畫を米國の新聞で掲載しないものは稀である。其他の漫畫も同樣である。此利益は一社が取扱ふ場合には到底負擔し切れない原稿を此方法でやれば、容易に負擔し得ると云ふことである。

十年前であつた。福本日南氏の元祿快擧錄が九州の新聞に長く掲載されて居たが、大多數の讀者は之れが書物となつて發刊される迄は其事實を知らなかつた。現在德富蘇峰氏の文章は國民新聞にのみ掲載されて居る。同新聞の一大特色であることと勿論で、之れを讀まんが爲めに同紙の愛讀者となつてるものは全國を通じて莫大の數に達して居ることと思はれるが、然し此文章を讀み度くても、土地が遼隔な爲めに同紙の購讀者たり得ないものも亦全國に多い筈である。若し英米の經營者であるならば、此新聞を全國に擴大する方法を執らずして、東京を去る何十哩以上の距離にある各地方の新聞に此文章の掲載權を直接に賣却した方が、同新聞社にとつて利益であると思はれる。以上は一二の顯著な例であるが、今日時事問題を取扱ふ著名論客の議論が前記の方法によりて全國有力な新聞に同時に掲載されることは日本の新聞の發達にとつて大なる利益であると考へられる。余計なサゼツションだが、三宅雪嶺翁を筆頭として、[illegible]

作造、長谷川如是閑、大山郁夫氏の如き、大正日日での失脚以來默して居る鳥居素川氏の如き論客が此方法をとつたら、どんなものかと思ふ。

又日常の記事にしても其通り、中央の各新聞社にはそれぐ特長があつて、必ず一人か二人かより抜きの老練家が控へて居り、其提供する記事は必ず他社の同種類の記事よりも特長のあるべき筈のものであり、從て其一社のみに之れを専有することは惜しいと云つてよい。此記事を他の地方の新聞社に賣却することは其社にとつて經營費の節減となる大利益がある。又地方の新聞の立場から考へれば、一社の力で獨立の編輯支局を東京なり大阪なりに設立することは容易のことで無く、經濟上大なる負擔であるが、同社と政治上又は經濟上の意見を同ふする中央の新聞社の記事を購入する方法をとれば、世話が無くて且つ安い。從て經營が容易と云ふことになる。ロンドンのタイムス社内には全世界十數個の新聞が事務所を置いて居り、翌朝同紙に掲載される記事の供給を前夜に受け、特派員は之れを參考にして其所屬新聞に記事を打電して居る。二個年前日本に大地震の起つた時タイムス新聞は大阪の朝日新聞に依頼して打電を要求し、同社から詳細な報道を受取り、之れを關係した各社に提供したので、全世界の讀者は最も詳細な地震に關する報道に接し得たのであつた。紐育タイムスの如き、佛國ではプチ・パリジアンの如き伊太利ではコリエール・デラ・セラの如き此恩典を受けたものの二三であつた。之れは世界的の顯著な例であるが、國内的にも應用が出來る。現在東京に所謂支局を置いてゐる地方新聞社は其好む所の新聞社と上記の方法で聯絡を取ることによつて、經濟的に多大な節約をなし、且つ記事の能率を増進し、中央に於ける事件を迅速に其新聞に發送し得られる。

中央の新聞の立場から考へても、其利益は同樣である。其新聞の購讀される範圍には限りがある。如何に其販賣部が機敏に努力しても、其努力は結果に反比例する場合は多々あることは地方版なるものの可否を攻究した際に論じて置いた通りで、一個の新聞紙を全國に普及せんとする努力と結果には如何なる大新聞と雖も極限があるから、中央の新聞社は斯る無用の努力を轉じて、其提供せんとする記事を購賣區域以外の地方新聞に賣却するの利益を選ぶべしである。

此種の例は米國にはイクラもあるが、英國での一例を擧げると大新聞中（普通の新聞が一片賣（ペニー）であるのに對し二片（ペンス）の新聞を大新聞と云つて居る）モーニング・ポスト は賣高の少い方であるが、此新聞社内に外國の新聞社が支局を置いて居ること、タイムスと同樣であると同時に、ヨークシア、ポスト（リーツ

む）とエヂンバラガゼツトにも記事を供給して居る。三新聞とも保守黨の機關紙である丈け斯る連絡があり得るのである。

大新聞中のデーリー・テレグラフ社にはシカゴ・ツリビユーン社の支局が有つて後者の歐洲特派員の記事は同時テレグラフ紙に掲載する連絡をとつて居るし、日本に縁故の深い國際通信の創立者である老ケネヂー氏が同社並にシカゴ・デーリー・ニユースに東京から水際立つて優れた通信を送つて居ることも編輯費節約方法の適例である。

文章、小說諷刺畫等を各新聞に供給する目的で、成立して居る通信社がある上に、同時に每日の事件の通信を供給する通信機關の發達して居り、此上に前記の如き各新聞社が特種の記事、又は一般の材料について特種の新聞社と記事の融通をすることは一見通信社との利益と反對するやうであるが、其實は新聞の特色を豐富にするのであるから、今後益奬勵すべきものである。此方法は單に記事の融通に止まる丈け、各新聞の獨立自由を秋毫も束縛するもので無い。卑近な例をとつて見ると、今日一社で多大の經費をかけて新聞小說を公衆から募集し、其金額は五千圓に達することがある。之れは中央の大新聞なればこそ出來ることであるが、東京に於ける比較的小新聞（發行部數の少い點から云つて）と北海道、仙台、名古屋、新潟、長野、金澤、大阪、京都、廣島、關門地方、長崎、熊本に於ける各新聞社が單に此目的の爲めに聯合して、同種の小說を公募したとすれば、其個々の財政上の負擔はさまで大では無いであらう。要は此共同的聯絡にあるのである。

地方新聞の現狀はあまりに地方色を發揮し過ぎ、中央新聞の持つて居る品格の缺乏することにあるが、此方法は地方新聞の特色を喪ふこと無くして、同時に中央新聞の特長とする所を兼ね備へ得ることにあり、中央地方の新聞ともに其利益を受けることになる。殊に地方版を作る面倒のない中央新聞社は少數の記者で編輯が出來るから、編輯費の節約となり且つ記事の選擇に努力し得るから特長ある新聞を作り上げられる。

元來新聞が發行高のみを爭ふのは、自營上とは云へ、新聞そのものゝ價値を高める所以ではない。編輯費營業費とも節約して立派に新聞が維持して行けば、新聞發行の目的の一半は足りる筈である。一個の新聞から見れば賣高は少くないやうでも之れと色彩を同ふする新聞が各地に聯絡をとつて居るとは、集めて考へれば賣高の多い新聞とも云へるのである。今のやうに中央地方とも新聞が孤立して居ては、所謂大新聞、自分をして云はしむれば資本力の多きい、賣高の多い新聞に壓到されるのは當然である。所謂『結合すれば維持され』其反對に離れ離し

作造、長谷川如是閑、大山郁夫氏の如き、大正日日での失脚以來默して居る鳥居素川氏の如き論客が此方法をとつたら、どんなものかと思ふ。

又日常の記事にしても其通り、中央の各新聞社にはそれ〲特長があつて、必ず一人か二人かより拔きの老練家が控へて居り、其提供する記事は必ず他社の同種類の記事よりも特長のあるべき筈のものであり、從て其一社のみに之れを專有することは惜しいと云つてよい。此記事を他の地方の新聞社に賣却することは其社にとつて經營費の節減となる大利益がある。又地方の新聞の立場から考へれば、一社の力で獨立の編輯支局を東京なり大阪なりに設立することは容易のことで無く、經濟上大なる負擔であるが、同社と政治上又は經濟上の意見を同ふする中央の新聞社の記事を購入する方法をとれば、世話が無くて且つ安い。從て經營が容易と云ふことになる。ロンドンのタイムス社內には全世界十數個の新聞が事務所を設いて居り、翌朝同紙に掲載される記事の供給を前夜に受け、特派員は之れを參考にして其所屬新聞に記事を打電して居る。二個年前日本に大地震の起つた時タイムス新聞は大阪の朝日新聞に依賴して打電を要求し、同社から詳細な報道を受取り、之れを關係した各社に提供したので、全世界の讀者は最も詳細な地震に關する報道に接し得たのであつた。紐育タイムスの如き、佛國ではプチ・パリジアンの如き伊太利ではコリエール・デラ・セラの如き此恩典を受けたものの二三であつた。之れは世界的の顯著な例であるが、國內的にも應用が出來る。現在東京に所謂支局を設いてゐる地方新聞社は其好む所の新聞社と上記の方法で聯絡を取ることによつて、經濟的に多大な節約をなし、且つ記事の能率を增進し、中央に於ける事件を迅速に其新聞に發送し得られる。

中央の新聞の立場から考へても、其利益は同樣である。其新聞の購讀される範圍には限りがある。如何に其販賣部が機敏に努力しても、其努力は結果に反比例する場合は多々あることは地方版なるものの可否を攻究した際に論じて置いた通りで、一個の新聞紙を全國に普及せんとする努力と結果には如何なる大新聞と雖も極限があるから、中央の新聞社は斯る無用の努力を轉じて、其提供せんとする記事を購賣區域以外の地方新聞に賣却するの利益を選ぶべしである。

此種の例は米國にはイクラもあるが、英國での一例を擧げると大新聞中（普通の新聞が一片賣であるのに對し二片の新聞を大新聞と云つて居る）モーニング・ポストは賣高の少い方であるが、此新聞社內に外國の新聞社が支局を設いて居ること、タイムスと同樣であると同時に、ヨークシア、ポスト（リーツ

市）とエヂンバラガゼツトにも記事を供給して居る。三新聞とも保守黨の機關紙である丈け斯る連絡があり得るのである。大新聞中のデーリー・テレグラフ社にはシカゴ・ツリビユーン社の支局が有つて後者の歐洲特派員の記事は同時テレグラフ紙に掲載する連絡をとつて居るし、日本に縁故の深い國際通信の創立者である老ケネヂー氏が同社並にシカゴ・デーリー・ニユースに東京から水際立つて優れた通信を送つて居ることも編輯費節約方法の適例である。

文章、小說諷刺畫等を各新聞に供給する目的で、成立して居る通信社がある上に、同時に毎日の事件の通信を供給する通信機關の發達して居り、此上に前記の如き各新聞社が特種の記事、又は一般の材料について特種の新聞社と記事の融通をすることは一見通信社との利益と反對するやうであるが、其實は新聞の特色を豐富にするのであるから、今後益奬勵すべきものである。此方法は單に記事の融通に止まる丈け、各新聞の獨立自由を秋毫も束縛するもので無い。卑近な例をとつて見ると、今日一社で多大の經費をかけて新聞小說を公衆から募集し、其金額は五千圓に達することがある。之れは中央の大新聞なればこそ出來ることであるが、東京に於ける比較的小新聞（發行部數の少い點から云つて）と北海道、仙台、名古屋、新潟、長野、金澤、大阪、京都、廣島、關門地方、長崎、熊本に於ける各新聞社が單に此目的の爲めに聯合して、同種の小說を公募したとすれば、其個々の財政上の負擔はさまで大では無いであらう。要は此共同的聯絡にあるのである。

地方新聞の現狀はあまりに地方色を發揮し過ぎ、中央新聞の持つて居る品格の缺乏することにあるが、此方法は地方新聞の特色を喪ふこと無くして、同時に中央新聞の特長とする所を兼ね備へ得ることにあり、中央地方の新聞ともに其利益を受けることになる。殊に地方版を作る面倒のない中央新聞社は少數の記者で編輯が出來るから、編輯費の節約となり且つ記事の選擇に努力し得るから特長ある新聞を作り上げられる。

元來新聞が賣行高のみを爭ふのは、自營上とは云へ、新聞そのものゝ價値を高める所以ではない。編輯費營業費とも節約して立派に新聞が維持して行けば、新聞發行の目的の一半は足りる筈である。一個の新聞から見れば賣高は少くないやうでも之れと色彩を同ふする新聞が各地に聯絡をとつて居るとは、集めて考へれば賣高の多い新聞とも云へるのである。今のやうに中央地方とも新聞が孤立して居ては、所謂大新聞、自分をして云はしむれば資本力の多きい、賣高の多い新聞に壓倒されるのは當然である。所謂『結合すれば維持され』其反對に離れ離れに

なつて居れば片ッ端から打撃を蒙るに定つて居る。今日の急務は利害を同ふする中央及び地方新聞の協同又は合同にある。

日本でも最近實業家で新聞に手をつけたものがある。又やつて見たいと云ふものは更に多數に上つて居るが、素人の悲しさには經營の方法を知らず、編輯費を節約することも知らず、基礎も堅まらない中に紙數の擴張に汲々として結局費用倒れに終るのが多い。其結果は新聞事業を危險がつて接近しないやうであるが、世界的傾向を着眼するに盲目なるものである。論より證據貿易表の示す所によると新聞用紙の輸入は毎年二割宛増加して行きつゝある。之れは日本全國の新聞發行部數が五年毎に二倍することを證據立てるものであつて、日本の新聞經營事業は一個の産業として取扱はれ得る時代に到達したことを語るものである。今後新聞に志すものは、此點に着眼し、先づ小粒でもヒリリと辛い特長のある新聞の基礎を作ることから始むべきである。

以上は中央、地方を通じ、各新聞の共同聯絡提携の利益を叙述したものであるが、此外に英米で行はれてることは、新聞に於けるトラスト又はカルテルの普及と云ふべきものである。此トラストの實現は産業界各方面に行はれて居ることで、今日の狀態は獨り新聞界のみ例外を爲すことを許されないものである。ハースト系の新聞が米國を通じ二十を數へ、先日物故したマンセー氏やマクルーア氏カーチス氏等が紐育ワシントン其他に新聞や雜誌を多數持つて居たことは此例である。此利益は營業編輯を通じ其經費を節約し得ることにあることで、其點は前述の共同、聯絡提携の方法よりも勝れるものがあるかも知れないが、弊害はあまりに統一されるが爲めに、各新聞の主眼とする特長を喪ひ、平凡單調に流れるを防ぐわけに行かない。ハースト系の新聞の有名な主筆ブリスベンの寸鐵的論説は紐育のイーヴニング、ジョーナルに掲載されるかと見れば、同日に市俄古セント・ルイ、桑港、シアトル地方の同系統の新聞にも掲載されるが、此非凡な記者であつて初めて價値のあることである。若し二流以下の記者が書いたなら其新聞は面白味が無くなるに相違ない。

英國ではデーリー・メールが十何年前から、マンチエスターに、最近ではデーリー・クロニクル社が、ヨークシアーのリーツ市は倫敦で發行すると同一の新聞を發行して居る外に（此事に就いては前に述べた）ロンドンに於ける大新聞社の持主が地方新聞社の株を持ち且つ記事の共同聯絡、提携をなして居るが、其弊害は米國の如く甚だしく無く、各新聞の特長を保存することに力めて居る。

此トラストの利益が如何に顯著であるかは、日本では朝日、毎日の兩新聞が我新聞界に雄飛せる事實で明瞭である。大阪の新聞は其記事の主要な部分を東京に仰がねばならない關係上、多數の記者を東京に駐屯せしめる必要に迫られて居た。其編輯費用は若し東京に新聞を有しなかつたならば莫大なものであつたに相違ないが、朝日新聞の持主は此點に着眼して東京朝日新聞の前身を買收し、東西兩地に新聞を發行し、編輯費の節約をなして居る。毎日新聞とても同樣であつた。時事新聞の如き、之れに倣ふ時期遲きに過ぎたのと、統一的經營の能力に於て前二者に劣るものが有つた爲めに、著しき成功を收めるの時期に達しない丈けの差がある。元來トラストの如きは産業界の天才が其統一的手腕を實行して始めて成功し得る者であるので、其出現はむしろ自然的で無ければならない。有機體は其發達と共に內容が複雜となりつゝあるが、之れと同時に之れを綜合統一する頭腦を要する。此頭腦にして健全を缺けば、全體の活動は勢ひ鈍らざるを得ないのである。東京に於ける各新聞にもそれ〴〵全盛時代があつた、そして首腦者の死亡、衰退と共に衰微の時が來たのである。新聞界の巨人である朝日の村山氏や其右腕とも云ふべき小西氏百代の後東西の大新聞を擁して今日の朝日の聲價を維持し得べきは何人も疑問とする所である。ウオーターニ世時代のタイムス主筆デイレーン時代のタイムスは其全盛期であつたが、其後不振に歸し、ノースクリツフ卿に拾ひ上げられた時のタイムスの賣上高は三萬に過ぎず、其持株の大部分は人手に歸して居たが、過去の聲價の爲めに漸く生存をつゞけて居た。當時タイムスの賣高の三分一は外國に於てされたとサー・トーマス・ピーチは云つて居る。此時のタイムスと云ふ新聞の發行權は夙に本來のウオータ家から離れ、同家は所謂プリンチング・ハウス・スクエアと稱する印刷所を持つて居り、タイムスは此所で無ければ印刷し得られないと云ふ苦しい口實の下に其全生命を維持したと云ふことである。日露戰爭以前我外務省の機密費十萬圓か何かはタイムスに投ぜられたと云ふことであつた。

米國にあつても其の通りで紐育ツリビユーンの全盛期は何と云つても後に共和黨の大統領候補までやつたグリーレーの時代にある。子息の時代まで持ちこえたヘラルド紙は後繼者が無い爲め他に買はれて今ではトリビユーンと合宿して居る。サンとても同樣でダナ時代のサンを全盛期として今では之れまた名を止めて居るに過ぎない。イーヴニング・ポストまた然りである。

之れについて思ひ出す事はノースクリツフ卿が日本に來た時の事である。朝日新聞は歡迎の意を表する爲めに、趣向をこらし當り前のことをしては とても同卿に印象を與へまいと 云ふの

で思ひ切つたことをする癖のある持主の村山老人が賛成したので大阪商船會社の定期船紅丸の定期航路を中止させ、之れを仕立てゝ大阪を夕方出帆し宮島まで同卿の一行を送つたことがある。此際本文の記者も一行に加はつたが、同卿は記者を翌朝共キャビンに引いて會話の末に曰く」

村山氏は驚くべき人物である。あの年であつて能く、あれ丈けの新聞が經營出來るには自分も驚ろいて居る。自分は五十六才であるがもう駄目だ。とても大なる活動は出來ない。自分はロンドンを出てから一年になるが、幸ひ任したものが自分の思ふやうな新聞を作つて居るので喜んで居るが。あの老人が無くなつた後、果して此大新聞がやつて行けるかどうか疑問である。新聞は尙、戰爭の如きもので、然も毎日、戰鬪を經續して居るも同樣である。作戰計畫も必要であれば、戰術も大事である。身神共に健在でなければ號令指揮はとても出來る者で無い、新聞の持主の資格は編輯を知ることは勿論であるが。營業の事、印刷のこと、紙のことを知らねばならぬ。自分は今でも獨りで印刷場に下り輪轉機を立どころに廻轉して見せることが出來る。東京大阪ともに朝日の幹部に會つて見たが、誰獨り村山老人の後繼者たり得そうな者を見當らなかつた。息子さんも新聞のことは何も知らないやうではないか。

とてウォーター家の後繼者が新聞事業に盲目なりしを語つた。此物語りは朝日新聞に關係してるものを惡評するが爲めに發表するのでも何でもない。此事は歸來社の同僚に語り孰れも其事實を裏書した所であつた。然し歷史を持つたものは勿論、一旦成立した新聞が決して無價値に終るもので無いことは、日本でも同じことであるが（大正日日のやうな彗星的に出現したものの外は）英國では殊に然りである。デーリー・クロニクルがロイド・ジョージの機關紙として千五百萬圓かで買はれたのは八九年前のことであるが、最近にフルトン系の新聞一切をノースクリッフ卿の弟であり、理財にかけては兄に勝ると數倍と云はれてるローザミア卿は四千五百萬圓かで一旦買取り、間も無く其中の一部分を引ぬいて殘部をベリー系に讓渡し此間に五百萬乃至一千萬圓の利益を收めたと云ふ世評があつた。フルトン系の創立者はイーヴニング・スタンダード、デーリー・スケッチ（繪入でミラーに似たもの）等の持主であるのだが、何十年かの前に、英國の各市の新聞を買取つたり、又は創立したり、雜誌を創めたりしたのであつた。金もうけ以外に意味はなかつたのであるが、時代の進運は恐るべし、之れのみで五千萬圓以上の金を作つたのであつた。

新聞界トラストの利益は、他のトラストの場合と同樣編輯費

の節約、營業費の節約にある。新聞事業で最大の經費をなしてる紙代の如きは大量に購買し得ることによつてのみ安直に得られることは、誰も知つてることである。新聞の事業が今後發達するにつれ、且つ内部の經營が大福帳時代を去つて、複式簿記時代となり、經營者に組織的頭腦を必要とするにつれて、此トラストは日本にも流行するものと自分は見て居る。

四　新聞記者の改善

英米の新聞が佛獨の新聞に比較して其報道の正確で充實して居ること、品格の優れて高いことは、誰しも異存のないことであらう。或る人が新聞の發達によつて其國の文明程度がわかると云つた。之れも一個の標準である。此點から云へば日本の新聞は獨佛の下位には居ない。少くとも伯仲の間にあると云へる。佛國には御用新聞のル・タン以外に十二頁出す新聞は無い。大抵は六頁である。唯日本の新聞より優つて居ることは、何の新聞にも内治外交に通じた有名な論客があつて、世界の耳を傾けしめて居るのに、日本の新聞記者は一寸外國の新知識を吸收した乳臭的な議論をするに止まる丈けの差はある。但し獨佛の下位に居ないと云ふことと、日本と英米との新聞との間に價値の高低如何は別問題である。が第一の原因は日本の新聞が競ふて地方版なるものを出し、紙數の增加のみを計るに急で、記事の内容の改善と新聞の特長の維持とを第二以下問題としてることにある。日本の新聞には紙面の體裁に於ても、主張に於ても、特長と云ふものが殆んど無い。之れが英米の新聞と異なる主要な點である。大阪の朝日新聞と毎日新聞とを比較し見て、何處に相違があるかを知ることは困難な事業であるが、ロンドンに發行される十個の朝刊新聞を見れば、誠に十人十色である。同一の記事についてもそれ〴〵表現の方法が異ふ。その上政見が保守黨自由黨勞働黨で異ふ。同じ保守黨の政見をもつて居てもタイムスとテレグラフとモーニングポストでは各色彩が異ふ。自由黨の政見に屬するものでもアスクイス派のウエストミンスター・ガセツトとロイドジヨージの機關紙デーリー・クロニクルとは全く異つた政見を持つて居る。デーリー・ニユースやマンチエスター・ガージアンになると又趣を異にした議論がある。良い新聞でもなんでも無いが勞働黨の御用紙デーリー・ヘラルドは又異つた立場を持つて居る。百花繚爛と云つては語弊が有るかも知れないが、そこに新聞存在の意義がある。

そこへ行くと日本の新聞は十年前よりも色彩が無くなつて來た。何の爲めに別個の新聞が存在する必要があるのかわから無いのがある。多くの場合に於て、日本の新聞には一個の政見し

かない。早い話が普通選擧にした所で、總ての調子が附和雷同的であつた。數ある新聞のことであるから異つた意見が其間に一個位あつて然るべきものである。新聞に表はれて居る議論と各政黨の發表する政見とは異ふ。こんな事は英國に於ては有り得べからざるとである。一政黨が輿論の一部を代表する者であれば、一個の新聞も亦一個の輿論を代表するもので無ければならない。總ての政黨が否と云ふ場合に、全部の新聞が然りと云ふのでは、新聞も政黨も全般の輿論を代表すると云ふことは出來ない。政黨の場合を本文に論ずることは別問題としても、

今日の新聞に大なる缺陷あるとが之れで指摘される。其他過激派に對する態度でも同樣である。日本の新聞は大抵過激派に同情を持つてゐると云つてよい。さう云はないと時代の流行に遲れるとでも思つて居るのであらう。又關稅會議に表はれた對支意見でも同樣である。甲の新聞と乙の新聞との間に獨立した意見は求められない。唯流行で動くのではないかと思はれる點がある。日本の新聞には保守黨もなければ、自由黨もない。又勞働黨もない。帝國主議もなければ、非帝國主義もない。其時によつて帝國主義ともなれば非帝國主義ともなる。僅かに保守主義であるべき筈の新聞にも過激派的の意見が表はれるのに驚かされる。高橋是淸氏が爵を擲ち（其の實は隱居して）代議士を爭ふ

と云へば全國の新聞がアツと感心し、犬養氏か乾児を賣りつけたと云つては、今迄賞讃し切つて居た人物を急に批難したりするのは、日本の新聞紙であるが、其原因は自分をして云はしむれば、今日の新聞記者は深く社會の根本に入つて居ない。新聞を作つて居るものが世故に通ぜず、政界の情裏に迂遠な無經驗な青年であるからである。日本の新聞は青年時代の新聞記者を酷使し過ぎる。過勞の結果は大抵のものが四十に至らない前に馬鹿になつてしまふ。且つ地位が不安固で、薄給である爲めに、馬鹿にならないものは、大抵轉職するを余儀なくされる。英國でも經濟記者は實業界と緣故があるので、自然大銀行會社の調査部に流れ込み、所謂『足を洗ふ』の例がないではない。然し生涯を新聞で送るのが普通である。此相違が日本と英米の新聞の差をなして居る。日本の新聞記者に老人は稀であり、若いものも早く若朽の域に達する。

米國の例は知らないが、英國の新聞記者には組合があつて、其最低の給料は一週間九ギニー（九磅九志）と云ふことになつて居る。之れはかけ出しの話である。タイムスなどの大新聞では十二ギニー拂ふことになつて居る。其使つて居る記者の平均給料は一年九百磅である。デーリー・メールの如き財力の豐富な社では之れ以上の優遇をして居るとの評判である。同社長のト

ーマス・マローはノースクリツフ卿のやうなやかまし屋の下にあつて一生奉公した丈けに、傑出した人物に相違ないが、其俸給や賞與は大したもので、世界一の俸給取りだと云はれて居るハースト系のブリスベンの俸給も彼には及ばないと云ふことであつた。其他デーリー・メールの記者が悉く優遇されてゐるのは事實である。四年前同社の副主筆の一人であるエヴアス氏は後進に道を讓ると云ふので勇退した。二十八年間同社に居たのであつたが、其退隱の時にノースクリツフ卿は十萬圓を與へ、且つ十年間は毎年恩給として二萬五千圓宛與へること、それ以後は一萬圓宛與へることを發表した。ノースクリツフ卿には子供が無かつたので、遺言狀で其五千萬圓かの財産は悉く其使用人に分配したのであつたが、其一流の乾兒には悉く之れ丈けの額を與へて居た。且つ使用人の最下級に至る迄三百圓宛を與へたのであつた。

所で遺言狀の實行について問題になつたことがある。其遺言狀にはノ卿の重役となつた數十個の會社員全部との事であつたが、之れによると流石の五千萬圓も少し足ら無くなつて來て、三百圓宛を渡すことが出來なかつた。然しノ卿の事業は總て弟のローザシア卿が繼承することゝなつたので、同卿は自分の使用人に損をさせるのが嫌さに、何百萬圓か自腹を切つて其不足を補つたのであつた。

英國の新聞記者もノースクリツフ卿が出現する迄は薄給に甘んじたものである。ノ卿の出現に及んで能く集めよく散したので、新聞記者は一人前の生活が出來たのである。此點丈けでもノースクリツフ卿は新聞記者の恩人である。『インクの街』と云ふ書物の中に新聞記者がロハの酒を飲みたがつたり、應接室のシガーを一二本余分に取つたりしたりして居た記事が出て居る。それがツイ三十年前のことであつたが、日本でもこの種の弊風はあつたが中央では已にやんだ筈である。

俸給の少いので有名なのは佛國の記者である。英國のとは無論比較にならないが、日本の新聞の特派員の手當よりも、佛國一流の大家の受けるものは少い。之れはフランの安くなつてる關係も無論あるが、同國の新聞記者の生活は困しいことになつて居る。有名なタン紙其他の記者中にも此貧苦の爲めに筆をまげることは少くない。平和會議の當時、支那の全權は大分金をとられたものである。歐洲の小國の政府は佛國の新聞記者には大分黄白をまかねばならない。之れ丈け佛國の新聞記者は下等である。

英國で新聞の職工殊にコンポーザーの組合と云へば最も地位高い堅いものであるが、之れが六日働いてのカセギ高十二磅

外であるから、タイムス社が新聞記者の最低賃銀十二ギニー拂つて居ることはむしろ當然である。斯る状態であるので、生涯を新聞記者に捧げるものの多いことも了解出來やう。

タイムス社其他には年金制度があつて、六十になれば退隱出來るやうになつて居るが、未だ完全なものではない。

此新聞記者の家族や遺孤の爲めにする年金の目的で會が組織され、年一回集會があり、且つ一流の名優を総出とする芝居があつて其賣上高を此基金に入れることになつて居る。其額は何十萬磅と云ふ高に達してるやに記憶する。米國では紐育ヘラルドの持主であつたベンネツトの遺言で此基金が出來たが、全國的に行つて居るかどうか自分は未だ調査して居ない。

世の中に新聞記者位劇職のものはない。銀行會社員であつて見れば午後四時か五時の後は全く解放されたも、同樣である。新聞記者の仕事は大抵此時から始まり、夜間の十二時過ぎに及ぶを普通とすると云つてよい。青年時代には仕事が面白いのと功名心に燃えて居るので、新聞記者は此間を夢中に過してしもふ。讀書の時間も修養の時代も日本の新聞記者には與へられないといつてよい。而して此活動期の間に普通の記者は精力の大部分を消耗するを常とする。三十五乃至四十歳を過ぎた記者は已に進取的氣象に缺乏してることは前述の如くであるが、此れまで得來つた經驗を滿足に利用する機會を與へられずして、生活上其他の理由の下に轉職を餘義なくされ、日本の新聞界は普通經驗に乏しい青年記者で大部分を充滿されることになる。英國では此弊害を防止する爲めに、新聞記者には隔週每に一日餘分の休暇を與へ心身の休養をさすことにてし居る。又夏季には一個月以上の休養を與へる。之れは新聞記者としての權利であるのだ。ノースクリツフ卿は此新聞記者の休養に最も重きを置いた先覺であつた。同卿は勞働者には七時間勞働制を採つて居たが、新聞記者には前記の如き高給と休養時間を與へ、更に主筆に對しては其薨去以前に一週三日間の休養を與へた。主筆の如き劇職は之れ等の休養を與へないと、活動出來ぬことを認めた爲めである。主筆の休養中は副主筆をして全責任をとらしめたのである。

自分の經驗に徴すると、我が新聞記者に若朽者多きは獨り不規則な生活許りの罪で無く、過勞の結果である。日本に英國に於て見るが如き新聞記者の組合團體ありとすれば、休養時間の増加を主張することと、最低賃銀制を採用して、記者の生活標準を高めることを主張したい。

第二に我新聞社は無駄の人數を使用して居る。之れは新聞社と通信社との間に分業の發達しない結果である。今日の新聞社

は當然通信社の爲すべき仕事をして居る。此の爲めに編輯費を多分に要する。第一流の新聞社と第三流の新聞社と其使用されてる記者の數に大なる相違はない。之れでは第三流の地位にある新聞の經營が困難であり、且つ立ち行き難いのは當然である。各新聞社は今後通信社を發達させることが、自己の利益であることに想到して、之れを援助し、且つ自社の編輯費を節約し、又一方に優良な新聞記者の養成と維持に力むべしである。特長あり色彩ある記者を作ることは必ずしも新聞記者の數丈け集めたので出來る譯ではない。特色ある少數の優良な記者があれば却て出來榮の良い新聞が出來る。佛國の新聞が兎も角も讀んで價値のあるのは、此種の記者が十分の手腕を發揮し得るからである。

五　新聞事業の將來

然し何と云つても新聞位氣もちの良い事業も少い。維新以來勃興した事業で、政府が直接、間接、保護したり、又は奬勵したりしないで發達したものは、何一つ無かつた。日本の實業家の大多數は何時まで立つても政府や役人には頭は上らないで居る。獨り此例外をなすものと大言してよいものは新聞である。時には其壓迫を受け又は個人的に迫害を蒙つた。それもに拘はらず新聞は維持され且つ發達して來たのである。一寸見れば何でもないやうな現象であるやうだが、そこに偉大なる事實がある。新聞は近世社會の生んだ自然の産物であり、又是れ迄の例の示す所によつて推斷して見ても、今後益偉大な發達をなし、其社會的勢力を擴大するものと見當をつけて、決して間違がない。自分の經驗丈けで見ても過去十年間に大新聞と云はれるの發行部數は內輪に見積つて三倍の增加を示したが、地方新聞は其增加率の點から云へば中央新聞の比ではないとのことである。今後普通敎育の普遍發達につれて新聞紙の賣高が增加すべきことは間違あるまい。一般出版界が過去十個年間に偉大な發達をなしてることは、云ふ迄もないことであるが、此間に新らたな雜誌の發行が簇出したのに反し、新聞の新たな發行を企てたものは中央地方に殆んどない。又新たな新聞は生れ出でても夭死するものが多く、新聞は中央地方とも自然在來のものの獨占で、新たなる開拓者を許さないと云ふ傾向になつて居る。此點は現存せる新聞にとつて益好都合の點である。

營業の方面から見て將來の新聞界に益々樂觀を與へるものは普通選擧の實施である。此權利を與へられたものは自然政治季節、政變期每に政治に興味をもつやうになり、主として新聞によつて政界の狀況を知るやうになるのは自然の成行である。此

傾向は英國の新聞に顯著に表はれて居る。英國が普通選擧になつたのは最近のことで、一九一八年であり。三十歲以上の婦人に此政權を擴張したのは、其後のことであるが、政變が屢繰返されたことの理由も加はつて、各新聞の賣高は目に見えるやうに增加した。日本の各新聞が擧つて普通選擧の運動に夢中であつたことも一面から見れば、自家の利益增進策と觀られぬでもない。

今日の程度から見て日本の新聞を英國のそれと比較するとまだ〱距離がある。百萬以上の發行部數を有する新聞は佛國に多々あるとの ことであるが、之れは孰れも正確な數字ではない。英國ではデーリー・メールの賣高は一時百八十九萬に達したことがあるが、新聞界の偉人であるノースタリツフ卿薨じてから、其賣高減少し、現在では百七十五萬の程度を上下して居る。之れは著名な公認會計士が同新聞社が發行した部數から販賣先から歸つて來た部數、賣れなかつたもの、ロハで領布してるもの等一切を差引いて、正味の賣高を公表したものであるから萬間違ひないものである。此新聞發行部數の公表はノースタリツフ卿が廣告料をつり上げる爲めにやつた英斷であるが、タイムスとか、デーリー・テレグラフとか、モーニング・ポストの如きは之れに倣はなかつたけれども、同種類の所謂ペニー新聞はやむを得ず、之れに追從するを餘義なくされ、其賣高を公表して居る。そして百萬を出てるものはデーリー・ミラー、デリー・エキスプレス位のものでデーリー・タロニタルの八九十萬、デーリー・ニユースの六十萬が大體の數字である。

此外に公表された數ではないが、リツデル卿の持つてる日曜新聞ニユース・オブ・ゼ・ウオルドの三百萬又グラスゴー・ヘラルドの百萬に達してるもののあることを附記する必要が有る。

我國では東西の朝日新聞、大阪每日東京日日を合算してそれそれ其發行部數が百萬を超過することに疑問はない。唯此兩者とも英國の新聞の如く之れを公表するの勇氣に缺けて居るに止まる丈けの差であるが、人口の彼にあつて四千四百萬（愛蘭を加へて四千八百萬）我にあつて六千萬に近い事實を比較すると、まだ〱百萬以上の發行部數を有する新聞が日本に四五あつても差閊ない筈である。

發行部數の點は之れ位にして、新聞社の利益を比較すると大なる差がある。先づ廣告料の點から云ふとデーリー・メールは每年四千萬圓以上の廣告料收入がある。日本の大多數の中央新聞と同樣に第一頁を廣告にあてゝ居るが、此廣告は前年中に既に豫約濟になり其廣告料は一萬四千四百圓であり且つ前納と云ふことにしてある。大阪朝日、東京朝日の廣告料を合算して六百萬圓（推算であるから間違はあると思ふ）に過ぎないのと大相

違がある。そこでデーリー・メール社（法律上の名前は聯合新聞社と云ふので此外にイーヴユング・ニユース等を發行して居る）の年收二千五百萬圓に達して居るが同社はむしろ金の儲かり過ぎるのに困つて居る位で其遣方を見ると如何にして配當を減少せんかに苦心してるかの如く伺はれる。此次ぎに取り立て利益のあるものにデーリー・ミラーと云ふのがある。毎年の純收入五百萬圓とは大したものである。此新聞は主として婦人を讀者とするのであるが。それすら之れ丈けの利益をあげて居る。日本の新聞界が醜い程の競爭を繰り返し、尚ほ二百萬圓以上の收入を擧げ得ないのと比較して大なる相違と云はざるを得ぬ。

從て金融界に於ける新聞社の地位は大したもので、ノースクリツフ卿薨じ、サー・フルトン逝いた過去二三個年に英國の新聞界に若干の變動があり、新聞の持主が變つたが、此際デーリーメール社サンデータイムス社が夫れ〳〵其新聞の利益を擔保として發行した社債四五千萬圓の利子は七分であつて、即時賣切となつた好景氣を見てもわかる。七分と云へば我國債の利廻りに相當するのである。

過去十年間に新聞は儲かるものだと云ふことになつて以來、英國での傾向は金滿家が千萬圓二千萬圓と云ふ大金を投じて、之れを買ふことで、生前ノースクツフ卿の如きは之れが政治輿論に及ぼす害悪を痛嘆して居た程であつた。

米國の大都市の一個の新聞社の資本は大抵數千萬圓に達して居る。

六　外國通信の改善

日本の新聞の經營上最も無駄であり、且つ全體から見て有害だと思ふことは、外國からの通信である。戰時中は日本の新聞は外國から受けた通信で大部分の記事を爲して居た。今日では歐米の形勢が常態に復しつゝあるのと、日本の内政問題が面白くなつた爲めに、外國通信は特別の事件の外は比較的重きを置か無くなつて來た。然るにも拘らず、通信社の多いことには驚かざるを得ない。日本の新聞に外國通信の材料を供給して居るのに第一聯合(國際)社がある。此社はロイター社の特派員をして居たケネヂー氏の創立したのである丈け、其通信の材料は主としてロイター社（英國では）と米國の聯合通信社から受けて居る。云はゞロイター社聯合通信社の出張所と云つてよい。

此外に日本電報通信社が供給してる共同通信社の材料が來る。それに二三年來帝國通信社がナウエン、ボルドーの無線電信を供給して居る。

所で此三者は送つて居る材料は總て外國人のやつて居ることゝ

であるので、日本の新聞の要求とピタリと合つて居ない。ロイター社にしろ、聯合通信にしろ、共同にしろ乃至無線にしろ、其通信は印度支那印度及び極東方面に居る自國人の爲めに供給する新聞である。無線の如きは獨逸なり、佛國なりが、自國のプロパガンダの爲めに使用して居るのであるが、日本の通信は此點に考へ及ばずして、結果に於て、外國人の殘飯を頂戴して居ることになり、甚だ面白くないことである。此點は通信機關の遲れて居ることと同樣日本が如何に外國より遲れて居るかを示す一個の例である。」

戰時中であつた。聯合通信にしろ、ロイターにしろ盛んに此通信をプロパガンダに使つたものである。埃及人、印度人、支那人、それに日本人も民族自決だとか、民主主義の有難味とかを盛んに敎へられたのは此プロパガンダのお蔭であつた。此きゝ目は顯著なものがあつて、印度、埃及、支那で國民運動が起り、日本では普通選擧の實行までにこぎつけたが、之れをたきつけたものは、外國のプロパガンダであつた。國内からもえ出た運動であつたと云ひ兼ねる。然し此通信の機關が何時迄も外國人に掌握されて居ては、日本國民は何時迄も此點に於ては外國人の精髓を甞めると云ふことになる。通信上は外國の奴隷だと云ふことになる。世界の趨勢を外國の色眼鏡を通じて始めて知ると云ふことは政治上から見ても、日本帝國の權威から見ても、何の點から考へても面白くない事柄である

元來新聞の記事なるものは、それによつて輿論を組み立てる基礎となるものであるが、英國人なり、米國人なりによつて乃至獨佛人によつて、供給される通信には、其國民的偏見がどうしても混同されることを免れるわけには行かない。且つ其國民が要求する所の記事は日本國民の要求する所でない場合が多いのである。論より證據以上の各通信社の供給する通信が各新聞社の手に入ると、其大部分は紙屑籠の中に葬られ、紙上に掲載されるのは一少部分に過ぎない。高い電報料を使ひ、各通信社から高い通信料を分擔させた結果は斯の如きものである。

以上は無駄な例であるが有害な例を云へば、此三個なり四個なりの通信には互に異つたのがある同時に到着すれば選擇の餘裕があるが、そうで無い場合には、編輯者の方で取捨に迷ふ場合が多い。甲の通信で肯定した記事が夕刊に掲載され、乙の通信で否定した記事が朝刊に載つて居ることが屢々あり、讀者を誤らせること夥しいものがある。之れは編輯者に大半の罪はあるが、編輯者必ずしも外國の事情に通じて居ないから、大局から云へば、斯る多數の通信を受取ることが惡いと云ふことになる。

新聞は記錄ではない。記者は記錄掛りではない。然し編輯の

記者が材料の取捨撰擇をする場合の心懸けは、歴史家が文書を取扱ふ態度と同じかるべき筈のものである。例へば實地見聞した記事は又聞きより正確である筈である。新聞の場合を例にひくと、英國であつた事件は、ロンドンからの通信が其他の地點からのものよりも信憑すべきものである筈であるのに、往々にして、我新聞紙上には紐育や、又は巴里、ベルリンから來た通信を然も虚報を平氣で掲載してる。所謂菽麥を辨じないやり方には特派員の迷惑を感ぜしめるのであるが、それ丈け我新聞の缺陷を認めしめる。此缺陷を如何にして防止すべきかと云へば、第一に通信機關を日本人の手で動かすことにする外に方法はない。此事は當業者間に幾分か氣がつき出したやうである。國際通信者の如き最近ロンドンに派遣記者を派遣したが、誠に喜ぶべき事である。然し吾人をして云はすれば、此際國際だとか、共同だとか、東方だとか、乃至無線だとか、所謂蝸牛角上の爭をせずに、此際協同して一種の外國通信の機關を組織して貰ひ度いものである、而してこの經濟的にも有力な機關が出來て、之れから各方面に特派員を派遣して貰ひ、通信を統一して貰ひ度い。一個の統一した通信機關があれば其通信料を拂ふ方の新聞社でも、編輯費を節約し、且つ能率を増進し得られる。それで日本への通信は總て日本人の特派員の手で行けるやうにして貰ひ度い。

紅丸で、ノースクリツフ卿との談が此外國通信に及んだ時にノ卿の曰くに、自分は嘗て通信員に外國人を使用したことは無い。外國人では如何なる場合にも、英國人の立場を諒解し得ないと云つてゐた。尤も米國人でも英國に長く居たりしたのは、自然英國を解し得るかも知れないが、之れは例外の場合である。

所で實行上の困難は此任に當る適當な特派員を得ること、且つ之を養成することの困難な點にあると思ふが、今日のやうに多數の通信社があつて、個々に獨立し、且つ無用な競爭をしてゐては將來此目的を達することは困難である許りで無く且つ絕望と云ふの外はない。

外國に居て其國の形勢なり、日々起つた事件を通信することは、何でも無いやうであるが、其實容易なことではない。特派員たるものは長年の經驗と熟練を要することである。そこで一個の新聞社なり、又は通信社なりが單獨に、此特派員を各地に派遣すると云ふことは費用の點から云つても、人材を得る上から云つても、容易なことではない。現在外國通信に最も金をかけて且つ重きを置いて居るのは朝日新聞であるが、特派員らしき仕事をし、其駐在して居る國にも認められて居るのは巴里の重德泗水君あるのみである。歐米のことは別として支那に於てすら

同樣で現在代議士の神田正雄君が去つてより、朝日の北京特派員は同氏の後繼者として遜色なきを得ないと云ふのも失禮には當るまい。

適當な特派員を得ることは一個の新聞社で容易でないことは、財力に於ても、人材に於ても第一であり二と下らない每日新聞がロンドンの特派員として外人を用ひて居ることを以ても知られる。其他の新聞社に至つては財力足らず、且つ人材も得られないかして、特派員を置いて居ない。然し自分をして云はすれば當然なことで、未熟な特派員をかけて費用を使ふよりも、置かない方が增しであるからである。今後と雖も一個の新聞社なり通信社なりが、多數の優秀な特派員を持つことは、あらゆる事情よりして不可能なりと斷言するの外はない。

一個の新聞社の力で出來ないとすれば、各新聞社全體の利益の上から云つても、外國通信の點からのみ考へて見て此際聯合通信社を組織するの急務であることは明瞭である。

一個の通信機關であつて見れば、多數の熟練した特派員を歐米の要地に派遣し得る余裕が出來て來る。各新聞社から見ても其通信費を節約し得て、一擧兩得であることは云ふをまたない。特派員たる役目は生涯の仕事である。決して腰掛で出來るものではない。ブローウイツ氏がタイムスの有力な特派員であつたことは、古い話だが、歐米の特派員は何れも其駐在地に永い間住んで居る。モーニング・ポストの華盛頓特派員サー・モーリス・ロー氏の如きは三十年間に及ぶと思ふが、同紙のローマ特派員ミラー氏も之れに劣らず長い。北京のタイムス特派員フレザー氏も十五年以上になると思ふが同紙の華盛頓特派員ルイス氏も同樣である。此例は數限り無くある。斯る經驗あり、且つ土地に馴染の出來た特派員にして始めて其任務を爲し遂げ得られるのであるが、日本のやうに留學生同樣の特派員を送つて居ては滿足な効果は擧げられぬのみならず不經濟であるが、斯る狀態に當てはまつた特派員が容易に得られるものでない。各新聞通信社を集めても得られないのであるから、此協同の目的の爲めに一個の聯合通信社を置くことの急務なることは議論の余地がない。而して内外を通じての聯合通信機關への前提として此の機關の設立を見んことを切望してやまない次第である。

英米の新聞と獨佛の新聞とを見れば、一見其價値の優劣が誰れにもわかる。後者は内容極めて貧弱である。第一に目のつく點は外國に特派員の居ないことである。佛國の新聞で英國を含む歐洲以外に特派員を持つて居るものは無い。佛のアヴアス獨のウルフ通信社は經育の聯合通信社に特派員を置いてる。昨年の春から秋にかけて其代表者は[illegible]モロッコと

シリアに容易ならぬ内亂があつた。然し佛國の新聞は少しも其事實を知らす、英國の新聞に掲載された記事をロンドンに居る同國の特派員が夫れ〳〵其新聞に轉載して初めて同國人は驚ろき、同國の議會の問題となつた。獨逸でもその通り、馬克の下落してる中は此國の新聞はロンドンにすら特派員を出し得なかつた。其財政が貧弱であつたからである。ロンドンの新聞が飛行便でアムステルダムか、ブラッセルスかに到着するをまつて、之れを獨逸國内の夕刊に間に合はせたものだ。今ではロンドンに居る獨逸の新聞の特派員は十名以上になつたが、是れ又世界の事件をロンドンの新聞を通じて窺ひ知るに過ぎない。云はゞ又聞きに過ぎない。デーリー・テレグラフの持主バーナム卿がロンドンは世界の新聞の中心だと誇稱するを否定し難い。

新聞社が特派員を有せす、外國に關する智識を缺ぐ結果として起ることは、外交問題に關する是非の判斷を爲し得ないことである。佛國や獨逸の新聞に何時も其報道を自國の外務省に求める。無論其政府に都合の惡るいことは、外務省の役人が發表する氣遣ひが無いから新聞に表はれた記事は、外國の新聞に表はれた記事を轉載する以外に、自國の都合の良い者許りである。ルール事件の時佛獨ともに、英米を見そこなつた。殊に獨逸の如きは表面に表はれた英國の新聞の態度を見て、最後の最後まで、英國は自分に味方するものと誤解して居たのは、無論外務當局者も惡るかつたに相違ないが、輿論を指導し、之れに判斷の材料を與へる新聞が無かつたと云ふことに歸着する

ルールの占領以前のことであつた。巴里よりロンドンに歸る食堂車中佛國人に話しかけられたことがある。商人であつたが、歐洲の政局に關する自分の意見を求めて云ふには、自分の國の新聞は勝手な熱許り吹いて居て、都合の良い事許り云つて居るので、全くあてにならない。君は外國の新聞記者であるから、公平な觀察が出來るだらう。いつたい此先きはどうなるのだ。又英佛孰れの云つてるとが正しいと思ふかと。これで見ると佛國人すら、自國の新聞を信用して居ない證據である。

米國の新聞位財力に豐富なものは無い然しそれにも拘はらず歐洲の形勢に通曉して居る新聞記者乃至特派員は至つて少いやうである。之れは日本程でも無いが、大西洋を距てて居る事と歐洲の形勢に比較的無頓着な爲めに原因して居ると思ふ。尙ほ他の原因は米國の輿論が歐洲の形勢に着眼し始めたのは、歐洲大戰以後であつたから、適當な記者が未だ養成されないことにあるかも知れない。

聯合通信社の如きも、又特派員の養成には困難を感じて居るやうである。同社の方針として特派員は歐洲に二個年間滯在さ

同様で現在代議士の神田正雄君が去つてより、朝日の北京特派員は同氏の後繼者として遜色なきを得ないと云ふのも失禮には當るまい。

適當な特派員を得ることは一個の新聞社で容易でないことは、財力に於ても、人材に於ても第一であり二と下らない毎日新聞がロンドンの特派員として外人を用ひて居ることを以ても知られる。其他の新聞社に至つては財力足らず、且つ人材も得られないかして、特派員を置いて居ない。然し自分をして云はすれば當然なことで、未熟な特派員をかけて費用を使ふよりも、置かない方が増しであるからである。今後と雖も一個の新聞社なり通信社なりが、多數の優秀な特派員を持つことは、あらゆる事情よりして不可能なりと斷言するの外はない。

一個の新聞社の力で出來ないとすれば、各新聞社全體の利益の上から云つても、外國通信の點からのみ考へて見て此際聯合通信社を組織するの急務であることは明瞭である。

一個の通信機關であつて見れば、多數の熟練した特派員を歐米の要地に派遣し得る余裕が出來て來る。各新聞社から見ても其通信費を節約し得て、一擧共得であることは云ふをまたない。特派員たる役目は生涯の仕事である。決して腰掛で出來るものではない。ブローウイツ氏がタイムスの有力な特派員であつたことは、古い話だが、歐米の特派員は何れも其駐在地に長い間住んで居る。モーニング・ポストの華盛頓特派員サー・モーリス・ロー氏の如きは三十年間に及ぶと思ふが、同紙のローマ特派員ミラー氏も之れに劣らず長い。北京のタイムス特派員フレザー氏も十五年以上になると思ふが同紙の華盛頓特派員ルイス氏も同様である。此例は數限り無くある。斯る經驗あり、且つ土地に馴染の出來た特派員にして始めて其任務を爲し遂げ得られるのであるが、日本のやうに留學生同様の特派員を送つて居ては滿足な効果は擧げられぬのみならず不經濟であるが、斯る狀態に當てはまつた特派員が容易に得られるものでない。各新聞通信社を集めても得られないのであるから、此協同の目的の爲めに一個の聯合通信社を置くことの急務なることは議論の余地がない。而して内外を通じての聯合通信機關への前提として此の機關の設立を見んことを切望してやまない次第である。

英米の新聞と獨佛の新聞とを見れば、一見其價値の優劣が誰れにもわかる。後者は内容極めて貧弱である。第一に目のつく點は外國に特派員の居ないことである。佛國の新聞で英國を含む歐洲以外に特派員を持つて居るものは無い。佛のアヴアス獨のウルフ通信社は紐育の聯合通信社に特派員を置いてる。昨年の春から秋にかけて其保護國であり在任經濟國にあるモロツコと

シリアに容易ならぬ内亂があつた。然し佛國の新聞は少しも其事實を知らす、英國の新聞に掲載された記事をロンドンに居る同國の特派員が夫れ〲其新聞に轉載して初めて同國人は驚ろき、同國の議會の問題となつた。獨逸でもその通り、馬克の下落してる中は此國の新聞はロンドンにすら特派員を出し得なかつた。其財政が貧弱であつたからである。ロンドンの新聞が飛行便でアムステルダムか、ブラッセルスかに到着するをまつて、之れを獨逸國内の夕刊に間に合はせたものだ。今ではロンドンに居る獨逸の新聞の特派員は十名以上になつたが、是れ又世界の事件をロンドンの新聞を通じて窺ひ知るに過ぎない。云はゞ又聞きに過ぎない。デーリー・テレグラフの持主バーナム卿がロンドンは世界の新聞の中心だと誇稱するを否定し難い。

新聞社が特派員を有せす、外國に關する智識を缺ぐ結果として起ることは、外交問題に關する是非の判斷を爲し得ないことである。佛國や獨逸の新聞に何時も其報道を自國の外務省に求める。無論其政府に都合の惡るいことは、外務省の役人が發表する氣遣ひが無いから新聞に表はれた記事は、外國の新聞に表はれた記事を轉載する以外に、自國の都合の良い者許りである。ルール事件の時佛獨ともに、英米を見そこなつた。殊に獨逸の如きは表面に表はれた英國の新聞の態度を見て、最後の最後まで、英國は自分に味方するものと誤解して居たのは、無論外務當局者も惡るかつたに相違ないが、輿論を指導し、之れに判斷の材料を與へる新聞が無かつたと云ふことに歸着する

ルールの占領以前のことであつた。巴里よりロンドンに歸る食堂車中佛國人に話しかけられたことがある。商人であつたが、歐洲の政局に關する自分の意見を求めて云ふには、自分の國の新聞は勝手な熱許り吹いて居て、都合の良い事許り云つて居るので、全くあてにならない。君は外國の新聞記者であるから、公平な觀察が出來るだらう。いつたい此先きはどうなるのだ。又英佛孰れの云つてるとが正しいと思ふかと。これで見ると佛國人すら、自國の新聞を信用して居ない證據である。

米國の新聞位財力に豐富なものは無い然しそれにも拘はらず歐洲の形勢に通曉して居る新聞記者乃至特派員は至つて少いやうである。之れは日本程でも無いが、大西洋を距てて居る事と歐洲の形勢に比較的無頓着な爲めに原因して居ると思ふ。尙ほ他の原因は米國の輿論が歐洲の形勢に着眼し始めたのは、歐洲大戰以後であつたから、適當な記者が未だ養成されないことにあるかも知れない。

聯合通信社の如きも、又特派員の養成には困難を感じて居るやうである。同社の方針として特派員は歐洲に三個年間滯在さ

せる。久しくなり過ぎると、米國の形勢に迂くなるので、歸國を命じ、三個月間の休養を與へ、更に九個月間は米國內で使役し、更に歐洲に派遣するとの事である。

ポーツマス條約締結（日露戰爭後）の當時と今とを比較すれば、日本の新聞は雲泥の相違である。此時行つた特派員で小村侯に小遣錢を貰はなかつた新聞記者は無かつたとは老記者故石川半山氏の話であるが、日本の新聞は桂內閣に煽動されて硬論をはいたものであつた。其反動は燒打事件として表はれて來た。

一九二一年の華盛頓會議の時であつた。所謂十對七の問題で日本の全權委員が米國の全權に向つて根張り強く其主張を固執してのあげくに之れで無いと日本の輿論が承知しないと來たものだ。所で米國の代表者中の一人の曰くに輿論とは何を指すか、新聞のことであるのか、若しそうであるとすれば、日本の大新聞中にこう云ふ議論があるとて十對六至極結構と云ふ一新聞の論說をつきつけられ、之れには閉口したと云ふ話がある。

今日財政狀態から考へて見ても又世界の大勢から考へて見ても、日本の讓歩は結局日本の利益であつた。日本に獨立の見解を維持し得た新聞のあつたことは、結局日本の利益であつたと云へる。

歐洲大戰以前では滿足に外國語の讀める新聞記者は、我新聞界に幾人あつたか、疑問である。大戰と共に歐米の國情を知るの必要に迫られ、外國語主として英語の智識を有するものを採用することとなつた。從て現在でも我新聞界には語學者が多い。英語學者であれば外國の形勢がわかると云ふ幼稚な時代を我新聞界は脫しないで居る。

日本は米國の如く自主獨立の地位にあるものではない。米國は鎖國主義をとつて行つても經濟的にも、精神的にも不自由しない國である。之れに反し、日本は經濟的に英國米國に依賴する所が多い。日本は米國に絹糸を賣り印度、米國、支那より綿花を求め、且つ其製品の市場を求めなければ、立ち行かない國情にある。我經濟界が此結果として、歐米の狀態に注意すると、米國人以上であることは當然と云ふべきである。政治的にも、精神的にも同樣であつて、若し我政治界、教育界、等が歐米の進歩と不斷の接觸を怠るに於ては、國情は停滯を余儀なくさせらるに相違ない。最近に於て歐米の政情も停滯の狀を呈して居るので日本に與ふる刺戟は減少した。之れと同時に日本の政治も沈滯の狀を呈し、各政黨ともくだらない政爭に沒頭して、大問題を沒却し政治上社會上の進歩を計ることを忘れたかの如き感を與へる。斯の如きに際して、世界の大勢を正確に報道し、

やゝもすれば現狀に滿足し、我國運の進步と沒交渉である紛爭に沒頭せる政黨を刺戟し輿論を指導することは新聞の任務である。之れを達する道は、各新聞社に優秀な記者を養成すると同時に、優秀な特派員を列强に派遣し、其報道を掲載し、輿論に刺戟を與へるより外にとるべき道はない。

每日新聞社は今日でも每年數名の記者を歐米に派遣して居ることは大局より見て喜ばしいことである。財力に於ても之れと劣らない筈の朝日新聞が二個年前從來の方針をすてゝ記者の外遊を中止して居ることは、吾人には諒解出來ない。此方が同社にとつて經濟の方面から見て一時的には、利益かも知れない。然し斯の如きは優秀な記者を養成する所以でない筈である。

日本の如く歐米諸國とかけ離れ國情の全然相違する國では、刻々變化しつゝある世界の形勢を知ることは米國以上に困難である。困難である丈けに一層の努力を要する。巴里に平和會議に行つた日本の全權は何が起るのか、どうしたら良いのか、お先きまつくらで出かけたものである。國際聯盟なるものが出來ると云ふ事であるが、どんなものか內容を知らなかつた。又聞きであるので眞僞は知ないが、外務省に來て居た報告の中で、西班牙に居た全權公使故坂田重次郎氏のが最も要領を得て居たと云ふことである。

そこで何でも歐米の事情に通せねばならぬと云ふので、其後情報部なるものが生れ、多大の國庫の金をつかつて居たが、大なる効果を發揮して居ない。此情報部が我新聞に供給し得る材料は至つて少ないようである。地震の時であつた。外務省から始めて諸外國の大公使館に打電を開始したのは六日であつた。然し此當時では如何なる材料でも要求する時であるから、新聞は其發表を歡迎したのであつたが、此情報が五時以後に到着した場合には、大使館では其發表は翌日に廻はしてしまつた、手が足りないと云ふのである。新聞記者が晝夜兼行で働らいて居る時、お役人は呑氣な事をして居るものだと思つた。翌日に廻るやうな情報は新聞にとつては舊聞であるから、掲載されはしない。斯る機敏な仕事は新聞記者に任して然るべきものである。米國の外務省のやり方は大抵の情報はA・P・と聯絡をとつて居て、夫れに一任して居る。其方が機敏でもあり外務省の經費の節約にもなる。又情報は役人の取扱つてるやうに迂遠なものでない。

日本の外務省は役人を永く一箇所に置かない方針である。(無論例外はあるが)從て外交家は其國の事情に通ずる以前に轉任を命ぜられる。次ぎに來たものも同樣である。此利害は何れとも云へないが少くとも落ちついて情報を得る便宜から云へば、大なる缺點である若し日本に米國のA・P・英國のP・A・如きものが出來た場合には、此種の情報は我が當局者は之れに一任し、他の方面に其勢力を集中すべきである。新聞記者に役人はつとまら無いが、役人の如で育つたものが、新聞類似の仕事をやつても成功は出來る筈がないのである。

竹葉集

若山牧水

千本濱

幾人の海人の乘れるや朝闇の浪に漕ぎいだし漕ぎ騒ぎたる

朝闇の浪の荒きに漕ぎ出づる舟ひた濡れて眞黑かりけり

澄みとほるうしほの色は水底の眞砂を染めて青みたゆたふ

地曳網は大きく手繰網は小さし

濱人(はまびと)の群れて曳く網長ければ朝闇またたく明けはなれたる

手繰網(たぐりあみ)たぐりて曳きて獲し魚は皿(さら)ひとさらの美しき雜魚(ざこ)

千本松原

松荒きこの松原にすひかづらひとり匂ひて咲きにけるかも

松の木に鴉はとまり木のかげの忍冬(すひかづら)のはなにあそぶ虻蜂(あぶはち)

松の木のならび明るき松原にはてこそなけれ松の木のならび

松原にいつ生ひにけむひともとのアカシヤ生ひて花咲けり見ゆ

松原のなかの老木の枯れたるを伐る音きこゆ昨日もけふも

その二

梢をつとはなれて鴉重げなりたちならびたる老松の梢

梅雨曇くもりのなかに並みたてる老木の松は黒き黒松

うす雲は雨氣おびたり藍うすき空にうかびて松のあひに見ゆ

無題

亂れやすきわれのこころよめざめたる朝のしばしを靜けくはあれ

ともすれば亂れむとするこの朝の心おさへてをるがくるしさ

鷄の子

棟の木うすむらさきの花のかげに美しき鶸がとまりをるなり

かの鶸よ雛にしあらしうつくしく棟の花にあそびほけたる

花につどふ羽蟲あさると鶸の子が遊びほけたり棟の花に

軒さきの竹にとまれる鶸の子がわれを見てをる美しきかな

天城の雲

墨色に曇りはてたる天城嶺の峰に居る雲は深き笠なせり

笠なして天城のみねにをる雲は秋くれがたの眞白妙の雲

鴉

聳えたる松のこずえに鴉をりまた一羽來ぬ雨降れる松に

並び立てる老木の松のあはい縫ひて鴉まいすぎぬゆふぐれの雨

獨酌朝夕

暮れ遲き庭の若葉をながめつつひとり酒酌ぐ靜けくあるか

朝日影さし來て部屋は光なりしみじみとして酒つぐわれは

ふくみたる酒のにほひのおのづから獨り匂ひてをるこころかも

うましとしわが飲む酒はとりがたき光にあれやひかりつつ消ゆ

われはもよ酒飲みて早く老いぼれぬ酒飲まぬ友はいかにかあるらむ

雜詠

芽ぐみ遲き何の木ならむこの朝の雨に濡れつゝ鳥とまりをる

雨の雫やどせる竹に栖葉おほし日ごと見馴れし軒さきの竹に

野茨の芽立の莖の伸びそろひ風になびきて匂ふこの野よ

此處の原にとぶつばくらめしげけれや野いばらの芽立を縫ひて

山櫻のはな散りすぎて天城山春のをはりのいまいかにあらむ

ぬぎすてし娘が靴にでで蟲の大きなる居り朝つゆの庭に

庭に起る物の音あり犬がゆき鷄がとほるをりをりの音

夕立の雨のさなかを墨色に澄みて見えつつ鳥まひすぎぬ

朝の鳥

明けやらぬ闇とおもふに軒さきを早や何鳥か啼きてすぎたる

夜半に起きてもの書きいそぐならはしのわれに親しき曉の鳥の聲

論語の講義

武者小路實篤

六の續き

■宰我が問ふて曰く。

「仁者に井戸に人が落てゐると云ふと仁者は井戸に飛び込みますか」

孔子は云つた。

「そんなことはない。君子は行かすことが出來るが、陷らすことは出來ない。欺すことは出來るが、罔ふることは出來ない（道理のないことで目をくらますことは出來ない。愚鈍にすることは出來ないと云つてもいゝかと思ふ）」

つまらぬ答へではあるが、答へは一般的の事實をもつて答へてゐる。だが川や海に溺れてゐる人を救ふには川や海にとび込まなければならない時がないとは云へない。勿論泳げない仁者はそれを見殺しにしなければならないと思ふが、だからこの答へでは欺くべし、しかし目をくらますことは出來ない。だますことは出來るが、君子を小人にすることは出來ない。賢いものを愚者にすることは出來ないと云ふことは本當と思ふ。

孔子は云ふ。

「君子は博く文を學び、之を約（約束）するに禮を以てすれば、亦以て背かざるべきか」

君子は博く學び、それをすべくゝるに禮を以てすれば、過ちがないだらう。と云ふのだと思ふ。孔門の敎育法の大方針として名高き訓言ださうだが、禮と云ふ言葉が現在の言葉にあてはめて見ないとはつ切りしない。

博くものを知り、一もつて貫く、天理にかなふやう身を處する、などと云ふといく分わかる氣もする。

「子南子を見る子路よろこばず、孔子ちかつて曰く、予が否なる所のものは天之を厭たん、天之を厭たん」

孔子が淫婦として評判のあつた衞の靈公の夫人南子にあつたので、子路がよろこばなかつた。其處で孔子が子路が安心するやうにちかつたのだと思ふ。一寸面白い話である。孔子が二度もくり返して辯解したのは面白い。

孔子云ふ

「中庸の德たるや、其れ至れるか、民すくなきこと久し」

中庸の德の價値を孔子は實によく感じてゐる。中庸の德は獨立人の德であり、平和人の德であり、日常時の德である。他を犯かさぬ德である。過不足なき德、自分のなすべきことをなす德、出しやばらない德。

それを本當に實行し得るものは少ない。他人を本當に尊敬するもの、自己に托された生命と他人に托された生命を尊敬出來るものにして中庸の德は行はれる。

いつになつたらこの德は生きるのであらう。

子貢が問ふ。

「博く民に施して、よく衆をすくふあらば仁と云ふべきか」

孔子答へて云ふ。

「仁と云はう。必ず聖か。堯舜も猶ほそれが實行出來ないのを病んだ。夫れ仁者は己立たんと欲して人を立て、己達せ

んと欲して人を達す」能く近くを取り譬ふるを仁之方と云ふべきのみ」

この孔子の答へはさすがによく仁を知つてゐると云ふべきである。仁は遠くにはない近かくにある。そのことは孔子が他の處でよく云つてゐる。仁は個人にとつて不可能なことではない。個人にとつて可能な道德である。

子貢の問ひは理想的すぎる。聖人でも不可能なことである。仁の目標はすべてが生る處にあるにしても、それは個人々々にゆるされた方法によればいゝので、聖人でなければ、或は天子でなければ出來ないと云ふものではない。自他にたくされた生命をひとしく尊敬することである。中庸の道は仁に叶ふのである。

他人を先にするのではない。共に生る之が仁である。孔子は仁を實行してゐる人である。子貢は仁を求めてゐる人である。

仁を行ふ者が少ない、まるでないと云つていゝのは實行不可能だからではない。心がけが至らぬからである。

自分に托された一つの生命すらもてあますものは、他の生命のことを思ふ餘裕はない。だが自分の生命を物慾や、肉慾に支配させない時、我等の心が清く無私の時、他の生命の平和に生ることをのぞむ時、仁者のおちつきは我等の心にしのびこむものである。

自他共に生る世界、個人同士が調和出來る道を歩く時、人は仁者たり得るのである。瞬間的にも。

七の一

「述べて作らず、信じて古を好む、ひそかに我が老彭に比す」

孔子が自分について云つた言葉がこの篇には多い。孔子は己をよく知つてゐる。少し謙遜をしてゐるが、中々自覺も

強い。嘘は云へない男である。

「祖述してつくり出さない。古の道を信じて好む點で、ひそかに自分を殷の賢大夫の老彭に比してゐる」

禮記樂記に作者之を聖と云ひ、述者之を明と云ふと云ふ言葉があるさうだが。孔子は謙遜して自分は述者であつて、作者ではないと云つてゐる。しかし孔子は述者であるかも知れないが、同時に大成者でもあつたと思ふ。少くも孔子は生てゐた。自分の考へを云ふのに一々昔の人に相談する必要はなかつた。すつかり自分のものにしてゐた。今の所謂の知りとはちがう。カント學者や、マルクス學者とはちがう。しかし孔子の教へをうけた末者は自分が生てゐないので、古を信じ好むのではなく、古にすがりつき自己をしばりつけ、一々孔子の許しを得ないともの云へなくなつた。だから進歩がない。人類と共に生長することが出來ない。古へを信じ好むのはいゝ。それはより根本的に生るのに役立つから。しかし古へに今をもどさうとするのは愚である。孔子が音樂や禮を昔に戻さうとしたのには自分は同感出來ない。だが古を好み信じるのには反對する必要は認めない。

「默して之を識し、學びていとはず、人を敎へてうまず、何か我にあらん。（それだけだ私は）」

默つていろ〳〵のことを見きわめ、學んであきず、敎へてうまない。

つまり本當のことを何處までも知らうとし、そして知つたことを何處までも他人に傳えやうとする自分は人間だ。

之は謙遜と云つていゝか。己の使命を知つてゐると云ふべきである。

「德の修まらざる。學の講せざる。義をきゝてうつる能はざる。不善の改め能はざる、是自分の憂ひである」

この憂ひをなくすことで孔子は日々新に生き、又進歩するのである。このことは本當に大事なことである。このことは他人に要求すべきことではない。自己に要求すべきことである。そしてそれが實行出來るものは、遂に聖人の域に入

ふ。完全な人間になれるわけだ。孔子が孔子になれたのは、この言葉を實行したからである。又我等が孔子に今なほ教はる所があるのは、この實行によつて得た孔子の實感、眞理が、我等の生命を正しきに導く力があるからである。

心の修業をつまないものは我等の心とは交渉のないものである。

「子の燕居、申々如たり、夭夭如たり」

孔子が閑日月の時は實にゆつたりとして、平和でよろこびに滿ちてゐると云ふ意味ださうだ。

「甚しいかな吾が衰へたるや、久しいかな、復夢の周公を見ず」

孔子も時々はへこたれてゐたらしい。しかしへこたれ切つてはゐない。反省がつよい。ある時の言葉であらう。孔子は齢とるに從つて聖人の域に近づいたことは事實と思ふ。だが時々は衰へを感じたのだと思ふ。

夢に周公に逢はないだけでは衰へた說明にもならないと思ふが、緊張さが、少しゆるんだことを感じたのだと思ふ。

孔子が夢で周公とどんな話をしたか聞きたいものである。

「道に志し、德に據り、仁に依り、藝に遊ぶ」

孔子の理想か。

「仁に依て藝にあそぶ」

仁によるのは大いにいゝ。だが藝にあそぶのは不必要だ。今時に贅澤だ、誰かそんなことを云ふ人がありさうだ。

仁うちにあれば發しないわけにはゆかない。孔子は窮屈な人間ではなかつたらう。尤も藝は六藝である。

「束修を行ふよりは吾未だ嘗つて誨ふること無くんばあらず」

禮を修めて來たものには必ず誨へないと云ふことはない。禮をおさめないで來たものに誨へないこともあると云ふ意

味か。

敎へを受けるには禮はありたきものである。他人を利用しやうと思ふ者が多いのは不愉快である。

「憤せざれば啓せず、悱(恰も理解すれども、もう一步の處がはつきり云へない形)せざれば發せず、一隅をあげて而して之に示し、三隅をもつて反せざれば、則ち復せざるなり」

孔子の敎へ方の嚴しさは一寸禪宗に似てゐるやうだ。

求めないものには與へない。力が其處までゆかないものには示さない。ぴたりと反應のないものには敎へない。機が熟して始めて敎へる。其處で兩方の心がぴたりとする。半物知りは出來ないわけだ。

半物知りは實にはがいものだ。

理解が出來ないのは語る方がわるい時もあるが、聞く方がわるい時も多い。相手を見て法を說く、中以上の人でなければ上は語らない。之は親切と云ふべきだ。しかし何かかく人は中以下の人を頭においてかくよりも、中以上の人を頭おいてかくことが出來れば、その方がいゝと思ふ。それ以下の人には、又適當な求者が居るものである。たゞ上のものが讀んでよろこべるものが少いのはよくない。上のことが語れる人はさう澤山はゐないものである。

「子喪に有る者の側にて食すれば未だ嘗つて飽かざるや」

「子是の日に於て哭すれば、則ち歌はず」

共に思ひやりのあることを示す。

孔子、顏淵に云ふ。

「之を用ふれば則ち行ひ、之をすつれば則ちかくる。唯我と汝とあるかなと」

ふ。完全な人間になれるわけだ。孔子が孔子になれたのは、この言葉を實行したからである。又我等が孔子に今なほ教はる所があるのは、この實行によつて得た孔子の實感、眞理が、我等の生命を正しきに導く力があるからである。

心の修業をつまないものは我等の心とは交渉のないものである。

「子の燕居、申々如たり、夭夭如たり」

孔子が閑日月の時は實にゆつたりとして、平和でよろこびに滿ちてゐると云ふ意味ださうだ。

「甚しいかな吾が衰へたるや、久しいかな、復夢の周公を見ず」

孔子も時々はへこたれてゐたらしい。しかしへこたれ切つてはゐない。反省がつよい。ある時の言葉であらう。孔子は齢とるに從つて聖人の域に近づいたことは事實と思ふ。だが時々は衰へを感じたのだと思ふ。

夢に周公に逢はないだけでは衰へた說明にもならないと思ふが、緊張さが、少しゆるんだことを感じたのだと思ふ。

孔子が夢で周公とどんな話をしたか聞きたいものである。

「道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ」

孔子の理想か。

「仁に依て藝にあそぶ」

仁によるのは大いにいゝ。だが藝にあそぶのは不必要だ。今時に贅澤だ、誰かそんなことを云ふ人がありさうだ。

仁うちにあれば發しないわけにはゆかない。孔子は窮屈な人間ではなかつたらう。尤も藝は六藝である。

「束修を行ふよりは吾未だ嘗つて誨ふること無くんばあらず」

禮を修めて來たものには必ず誨へないと云ふことはない。禮をおさめないで來たものには誨へないこともあらうと云ふ意

味か。

教へを受けるには禮はありたきものである。他人を利用しやうと思ふ者が多いのは不愉快である。

「憤せざれば啓せず、悱(恰も理解すれども、もう一歩の處がはつきり云へない形)せざれば發せず、一隅をあげて而して之に示し、三隅をもつて反せざれば、則ち復せざるなり」

孔子の教へ方の嚴しさは一寸禪宗に似てゐるやうだ。求めないものには與へない。力が其處までゆかないものには示さない。ぴたりと反應のないものには教へない。機が熟して始めて教へる。其處で兩方の心がぴたりとする。半物知りは出來ないわけだ。

半物知りは實にはがいものだ。

理解が出來ないのは語る方がわるい時もあるが、聞く方がわるい時も多い。相手を見て法を說く、中以上の人でなければ上は語らない。之は親切と云ふべきだ。しかし何かかく人は中以下の人を頭においてかくよりも、中以上の人を頭においてかくことが出來れば、その方がいゝと思ふ。それ以下の人には、又適當な求者が居るものである。たゞ上のものが讀んでよろこべるものが少いのはよくない。上のことが語れる人はさう澤山はゐないものである。

「子喪に有る者の側にて食すれば未だ嘗つて飽かざるや」

「子是の日に於て哭すれば、則ち歌はず」

共に思ひやりのあることを示す。

孔子、顏淵に云ふ。

「之を用ふれば則ち行ひ、之をすつれば則ちかくる。唯我と汝とあるかなと」

出るべき時には出、かくれるべき時にはかくれる。その進退のよろしきは顔回お前と俺だけだね。と顔回と氣のあつた所を示した。出しやばつても役に立たない時に出しやばり、ひつ込んではいけない時に引ん込んだそれが普通の人のよくやる所である。

子路が云つた。

「あなたが三軍をやらば則ち誰と一緒にゆきますか」

子路は自分と一緒にゆくといつてほしかつたのだと思ふ。孔子はそれを知つて何げなく云ふ。

「暴虎馮河、死して悔ひなきものとは一緒にはゆけないね。必ず事にのぞんで懼れ、謀をこのんでその謀りをとげるものと一緒にゆくね」

子路はぎやふんと參つたであらう。

七の二

「富にして求むべくんば執鞭の士と雖も吾も又之をなさん。もし求むべからずんば我が好む所に從はん」

この言葉は相手が大した人ではない時に出た言葉と思ふ。半分冗談らしい所がある。だが本當である。

「子のつゝしむ所は、齊（ものいみ）戰、疾。」

この内に戰が入つてゐるのはうれしい。疾が入つてゐるのは人間らしい。

「子齊にゐまして、韶（舜の樂）を聞くこと三月、肉の味を知らず。曰、はからさりき樂をつくることのこゝに至らんとは」

舜の樂が今のこつてゐたらと思ふ。のこつてゐるかとも、思ふが。孔子は樂については實に深い理解をもつてゐたらしい。再有云ふ。

「夫子は衞の君をたすけたまふだらうか」

子貢云ふ。

「承知した。聞いて來やう」

入つて孔子にきいた。

「伯夷叔齊は何んな人です」

「古の賢人」

「怨んだでしやうか」

「仁を求めて仁を得た、どうして怨まう」

出て來て子貢は云ふ。

「夫子はおたすけにはならない」

子曰く

「疏食を食ひ、水を飲み、肱をまげて之を枕とす、樂もその內にあり、不義にして富且つ貴きは我に於て浮雲の如し」

單純な生活の樂しみ、それを本當に知ることは必要である。樂しみは贅澤な生活にありと思ふのはまちがいである。

食へないのは困る。病氣も困る。だが健全に生る以上の富貴は輕蔑すべきである。

金持ちの子弟達は殊に單純な生活を志ざしありあまる金を兄弟姉妹の生命のために役立てることを考へることが必要

である。人はともかく單純な生活を樂しむことを知ることは必要である。それから今後の人は自分に特別な仕事をもたないものは、勞働する力を養ふことが必要である。

子曰く、

「我に數年を加へ、五十以て易を學ばしめば以て大過なかるべし」

易は天命と人力の關係を明かにした書である。自分は研究したことはないからくわしいことは知らない。しかし孔子の學を好むことはこの言葉でもはつ切りわかると思ふ。

一つぬかす。

「葉公孔子を子路に問ふ。子路答へず。孔子云ふ。汝何ぞ曰はさる。その人となりや憤を發して食を忘れ、樂んで憂を忘れ、老のいたるを知らずと」

孔子の若々しい處が出てゐる。孔子はおちつきはらつてゐる人のやうにも思へるが、內は燃えてゐた。發憤すれば食を忘れ、學びに樂しみを感じて憂を忘れ、年とることも忘れてゐる一人の老人である。

求めてやまざる男

進んでやまざる男

樂しみをその內に見出す男。

孔子は。

孔子は足の早い男ではなかつた。だが一生かゝつて仁者になる道、聖者になる道をうまずに步いた。孔子も道からそむかないことは全然ないとは云へないだらう。時には勇猛心もおとろへ、正しきに進むにものうい時もあつたらう。だ

が彼はすぐ又發奮した。そして永遠に樂しめる時、生られる道を歩いた。彼が他の人の進めない處まで實際にすゝみ得たのは、たへざる努力の結果である。求める力の强さである。このことを孔子は實によく知つてゐる。だから人々に學ぶことをますく奬勵した。そして中途でくたばるものをはがゆかつた。

孔子は又云ふ。

「我は生れながらにして之を知るものにあらず、古を好み、敏にして之を求めたるものなり」

七の三

「怪力亂神は語らず」

怪力亂神は怪力亂神として語つてもいゝと思ふ。しかし知らざるを知らずとせよである。そして怪力亂神は人の心を中庸からはなす傾がある。怪力亂神に興味をもつことは人間を平和にせず、殺伐にする。近頃日本は怪力亂神を語ることがはやつてゐる。いゝ傾向とは云へない。興味が平和からはなれ、日常生活からはなれることはいゝことゝは云へないと思ふ。

「三人行ふときは必ず我が師あり、其の善なる者を擇んで之に從ひ、不善なるものは之をあらたむ」

他人のいゝ處はとり、わるい所は自分の反省材料にする。

孔子はどんな小さいものでも自分の學ぶべきものがあれば學ぶ性質のやうだ。ゲーテにもさう云ふ傾向があると思ふ。

人間はどんな人でも何かの意味で自分よりまさつてゐる所をもつてゐることは事實である。人間は完全ではないが、

その人獨特なものをもつてゐる。經驗においても、見方においても、感じ方においても、知つてゐる點においても。あまり學ばうとしすぎても困るが學ぶことをのみこのんでゐる人間は、必ず他人の內に自分の師を見出すことが出來ると思ふ。孔子は弟子達にいろ〱のものを敎へたであらう。だが同時にいろ〱のものを敎はつたであらう。

次に孔子が桓氏に殺されやうとした時、云つた言葉が出てゐる。桓氏は孔子を殺すのに自分が殺したと思ばれるのがいやで、孔子が大樹の下で弟子達と禮を習つてゐる時、樹をたほして孔子を壓しつぶさうとしたのださうだ。

孔子はその時あはてずに云つた。

「天、德を予に生ぜり、桓魋其れ予をいかんせん」

（天が德を行はすために吾を生んだ。桓魋に何が出來る）

孔子は謙遜してゐる餘裕がなかつた。嵐が吹いて始めて樹の根の深さがわかる。

孔子の自覺、信念がきる彫に生てゐる。この自覺なしに天下を歩いて敎を廣めることは無意味である。この自覺があつて權威が生れる。迷信ではない。孔子がよしその時死んでも、孔子の德は生きたにちがいない。殺されないでも生る。殺されても生る。天意に叶ふものは。

ワイルドの伽噺に十字架にかけられない耶蘇のやうな男がなげく話があるが、思ひつきにすぎない。十字架を恐れすぎることは天意に背く場合があるであらう。だが十字架にかけられなければ眞理を生かすことが出來ないやうな男は、大した男ではない。

七の四

「二三の人は我をもつてかくすとなすか。吾はかくすこと無きのみ、吾は行ふのに二三人と與にせざることなし、之丘なり」

公明正大、とるものはなんでもとれ、自分は他人の生命に役立つものは一つと雖もかくしてゐることはない。之が孔子である。

たゞ理解出來ない人があるだけである。

自然は何にもかくしてゐない。たゞ我等がそれを理解しないだけだ。孔子は人間で自然ではない。禮を守ることもあり、語らないこともある。だが人間に役立つものはすべてかくしてゐない。理解しつくしてくれる人を求めて歩いてゐるのだ。孔子は眞理を賣るためにあるいてゐるのではない。奥儀を賣りつけるものではない。理解しつくしてくれる熱心家を求めて歩いてゐる。かくすと云ふものがあるのは孔子にとつて心外であつたらう。

「孔子は四をもつて教ふ、文行忠信」

よき言葉、よき行ひ、眞實、正直、

孔子又云ふ。

「聖人は自分は見ることが出來ない、君子を見ることが出來ればそれでいゝ。」

「善人は見ることが出來ない、恆あるものを見ることが出來ればそれでいゝ。亡くして有となし、虚にして盈つるとなし、約にして泰となす。難いかな恆あること」

之は本當である。理想的人物は見ることは不可能である。理想を目ざしてゐるものを見れば人間は滿足しなければならない。

恆あるものは眞價通りに生てゐるものである。多くの人は自分はいく分かよく見せたがる。利口さうに見せたり、物きがあるやうに見せたり、貧乏をかくしたり、ありのまゝで生て、そして自己をみがいてゆくものは少ない。

「孔子は釣して綱せず、弋して宿を射らず」

孔子の神經質を語つてゐるが、仁愛の心が魚鳥に及ぶと云ふ程ではない。たゞ同情心がいく分働いてゐることを語つてゐる。

人間以外の動物にたいしても、慘酷な話はいやなものである。弋して宿を射ずと云ふのは、寢鳥をうたないと云ふことである。

「蓋し知らずして之を作るものあらん、我は是れなきなり、多く聞きて其の善き者を擇びて之に從ひ、多く見て之を識るすは、知の次ぎなり」

自分で本當のことを知らないで作るものもあるだらうが、自分はそんなことはしたことはない。他の人のいゝ說に從ひ、又多くいろ〳〵のことをしらべてそれをしるすのは知のつぎである。

本當に自分で知ることが大事である。自分でぴたりと知ることが出來ない時は、いゝ說に從ふが、或はすべての說をしらべて、それを參考にするのがいゝと云ふ意味と思ふ。

「我は之なき也」は責任感の强いことを示し、又權威あることを示す。

互鄕と云ふ評判のわるい處の人が孔子に逢ひに來たのに孔子が逢つたので、弟子達が惑つた。其處で孔子は云つた。

「其の進むをともにし、其の退くをともにせず、唯なんぞ甚しくせん。人己をいさぎよくして進まば、其のいさぎよきをともにする。其往を保たず」

孔子の弟子達は矢張り融通がきかない。孔子を信じ切つてもゐなかつたのか。又信じ切つても、なぜあんな男に逢つたのだと思つたのか。しかし孔子は少しでも役にたつものには役にたちたかつた。いゝ傾向は奨勵し、自分もともにする。わるい方の影響は受けなければいゝ。あんまりやかましく云つて、切角求めて來たものを斷るのは、親切とは云へない。

孔子はいゝ影響はいくらでもとる、惡い影響はすてさへすればいゝ。

黄金をとるものは、他の不用のものと黄金がまぢつてゐやうとも、黄金をすてさりはしない。黄金はとつて他はすてる。

我等の胃腸は自分の血や肉になるものはとつて他はすてゝ顧みない。孔子は自分の生命に役立つものをとつて、他には拘泥しない。弟子達はつまらぬことに拘泥して大事なことをすてゝしまうことを惜まない。それで孔子はとるべきものはとり、すてるべきものをすてることを教へる。そしてこだはつてはならないものにこだはらないことを教へる。

七の五

「仁は遠からんや。我仁を欲すれば、こゝに仁いたる」

この孔子の言葉は美しい言葉と思ふ。論語の内で最もすきな言葉の一つである。

ある時でなければ生きない德は最上の德とは云へないであらう。あらゆる時、いかなる時でも心がけ一つで生かすことの出來る德こそ、美しい德である。人間は異常時のみに生るものではない。日常、平和な生活の内に生るものでなければ、人間生活に最も大事な德とは云へない。

仁はいかなる時でも美しく生き得る德である。たゞそれが生きないのは、我等が、我執にとらはれてゐるからである自分だけが我執にとらはれてゐるからでなく、人間全體が我執にとらはれないと、生きにくいからである。仁は自分の生命を生かす如く他人の生命を生かすことである。他人がつけ上つてくるのを是認する必要はないが、他人の生命を愛し、そのために働くことは出來ないことではない。

他人を物質的に得させる、他人を安價に成功させるそれは仁ではない。黨派根性である。私心である。仁はもつと根本的な處において他人の生命を愛することである。社會の病處を利用するのは仁ではない。

仁者は思ひやりが正確であり、蟲のいゝ所がなく、自分の生命を生かすことが、他の生命を生かすことに邪魔をしない人間である。

自分の欲せざることを人にしない人間である。利害關係で他と協力するのではない。他の生命を本當に生かすために他と協力することである。

仁は遠いものではない、心を淸く、無私にすれば仁は自分の心の内に自づと生ずるものである。我等は心がけ一つで仁者にはなれるのである。

「陳の司敗問ふ。照公は禮を知るか。孔子答へて禮を知れり、孔子しりぞく。巫馬期を揖して、而して之を進めて曰く。吾聞く君子は黨せず、君子も亦黨するか。君吳に娶る、同姓たり、之を吳孟子と云ふ。而して禮を知れば誰か禮を知らざる。巫馬期、以て告ぐ、子曰く丘や幸なり、苟も過ちあれば人必ず之を知ると」

之は孔子がやられた話である。しかしいくやられても孔子はさすがに孔子である。自分の過を知る。そして過ちを知つてよろこぶ喜び方が又孔子らしい。まけ惜みにも一寸とれるが、うそではない。

實際過ちを知つたのをよろこんだのであらう。そして自分の權威をおとさない。
「子人と歌ひて而して善ければ、必ず之をくりかへさしてしかる後に之に和す。」
孔子はものをあいまいにしない。又ものをなほざりにしない。孔子の丁寧なまちがいのない性質がこゝにもうかゞへる。

七の六

「子曰く。聖と仁との如きは吾の敢てよくする所ではない。そも〳〵之をまなびていとはず、人におしへて倦まず、それだけの話しである。公西華曰く、實際それが弟子の學ぶことの出來ない處だ」

前に何度も云つた。まなびていとはず、敎へてうまず、それが孔子である。このことは容易のやうで出來ない。新鮮にものを感じて學んでゆける性質は、餘程微妙な頭の持ち主でないとむづかしい、早やわかりするたち、半わかりで滿足するたちは、學ぶことがなくなりやすい。そんなことはわかつてゐる。實はわかつてはゐないのである。僕なぞもその傾があるので、常に注意をして頭を緻密にするやう骨折りたく思つてゐる。自分の頭を少しづゝでも緻密にしてゆくことは出來ないことゝは思はない。

部分的にこまかくなるのでは面白くない、根本的なことがわかることは實に大事だ。だが微妙なこともわかりたい。

孔子が病んだ。子路が禱りたいと云つた。孔子は「さう云ふ先例があるか」と云つた。「あります。誄に曰く、爾を上下の神祇に禱る」と。
孔子云ふ「丘の禱ること久し」と。

孔子も禱つてはゐる。たゞそれ以上をのぞまない。天命に任せてゐる。天意に叶ふことも常に禱るものには、それ以上の禱りはない。

「子曰く奢なれば不遜。儉なれば固。不遜よりは寧ろ固」

奢りすぎるよりは儉約すぎる方がまだいゝ。不遜になるよりは固陋の方がまだましだ。

同感。

「子曰く、君子は坦にして蕩蕩、小人は長く戚戚」

「君子は心たいらかにして
ほがらかなり。
小人はいつまでも、うぢ〳〵。」

つまらぬことにひつかゝつて自分の心をせまくるしくしてゐるのは賢いとは云へない。

「子、溫にして厲し、威ありて猛からず、恭にして安し」

孔子は、溫かにして嚴肅、威嚴あれども度を越えず、恭にして心安か。他人を主にしての生活ではないからである。天命に自分を任せてゐるからである。

弟子の見た理想的人物の標本そして之れは又嘘ではないと思ふ。

孔子はあたゝかい心の持主だが、人を馴れさせず、狎しやすくは思はさなかつたにちがいない。図々しい人間は近づけなかつたと思ふ。だがおちつきはらつてゐて、擧動は禮儀に叶つてゐた。之れは孔子にとつては自然であつたにちがいない。孔子や老人の忠實な肖像がないのは惜しいことである。

之は余談だが自分はレオナルド・ダ・ヴインチの自畫像と云はれてゐる素描を見ると不思議に老子と云ふ人はあんな人ではなかつたかと思ふ。勿論、事實はまるでちがつてゐたであらうか、感じに何處か共通な所がありさうに思ふ。だが孔子の方は一寸見當がつかない。恐らく最も支那人らしい落ちつきと立派さをもつた男のやうに思ふが、どう云ふ顔をしてゐたかわからない。擧動はいく分想像がつきさうに思ふが、世間にある孔子の肖像で肯つて氣に入つたのを見たことはない。

釋迦や耶蘇についても同じく本當の肖像はつたはつてゐないと思ふが、其處へゆくとソクラテスは胸像がのこつてゐるので、いかにもソクラテスらしい感じがする。あの胸像がなかつたらソクラテスの顔はとても想像がつかないだらうと思ふ。自然は實にその人にぴつたりした顔をつくり出す名人である。人間の想像力は其處へゆくと至極あまく簡單である。

八の一

一つとばさうかと思ふ。

「恭にして禮なければ則ち勞す。
愼にして禮なければ則ち葸（畏懼）す。
勇にして禮なければ則ち亂（亂暴）す。
直にして禮なければ則ち絞（非を責めることきびしすぎる）す。」

こゝで禮は中庸と同じやうな意味にとつていゝかと思ふ。傾りすぎる、偏することのよくないことを說いたものと思

孔子も誇つてはゐる。たゞそれ以上をのぞまない。天命に任せてゐる。天意に叶ふことも常に誇るものには、それ以上の誇りはない。

「子曰く奢なれば不遜。倹なれば固。不遜よりは寧ろ固」

奢りすぎるよりは倹約すぎる方がまだいゝ。不遜になるよりは固陋の方がまだましだ。

同感。

「子曰く、君子は坦にして蕩蕩、小人は長く戚戚」

「君子は心たいらかにして

ほがらかなり。

小人はいつまでも、うぢ／＼。」

つまらぬことにひつかゝつて自分の心をせまくるしくしてゐるのは賢いとは云へない。

「子、温にして厲し、威ありて猛からず、恭にして安し」

孔子は、温かにして厳肅、威厳あれども度を越えず、恭にして心安か。他人を主にしての生活ではないからである。

天命に自分を任せてゐるからである。

弟子の見た理想的人物の標本そして之れは又嘘ではないと思ふ。

孔子はあたゝかい心の持主だが、人を馴れさせず、狎しやすくは思はさなかつたにちがいない。圖々しい人間は近づけなかつたと思ふ。だがおちつきはらつてゐて、挙動は禮儀に叶つてゐた。これは孔子にとつては自然であつたにちがいない。孔子や老人の忠實な肖像がないのは惜しいことである。

之は余談だが自分はレオナルド・ダ・ヴィンチの自畫像と云はれてゐる素描を見ると不思議に老子と云ふ人はあんな人ではなかつたかと思ふ。勿論、事實はまるでちがつてゐたであらうか、感じに何處か共通な所がありさうに思ふ。だが孔子の方は一寸見當がつかない。恐らく最も支那人らしい落ちつきと立派さをもつた男のやうに思ふが、どう云ふ顏をしてゐたかわからない。擧動はいく分想像がつきさうに思ふが、世間にある孔子の肖像で嘗つて氣に入つたのを見たことはない。

釋迦や耶蘇についても同じく本當の肖像はつたはつてゐないと思ふが、其處へゆくとソクラテスは胸像がのこつてゐるので、いかにもソクラテスらしい感じがする。あの胸像がなかつたらソクラテスの顏はとても想像がつかないだらうと思ふ。自然は實にその人にぴつたりした顏をつくり出す名人である。人間の想像力は其處へゆくと至極あまく簡單である。

八の一

一つとばさうかと思ふ。

「恭にして禮なければ則ち勞す。
愼にして禮なければ則ち葸（畏懼）す。
勇にして禮なければ則ち亂（亂暴）す。
直にして禮なければ則ち絞（非を責めることきびしすぎる）す。」

こゝで禮は中庸と同じやうな意味にとつていゝかと思ふ。傾りすぎる、偏することのよくないことを說いたものと思

ふ。そしてこのことは事實である。お弟子根性の强いものは得て過度になりたがる。とまるべき處にとまることが出來ず、ゆきすぎるのは獨立人ではない。

大概の運動は末者になる程ゆきすぎる。そして遂に云つてはならないことを云ひ、してはならないことをして、心ある人に嫌はれる。其處で反動が起り、新しい運動が起る。

風にまきこまれすぎてすべりすぎて得意になつてゐるものはわきで見て耻かしいものである。尤も意氣地のないものに比して惡いとも云へないが、兩方ともいやなことにちがいない。

次ぎは誰の言葉ともかいてない句である。簡野氏は孔子だらうと云つてゐる。僕はあまりその言葉に感心してゐない。ぬかさうかと思つたが、感心しない理由を一寸かくのもいゝと思ふからかくことにする。

「君子親にあつければ則ち民仁に興る、故舊忘れざれば民うすからず」

「上にあるものが親族に篤くすると民が眞似して仁愛の心をおこす、朋友臣僕の舊きよしみを忘れなければ民も輕薄な氣がなくなる」と云ふ意味で至極簡單である。

しかし舊きよしみを忘れないのは美德と云つていゝと思ふが、親族に篤くするといふのはどんなものか。その點平家なぞは理想的だつたやうに思ふが、民の怨を得たにすぎない。又得るのが當然である。どつちにしても大した言葉とは思はない。あと曾子の言葉が出てくるが少し形式的で面白くない。

「曾子疾あり、門弟子を召して曰く、予が足をひらけ、予が手をひらけ、詩に云ふ戰々兢々として深淵に臨む如く、薄氷を履むが如し、而今而後、吾免るゝを知るかな、小子」

曾子が親からさずかつた五體を少しも傷つけなかつたことをといて、門人に教訓したのださうだが、馬鹿な話である。

矢張りお弟子根生の强い奴だと思ふ。つまらぬことで自分の身體をきづつけたり、不名譽な病氣をしたりして自分の身體を傷つけるのは不名譽であらうが、足をひらかしたり、手をひらかしたりして、無傷を見せるのは愚である。肉體をあまり大事にしすぎるのは自慢の出來ない時もあるものだ。それは最上の德ではない。人生にはもつと大事なことがいくらでもあるはずだ。曾子もそれを知つてはゐた。しかしこゝではそれを忘れてゐる。氣輕に自慢したのなら滑稽な可愛いゝ處がある。

「曾子疾ひあり、孟敬子之を問ふ。曾子言ひて曰く。鳥の將に死せんとするや、其の鳴くや哀し、人の將に死せんとするや、その言ふや善し。君子道に貴ぶ所の者三。容貌を動かして、こゝに暴慢に遠ざかり、顏色を正しくして、斯に信に近づき、辭氣を出して、斯に鄙倍(倍は理に背く意)に遠ざかる。籩豆(祭祀の器)の事は、則ち有司存せり」

曾子は人間は眞面目で善良だつたやうに思ふが、云ふ處で見ると形式的な努力家である。道を志すことは熱心であるが、内からあふれてゐる所が少ない。

この言葉も、死にのぞんで云はれた言葉として尊敬していゝと思ふ。だが人君の教へではあらうが、容貌、顏色、辭氣、皆外面的な言葉である。外から内をなほす式である。相手が相手なのでかう云ふ言葉をつかつたのかと思ふが、曾子らしい所があると思ふ。この相手にこの言葉ありとして見ればこの言葉も生てくるかと思ふが、相手が少しわるい。

しかし今の大臣などにはあてはまる言葉かと思ふ。

あと有名な句もあるが、曾子の言葉はぬかすことにする。

孔子の言葉はさすがに大きく、考へて、餘韻があり、言葉の根が深かく、沈默してゐる處に孔子の心の動きが感じられて氣持がいゝ。

弟子だから馬鹿にすると云ふのではない、弟子だつて師にまさる弟子はいくらでもあり得る。しかし曾子や、有子程度では考へるのが馬鹿氣てくる。あまりきまり文句であるが、あまりに教義にとらはれすぎてゐる。

「詩に興り、禮に立ち、樂に成る」

内からあふれる力に支配されておこり、禮によつて立ち、樂でみがきをかけ大成すると云ふ意味か。

詩は内心の聲である。禮はそれを調整する。音樂はそれを樂しむ。樂は自由な形である。しかも則を越えない形である。

孔子の理想は本能的生活ではない。同時に本能否定の生活ではない。欲するまゝを行つて則を越えない域である。末者は窮屈であらうが孔子は自由である。禮に叶つても禮にとらはれてはゐない。道德は更に生るためにするので、消極専門なものではない。

「民は之を由らしむべし、之を知らしむべからず」

之は人類全體が孔子時代より進歩して來た今の時代では少し通用しない言葉である。しかし之は民は無知の人が多くつて知らすことが出來ないが、しかしそれでも安らかに生活が出來るやうにすることは出來ると云ふ意味にとるとすれば、さう否定する必要はない。しかし民に本當のことを知らしてはいけないと云ふ意味にとつて實行しやうとするものがあれば時代を知らないものである。しかし今時、そんな人はない。しかし民にかぎらない。今時の誰が、人間はどう生ればいゝかを知つてゐるものがあるか。知つてそれを實行してゐるものがあるか。

「勇を好んで貧をにくむものは亂するなり。人にして不仁なるをにくむこと甚だしきものは亂するなり」

之は本當である。しかし亂するのを恐れすぎるものは兄弟姉妹の生命を愛するものと云へないこともあり得る。

近頃の人は貧をにくみすぎ亂を好むものが多くなる傾向があるが、之は當然なことでもある。富めるものが兄弟姉妹

の生命を無視しすぎる時、亂の起らないと云ふことはむづかしい。殊に今の世では、すべてが獨立人になる資格を得た時代には。

孔子は富者の味方をしてゐるものでない。孔子が亂の味方をしないのは當然である。孔子が今の時代に生たら、孔子は社會運動に加はるであらうが、亂を好むものにはならなかつたらう。だが同時に亂を恐れすぎるものにもならなかつたらう。そして兩方の調和の仕方を研究したであらう。

「周。公の才之美あるも、驕にして且つ吝ならば、その餘は觀るに足らざる也」

富者にして驕にして吝、そして不仁ならば孔子はなんと云ふか。

「三年學びて、穀に至らざるは得やすからざるのみ」

(三年學んで俸給を求めないものは見つけることがむづかしい)

「篤く信じて學を好み死を守りて道を善くす。」

之が出來れば尊敬すべき人である。必ず萬人のより所となる人であらう。死に至るまで信じる道をこつ〳〵歩く人。死をすら恐れずにまちがいのない正しい道を歩いてゆく人。その人は權威ある人である。

しかし孔子は犬死はよろこばなかつた。

「危邦に入らず、亂邦には居らず、天下道有ればあらはれ、道なければかくる」

いかにも支那人らしい所がある。道なければます〳〵あらはれる、それは理想家の云ひさうなことだが、首を切られては勉强が出來ない。それは冗談だが、道がどうしても行はれない世界に入るのは無意味である。少くも支那人の孔子はさう思つてゐた。天下は廣い。

「邦道あるに貧且つ賤なるは恥なり、邦道無きに富み且つ貴きは恥なり」

今の日本で富者たるは少くも恥である。恥を得意にしてゐるものは寄生蟲におだてられてゐるからである。

富者が自ら富を恥じて、それをもつて兄弟姉妹の生命に役立つことにつかふことが平和によき世界をこさせる最善の方法である。

富者が富に執着し、傲り、金で買つてはならないものを買つて、他人の生命を愛することを知らないことは　凡夫の心として同情すべき所があるが、恐ろしい時代を來させる。

人間は生きられる間はいゝが　生られなくなると生るためには何をするかわからぬものである。又本當に生るためなら凡夫同志は何をしてもいゝわけである。

今の世でも怠惰と、圖々しさと、他人の信用をうら切ることゝ、蟲のよさで貧乏してゐることは少くも自慢にすべき事ではないが　大體うか云つて今の世では貧しきよりは富む事が耻である。

すべての人が富む時代がくることを自分は望むものである。

八の二

又二つとばす。

「狂にして直ならず、侗にして愿ならず、悾悾として信ならずんば、吾之を知らず」

珍文漢文である。

「遠大の志をもつ常度に拘らざる狂者にして、正直でないもの、無知にして律義でないもの、無能にして信實ならざるもの、どうしていゝか私も知らない」

から聞けば尤である。少し尤もすぎる。

奥の細道の跡を尋て

荻原井泉水

鶴岡と酒田

此日も暑い日だつた。私達の自動車が故障をおこして、埃つぽい道の上に動かなくなると、青田を背にして點々とある百姓家から、子供達が出て來て、自動車のまはりへベツタリと集つた。死んだかぶとむしへ蟻が取付いたやうに——其かぶとむしに息を吹返さして、白けた土のカン〳〵と照る田川街道を走つて、家並の瓦屋根がジリ〳〵と燒付くやうな鶴岡の町にはいつた。宿は、三日前の晩に泊つた時と同じに、奥まつた、風通しの惡い室だつた。かの晩は遲く着いて、翌る朝、うす暗いうちに月山（羽黒）を指して立つたので、鶴岡といふ町をはつきりと覩たのは、此日がはじめてゞあつた。芭蕉の「奥の細道」に——

羽黒を立て、鶴か岡の城下、長山氏重行といふものゝふの家にむかへられて俳諧一巻あり、左吉も倶に送りぬ

とある。其一巻といふのは、

めづらしや山を出羽の初茄子　　芭蕉
蟬に車の音添ふる井戸　　重行
絹機の暮いそがしう梭打て　　曾良

うるふ彌生のすゑの三日月　　　　呂丸

（以下略）

芭蕉が先づ「めづらしや――と感歎した此地の名物の茄子を、私達も亦　豊の膳の上で賞味することが出來た。それは小さくて（大きくはならないのださうな）、皮が薄くて光澤があり、蔬菜といふより果實といふ風な感じにも味はれるが、――古來、之を賞するのは自然に時期が早く熟するからで、此の羽前の寒い土地でありながら、新暦六月の半ばには市に出る。鶴岡の南方約一里、金峰山の麓、民田（みんで）といふ所から産するので、みんで茄子と稱するといふ事である。「蟬に車の音添ふる井戸」といふ重行の脇句は、多分其時の即景であらう。當時の鶴岡は城下ではあるが、そんな風に鄙びた感じで、其歌仙を卷いた日も此日のやうに蟬がズイ／＼と鳴く暑い日だつたと見える。「絹機の暮いそがしう梭打て」といふ曾良の第三句も、多分寫生の作であらうと私は思ふ。爰は昔から、羽二重など絹物の産地なのであるから――。重行は酒井侯の家臣でかなり重い地位にあつたらしく、芭蕉の文にも敬語を用ひてある。姓名は長山五郎左衞門、重行は諱で、號は竹童である。同じ藩士で岸本八郎兵衞、號を公羽（こうう）といふ人が、重行のすぐ隣に住んでゐて、俳諧の上の交が深く、此歌仙の第四句を付けてゐる左吉（さきち）事、羽黒の圖司呂丸（づしろぐわん）なども力を協せて、此地に蕉風をひろめたものであるらしい。さうした古人の話を、私の宿へ訪ねて來てくれた爰の俳人達から聞いた。それから、常念寺といふ寺に句會の筵が設けてあるといふので、私は出掛けて行つて、呂丸が深川の芭蕉庵を訪ふた時貰つて來たといふ『三日月日記』の草稿といふものを見せて貰つた。

私達が鶴岡を去つたのは、暑い夕日がまだしうねくベタ／＼としてゐる頃だつた。私は少しも早く、海の風の涼しさうに思はれる酒田へ行きたかつた。而して、「奥の細道」にある

暑き日を海に入れたり最上川　　芭蕉

及び

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　　同

といふ句の趣を味ひたかつた。芭蕉は「川舟に乗て酒田の湊に下る」と書いてゐる。鶴岡の城外を流れる赤川に棹させば、最上川の川口まで約五里、そこに酒田の町はある。私達は同じ方向へ、汽車を藉りて、酒田の驛に降りた。こゝの街は板葺の屋根に石を載せてある家が表通りにも並んでゐて、鶴岡よりも昔の面影を多く殘してゐるやうだつた。私達は宿を定めて、旅鞄の中から手帖だけを出して懐に入れたまゝ、すぐ海邊を指した。渚まではかなり遠く、そこまでは行かなかつたが、日和山と云うて、海の景色を、山と川とも併せて大觀し得る佳い岡があつた。

けふ一日の暑熱を放射してゐた太陽は、燃え落ちる際の線香花火のやうな、眞赤な球となつて、海にはいるまでにまだ少しの暇がある所だつた。弧をなした水平線を涯として見渡される海には、船としては唯一艘の小さな發動機船が行くばかりで、其姿が隱れたり出たりするので、浪の立つてゐる事が知られた。夕日の色に染まつてゐる雲が海の水に映らないのも其爲であらう。最上川は如何にも大きく淀やかに海にそそいでゐる、其川口の廣々とした平らかさは、漣さへも立たぬらしく、其水の面はかんがりと夕雲の赤さをひたしてゐた。三日前に、私達が此川の上流を舟で下つた時も、その洋々とした大きさを感じないではなかつたが、寧ろ、迂餘曲折したる長さといふ事を感じてゐた。その生の長さが爰に大團圓を得て、終局的の落付いた靜かさを得てゐるといふ感じだつた。川は東の方から流れて來て、今、西に落ちる太陽へ、眞向にそゝぎかけてゐる。川の中には、かなり大きな洲が横はつて、象棋の駒のやうな小舍が置いてある。時報を知らせる高い竿が立つて、赤い大きな球がふら〳〵してゐる。

うるふ彌生のすゑの三日月　　呂丸

（以下略）

芭蕉が先づ「めづらしや」と感歎した此地の名物の茄子を、私達も亦其の膳の上で賞味することが出來た。それは小さくて（大きくはならないのださうな）、皮が薄くて光澤があり、蔬菜といふより果實といふ風な感じにも味はれるが、一古來、之を賞するのは自然に時期が早く熟するからで、此の羽前の寒い土地でありながら、新暦六月の半ばには市に出る。鶴岡の南方約一里、金峰山の麓、民田（みんで）といふ所から產するので、みんで茄子と稱するといふ事である。「蟬に車の音添ふる井戸」といふ重行の脇句は、多分其時の即景であらう。當時の鶴岡は城下ではあるが、そんな風に鄙びた感じで、其歌仙を卷いた日も此日のやうに蟬がズイ／＼と鳴く暑い日だつたと見える。「絹機の暮いそがしう梭打て」といふ曾良の第三句も、多分寫生の作であらうと私は思ふ。爰は昔から、羽二重など絹物の產地なのであるから――。重行は酒井侯の家臣でかなり重い地位にあつたらしく、芭蕉の文にも敬語を用ひてある。姓名は長山五郎左衞門、重行は諱で、號は竹童である。同じ藩士で岸本八郎兵衞、號を公羽（こうう）といふ人が、重行のすぐ隣に住んでゐて、俳諧の上の交が深く、此歌仙の第四句を付けてゐる左吉事、羽黑の圖司呂丸などとも力を協せて、此地に蕉風をひろめたものであるらしい。さうした古人の話を、私の宿へ訪ねて來てくれた爰の俳人達から聞いた。それから、常念寺といふ寺に句會の筵が設けてあるといふので、私は出掛けて行つて、呂丸が深川の芭蕉庵を訪ふた時貰つて來たといふ『三日月日記』の草稿といふものを見せて貰つた。

私達が鶴岡を去つたのは、暑い夕日がまだしうねくベタ／＼としてゐる頃だつた。私は少しも早く、海の風の涼しさうに思はれる酒田へ行きたかつた。而して「奥の細道」にある

暑き日を海に入れたり最上川　　芭蕉

及び

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　　同

といふ句の趣を味ひたかつた。芭蕉は「川舟に乗て酒田の湊に下る」と書いてゐる。鶴岡の城外を流れる赤川に棹させば、最上川の川口まで約五里、そこに酒田の町はある。私達は同じ方向へ、汽車を藉りて、酒田の驛に降りた。こゝの街は板葺の屋根に石を載せてある家が表通りにも並んでゐて、鶴岡よりも昔の面影を多く殘してゐるやうだつた。私達は宿を定めて、旅鞄の中から手帖だけを出して懐に入れたまゝ、すぐ海邊を指した。渚まではかなり遠く、そこまでは行かなかつたが、日和山と云うて、海の景色を、山と川とも併せて大觀し得る佳い岡があつた。

けふ一日の暑熱を放射してゐた太陽は、燃え落ちる際の線香花火のやうな、眞赤な球となつて、海にはいるまでにまだ少しの暇がある所だつた。弧をなした水平線を涯として見渡される海には、船としては唯一艘の小さな發動機船が行くばかりで、其姿が隠れたり出たりするので、浪の立つてゐる事が知られた。夕日の色に染まつてゐる雲が海の水に映らないのも其爲であらう。最上川は如何にも大きく淺やかに海にそそいでゐる、其川口の廣々とした平らかさは、漣さへも立たぬらしく、其水の面はかんがりと夕雲の赤さをひたしてゐた。三日前に、私達が此川の上流を舟で下つた時も、その洋々とした大きさを感じないではなかつたが、寧ろ、迂餘曲折したる長さといふ事を感じてゐた。その生の長さが爰に大團圓を得て、終局的の落付いた靜かさを得てゐるといふ感じだつた。川は東の方から流れて來て、今、西に落ちる太陽へ、眞向にそゝぎかけてゐる。川の中には、かなり大きな洲が横はつて、象棋の駒のやうな小舍が置いてある。時報を知らせる高い竿が立つて、赤い大きな球がふら〳〵してゐる。

暑き日を海に入れたり最上川

私は此句をじつと味つて、芭蕉の氣持は好く解るやうに思つた。「暑き日」は暑熱の一日である。時其もの丶姿の如く絶えず流れてゐる川、いや時の上にある凡ての物を押流してゐる最上川、それが一體一味なる大海に融込んで、永劫無窮なる實相に合する、かういふ風に文字を以て説明すれば、稍理窟めく弊があるけれども、「海に入れたり」といふ言葉には作者の強い主觀が現れてゐる、「暑き日」と云ひ出してゐながら、却て、其を脱却し放下し盡した後のからりとしたる涼しさが味はれる。それは、此時、此處に立つた私自身の感じを以て、原句の解に強ふるのではない。原句のリズムに其が浮き出てゐるのだと思つた。

此日和山といふのは、公園になつてゐて、松の林の中に、散歩道が出來てをり、合歡の花が咲き、薄が風に吹かれてゐた。

『温海山や
　吹うらかけてゆふ涼　　芭蕉
　　　　　　　　柳下園連中』

此句碑もあつた。その「温海山」といひ、「吹浦」といふのはどの邊かと、そこのベンチに子供を連れて涼を納れてゐる老人に私は尋ねた。川口から左手は松が生え續いてゐて、其を越えて遠く、海岸線の延長が縦に見通される中に、むつくりとした一つの山が仄かに指さされる、それが温海山だつた。川口から右手には、長い渚が伸びてゐる末が、之も松山を以て劃られてゐる、吹浦は其陰になつて見えないといふ。私は地圖を出して見た。温海山は爰から南方へ約十里、吹浦は北方へ約五里の離れた所にある。爰に立つての作とすれば、南から北へ首をまはして、餘りにも遠く離れた所を一つに掛け合はした點に不自然さがある。尤も、一書に「袖の浦江上の納涼」とあるが、袖の浦は酒田の南手の海邊

有島武郎遺著

篋底より涙ぐましい
外國より父母、弟妹
への通信、病妻通信
約七百枚の發見

◇全篇悉くこれ情愛濃かな武郎氏の通信で
の通信で斷腸の思ひがするものが多い。

する人は必讀するを要す。

暑き日を海に入れたり最上川

私は此句をじつと味つて、芭蕉の氣持は好く解るやうに思つた。「暑き日」は暑熱の一日である。時其ものゝ姿の如く絶えず流れてゐる川、いや時の上にある凡ての物を押流してゐる最上川、それが一體一味なる大海に融込んで、永劫無窮なる實相に合する、かういふ風に文字を以て説明すれば、稍理窟めく弊があるけれども、「海に入れたり」といふ言葉には作者の強い主觀が現れてゐる、「暑き日」と云ひ出してゐながら、却て、其を脱却し放下し盡した後のからりとしたる涼しさが味はれる。それは、此時、此處に立つた私自身の感じを以て、原句の解に強ふるのではない。原句のリズムに其が浮き出てゐるのだと思つた。

此日和山といふのは、公園になつてゐて、松の林の中に、散歩道が出來てをり、合歡の花が咲き、海が風に吹かれてゐた。

『温海山や　　　芭蕉
吹うらかけてゆふ凉　　柳下園連中』

此句碑もあつた。その「温海山」といひ、「吹浦」といふのはどの邊かと、そこのベンチに子供を連れて涼を納れてゐる老人に私は尋ねた。川口から左手は松が生え續いてゐて、其を越えて遠く、海岸線の延長が縱に見通される中に、むつくりとした一つの山が仄かに指される、それが温海山だつた。川口から右手には、長い渚が伸びてゐる末が、之も松山を以て劃られてゐる、吹浦は其陰になつて見えないといふ。私は地圖を出して見た。温海山は爰から南方へ約十里、吹浦は北方へ約五里の離れた所にある。爰に立つての作とすれば、南から北へ首をまはして、餘りにも遠く離れた所を一つに掛け合はした點に不自然さがある。尤も、一書に「袖の浦江上の納涼」とあるが、袖の浦は酒田の南手の海邊

する人は必讀するを要す。

有島武郎遺著

篋底より涙ぐましい
外國より父母、弟妹
への通信、病妻通信
約七百枚の發見

◇全篇悉くこれ情愛濃かな武郎氏の通信で

の通信で斷腸の思ひがするものが多い。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、そこの海上に舟を泛べての眺めとすれば——温海山や吹浦かけて、といふ景觀が一眸的の印象として、うなづかれぬ事はない。それにしても、「温海山」の「あつい」を「吹浦」の「吹く」と言葉の上で掛け合はした興味も混じてはゐないだらうか、之は以前から此句に對する一疑問なのだが、矢張り其がきれいに氷解されるには至らなかつた。

いつしか、太陽は水平線の下に落ちて、木も草も蘇つた喜ばしさのやうに其葉を動かしはじめ、涼しい風が遙かな遙かな川上の方からたぎり流れて來るやうであつた。川岸には、汽船會社と見えて旗をヒラヒラさしてゐる家、松の枝のはづれに汽船のマストが突尖を見せ、又、筏に組んだ材木を浮べて、板屋根に石を載せた家があり、それらの家にも、涼しい灯が來てゐた。ギヨツギヨツ〳〵〳〵、雨蛙が濃青い茂みで鳴いてゐた。（八月二十二日）

象潟の今昔

昔と今と、その地勢の變化、土地の盛衰の著しい事を感じさせる所は、旅をする者には珍しくない位だが、此の象潟ほどに變りはてた所は稀であらう。芭蕉の頃にあつては、奥羽の名勝として、松島象潟と相對的に呼ばれてゐた。既に、松島の勝を探ねて來た芭蕉は、更に一段の期待をもつて、象潟に向て杖を曳いた事と思はれる。酒田で、芭蕉を宿したのは淵庵不玉、即ち伊東季順といふ醫師だつた。其人は本町二丁目（通稱、下の山）といふ所に開業してゐたとの事。又、「六月十五日、寺島彦助亭にて」と端書をした連句も殘つてゐるから、芭蕉が酒田を立つたのは土用の最中の暑い盛りだつたのである。

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責め、酒田の湊より東北の方山を越え、礒を傳ひ、いさごを踏みて、其際十里、日影やゝかたふく頃、汐風眞砂を吹上げ、雨もうろうとして鳥海の山かくる、闇中に模索して雨も

へ

八月一日發賣

◇秋の自然が好きであつた君は米國でも、死ぬ時でも秋に對しては常人の思ひ及ばぬ憧憬を有つていた。

◇この書で一番考へさせるのは氏が肉親へ對して、常人の想像だに及ばぬいろいろの愛執の結果、繪畫となり、文章となり、書翰となつたものが皆涙ににじむものであることだ。

定價貳圓八拾錢　送料廿一錢

改造社

で、そこの海上に舟を泛べての眺めとすれば——温海山や吹浦かけて、といふ景観が一畔的の印象として、うなづかれぬ事はない。それにしても、「温海山」の「あつい」を「吹浦」の「吹く」と言葉の上で掛け合はした興味も混じてはゐないだらうか、之は以前から此句に對する一疑問なのだが、矢張り其がきれいに氷解されるには至らなかつた。

いつしか、太陽は水平線の下に落ちて、木も草も蘇つた喜ばしさのやうに其葉を動かしはじめ、涼しい風が遙かな遙かな川上の方からたぎり流れて來るやうであつた。川岸には、汽船會社と見えて旗をヒラヒラさしてゐる家、松の枝のはづれに汽船のマストが突尖を見せ、又、筏に組んだ材木を浮べて、板屋根に石を載せた家があり、それらの家にも、涼しい灯が來てゐた。ギヨツギヨツ〳〵〳〵、雨蛙が濃青い茂みで鳴いてゐた。（八月二十二日）

象潟の今昔

昔と今と、その地勢の變化、土地の盛衰の著しい事を感じさせる所は、旅をする者には珍しくない位だが、此の象潟ほどに變りはてた所は稀であらう。芭蕉の頃にあつては、奥羽の名勝として、松島象潟と相對的に呼ばれてゐた。既に、松島の勝を探ねて來た芭蕉は、更に一段の期待をもつて、象潟に向て杖を曳いた事と思はれる。酒田で、芭蕉を宿したのは淵庵不玉、即ち伊東季順といふ醫師だつた。其人は本町二丁目（通稱、下の山）といふ所に開業してゐたとの事。又、「六月十五日、寺島彦助亭にて」と端書をした連句も殘つてゐるから、芭蕉が酒田を立つたのは土用の最中の暑い盛りだつたのである。

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責め、酒田の湊より東北の方山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、其際十里、日影やゝかたふく頃、汐風眞砂を吹上げ、雨もうろうとして鳥海の山かくる、闇中に模索して雨も

又奇なりとせば、雨後の晴色又たのもしと、蜑の苫屋に膝をいれて、雨の晴るゝを待つ「奥の細道」の文勢にも、その風景にあこがるゝ興奮があふれてゐる。その道は、秋田街道で、砂丘がしぜんと山をなして海を隔てゝゐる山裾を越えて、吹浦に出てから、更に鳥海山の裾の海と接する浪打際を行くのである。橘南谿の紀行には「出羽の國酒田を朝とく起出で、吹浦と云ふ里を心ざしてゆく、其間六里にして、路傍に人家なく、又田畑も見えず。……過くる所渺々たる沙場なれば道路もさだかならず、此邊の人だに迷ふゆゑにや、其間三五十間程づゝに、杙を建て道の目印（めじるし）とせり、酒田より一二里も來ぬらんと思ふ頃より、北風強く吹起り……次第に風つのりて沙を吹き起すにぞ、天地も眞黑になり、目當の杙の見えざるのみか、我後に從ひ來る養軒さへ見えわかねば、互に聲を合せ手を携へて行程に……」と書いてある。私達は今の世に産れた幸と云はうか、酒田を立つて僅かに一時間餘りにして、象潟驛に降りたのである。

驛を出てから直ぐ、此地の同人、辰郎、翠果其他の諸君に案内されながら、今の象潟町（もとの汐越村）の町並を通つて、右手へ汽車の線路を踏切ると、青田がずつと續いてをり、其中に處々、小さな丘をなして、ちよび／＼と木立がある――し「此大きなのが稲荷島で、昔は爰に橋があつて渡り、此島から舟を乘り出し、次の能因島、そのさきの辨天島と、順々に漕ぎ巡つたものです」と案内する人は説明してくれる。其頃は此邊が一面に海潮を湛へてゐて、點々とした小島の影をひたし、九十九島八十八潟と稱する景色が松島に似通うてゐたのだつたが、文化元年の震災の爲に海底が隆起し、水は涸れて、美田が出來た代りに、好景は失はれてしまつたのである。今から二十年程以前、洪水があつて、田が悉く水に蔽はれてしまつた時、島といふ名のみを殘した數多くの丘が、もとのまゝの島と現じて、昔の象潟はさぞ斯様な景色であらうかと想はせたといふ話も聞く。これで私達は、この昔は海であつた所の青田の中の細い路に、下駄をコト

〳〵とさせ、扇をハタ〳〵使ひながら歩いた。さすがに水地で、水の瀦(たま)つてゐる所には青蘆が茂つてゐる。小川の流にはみづあふひが咲いてゐる。裸の子供が雜魚をすくつてゐる。木槿の花が暑さうに咲いてゐる。所謂、島々の名の悉くは案內の諸君も覺えてはゐないらしい。其「島々」の間を歩いて、私達は兎も角——

其朝、天能く霽れて、朝日はなやかにさし出る程に、象潟に舟をうかぶ、先づ能因島に舟を寄せて三年幽居の跡を訪ひ、むかふの岸に舟をあがれば……

と芭蕉が書いてゐる、向ふの岸を、いつの間にか踏んでゐた。そこに古い寺があるのだつた。『蚶滿珠禪寺』と達筆に標してある。本堂は荒塗の壁と、べにがらを刷いた柱と、古風な感じであるが、外緣に立廻した硝子戶と、新しく葺換へた瓦屋根とが其に不調和にも見えた。聞けば二三年前までは茅葺だつたとの事である。

花のうへ漕ぐとよまれし櫻の老木、西行法師の紀念(かたみ)を殘す

其老木の櫻といふのは、岸から水の上へ、七八間も橫に這ひ、幹のまはり一抱へもあつたもので、潮が滿つる時は其上に浪がかゝつた。西行の歌は「きさがたの櫻は浪にうづもれて花の上漕ぐあまの釣り舟」といふのである、今は枯れて、後繼たる若木の櫻が植ゑてあるが、昔の面影は全く無く、その上どうした事か、其櫻に祈ると緣結びになるとやらで、小枝小枝に紙きれが、むさくるしい程に結びつけてあつた。

江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ、寺を干滿珠寺といふ、此處に行幸ありし事いまだ聞かず、いかなる事にや

と芭蕉は疑つてゐる。本堂から、稍離れて神功皇后御袖掛の松といふものがある。皇后三韓征伐の御歸途、敦賀より難風の爲に吹送られ、此浦に上つて、潮に濡れた御袖を干されたといふ傳說はあるのだが、傳說に過ぎず、御陵といふも

のは古より無い。芭蕉は何かを思ひ違ひしたか、聞き違ひしたのであらう。私達は、此寺に傳へるといふ芭蕉の眞蹟を見る爲に庫裡に案内を乞うた。方丈に通してくれた。その方丈である、芭蕉が書いてゐるのは——

此寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天を支へ、其影うつりて江にあり、西はむやむやの關路を限り、東に堤を築いて秋田に通ふ道はるかに、海北にかまへて、浪打入る處を汐越しといふ、江の縱横一里ばかり、俤松島に通ひて又異なり、松島は笑ふがごとく、象潟はうらむが如し、さびしさに悲しびを加へて、地勢魂を惱ますに似たり

象潟や雨に西施が合歡の花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

その方丈から——その邊一帶が海であつた頃には——江上の眺望を擅まにすることが出來たに違ひない。然し、今は見渡さるゝものは青田ばかりで、電柱がニョキ〳〵と立ち列り、蜻蛉が日のいきれに羽を光らしてゐる。是では、其の芭蕉の心持を幻想にも思ひ浮べる事はむづかしいのである。たゞ、鳥海山だけは、出羽富士とも呼ばれる通り、富士山を思はせるなだらかな斜線を引いて、どつしりと。鮮かな姿を据ゑてゐるのであつた。其姿の影が水に映らないのは遺憾であるが——。

私達は、それから、昔の潟口なる汐越といふ方へ行つて見た。其頃の象潟の潟は、袋のやうに内は廣いけれども、潟のさし入る口は至て狹く又淺く、「汐越や鶴脛ぬれて汐すゞし」といふ句も即景であつたらしい。今は、其口が川になり、長さ十間ばかりの石橋が架つてをり、水には美しい髮の毛のやうな藻がゆらいでゐた。橋の畔りには好く茂つた柳があり、又合歡の木があつた。一體、此の地には合歡の木が多い。土地の者は之を伐つて新とするといふ。「象潟や雨に

西施が合歡の花」の句の成つた其頃も、此の邊に其の花が咲き盛つてゐたものと思はれる。そこから海が見えた。今でも海から風の強く吹く折には、此の橋の下まで、浪が打越して來ると云ふ話。又、芭蕉が泊つたのは、金又左衛門といふ家だつたといふ話。そんな話を聞きながら、再び町の家並の中に出て、或る旗亭へ連れられた。そこで此地の俳人達が私を待つてゐた。

其の二階は、青い大きな海にひつたりと接して居た。私に、も少し暇があれば、小舟を出して釣魚の興を添へたい、殊に飛島近くまで漕出せば、小鯛が澤山に漁れるといふ事を、人々は此土地の強い訛のある樸訥な言葉で話した。其飛島といふのは、海上四五里の所に見える青螺のやうに美しい島だつた。而して海は疊のやうに凪ぎきつてゐたので、その浪の上に釣り糸を垂るゝ事は成程面白さうではあるが、翌る日の約束もあるので止むをえなかつた。然し、私は膳の上にはこばれた美しい其鯛の作り身を味ひ、而して

小鯛さす柳すゞしや海士が軒　芭蕉

の趣を心に描いてゐた。此句は「細道」には無いが、「雪丸げ」に「西濱」といふ端書を以て載つてゐる。西濱とは、象潟の瀬内と外海とを隔つ地峡の西側の濱、即ち外濱を指す昔の地名で、つまり私達が盃をあげてゐる此邊なのである。

其日の晩、私は越後の國に入つて、瀬波の温泉に居た。再び汽車にて、酒田を過ぎ、鼠が關を過ぎて――「酒田の名殘日を重ねて北陸道の雲に望む、遙々の思ひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞く、鼠が關を越ゆれば越後の國に歩行を改めて……」といふ其あたりは、汽車が海邊に沿うて走るのだが、隧道を出ると小さな入江があり、二三軒の家があり、又隧道を出ると青田があり渚があるといふ風だつた。温海驛で乗客は大分降りた。名高い温泉場で、前の日、最上川の川口から眺めた温海山はこゝの直ぐ後ろなのである。鼠が關には停車場が出來てゐる。辨天島と海水浴場

の旗が車窓から見えた。出羽と越後との國境で、昔、白河の關と共に奥羽の二大關門と云はれた關所の跡は、踏切近くだといふ事である。（八月二十三日）

國上

瀬波の宿の夜は、ぼうばくとして暗い彼方から吹いて來る海風を感じながら、蛙の聲と浪の音とに、落付いて眠る事が出來た。朝はまだ日の出ぬうちの露を踏んで、四五町さきにある濱邊をあるき、數丈の高さに噴上げる温泉を見て來たりした。

燕町に來て、此地の舊友、久保田氏に逢ひ、叉まで出て來てくれた東蒲原の同人諸君にも初めて會つて、みんなで國上へ行つた。

弘法大師　越後　二十一ケ所　二十番靈場　國上寺

此石標の立つてゐる所から、すぐに山道にかゝる。老いた松が蔭を作り、その落ちた葉も美しく、荒れてはゐるけれども閑かな滑らかな道に、時折り老鶯が鳴いてゐた。四五丁を登つて、本堂に達した時、私達はびつしより汗になつて、其を拭ふ爲に御手洗の冷たい清水がありがたかつた。良寛の遺蹟、五合庵といふのは、そこから又、裏手の山路を一二丁下りた處にあるのだつた。

たくほどは風がもてくる落葉かな

此新しい句碑を立てゝ、其庵といふのも舊いものではなく、又、庵といふよりも堂といふ感じであつた。多分、記念

堂の意味で近年に建てたものであらう。六疊の一間の正面に佛壇を作り、和尚の木像が祀つてある。柱には、誰が寄進したものか、手毬が糸でつるしてある。いふまでもなく、良寛は子供等と手毬をつく事を好んだといふからである。庵のほとりには梅が一株

このごろの二日二日にわが宿の軒端の梅もいろづきにけり

の其梅を思はせる。又、杉の木が數本、それは前の谷にも林立してゐるが

わが宿はこしの奥山こひしくばたづねて來ませ杉の下みち

の其杉を思はせる。其庵のある位置は山の頂でなく、さりとて山の裾でなく、宛も山の懐といふ感じの所である事や、又、其地積が廣過ぎもせず、さりとて狭過ぎもせず、丁度一つの庵を置くだけに出來てゐるやうな所である事や、又、其麓の人里との隔たりが遠過ぎもせず、さりとて近過ぎもせず、丁度隠れ栖みつゝ人に交るのに好いやうな所である事や、それらの凡てが、此五合庵と、近江國分山に於ける芭蕉の幻住庵との類似を考へさせる。

先づ頼む椎の木もあり夏木立

と、芭蕉は幻住庵に入るなり、そこの木立に限りなき親愛の情を寄せてゐる。松の棚作り、藁の圓座を敷て、猿の腰掛と名けたといふ事も「幻住庵記」にある。山居をなす者が、そこの木や草を人間と同じやうな生命あるものと見、又は其を直接に自分の生活に取入れてしまふといふ氣持は、甚だ自然のものであらう。鳴く蟲などに對する氣持も亦――

しきたへの枕去らずてきりぎりす夜もすがらなく枕去らずて

此良寛の歌の心は

白髪ぬく枕のしたやきりぎりす

此芭蕉の句の心である。

　　夕がほも糸瓜も知らぬ世の中はたゞ世の中にまかせたらなむ

あながちに佛法悟道を成ぜんことを願はずして自然法爾の心にまかせきつてゐる良寛と

　　晝がほの短夜ねむる晝間かな

「たゞ睡僻山民となつて、孱顔（せんがん）に足を投げ出し空山に虱を捫て座す。」と書いてゐる芭蕉と、そこにも同じ心の通ひがあるやうである。幻住庵は芭蕉が初めて作つたのではなく、曲翠の叔父幻住老人が嘗て住んだ跡の荒れてゐたのを修復したのである。五合庵は國上寺の上人の庵室であつた跡に良寛が入つたのであるといふ。斯うした山中でありながら、良寛を訪ふて來る心の友の無い事はなかつた。良寛も亦、其を待つた。「花はちる訪ふ人はなし今よりは又木立のみおひしげるらん」と客のない事をさびしがつた歌もある。芭蕉の幻住庵は、同人達の問訪が絶えなかつた。或日、去來、李由の二人が來た時は芭蕉の最も好物とする柿と蒟蒻とを家土産（いへつと）とした。「蒟蒻と柿とうれしき草の庵」と酬ひた子供のやうな芭蕉の句も面白い。幻住庵は靜閑を極めてはゐるけれども、病の多い芭蕉には、殊に秋氣の身にしむ頃になると、健康が堪へられぬ爲に、山を下つて木曾塚の庵に移つた。良寛も、晩年に脚力が衰へるやうになつてからは、五合庵を捨てゝ、山麓にある別の庵に移つたのだといふ。其山麓の方へ、私達も山を下りて行つた。かなりに急な坂である。其上に石がごろ〳〵してゐる。老足を以て此坂を上り下りすることは、實に大儀だつたに違ひないと思ふ。少しく傾いた日の杉の梢につく〳〵坊師が鳴いてゐた。

坂を下つた所に、欅の木、栗の木などの木立をなしてゐる中に、二軒三軒ぐらひづゝの農家があつた。小流があつて釜が浸してある。柿の木の下に筵を敷き、針箱と小ぎれが取散らしてある。良寛は斯うした家に托鉢してあるいてゐた

のであらう。「あゝ、良寛さまが見えた」というて、そこの女房達が彼の鉢の子の中に、食べ物を入れて進ぜる様なども、こゝの風景を背景にして、如何にも自然に想像されるのである。或日、良寛が其大事の鉢の子を道に忘れて來た時、

鉢の子は、はしきものかも、幾年か、わが持てりしを、今日は道に、置きてしくれば、たつらくの、たつきもしらす、居るらくの、すべもしらに、刈菰の、思ひみだれて、夕づゝの、かゆきかくゆき　とめゆけば、こゝにありとて、我もとに、人はもて來ぬ、うれしくも、持てくるものか、その鉢の子を

春の野にすみれつみつゝ鉢の子を忘れてぞこしあはれ鉢の子

と詠つた。其も此邊の道端であらうなどとも思はれた。古びた藁家からは、小さな女の子が二三人、小流の縁まで出て、私達をめづらしさうに見て居た。その女の子は、胸をはだけて、細い帶に前垂を掛けて、丁度　良寛が手鞠の相手になつたやうな子供である。私は又しても、良寛の歌を思ふた。

あづさ弓、春さりくれば、飯乞ふと、里にいゆけば、里子ども、道のちまたに、手鞠つく、われもまじりぬ、そが中に　ひふみよいむな、汝がつけば、わは歌ひ、わが歌へば　汝がつきて、つきてうたひて、霞たつ、長き春日を、くらしつるかも

そこらが國上の村といふのであらう。青田もあり、田の畔には、もう野菊が咲いてゐた。その畔の道で、よれ／＼の法衣の袖を夕風に吹かせながら、山に歸つて行く良寛さんに、ひよつこりとして逢ひはしまいかといふやうな氣持もするのだつた。（八月二十四日）

出雲崎

前の日は、燕町で一泊した。此日は長岡で俳句會があつて、暑い一日を俳談句評に費したが、會を終へてから、長岡の同人達と出雲崎に來ても、さすがに日の永い頃とて、まだ日は暮れなかつた。此地の俳人で、「出雲崎の史的趣味」の著者であり、良寛堂建設の主唱者である佐藤耐雪氏が、私達の宿へ着くのを待ちとるやうにして、直に町を案内してくれた。

出雲崎に於て、第一に心をひかれるものは、大きな海と、大きな佐渡の島とである。

いにしへに變らぬものはありそ海と
　むかひに見ゆる佐渡の島なり

此出雲崎で生れた良寛もさう詠つてゐる。然し、其良寛より以前に、「あら海や佐渡によこたふ天の川」と吟じた芭蕉の心の跡を探ねて、私は此日、こゝへ來たのであつた。町の背面には、山がぴつたりと迫つてゐる、前面は、海へじかに接してゐる。で、町は山と海との間に挿まれて細長く、東北から西南へ、一すぢに伸びてゐる。石を載せた板屋根の低い家が多く、町といふよりも、漁村といふ感じを多く受けるが、昔は、羽越の海岸としては、七尾、酒田と併稱せられた程の物資の集散地であり、殊に爰は幕府から直接の代官が置かれてあつたので、一つの文化の中心をなし、從て文人墨客の杖を曳くものが絶えなかつた、といふ話を聞きながら、私達は、小高みの丘に案内されてゐた。そこから、佐渡は一文字にくつきりと見渡された。その青い山脈の色は稍霞んでゐたが、中央に金北山と見える高みは鮮かだつた。私は芭蕉の文を取出して見た。

北陸道に行脚して、越後國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡が島は、海の西十八里、滄海を隔て、東西三十五里に橫折りふしたり、峯の嶮難、谷の隅々まで、さすがに手にとるばかり、あさやかに見渡さる……

とある。佐渡は、爰から西といふよりも寧ろ西北に寄つてゐる。西には今、太陽が靜かにさがつて、佐渡の島の端をかすめて、海に入らうとしてゐる。海上も眞平に凪ぎきつて、浪の音さへもない。殆ど眞すぐに走つてゐる海岸線が、右手に遠く、もつくりとした一つの山を起してゐるのが彌彦、その手前に、なだらかな岡の見えるのが國上だといふ。左手は町のはづれに、海中から石油を掘る櫓があり、其邊が港にもなつてゐるといふ。私達は、太陽が全く海に隱れてしまふまでの、おつとりとした靜かな情趣を心ゆくまで觀賞してから、松林の中を下りた。而して、良寛の遺墨を見せてくれると云はれるまゝに、佐藤氏の家に寄つた。

土藏から藏幅を持出す爲に、古風な六角の雪洞が灯された程、其時はもうすつかり夜になつてゐた。良寛の書の好きな私は結構な御馳走を澤山に頂戴したやうな氣持で外へ出た。今夜は諏訪神社の祭禮だとて、神輿の太鼓や鉦の音が賑かに聞こえたが、町はたゞ暗い感じであつた。芭蕉が爰で泊つたといふ言傳へのある大崎屋といふ家は、町並のうちの海側で、今は漁師が住み、其一部は船大工が工作をする處に使つてをるとの事で、軒下では、暗いあかりでアイスクリイムのぶりき罐をガラ〳〵と廻す音がしてゐた。

と、七日の月が出てゐた。水色よりやゝ濃い淺黄の空に――。舊暦、七月七日の月である。而して、天の川も亦、薄くはあるけれども、既にあらはれてゐたのである。

芭蕉が此地に來たのも、七月七日の夕であつた。それは、柴橋といふ書に、「越後出雲崎といふ所より沖の方十八里に佐渡が島見ゆ（中略）折ふし初秋七日の夜、宵月入果て波の音とうとうと物凄かりければ」として、かの「荒海」の句を出してゐる。曾良の「雪丸げ」には、同じ書起しであつて、「初秋の薄霧立ちもあへず、さすがに浪も高からされば、たゞ手の上の如く見渡されて」といふ端書がある。一つには、浪の音とう〳〵と物凄かりければ、一つには浪も高から

さればとは、矛盾してゐるのが不審でもある。一體、出雲崎は海潮の關係であらうか、浪の靜かな所で、荒れるといふ日はめつたにないといふ事ではあるが、芭蕉が「あら海や」と詠ひ出してゐる氣持には、其日は相當に浪が立つてゐた事と思はれる。又、其日が七月七日であつたといふ事は、芭蕉の時代に於て、「天の川」といふものは七夕との連想がある爲に、初秋の題と定められてゐたのであるから、芭蕉がしみ〴〵と天の川を仰いだといふ氣持は、七夕の夕べであつたればこそだ、とも推せられるのである。されば奥の細道には、鼠ケ關以後の記は

此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず

とあるのみで、委しい事は記されてないものゝ、

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天の川

と二句並べてある所を見ても、芭蕉が七夕といふものに特殊の感興をもつてゐたことも解ると思ふ。(「雪丸げ」に「文月」の發句の前に「直江津にて」とあるけれども、それは直江津にて連句の會をした時、其發句を出したからである)。

私達が宿に戻つて、夕飯をすました時は、かなり遲かつた。宿は濱に近く、二十疊程の廣間の障子を凡て拂つてあるので、夜風は涼しすぎて寒い位だつた。月は既に落ちて、星が一ぱいに出てゐた。その暗い海の上に、暗い影のやうな佐渡の島の形が、やはり其と知られるのであつた。私は再び、芭蕉の「銀河序」を取出して見た。

……むべ、此島は黄金多く出て、あまねく世の寶となれば、限りなき目出度島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによりて、たゞ恐ろしき名の聞えあるも本意なき事に思ひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらんと

するほど、日既に海に沈で、月ほのくらく、銀河半天にかゝりて、星きら〳〵と冴えたるに、沖の方より浪の音しばしば運びて、魂けづるが如く、腸ちぎれて、そゞろに悲みきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なにゆえとはなくて、しぼるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡によこたふ天の川

先に擧げた文のすぐ續きである。私は欄に倚つて、海上の空を仰いだ。そちらには天の川は見えない。宿を出て、町の中に立つた。その空に、天の川は先程見た時よりも、ずつと明らかに懸つてゐた。然し、其句にあるやうに、海の方へ向つては懸つてゐなかつた。「佐渡によこたふ」といふ文字通りには、佐渡へはよこたはらないのであつた。天の川の流は、丁度、町の筋と平行して、西南から東北へ流れて、その尾は彌彦の上に垂れかゝつてゐるのだつた。昔と今と、其地勢や風俗は非常に變るといふ事もあり得るけれども、佐渡の島と天の川との位置が變る筈はなし、殊に其日も毎年の陰暦七月七日であり、此日も毎年の同じ日であるとしたならば――。けれども、其事實を見てから、私は此句に對しての信愛を薄くはしなかつた。否却て、一層此句の大いさが感じられるやうにすら思つた。「荒海や佐渡によこたはる……」ではない、よこたふである。此言葉には、かなりに強い作者の氣魄が出てゐる。詩人としての芭蕉のたましひは、北海の夜に脈打つてゐる浪のリズムに融け込み、而して又、天空の唯中を貫く天の川の美しさにまで飛翔してゐるのではないか。「荒海」といひ、「佐渡」といふものは、決して地理的に、外在の世界にあるものではない、すべて、地上の淋しきものゝ象徴として、芭蕉が心内の世界にあるのである。善いかな、「佐渡によこたふ天の川」といふ言葉!

却て今、こゝに見るところの天の川が當に振りかはつて、佐渡の上に横たはるべきである。さう考へてゐた私に、土地の人、佐藤氏は「いや、夜半になりますと、天の川も動いて佐渡の方へ向くやうになります」と云ふのであつたが、然

し、さうした事實の上の問題は、私には寧ろどうでもよかつた。私が斯うして、奥の細道の跡を尋ねて歩いてゐるのも、其事實を探査しようといふが爲めではない、芭蕉の心にあつた眞實を、其故に今日も亦、私達の心にあるべき眞實を、自分のうちに探ね出さうが爲めなのである。（八月二十五日）

親不知と糸魚川

大きな蚊帳を釣つて枕を並べた、其蚊帳の裾が風にあほられて、浪のやうに騒いで、夜は明けてゐた。朝のほのかな光に浮き上つてゐる佐渡の島は、一段と美しいものであつた。宿の下の濱には、夜釣の烏賊船が着いてゐた。西瓜船も着いて、女や子供が西瓜を兩脇に一つづつ抱へては、運び上げてゐた。犬も來て、尾を振つてゐた。

佐藤氏が朝から見えて、良寛堂の錠を開いてくれた。それは、良寛が生れた家、即ち、名主、橘屋山本氏の屋敷跡に和尚を紀念する爲に建てられた小堂で、安田靫彦氏が藤原時代の建築様式を加味して意匠したといふ線の感じもすらりとして快く出來てをり、本尊として良寛の持佛、地藏菩薩をくり入れ、「むかひに見ゆる佐渡の島なり」の歌を刻した石の角塔も淸らかであつた。その石塔の裏に箱が入れてあつて、氏はそこから良寛の遺物たる笏や自筆の心經を出して見せた。「從少出家今已老」といふ書などは殊にうれしかつた。

それから、越後の同人達と別れて、私と北朗君との二人が糸魚川に相馬御風氏を訪ふたのは、午後の暑いさなかであつた。私達の旅の日程では、此日に糸魚川から親不知の舊道をあるき、市振へ行つて泊らうといふ事であつた。所が、御風氏の話は、その舊道はずいぶん困難だし、時間の點から云ふても行き着き得まい。汽車で親不知驛まで行くより外はない。且つ、今夜は糸魚川に泊られる事と思つて、會合の用意などもしてあるから、是非ともさうせよといふ事なの

で、豫定を代へて、氏の好意を受ける事とした。

親不知へは、御風氏の友人、鄕谷氏が案内をしてくれた。親不知、委しく云へば親不知子不知と呼ぶ事と、私は幼い頃小學讀本で敎へられた以來、さう思つてゐたが、爰に來て聞けば、「親しらず」と「子しらず」とは別の所なのである。いや、之を總稱して云へば、凡て「親しらず」なのであらうが、其數里にわたる難所に各別の名をつける必要から、「親しらず」「子しらず」「犬もどり」「駒がへり」などゝ名けたものと見える。奥の細道にも——

今日は親しらず、子しらず、犬もどり、駒返し（こまがへし）、など云ふ北國一の難所を越えて、つかれ侍れば……

と各別の名を擧げてゐる。當今、親不知の驛のある所から、西の方、市振に寄つた方が「親しらず」、東の方、青海（糸魚川）に寄つた方が「子しらず」だといふ。私は、鄕谷氏の導くまゝに「子しらず」の方へ行つて見た。斷崖の上、山のはざまに狹まれて、古いまゝの小さな部落があつた。歌といふ優しい名であつた。一體、昔は斷崖の下の浪打際を通るより外に道はなく、夏季は好いけれども、冬季は怒濤が押寄せてくるので、親も子を顧る暇がないといふ程の危險があつたものゝ、明治十六年、山腹に國道が出來てから、往來は全く安全になつた。近頃、其國道のトンネルが崩れて通じない爲め、別に斷崖の上に小路が作られた。然し、汽車もある事とて、こゝを歩く者は極めて少く、石切りの土工が通る位のものだといふ事である。眞青な海の色と白ッぽい巖石の色と、双方が日光を照り反しあつて暑い上に、石を切る音が乾いた空氣をカン〳〵といらだゝせてゐた。私達が歩んでゐる所も、大きな石灰岩なので、工業用に使途がある爲め、端から崩してゆくらしく、到る處で、土工が其の崖にとつついてゐた。殊に、姫川の架橋の爲と、親不知隧道を作る爲には、花崗岩も爰から多量に切り出されたといふ。で、當今、「子知らず」の景色は殆ど舊觀を失つたさうである。私も、切り石を運搬する爲の細いレールをつたふて、枕木の間々に一々足を入れてあるく事は興味がなかつた。斷崖は

し、さうした事實の上の問題は、私には寧ろどうでもよかつた。私が斯うして、奥の細道の跡を尋ねて歩いてゐるのも、其事實を探索しようといふが爲めではない、芭蕉の心にあつた眞實を、其故に今日も亦、私達の心にあるべき眞實を、自分のうちに探ね出さうが爲めなのである。（八月二十五日）

親不知と糸魚川

大きな蚊帳を釣つて枕を並べた、其蚊帳の裾が風にあほられて、浪のやうに騷いで、夜は明けてゐた。朝のほのかな光に浮き上つてゐる佐渡の島は、一段と美しいものであつた。宿の下の濱には、夜釣の烏賊船が着いてゐた。西瓜船も着いて、女や子供が西瓜を兩脇に一つづつ抱へては、運び上げてゐた。犬も來て、尾を振つてゐた。

佐藤氏が朝から見えて、良寛堂の錠を開いてくれた。それは、良寛が生れた家、即ち、名主、橘屋山本氏の屋敷跡に和尚を紀念する爲に建てられた小堂で、安田靫彦氏が藤原時代の建築様式を加味して意匠したといふ線の感じもすらりとして快く出來てをり、本尊として良寛の持佛、地藏菩薩をくり入れ、「むかひに見ゆる佐渡の島なり」の歌を刻した石の角塔も清らかであつた。その石塔の裏に箱が入れてあつて、氏はそこから良寛の遺物たる笏や自筆の心經を出して見せた。「從少出家今已老」といふ書などは殊にうれしかつた。

それから、越後の同人達と別れて、私と北朗君との二人が糸魚川に相馬御風氏を訪ふたのは、午後の暑いさなかであつた。私達の旅の日程では、此日に糸魚川から親不知の舊道をあるき、市振へ行つて泊らうといふ事であつた。所が、御風氏の話は、その舊道はずいぶん困難だし、時間の點から云ふても行き着き得まい。汽車で親不知驛まで行くより外はない。且つ、今夜は糸魚川に泊られる事と思つて、會合の用意などもしてあるから、是非ともさうせよといふ事なの

で、豫定を代へて、氏の好意を受ける事とした。

親不知へは、御風氏の友人、響谷氏が案内をしてくれた。親不知、委しく云へば親不知子不知と呼ぶ事と、私は幼い頃小學讀本で敎へられた以來、さう思つてゐたが、爰に來て聞けば、「親しらず」と「子しらず」とは別の所なのである。いや、之を總稱して云へば、凡て「親しらず」なのであらうが、其數里にわたる難所に各別の名をつける必要から、「親しらず」「子しらず」「犬もどり」「駒がへり」などゝ名けたものと見える。奥の細道にも――

今日は親しらず、子しらず、犬もどり、駒返(こまがへ)し、など云ふ北國一の難所を越えて、つかれ侍れば……

と各別の名を擧げてゐる。當今、親不知の驛のある所から、西の方、市振に寄つた方が「親しらず」、東の方、青海(糸魚川)に寄つた方が「子しらず」だといふ。私は、響谷氏の導くまゝに「子しらず」の方へ行つて見た。斷崖の上、山のはざまに挾まれて、古いまゝの小さな部落があつた。歌といふ優しい名であつた。一體、昔は斷崖の下の浪打際を通るより外に道はなく、夏季は好いけれども、冬季は怒濤が押寄せてくるので、親も子を顧る暇がないといふ程の危險があつたものゝ、明治十六年、山腹に國道が出來てから、往來は全く安全になつた。近頃、其國道のトンネルが崩れて通じない爲め、別に斷崖の上に小路が作られた。然し、汽車もある事とて、こゝを歩く者は極めて少く、石切りの土工が通る位のものだといふ事である。眞青な海の色と白ッぽい岩石の色と、双方が日光を照り反しあつて暑い上に、石を切る音が乾いた空氣をカン〳〵といらだゝせてゐた。私達が歩んでゐる所も、大きな石灰岩なので、工業用に使途がある爲め、端から崩してゆくらしく、到る處で、土工が其の崖につついてゐた。殊に、姫川の架橋の爲と、親不知隧道を作る爲には、花崗岩も爰から多量に切り出されたといふ。で、當今、「子知らず」の景色は殆ど舊觀を失つたさうである。私も、切り石を運搬する爲の細いレールをつたふて、枕木の間々に一々足を入れてあるく事は興味がなかつた。斷崖は

醜くそぎ取られたり、禿げたりして、所々に置残されたやうな青い草が却ていたましかつた。「犬もどり」「駒がへり」といふのは、猶東の方で、出鼻が見える所です、と指さされたが、私はもう引返へす事とした。因に、奥の細道には、「駒返し」と記してあるが、爰では「駒返り」と云慣はしてゐる。

御風氏が自分の家同様にしてゐる家だから遠慮せずに、と云ふてくれた糸魚川の宿は、其前にある大きな夏柳の葉が、海から來る風に、ふつさりと擦くのであつた。「今夜は踊がたつでせう」と、夜に入ると直ぐに見えた氏はさう云つてゐた。暫くして、ドドンドドンと遠くで、踊の太鼓らしいものが聞こえた。私は其を見たいと思つた。爰の踊の唄の鄙びて面白い事は北朗君からも平生聞かされてゐた。

盆なりやこそ踊れ
秋の八月誰りや踊ろ、〳〵

又

若い衆の出たこと見やれ
茅の尾花の出たごとく、〳〵

御風氏は、踊を見るには、もつと夜が更けてからでないと興がない、それまで座談會で時を費せば丁度宜しい、と云ふのだつた。其會場といふのは、宿よりも更に海に近い所で、宿の二階よりも一層好く海風のはいる二階だつた。床の間の大きな花瓶に、尾花が投け挿しにしてある。之は此土地の風俗に、尾花祭と云ふて、山から尾花を切て來て供へ、こわ飯、あん餅などを作り、萱の箸でたべる其日が近づいたからださうな。

二十人ばかりの人達が集り、好く話したり好く飲んだりした。斯うした郷黨の人達の中にまじつて、快く落付いてゐ

られる御風氏がうらやましい位であつた。十餘年の長い間、東京へ行かず、又、行きたくもないといふ氏の言葉も、さもあらうと思はれた。土地のうたひ女達も幾人か來て、こゝの土からうまれた平和な、純朴なリズムのある唄を三味線に載せてくれた。盆踊の唄も聞かせてくれた。

　見て來たか、富山の街の
二階作りの白壁を、〳〵

又

根知（ねち）の大神堂（だいじんどう）の與作（よさく）の娘
　眼元ばかりが五兩（ごりよ）がもの、〳〵

斯うした鄙びた、飾り氣のない感情は得難いものだと思つた。而して、踊を見に行くのに丁度好い頃まで時を費す筈であつたのが、つひ、うつかりと餘りに長居してしまつた。御風氏と二人で、外へ出ると、とうに踊は濟んだらしく、夜更けのしんとした街並に、踊見の戻りらしい人の足音がゾロ〳〵と聞こえた。

　夜が明けたさうな、
天の川原は西東、〳〵

昔は斯う唄つて、夜が白むまでも踊り興じたものであらうが、今は警察がやかましくて、十二時限り解散させられるのださうな。で、二人は濱へ出て、ざぶり〳〵と浪の寄せる砂の上を歩いた。月も落ちた後で、星も暗く、沖には漁火もない晩だつた。濱邊の草むらには、もう蟲が鳴いてゐた。暫く歩いてゐるうちに、浴衣がじつとりと露ばむやうに感じた。晝は暑いといつても、季節は爭はれない、既に秋に入つてゐるのであつた。（八月二十六日）

一日の旅

正宗白鳥

丁度三十年前のこの頃であつた。私は上京した年の最初の夏季休暇に、歸省の途中、十日ばかりを興津で過した。基督教青年會主催の夏季學校に出席するためで、講演のうちに、内村鑑三氏がカーライルの長講をするといふことが、私の熱情をそそつたのであつた。

その後、頻繁に東海道を往復してゐるので、をり〳〵過去の記憶を思出して、一度興津に下車しようと志したこともあつたが、急行車はそこに止らないので、乗換えなどが煩はしくて、今までついに望みを遂げなかつた。

「日歸りでもいゝから、ちよつと興津へ行つて來よう」私は先日來さう云つてゐたが、机上の仕事が一先づ片付いたので、それを機會に、かねて胸中に蓄へてゐたこの小さな企てを實行することにした。

それは、大磯で海水開きのあつた翌日（七月四日）であつた。前日は眞夏の烈しい日が照つて、私も今年最初の水泳を試みて、久振りに食慾の増進を覺えたのであつたが、翌日は朝から小雨が降つて、蒸暑くつて梅雨明らしい空模樣であつた。でも、私は豫定通りに出掛けることにした。

汽車は空いてゐたので、私は横になつてゐた。朝飯は何も食べなかつたので、空腹を感じたが、先方へ着いてからおいしいものを食べるつもりで我慢してゐた。車中の食物として、西洋辨當がこの頃はよく賣だしたらしいが、アイスク

リーム、コーヒー、紅茶、それに、今年はソーダ水までも賣られるやうになつたらしい。賣子のさういふ呼聲が私の耳についた。どれか飲みもの丶一つを貰はうとして頭を持上げたが、雨の降つてゐる窓外へ首を突出して、どれにしようかと、賣品を物色してゐるうちに汽車は出てしまつた。

四時間もか丶るノロい汽車は退屈であつた。やうやく興津に着いた時には、篠つく雨で風も添つてゐた。しかし、私は町を見ようと思つて、風雨の中を宿屋まで歩いた。三十年前とは町の樣子が異つてゐて、記憶と一致するところはなかつた。ふと讃美歌が聞えたので、見ると、小さな家の土間に、靴や下駄が十足ばかり並んでゐて、上り口に若い男女の後姿が見られた。同じ並びで二三軒距てて、形までも同じやうな小さな家には藝者の檢番の札が掛つてゐた。どんな町にもある警察署と郵便局も目についた。しかし、私が心差してゐる宿屋は容易に見當らなかつた。

夏季學校の講堂に當てられてゐた家も、何處であつたか見當がつかなかつた。が、民家の、あまり廣くない一室で、數十人の青年に圍繞されて、元良勇次郎や植村正久氏や平岩愃保氏などが講演をしたり雜話をしたりしたことが思出された。當年十八歲の私には、それ等の六ケしいお說敎や講義は充分に理解が出來なかつたのだが、たゞ幼稚な崇拜心から謹聽してゐたのであつた。それで、その時私の全心を惹寄せて傾聽させ感奮させたものは、ひとり內村氏の「カーライル」であつた。當時京都に蟄居して窮乏の生活を過してゐた氏は、夏季學校に招聘されたことを喜んで、カーライルに關する新著を外國から取寄せて研究してゐたのださうだ。「內村さんは報酬をいくら寄越すかと、はじめから率直に要求するからいいが、××さんなんかは、そんなものは入らんやうなことを云つて、腹の中では報酬の少いのを不平に思つてるんだから困る」と、幹事の一人が云つてゐた。その頃は、宗教家は勿論文學者だつて、報酬のことを口に出すのを恥ぢてゐたのである。……私なども最近までは、一切先方任せで、此方から強く要求したことは一度もなかつた。文學

をやつてゐては、いつまでもしつかりした生活の基礎が立たなかつた譯である。

きまつた講演よりも座談が面白かつた。青年を相手に氣焔を吐くことの好きな内村氏は、頻りに毒舌を弄してはカラカラ笑つて、京都の隱遁生活の欝憤を洩らしてゐたが、かういふ座談の折などに、内村氏に向つて自己の意見を持出して議論の種にする者は、大抵は大學生であつた。私が三十年後の今、當時の光景を思出しても、數十人の聽講者のうち印象のハツキリ殘つてゐるのは角帽を被つた人々である。彼等が何となく幅を利かせてゐた。内村氏でさへ、議論の相手にはさういふ人達を撰んでゐた。私自身も、彼等を、私などよりも一段傑れた學校に學んでゐる人として多少の羨望と敬意とを寄せてゐた。……私は新聞記者時代には、官學の世間的威力を痛感したのであるが、三十年の長年月を經て、學問―殊に文學―に於ては實力本位になりかゝつてゐる今でさへ、まだ官學の權威は多少の名殘を留めてゐる。世間の待遇がちがふやうに思はれる。菊池文學士芥川文學士久米文學士は、廣津早大學士宇野早大學士などよりも、世間に乘出すに當つて、少くも一歩の得をしてゐると確信してゐる。文壇では差別がないにしても、通俗的な世間の見る目は違つてゐる。そしてそれは、官學は私學よりも資本を多くおろしてゐるのだから、世間が重く見るのは當然なのである。……私は今でも、學校を撰ぶには、官立へ入れと青年に勸める。撰拔試驗に落第して止むを得ず私學へ入學しながら、卒業後平等の取扱ひを望むのは、慾がよ過ぎる譯である。私は當時の早稻田の校長鳩山和夫氏から卒業證書を授與されたのであつたが、鳩山校長は自分の息子を、早稻田の法科へは入れなかつた。

三十年前、夏季學校の學生は數軒の旅館に分宿されたのであつたが、私などの宿はよくない方で、水口屋へ割當てられた連中が遙かにいい待遇を受けてゐるのを羨ましがつてゐた。それを思出して、私は今度はその水口屋で午餐を食べることにしてゐた。

入浴後に廊下の椅子に腰を掛けて休息したが、海面は雨に鎖されて、三保の松原も見えなかつた。昔、龍華寺から三保へ行つて、それから久能山に登つて、歸りに安部川べりで名物の團子を食べたことなどが思出された。三保までは内村氏も同伴されたので、私は氏の後に喰付いて、氏が同行者の一人に向つて、新島氏の惡口などを無遠慮に云つてゐるのを謹聽してゐた。氏はカーライル講演の際に、樋口一葉について皮肉な批評を下してゐた。一葉の死んだのは、その年の冬であつて、「たけくらべ」「濁り江」「別れ道」などの傑作を續けて出して、文壇を驚歎させてゐた時分であつたが、遊戲文學を蔑視してゐたその頃の私は、彼女の作品などには、わざと目を留めないでゐたので、内村氏の批評もそのまゝに受入れてゐた。

先日來、「一葉全集」を通讀したが、その作品から受けた感じは、嘗山樗牛の作品から受けた感じに似通つてゐた。感傷的な點で、時代の惱みを感じてゐるらしい點で。……

昔は蘇鐵を見るために龍華寺へ行つたのであつたが、今度は有名な樗牛の墓に詣でるためにそこへ行かうと思立つた。それで、食後自動車を雇つて、大雨を冒して出立した。

蘇鐵とシヤボテンのある寺の庭を横切つて石段を上ると、成程眺望のよささうな所に奇麗な墓があつた。「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と題した石碑が立つてゐるのかと豫想してゐたのに、それは墓の蓋になつてゐたので面白く感じた。案内に立つた運轉手は、晴天なら、富士の眺めがいゝ。三保の松原と相對して、高山博士の最も氣に入つた景色になつてゐると説明した。日本の文學者でこんないい所で永眠してゐるものはあるまい。若くて死んだことゝ、風光明媚な地域に墓を持つてゐることが、樗牛の名聲を何時までも保たしめる一つの理由になつてゐる。

私は滅多に買つたことのない繪葉書を、寺で買つた。去年ある所で、田山花袋氏が樗牛の筆跡を評してセンチメタルだといつたのを聞いたが、今、遺墨の繪葉書を見ると、花袋氏の評語が適確に當つてゐることが感ぜられた。「如何にうるはしく空にかゞやけばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にして幾時ぞ。思へば惜しき過去なりき」といふ

繪葉書面の文字は、感傷的といふよりも、むしろ甘つたれた筆跡である。ちよつと見るとうまいやうだが、長く見てゐると、その甘さが厭はしく思はれる。その文句の意味とゝもに、少年向きのものである。

樗牛の風采は立派であつた。私は早稻田で一年ばかり、彼れの教へを受けたのであつた。當時の早稻田は、官立大學の卒業ほやほやの學士を講師に迎へてゐたので私などは、桑木嚴翼、蟹江義丸、松本文三郎、波多野精一などの諸先生に對して一日の師恩を負つてゐる。そのうちでは、高山先生は、文壇の偉才として學生に何かの刺戟を與へてゐたらしかつた。私は、在學中一度、徳田秋江君に誘はれて、西片町の先生の寓居を訪問したことがあつた。先生が鎌倉の長谷のお寺の一室で病氣の靜養をして居た時にも、一度訪問した。しかし記憶に殘るやうな話は何も聞かなかつた。それに、内村先生の口から出る言葉は、一語も洩らさないで心に留めて置かうと心掛けてゐたその頃の私も、樗牛先生の言語文章には左程重きを置いてゐなかつた。

樗牛は、讀賣新聞などに寄稿してゐた青年文士を「青二才」呼はりしたので寄稿者の一人たる中島孤島君はそれを憤慨してゐた。樗牛の壽命がもう二三年延びたなら、私なども、彼れの筆で「青二才」呼はりされたに違ひない。しかし、今日になつて、樗牛の文章と所説とを讀直すと、その文章と所説とに「青二才」のにほひのするのを、私は感じるのである。彼れは「青二才」のまゝで死んだために、永久に老いないで、今なほ年少の讀者に喜ばれてゐるのであらう。

「議論は羽織の紐のやうなもので、どちらへでもつく」と、樗牛が云つてゐると、秋江君が嘗て私に話したことがあつたが、羽織の紐の譬諭はうまくはないが、その意見には、私も同感である。政治問題でも文學問題でも、議論をするに當つて理窟はどうにでもつくものだ。

風雨はますます烈しくなつたので、私は久能山へも三保へも行かないで、江尻から汽車に乗つて歸宅した。それで、私の興津行は龍華寺參詣を果しただけになつた。

長崎の印象

(この一篇をN氏、A氏におくる)

中條百合子

○

不圖眼がさめると、いつの間にか雨が降り出して居る。夜なか、全速力で闇を貫き駛つて居る汽車に目を開いて揺られてゐる心持は、思ひ切つたやうな陰氣なやうなものだ。そこへ、寢臺車の屋蓋をしと〳〵打つて雨の音がする。凝つと聽いて居ると、私はしんみりした、いゝ心持に成つた。雨につれて、氣温も下り、四邊の空氣も大分すが〳〵しく輕やかになつたらしく感じる。――一人でその雨に聽き入つて居るのが惜しく、下に眠つて居るYにも教へたいと思つた位。

大體、私共は旅行に出てから十日餘、天氣の點では幸運であつた。京都に居た間、又、九州に來てから別府、臼杵などに居た間、塵をしづめる打ち水となる程度の降雨に會つたゞけで、爲に豫定を變へるやうな目には遭はなかつた。日向で青島へ廻つた日、鹿兒島で一泊したその翌日、特に快晴で、私達は、世にも明るい日向、薩摩の風光を愛することが出來た。五月九日といふ日づけにだまされ、二人とも袷の裝であつた。鹿兒島市中では、樟の若葉の下を白絣の浴衣が

繪葉書面の文字は、感傷的といふよりも、むしろ甘つたれた筆跡である。ちよつと見るとうまいやうだが、長く見てゐると、その甘さが厭はしく思はれる。その文句の意味とゝもに、少年向きのものである。

樗牛の風采は立派であつた。私は早稲田で一年ばかり、彼れの教へを受けたのであつた。當時の早稲田は、官立大學の卒業ほや〳〵の學士を講師に迎へてゐたので私などは、桑木嚴翼、綱江義丸、松本文三郎、波多野精一などの諸先生に對して一日の師恩を負つてゐる。そのうちでは、高山先生は、文壇の偉才として學生に何かの刺戟を與へてゐたらしかつた。私は、在學中一度、徳田秋江君に誘はれて、西片町の先生の寓居を訪問したことがあつた。先生が鎌倉の長谷のお寺の一室で病氣の靜養をして居た時にも、一度訪問した。しかし記憶に殘るやうな話は何も聞かなかつた。それに、内村先生の口から出る言葉は、一語も洩らさないで心に留めて置かうと心掛けてゐたその頃の私も、樗牛先生の言語文章には左程重きを置いてゐなかつた。

樗牛は、讀賣新聞などに寄稿してゐた青年文士を「青二才」呼はりしたので寄稿者の一人たる中島孤島君はそれを憤慨してゐた。樗牛の壽命がもう二三年延びたなら、私なども、彼れの筆で「青二才」呼はりされたに違ひない。しかし、今日になつて、樗牛の文章と所説とを讀直すと、その文章と所説とに「青二才」のにほひのするのを、私は感じるのである。彼れは、「青二才」のまゝで死んだために、永久に老いないで、今なほ年少の讀者に喜ばれてゐるのであらう。

「議論は羽織の紐のやうなもので、どちらへでもつく」と、樗牛が云つてゐると、秋江君が嘗て私に話したことがあつたが、羽織の紐の譬諭はうまくはないが、その意見には、私も同感である。政治問題でも文學問題でも、議論をするに當つて理窟はどうにでもつくものだ。

風雨はます〳〵烈しくなつたので、私は久能山へも三保へも行かないで、江尻から汽車に乘つて歸宅した。それで、私の興津行は龍華寺參詣を果したゞけになつた。

長崎の印象

中條百合子

（この一篇をN氏、A氏におくる）

○

不圖眼がさめると、いつの間にか雨が降り出して居る。夜なか、全速力で闇を貫き駛つて居る汽車に目を開いて揺られてゐる心持は、思ひ切つたやうな陰氣なやうなものだ。そこへ、寢臺車の屋蓋をしと〳〵打つて雨の音がする。凝つと聽いて居ると、私はしんみりした、いゝ心持に成つた。雨につれて、氣温も下り、四邊の空氣も大分すが〳〵しく輕やかになつたらしく感じる。——一人でその雨に聽き入つて居るのが惜しく、下に眠つて居るYにも敎へたいと思つた位。

大體、私共は旅行に出てから十日餘、天氣の點では幸運であつた。京都に居た間、又、九州に來てから別府、臼杵などに居た間、塵をしづめる打ち水となる程度の降雨に會つたゞけで、爲に豫定を變へるやうな目には遭はなかつた。日向で青島へ廻つた日、鹿兒島で一泊したその翌日、特に快晴で、私達は、世にも明るい日向、薩摩の風光を愛することが出來た。五月九日といふ日づけにだまされ、二人とも袷の裝であつた。鹿兒島市中では、樟の若葉の下を白絣の浴衣が

繪葉書面の文字は、感傷的といふよりも、むしろ甘つたれた筆跡である。ちよつと見るとうまいやうだが、長く見てゐると、その甘さが厭はしく思はれる。その文句の意味とゝもに、少年向きのものである。

樗牛の風采は立派であつた。私は早稲田で一年ばかり、彼れの敎へを受けたのであつた。當時の早稲田は、官立大學の卒業ほやほやの學士を講師に迎へてゐたので私などは、桑木嚴翼、綱江義丸、松本文三郎、波多野精一などの諸先生に對して一日の師恩を今つてゐる。そのうちでは、高山先生は、文壇の偉才として學生に何かの刺戟を與へてゐたらしかつた。私は、在學中一度、徳田秋江君に誘はれて、西片町の先生の寓居を訪問したことがあつた。先生が鎌倉の長谷のお寺の一室で病氣の靜養をして居た時にも、一度訪問した。しかし記憶に残るやうな話は何も聞かなかつた。それに、内村先生の口から出る言葉は、一語も洩らさないで心に留めて置かうと心掛けてゐたその頃の私も、樗牛先生の言語文章には左程重きを置いてゐなかつた。

樗牛は、讀賣新聞などに寄稿してゐた青年文士を「青二才」呼はりしたので寄稿者の一人たる中島孤島君はそれを憤慨してゐた。樗牛の壽命がもう二三年延びたなら、私なども、彼れの筆で「青二才」呼はりされたに違ひない。しかし、今日になつて、樗牛の文章と所説とを讀直すと、その文章と所説とに「青二才」のにほひのするのを、私は感じるのである。彼れは、「青二才」のまゝで死んだために、永久に老いないで、今なほ年少の讀者に喜ばれてゐるのであらう。

「議論は羽織の紐のやうなもので、どちらへでもつく」と、樗牛が云つてゐると、秋江君が嘗て私に話したことがあつたが、羽織の紐の譬諭はうまくはないが、その意見には、私も同感である。政治問題でも文學問題でも、議論をするに當つて理窟はどうにでもつくものだ。

風雨はますます烈しくなつたので、私は久能山へも三保へも行かないで、江尻から汽車に乗つて歸宅した。それで、私の興津行は龍華寺參詣を果したゞけになつた。

長崎の印象

中條百合子

(この一篇をN氏、A氏におくる)

○

不圖眼がさめると、いつの間にか雨が降り出して居る。夜なか、全速力で闇を貫き駛つて居る汽車に目を開いて揺られてゐる心持は、思ひ切つたやうな陰氣なやうなものだ。そこへ、寢臺車の屋蓋をしと〳〵打つて雨の音がする。凝つと聽いて居ると、私はしんみりした、いゝ心持に成つた。雨につれて、氣温も下り、四邊の空氣も大分すが〳〵しく輕やかになつたらしく感じる。――一人でその雨に聽き入つて居るのが惜しく、下に眠つて居るYにも教へたいと思つた位。

大體、私共は旅行に出てから十日餘、天氣の點では幸運であつた。京都に居た間、又、九州に來てから別府、臼杵などに居た間、塵をしづめる打ち水となる程度の降雨に會つただけで、爲に豫定を變へるやうな目には遭はなかつた。日向で青島へ廻つた日、鹿兒島で一泊したその翌日、特に快晴で、私達は、世にも明るい日向、薩摩の風光を愛することが出來た。五月九日といふ日づけにだまされ、二人とも袷の裝であつた。鹿兒島市中では、樟の若葉の下を白絣の浴衣が

けの老人が通るといふ夏景色であつた。反射の強い日光を洋傘一つにさけて島津家の庭を観、集成館を見物し、城山に登る。城山へは、宿の横手の裏峡道から、物ずきに草樹を掻き分け攀ぢ登つたのだから、洋服のYは悠然、私はひどく汗を掻いた。つい目の先に櫻島を泛べ、もうつと暑氣で立ちこめた海霧の下に漣一つ立てずとろりと輝いて居た錦江、廣々と眞直であつた城下の街路。人間もからりと心地よく、深い好意を感じたが、思ひ出すと、微に喉の渇いたやうな、篩りつけられた感覺が附隨して甦つて來る。そこを立つて來た夜半に、計らず聽いた雨の音故一きわすが〳〵しく、しめやかに感じたといふこともあらう。鳥栖で、午前六時、長崎線に乗換る時には、歩廊を歩いてゐる横顔にしぶきを受ける程の霧雨であつた。車室は、極めて空いて居る。一體、九州も、東海岸をずーつと南に降る線、及び鹿兒島から北に昇つて長崎へ行く列車など、實に閑散なものだ。窓硝子に雨の滴のついた車室に居るのは、私共と、大學生一人、遠くはなれて官吏らしい男が二人乗り合はせて居るぎり。海岸に沿ふて、汽車は山腹を潜つては出、潜つては出、出た時にやゝ荒れ模様の海の景色が右手に眺められる。私共は、今日雨降りで却つてよかつたと思つた。南風崎、大村、諫早と通過する頃の黒々と濡れた磯の巌、灰色を帶びた藍にさわめいて居る波の襞、舫つた舟の檣が幾本となく細雨に揺れ乍ら林立して居る有様、古い版畫のやうな趣で忘られない印象を受けた風景全體の暗く強い藍、黒、灰色だけの配合色は、若し晴天だつたら決して見られなかつたに違ひない。

長崎のステイションも、夜來の雨で、アスファルトが泥でよごれて居る。僅かの旅客の後に跟き、私共は漠然期待や好奇心に滿ちて改札口を出た。赤帽と、合羽を着た數人の俥夫が我々をとり巻いた。

「お宿はどこです」

「お俥になさいますか」

「——ふむ——未だ宿をきめて居ないんだが、長崎ホテル、やつて居ますか」

「あすこはもう廢めました」

すると、俥夫達の背後に立ち、頻りにYを観察して居た大兵の青帽をかぶつた詰襟の案内人が

「上海へおいでゞすか」

と訊ねた。我々は苦笑した。長崎といふと、私共は古風な港町を想像し、古びながら活潑に整つた市街の玄關を控えて居ると思つて居た。降りて見ると、改札口につきもの〻嫌な宿引きさへ一人も居ない。其は心持よいが、タクシーもなく、激しい速力で昨夜から、長崎へ、長崎へと、駛りつゞけて來、緊張した神經が突然無風帶に落ちこんだやうな緩慢さを感じた。悠くり問答した結果、私共は二台の俥に乘つた。長崎唯一のホテルであるジャパンホテルに先づ行つて見ることになつたのだ。日本風の宿屋は二三、名を調べてあつた。然し私共は京都を出たばかりから、美味い紅茶やバターの味の缺乏を感じて居た。長崎ではホテルに泊るといふのが、樂しみの一つでもあつた。

停車場前の廣場から大通りに出ると、電車の軌道が幌から見える。香港、上海航路廻漕業の招牌が見える。橋を渡る。その間に、電車が一台すれ違つて通つた。人通りの稀な街路の、右手は波止場の海水がたぷ〳〵よせて居る低い石垣、左側には、鐵柵と植込み越しに永年風雨に曝された洋館の閉された窓々か、まばらに光る雨脚の間から、動かぬ汽船の錆びた色を見つめて居る。左右に其等の靜かな、物懶いやうな景物を眺めつ〻、俥夫は急がず膝かぶを曲げ、淺い水たまりをよけ〳〵駈けて居るのだが——其にしても、と、私は幌の中で怪しんだ。何故こんなに人氣ない大通りなのであらう。木造洋館は、前庭に向つて連つて居、海には船舶が浮んで居るが、四邊人の聲といふものがしない。遠方の熾んな活動を暗示するどよめきさへ、雲近い雨あかりの其邊には響いて來ない。商館の番頭小荷揚の人足も、長崎では今

けの老人が通るといふ夏景色であつた。反射の強い日光を洋傘一つにさけて島津家の庭を觀、集成館を見物し、城山に登る。城山へは、宿の横手の褒峽道から、物ずきに草樹を掻き分け攀ぢ登つたのだから、洋服のYは泰然、私はひどく汗を掻いた。つい目の先に櫻島を泛べ、もうつと暑氣で立ちこめた海霧の下に漣一つ立てずとろりと輝いて居た灣江、廣々と眞直であつた城下の街路。人間もからりと心地よく、深い好意を感じたが、思ひ出すと、微に喉の渇いたやうな、擦りつけられた感覺が附隨して甦つて來る。そこを立つて來た夜半に、計らず聽いた雨の音故一きわすが〳〵しく、しめやかに感じたといふこともあらう。鳥栖（とす）で、午前六時、長崎線に乘換る時には、歩廊を歩いてゐる横顏にしぶきを受ける程の霧雨であつた。車室は、極めて空いて居る。一體、九州も、東海岸をずーつと南に降る線、及び鹿兒島から北に昇つて長崎へ行く列車など、實に閑散なものだ。窓硝子に雨の滴のついた車室に居るのは、私共と、大學生一人、遠くはなれて官吏らしい男が二人乘り合はせて居るぎり。海岸に沿ふて、汽車は山腹を潜つては出、潜つては出、出た時にやゝ荒れ模様の海の景色が右手に眺められる。私共は、今日雨降りで却つてよかつたと思つた。南風崎（はえのさき）、大村、諫早（いさはや）と通過する濱の黒々と濡れた磯の巖、灰色を帶びた藍にさわめいて居る波の襞、舫つた舟の檣が幾本となく細雨に揺れ乍ら林立して居る有様、古い版畫のやうな趣で忘られない印象を受けた風景全體の暗く強い藍、黒、灰色だけの配合色は、若し晴天だつたら決して見られなかつたに違ひない。

長崎のステイションも、夜來の雨で、アスファルトが泥でよごれて居る。僅かの旅客の後に跟き、私共は漠然期待や好奇心に滿ちて改札口を出た。赤帽と、合羽を着た數人の俥夫が我々をとり卷いた。

「お宿はどこです」

「お俥になさいますか」

「――ふむ――未だ宿をきめて居ないんだが、長崎ホテル、やつて居ますか」

「あすこはもう廢めました」

すると、俥夫達の背後に立ち、頻りにYを觀察して居た大兵の青帽をかぶつた詰襟の案内人が

「上海へおいでゞすか」

と訊ねた。我々は苦笑した。長崎といふと、私共は古風な港町を想像し、古びながら活潑に整つた市街の玄關を控えて居ると思つて居た。降りて見ると、改札口につきものゝ嫌な宿引きさへ一人も居ない。其は心持よいが、タクシーもなく、激しい速力で昨夜から、長崎へ、長崎へと、馳りつゞけて來、緊張した神經が突然無風帶に落ちこんだやうな緩慢さを感じた。悠くり問答した結果、私共は二台の俥に乘つた。長崎唯一のホテルであるジャパンホテルに先づ行つて見ることになつたのだ。日本風の宿屋は二三、名を調べてあつた。然し私共は京都を出たばかりから、美味い紅茶やバターの味の缺乏を感じて居た。長崎ではホテルに泊るといふのが、樂しみの一つでもあつた。

　停車場前の廣場から大通りに出ると、電車の軌道が幌から見える。香港、上海航路廻漕業の招牌が見える。橋を渡る。その間に、電車が一台すれ違つて通つた。人通りの稀な街路の、右手は波止場の海水がたぷ〱よせて居る低い石垣、左側には、鐵柵と植込み越しに永年風雨に曝された洋館の閉された窓々が、まばらに光る雨脚の間から、動かぬ汽船の錆びた色を見つめて居る。左右に共等の靜かな、物懶いやうな景物を眺めつゝ、俥夫は急がず膝かぶを曲げ、淺い水たまりをよけ〱駈けて居るのだが――其にしても、と、私は幌の中で怪しんだ。何故こんなに人氣ない大通りなのであらう。木造洋館は、前庭に向つて連つて居、海には船舶が浮んで居るが、四邊人の聲といふものがしない。遠方の熾んな活動を暗示するどよめきさへ、晝近い雨あかりの共邊には響いて來ない。商館の番頭小荷揚の人足も、長崎では今

が猜疑の時間でゞもあるのだらうか。一つの角を曲る時、帆の上を金招牌が掠めた。黒地に金で"Exchange. Chin Chu Riyao." 然し、こゝでも硝子戸の陰に、人の姿は見えない。

○

五月の文藝春秋に、谷崎潤一郎さんが、上海見聞記を書いて居られる。なかに、ホテルについて、アチエスティックが東洋第一と云ひ乍ら、ボルド酒のよいのを持たない。「長崎のジヤパン・ホテルにだつて一九一一年のブルガンディー酒があるくらゐだのに」云々とある。讀んだ時、私は思はず頬笑んだ。秘密な愛すべき可笑しさが、ジヤパン・ホテルにだつてと云ふ四字からひとりでに湧き上つて來るのだ。

今も云つた通り、異樣に森閑とした波止場町から、曲つて、今度は支那人の雜貨店など目につく横丁を俥は走つてゐる。私は、晴やかな希望をもつて頻りにその町のつき當り、小高い樹木の繁みに注目して居た。外でもない。我等のジヤパン・ホテルは確に其處に在るらしかつた。緑の鮮かな梢から、薄クリーム色に塗料をかけた、木造ながら翼を廣やかに張つた建物が聳え立つて居る。そのヴェランダは遠目にも快活に海の展望を恣まゝにして居るのが想像される。大分坂の上になるらしいが、俥夫はあの玄關まで行くのであらうか。長崎名物の石段道なら、俥は登るまいなど、周圍から際立つて瀟洒でさへある遙かな建物を眺めて居ると、私は俥の樣子が少し妙なのに心付いた。俥夫は、駈けるのを中止した。のた〳〵歩き、段々廣くもない町の右側に擦りよつて行く。曲角でも近いのかと、首をさし延し、私は、瞬間、自分の眼を信じ得なかつた。ジヤパン・ホテルは、彼方の丘のクリーム色の輕快な建物などであるものか。つい鼻の先に横文字の招牌が出て居る。而も、その建物を塗り立てたペンキの靑さ！毛蟲のやうに靑いではないか。私の驚きに頓着せ

車夫は梶棒を下した。ポーチに、棕梠の植木鉢が並べてある。傍に、擴げたまゝの新聞を片手に、痩せ、ひどく平たい顱頂に毛髪を禮儀正しく梳きつけた背廣の男が佇んで居る。彼は、自分の玄關に止つた二台の車を、周章さはがず眺めて居たが、荷物が下り、つゞいて私が足を下すと、始めて、徐ろに挨拶した。

「いらつしやい」

ホールへ入り乍ら、そして、外側はあんな青蟲のやうに青かつたのに、内部一面は見渡す限り茶色なのに又異つた暑氣を感じ乍ら、私は

「一寸お晝がたべさせて欲しいのだが……」

と告げた。――これは豫定の行動であつた。若し第一瞥が餘り思はしくなかつたら、お晝だけに仕て置かうといふ停車場での相談を、私は適宜に運用したに過ぎない。

「どうぞこちらで暫くお待ち下さい」

番頭が、ホールの隣の戸を開けた。

南歐風に、中庭を圍んでぐるりと奥ゆきある柱廊づきの二階が建廻されて居る。矢張綠色ペンキ塗の大きい部屋の鎧戸は閉り、中庭に咲き盛つて居る躑躅の强烈な赤い反射が何處となくちらついて居るやうだ。私は、必要な場所々々を探險して、戻つた。Yは、明治十七八年頃渡來したまゝ歸るのを忘れた宣教師の應接間のやうな部屋で、至極安定を缺いた表情をして待つて居る。

「――支那的ね」

「この位の規模でないと遣つて行けないんだな、長崎といふところは……」

「――駄目でせう？」

「どんなだつた？」

勝氣な女らしく潔癖なYが、氣味わるげに訊くので、私はふき出し、少し揄揶ひたくなつた。

「其那ぢやあないわ。支那へ來たと思へばよすぎる位よ。――でも――居さうね」

「何が」

「なんきんむし」

「御免、御免！、風呂とはどの穢いのだけはかなはない」

――どうもホテルに居るといふ氣分がしない。すると、幾許もなく、建物の一隅から素晴らしい銅鑼の音が起つた。がらんとした建物ぢゆうにはびこる無氣力な靜寂を、震駭させずには置かないといふ響だ。食事の知らせである。

がつしり天井の低い茶づぽい食堂の壁に、夥しく花鳥の額、聯の類が懸つて居る。棚には、紅釉薬の支那大花瓶が飾つてある。其上、まだ色彩の足りないのを恐れるかのやうに、食卓の一つ一つに、鷄頭、矢車草、金蓮花など、一緒くたに盛り合はせたのが置いてある。年寄の、皺だらけで小さい給仕が、出て來た。空腹ではあつたし、料理は決して不味くはなかつた。けれども、何と云はふか、このごたく種々な色ばかり目につく食堂に物を食べて居るのは、我々ただ二人きりだといふことは、食ふと云ふ動作に妙な自覺を與へられる――つまり、その感じを少しつきつめて行くと度はづれな人氣なさと錯雜した色彩の跳梁とで何處やらアラン・ポウ的幻想が潛んで居さうな室内で、頭骨を上下させ咀嚼作用を營んで居る孤獨な自分等が、變に悲しいといふことになるのだ。味覺から來る美味いといふ感覺は私共を頻に陽氣にさせようとする。けれども、周圍の雰圍氣は、嗜眠病のやうに人を滅入らせる。――

互に居心地わるく思つて居ると、もう食事の終りかけに、やつと一人、若い亞米利加人が入つて來た。私共は本能的な人なつかしさで、彼が椅子の背を掴んで腰かけるのや、卓子の下で長い脚を交互に動かしたりするのを眺めた。衝立の陰から、前菜の皿を持つて給仕が現れた。辭儀をする。腸詰やハムなどの皿を出す。若い亞米利加人は、其を一瞥したが　フオークを取り上げようともせず、いきなり顎ぢゆうで大きな大きな、涙の滲み出すやうに大きな欠伸をした。

「――あゝ、ねぶたいです………」

眠たいのにはもう馴れて居るとでもいふやうに、給仕は心得た顔つきで前菜をすゝめなほした。

――あゝ、ねぶたいです………

私共は、一時間ばかりで、又荷物を持ち、ジヤパン・ホテルを出た。

○

一風呂浴び、卅分程假寢をすると、Yは、

「あゝ、やつとせい〱した」

と云ひ乍ら元氣に目を覺した。その聲で、私も目を開いた。時間にすれば、僅三時間足らずの前に經驗したばかりのことだのに、この福島屋の長崎港を見渡す疊の上で目がさめた瞬間、ジヤパン・ホテルに行つたのが、いつか遠い昔のやうな氣持がした。Yも、同じやうな氣持がしたらしい。

「三菱造船所が見えるね」

と、手摺のところに居たが、

「一體、あのホテル、どの見當なんだらう。こゝから…………」

女中をよんで地圖をとりよせた。

「さて、そろ〱研究にとりかゝるかな」

生來地圖好きなYは、新しい町に到着し、先づ其處の地圖を擴げる時、獨特な愉快を感じるらしい。今度、長崎に來たのだつて、謂はゞYのこの地圖に對する情熱が大分原因となつて居た。最初、私共は、小石川老松町の家に居て、四月二十七日に自分達が東京驛から九州へ出發しよう等と夢にも考へて居なかつた。三月初旬に、Yは大腸カタールをした。家に居ては食物の養生が嚴格に行かない。「病院へ入る方がいゝのよ。」と私が云つた。「さう——だが温泉に行きたいな。」この一言が、我々を九州まで運ぶ機緣にならうと誰が思ひがけよう。「温泉て——何處？」「別府どんなだらう。」「いやよ、駄目でせう、彼那處！俗地らしくてよ。」四月十五日過、廿日過、Yの或仕事のきりがつく見込みがついたら、私共は遂に自制力を失つた。仕様がない、何處から旅費が出るのよ、と困りつゝ、嬉しさ一杯で私達は神戸迄の切符を買つてしまつた。紅丸で別府へ行つた。こゝは豫測の通り餘り氣に入らず、豐後の臼杵へ廻つた。臼杵から先、中津の自性寺を見、福岡の友でも訪ねるか、いづれにせよ、輕少の財嚢に準じて謙遜な望みしか抱いて居なかつた。臼杵の、日向灘を展望する奇麗な公園からK氏の別莊へぶら〱歸る時であつた。Y、「どうする？矢張り中津へ廻る？」「——ふうむ…………」二人ながら進まない氣持がある。天然痘がひどいのが一つ、小杉未醒氏の「大雅堂」によつて、幾分自性寺の所藏品に對する考への變つたのが第二。「先刻地圖を見たら、南を廻つて長崎まで行くのも、小倉の方から行くのも大して違はないらしい。——折角來たんだから、どう？一廻りしちやはふちやあないか」それこそ素敵だ！Yは、卓越したパイ燒職人のやうに、上手に地圖と時間表とを麵棒に使ひ、貧弱な旅費の捏粉を巧に長崎まで延して來たのであつ

た。

宿を出、兩側、歩道の幅だけ長方形の石でたゝんだ往來を、本興善町へ拔け、或角を右にとる。町家は、表に細かい格子をはめた大阪風だ。川がある。柳の葉かげ、水際まで石段のついた支那風石橋がかゝつてゐる。橋上に立つと、薄い夕霧に柔められた光線の中に、兩岸の緑と、次から次へ遠望される石橋の異國的な景色は、なか〳〵美しかつた。

崇福寺は、黄檗宗の由緒ある寺だが、荒廢し、入口の處、白い築地の崩れた間を通つて行くやうになつて居る。龍宮造りの山門を潜り石段を登ると、風化作用によつて一種趣のついた石欄がある。奥に、朱塗の唐門があり、鍵の手に大雄寶殿——本堂となつて居る。古色を帶びた甃の上の柱廊を以て、護法堂その他の建物が聯絡されて居る。總て朱塗だ、新に餘り品質のよくない塗料で修繕した箇處もある。歴史的に古く、特別保護建造物となつて居るのだが、私共は大して心を打たれなかつた。後に迫つて山を負つて居る爲、陰濕だ。それに昔の支那——明人の建築には思ひがけず木材など細いのが使用されて居、こせつき、複雜で、悠暢としたところがない。建物と建物とをつなぐ甃の柱廊は、美觀の上で實に重大な役目を持つものと思ふ。崇福寺の建物は、狹いところに建てられて居る故か、大切な柱廊が、その通景に餘韻を生ぜしむるだけ堂々と伸びやかに横はつて居ない。淺く、たゞ禮拜する寺で、精神の活躍する場所として必要な底强いゆとりが建築上缺けて居るといふ印象である。木材が一面朱塗だといふこともその感じには關係があるらしい。

住職がばた〳〵扉を閉めて行つた本堂前の、落葉のある甃を歩き廻り乍ら、私共は、懷しく京都の黄檗山萬福寺の境内を思ひ出した。去年、始めて私は觀たのだが、彼處はよかつた。全くよかつた。丁度今より數日遲いやはり晩春であつたが、山門の左右の聯の懸つた廊門から、前庭の松花を眺めた氣持。多分天王殿の左翼からであつたらう。竹林の蔭

をゆるやかな傾斜で蜒々と荒れるに任されて居た甃廻廊の閑寂な印象。境内一帶に、簡素な雄勁な、同時に氣品ある明るさといふやうなものが充滿して居た。建物と建物とを繋いだ直線の快適な落付きと、松葉の薫がいつとはなししみこんだやうな木地のまゝの太い木材から來る感銘とが、與つて力あるのだ。

黄檗の建物としてはどちらが純正なものなのか。或は唯造營者の氣禀の相異だけで斯うも違ふのか。私共は解答者を得ない疑問を持ち合つたまゝ、再び山門を出た。唐門の剝落した朱の腰羽目に、墨でゴシック風の十字架の落書がしてあつた。木庵の書、苑道生の十八羅漢の像などを藏して居るらしいが時間がおそく其等は見ず。

片側には佛具を商ふ店舗、右は寺々の高い石垣、その石垣を覆ふて一面こまかい蔦が密生して居る。狹い特色ある裏町をずつと興福寺の方へ行つて見た。もう夕頃で、どの寺の門扉も鎖されて居る。ところどころ、左右から相通る寺領の白い築地の間に、やつと人一人通れる位の壞れた石段道が、樟の若葉からしたゝる夕闇がくれ、爪先のぼりに風頭山へ消えて居るのが眺められた。

雨あがりの日であつた爲か、長崎の街は、同じものさびるにしても、奈良京都などゝは趣を異にして居たのを感じた。奈良などの建物が古びたのは、あの乾燥した日光と熱とに照りつけられ徐に輕いさら〱した塵と化すと云つた風の古びかただ。長崎のは濕つぽい。先づ黝づみ、やがては泥に成ると云ふやうに感じられる。重い。そして、沈鬱だ。

○

昨夜深更まで碁を打つて居た隣室の客、もう朝飯を食べて居る聲がする。Y、切なさうな顔つきで枕についたまゝ

「——あなた一人で行つて」

と云ふ。私が服裝を整へたり、食事をしたりするのを、片寄せた床の中から、風邪引きの子供のやうに眺めた。
「こんなものさせるから、痛い目をしたり不愉快な思ひをする――と、ぢや誰もしないぢやないの」
「――我慢してゐらつしやい、いゝ子だから。大痘痕になるところを助つたんぢやあないの」
これは、種痘問答である。私共は別府に居る時既に知人から流行の天然痘豫防の注意を受けて居た。臼杵へ行くと、其處では全町民強制種痘をしたといふ。まして、長崎へ行くのなら危險此上ないといふK氏の言葉で、計らず臼杵町費の一端を掠め、S氏の種痘を受けた。私のは一日痒くそれきり。Yのは、吸收がよく怪しいと思つて居ると、十四五年ぶりの種疱瘡では無理もない、鹿兒島の市を歩いて居る頃からそろ〳〵妙になつて來た。Y、繃帶の上からたゝき乍ら「大丈夫、何でもない、ね、ね」と氣休めを求めて居たが、昨日は氣分惡く、目が醒めたら發熱して居た。K氏からの紹介で、長崎圖書館長、永山時英氏を訪ねる豫定なのであつた。私は獨り俥で出掛けた。

圖書館は、諏訪公園の中に在る。グラント將軍が來朝した時建てた交親館を改造した小じんまりした建物だ。館長室に故渡邊與平の油繪と、同じ人の墨繪の竹の軸がかゝつて居た。永山氏は、長崎史研究者として知られて居る。其節、永山氏も云はれたことだが、長崎は、日本文明史に重大な關係を有す特別な都市であり乍ら、未だ博物館を持つて居ない。種々の研究材料は、切支丹に關するもの、海外貿易に關するもの、其他、皆散在して居る。舶來された藝術品など、極めて立派なものが商人の藏に仕舞はれて居る由。其故、長逗留をし、緣故を辿つて氣永く研究しようとする篤志家は兎も角、私のやうに貧しい豫備知識と短い時間しか持ち合はせず、而も、過去の長崎が經驗した文化史的活動の實證を一瞥したい者は、永山氏を訪問するらしい。其數は一年を通算すれば決して尠くないことも事實らしい。圖書館は小規模の博物館を兼ねてゐるのだ。豐富な資料を各商人が持ち合はせ乍ら、組織立つた博物館にして見る氣にならない長崎人の心

持も、私は興味を以て感じた。ざつと見た丈だが、其氣分を、集成館によつて代表された薩摩人の氣質と比べると感興深い。薩摩の人々は、シヤヸエル渡來當時から、一貫した自己の生活意識、價値批判とでも云ふべきものを持して、或點理智的に海外文化を、古來の傳統と對立させて居た。持ち前の進取の氣風で、君主がローマ綴で日記をつけ、ギヤマン細工を造り、和蘭式大溶鑛爐を築き、日本最初の莫大小工場を試設したが、其動機には、外國の開化を輸入して我日本を啓蒙しようとする、明かな受用の意志が在る。長崎の人々が南蠻、明の文化に接した工合は全然違ふ。薩摩人が或距離を置いて其處に視たものを、長崎港の住人は體中に浴びた。水と一緒に腹の中に飲んだ。薩摩人にとつて知識としてのみ存したものが此方では日常生活の中に血に混じて流れるものとなり。商人の感情や氣質の一部をなすに迄融合して仕舞つたのではあるまいか。私共は自分の背中を、あることは明に知つて居るが他人の容貌ほど對照として意識し難いやうに、長崎の穩やかな市民は、第三者が當然爾あるべしと豫想する丈充分史實を客觀し難いのではあるまいか。

軈て、書庫に導かれた。窓際の硝子函の裡に天正十五年の禁敎令 出島和蘭屋敷の繪卷物、對支貿易に使用された信牌、航海圖、切支丹ころびに關する書類、有名なフエートン號の航海日誌、ミツション・プレス等。左の硝子箱に、シーボルト着用の金モウル附禮服が一着飾つてある。小さい陶器のマリア觀音、踏繪、こんたすの類もある。ミツション・プレス、その他切支丹關係の書類は、歷史的に興味深いばかりでなく、芥川氏が數篇の小說中に巧に活用し、その藝術的効果を高めて居るやうな一種獨特な用語、文體で書かれて居る點、文學的な面白さも充分ある。「あるじぜすきりしと」「ぴるぜんまりや」「あんじよ」「はらいそ」「いんへるの」古めかしい平假名で懇に書かれた其等の文句には、微に詩情を動かすものさへある。けれども、私がたんのうする迄居るには、案内役に立たれた永山氏が多忙すぎる。數日の中にジヤヅに出發されるところなのだ。福濟寺、大浦、浦上天主堂への紹介を得、宿に歸つた。

獨りで待たされて居たY、退屈しぬき、私の顏を見るといきなり云ふことには

「——どうだつた？プテイ・ペダント」

二時頃から小糠雨が降り出す。長崎に切支丹傳道が始つて間もなく建つた、とーどのさんた寺の跡だといふ春徳寺や、怪談の絡まる切支丹井戸の在る本蓮寺などへ行つて見る豫定を變へ、悠くり家居することにした。宿の高い欄干から外を眺めると、雨にけむる灣内の景色が見渡せる。眼下は、どこか人家の背戸だ。荒壁のうしろに、小さい一枚畑があつて蔬菜が作つてある。手拭をかぶつた女子が、雨にかまはず畝のところにかゞんで何かして居る。其がいつまでも遥か下の方に小さく見えた。

○

雨中、福濟寺を見る。矢張り黄檗宗で、明の歸化人、陳冲の子潁川藤左ヱ門が盡力して盛大ならしめた寺だ。門前で俥を下り、高い石段を登りつめて甃の道を左に數歩行くと、大觀門から左右に廻廊のある青蓮堂が眺められる。黒い甃と朱の建物が、明るい細雨に濡れて一種の美しさを漂はせて居た。私共は大庫裡の森とした土間に立つて案内を乞うた。二聲三聲呼ぶと、ことこと階子を下りて來る子供の跫音がする。家庭的雰圍氣を感じ、頬笑んだ我々の前に現はれたのは、十ばかりの洋服を着た女の子、赤ちやんを重さうに抱いて居る。その赤ちやんが、居留地の西洋の嬰兒が着る通り裾の長い、白い洋裝に纏まれて居る。女の子は、私共を見ると、直ぐ引かへして行つた。

「お父さん、お客さまあ」

と、晴やかな聲が聞える。――三浦實道氏に、永山氏からの名刺を出した。

崇福寺などゝ同様、この福濟寺も朱塗で、大棟に鯱や寶珠のついた明風建築だが、崇福寺よりは規模も大きいし、見た目に幾分嚴正な感じを與へられる。青蓮堂の軒に、紫壇を枠にした古風なぎやまん細工の大燈籠が吊並べてあるの等、地方色豊かだ。青蓮堂に藤左エ門の像、護法堂の有名な彫塑大布袋、大方丈の沈南蘋の牡丹の繪などを見せて貰つた。けれども、私共に最も感銘を與へたのは、大觀門前に佇んで、低い胸欄越しに、模糊とした長崎市を俯瞰した時の心持だ。左手に、高くすつきり塔形に石をたゝみ上げた慈海燈を前景とし、雨空の下にぼんやり遠く教會堂の尖塔が望まれる。櫛比した人家の屋根の波を踰え、鈍く光りつゝ横はつて居る港の展望、福濟寺は、長崎港の一番奥、東北よりの丘陵の上に位して居る。埋立地もなかつた昔の濱邊から此處迄は近かつたに相違ない。海路平安といふ文字を刻された慈海燈は、唐船入津の時、或は毎夜、一點の光明を暗い夜の海に向つて投げかけた。海上から、人の世の溫情を感じつゝ其瞬きを眺めた心持、又、秋宵此胸欄に倚つて、夜を貫く一道の光の末に、或は生還を期し難い故山の風物と人とを忍んだだらう明人の心持。……茫漠として古寂びたノスタルヂャが霧の雨に甦つて來るやうに感じた。

福濟寺から受ける全印象は、此寺が、曾て僧院として存在したといふより、明人及長崎先覺者等の間に倶樂部のやうな役目をつとめて居たらしいことだ。廣大な方丈に坐つて點滴の音を聽いて居たら、今日は沈君の繪を一つ見ようと思つて、などゝ談笑し乍ら幾人もの支那人が疊を踏んで來た氣勢を感じるやうであつた。

○

毎日よく雨が降ることだ。名物の紙鳶揚も春とともに終つた長崎の若葉を濡して、毎日雨が降る。Yは、哀れな、騎が漸く心が重いので、雨を冒してまで方々を歩き廻る氣になれず、從つて私も部屋で、宿から借りた長崎風土記など讀む。可愛く若い福島屋の細君が、

「――鶴の枕でも、御覽なりませんか、何でも、揚貴妃が使つたものなんでございますつて。頭をのつけると鶴の鳴聲が致しますんださうです」

頼山陽が、其鶴の枕を鳴して見て、出來た詩が其家の寶になつて有る由。

――長崎といふところは、然し不思議なところだ。鹿兒島から着いた時、ジャパン・ホテルに居た數時間、實に堪へ難い程町ぢゆうにはびこる物懶さ、眠さ、不活潑を感じたが、一日一日、滯在の日が重るにつれ、逆に快い落付きを感じて來た。降りこめられ、宿の三階で午後を暮しても、其處が旅先の泊りであるといふ淋しさ、寥しさなどちつとも感じない。町の空氣に、其位ひろい傳統的な抱擁力がある證據と思ふ。

愈々今日は立たなければならないといふ日。雲は斷れたが、強い風が出た。すつかり霽れ上つたといふのでもない。思ひ出したやうに大粒な雨が風と一緒に横なぐりにかゝる。

Y、

「――だから、貧乏旅行はいやさ」

苦笑せざるを得ない。自働車で大浦天主堂に行く。松ケ枝川を渡つた山手よりの狹い通りで車を下り、堂前のだら〳〵坂を登つて行く。右手に番小屋が在る。一人の爺さんと、拜觀に來たらしいカーキの兵卒が居る。私共は、永山氏からの名刺を通じた。

「日本のお方か、西洋のお方か、どちらへやるかね」

「どちらでもいゝのです。――拜觀出來れば……」

すると、爺さんは名刺をそのまゝ私にかへし乍ら云つた。

「拜觀なら、儂でえゝ。今、葬式で誰も居なさらん。そこの右の方から入つて見なさい。棚の中へさへ入らんけりやどこでも見なすつてえゝ」

「――勝手に拜見してもわかりますか」

「儂はな、もう年よりで病氣だから、行つてもえゝが說明は出來んの、こゝが苦しいから」

彼は胸のところを抑へて見せた。

「――たゞ見るだけ……」

折角來たのに失望も感じたが、爺さんの眼付と言葉は朴直を極め、强いて其以上何と云ふ餘地もない。

私共は左に花壇のある石段を登り、日本信徒發見記念のマリヤ像の立つて居る正面玄關の右手扉を云はれた通り石押して見た。開かない。ぐるりと裏に廻ると別に入口があり、此處は易々と開いたが、司祭の控室らしく、白い祭服のかゝつて居る衣裳棚などがある。第一、塵もない木の床を下駄で步いては惡さうだし、困つて私は彼方此方を見渡した。樟の木蔭に、附屬家屋のペンキを剝して、職人が一人働いて居る。私は其男に尋ね、灌木の茂みをわけて通じる石段を更に半丁ばかり登つた。頂上で土地が展け、中央に十字架の基督像を繞つて花壇がある。雲の斷れ目から照り出した初夏の日光に、ゼラニユウムや蔓薔薇の紅の花が、純白な大理石の基督の肌と、つよい對照で目を射た。人氣ない。陰氣な程深い張出しつきの敎師館を修繕中で、朽ちた床板がめくられ、濕つぽい土の匂がする。テニスコートらしい空

地で、雜の草を女がむしつて居る。私はやつと、御堂内では一切挙物を許さないといふこと丈を知り得、荒れた南歐風の小徑を再び下つた。御堂の内部は比較的狭く、何と云はふか、憂鬱と、素朴な宗教的情熱とでも云ふやうなものに充ちて居る。正面に祭壇、右手の迫持の下に、聖母まりあの像があるのだが、ゴシック風な迫持の曲線をそのまゝ利用した天蓋の内側は、ほんのり黄がかつた優しい空色に彩られて居る。そこに、金の星が鏤めてある。星は、嬰兒が始めて眼を瞠つて認た星のやうに大きい。つゝましい冠をいたゞいた「いと貞操なる御母」まりあは、その稚い美感の制作である天蓋に護られ、献納の蠟燭の焔に少しばかりすゝけ給ふた卵形の御顔を穏かに傾け佇んで在られる。祭壇の後のステインド・グラスを透す暗紅紫色の光線はこゝまで及ばない。薄暗い御像の前の硝子壜に、目醒めるやうなカリフオルニヤ・ポピーの一束が捧げてあるのが、いぢらしい。隅に、紅金巾の帷を垂れた懺悔台がある。私共が御堂内に居る間に、女が二人參拜に來た。祭壇に近い柱のかげに坐り、包みから白い布を出してヴェイルとする。その被衣姿、二十六聖徒殉教圖などに描かれて居るまゝであつた。

同じ日に浦上の天主堂も觀た。大浦天主堂は日本最古の建築、浦上のは最大の建物だ。浦上の切支丹信徒が經驗した受難の種々は世に知られて居る。この建物も、始め起工した時から近年完成する迄には數十年を閲し、信徒の中には、自分の息子を大工、左官に仕立てその勞力を獻じて竣工させたといふ話も聞いた。御堂の大さは確に、大浦天主堂の數倍あるであらう。合唱隊もあるらしかつた。けれども、建物ががらんとし過ぎ、明るすぎ、正面祭壇の白亞壁の前の巨大な花瓶に、厚紙細工らしい大棕櫚の飾が立てゝあるのなど、アフリカの沙漠を聯想させた。こゝには、共に大浦のやうなピユーがない。一面滑らかな板敷で、信徒は皆坐るものと見える。壯大な柱の根もとに穢い木綿座布團が疊んでつくねられてあるのを見ると、異樣に未開な感じがした。未開な、暗い頭惱が一むきにぜすきりしとを信奉し、まことに

「日本のお方か、西洋のお方か、どちらへやるかね」

「どちらでもいゝのです。――拜觀出來れば……」

すると、爺さんは名刺をそのまゝ私にかへし乍ら云つた。

「拜觀なら、俵でえゝ。今、葬式で誰も居なさらん。そこの右の方から入つて見なさい。柵の中へさへ入らんけりやどこでも見なすつてえゝ」

「――勝手に拜見してもわかりますか」

「俵はな、もう年よりで病氣だから、行つてもえゝが説明は出來んの、こゝが苦しいから」

彼は胸のところを抑へて見せた。

「――たゞ見るだけ……」

折角來たのに失望も感じたが、爺さんの眼付と言葉は朴直を極め、強いて其以上何と云ふ餘地もない。

私共は左に花壇のある石段を登り、日本信徒發見記念のマリヤ像の立つて居る正面玄關の右手扉を云はれた通りに押して見た。開かない。ぐるりと裏に廻ると別に入口があり、此處は易々と開いたが、司祭の控室らしく、白い祭服のかゝつて居る衣裳棚などがある。第一、塵もない木の床を下駄で歩いては惡さうだし、困つて私は彼方此方を見渡廻した。樟の木蔭に、附屬家屋のペンキを剝して、職人が一人働いて居る。私は其男に尋ね、灌木の茂みをわけて通じる石段を更に半丁ばかり登つた。頂上で土地が展け、中央に十字架の基督像を繞つて花壇がある。雲の斷れ目から照り出した初夏の日光に、ゼラニユウムや薔薇の紅の花が、純白な大理石の基督の肌と、つよい對照で目を射た。人氣ない。陰氣な程深い張出しつきの教師館を修繕中で、朽ちた床板がめくられ、濕つぽい土の匂がする。テニスコートらしい空

地で、緑の草を女がむしつて居る。私はやつと、御堂内では一切穿物を許さないといふこと丈を知り得、荒れた南歐風の小徑を再び下つた。御堂の内部は比較的狹く、何と云はふか、變哲と、素朴な宗教的情熱とでも云ふやうなものに充ちて居る。正面に祭壇、右手の迫持の下に、聖母まりあの像があるのだが、ゴシック風な迫持の曲線をそのまゝ利用した天蓋の内側は、ほんのり黄がかつた優しい空色に彩られて居る。そこに、金の星が鏤めてある。星は、嬰兒が始めて眼を瞠つて認た星のやうに大きい。つゝましい冠をいたゞいた「いと貞操なる御母」まりあは、その稚い美感の制作である天蓋に護られ、獻納の蠟燭の焰に少しばかりすゝけ給ふた卵形の御顏を穩かに傾け佇んで在られる。祭壇の後のステインド・グラスを透す暗紅紫色の光線はこゝまで及ばない。薄暗い御像の前の硝子壜に、目醒めるやうなカリフオルニヤ・ポピーの一束が捧げてあるのが、いぢらしい。隅に、紅金巾の帷を垂れた懺悔台がある。私共が御堂内に居る間に、女が二人參拜に來た。祭壇に近い柱のかげに坐り、包みから白い布を出してヴエイルとする。その被衣姿、二十六聖徒殉教圖などに描かれて居るまゝであつた。

同じ日に浦上の天主堂も觀た。大浦天主堂は日本最古の建築、浦上のは最大の建物だ。浦上の切支丹信徒が經驗した受難の種々は世に知られて居る。この建物も、始め起工した時から近年完成する迄には數十年を閲し、信徒の中には、自分の息子を大工、左官に仕立てその勞力を獻じて竣工させたといふ話も聞いた。御堂の大さは確に、大浦天主堂の數倍あるであらう。合唱隊もあるらしかつた。けれども、建物ががらんとし過ぎ、明るすぎ、正面祭壇の白亞壁の前の巨大な花瓶に、厚紙細工らしい大棕櫚の飾が立てゝあるのなど、アフリカの沙漠を聯想させた。こゝには、共に大浦のやうなピユーがない。一面滑らかな板敷で、信徒は皆坐るものと見える。壯大な柱の根もとに穢い木綿座布團が疊んでつくねられてあるのを見ると、異様に未開な感じがした。未開な、暗い頭腦が一むきにぜすきりしとを信奉し、まことに

神の羊のやうに一致團結して苦難に堪えて來た力は、驚くべきだ。公平な立場から書かれた歴史を讀むと、私共はシヤギエル・ワリニヤニ等初期の師父——伴天連達が、神の福音をつげるに勇ましかつたと同時、なか〳〵實際處世上の手腕をも具備して居たことをしる。當時、其師父等と交誼のあつた日本の君子等は、勿論知識と信仰とに呼醒されたこともあつたに違ひないが、純粹に其渴仰のみによつて左樣だつたのだらうか。日本に於ける基督教布教史は當時亂世の有樣に深く鋭く人生の疑問も抱いた敏感な上流の若い貴公子、女性などの無垢な傾倒と、この浦上の村人のやうな幼兒の魂を持つた人々の獻身とによつて、如何に美しく、如何に悲しくされて居るかしれないと思ふ。數多く來た伴天連の中には、此等の人々のゆるがぬ信仰の殆んど神秘的な力をまのあたり見て、自分の信仰をも高めた者が一人もなかつたと、どうして云へよう。其にしても、切支丹宗のどの福音が此那に久しい傳統となるまで强く村人を捕へたのか。そして現在一九二六年の生活と信仰とはどんな工合に關係し、調和し、生きて居るのだらうか。この疑問は、天主堂から出て歸り途、若い二三人の娘が揃つて御堂への坂を登つて來るのに出會つて一層はつきり私の心に起つた。本願寺といふ寺の廣間は斯うもあらうかと思はれる浦上天主堂の板の間の大柱の根に、薄穢く極りわるげにつくねられて居た座布團どもの形恰を思ひ出すと、私の胸にはアナトオル・フランスの一つの物語が自然に浮んで來る。その題は、聖母の曲藝師。

浦上は、今長崎市から電車で僅卅分ばかりの郊外である。市中との間は、都會の外廓につきもの〻雜然さの中にある。私共は大浦の天主堂に居るうちに、天候が定つたらしいので俄に思ひ立ち、大浦停留場から電車に乗つたのであつた。

終點から、細い川沿ひに、車掌の敎へて呉れた通り進んだが、程なく二股道に出た。一方は流れに架つた橋を越し

て、小高い丘の裾を廻る道、一方は眞直畑を通る道。何しろ烈しい風の吹きやうだ。眞正面から吹きまくられて進むことは、二人とも寸時も早く免かれたい。彼方から女學校一二年らしい少女とその弟らしい子が連立つて來かかつた。私はすぐ
「天主堂へは、どつちの路が近いでせう」
と訊ねた。少女は、困つた表情で私を見、自分の弟の顔を見た。
「さあ――私存じませんが……」
が、頓智で
「御堂ですよ」
と、註釋を加へた。――少女は育ちのよい娘らしく、わだかまりない容子で
「あゝ、御堂！」
と叫んだ。御堂なら、橋を渡つた方が近いのださうだ。
　赤土の泥濘を過ぎ、短い村落の家並にさしかかつた。道のところどころに、雨あがりの大きい泥たんこが出來て居る。私共二人、もう行手の丘の上に天主堂の大きく新しい城のやうな建物を望み何心なく喋り乍ら、一軒の床屋の前に通りかかつた。床屋の前の床几に五六人七つ八つから十三四までの男の子が集つて居る。丁度あつた泥たんこを、私共は左右によけて一二歩歩いたと思ふと、不圖背後で何か氣勢がした。Yが反射的に後を振かへつた。私も。子供を背負つた一番大きい男の子が急いで床几に戻つた刹那であつた。Yの靴下から、服、ケープの肩のところまで、泥の飛沫が一杯ついて居る。Y、つかつか床几の處へ行つた。

「何した」

「——」

「此那悪戯する奴があるか」

惡童は、すつぱりと一つ喰らはされた。Yの洋裝に田舍の子らしい反感を持つたのと、手下どもに己を誇示したかつたのとが、偶然この少年をして「毆られる彼奴」にした原因だ。歸り、天主堂の坂下に其少年、他の仲間と居たが、Yを認めると背中に括りつけられた隱し切れない旗じるしをひどく迷惑に感じるらしい。何とも曖昧な薄笑ひを浮べ乍ら、こそりと崖のくぼみに引とつた。笑ひ、私共、歩き乍らも笑つた。

出島跡を歩いて、私共自身への土產に些細な買物をし、長崎を立つたのは其夜十一時であつた。前後たつた四日の滯在であつたが、その間Y、始終腕の腫れに惱まされ通しではあつたが、樂しかつた。大體、九州の旅行全體が樂しかつた。九州は旅行するに變化ある。一つの盛澤山な前菜皿のやうだ。陸の境界をそれ〴〵の山で區切られて居る國々は、大分にしろ、宮崎にしろ、特色をはつきり保有して居る。鹿兒島と長崎など、只一夜汽車に乘る丈で、見ぬものに斯うも違はふとは考へられまい。私の願ひは、いつかもう一遍、これ等の國々を、汽車の線路よりは少し自由に奧まで彷徨ひ歩いて見たいことだ。どうぞその時までには、編輯者諸君が澤山私の稿料をくれますように、ペダントリーの種がますように。そして、愛するYが、時間と金とを魔術のやうに遣り操る技能に、一段の研磨の功を顯しますように。

舶來と國產と

山川菊榮

○

近頃反動思想が盛んになるにつれて、維新時代の志士とか勤王家とかいふ人々をまるで今日の反動思想そのものを具體化した人間でもあつたかのやうに偶像化する傾向がある。今日とは異なる歷史的發展の或段階に於て、明らかに現狀打破と革命とを信條として行動した當時の志士や勤王家が、半世紀を經た他の歷史的發達の段階に於て、現狀維持と保守反動の偶像として祭られてゐる自分らを見出したなら、墓場の中で相省みて苦笑を禁じ得ないことであらう。

『勤王の家に生れて社會主義とは』と私のことをさも驚いたようにいふ人がある。けれども本來をいへば私の生れた家は——世間並みに父系を以て家とする限りは——其日暮しの名もない足輕の家であつて、勤王とか佐幕とかいふ政治上の問題には無關心な、教養のない階級に屬してゐたのである。

母方の家は、代々勤王家を以て目せられた漢學者ではあつた。が、少くとも私などの受けてゐる印象では、その人々が今日の時代に生れたとして、今日の反動家と同一レベルの思想を抱き、同一種類の行動に出でたらうとは到底考へ得られないような人々ばかりである。

いふまでもなく、封建時代の日本には漢學より外に學問といふものは殆んどなかつた。今日では歴史政治、經濟、藝術、醫學等、自然科學と社會科學の多くの部門に分類せらるべき一切の學問が、其頃は漢學によつて一と纏めに代表されてゐたといつてよく、同じく漢學とは云つても、今日の漢學――即ち單なる支那の古典文學の研究――とは甚しく内容を異にし、社會的意義を異にしてゐたのである。

漢學者といへば、今日では保守思想の代表者にすぎない。然し維新前までは、一般にその時代に於ける比較的高度の教養を受けた、所謂智識階級を代表してゐたもので、寧ろ今日とは反對に、其時代としては比較的物の道理を辨へた、頭腦を錬られた人々が多かつたのではなからうか。又漢學がその時代の全般的教養を代表してゐた結果として、武士階級の男子は多少なりともその素養を有してゐたので、それは今日のやうに一部專門家の獨占物でなく、謂はゞ全ての教養ある人々の常識の一部分であつたと思はれる。

勤王家などゝいふものは箸の上げおろしにも忠君愛國を唱へ、風呂に入るにも大和魂と褌を放さなかつたように想像されてゐる。そして封建時代の固定した道徳や習慣を杓子定規に守り、一切の新しい制度や外來の事物を敵視して、まなじりを決して世態の推移を罵り、全ての社會的變化を墮落頽廢と考へ、明けても暮れても過去を慕つて悲憤慷慨に世を送る不幸な老人としてのみ考へられてゐる。

かういふ『漢學者』『勤王家』の概念は、漢學者で勤王家だつた私の母方の祖父やその兄弟などの實際の人物や生活とは、全く縁もゆかりもないものであつた。祖父より古い時代の人を私は知らない。が、明治維新の頃は五十歳位で、私の覺えた頃は七八十にもなつてゐた祖父其人についていへば、全くかういふ概念はあてはまらないのである。

昔の武士は隔日に城に出仕したので、其出仕の日は、朝から晩まで殿サマの御前に出てゐても厠に立つことのないよ

う習慣づけられてゐたものださうである。其位だから私の祖父なども行儀は實に正しかつた。年中、書籍にかこまれた一室の小さな古机に端座して執筆してゐる許りで、暑中でも膝をくづすとか横になるとかいふことはない。疲れた時は別室の寢台に必ず寢たものである。漢學者の祖父が舶來もの丶寢台に寢たゞけでも不釣合だと思はれるようだが、何でもそれはよほど早くから、明治の初めから用ゐてゐたものらしい。

質素で勤勉で、よく話に聞く英國紳士のように規律正しく、嚴格で規帳面ではあつたが、窮屈な鹿爪らしい處は少しもなかつた。家族に對しては自由で寛大であつたし、道德的なお說法や干渉は遂にしたことがなかつた『談論風發』といふ形容詞がよくあてはまつてゐるような、快活で議論好きな所があつた。祖父が亡くなつた時、その棺前で通夜した老人の中の一人は、若い頃、祖父の家にゐた時分を思ひ出してしみじみと述懷した『藤田といふ人は酒飲みで長つ尻で實に閉口したよ。もう歸るか〱と思つてりやいつまでたつても歸ることじやあない。おまけに雪の降る夜中などにまた酒屋へ使ひにやられたりしてな。何しろ藤田さんもうちの先生も、お喋べりが揃つてるんだからなア』。これは藤田東湖のことであつた。老後も元氣のよい高聲でよく話した祖父の壯年時代が思ひやられるような氣がした。チョン髷や佩刀の廢止には大分反對もあつたといふが、私の祖父などは卒先して實行したらしい。殊に比較的若い時分から髮の毛が薄くなつて結髮に困難し、登城の際には頭の周圍の髮と、中央に載せた作りもの丶髷とを、ビンつけ油で練り固めるのに祖母は一通りならぬ苦勞をしたが、祖父は又、暑中など、殿サマの御前に裃で畏こまつてゐると、汗と油が一所になつて溶けて流れるので實に堪らぬ思ひをしたといふから、チョン髷廢止には特に痛切な利害關係があつたかも知れない。が、兎に角、日常生活の些細な點にまで、格式や形式がつきまとひ、ありとあらゆる干渉や拘束に煩はされてゐた人々には、さういふ愚劣な封建的習慣や儀禮からの解放が、どれほど喜ばれたか、今日の吾々には想像の出來ない位のもの

であつたらしい。

五十年の長い月日を封建的傳統の殼の中に固く包まれて過し、物質的には封建時代の方がより多く安定を得て居り、思想上に於ても、封建制度の下に忍び難い壓迫を感ずるほどの進步的な祖父、どちらかと云へば封建制度のために惠まれてゐた、その祖父でさへ、『實によい世の中になつた、樂な時代になつた』と、萬事につけて自由で氣樂な明治時代の生活を心から喜び、心から祝福して居つて、封建時代の政治や、道德習慣の未練を殘さなかつたことを思ふと、德川末期に於ては儒者や武士の如く、當時の支配階級であつた人までも、一般民衆と等しく、封建政治の桎梏に倦き〳〵してゐたもので、來るべき社會がいかなるものであるか、又いかなるものでなければならぬか、といふことについて明白な意識を持つことはなかつたにせよ、少くとも無意識のうちに、封建政治の行詰まりを感じるし、その局面展開を暗々裡に望んでゐることは、十分に考へ得られるやうに思ふのである。

○

末期の封建政治は、もはやその唯一の支持者として賴んだ武士階級の保護をすら十分に行ふことが出來なかつた。私の父の生家のような、微力な小身者の家庭にあつては、內職でもするより外に生計を立てる道がなかつた。殊に私の父のように、さういふ家の二男に生れた者にあつては家に留まれば一生厄介者として、他家を繼げば是また養子として、どちらにしても一生頭の上りつこはなかつた。私の父などは實家と養家とから共に冷遇され、あちらで追ひ出され、こちらで追ひ返されてゐたものださうで、『俺は十三の年から、親の世話にならずに一人でメシを食つた』と父は云ひ〳〵したものだつた。

食ふや食はずの家庭で子女の教育などの顧みられよう筈がなく、私の父は全く獨學で多少の智識を習得せねばならなかつた。維新の時、官軍に隨つて出征した父は、鐵砲に論語をしばりつけて從軍し、行く先々で、人より遲く眠り、早く起きてはその暇に勉强したものださうである。父の日常書いた文字は漢籍の木版の通りの劃の正しい楷書許りであつたがこれなども、少さい時分に手習ひすらさせられなかつたので、自分で漢籍を敷き寫しにしてやうやく文字を習ひ覺えた結果だといふことであつた。父の手記には斯うある。

『明治元年德川氏大政を奉還し、王政復古の大詔あり。秋に東國諸藩朝命に逆ひ、官軍に抗し、海陸の戰ひ一年半を過ぐ。同年九月、龍之助（自分の名）官兵となり、出軍の命を受く。同月出雲國松江を發し、同勢六百余人、同國三保關港より英國汽船に搭し、出羽國秋田土崎湊より上陸す。

土崎より久保田の城下に赴き、更に陸奥國津輕領を經て南部盛岡に進入す。此間佐賀藩官兵、盛岡の賊と戰ひ之を擊破す。尋で雲州及び蓮池の官兵盛岡城を取る。滯陣十有余日。盛岡を發し、一ノ關、仙臺、福島、白川、二本松、上の山、米澤、山形、天童、新庄等を經て清川を降り、庄内酒田に轉進し、在陣六ヶ月此間大山及び鶴ヶ岡に出兵せしこと屢なり。

酒田に於て參謀附軍監隨行申附らる。同年十月東京に凱陣す。諸藩の官兵悉く歸藩申付らる。依て龍之助も亦た參謀付を解き、歸藩申付らる。

天下の形勢大に文化開明に進まんとす。壯士僻遠に退いて安閑消光す可らざる時に向へり。之に由て焦心苦慮百方周旋の末稍く東京に駐るを得。而して尚ほ生計の費途無きに苦むと雖も、感慨發奮以て志を斷然佛蘭西學に決し、横濱に往て幕府設立の外國語學校に入る。抑も龍之助の佛蘭西學に志を立る起因は、佛蘭西は歐羅巴洲中に於て聖賢遜

に與り、聰明賢知の士世々出て各其材力を竭し、國家の爲に裨益を發明する多ければ、他の國に比すれば善書多し。之れ龍之助初志を立る所以也。

同三年勤學勉勵の譯を以て松江より藩費を以て學資を給せらる。

同五年四月文部省の達しに基き、内外諸學生悉く藩費を廢せらる。』……

明治五年には私の父は陸軍省に務め、翌年十月の條には、『爲御手當毎月金十三圓五十錢下賜』とある。あとにも先にも、父が舊藩の保護を受けたのは二ケ年間の藩費の支給だけで、上層武士階級の下積みになつてゐた。小身者の境遇は、物質的にも精神的にも、少しも惠まれたものではなかつたらしい。随つてかういふ階級に生れた人々にとつては、勿論封建政治に執着せねばならぬ何物もなく、乏しいながらも自力で生活する機會を與へ、限られた範圍ながらも獨立自由の新天地を提供した點に於て、衷心祝福されたに何の不思議もない。實際、封建政治の打破は、百姓町人の場合と等しく、下層武士階級にとつては、『得るところは全世界』でないまでも、『失ふところは鐵鎖のみ』であつたには違ひないのである。謂はゞ今日の下級俸給生活者と筋肉勞働者との間のような利害の一致が百姓町人と下層武士との間には見られたと思はれる。

○

武士とは云へ、最下層の階級に屬し、貧しい無智な、惠まれぬ被支配者の立場にゐた私の父の一家に比べれば、兎も角も一藩の文教の指導者として代々その地位を保護されて來た母の一家は、封建政治を呪ふべき、さほど十分なる理由を持つてゐなかつたかのように一寸考へられる。けれども實際に於て藩主に飼はれてゐる御用學者の生活は、さほど羨

むべきものではなかつたらしい。

今日の狹量な排外主義者にとつて、日本は直ちに全世界を意味し、全社會を意味してゐるやうに、封建時代の藩主及び其側近者にとつては、一つの藩は、直ちに全世界、全社會を意味してゐた。言論出版の自由は嚴重に制限せられ、藩政を直接に批評することは元より許されず、專ら學術的な著述さへも、藩主やその重臣の許可なくしては出版することが出來なかつた。學者も著述家も、この狹い天地の中で、この小さな社會を維持するために發明し發達させられた、あらゆる窮屈な習慣や傳統に從つて思想し、行動しなければならなかつた。今日、帝國大學の教授が、資本主義帝國の維持存續の目的と衝突しない範圍に於て——たゞその範圍に於てのみ——研究及び發表の自由を認められてゐると同じやうに、舊藩の學者も亦た、藩政と利害の一致する限りに於てのみ、その保護を受けることが出來たのであつた。

私の祖父なども杓子定規の漢籍に終始してゐた間は、その地位は安全であつた。が與へられた軌道を踏み外した刹那に、忽ち榮譽ある門地を奪はれなければならなかつた。維新直前の水戶藩は二人の權臣を中心とする二つの黨派に分裂し、其激烈なる政爭は遂に內亂狀態を現出して、孰れの黨派に屬する者も、變轉窮まりなき形勢に飜弄されて、今日は權力の絕頂に在るかと思ふと、明日は路傍に梟首されるといふ、はかない運命を繰返してゐたのであつたが、この二派の勸誘を共に斥けて、この政爭の外に立ち、二派に對して同樣の痛烈な批評を試みた祖父の地位も、決して安全なものではなかつた。祖父は代る／＼政權を握つたいづれの黨派からも、猜疑と敵意とを以て見られるやうになり、犯した罪といふものは無くて、食祿を召上げられ、閉門を仰付けられて廢藩の時までをすごしたのであつた。

親戚の中には、同じく黨爭の外に立ちながら、權力を失墜して虐殺された人々の遺族救濟に盡力したゝめ、刑吏にねらはれて、居たゝまれず、久しく亡命してゐた人などもある。

今日から見れば一藩の內政問題の如きは、些々たる地方的問題であつて、其ために學問の自由を奪ひ、多くの犠牲者を出すなどゝいふことは、余りに滑稽なことのように思はれる。然し規模の大小こそ違へ、世界的に見れば國內の問題は要するに地方問題にすぎないのであるから、他日、全世界が單一の、大きな自由社會を組織するようになつた曉には、今日、民衆から批評の自由を奪ひ、思想の自由を奪つてゐる一つ一つの國々の行動は、今日から見た封建時代の各藩の狹量な取締まりと同樣なものとして映じはしないであらうか。

○

祖父は漢學の家に生れてそれによつて祿を食んでゐた人ではあるが、只一人の息子に強いて家業を繼がせようともせず、その好むがまゝに幼時から繪畫を習はせ、維新後出京してから、まだ日本にはいつた許りの油繪を學ばせてゐたものであるが、その息子は廿歳にならぬうちに病死した。私の母は學問好きといふ處で其兄より多く學問に親しむことを許されてゐた。少女時代から漢學は祖父自から敎へてゐたが、明治五年に出京すると直ぐ、外人の學校に入つてキリスト敎の新敎育を受けたのだつた。故矢島楫子女史は、母より大分年長ではあつたが、その頃の敎會友達だつたと聞いてゐる。母には一人の妹があつたが、これは又着物や芝居や遊藝より外に興味を持たぬたちだつたので、三味線の稽古や芝居見物で娘時代をすごしたと聞いてゐる。祖父自身は芝居を好まなかつたが、祖母や、母の妹は大好きで度々出かけたと聞いてゐる。そんなことに對して祖父は家族の行動をやかましく云ふ人ではなかつたらしい

祖父は其頃の漢學者や國學者の常であつたように、……歷史以外を知らずに終生を經はしたが、その考へ方は、古いなりに今日の國定敎科書流に固定したものではなかつたらしい。曾て重野博士が兒島高德抹殺論を唱へて問題を起し

た時なども、『重野は神經質で正直者だからあんなことを騷ぐが、怪しいといへば高德許りではない。立派に歷史上に殘つてゐる英雄や忠臣のことも半分は怪しくなる。高德許りを抹殺して外のことを放つておくのも變なものサ』と笑つてゐたといふ。歷史上の事柄に關する、公けには洩さなかつた祖父の意見の中には、學校の歷史の答案に書いたら放逐されさうなこともあつたらしい。

といつて祖父の勤王論は別にニセ物といふ譯でもなかつたのであらうが、それは普佛戰爭後、ビスマークア流の軍國主義國家主義が日本に輸入されたより以前の勤王論だつたので、今日の反動主義者のそれのように帝國主義、排外主義の色彩を帶びない、ナイーブなものであつたらしく思はれる。云ひ換へて見れば、祖父はその勤王主義を維持するために、歷史上の事實を特に糊塗し、隱蔽する必要は認めてゐなかつたらしい。舊幕時代に、藩政を有のまゝに見て正直に批評することが、藩主への忠誠と兩立するものと考へてゐたように、歷史上の事實の承認が、祖父一流の勤王主義と兩立しないなどゝは、單純な田舍の老漢學者には考へ得られなかつたことであるらしい。

祖父は七十を越してから、或問題を調べるために麴町から上野圖書館に每日徒步で通つたが、圖書館でカードを讀み、且つ借出手續をする必要上、始めてローマ數字を稽古したほど、時勢に疎い人ではあつたが、それでも自分を置去りにして進んだ時勢を、そのために呪ふやうなことは決してなかつた。のみならず、時勢がよい方向に向つて進化してゐることを認めて、自分の子女が、自分はもはやあづかることの出來ぬ新しい敎育、新しい文明の恩惠に浴することを、進んで望みもし、心から喜んでもゐたのであつた。祖父は、その娘が外人の學校に入り、キリスト敎の書物を學び、洋裝して暮し、色々な新しい空氣を家庭に入れることを喜びその娘を通じて、新しい時勢と接觸することを樂んでゐたのである。私は、私の幼少な時代にもう八十を越した祖父が、新聞や雜誌に現はれた社會的の事實や、時には西洋の地

名や人物についてまで、分らぬ所にはしるしをつけて私の母の許に質問に來、その答へに新智識を得て滿足らしく歸つて行つた姿を、今もなほ思ひ浮べることが出來るのである。

私は祖父の中に、心からよき方向への時勢の……を喜び、その進歩を祝福しつゝ余生を了へた幸福な老人を認めることは出來ても、過去を慕ひ、封建時代を道徳の黄金時代のようにいひ、時勢の變遷を呪咀すると共に、新時代を憎み、新時代に憎まれて寂しい最後を遂げる不幸な老人を見ることは出來ないのである。

祖父は時勢に置去られた。けれども祖父は過去の夢を追ふ代りに新時代を理解しようとする努力の中に、人知れぬ歡びと生甲斐とを見出してゐたように、私には感ぜられるのである。

○

武士たることによつて或程度の榮譽と利益とを受けてゐた祖父でさへ、封建制度に對して何の未練をも感じてゐなかつた位であるから況や食ふや食はずの、武士といふも名許りの最下層の足輕風情の家に、然かも次男といふ不利な地位に生れた父――封建制度のためには虐げられた記憶はあつても惠まれた記憶のない父が、それに對して何等の未練も感ずる筈はなかつた。明治前半の標本的な歐化主義者であり、フランス流の自由民權論の影響を受けてゐた父は、『舊幕時代』と『藩閥』とを仇敵視してゐた。家門が低く、隨つて封建時代の武士的教養を全く受けてゐないといつてもよかつた父は、そのために最初から封建的教養、封建的階級觀念から解放されてゐたといつてもよかつた。隨つて祖父の方は、新たに得られた社會的自由を樂しむといふ程度の消極的な態度で、積極的に封建制度を敵とするほどの苦い感情はそれに對して抱いてゐなかつたらしいが、父の方は、飽くまで積極的に、攻勢的に、痛烈に、徹頭徹尾封建的傳統に

對する破壞的態度を持してゐたものだつた。封建時代の代表的學問である漢學に對する父の反感も、それに劣らず根强いものであつた『舊幕時代』——父の好んで用ゐた言葉——や漢學とは何等の利害關係もなく、隨つて父が痛罵してやまぬ其等のもの丶害惡について何等の感覺もなかつた私共にとつては、寧ろ滑稽にまで感ぜられたほど、父は口癖のようにあらゆる封建的なものを罵り續けてゐたのである。若い時代には私の父も母も家庭でも洋裝して暮したものださうであるが、私が覺えてからも、父だけは、寢る時の外、和服を着たことがなく、年中椅子テーブルで暮した。これは最初は主義でしたことかも知れないが、後には廢し難い習慣になつたのである。

○

封建政治が腐敗して既に内部から崩壞の機運に向ひつ丶あつたことは、その擁護者として養成され、保護されてゐた武士階級にとつてさへそれが苦痛な桎梏となつてゐたことによつて窺はれる。明治になつても旗本上りの士族や江戸商人等、徳川に直接縁故のある少數の人々こそ、田舍者の天下を罵つて、『公方樣』の再興を信じたり希望したりしてゐたもの丶、一般には武士と町人とを問はず、封建政治に對する未練は少しもなく、新時代を喜ぶ聲許りであつたと母は語つてゐる。して見ると封建制度は、それを維持するに必要な道德的、精神的な力を失つてゐたのである。それに自ら養成し保護しておいた武士階級の信任と支持をさへ失ふまでに頽廢し、行詰まつてゐたのであらう。

エホバ神が己れにかたどつて人をつくり給ふたように、今日の反動期に簇生した國粹主義者は己れにかたどつて維新の志士や勤王家の偶像をつくつてゐる。けれども實際のところ、當時の勤王家とか志士とかいつたものは、現狀打破の氣分に滿ち充ちた革命的進歩主義者であつて、今日の國粹主義者のような偏狹な排外心、唯我獨尊的な愛國主義的偏見

名や人物についてまで、分らぬ所にはしるしをつけて私の母の許に質問に來、その答へに新智識を得て滿足らしく歸つて行つた姿を、今もなほ思ひ浮べることが出來るのである。

私は祖父の中に、心からよき方向への時勢の……を喜び、その進步を祝福しつゝ余生を了へた幸福な老人を認めることは出來ても、過去を慕ひ、封建時代を道德の黃金時代のようにいひ、時勢の變遷を呪咀すると共に、新時代を憎み、新時代に憎まれて寂しい最後を遂げる不幸な老人を見ることは出來ないのである。

祖父は時勢に置去られた。けれども祖父は過去の夢を追ふ代りに新時代を理解しようとする努力の中に、人知れぬ歡びと生甲斐とを見出してゐたように、私には感ぜられるのである。

○

武士たることによつて或程度の榮譽と利益とを受けてゐた祖父でさへ、封建制度に對して何の未練をも感じてゐなかつた位であるから況や食ふや食はずの、武士といふも名許りの最下層の足輕風情の家に、然かも次男といふ不利な地位に生れた父——封建制度のためには虐げられた記憶はあつても惠まれた記憶のない父が、それに對して何等の未練も感ずる筈はなかつた。明治前半の標本的な歐化主義者であり、フランス流の自由民權論の影響を受けてゐた父は、『舊幕時代』と『藩閥』とを仇敵視してゐた。家門が低く、隨つて封建時代の武士的敎養を全く受けてゐないといつてもよかつた父は、そのために最初から封建的敎養、封建的階級觀念から解放されてゐたといつてもよかつた。隨つて祖父の方は、新たに得られた社會的自由を樂しむといふ程度の消極的な態度で、積極的に封建制度を敵とするほどの苦い感情はそれに對して抱いてゐなかつたらしいが、父の方は、飽くまで積極的に、攻勢的に、痛烈に、徹頭徹尾封建的傳統に

對する破壞的態度を持してゐたものだつた。封建時代の代表的學問である漢學に對する父の反感も、それに劣らず根强いものであつた。『舊幕時代』――父の好んで用ゐた言葉――や漢學とは何等の利害關係もなく、隨つて父が痛罵してやまぬ其等のもの丶害惡について何等の感覺もなかつた私共にとつては、寧ろ滑稽にまで感ぜられたほど、父は口癖のようにあらゆる封建的なものを罵り續けてゐたのである。若い時代には私の父も母も家庭でも洋裝して暮したものださうであるが、私が覺えてからも、父だけは、寢る時の外、和服を着たことがなく、年中椅子テーブルで暮した。これは最初は主義でしたことかも知れないが、後には廢し難い習慣になつたのである。

○

封建政治が腐敗して旣に內部から崩壞の機運に向ひつゝあつたことは、その擁護者として養成され、保護されてゐた武士階級にとつてさへそれが苦痛な桎梏となつてゐたことによつて窺はれる。明治になつても旗本上りの士族や江戶商人等、德川に直接緣故のある少數の人々こそ、田舍者の天下を罵つて『公方樣』の再興を信じたり希望したりしてゐたものゝ、一般には武士と町人とを問はず、封建政治に對する未練は少しもなく、新時代を喜ぶ者許りであつたと母は語つてゐる。して見ると封建制度は、それを維持するに必要な道德的、精神的な力を失つてゐたのである。それに自ら養成し保護しておいた武士階級の信任と支持をさへ失ふまでに頹廢し、行詰まつてゐたのであらう。

エホバ神が己れにかたどつて人をつくり給ふたように、今日の反動期に簇生した國粹主義者は己れにかたどつて維新の志士や勤王家の偶像をつくつてゐる。けれども實際のところ、當時の勤王家とか志士とかいつたものは、現狀打破の氣分に滿ち充ちた革命的進步主義者であつて、今日の國粹主義者のような偏狹な排外心、唯我獨尊的な愛國主義的偏見

に捉はれてゐた人ばかりとは思はれぬ。彼等の多くは、恰かも吾々の祖先が始めて支那や印度の文明を迎へ入れた時のやうに、眞にナイーブな驚嘆と虛心胆懷な謙讓とを以て、新興資本主義文明を受け入れたのではなかつたらうか。日本はドイツの軍國主義が戰爭の遂行に最大の能率を發揮するまで、即ち普佛戰爭がドイツの勝利に歸するまで、フランスを文明國の手本と考へてゐた。私の父が早くからフランス語を學んだのも其影響であり、フランス流の軍事的方法を學んでゐた陸軍に傭はれたのも、フランス語が用ゐられたからだつた。日本がドイツ流の兵制と敎育制度と、その愛國主義的思想とを完全に、忠實に摸倣した時、始めて今日の國粹主義は成立した。して見ると社會主義が舶來だといはれ得る程度には、今日の國粹主義も舶來品だといはれてよい筈である。どちらにせよ、封建時代の日本にはなかつた點で純粹の國產品ではない。そしてどちらも資本主義といふ舶來の制度が日本の國土に根を張つた結果、日本の社會そのものゝ中から發達した點では、やはり國產品と見ても差支へはない。が、私の祖父の時代の人々の單なる愛鄕心といふほどの無邪氣な愛國的感情は、今日の職業的愛國主義者の說くやうな、深い政治的意味を持つたものでもなければ、强烈な排他的、帝國主義的內容でもなかつたことは確かである。もしさういふ古い人々のが國產の愛國主義だとしたならば、今日のそれは、たしかに資本主義と共に輸入された舶來の愛國主義だとしか考へられない。この二つの間には明らかに異る性質が認められるのである。(六月二十八日)

故アルフレッド・マーシアル著　大塚金之助譯

經濟學原理

（全四冊）

菊判上製　定價各冊參圓五拾錢　送料廿六錢

マーシャルが年と共にその學殖が圓熟して行つたやうにこの若き譯者の研究が成熟してゆく事はわが學界の喜びである。譯者は震災數年前にこの大著を譯したしかしそれはかれのデリケートな學的良心を滿足させるものではなかつた。震災でその紙型を燒いたかれはもう一度一九二〇年の八版によつて改譯した。本書には第一編の序論より第三編の欲望とその滿足までを收めてゐる、譯書でこんなに著者の心持に忠實なものは近來に見ない。譯書としてわれわれが薦めないと思ふものでこれほどわれわれを喜ばせたものは近頃になかつた。（東京日々批評）

分冊一 發賣

分冊三　第五編　需要・供給・價値の一般關係

分冊四　第六編　國民所得の分配

分冊一　第一篇　序論　第二篇　基本概念　第三篇　慾望と滿足

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京七四〇二番　改造社

に捉はれてゐた人ばかりとは思はれぬ。彼等の多くは、恰かも吾々の祖先が始めて支那や印度の文明を迎へ入れた時のように、眞にナイーブな驚嘆と虛心膽懷な謙讓とを以て、新興資本主義文明を受け入れたのではなかつたらうか。

ドイツの軍國主義が戰爭の遂行に最大の能率を發揮するまで、即ち普佛戰爭がドイツの勝利に歸するまで、日本はフランスを文明國の手本と考へてゐた。私の父が早くからフランス語を學んだのも其影響であり、フランス流の軍事的方法を學んでゐた陸軍に傭はれたのも、フランス語が用ゐられたからだつた。日本がドイツ流の兵制と教育制度と、その愛國主義的思想とを完全に、忠實に摸倣した時、始めて今日の國粹主義は成立した。して見ると社會主義が舶來だといはれ得る程度には、今日の國粹主義も舶來品だといはれてよい筈である。どちらにせよ、封建時代の日本にはなかつた點で純粹の國產品ではない。そしてどちらも資本主義といふ舶來の制度が日本の國土に根を張つた結果、日本の社會そのものゝ中から發達した點では、やはり國產品と見ても差支へはない。が、私の祖父の時代の人々の單なる愛鄉心といふほどの無邪氣な愛國的感情は、今日の職業的愛國主義者の說くような、深い政治的意味を持つたものでもなければ、强烈な排他的、帝國主義的內容でもなかつたことは確かである。もしさういふ古い人々のが國產の愛國主義だとしたならば、今日のそれは、たしかに資本主義と共に輸入された舶來の愛國主義だとしか考へられない。この二つの間には明らかに異る性質が認められるのである。(六月二十八日)

河合榮治郎著

在歐通信

（新刊）

定價貳圓
送料二十錢

本書で刻下の英國を見よ！

著者は太洋の彼岸から話しかけてゐる。だから本書は教壇上や、書齋裡で激しい陣痛後に生れた澁面作つた學的研究書ではなくて、總ての階級の學生にも、一般にも面白く讀める處に價値がある。楡の林に雛菊水仙匂ふ外國の大學、其處に集ひて四海同胞愛（ユニバーナルフラタニティー）に生く愉快な學生々活、教授や學者の風手等を詩趣豐かに描き、亦社會運動、勞働運動、學界に於けるマルクスの位置等、全歐洲がパノラマ的に指導書參考書と共に紹介され、其間に多くの詩人文豪が點綴され、宗教が語られて學的研究以上に思想の糧となり感情の美味となる。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

藤森成吉著

惱み笑ふ。

定價一圓三十錢　郵送料十六錢

忽五版

惱みは暗く笑ひは明るい。藤森氏の此の作品集は實に明暗の接面、其處に綾なすユウモアの空氣色（エリアルチント）である。視點の角度によつて爆發の哄笑ともなり傷ましい生の惱みともなる。著者は曰ふ「現實の人生はあまりに不合理と悲哀を含む。笑ひでもするほか一日も過されないが、その笑ひは苦痛を母胎とする。惱みの影を伴はぬには世は矛盾に滿ちすぎてゐる。」と、讀め！老幼男女、惱める者、笑を欲する者、本書は吾人生くる日の淨化作用、寔に尊い藝術である。

藤森成吉著

東京へ

定價二圓三十錢　送料二十錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

賀川豐彥著（新刊）

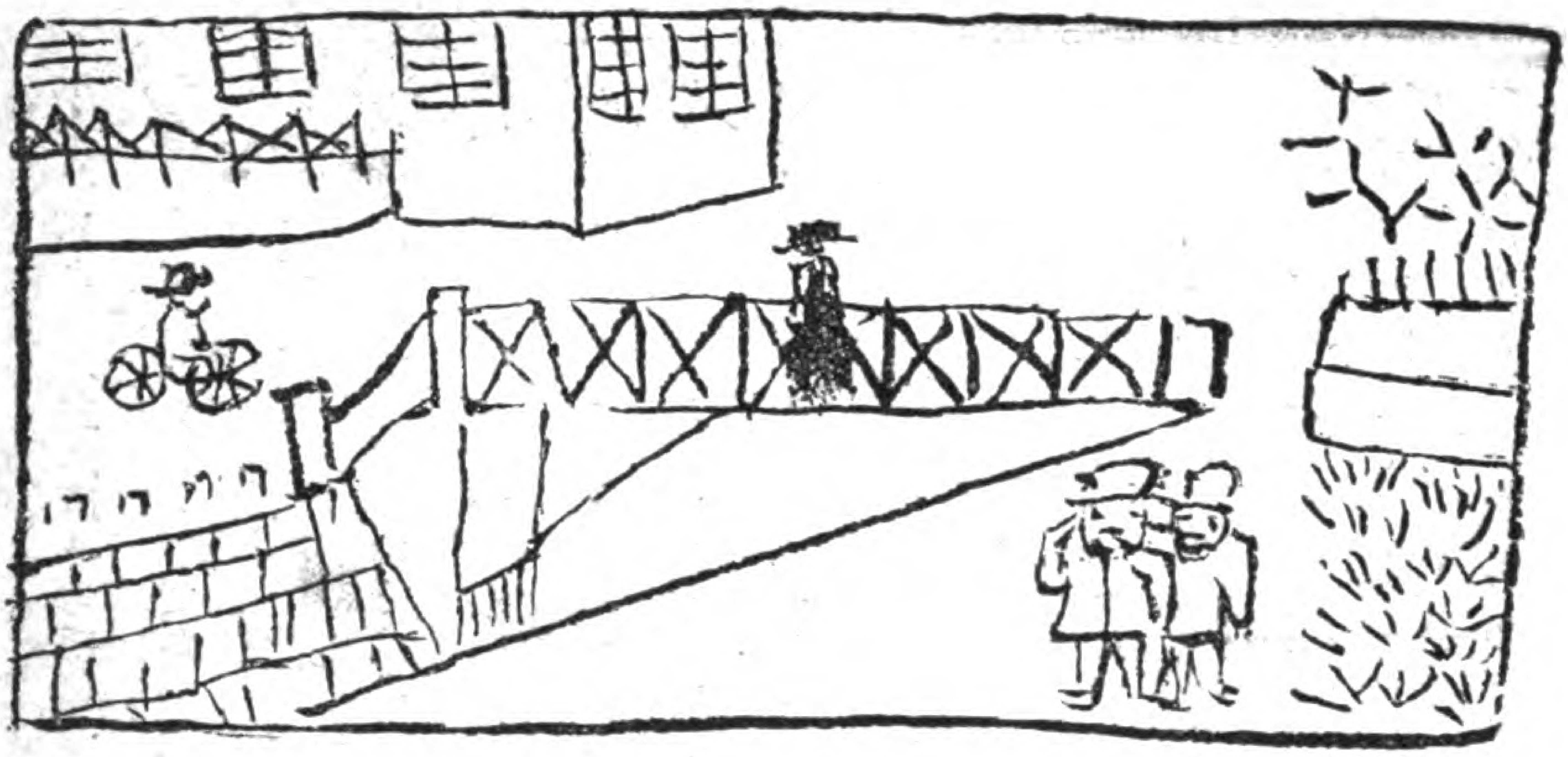
雲水遍路

定價參圓
送料貳拾六錢

感激の旅！ナザレの國へ！
失明を賭しての世界行脚土産！

彼は順禮者の如く經札を胸にかけ新しきエルサレムへの旅へ！世界は彼の新しき四國八十八ケ所である。「また會ふ日まで……。」の聲を後へ……彼が横濱を發つてから布、米、英、佛、獨、丁、瑞、伊、埃、エルサレム等への感激の多い旅行記である。此一卷で尤も光彩を放つたのは彼にふさわしい聖地巡禮のあることだ。彼が永年憧憬したイエスの國の山河は如何なる感激を彼に投げた！ヘブロン、ガリラヤ、ナザレ、ユダヤの名が著者といかに深く長く因緣づけられていたか！本書を手にするものが喜びと、親みとをもて一氣に讀過するであろう好頁である。勿論各國の組合事業、勞働運動、農民運動、宗教運動の社會運動戰士との會見記に於て著者が燃犀の筆致、詩の如き情緒もて是に對し、祖國の社會運動を遙に望見して嗟嘆し、悲痛したる斷片の我々に好き刺戟と、反省とを與へたことも一つの喜びである。

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社



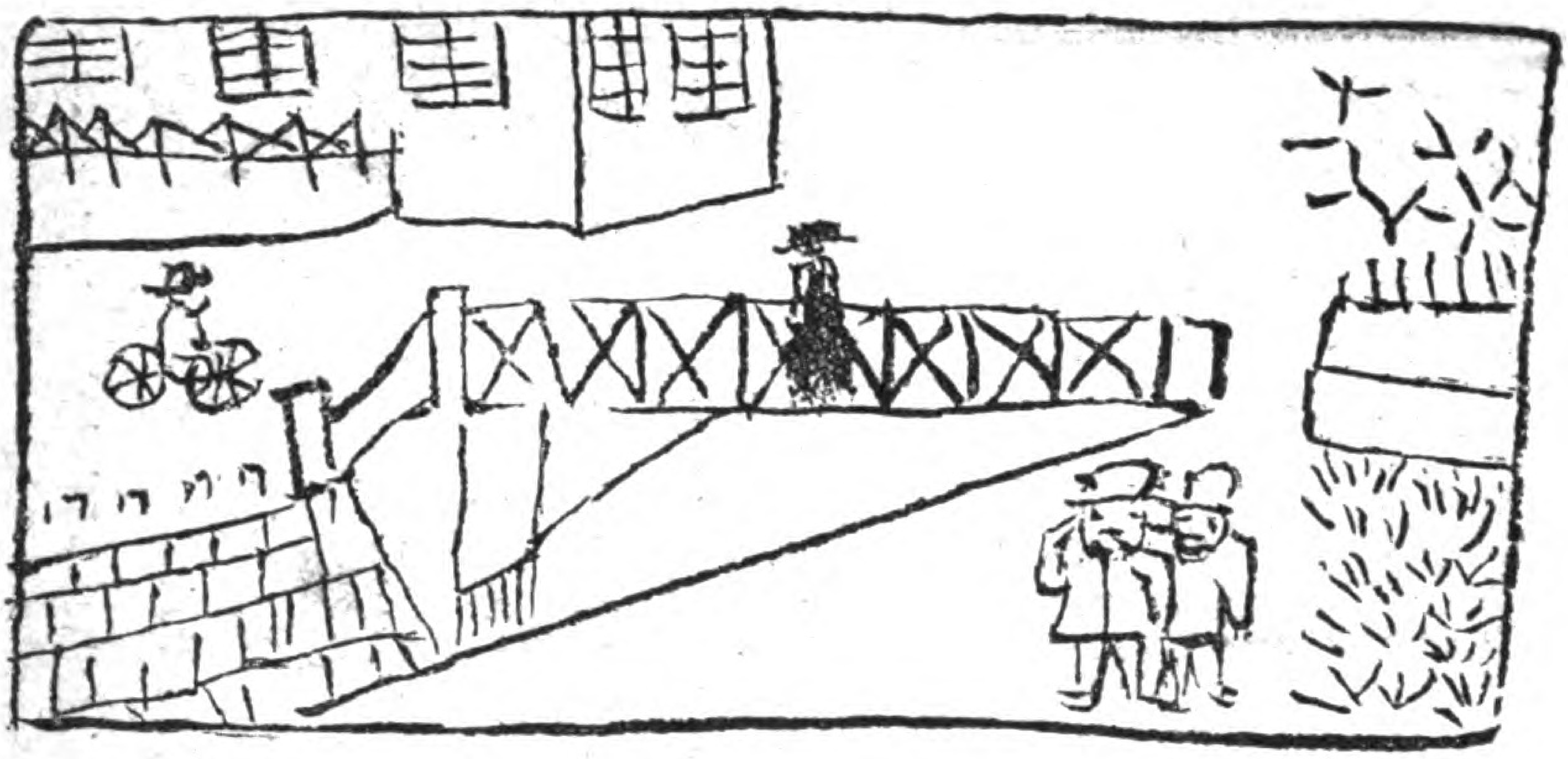
青塚氏の話

谷崎潤一郎

前篇

由良子は夫の中田が死んだのは肺病のためだと思つてゐた。今でも彼女はさう思ひ、世間もさう思つてゐるのであるが、中田自身は、さうは思つてゐなかつたらしい。それは中田が最後の息を引き取つた部屋、――須磨の貸別莊の病室に於いて發見された遺書を見れば分るのである。

で、ここにその遺書を掲げる前に知つて置いて貰ひたいことは、由良子が、とかどのスタアとして賣り出すやうになつたのは、その體つきが持つてゐた魅力のせゐには違ひないが、一つには死んだ夫のお蔭でもあつたと云ふことである。中田は彼女が十六七の頃、ほんのちよつとした一場面へ出るエキストラとして働いてゐたのを、多くの女優の卵どもの中から早くも見出したのであつた。彼は自分の地位を利用して、だんだん彼女を引き立てるやうに努めてやつたので、結果は何處の撮影所にも有りがちな、監督と女優の戀、朋輩どもの嫉妬や蔭口、それからおほびらな同棲



青塚氏の話

前篇

谷崎潤一郎

由良子は夫の中田が死んだのは肺病のためだと思つてゐた。今でも彼女はさう思ひ、世間もさう思つてゐるのであるが、中田自身は、さうは思つてゐなかつたらしい。それは中田が最後の息を引き取つた部屋、——須磨の貸別荘の病室に於いて發見された遺書を見れば分るのである。

で、ここにその遺書を掲げる前に知つて置いて貰ひたいことは、由良子が一とかどのスタアとして賣り出すやうになつたのは、その體つきが持つてゐた魅力のせゐには違ひないが、一つには死んだ夫のお蔭でもあつたと云ふことである。中田は彼女が十六七の頃、ほんのちよつとした一場面へ出るエキストラとして働いてゐたのを、多くの女優の卵どもの中から早くも見出したのであつた。彼は自分の地位を利用して、だんだん彼女を引き立てるやうに努めてやつたので、結果は何處の撮影所にも有りがちな、監督と女優の戀、朋輩どもの嫉妬や蔭口、それからおほぴらな同棲

武者小路實篤著（最新刊）

定價壹圓六拾錢
送料十八錢

愛慾

第十七版

『愛慾』現るゝや文壇は滔々たる賞讃の爆聲を轟かした。其の平明率直なる表現裡の深刻さ、コロロホルムが伴ふ如き恍惚裡に潜む苦惱に讀者は醉はされ憑かれ戰慄に打たれて、此の靈感の前に絶大の嘆聲を發し、額づき伏するであらう。本書は實に我が文學史上の一巨星であるのみか、世界文學史上にさへ爛々放光する巨星である。さらば英人がシエイクスピヤを千載に誇り獨人がゲエテを冠して語る如く、我等も亦本書を掲げて我等の誇を世界に示すべきである。

斯かる國寶的文學を讀まざる者は慚愧せよ！必ず一本を備へて此の時代此の國の榮光を戴け！

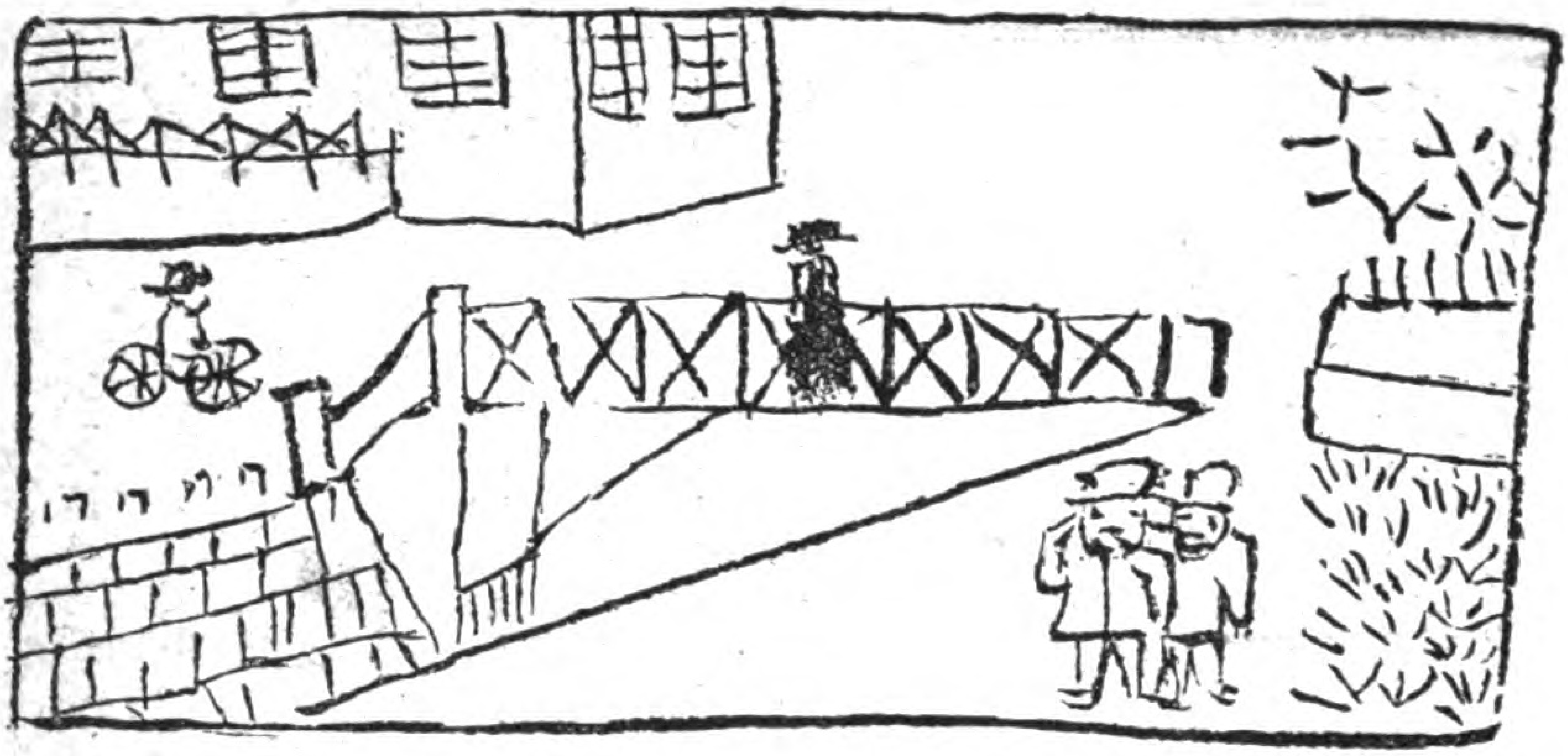
武者小路實篤著 **第三の隱者の運命**

定價壹圓
送料二十錢

武者小路實篤著 **筆の向くまゝに**

定價壹圓
送料十四錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二一番 改造社



青塚氏の話

谷崎潤一郎

前篇

由良子は夫の中田が死んだのは肺病のためだと思つてゐた。今でも彼女はさう思ひ、世間もさう思つてゐるのであるが、中田自身は、さうは思つてゐなかつたらしい。それは中田が最後の息を引き取つた部屋、——須磨の貸別莊の病室に於いて發見された遺書を見れば分るのである。

で、ここにその遺書を掲げる前に知つて置いて貰ひたいことは、由良子が一とかどのスタアとして賣り出すやうになつたのは、その體つきが持つてゐた魅力のせゐには違ひないが、一つには死んだ夫のお蔭でもあつたと云ふことである。中田は彼女が十六七の頃、ほんのちよつとした一場面へ出るエキストラとして働いてゐたのを、多くの女優の卵どもの中から早くも見出したのであつた。彼は自分の地位を利用して、だんだん彼女を引き立てるやうに努めてやつたので、結果は何處の撮影所にも有りがちな、監督と女優の戀、朋輩どもの嫉妬や蔭口、それからおほぴらな同棲

にまで事が進んでしまつたのは、由良子が十八の時であつた。彼女の方には最初は純な氣持ちの外に、此の男を頼つて出世をしようと云ふ野心も手傳つてはゐたであらう、が、結婚してから後の彼女はついぞ浮氣などしたことはなく、はたの見る眼も羨ましい仲であつた、現に中田があんなに衰弱して死んだのも、あんまり彼女が可愛がり過ぎたからだと云ふ噂さへもあるくらゐに。

彼女は健康で運動好きで、そのしなやかな體には野蠻と云つてもいいくらゐな逞ましい精力が溢れてゐたから、そんな噂もあながち無理ではないのである。去年の秋に夫が須磨へ轉地してからも、撮影の合間に始終訪ねて行つたものだが、それは必ずしも看病のためとは云へなかつた。夫はあの患者の常として、肉は痩せても愛慾の念は却つて不斷より盛んであつた。そして由良子がさし出す腕を待ち構へてゐたばかりでなく、病氣の感染をも恐れずに、戀の歡樂を最後の一滴まで吸らうとする彼女の情熱を、どんなに感謝したか知れなかつた。さう云ふことが積り積つて、結局夫の死を早めたのであらうことは由良子も認めない譯に行かない。しかし夫が喜んでその死を擇んだ以上、それで差支へないのではないか。彼女としてもああするより外、あの場合仕方のないことであつた。自分にも夫と同じやうな、盛んな愛慾が身内に燃えてゐた。そのために自分が浮氣をしたのなら惡いけれども、夫の望む死を死なせてやつたのである。もう此の世から消えて行く火に、自分の魂の火を灼きつかせて、思ひの限り炎を搔き上げてやつたのである。中田は定めし心おきなくあの世へ行くことが出來たであらう。彼は戀人と結婚してから僅か四年しか生きなかつたとは云ふものの、二十五歲から二十九歲まで、――由良子の十八歲から二十二歲まで、――つまり人生の一番花やかな時代を樂しみ、幸ひ彼女にも裏切られることなく、いやないさかひを一度もせずに濟んだのであつた。由良子にしても自分の性質や今後のことを考へると、中田との戀を圓滿なもので終らせるためには、ここで彼が死んでくれたのが都合が好かつたやうな

氣もする。夫にもつと生きてゐられたら、いつ迄おとなしくしてゐられたか、それは自分でも保證の限りではないのである。彼女は最早や監督の愛護に依らないでも、或る一定のフアンの間には容易に忘れられない地歩を築いてゐた。要するに映畫の女優なんて、藝より美貌と肢體なのだ。どんな筋書の、どんな原作でも同じことで、笑ふ時には綺麗な齒並びを見せびらかすこと、泣く時には涙で瞳を光らせること、活劇の時には着物の下の肉の所在が分るやうにすることを、忘れないで芝居してゐればいいのであつた。あの女優は下手糞だ、いつもする事が極まつてゐると云ひながら、それでも見物は喜んでゐるので、時々裸體を見せてやれば一層喝采するのであつた。中川が彼女の繪を作る時も、實は此のコツで行つたのであつて、監督が一人の女優を――殊に自分の愛する女を――スタアに仕立て上げるためには、藝を教へ込むよりも監督自身がその女の四肢の特長をはつきりと掴み、それの一々の變化を究めて、そこから無限に生れて來る美を發展させればいいのであると、さう云ふのが彼の持論であつた。彼女は中川の監督の下に幾種類もの繪卷きを撮つたが、それらは「劇」と云ふよりも有りと有らゆる光線の雨と絹の流れに浴みするところの、一つの若い肉體が示したいろいろのポーズの繼ぎ合はせであるに過ぎない。彼女は何萬尺とあるセルロイドの膜の一とコマ一とコマへ、體で印を捺して行けばよかつた。つまり彼女と云ふ印材に中川はさまざまな記號を彫り、朱肉を吟味し、位置を考へて、それを上等な紙質の上へ鮮明に浮かび出させたのである。由良子は亡夫にそれだけの恩を負うてゐることは一生感謝するけれども、一とたび印材の良質であることが認められれば、朱肉や、位置や、紙質は第二の問題であり、彫り手はいくらでも居るであらうし、まかり間違へば印材のままでもつぶしが利くことを知つてゐる。だから中川に死なれても狼狽や不安を感ずるよりは、いささか恩を返したと云ふ心持ちの力が強かつた。夫の臨終の枕もとに据わつて彼女が洩らした溜息の中には、重い責任を首尾よく果たし終せた人の、滿足に似たものさへもあつた。兎に角彼女は夫を無事にあ

の世へ送り届けたのである。行く先のことは分らないけれども、今の彼女は何の疚しいところもなしに、鏡のやうに冷い夫の死顔を氣高しとも見、美しいとも見て、まだ消えやらぬ愛着のうちに身を置きながら、佛の前に合掌することが出來たのである。

さて前に云ふ遺書は、遺骨を持つて貸別莊を引き上げる時に机の抽き出しから出たのであるが、それを彼女が讀んだのは四五日過ぎてからであつた。彼女は最初古新聞紙に包んである菊版の書物のやうなものが、遺書であらうとは氣が付かなかつたし、又そんなものを夫が書き遺して行つたらうとは、少しも期待してゐなかつた。そして糊着けになつてゐるその新聞紙を破いて見たのも、ほんの氣紛れからであつた。新聞紙の下には又もう一と重新聞紙が露はれ、その表面に「ゆら子どの、極秘親展」と毛筆で太く記されてゐた。二重に包まれた中から出て來たのは、背革に金の唐草の線の這入つた、簿記帳のやうな體裁をした二百ページほどの帳面で、それへ細々と鉛筆で認めてあつた。病人は須磨へ轉地してから、ものうい海岸の波の音を聞きながら臥たり起きたりして暮らしてゐた一年近い月日の間に、暇にまかせて病床日誌を附けるやうに書きつゞけて行つたのであらう。非常に長い分量のもので、鉛筆の痕がもうところどころ紙にこすれて薄くなつてゐた。なんにも胸に覺えのない由良子は、亡夫が何を打ち明けようとするのか不思議な感じに打たれたのであつたが、やがて彼女を輕い戰慄に導いたところの奇異な内容、死んだ人間がそのために死を招いたと信じてゐたところの事實に就いては、下に掲げる遺書自らが語るであらう。――

* * * * *

大正×年×月×日

私は今日から、生きてゐる間はお前に打ち明けない積りであつた或る事柄を此處に書き留めて行かうと思ふ。と云ふ

譯は、私は矢張り生きられさうにも思へないからだ。ゆうべお前が歸る時にいろいろ力をつけてくれたり慰めてくれたりしたけれども、あれから獨り考へて見ると、どうも自分の運命は一直線に「死」を目指してゐるやうな氣がする。さうしてそれが今の私には不安ではなく、却つて一種のあきらめに似た安心になつてしまつたやうだ。二十九やそこらで死ぬのは惜しいが、私はお前の若い美しい盛りの時を私の物にした。その上お前にこんなにも深く愛されながら逝くことを思へば、さう不仕合はせな一生でもない。から云へばお前は、あたしだつてまだ二十二だから盛りの時が過ぎ去つたと云ふ歳でもなし、此れからもつと美しくなり、もつとあなたを愛して上げますと云ふかも知れない。しかし私は、今その事を書いて行くのだが、實は肺病で死ぬのではなく、外に原因があつて死ぬのだ。その事が私を病氣にし、生きる力を私から奪つてしまつた。私に取つてはその事が「死」だつた。それは恐らくお前が聞いても氣持ちのいいことではなささうだから、いつそ永久に知らせまいかとも思ふのだけれど、さうかと云つて、せめてお前にでも訴へないで死んでしまふのは、あんまり情ない氣がしてならない。全く考へやうに依つては、こんなことで一人の人間が死ぬなんて、馬鹿々々しいやうなことでもあるのだ。が、まあ兎も角も聞いて貰はう、少し讀めば分るやうに、此れはお前と云ふものにも至大の關係があるのだから。

　話はずつと前のことだが、私がまだ達者でゐた時分、――あれは一昨年の五月の半ば頃だつたと思ふ。或る雨の降る晩に、私は京極のカフエエ・グリーンで一人の見知らない男とさし向ひに、洋食の皿をつついてゐた。何でもお前の「黒猫を愛する女」が封切りされた日で、私は池上や椎野と一緒に「ミヤコ・キネマ」へあの繪を見に行つた歸りだつた。尤もカフエエへ寄つたのは私一人で、二人は外に行く處があつて別れたのらしい。見知らない男は私より前に來てゐたので、私は何氣なく、彼のさし向ひの椅子が空いてゐたから腰を下した。それからやや暫くの間は、默つてテーブ

ルを挾んでゐたに過ぎなかつたが、そのうちに斯う、彼は妙にヂロヂロと私の顔を見て、時々口邊に微笑を浮かべながら、何か話しかけたさうにしてゐる。それは人の好い男が醉つ拂つて、（彼はチーズを肴にしてウイスキーを飲んでゐた。）相手欲しやの時に示すあの態度なので、可愛げのある、とても憎めない眼つきをしてゐた。いつもなら斯う云ふ場合に、私の方から早速話しかけるのだけれど、その晩は此方に酒の氣がなかつたし、それにその男は四十恰好の上品な紳士だつたから、さう不作法に打つかる譯にも行かなかつた。彼の様子には大變人なつツこい所もあるが、臆病な、はにかむやうな、女性的な所もあるやうだつた。彼が私の方を向いたり笑つたりするのも、極めて遠慮がちにやるので、大概は此方へ横顔を見せるやうに斜ツかひに腰かけ、兩脚の間へスネーク・トウリーのステッキを立てて、その柄の握りを頤の下へ突ツかひ棒にしながら、獨りでモヂモヂしてゐるのだ。そんな工合で、私が食後の紅茶を飲みにかゝる迄はとうとうきツかけがなかつたんだが、やがて突然、

「失禮ですが、君は映畫監督の中川進君ではないですか。」

と、思ひ切つたやうに聲をかけた。

私は改めて彼の顔を見上げたけれど、――雨に濡れたクレバネットの襟を立てて、台灣パナマの帽子を被つてゐるその目鼻立ちは、全く覺えがないのであつた。

「ええ、さうですが、忘れてゐたら御免下さい、何處かでお目に懸つたことがありましたかしら？」

「いいえ、今夜が始めてですよ。君はさつきミヤコ・キネマにをられたでせう。僕はあの時君等の後ろにゐたもんですから、話の模様で君が中田君だと云ふことが分つたんです。」

「ああ、あの繪を御覽になりましたか。」

「ええ、見ました。僕は深町由良子嬢の繪は殆んど總べて見てゐますよ。」

「それは有り難いですな、大いに感謝いたします。」

さういつたのは、中學生や何かと違つて、分別のあるハイカラさうな紳士が云ふのだから、私にしてもちよつと嬉しく感じたのだ。すると彼は、

「いやあ、さういはれると恐縮だな、感謝は寧ろ僕の方からしなけりやあならん。」

と、きれいに搾つた杯をカチンと大理石の卓に置いて、例のステッキの握りの上に載せた顔を私の方へ間近く向けた。

「かう云ふとお世辭のやうだけれど、日本の映畫で見るに足るものは、君の物だけだと僕は思ふ。どうも日本人は下らないセンチメンタリズムに囚はれるんで、芝居でも活動でも濕つぽいものが多いんだけれど、君の寫眞は非常に晴れやかで享樂的に出來てゐますね。活動寫眞と云ふものは要するにあれでなけりやあいかん。僕はああ云ふ映畫を見ると、日本が明るくなつたやうな氣がして、頗る愉快に感じるんです。」

「さう云つて下さる人ばかりだといいんですがね、中には亞米利加の眞似だと云つて、ひどくくさす人があるんですよ。」

「なあに、亞米利加の眞似で差支へない、面白くさへありやあいいんだ。尤もそれを下手に眞似られちやあ困りものだが、君はたしかに亞米利加の監督と同じ理想、同じ感覺で繪を作つてゐる。あれなら亞米利加人が見たつて決して滑稽に感じやしない。どうですか君、君の映畫を西洋人に見せたことはないですか。」

「いや、どうしまして、まだまだとてもお耻かしくつて、………」

「そんなことはない、それは君の謙遜ぢやあないかな。僕なんぞは君、此の頃西洋物よりも君の繪の方を餘計見てゐるくらゐなんだが、西洋物にちつとも劣らない印象を受ける。時にはそれ以上の感興を覺える。……」

「どうもそいつは、……そいつは少し擽つたいなあ。」

どういふ了見か分らないが、餘りその男が褒め過ぎるんで、私は少しショゲたのだつた。さればと云つて、その男は人を茶化してゐる樣子でもなかつた。私はただ、彼が見かけよりは恐ろしく醉つてゐるらしいことに氣がついただけで、それは屢大酒家にある、飲むと眼がすわつて、變に物言ひが落ち着いて來て、血色が青ざめて來るたちの、あるねちねちした醉ひ方だつた。だから一見したところでは、時々ヂロリと鋭い瞳を注ぐ以外には殆んど眞面目で、言葉の調子もいやにのろのろと氣味が惡い程穩やかなのだ。

「いや君、ほんたうだよ、お世辭を云つてゐるんぢやない。」

と、彼は泰然として云ふのだつた。

「けれども僕は、君の手柄ばかりだとは云はない。いくら監督がすぐれてゐてもそれに適當な俳優を得なければ駄目な譯だが、その點に於いて君は幸福な監督だと思ふ。由良子孃は非常に君の趣味に合つてゐる。全く君の映畫のために生れて來たやうな婦人に見える。ああ云ふ女優がゐなかつたら、とても君の狙つてゐる世界は出せないだらうな。――おい、おい。」

と、そこで彼は女給を呼んで「姐さん、ウイスキーを二杯持つておいで」と、その物靜かな口調で命じた。

「僕ならお酒は頂きませんが。」

「まあいい、折角だから一杯附き合つてくれ給へ。君の映畫のために、さうして君と由良子孃の健康のために祝杯を舉

げよう。」

一體此の男は何商賣の人間だらう？　新聞記者かしら？　辯護士かしら？　銀行會社の重役のやうなもので、のらくら遊んでゐる閑人かしら？　と云ふのは、最初は臆病らしく思へたが、だんだん話し込んでゐるうちに何處か鷹揚なところがあつて、私を子供扱ひにする樣子が見える。しかし私は先がそれだけの年配ではあり、氣のいい伯父さんに對するやうな親しみもあるので、多少迷惑には思ひながら、強ひて逆らはないで彼の杯を快く受けた。

「ところであの『黑猫を愛する女』と云ふのは誰の原作ですか。」

「あれは僕が間に合はせに作つたんです。いつも大急ぎで作るもんですから、碌なものは出來ませんでね。」

「いや結構、あれでよろしい。由良子孃には打つてつけての物だ。――――由良子孃が風呂へ這入つてゐると、あすこへ猫が跳び込んで來るシーンがあるが、あの猫はよく馴らしたもんだな。」

「あれは家に飼つてあるので、由良子に馴着いてゐるんですよ。」

「ふうん、………それにしても、西洋では獸を巧く使ふが、日本の寫眞では珍しいな。由良子孃もいつもながら大變よかつた。湯上りのところは殆んど半裸體のやうだつたが、ああ云ふ風をして見られるのは、日本の女優では由良子孃だけだらう。なかなか大膽に寫してある。」

と、何やら獨りでうなづいてゐるのだ。

「あすこン所は檢閲がやかましくつて弱つたんです。僕の作るものは一番當局から睨まれるんですが、今度の奴は西洋物以上に露骨だと云ふんでね。」

「あははは、さうかも知れんね。風呂場から寢室へ出て來る時に、うすい絹のガウンを着て、逆光線を浴びるところ、

——」

「ええ、ええ、あすこ。あすこは二三尺切られましたよ。」

「あすこは體ぢゆうが透いて見えてゐるからね。——けれどもあれは今度が始めてぢやないぢやないか。あの程度の露骨なものは前にもあつたやうに思ふが、……あれはたしか『夢の舞姫』と云ふんだつたか、……」

「ああ、あれも御覽になつたんですか。」

「うん、見た。あン中にちやうど今度のシーンと同じやうなところがある。尤もあれは風呂場ぢやあなかつた、由良子孃が舞姫になつて、樂屋で衣裳を着換へてゐるところだつたが、あの時は乳と腰の周りの外には何も着けてゐなかつたやうだね。君はあの時は逆光線を使はないで、由良子孃の右の肩の角からずうツと下へ、脚の外側を傳はつて靴の踵まで光のすぢが流れるやうに、横から强い光線をあてたね。」

「ははあ、よく覺えておいでですなあ。」

私がちよつと呆れ返つたやうに云ふと、

「うん、それは覺えてゐる譯があるんだ。」

と、彼は得意さうにニヤニヤして、だんだんテーブルへ乘り出して來ながら、

「あの繪には由良子孃の體の中で、今までフイルムに一度も現はれなかつた部分が、二箇所寫されてゐたと思ふね。君はあの繪で、始めて由良子孃の臍を見せたね。僕は乳房の下のところからみぞおちへ至る部分までは、前に『お轉婆令孃』の中で見たことがあつたが、臍は未知の部分だつた。あすこを見せてくれたのは大いに君に感謝してゐる。……」

私は「夢の舞姫」の繪でお前の臍を寫したことは、人から云はれる迄もなくちやんと覺えてゐる。お前も多分あれを

忘れはしないだらう。私はお前を撮影する時、お前の體のどんな細かい部分をも不用意に寫したことはなかつた。運動筋肉のよぢれから生ずるたつた一本の皺と雖、それがフイルムに現はれてゐる以上、決して偶然に寫つたのでなく、豫め寫るやうに計劃したのだ。お前が體をどの方向へどれだけの角度に捩ぢ曲げれば、何處の部分に何本の皺が刻まれて、それらがどう云ふ線を描くかと云ふことを、恰も複雜な物語の筋を組み立てるやうに詳しく調べてやつたことだ。だからあの繪でも『お轉婆令嬢』でも、成るほど此の男の云ふ通りには違ひないので、私の苦心を彼がそんなに酌んでくれたのは有り難い仕合はせであるけれども、しかしどうも、……妙なことばかりいやに注意して見てゐる奴だ、と、さう思はずには居られなかつた。ところが彼は私が變な顔つきをするのに頓着なく、お前の體に就いての智識を自慢するやうにしやべり續ける。――

「けれども何だよ、由良子嬢の臍が深く凹んだ臍だと云ふことは、――僕は出臍が嫌ひなんだ。――實は前から知つてゐたんだ。それはほら、『夏の夜の戀』で、びつしより濡れた海水服を着て海から上つて來るだらう？　あすこで體に引ツ着いてゐる服の上から、臍の凹みがぼんやり分るね。君はあの凹みを見せるためにわざとあんなに服を濡らして、あすこン所をクローズ　アップにしたんぢやないかい？　どうもなかなか皮肉な監督だ、ストローハイム式だと僕は思つたよ。――だがあの時は、兎に角服の上からだつたが、『夢の舞姫』で確實に分つた、やつぱり想像してゐた通りの臍だつたと云ふことが。」

「へえ、するとあなたはそんなに臍が氣になりますかね。」

私は冷やかすやうに云つたが、彼は何處迄も眞面目だつた。

「臍ばかりぢやない、總べての部分が氣になるさ。『夢の舞姫』に始めての所がもう一箇所ある。」

「何處に？」

「何處にッて、君が知らない筈はなからう。」

「知りませんなあ、さう云ふ所があつたかなあ。」

「あつたとも。――足の裏だよ。」

　彼は私が内心ぎよつとしたのを見ると、俄かに聲高く笑ひ出した。

「あはははは、どうだい、ちやんと中つただらう。何でもあれは、舞姫が素足で踊つてゐると、舞臺に落ちてゐるガラスの破片を踏んづける。可憐な舞姫は苦痛をこらへて踊りつづける。足の裏から血が流れて、舞臺の上にぽたぽたと足の趾の血型がつく。その血型は斯う、爪先で歩いた恰好に、五本の趾が少し開いて印せられる。――さうだよ、僕は由良子孃の足の親趾の指紋まで見た譯だよ。――それから、さうだ、踊つてしまふと、氣がゆるんでばつたり倒れる。それを舞姫に惚れてゐる俳優が、抱き上げて樂屋へ擔ぎ込む。椅子を二つ並べて、その上へ由良子孃を臥して、ガラスを抜き取つたり洗つてやつたりする。その時俳優は傷口を調べるために、テーブルの上の置きランプを床におろして、下から光線が足の裏を照らすやうにする。ね、あの時だよ、由良子孃の足の裏が始めてほんたうによく見えたのは。――」

「では何ですか、あなたはさう云ふ所にばかり眼をつけていらつしやるんですか。」

「ああ、まあさうだよ。君にしてもさう云ふ見物の心理を狙つてゐるんぢやないかね。僕のやうな人間が居て、君の作品を君と同じ感覺を以て味はつて、由良子孃の蹠をこんなに綿密に見てゐるとしたら、それが君の望むところぢやないかね。」

「ま、さう云つちまへばそんなもんだが、何だかあなたは薄ッ氣味が惡いや。」

その男の醉つた瞳に、意地の悪い、氣違ひじみた光が輝やき出したのはその時だつた。彼の顔色は前よりも青ざめ、唇のつやまでなくなつてゐた。私は何がなしに不吉な豫覺を感じたが、今此の男に魅(みい)られたと云ふ形になつて、逃げ出す譯にも行かなかつた。それに私は當然一種の好奇心にも驅られてゐた。

「どんな事ですか、そのもう少し薄ッ氣味が悪いッて云ふのは？」

「う、まあ追ひ追ひ聞かせるがね。」

と、彼は又女給を呼んで、「ウイスキーをもう二つだよ」と叫んでから、

「君は由良子孃の體に就いては、此の世の中の誰よりも自分が一番よく知つてゐる積りなのかい？」

「だつてさうでせう、長年僕が監督してゐる女優だし、それに何です、御承知かも知れませんが、あれは僕の女房なんです。」

「左様、君は由良子孃の亭主だ。そこで僕は、亭主と僕と孰方(どつち)が由良子孃の體の地理に通じてゐるか、そいつを確かめてみたいと云ふ希望を持つてゐるんだよ。かう云ふと君は、そんな物好きなことを考へるなんて不思議な奴だと思ふだらうが、此處に一人の人間があつて、その男はまだ、君の奥さんを一度も實際には見たことがないんだ。さうしてただフイルムの上で長い間研究して、君の奥さんの體ぢゆうの有らゆる部分を、肩はどう、胸はどう、臀はどうと云ふ風に、それをはつきり突き留めるためには或る場面のクローズアップを五たびも六たびも見に行つたりして、今では既に眼をつぶつても頭の中へその幻影が浮かび上る程、すつかり知り盡してしまつたとする。さう云ふ人間が、或る晩偶然その女の亭主に、――……………と思はれる男に出遇つたとしたら、今も云ふやうな物好きな希望を持つのは當り前だよ。」

「何處に？」
「何處にッて、君が知らない筈はなからう。」
「知りませんなあ、さう云ふ所があつたかなあ。」
「あつたとも。――足の裏だよ。」
　彼は私が内心ぎよつとしたのを見ると、俄かに聲高く笑ひ出した。
「あはははは、どうだい、ちやんと中つただらう。何でもあれは、舞姫が素足で踊つてゐると、舞臺に落ちてゐるガラスの破片を踏んづける。可憐な舞姫は苦痛をこらへて踊りつづける。足の裏から血が流れて、舞臺の上にぽたぽたと足の趾の血型がつく。その血型は斯う、爪先で歩いた恰好に、五本の趾が少し開いて印せられる。――さうだよ、僕は由良子孃の足の親趾の指紋まで見た譯だよ。――それから、さうだ、踊つてしまふと、氣がゆるんでばつたり倒れる。それを舞姫に惚れてゐる俳優が、抱き上げて樂屋へ擔ぎ込む。椅子を二つ並べて、その上へ由良子孃を臥して、ガラスを抜き取つたり洗つてやつたりする。その時俳優は傷口を調べるために、テーブルの上の置きランプを床におろして、下から光線が足の裏を照らすやうにする。ね、あの時だよ、由良子孃の足の裏が始めてほんたうによく見えたのは。――」
「では何ですか、あなたはさう云ふ所にばかり眼をつけていらつしやるんですか。」
「ああ、まあさうだよ。君にしてもさう云ふ見物の心理を狙つてゐるんぢやないかね。僕のやうな人間が居て、君の作品を君と同じ感覺を以て味はつて、由良子孃の體をこんなに綿密に見てゐるとしたら、それが君の望むところぢやないかね。」
「ま、さう云つちまへばそんなもんだが、何だかあなたは薄ッ氣味が惡いや。」

その男の酔つた瞳に、意地の悪い、氣違ひじみた光が輝やき出したのはその時だつた。彼の顔色は前よりも青ざめ、唇のつやまでなくなつてゐた。私は何がなしに不吉な豫覺を感じたが、今此の男に魅られたと云ふ形になつて、逃げ出す譯にも行かなかつた。それに私は當然一種の好奇心にも驅られてゐた。

「どんな事ですか、そのもう少し薄ッ氣味が悪いッて云ふのは?」

「う、まあ追ひ追ひ聞かせるがね。」

と、彼は又女給を呼んで、「ウイスキーをもう二つだよ」と叫んでから、

「君は由良子孃の體に就いては、此の世の中の誰よりも自分が一番よく知つてゐる積りなのかい?」

「だつてさうでせう、長年僕が監督してゐる女優だし、それに何です、御承知かも知れませんが、あれは僕の女房なんです。」

「左樣、君は由良子孃の亭主だ。そこで僕は、亭主と僕と孰方が由良子孃の體の地理に通じてゐるか、そいつを確かめてみたいと云ふ希望を持つてゐるんだよ。かう云ふと君は、そんな物好きなことを考へるなんて不思議な奴だと思ふだらうが、此處に一人の人間があつて、その男はまだ、君の奥さんを一度も實際には見たことがないんだ。さうしてただフイルムの上で長い間研究して、君の奥さんの體ぢゆうの有らゆる部分を、肩はどう、胸はどう、臀はどうと云ふ風に、それをはつきり突き留めるためには或る場面のクローズアップを五たびも六たびも見に行つたりして、今では既に眼をつぶつても頭の中へその幻影が浮かび上る程、すつかり知り盡してしまつたとする。さう云ふ人間が、或る晩偶然その女の亭主に、――……………と思はれる男に出遇つたとしたら、今も云ふやうな物好きな希望を持つのは當り前だよ。」

「ふうん、………さうすると、あなたがつまりその人間で、そんなに僕の女房の體を知つてゐると仰つしやるんですか。」

「ああ、知つてゐる、嘘だと思ふなら何でも一つ聞いて見給へ。」

私が默つて、眼をぱちくりさせてゐる間に彼は躊躇なく言葉をついだ。

「たとへば由良子孃の肩だがね、あの肩は厚みがあつて、而も勾配がなだらかで、項の長いせゐもあるが、耳の附け根から腕の附け根へ續く線が、もしもそれを側面から見ると、何處から腕が始まるのだか分らない程ゆるやかに見える。頸は豐かな脂肪組織に包まれてゐて、喉の骨や筋肉は殆んど見えない。纔かに横を向いた時に、耳の後ろの骨がほんの少し眼立つぐらゐだ。ついでに背中の方へ廻ると、肩胛骨が、腕を自然に垂れた場合は矢張り脂肪で隠されてゐる。が、さればと云つて、二つの肩胛骨のくぎりが全然分らないのではない。なぜかと云ふと由良子孃の背中には異常に深い背筋が通つてゐるからだ。そのために孃の背中は、二つの圓筒を密着させたやうに見える。さうして圓筒と圓筒との境目にある溝が背筋だ。その溝の凹みにはいつでも暗い陰が出來てゐて、餘程强い光線を眞正面からあてない限り、陰が殘らず消え失せることはめつたにない。孃が眞つ直ぐに立つた場合には、背筋の末端、腰の蝶番ひあたりのところで、堆かい臀の隆起が、一層その陰を大きくさせる。孃が體を左へねぢると、ねぢつた方の脇腹へ二本の太いくびれが這入る。くびれとくびれの間の肉が一つの圓い丘を盛り上げる。同時に右の脇腹の方に、肋骨の一番下の彎曲だけが微かに現はれる。………」

いやな奴だとは思ひながら、此れを聞いてゐる私の心には、お前の美しい背中の形が生き生きと浮んだ。お前も多分此處を讀む時に、裸體になつて鏡の前に立つて見る氣になりはしないか。さうして背筋の深さだの、脇腹に出來る二本のくびれだの、肋骨の露出だのを試しながら、いかに此の男がお前の寫眞をよく見てゐるかを想像して、私と同じ薄氣

味の悪さに襲はれはしないか。……

「さうです、さうです、あなたの仰つしやる通りですよ。そんなら背中以外の部分は?」

と、私は知らず識らず釣り込まれて、さう云はずにはゐられなかつた。するとその男は、

「君、鉛筆を持つてないかね。」

と、卓上にあつた獻立表の紙をひろげて、

「口で云つたんぢやまどろッこしいから、圖を畫きながら説明しよう。」

と云ふのだつた。そしてお前の腕はかう、手はかう、腿はかう、脛はかうと、順々にそこへ描き始めた。

彼の線の引き方には、どう考へても繪かきらしい技巧はなかつた。(彼が繪かきでないと云ふ私の推察が中つてゐたことは、後になつてから分つたのだが。)「此處のところがこんな工合で、此處が斯うで」と云ひながら、ゆつくりゆつくりと不器用な線をなぞるやうにして彼は描いた。時には眼をつぶつて上を向いて、じーいッと腦裡の幻を視詰めるやうな塩梅だつた。が、その怪しげな、たどたどしい鉛筆の跡が次第にでつち上げる拙い素描、幼稚な繪の中に、しろうとでなければとても畫けない變な細かさと、毒毒しさと、下品さとを以て、執念深く實物に似せた形があるのだ。或る特長を小器用に捕へて、此れが誰の顔と分る程度の漫畫式の似顔を畫くなら、そんなにむづかしい業ではない。けれども彼の描くのは顔でないのだ。お前の腕、お前の指、お前の脛を切れ切れに描いて、それらが私の眼に訴へる感じでは、決して外の誰のでもなく、お前のものに違ひないのだ。彼はお前の體ぢゆうに出來るえくぼと云ふえくぼ、皺と云ふ皺を皆知つてゐた。それは藝術とは云へないだらうが、何にしても驚くべき記憶力だ。さうして彼はその記憶するところのものを、一つも洩らさず寄せ集めて、丹念に紙の上へ表現するのだ。

私はその後、有田ドラッグの店の前を通ると、此の男の畫いた素描を想ひ出すことがしばしばあつた。あの蠟細工の手だの首だのの、ぬらぬらした胸の惡い感じ、……それでゐて何處か人間の皮膚らしい感じ、……此の男の繪はちやうどあれだつた。たとへばお前の腿から膝のあたりを畫くのに、此の男はお前が膝を伸ばしてゐる時と「く」の字なりに曲げてゐる時とで、膝頭のえくぼにどれだけの變化が出來、何處の肉が引き締まり、何處の肉がたるむと云ふ區別をつけて二た通りに畫く。その肉のふくらみを現はすのには細かい線で陰翳を取つて行くのだが、それが實にぬらぬらと、お前の肉置(ししおき)きのもつちやりとした心持ちをよく出してゐるのだ。此の男は踵の圓みから土踏まずへのつながりを描いただけで、お前の足を暗示させる。さうしてお前の足の第二趾が親趾よりも長いことや、それが大抵親趾の上へ重なつてゐることを見落してゐない。足の裏を畫かせると、五本の趾の腹を寫して、此れが小趾の腹、藥趾の腹だ云ふ風に、それぞれの特長を掴まへてゐる。私にしてもお前の足の爪研きを手傳つたことがなかつたら、かうまで詳しくは知りやうがないし、きつと此の男に趾を掻かされたに違ひなからう。

「乳とお臀の恰好を知るのには苦心をしたよ。」

と、此の男は白狀した。彼が云ふには、お前の體で今までフイルムに露出されない部分と云つては殆んどないのだが、乳房の周圍と腰から臀の一部分だけが、どんな場合にも一と重の布で隱されてゐた。長い間、彼はその布の上に現はれる凹凸の工合に注意してゐた。すると運よく「夢の舞姫」の時に、お前がシユミース一枚になつて、そのシユミーズの紐がゆるんでゐることがあつた。お前はそのなりで床に落ちてゐる薔薇の花を拾つた。拾つた瞬間に體を前へ屈めたから、自然シユミースが下方へたるんで、紐のゆるんだ隙間から、——彼の形容詞に從へば「印度の處女の胸にあるやうな」完全にまんまるな、「二つの大きな腫物のやうに」根を張つたところの乳房が見えた。乳首までは見えなかつた

が、もうそれだけで彼にはお前の乳の全景を想像するのに充分だつた。人間の體は、或る一箇所か二箇所を除いた外の部分が悉く分つてしまへば、その分らない部分に就いても、代數の方程式で既知數から未知數を追ひ出せるやうに、推理的に押し出せる。――彼はさう云ふ風にして、いろいろのシーンから既知の肉體の斷片を集めて、それらに依つて未知の部分、――お前の臀の筋肉のかげとひなたとが斯うでなければならないことを、割り出したと云ふのだ。

「どうだね君、僕はまるで參謀本部の地圖のやうに明細に、何處に山があり何處に川があるかと云ふことを一々洩れなく緻に畫けるんだよ。君は亭主だと云ふけれども、こんなに精密に暗記してゐるかね。」

テーブルの上には、もう何枚かの紙切れが散らばつてゐた。彼は獻立表の裏へ一杯にその「地圖」を畫きつぶしてしまふと、やがてポツケツトから「ミヤコ・キネマ」のプログラムを探り出して、その裏へ畫き、ナツキンペーパーの上へ畫き、しまひには大理石の上にまで畫いた。その仕事は彼に非常な興奮と悅樂とを與へるらしく、默つてゐればまだ何枚でも畫きさうにするのだ。

「もし、もし、もう分りました。もうそのくらゐで澤山ですよ。とてもあなたには敵ひませんや。」

「それから、――さうさう、活劇をやつたり感情の激動を現はしたりする時に、息をはつはつと强くはずませることがあるね。さうすると斯う、此處の頸の附け根のところに、脂肪の下からほんのちよつぴり骨が飛び出すよ、こんな工合に、……」

「いや――いやもう結構、もう好い加減に止めて下さい。」

「あははは、だつて君、君の最愛の女の裸體畫を畫いてるんだぜ。」

「それはさうだが、あんまり畫かれると氣持ちが惡いや。」

「そんなことを云つたつて、君は年中女房のはだかを寫眞に撮つて、飯を喰つてゐるんぢやないか。それから見ると僕の方は割が惡いよ、此れだけ畫けるやうになるには容易なことぢやないんだがね。」

「分りました、分りました。僕は此の繪を貰つて行きますよ。こいつを女房に見せてやります。」

私はさう云つて、それらの紙切れを急いでポッケットへ捩ぢ込んだが、彼は内心お前に見せて貰ひたいのか、それともそんなものは、畫からうと思へばいくらでも畫けるので惜しくもないのか、私のするままに任せてゐた。しかし私は、勿論此れをお前に見せる積りではなく、直きに破いて便所へ捨ててしまつたが、見せたらお前は嘸かし胸を惡くしたらう。お前はお前の美しい體が、有田ドラックの蠟細工にされたところを想像するがいい。……

「歸るならそこまで一緒に行かう」とその男が云ふので、二人つれ立つてカッフエエを出たのは九時頃だつたらう。私は既に二時間近くも、此の何者とも分らない人間の酒の相手を勤めたのでありながら、どう云ふ譯で又のこのこと附き合ふ氣持ちになつたものか、多分私は、彼を薄氣味の惡い奴だと思ふ一方、次第に變な親しみを感じさせられてゐたせゐであらう。此の男を氣味が惡いと云ふのは、つまり此の男が餘りにもよく私自身に似てゐる點があるからではないか。此の男は私と同じ眼を以て、お前の肉體の隅々を視てゐる。さうして而も、彼は此の世で直接お前には會つたことがない。天から降つたか地から湧いたか、彼はふらりと私の前に現はれて、私でなければ知る筈のない私の戀人、私の女神の美を說いて聞かせる。私は彼を戀敵として嫉妬する理由は少しもない。なぜなら彼の知つてゐるのは、フイルムの中の幻影であつて、私の女房のお前ではない。影を愛してゐる男と、實體を愛してゐる男とは、影と實體とが仲よくむつれ合ふやうに、手を握り合つてもいいではないか。………

私はそんなことを考へながら、その男の步く通りに喰つ着いて行つた。その男は、京極を河原町の方へ曲つて、あの

薄暗い街筋を北へ向つて歩いて行く、空はところどころ雲がちぎれて、星がぼんやり見えたり隠れたりしてゐたが、まだあたりには霧のやうな糠雨が立ち罩めてゐる。そして折々、ぼうつと街燈に照らし出される彼の姿は、實際一つの「影」の如くにも見えるのであつた。

「君は勿論、由良子嬢は君以外の誰のものでもない、確かに君の女房であると思つてゐるだらう。――」

と、彼は半分獨り語のやうにさう云ひ出した。

「――けれども君の女房であると同時に、僕の女房でもあると云つたら、君はどう云ふ氣がするかね。」

「一向差支へありません、どうかあなたの女房になすつて、たんと可愛がつて頂きたいですな。」

と、私は冗談のやうな口調で云つた。

「と云ふ意味は、僕の女房の由良子嬢は要するにただの寫眞に過ぎない。だから何の痛痒も感じないし、やきもちを燒くところはないと、君はさう思つて安心してゐると云ふ譯かね。」

「だつて、あなた、そんなことを氣にしてゐたら、女優の亭主は一日だつて勤まりやしませんよ。」

「成る程、そりやあさうだらう。だがもう少しよく考へて見給へ。第一に僕は聞きたいんだが、一體君は、君と僕と孰方がほんたうの由良子嬢の亭主だと思ふ？　さうして孰方が、亭主としてより以上の幸福と快樂とを味はつてゐると思ふ？」

「うへツ、大變な問題になつちやつたな。」

私はさう云つて茶化してしまふより仕方がなかつたが、その男は闇を透かして、私の顏を憐れむやうに覗き込みながら云ふのだつた。

「君、君、冗談ではないよ、僕は眞面目で話してるんだよ。――僕の推測に誤まりがなければ、多分君は斯う思つてゐるだらう、僕の愛してゐるのは影だ、君の愛してゐるのは實體だ、だからそんなことはてんで問題になる筈はないと云ふ風に。――しかし君にしても、フイルムの中の由良子孃は死物ではない、矢張り一個の生き物だと云ふことは認めないだらうか?」

「認めます、それは仰つしやる通りですよ。」

「では少くとも、フイルムの中の由良子孃が、君の女房の由良子孃の影であるとは云へないと思ふね、既に生き物である以上は。――いいかね、君、こいつを君は忘れてはいけない、君の女房も實體だらうが、フイルムの中のも獨立したる實體だと云ふことを。――かう云ふとそれは屁理窟だ、二つが共に實體だとしても、孰方が先に此の世に生れたか、君の女房が居なければ、フイルムの中の由良子孃は生れて來ない、第一のものがあつて始めて、第二のものが出來ると云ふかも知れないが、もしさう云ふなら、君の愛してゐるところの、さうして恐らくは崇拜してさへゐるだらうところの、眞に美しい由良子孃と云ふものは、フイルム以外の何處に存在してゐるのだ。君の家庭に於ける由良子孃は、『夢の舞姬』や、『黑猫を愛する女』や、『お轉婆令孃』で見るやうな、あんな魅惑的なポーズをするかね。さうして孰方に、由良子孃の女としての生命があるかね。………」

「御尤もです、僕もときどきさう云ふ風に考へるんです。僕はそいつを僕の『映畫哲學』と名づけてゐるんです。」

「ふふん、映畫哲學か、」

と、その男は、妙に私に突ツかかるやうに云ひながら、

「さうすると結局、斯う云ふことが云へないだらうか、――フイルムの中の由良子孃こそ實體であつて、君の女房は却

つてそれの影であると云ふことが？　どうだね君の哲學では？　君の女房はだんだん歳を取るけれども、フイルムの中の由良子孃は、いつ迄も若く美しく、快活に、花やかに、飛んだり跳ねたりしてゐるのだ。もう十年も立つた時分に、君はしみじみ昔の姿を思ひ起して、ああ、あの時分にはこんなではなかつた、あすこの所にあんな皺はなかつたのに、いつあんなものが出來たんだらう、さうして體ぢゆうの關節にあつた愛らしいえくぼは、何處へ消えてしまつたんだらうと、さう思ふ時があるとする。その時になつて、もう一度昔のフイルムを取り出して、映して見るとする。君は定めし、えくぼは消えてなくなつたんでも何でもない、永遠に彼女の體に附いてゐることを發見するだらう。君の女房は衰へたかも知れないが、夢の舞姬は今でも矢張り、シユミーズの下に圓々とした乳房を忍ばせ、床に落ちた薔薇の花を拾ふだらう。黑猫を愛する女は、相變らず風呂へ這入つてぼちやぼちや水をはねかしながら、猫と戲れてゐるだらう。君はその時、君の若い美しい女房はフイルムの中へ逃げてしまつて、現在君の傍に居るのは、彼女の脫け殼であつたことに氣がつく。君はそれらの映畫を見て、一體此れは自分が作つた繪なのか知らん、自分や自分の女房の力で、こんな光り耀やかしい世界が出來たのか知らんと、今更不思議な感じに打たれる。さうして遂に、此れらのものは自分たち夫婦の作品ではない、あの舞姬やお轉婆令孃は、自分の監督や女房の演技が生んだのではなく、始めからあのフイルムの中に生きてゐたのだ。それは自分の女房とは違つた、或る永久な『一人の女性』だ。自分の女房はただ或る時代にその女性の精神を受け、彼女の俤を宿したことがあるに過ぎない。自分たちこそ、彼女のお蔭で飯を食はして貰つてゐたのだと、さう思ふやうになるだらう。……」

「そりやあ成る程理屈としては面白いですが、僕の女房が歳を取るやうに、フイルムの中の彼女だつてだんだんぼやけてしまひますよ。フイルムと云ふものは永久不變な性質のものぢやないんですから。………」

「よろしい、そこで吾が輩は云ふことがあるんだ。――君は僕が、何のためにこんなにたびたび由良子嬢の映畫を見に行くか、さうして何のために、こんなに詳しく由良子嬢の地理を覺え込んだか知つてゐるかね。さつきも繪に畫いて見せたやうに、僕はかうして眼をつぶりながらでも、彼女の體を好きなやうにして眺められる。『さあ、由良子さん、立つて下さい』と云へば立つてくれるし、『据わつて下さい』『臥て下さい』と云へば、僕の云ふ通りになつてくれる。僕は彼女を素ツ裸にして、背中でも、臀でも、何處でも見られるし、倒まにして足の裏を見ることも出來る。君は亭主だと云ふけれど、自分の女房をそんなに自由に扱へるかね。假りに自由にさせられるとしても、かうして此處を歩いてゐる今、彼女を抱くことが出來るかね。僕の方の由良子嬢は、どんな時でも、呼びさへすれば直ぐにやつて來て、どれほどしつツこい注文をしても、いやな顏なんかしたことはない。君の女房も歳を取るだらうが、僕の方のは、たとへフイルムはぼやけてしまつても、今では永久に頭の中に生きてゐるのだ。つまりほんたうの由良子嬢と云ふもの、――彼女の實體は僕の腦裡に住んでゐるんだよ。映畫の中のはその幻影で、君の女房は又その幻影だと云ふ譯なんだよ。」

「けれどもですね、さつきあなたも仰つしやつたやうに、僕の女房が居なければ映畫が生れて來ないでせう？　映畫がなければあなたの頭の中のものだつて無い譯でせう？　それにあなたが死んぢまつたら、その永久な實體と云ふ奴はどうなりますかね。そこン所がちよつと理窟に合はないやうぢやありませんか。」

「そんなことはない、此の世の中には君や僕の生れる前から、『由良子型』と云ふ一つの不變な實體があるんだよ。さうしてそれがフイルムの上に現はれたり、君の女房に生れて來たり、いろいろの影を投げるんだよ。たとへばだね、僕は以前亞米利加のマリー・プレヴオストの繪か好きだつたが、君もあの女優は好きなんだらうね。いや、改めて聞く迄もない。」

と、彼は私の驚いた色を看て取りながら云ふのだつた。

「君は恐らく由良子嬢を發見した時に、これは日本のマリー・プレヴオストだと思つたんぢやないかね。さう云へば、——さうだ、——プレヴオストにも風呂へ這入る場面があつたね。やつぱり由良子嬢のやうに體の透き徹るガウンを纏つて、風呂から上つて、湯殿の出口でスリッパーを穿くところがある。——あれはもう何年前のことだつたか、隨分古い寫眞だけれど、僕は今でもよく覺えてゐる。あの時プレヴオストは後ろ向きに立ちながら、なまめかしいしなを作つて、スリッパーを突つかけた。突つかける時にわれわれの方へ足の裏を見せた。ね、さうだつたらう、君も覺えてゐるだらう？　あの場面はソフト・フオーカスだつたので、彼女の全身が朦朧と見えたに過ぎないけれど、しかしあの女優の顏つきや體つきの感じは由良子嬢にそつくりぢやないか。殊にクローズアップで見ると、仰向いた時の鼻の孔の切れ方が實に似てゐる。腕や手のえくぼもちやうど同じ所に出來る。裸體にしたらもつと似たところがあるだらうし、臍も凹んでゐるやうな氣がする。——殘念ながら僕はプレヴオスの臍を知らない。僕の知つてゐるのは由良子嬢のと、『スムルーン』で見たポーラ・ネグリの臍だけだ。——が、さう云ふ風に、敢てプレヴオストばかりぢやない。由良子嬢に似てゐる女は此の世界ぢゆうにまだ幾人も居るんだよ。うそだと思ふなら、君は靜岡の遊廓の×メ樓に居るF子と云ふ女を買つたことがあるかい？　その女は無論プレヴオストや由良子嬢ほどの別嬪ではない、いくらか型は崩れてゐるが、それでも矢張り『由良子系統』であることはたしかだ。その女の體ぢゆうに出來るえくぼは良由子嬢の俤を傳へてゐる。さうして何より似てゐるのは二つの乳房だ。……………………

……………………」

さう云つて彼は、彼の知つてゐる限りの「由良子型」の女を數へ擧げるのだつた。その女たちは全身がそつくりその

ままお前の通りではない迄も、なほ何となく肌觸りや感じに於いて同一であり、而も必ず、或る一部分はお前に酷似した所を持つてゐると云ふのだ。たとへば今の靜岡縣のF子の胸には、お前と同じ乳房がある。お前の『肩』は東京淺草の淫賣のK子と云ふ女が持つてゐる。お前の『臀』は信州長野の遊廓の○○樓のS子が持つてゐる。お前の『膝』は房州北條のなにがしの女に、お前の『頸』は九州別府溫泉の誰に、その外お前の『手』は何處そこに、お前の『腿』は何處そこにある。彼はお前の肉體の部分部分を研究するのに、映畫に就いたばかりではない、その女たちに就いても覺えた。さつきの「地圖」はお前の「地圖」であると同時に、その女たちの「地圖」であると云ふのだ。

「君、君、非常に都合の好いことには、由良子孃のあの美しい『背筋』が、直き此の近所にあるんだよ。君は大坂の飛田遊廓を知つてゐるだらう？ あすこへ行つて、B樓のA子と云ふ女を呼んで、背中を出さして見給へ。それからもつと近い所では、此の京都の五番町に『足』があるんだ。あすこのC樓のD子と云ふ女だがね、日本人の足の趾は、親趾よりも第二趾の方が長いのはめつたにない、ところがあの女のは由良子孃のにそつくりなんだ。……」

それから彼は又「實體」の哲學を持ち出して、プラトンだのワイニンゲルだのとむづかしい名前を並べ始めたが、私はそんなくだくだしい理窟を覺えてもゐないし、一々書き留める根氣もない。要するにお前、――「由良子」と云ふものは、昔から宇宙の「心」の中に住んでゐる、さうして神樣がその型に從つて、此の世の中へ或る一定の女たちを作り出し、又その女たちに對してのみ唯一の美を感ずるところの男たちを作り出す。私と彼とはその男たちの仲間であつて、われわれの心の中にも矢張り「お前」が住んでゐると云ふのだ。此の世が既にまぼろしであるから、人間のお前もフイルムの中のお前もまぼろしであるに變りはない。まだしもフイルムのまぼろしの方が、人間よりも永續きがするし、最も若く美しい時のいろいろな姿を留めてゐるだけ、此の地上にあるものの中では一番實體に近いものだ。人間と

云ふまぼろしを心の中へ還元する過程にあるものだと云ふのだ。……

「いいかね、君、さうなつて來ると、君と僕とは由良子孃の亭主として、一體どれだけの違ひがあるんだ。君の持つてゐる幸福で、僕のあづからないものが一つでもあるかね。僕は君と同等に、いや恐らくは君以上に彼女の體を知つてゐる。僕は彼女をいかなる場合、いかなる所へでも呼び出して、着物を剝いで臥かしたり起したりさせられる。だがそれだけでは……………………………………—……………………………………………………………………………

……。しかしそれでも不充分だ、完全な一人の『由良子孃』として、…………………………………………………………………………………………………。よろしい、それなら僕の家へ來給へ、實を云ふと、僕は一人の『由良子孃』を持つてゐるのだ。——」

私は思はず立ち止まつて、彼の顏を視詰めないではゐられなかつた。

「へえ？あなたも由良子を持つていらつしやる？——そりやアあなたの奥さんなんですか。」

「うん、僕の女房だ、——君の女房と孰方がほんたうの『由良子』に近いか、何なら見せてやつてもいいがね。」

（つづく）



聚樂の人（三幕）

吉田絃二郎

第一幕　第一場　淀の土堤

時　天正十九年早春の夜

人物　千利休
利休の娘お梶
細川忠興
古田正勝
曾呂利新左工門
乞丐、狂へる女、船頭、駕籠舁、小者等

淀川の土堤である。渚に沿ふて枯れ葦がのこつてゐる。月の光りが水のやうに漂ふてゐる。遠いかすかな鵆乃の聲が聞えてゐる。霧がこめてゐる。
岸の柳がわづかに芽生えしかゝつてゐる。
土堤から足がかりができて川の岸まで下りてゆけるやうになつてゐる。

土堤の下に乞食小屋が二軒ある。
男の乞丐が二人焚き火をしてゐる。女の乞丐は川の岸で、笊をかゝへて米を洗つてゐる。
小屋の窓からは一人の若い女が低い聲でうたひながら月をながめてゐる。そして時々思ひ出したやうに唄ふ

山こえて
雨がふる
山こえて
日がくるゝ
わしのなみだに
日がくるゝ
暮れた山路を
たれがゆく

米を洗つてゐる女乞丐　あの娘は大變な御機嫌ぢやないか。
乞丐甲　さうだよ、まあ、でも泣かれるよりましだ。
乞丐乙　でもなあ氣も狂れようよ。氣の毒な娘だ。
乞丐女　考へて見るとわたしたちは恐ろしい世に生れ合せたもんだな。太閤さまたつた一人のお心のために日本中に幾萬人、あの娘と同じやうな目に逢ふた人があるか知れぬ。
乞丐乙　太閤さまが悪いといふわけではないさ。足利だの、織田だのいふ人の天下より、太閤さまの世になつてから

世の中がずつと明るくなつたといふくらゐだから、まあありがたいことだらうよ。氣の毒なあの娘のやうな人もあるにはあるが、それはどんな世にもあることぢや、まあ運ぢやなあ。

乞丐女　でも氣の毒なものぢや。またあのやうにうたふてゐる。

乞丐甲　結局人間は氣でも狂ふた方が仕合せかも知れぬ。

乞丐女　まつたくだ。

乞丐甲　それにしてももう彼岸櫻が咲かうといふに何といふうすら寒いことだらう。もうすこし火をくべてあたゝまつて寢るとしようか。

焚き火をくべる。娘低い聲でうたふ。

曾呂利新左衞門登場。駕籠、小者等隨ふ。

新左衞門　まだ見えぬかなあ。

川上の方を伸びあがりてながめる。

小者　左様でございます。旦那さまはずゐぶんお急ぎになりましたから。

新左衞門　利休の奴、たうとうあんなことで聚樂をお構ひになつたので、何ぼ何でも、宵の口に京の町を落ちてゆくことはできぬにきまつてゐる。早くとも四つころであらうと思ふので、そのつもりで六つが打つと直ぐ急いでこゝまでやつて來たが、すこし來かたが早過ぎたかな。

小者　いゝえ、早過ぎもいたしますまい。船でございますと下りは早うございますから、追つ付け利休さまの船も見えるでございませう。この土堤の上に番をさして置きまして、旦那さまは寒うございますからあの下の焚き火のところで少しあたゝまりなすつてはいかゞですか。ぢや駕籠屋お前たちはこゝに踞つてゐて、それらしい船が見えたら聲をか

けてくれ。

鶴飯昇　はい、かしこまりました。

（曾呂利、小者等土堤を下りて焚き火のところへ來る。）

小者　ちよつとあたらしてくれ。

乞丐乙　はいはい。

新左衞門　あゝおかげであたゝかくなつた。

若い女（窓にて笑ふ。）

小者　あの女は何だ。

乞丐甲　あの娘でございます か。あれは氣が狂ふてゐますので。

新左衞門　氣狂ひか。それにしても愉快な奴だな。あのやうに笑ふてゐるではないか。

乞丐甲　笑ふてはをりますが、うれしいのでございますやら、悲しいのでございますやら。

新左衞門　何かそのやうな因果話でもあるのか。

乞丐甲　あの娘については氣の毒な話がございます。高い聲では申されませぬが、太閤さまは何のために方廣寺だの、大佛だのとでかい物ばかりおこしらへになりますのか知りませぬが、先年近江の三井寺から大佛殿の大石をお曳きなされました時、あの娘の許婚といふ男が蒲生さまの靴下で、やはり働いてゐたのでございます。ところで、別になまけてゐたといふわけでもありますまいが、ちよつとその曳き綱から手を放してゐるところを見つけられたのです。蒲生さまが大變御立腹なさいましてお前のやうなづるい奴がゐるので石が動かぬと仰つしやつて、その若者を拔き打ちにな

されたさうでございます。

新左衛門　………………………

乞丐甲　それから間もなくでございます。あの小田原の陣でございます。兄一人妹一人で悲しい月日を送つてゐますところに、兄は夫役に召されまして出かけましたが、これも小田原で殺されましたといふことでございます。あの娘が氣が狂ふたのはそれからでございますさうな。

小者　可哀さうな娘だなあ。可愛らしい顔をしてゐるが。

新左衛門　お前たちは何を話してゐてもすぐそのやうなことにばかり氣がつくのだな。

小者　はゝはゝは………

乞丐等柴を運んで焚火の中へくべてやり、小屋の中へはいる。

新左衛門　おい、まだ船は見えぬかなあ。

駕籠舁　はい、まだ船らしいものは見えませぬ。

新左衛門　利休は何をひまどつてゐるのだらう。あいつのことだから今度のやうなことになつても風流だの、寂だのと尤らしいことを言つては高慢な面をして、またあの山師の一言一句に隨喜の涙をこぼす躰をほろりとさせてゐるのだらう。

小者　あの亂暴者の福島左衛門さまさへも、利休さまの前へ坐ればぶる／＼と顫へるほどだと仰つしやつたといふことではございませぬか。

新左衛門　福島左衛門が勇………氣はあるが　あの男は智慧が足りないからなあ。山師にうまく一本かつがれたま

でのことさ。

乞丐等何呂利の話を襖戸を細目に明けて聽いてゐる。やゝ驚いた態。

小者 利休さまは山師でせうか。

新左衛門 大山師だとも。殿下までもすこしのことでたぶらかさうとしてゐたのだ。あの男はわしと同じ堺の町人ではないか。それにわしらの茶道の方からいへば彼もわしも相弟子だ。同じ町、同じ町人で、相弟子であるからにはもすこしわしに對してもちがつた態度をとつていい筈だ。ところがあの男はばかに高尚振つてばかりゐる。自分ばかりが風流の道を知りつくしてゐるといふ面だ。そして何かといふとしかめつ面をして眞面目くさつた態をして見せる。わしはあいつのあの高慢な顔を見るのがいやだつた。だからわしはあいつの顔さへ見ればわざと大きな聲で笑つてやつた。あいつはわしのことを淺薄だの無學だのといつた。いつもしかめつ面をして世の中を送るのが眞劍だといふのだ。だからわざとわしはいつもふざけてばかり日を送つて來た。いつであつたかあいつが殿下をお招きした。わしもお伴をして行つた。

小者 あの時はわたくしもお玄關までお伴いたしました。

新左衛門 さうだ。雪の日であつたなあ。

小者 ひどい雪でございました。

新左衛門 お座敷に通したまゝでいつまでたつてもお茶一つ立てゝは來ぬ。殿下もわしも雪の中の燈籠をながめてゐるばかりだつた。ははあ、あいつこの雪の聲を聽けとか何とかいふ茶人の道樂氣でこんなことをしてゐるのだなと思ふと小癪にさわつて仕方がなかつたので、わしは庭に下りて滅茶々々に雪を踏み散らしてやつた。

小者　さうだつたさうでございますなあ。

新左衞門　さうすると利休奴出て來やがつてびつくりした。そして心ない四つ足の仕業であらうといふのだ。皮肉だ。だからわしが直ぐこたへてやつた。お前はその四つ足のお仲間だと。殿下もお笑ひ出しになつたことがあつたはゝはゝは、……。

小者　利休さまは久しいこと旦那さまとお仲が惡うございましたなあ。

新左衞門　殿下のお口きゝで仲直りはしたが、水と油だ、たうとう最後の日まで仲直りはできなかつた。このまゝだまつて別れるのは口惜しいから、今日はあいつの船を見つけたら思ふ存分土堤の上から笑つてやらうと思ふのだ。お前たちもうんと笑つてやつてくれ。わしが音頭を取る。笑ひ賃は幾らでも上げるから。

大きな錦の金袋を懷から取り出して振つて見せる。

さあみんなこゝで笑つて見ろ。これは今日殿下を笑はせた御褒美に殿下からいただいたのだ。お前たちに分けてやるからさあ笑へ。

みんな笑ふ。

まだ聲が小さい。もつと大きな聲で笑へ。

みんな笑ふ。

まだ聲が低い。それではこの金はやれぬ。わしのやうに笑ふのだわッはつはつはつ……わつはつはつはつ……。お前たちはなぜ腹の底から笑はぬか。淚が出るほど笑へ。淀の川幅は廣いぞ。そんな笑ひ方で利休の胸にしみるものか。笑へ。

みんなさらに大きな聲で笑ふ。

新左衛門　うん、その調子で笑つてやれ。

鶴龜昇　旦那さま船らしいものが見えます。

新左衛門　船がッ！

鶴龜昇　霧がございますのではつきりとは見えませぬが、燭が一つ川上から流れて來るやうでございます。

新左衛門　袋の中に手を入れ小判を摑み出し、驚いてゐる小屋の中の乞丐たちへ投げる。

焚き火のお禮だ！

鶴龜昇　旦那さまあの船にちがひありません。もう直ぐそこまでやつてまいりました。

新左衛門　何だ！　もう直ぐそこまで！

驚いて土堤を登る。みな〳〵隨ふ。下手へ走る。

小屋の中より男女の乞丐走り出て小判を爭ひ拾ふ。そして月光にすかして見る。

窓の若い女低い聲でうたふ。

唄

雨のとぼそをたれやらたゝく
夢であつたか雨がふる
しとみあげても雨がふる

女笑ふ。

同じくかへし

漫々たる淀の流れ。正面には水をへだてゝ淀の城が見える。淀の水車が見える。月が照つてゐる。

上手から船が下つて來る。苫がかけてある、艫の方で[illegible]てゐる。若い船頭が一人櫓を押してゐる。水鳥の聲が聞える。

利休　苫を排して艫の方へ出て來る。

あゝいゝ月だ。

お梶や出て來て月を見てごらん。

お梶　もう伏見の町の燈も見えませぬか。

利休、うむ。もうだいぶ伏見の町も遠ざかつたやうぢや。まだ燈はかすかに見えるには見えるが。（愁然として川上の方を見る。淀の城を見て頭を垂れる。）船頭こゝいらに舟を留めてしばらくやすんでゆかう。

お梶　（苫の中から出る。）

昨日までは利休といつただけで、京伏見の町の人たちばかりか、大名屋敷のかた〴〵までがあだやおろそかにはなさらなかつたに、今日は島流しにでも逢つた人のやうに、このやうな船で、人目を忍んで行かねばならぬと思ひますともうあんまりなさけなくて。

利休　……默つて月を見、遠ざかつてゆく伏見の町を見てゐる。

お梶　いくら太閤さまにしても罪もないお父さまをとらへて、京の町を退去しろだの、堺へかへれだの仰つしやるのはあんまりひどい。

利休　お梶何をいふ……いゝ月ではないか。年來御奉公に暇がなかつたので、つい落ちついてこのやうな月を眺むることもなかつた。わしは風流だの、寂だのいふ言葉のうちに埋つて生きてゐた。しかしそれはたゞ言葉だけのことであ

つた。爐に松風の音を聽くといふたがそれも人間の勝手な理屈であつた。小智は菩提の妨げといふことを忘れてゐた。わしは今夜はじめて月を眺めてゐる。淀の川瀬の音を聽いてゐる。これこそ眞の月ぢや、眞の聲ぢや。

お梶　お父さまはこのやうな目に逢ふて生まれ故郷へ歸るのを、何とも思つてはおいでになりませぬか。まるで流人のやうに。

利休　成るほどわしもさつきからその島流しに逢ふた人たちの心を想像してゐた。京から島へ送られてゆく流人たちはみなこの淀の川を下つて行つたものぢや。昨日は人の身の上ぢやと思つてゐたが。

お梶　でも、わたくしたちは……

利休　島流しの罪人なら生きてふたゝびこの流れをさかのぼる日もあらうが。

お梶　でもお父さまはしばらく故郷の町へ御蟄居になつて ゐますれば、近いうちにまた京の方へお召しになるでせう。

利休　お前はそんなことゝ思ふてゐるのかはゝはゝはゝ（寂しく笑ふ）

お梶　でもお父さまには何の罪も咎もない筈ではありませぬか。

利休　もと〳〵罪がないといへば罪はない。しかし罪のあるなしは人間の心できめられることだから。

お梶　ではお父さまはもうわたくしたちは二度と淀の川瀬をさかのぼることはないと仰つしやるのですか。

利休　淀の川瀬をさかのぼることは無論、瀬の音を聽くことさへながくはゆるされぬであらう。

お梶　ではお父さまは……

利休　わしが死なうと思はぬにしても、明日か明後日は………ひよつとしたら、わしらの船が堺に行き着かぬうち

に、もう殿下の御使はわしらを待つてゐるかも知れぬ。
お梶　どこで待つてをります。
利休　堺の家で。
お梶　…………
利休　それでもわしは、わしが生まれたあの家で腹を切ることができるのかと思ふとまだ仕合せぢや。
船頭　川上の方から船が一艘下つて來るやうでございます。
お梶　ずゐぶん急いで來るやうぢやありませんか。
利休　霧が深いので。
船頭　二人で櫓を押してをります。

水をへだてゝ呼ぶ聲が聞える。
川上から船が近づいて來る。船には細川忠興と古田正勝が乘つてゐる。親子らしい船頭が二人。

忠興　宗匠でございますか。
正勝　たしかに宗匠だ。それにお娘も御一緒だ。
利休　おう、細川さまか！古田さまか！
忠興　宗匠！（暗然として）
政勝　宗匠！この度のことは何ともお氣の毒で……
忠興　今朝から三井寺まで政宗同道で參つてをりましたので、實は宗匠が不審庵を出られたことを承つたのは日暮れころでございました。京から伏見まで馬を走らせて館にも立ち寄らず驅けつけましたのですが、すでに御出立後でござ

いました。

正勝　わたくしも馬を捨てゝ御一緒に船をやとひ急ぎに急がせましたがお目にかゝることができまして、このやうにうれしいことはございませぬ。

忠興　しばらく船をとゞめてくれ。

船頭棹をさして船をとゞめる。
忠興、正勝二人利休の船に乗りうつる。

忠興　何とまうして宜しいか、あまり突然のことではあり、夢にも想はぬことでございましたからたゞ〳〵呆然といたしてをります。お梶どのもさぞ驚きなされましたでございませう。

利休　これも成り行き、今さら何とも思ひませぬ。たゞ今日のわたくしはすでに天下の罪人同様の者、世の憚りもおかまひなくこの夜中わざ〳〵御見送り下され、利休お禮のまうしあげやうもございませぬ。お梶お茶を立てゝお上げ。

お梶　不審庵を立ちます時、何一つ持ち出してはならぬと仰つしやつたので、お茶の道具一つございませぬが。

利休　そうであつたな。

正勝　では宗匠はあれほどの名器までもみんな……

利休　はい。それ〳〵に形見分けとも存じましたが、あのやうな物のために人々が風流だの、寂だのといふて生さとりの道に迷はるゝことがあつてはと存じ一物殘らず捨てゝまいりました。

忠興　あれだけの名器がありますれば二ケ國三ケ國の所領にもかへがたいほどの値はございましたらうに。

利休　すべてはやがて土に還つてしまふものでございませうは……はゝは……おゝそうだ、あの包みのなかに急いで

つて來た品がある筈ぢや。あれだけはまだ未練が殘つて捨て得なんだが。

苔の下の小ひさな柳行李を取り出し、中から肩衝と茶杓佛像を取り船板の上に並べる。

この佛像は信長公御在世のころ拜領いたしましたわたくしの持念佛でございます。わたくしの茶道を導き一生をお守り下された佛でございます。この肩衝こそ五ケ國十ケ國の所領ともお取り替へはいたしませぬとまうしてこの春太閤の御氣色を損じた物でございます。この茶杓は師匠よりいたゞきました名器でございますので、つひどこの旅へまいるにもこの小行李の中へ入れて持參いたしましたが、この品々だけは捨てかねてこゝまで持ちました。人間の執着といふものから、今の境界になつても、脫けきれぬのかと思ひますとお恥かしう存じます。お梶あの七輪で湯をわかして、せめてお茶一つお上げしてくれ。

お梶、船頭から土瓶をかりて湯をわかす。

正勝　こんなことを今更おたづねいたしますのも變ですが、いつたいこの度の殿下のお腹立ちは何が原因なのでございますか。お心あたりがおありですか。

利休　あるといへばあり、ないといへばないのでございます。殿下はいろ〳〵の箇條をお並べなされたさうでございますが。畢竟は太閤とわたくしとは同じ世界に住むことのできぬ人間でございませう。殿下はよくいろ〳〵の物を惜し氣なく下されます。日本國中を惜し氣もなくみなさまへお分ちなされました。近いうちには朝鮮大明までも軍をおすゝめになつて、大名方へお分けなさるおつもりのやうに承りました。與へる者は與へられる者よりはいつでもほこりを感じるものでございます。殿下は日本中に殿下以上のほこりを感じてゐる者を一人でもお持ちになることを心から恐れておいでになります。時と場合では缺け茶碗一ついたゞいてもうれしいと思ふこともありますが、不肖ながらわたくしは

たとへ殿下に一ヶ國二ヶ國の所領をいたゞきましてもありがたいとは思ひませぬ。わたくしには子供のころから今のやうな頑なところがございます。天下を賜はらうと仰せられてもわたくしは欲しいとは思ひませぬ。わたくしには天下以上のものがありますつもりでをります。

お梶　お湯が煮立ちました。

利休　何か茶碗はないかのう。

船頭　何もございませんが、船にあります茶碗といつてはわたくしが御飯をいたゞきます……

利休　うむ、その茶碗で結構だ。

（船頭から茶碗をうけとり、自分で舷に寄れ川の水にて洗ふ。）

お梶のことについてもお聽きでございませうが、對手が太閤殿下であるからわたくしは首の座が飛んでも娘はさし上げられませぬ。わたくしの頑な腹の蟲が承知をしませぬ。それに殿下もこの春には御舍弟さまにお別れなされたし、つゞいて若さまがあのやうな御病氣、根が心弱いお方だけに大分御分別がお狂ひなされたやうに思ひます。何ゆゑかは知らぬがこのころお立てなさる太閤のお茶には曇つた御心の影がさしてをります。つい一二年前までは……さうだ、あの聚樂をお建てなされたころの太閤のお茶には、成るほど日本一の太閤でなくては出せぬいかにも大まかな太閤らしい茶の味がございました。ところがその茶の味に移り香がしみてまいりました。わたくしはたゞ父親一人の手で育てゝ來たこの娘をいとしいとは思ひますが、しかし娘を思ふ迷ひのためにわたくしの茶道に曇りの影一つ覗かせようとは思ひませぬ。（茶碗を拭いて板の上に置く。しみじみと淀の城をながめる。）

しかしまあ、わたくしくらゐ殿下に目をかけていたゞきましたものもありますまいに、それがこのやうになつて別れ

なければならぬといふことは………殿下にしても、ついこのほどまで何でお考へになつたことがありませう。もしわたくしが今夜にも……あゝ今夜は殿下は淀の方さまのかたへお越しの筈ですが、このまゝあのお城へまいつてわたくしのこの口を開いてお助け下さいと一言お願ひまうしませうなら必ず御ゆるし下さるにちがひありません。しかしそれでは頑(かたくな)なわたくしといふものが滅びてしまひます。

人間の心ほどあてにならぬものはない。自分で明日の自分の心がわかりませぬ。

茶を立てゝ先づ忠興の前へ置く。廻し飲む。

忠興　宗匠の今後の御考へは？

利休　人生七十力圍希。咄々。吾這寶劍。祖佛共殺。はゝはゝは………

忠興、正勝俯向く。

利休　たゞお梶のことでございますが、お前はどうしてもわたしと一緒に堺へかへるか。

お梶　はい。一緒にかへらしていたゞきます。

利休　しかしなあ。わしは明日にも腹を切らねばならぬことは分りきつた話だ。わしと一緒にゐたのでは、わしの死後どのやうなことを殿下から仰つしやるかも知れぬ。一層今のうち何處かへ身を隠さしてやりたいと思ふのでございますか。

お梶　宗安には死別れましたし、この上父にまで別れなければならないくらゐでしたら………

利休　いや、まだ死ぬのは早い。お前は若いのだから。

忠興　もしおゆるし下さるのでしたら、わたくし何とか取りはからひませう。宗匠にはそのことは御安心なさいますやう。

利休　あたたにお願ひできさすればわたくしも安心して死ねます。

忠興　では、お梶どのはわたくしと一緒に伏見へ密かにお伴れいたしませう。

お梶　でも、わたくしはどうしても父を捨てゝは生きてゐる氣はいたしませぬ。

利休　お前が死んでくれたところでわしが何でうれしからう。お前は生きられるだけ生きてくれ。たとへ姿をかへ、樣をかへて非人乞丐になつてもお前が生きのびてゐてくれると思へばわしも安心して死ねる。どうぞいつまでも生きてゐてくれ。

利休最後に茶碗をかゝへて飲む。

あゝこれでわしもすつかり安心して死ねる。細川さま、古田さま、夜も更けます。人に見られても悪い。ではこゝでお別れいたしませう。

忠興　ではこれでお別れいたします。

正勝　宗匠、御道中を。

利休　ありがたうございます。さあ、お梶泣いてゐては仕方がない。お前はあつちの船に乘るのぢや。

お梶　わたくしはお父さまと一緒に死にたうございます。お父さまを捨てゝ何でわたくしが生きてをれませう。

利休　ばかなことをいふ。お前はいつまでも生きのびてゐてくれ。さああちらの船に乘つてくれ。

正勝　さあ、どうぞこちらの船へ。

お梶　手をとられて忠興の船に乘る。

利休　お願ひいたします。お梶わしのことを心配するでないぞ。いつまでもいつまでも生きのびてくれ。わしが死ね

なければならぬといふことは…………殿下にしても、ついこのほどまで何でお考へになつたことがありませう。もしわたくしが今夜にも……あゝ今夜は殿下は淀の方さまのかたへお越しの筈ですが、このまゝあのお城へまいつてわたくしのこの口を開いてお助け下さいと一言お願ひまうしませうなら必ず御ゆるし下さるにちがひありません。しかしそれでは頑(かたくな)なわたくしといふものが滅びてしまひます。

人間の心ほどあてにならぬものはない。自分で明日の自分の心がわかりませぬ。

茶を立てゝ先づ忠興の前へ置く。廻し飲む。

忠興　宗匠の今後の御考へは？

利休　人生七十力圍希。咄々。吾這寶劍。祖佛共殺。はゝはゝは……

忠興、正勝俯向く。

利休　たゞお梶のことでございますが、お前はどうしてもわたしと一緒に堺へかへるか。

お梶　はい。一緒にかへらしていたゞきます。

利休　しかしなあ。わしは明日にも腹を切らねばならぬことは分りきつた話だ。わしと一緒にゐたのでは、わしの死後どのやうなことを殿下から仰つしやるかも知れぬ。一層今のうち何處かへ身を隠さしてやりたいと思ふのでございますか。

お梶　宗安には死別れましたし、この上父にまで別れなければならないくらゐでしたら……

利休　いや、まだ死ぬのは早い。お前は若いのだから。

忠興　もしおゆるし下さるのでしたら、わたくし何とか取りはからひませう。宗匠にはそのことは御安心なさいますやう。

利休　あなたにお願ひできさすればわたくしも安心して死ねます。
忠興　では、お梶どのはわたくしと一緒に伏見へ密かにお伴れいたしませう。
お梶　でも、わたくしはどうしても父を捨てゝは生きてゐる氣はいたしませぬ。
利休　お前が死んでくれたところでわしが何でうれしからう。お前は生きられるだけ生きてくれ。たとへ姿をかへ、様をかへて非人乞丐になつてもお前が生きのびてゐてくれると思へばわしも安心して死ねる。どうぞいつまでも生きてゐてくれ。

利休最後に茶碗をかゝへて飲む。

あゝこれでわしもすつかり安心して死ねる。細川さま、古田さま、夜も更けきす。人に見られても悪い。ではこゝでお別れいたしませう。
忠興　ではこれでお別れいたします。
正勝　宗匠、御道中を。
利休　ありがたうございます。さあ、お梶泣いてゐては仕方がない。お前はあつちの船に乘るのぢや。
お梶　わたくしはお父さまと一緒に死にたうございます。お父さまを捨てゝ何でわたくしが生きてをれませう。
利休　ばかなことをいふ。お前はいつまでも生きのびてゐてくれ。さああちらの船に乘つてくれ。
正勝　さあ、どうぞこちらの船へ。
お梶　手をとられて忠興の船に乘る。
利休　お願ひいたします。お梶わしのことを心配するでないぞ。いつまでもいつまでも生きのびてくれ。わしが死ね

ば殿下のお憎しみも薄らぐにちがひない。

お梶　お父さま。

利休　わづらふな。

船遠ざかる。お梶が泣き、父を呼ぶ聲がしばらく霧の中に聞える。利休暗然としてゐる。

間。

利休われにかへりてそこにあつた茶碗に氣付く。

利休　どうしたといふのだ。まるで力といふ力が拔けてしまつたやうだ。（茶碗の中を覗いて。）あゝわしはさつき飲んだつもりであつたがまだこのやうに殘して置いたのか…………何といふ心の亂れ方だ。耻づかしいことだ。今が今殿下のことを批判した口の下からわし自身が…………

ふたゝび茶碗を抱へ上げて茶碗の底を見つめる。飲む。

そして……この茶の州滅は！……何といふ心の亂れ様であらう。

三たび茶を飲み、味ふ。

あゝ耻かしい何といふ心の狂ひ様だ！わしは七十歳の今日までたゞこの道一筋に一生をさゝげて來た。そしてかりにも千利休とも呼ばれた身が……わしは耻かしい。わしは何一つ心の準備も出來てゐなかつたのだ。わしの一生はまつたく失敗であつた。一生は無駄であつた。わしは今日まで何をしてゐたのだ。わしは……

船板の上に身を投げ出すやうにして泣く。

間。

立ち上る。失神した者のやうになつて。

利休　わしは人間の信念がこのやうに脆いものとは思はなかつた。いや、人間の信念はもつと〱強い筈だ。今ほんの少かの間だけわしは迷つてゐたのだ。わしは人間の信念がこれほど弱いものとはどうしても信ずることが出來ない。よし、過去の七十年のわしの精進は徒勞であつたとしてもわしはまだ明日といふものを持つてゐる。わしは恐らく明日一日だけの命しかあたへられぬであらう……それでもいゝ。わしは今日の夜が明けるまでに人間の強い信念を證據たてゝ見せる。

船頭　あの岬のところへお孃さまの船がかゝりました。まだ船の燈が見えてをります。

利休　……………………………（しばらくぼんやり川上を眺めてゐるが、急に自分にかへり驚いたやうに）さあ水棹を抜いてくれ。（船頭水棹を抜きとる。利休は立ち上らうとしてよろめきそのはずみにそこにあつた肩衝や佛像を川の中へ誤つて落してしまふ。利休はたゞぢつと沈んでゆく肩衝や押し流されてゆく佛像を見つめてゐる。船頭は驚いて利休と流れてゆく佛像とを見くらべてゐる。）早く川を下つてくれ。

船頭　かしこまりました。（船頭棹をさし、川上の方を氣にしては振りかへつて見る。）

利休　…………………………………（うづくまつてぢつと七輪の火を見つめてゐる。）

船しづかに動く。欸乃かすかにきこゆ。

同　第二場　聚樂第

時　天正十九年冬の日の午前

人物　豐臣秀吉

豐臣秀次
羽柴秀俊　秀次の弟
曾呂利新左衛門
大野道犬
小姓、侍等

南蠻船で送られて來た珍しい鳥や、鳥籠や、織物などが眼につく。小机の上には一枚の地圖がひろげられてある。渡來の大きな盃などが三四並べられてある。

曾呂利新左衛門腹をかゝへて笑ひながら下手より走つて來る。

新左衛門　わつはゝはゝはゝ……………わつはゝはゝは……
(下手を振りかへつては思ひ出し笑ひをする。)
あゝ苦しい。わつはゝはゝは………わつはゝはゝはゝ………あの大德寺の和尚奴いつも勿體振つた顏をしてゐるので、今日はうまく面の皮を剝いでやつた。あの法師さぞ今ごろは腹を立てゝゐることであらう、あゝこんな愉快なことはない。もう可笑しくてわツはゝはゝは………わつはゝはゝは…………(自分の聲に耳を傾ける)
おや何だか變だぞ。わつはゝはゝは……(わざと笑つて自分の笑ふ聲を聽く。)
どうも變だとは思つてゐたが、こなひだからわしの笑ひ聲に曇りがかゝつたやうだ。(尚一度笑ひ直して見る。)
わつはゝはゝはゝ…………わつはゝはゝはゝ
どうも變だ。
うむ、さうだ今年の二月の夜であつた。利休奴が腹を切つて死んだ少し前のことであつた。淀の川を下つてゆくあの

男の船を追つかけて土堤の上からかねての腹癒せに思ふ存分笑つてやらうと思つて行つた時であつた。利休奴の船がちやうどいゝあんばいにわしが隱れてゐた土堤へ近く下つて來た。さあ思ふ存分笑つてやるのは今ぞとばかり仕度をして待つてゐると、さあわしの眼は昨日までとはまるでちがつた利休を見た。いつもの悟りすましたやうな顔を見るであらうと思つてゐたが眞正面(まとも)に月の光りに照らされた利休の顔を見ると寂しいといはうか、氣の毒といはうか、いや尊いといはうか、何とも形容のできぬ不思議な顔であつた。たゞ一人で爐の七輪の前につくねんと座つてゐたが、後光でもさしてゐるやうな氣がした。それを見てゐるとわし自身が深い洞のなかにでも引き入れられてゆくやうに感じた。笑つてやるどころか、こつちまでが何か知ら深い水の底を見つめてゐるやうな氣になつてしまつた。あの時からであつた。わしは時々自分の笑ひ聲が空洞の響きのやうに想はれてならぬことがある。いや、わしばかりがさうでない。このごろはあののんきな太閤までが時々心細いことを仰つしやることがある。世の中の調子が餘程變つて來た。尙一度笑つて見ようわつはゝはゝは……わつはゝはゝはゝ……どうも面白くない。わつはゝはゝは……やつぱり駄目だ。利休奴の顔が目にくつついてゐて……

大野道犬　（登場）新左衛門何を笑つてるのだ。いつもよく笑ふ男だなはゝはゝは……

新左衛門　大野さまでございましたか。

道犬　お前は今そこで利休の頭が何とかいつてゐたが、利休といへばあの娘をこのほど京の町で見かけたものがあるといふことだが、お前そのやうな話を聽かなんだか。

新左衛門　大聽きでございますが、殿下のお耳にそのやうなことが聞えましたらあの女が可哀さうでございます。それればかりかその男までがどのやうな目に逢ふか知れませぬので。

道犬　鴨居宗安が亡くなつて後は後家を立て通してゐるといふ話であつたが。

新左衞門　わつはゝはゝは……あのやうな美しい女を。世間がなか〳〵ゆるしませぬ。

道犬　では對手は誰だ。

新左衞門　徳川さまのお小姓山名某とかいふ男ださうでございます。徳川さまそれに細川さまも内々御承知の上でとのことでございます。

道犬　さうか。

新左衞門　もつとも殿下もすでにそのことはうす〳〵お感じになつてゐるかも知れませぬなあ。しかしこのころ鶴松さまがお亡くなりになつてからは、殿下もあの方のことは大分御執心が淺くおなりのやうですからはゝはゝは……ですからもう諦めておいでになるのでございますかな、あんな女一人くらゐ殿下には何でもないのですから。

道犬　さういへばさうだ。

新左衞門　ですが、たゞ一つ困つたことは秀次さまの御舍弟秀俊さまでございます。高い聲では申されませぬが、小田原の御陣でも鼻つつまみでしたよ。太閤の甥だといふのを鼻におかけなされて、大名たちに對して無作法千萬なことばかり。御兄さまとは雲泥のちがひでございますよ。それに色好みで、まだあの若さで、女と見れば眼がないのですからなあ。

道犬　殿下は昔からあまり寛大でゐらつしやるからなあ。

新左衞門　まつたく殿下くらゐ御身内の方におやさしい人情に厚い方はありません。殊にこの前鶴松さまがお生まれなされた時のお喜びやうつたらありませんでしたな。わざ〳〵小田原の御陣から飛んでかへらうとなさつたくらゐです

から。あの人情にあつい寛大なお心を秀俊さまなどはよいことにして我儘いつぱいのことをなさるのです。あの利休の娘をば、實は秀俊さまが目をつけておいでになるのでございます。

道犬　あの女は殿下との關係があんなことだつたのだから、殿下に對して相すまぬことぢやがなあ。それにすでに思ひ合つた男があるといふのに！

新左衛門　男があらうがあるまいがそんなことはどうでもかまはないのです。あの亂暴者ですから。やあ、大變だ。噂をしてゐましたら何だかあの方らしいですよ。

道犬　いかにもさうらしい。

新左衛門　あんなお方にはさわらぬ方が宜しうございますはゝはゝは。

道犬　さうだなあはゝはゝはゝ

兩人上手へ退場。舞台しばらく空く。籠の鳥鳴く。秀吉上手より登場。どことなく明るいユウモラスな顔。ドン・キホーテ式な空想癖がある。渡來の寶などをうれしさうに眺める。手にとつて見る。机の上の地圖をひろげて見る。ひどく疲勞したらしい體。

秀吉　これが朝鮮の都か。これが大明だな。ふむ、これがこなひだ大阪で逢ふたイスパニヤのキヤピタンが歸つて行つた島か。遠いことは遠いなあ……

秀俊下手より登場。二十歳ばかりの若者。疳癖あり。

秀俊　伯父さま。

秀吉　あゝ、お前だつたのか。(ちよつと親しみある顔で見る。)

秀俊　伯父さまはおからだが惡かつたさうですが……

秀吉（さらにうれしさうな顔で。）あゝありがたう。大分元氣になつた。もう大丈夫だ。

秀俊　それは何よりですな。（あぐらをかく。）あんまり犬を追ひまはしたので草臥れてしまつた。伯父さま。この頃はいろんな犬が邸の中へはいてゐますね。

秀吉　茶々が好きだから。

秀俊　さうですか。さつきもそんなことゝは知らなかつたから、吠えついた白黑の奴を一疋叩き切つてやりましたよ。犬を切るのは餘程腕がいりますね。

秀吉　……………（不愉快な顔をする。）

秀俊　伯父さま。刀のいゝのがあつたら一腰下さいませんか。

秀吉　刀か？……うむ、あげよう。無銘だがいゝ刀だ。正宗だらうと思ふが。

秀俊　さうですか。（刀を拔いて見る。）ぢやいたゞいときます。（無雜作に膝の傍へ置く。秀吉ぢつと暗い顔で見てゐる。）

秀吉　犬を切る刀ではないぞ。人を切るのだ人を。

秀俊　ぢや、早速人を切つて見ませう。

秀吉　ばかツ。戰場でのみ敵を切るのだ。

秀俊　戰場で自ら手を下して人を切るのは將に將たる者の恥づるところでせう。

秀吉　悧巧さうな口を利くな。將軍であらうと、大將軍であらうと、戰場では自ら刀を拔き陣頭に立つて一人でも多く敵を切り殺すだけの勇氣が必要だ。

秀俊　伯父さまの戰法はさうでせう。しかしこれは舊式な戰術ですよ。今の時代は…

秀吉　何が今の時代だ。賢さうなことばかりいふ。
秀俊　伯父さま、少しお金が欲しいのです。
秀吉　何にするのだ。
秀俊　小田原の陣にいたゞきました甲冑も大分痛みましたので、少し手を入れさして置きたいし、それにこのごろよい馬を見つけましたので。いつまた御陣に立たなければならぬかもわかりませんので
秀吉　さうか。えらい、そんなことに氣がつくやうになつたのは。（やゝ機嫌をなほす。）そんな金なら持つてゆくがいゝ。（錦につゝんだ金包を一つわたしてやる。）
秀俊　（金包と刀を無雜作に掴んで立ち上る。）ではいたゞいてかへります。
下手へ退場。秀吉ぢつと見送つてゐる。暗い影が額を掩ふ。
秀吉　いや、またいつもの氣鬱の蟲奴が喰ひついたやうだ。わしはそんなに弱い人間ではないぞ。（顔を撫でて見る。）利休奴が生きてゐたら欲しがるであらう。あいつはたうとうわしに首の骨を曲げることをしなかつた。横着者であつた。しかしあいつは氣の毒な奴ではあつた。このころになつて時々あいつが言つたことが氣にかゝるやうな感じもする。しかしやつぱり宛ひだ。あいつはなか〳〵づるい奴であつた。死んだ後までわしを迷はすやうな言葉を殘して行つた。だがおい茶坊主、いくらお前がかしこさうなことを言つても、わしにはかなはぬ。わしはたゞ一言でお前に腹を切らせた。お前が死んで後に何が殘つた。見ろ、こゝから見えるあの方廣寺の大佛を。あれは百年千年の後までのわしの紀念ぢや。わしはまだこれからもわしの大きな足跡を地の上に刻みつけて歩く。わしにまさる大きな足跡を誰が殘したか。日本中にわしに盾を突き得るものが一人でもあるかはゝはゝは……

秀次　（上手より登場。束帶を着けてゐる。神經質な蒼白な顏。いつも何か考へ込んでゐるやうな、そしてほとんど笑ふことを知らぬやうな顏。ハムレツト型の男。）

秀吉　おう、大層立派だ。

秀次　父上から頂戴いたしました束帶で參内いたすことにいたしました。

秀吉　どれ、うしろを見せて御覽。うむ、なか〳〵よく似合ふ。いかにも立派だ。二位の位をいたゞいたがなか〳〵立派なものだ。どことなしに重々しさがついて來たぞ。そつちを向いて御覽。うむ立派だ。先日お前のために權大納言をお願ひして置いたが、今日のお召しはそのことについてであらう。今日からは大納言だ。また一層立派に見えることであらう。

秀次　何から何までありがたうございます。

秀吉　わしも鶴松が死んでからは氣がふさいで仕方がなかつたが、お前のやうな立派な後繼ぎができたので安心をした。このごろはおかげで氣が晴れ〳〵として來たやうだ。

秀次　急に伯父さまが亡くなられ、つゞいて鶴松殿があんなことになつたのですから御無理もありません。ひところは父上がどうかおなりになるのではないかと心配をいたしてをりました。

秀吉　いや、人間といふものは親子の情には弱いものだ。鶴松が死んだ時、わしははじめてわしの一番の弱點を知つた。夜々とわしは一晩中かはる〳〵鶴松を抱いてゐたが、あの子が息を引き取つて、まだしばらくの間は胸にさはつて見るとかすかにあたゝまみがあるのだ。聲をかけたら眼を開いて笑つてくれさうだつた。それが抱へてゐる間に冷たくなつて行つてしまふのだ。わしのあたゝかい血であの子の胸をあたゝめてやつたらまたよみかへて來ることもあるかと

思つてな抱きしめても抱きしめても……

秀次　あの時の父上の御様子ははたで見てゐましても涙がこぼれました。

秀吉　わしはなあ、あれからも幾度妙心寺の墓を發いて、もいちどあの子を見たいと思つたか知れぬ。

秀次　あまりの御愁傷でございましたので、或ひは殿下は出家なさるのではないかと案じてゐたものもございました。

秀吉　わしもあのころはそのやうなことを考へぬではなかつた。清水寺にも數日こもつてゐたし、東福寺にも泊つてゐたりして生死の界を越えようと骨を折つて見た。ところが東福寺に泊つた二日目の朝であつた。雨が降つてゐた。夜明け方であつたが眠つてゐながらも雨の音は知つてゐた。するとわしの枕もとの障子を明けてあの子が雨に濡れたまゝよち〱ところげるやうにして歩いて來るのだ。わしは現のうちにはつきりとあの子を見た。わしは飛び起きて抱かうとしたがもうあの子はゐなかつた。

秀次　そのやうなことがおありだつたさうですね。

秀吉　心の迷ひだつたのであらうはゝはゝ……しかし今ではもうお前といふ立派な子供が出來たのだからわしは大安心だ。どうぞいつまでもわしの老後を安心させてくれ。

秀次　わたくしのやうな不肖なものが父上の後目に立ちますなどと考へましたゞけでも勿體ないやうな、恐ろしいやうな氣がいたします。

秀吉　いや、人はその地位につけば、自然その地位だけの貫目がついて來るものだ。殊にお前は今でも天晴れな天下人の器量を具へてゐる。何も彼も安心してゐるがいゝ。お前はわしのたゞ一人の頼りだからのう。お前がもしまた鶴松

のやうなことになつたら、その時こそわしはもうこの世に何の望みも持たないことになる。わしのためにもどうぞいつまでもいつまでも生きてゐてくれ。

秀次　ありがたうございます。

秀吉　あゝさうだ、さつき秀俊が來てのう。

秀次　弟がまいりましたか。近いうちに四國へ歸るとかいふことでございますが、わたくしも逢ひたいと思つてゐますがこのころ一向寄りつきませんので案じてをります。小さい時から弟と二人きりで寂しく育つたものですからわたくしには秀俊が亡くなつた母のやうになつかしうございます。たゞ子供のころから氣が荒いものですから間違ひがないやうにとばかり思つてをります。人にはあまり好かれぬ男ですが、それだけにわたくしには一層ふびんに思はれてなりませぬ。今日もまた何かお願ひにでも……

秀吉　また金を貰ひに來たので、金と刀を持たせてやつた。

秀次　あの刀を？（ちよつと暗い顔をする）亂暴な男でございますから……

秀吉　案じることはないだらう。あれも馬鹿ではないから。お前にも太刀を祝はう。これはわしがはじめて參内を仰せつかつた日佩いた太刀だ。芽出度い太刀だ。今日のお前の參内にはちやうどいゝ。お前が佩いて來た太刀ととりかへて行くがいゝ。それからお前にも金を上げよう。お前のは大きい袋だ。これを土産にしたがいゝ。（かなり大きな錦の金袋をかゝへて來てどしんと音をさせて置く。）

秀次　そんなに大きな金袋をはゝはゝは……

秀吉　金の袋は大きいほどいゝではないか。

秀次　でも、あまり慾が深すぎますやうで……

秀吉　慾はなるたけ深い方がいゝ。何でもわしの物はお前の物だ。遠慮なくねだるがいゝ。

秀次　でも、あまりいろ〳〵な物をねだりましては……

秀吉　いまに日本中の物をお前にゆづるのではないか。

秀次　はゝはゝは………（寂しい笑ひ方）

秀吉　さうだ。お前も今日からは大納言だ。ついでにわしの關白職もお前にゆづらう。さうだお前は關白さまになつた方がいゝ。お上の御都合をうかゞつた上で、そのことをまうし上げて早速お前を關白にしていたゞかう。

秀次　でも、そんな高い地位をいたゞきましてはわたくしは却つて困つてしまひます。

秀吉　何、困ることがあるものか。

秀次　あまり冥加に過ぎますやうでございます。

秀吉　そんなに遠慮をすることがあるものか。お前はあんまり欲がなさ過ぎる。ほらその壺だ。こないだ逢つたあのキャピタンが話してゐたイスパニヤの領地だ。その壺を作り出すくらゐであるから定めていゝ土地であるにちがひない。わしは一生のうちにきつとそのイスパニヤの領地を降伏させてやらう。みんなお前にゆづつてあげるのだ。その前に朝鮮と大明を隨へて、これもお前にわしの贈物としよう。（ふたゝび机の上の地圖をひろげる。）これを御覽。（秀次と二人で見る。）

こゝが朝鮮だ……大明……呂宋………こゝいら一面がイスパニヤのものだなあ。先づ手始めに朝鮮だ。まづものゝ半年か一年も戰さをしたら朝鮮は切りしたがへることができよう。その次が大明だ。これとても一年か二年も戰ふたら

わしの手に附かせることができよう。そうなると日本、朝鮮、大明をお前にゆづりわしは呂宋からもつと南へ南へとこの島々をわたつて行つて見よう。これが天竺だな。うむ、わしは天竺へ住んでみてもいゝ。天竺は釋迦の國だ。天竺まで行つたらわしも法師にでもなつて、その時こそ鶴松のためにお經でも誦まうよはゝはゝはゝ…………

小姓　（登場）若さまもうお仕度ができましてございます。

秀次　ではお暇いたします。

秀吉　さうか。ぢや行つて來るがいゝ。氣をつけてな。

秀次　はい。

秀吉　（ほれぐと見送つてゐる。）あ、ちよつとお待ち。わしも一緒に參内しよう。久しくお上の御機嫌もお伺ひしなかつたから……それに例の關白一件のことも一刻も早くきめた方がいゝから。

秀次　恐れ入ります。

秀吉　（奥を向いて大きな聲で）おい、わしも直ぐ參内ぢや。みんな仕度をしろ。

奥から侍が一人驚いて走り出る。

秀吉　直ぐ參内だ。

侍　直ぐと仰せられましても。

秀吉　馬の用意をすればいゝ。わしは馬で行くから。

侍　お仕度は？

秀吉　束帶にきまつてをる。時がないといふのか。それならそれで廊下を歩きながら着ければいゝではないか。早く持つて來い。太刀はお前のを今日一日だけ借りるとしよう。

秀次の太刀を取る。

侍　警護は？

秀吉　そんなものはいらぬ。馬を飛ばすから。

侍　で、ございませうか。

秀吉　治部と右工門に馬でついて來いといへ。大急ぎだぞ。ぢや、出かけよう。

秀吉先に立つてあわただしく奥へはいる。みな〳〵隨ふ。

曾呂利新左衛門上手より逃げ走つて來る。秀俊うしろから刀を拔いて追つかけて來る。

新左工門　駄目ですよ。そんな長い物を振りまはしたつて何が恐いものですか。（壺の間にはさまつて立つ。）

秀俊　恐くはないといひながらなぜそんなところに逃げる。顫へてゐるではないか。

新左工門　恐くはないが、あなたのやうな亂暴者は何をするか知れないからですよ。親もなく、妻もなく、子もないわたくしでもまだ死にたくはありませんからな。

秀俊　その壺の間からこつちへ出ろ。

新左工門　この壺一つ割つてごらんなさい、なんぼあなたでも御切腹物ですよ。あなたが刀を振り上げるとたんにわたくしはこの壺を蹴つて死にます。罪はあなたにあります。

秀俊　づるいことを考へてゐる奴だ。ぢや刀は鞘に入れるから。さつきのことをうまく取りはからつてくれ。

新左衛門　そりや駄目です。あの女にはちやんと男がついてゐるのですから。

秀俊　でも對手の男といふのはたかゞ陪臣ではないか。

新左衛門　しかし殿下にさへ何しなかつた女ですから。つむじ曲りの利休の娘だけにやつぱりつむじが曲つてゐますよ。

秀俊　伯父はあの老人ぢやないか。女が伯父をきらつたのは無理もない。ぜひ何とかしてくれ。

新左衛門　ぢや一層のことわたしなどの手をお借りなさらずとも御自身徳川さまにでもお話になつたらどうです。別にお恥かしいことでも何でもないのですから。あなたの伯父さまは若いころからこんなことにかけても大膽であり、いつも單刀直入的でおいでだつたぢやありませんか。

秀俊　なるほど、そいつは妙案だ。ぢや、早速さうすることにしよう。おい、もうその壺の間から出て來ても大丈夫だ。いつでもづるい奴だなあはゝはゝは……（下手へ入る。）

新左衛門　ほんたうに亂暴な方だなあ、刃物を持つてゐるだけに始末が惡い。だがやつぱりあまり智慧はない。徳川さまにお賴みなさいといつたらさうしようと言つた。伯父さまを御覽なさいといつて聞かせたら、いゝ事を敎へてくれたといふ樣な顏をした。世の中は智慧のない人間ばかりが多くて人を切つたり、人を殺したりする。あまり悧巧な人間だと普通の人間に見えない世界のことまで見えすいて臆病になるので何も出來なくなる。あの利休奴は賢いことでは日本一であつた。そのためにあまり世の中の先々のことまでが見えすいて手も足も出なくなり、一生爐の前につくばつてそのまゝ死んでしまつた。智慧でなら太閤さまは利休奴の足もとにも及ばぬ。太閤さまには先々のことはちつとも見えぬ。だから太閤さまは無茶苦茶だ。無茶苦茶だから素敵に強い。飛んでもないどえらい大佛を作つたりなさる。またこれから先もどんな馬鹿〳〵しい大きなことをもくろみなさるか知れぬ。其の下に悧巧な人間どもが泣いたり笑つたり眞

面目な顏をして使はれてゐる。人間といふものは賢いのがいゝか、それともあまり賢こくないのがいゝかなあ。今の世は大きな驢馬に賢い小猿どもがこきつかはれてゐる。大きな驢馬！大きな驢馬！はつはゝはゝ……はゝはゝはゝ……

ひとりにて笑ひころげる。

第二幕　第一場　聚樂第の一室

時　文祿二年秋の夜　前の幕から約二ヶ年を經過してゐる。

人物　豐臣秀次
　　　羽柴秀俊
　　　老臣
　　　僧數人
　　　木村常陸介

古い書物だの、佛像だのが並べられてゐる。
秀次は熱心に書物を讀んでゐる。僧侶數人しきりに書物の整理をしてゐる。

僧侶一　わたくしの方の仕事はこれでやつと日本紀と三代實錄の方だけは經りがつきました。

僧侶二　それは結構でございますな。わたくしの方はまだ源氏物語といふ大仕事が殘つてゐますので。

秀次　(不圖僧侶たちの方を見て。)もうずゐぶん時も經つた。みんな歸つて休息したがいゝ。今夜はわしは暇だから、わしも少しくらゐ手傳つて調べて

おくから、みんなは歸つたがいゝ。どうせ一生涯かゝつて讀んだところでなか〳〵幾らも讀めるものではない。それを思ふと昔の人たちはよくたくさんな本を讀んだものだなあ。さあお歸り。

僧侶三　ではお言葉にあまへましてお暇いたします。

三人退場。つゞいて老臣一人下手より登場。秀次はつゞけて本を讀み耽つてゐる。

老臣　三河の御領地を檢地いたしました結果二萬石減じてゐますといふ通知がまいりましてございますが。

秀次　うるさいではないか。何だ。

老臣　三州だけで二萬石減といふことでございます。

秀次　檢地のことか？　そんなことはどうでもいゝぢやないか。わしの領地が二萬石減らうと三萬石減らうと仕方はないぢやないか。それでいゝ。わしは今少し落ちついて本を讀んで見たいのだ。落ちついて考へて見たいのだ。

老臣　それではそのまゝで……（退場）

秀次　うるさい。そんなことはどうでもいゝ。（本を讀みつゞける。）あゝ何で今の世の人達は領地だの、石高だのとあんなことに興味を持つてゐるのだらう。わしは關白などいふものを何でいたゞいたのだらう。わしは一人でぢつと考へてゐたい。わしが歩まねばならぬ世界と、父上の世界とはあまりかけへだてゝゐるやうだ。わしはわしがもとめてゐるものが何であるかはわからぬが、たゞわしはいつも何か知らに追つかけられてゐるやうだ。わしは間違つてこんな豪奢な館の中に生みつけられたのではないか知ら。わしはもつと靜かな山寺の中にでも生まれて來たかつた。

秀俊登場。ひどく病後らしい衰勞が見える。神經質なところが目立つて見える。

秀俊　兄さん。相かはらずいつも本ばかり讀んでおいでゞすな。

秀次　おう、秀俊か？　よくまあ名護屋の御陣から歸つて來れたなあ。（秀俊の肩に手をかけてぢつと秀俊の衰へた姿を見る。いかにも思ひやりある眼つきで見る。）　病氣だといふことを聽いたので案じてゐた。よう無事で歸つて來れたな。それにしてもやつれたたあ。

秀俊　兄さんこそおやつれになりましたなあ。

秀次　わしがそんなにやつれたかい。

秀俊　えゝ、ずゐぶんおやつれになりましたよ。

秀次　…………（感慨に沈む）

秀俊　兄さん。あなたもあんまり馬鹿正直に人を信じてゐてはなりませぬよ。伯父さまはまた伏見に城をお構へになるさうですね、兄さんはこのほどから大變なお骨折りでその石をお集めになつてゐるといふ噂を聽きましたが、兄さんはあんまりおめでたいですなあ。

秀次　何でおめでたい。

秀俊　兄さんは伏見へ城をお構へになる伯父さまの眞意を御考へになつたことはないと見えますね。その城こそ聚樂においでの兄さんを抑へるためではありませんか。

秀次　そんな馬鹿なことが。

秀俊　馬鹿なことでせうか。あなたはやがて御自分の頭の上へ落ちて來る石を自分で高いところへ運んでをられるのだ。どうです兄さん、もういゝ加減に伯父さま信仰をおやめになつては。たいてい分にして腹をお決めなすつてはいかがです。

秀次　何でお前は久し振りでわしに逢ふたばかりだのにそんなことをいふのだ？

秀俊　いかに兄さんが馬鹿正直な人間であつても、もう兄さんの心の奥には、わたしが語らないでもちやんとわたしと同じ考へが動いてゐる筈です。

秀次　わしの心を掻きみださないやうにしてくれ。わしは……

秀俊　まあお聴きなさい。わたしがまうすことは實はあなた御自身の心が語つてゐることなんです。兄さん、あなたが伯父さまから關白をゆづられたのは鶴松が死んだからでしたね。ところが伯父さまにはまた偶然にも拾といふ子が生れましたよ。朝鮮の戰さにしても今が一番危險な時期でせう。日本開闢以來の大賭博をも打ち捨てゝ伯父さまは大阪へ歸つておいでになりました。たゞ拾一人を抱きかゝへて見たいためにですよ。それほどの子煩惱な伯父さまの心になつて見れば、兄上を養子になすつたことを後悔してをられることはいふまでもありません。

秀次　太閤の心を疑つてはいけない。

秀俊　疑つてはいけません。兄さんは理性の上からは太閤を信じて行かうといふのでせう。しかし兄さんのお心の奥の奥の聲をよく聽いてごらんなさい。なんであなたは伊達政宗だの、福島だの、細川だのをちよいちよいお近づけになるのです。兄さん、あなたのお心はちやんと準備しなければならぬものを知つてゐるのでせう……（近づいて行つて、ちつと兄の眼を見つめる。）

秀次　飛んでもないことだ。わしがこんなことを……わしは太閤を信じてゐる。よしんばそのやうなことになつても父上を怨まうとは思はぬ。わしは自分の力に比べてはあまりにたくさんな幸福や名譽をあたへられて來た。

秀俊　だつてこれは當然過ぎるほど當然なことぢやありませんか。あなたは彼の人のたゞ一人の後繼者と定められたのですから、彼の人の持つてゐるすべてのものはあなたのものなんです。そして一度あなたのものとして定められた名

譽と幸福は永久にあなたのものでなくてはならないのです。しかし幸福や名譽は波の上の小舟のやうなものでいつでもしつかりした碇を卸して置かないと流れてしまひます。あなたは碇を卸して置く必要がある。あなたはあなたの力を準備して御自分の幸福と名譽とを保護する必要がある。

秀文　ではお前はわしに無理にも力を準備して立てといふのかい。

秀俊　無論のことです。

秀文　父上に對してか。

秀俊　いふまでもありません。

秀文　恐ろしいことだ。二度とそんなことを話してくれるな。わしは、秀俊、お前の美しい心を信じてゐる。お前がそのやうな恐ろしいことをわしの前で平氣でいふやうになつたのは今の時代といふものゝ惡い感化なのだ。黑い雲が空にあれば地も草も人間の心までが曇つて來る。今は日本中の人の心が曇つてゐるのだ。人はたゞ人を疑ふことのみを知つてゐる。わしたちの世界からは人を信ずるといふ心が失はれてしまつた。權謀術數によつて人を陷れること、力によつて人を脅かすこと、人を殺すこと、それが當然のことだと考へられてゐる。わたしたちの心はこのやうな空氣の中で育てられて來たのだ。窒息しさうな空氣ではないか。秀俊わたしたちの立つてゐる場所から少しかけはなれて今の世の中を靜かに觀る必要はないか。わしは幸か不幸か今の世の中にゐながら、淺くはあるが學問を愛することを教へられた。わしは皆んなと一緒になつて平氣で人を殺すことは出來ない。今の世の中ではかの利休だけが修羅の巷にあつても靜かに考へることをしてゐることができたやうに思ふ。わしはあの男をうらやましいと思つた。

秀俊　だつてあの男は力を持たなかつたから、あんなみじめな死方をしなければならなかつたぢやありませんか。兄さんもつと強くおなりなさい。今の世では人を殺さなければ自分が殺されるのです。人を殺すなんて一度やつて見れば何でもないことですよ。本來人間といふものは對手さへ見れば叩きつぶすか、嚙み殺すために生きてゐるやうなものですからね。それにわたしたちの血統の中には多分にその血が流れてゐるんですからね。祖父さんが十一の時、家來の槍持を切り殺して、首と兩腕を槍の先に突き刺して大威張で歸つて來なすつたといふ話を知つておいでゞせう。

秀次　それだ。わしもそれを恐れるのだ。わしはまだ自分の手で人一人切つたこともないが、あの話を思ひ出してはぞつとすることがある。眼をつむつてゐると見たこともないその槍持が血みどろになつて來てわしに、首を切つてごらんなさい、腕を落してごらんなさいといふのだ。その時は恐ろしいと思つてゐるが、どうかしてその槍持の幽靈が眼に映つて來ない時は物足りなく思ふこともある。

秀俊　そこです。一度その幽靈がいふまゝに一歩踏み込んでやつてごらんなさい。

秀次　わたしはそれを恐れてゐるのだ。

秀俊　わたしだつて最初はやつぱりさうでした。臆病でした。ところが、伯父さまがあの大佛殿の大石を三井寺から曳かれた時でした。宰領してゐた蒲生氏鄕が石の直ぐ傍に立つてゐた一人の若い色の白い男を伐り倒したのを見ました。その若い男一人が曳き綱から手をはなしてゐたとかいふのです。その時はあまり恐ろしかつたので、またその若い男が氣の毒でなりませんでしたので、顏を掩ふてしまひましたが、日が經つにつれて、切られた若い男が可哀さうであつたことは忘れてしまつて、いつとはなしに拔き打ちにした氏鄕の手の中のあまりに見事なのが心にくゝなりました。切り殺された人間は、その刹那だけはつと驚くばかりです。後は何も知らぬ。石や塊と同然です。だから可哀さうでも

何でもないのです。可哀さうだと思ふのは生きてゐる人たちの想像だけなんです。その時その眞つ白な大石に若者の血がぱつと花を散らしたやうにかゝりました。わたしはその時の血の痕を見たいと思つてそれから半年も經つてから方廣寺の庭へこつそり行つて見たことがありました。あの大佛殿の隅の石なんですから直ぐわかりました。血は無論洗ひ落してありましたが、どうかすると雨が降りさうな日など黑い斑紋が浮き出すといふことでした。現にそれを見たものがあるといふのですが、わたしはまだ一度も見ませんでした。

秀次　もうそんな話は止しにしてくれ。わしはそんな話を聽くのはいやだ。（本を讀む）

秀俊　兄さんは本ばかり讀んで法師だの、連歌師だのそんなものばかり相手にしてゐるから氣が弱くなるのです。近いうちに朝鮮から一萬人の耳と鼻を切り殺いだ奴を鹽漬にして送つて來る筈です。どうですそしたら一緒に見物にゆきませんか。

秀次　まだお前はそこにゐてそんなことを言つてゐるのか。どこかへ行つてくれ。

秀俊　せつかく名護屋の陣から歸つて來たばかりで訪ねて來ると、兄さんにまでそんな愛想づかしを聽かなければなりませんかなあ。わたしがもし兄さんの地位にゐたらどんなことでもして見せるになあ。飽くことを知らぬ貪欲な自分の心を滿足させたいために、或ひは自分の倉に黄金を積んで置きたいばつかりに戰をして、あれほどたくさんな人間を切り殺した人たちが、今では急に茶を飲んだり、禪をやつたりして聖人顏を裝つてゐる。兄さん、もしわたしがあなただつたら太閤はじめ世間の大名たちの鼻をあかしてやるんだがなあ。孕み子も裂いて見よう……

秀次　秀俊ッ！

秀俊　人間を木につるして置いて撃ち殺してもやらう。

秀次　秀俊つていへば！

秀俊　腕を切り……足を切り……胴を切り……

秀次　早くあつちへ行つてくれ。

秀俊　かへりますよ。兄さん、そんな亂暴なことをなさることはできないにしても、もすこし强くなつてください。御自分の立ち場を奪はれるやうなことがあつてはいけませんよ。わたしは兄さんのためにたゞそれだけを案じてゐるのです。ちやもうかへります。

秀次　これから何處へ行くのだ。

秀俊　久し振りで歸つて來たのですから、また例のあの女に逢つて來たいと思ふのです。

秀次　利休の娘か？

秀俊　さうです。

秀次　あきらめたがいゝだらう。

秀俊　男がいつたん思ひ込んだ女です。命にかけても奪つて見せます。わたしは兄さんとはちがひますからはゝはゝは……

秀俊上手より退場。下手より木村常陸介ちつとながめてゐる。

秀次　（ふたゝび本を取り上げて讀まうとする。）わしはなぜ父上が名護屋から大阪へお歸りの時お出迎へもしなかつたのか……今、弟が、秀俊の言葉は兄さんの心の聲だといつた。わしは自分を僞つてゐるのであらうか。貫實、拾が生まれた通知を受けとるや否や、朝鮮の軍事を投げ

來てゝ太閤が拾の顔を見に大阪までお歸りになるといふことを聽いた時は、わしはうれしいとは思はなかつた。暗い影が心にさして來た。………（部屋の中を歩き窓越しに空を見る。星がまたゝいてゐる。）

恐ろしい誘惑だ。あの人たちの道とわしの歩かねばならぬ道はまるでちがつてゐる。わしはよろこんで關白を拾にゆづつてやることもできる。わしは芥のやうに聚樂を捨てることもできる。わしはそのやうなものに何の興味も執着も感じない。わしは人生そのものに疲れてゐる。

小田原の陣の時であつた。山中城の攻撃に一柳直末が鐵砲にあたつて死んだのをおきゝなされて、ちやうど晝餉を召しあがつてをられた父上はぼろ〱と落淚なされた。わしは先陣の一氏の陣へ馬を駈けつけてゐたがはげしい彈丸が落ちて來て左の腕を傷つけた。父上はその時、雨のやうな彈丸の中を横に馬を飛ばしてわしの腕をかゝへて傷口を舐めて下さつたことがあつた。昔から父上はやさしい方であつた。拾を眼の中にも入れたいほど可愛がられるに何の不思議があらう。

常陸介（登場）　近日殿下へ御對面なさるさうでございますが。

秀次　父上にも久々でお目にかゝりたいと思ふので。

常陸介　ほんの噂には過ぎますまいがこのごろ世間ではいろいろのことをまうしてをります。近日御越しのことは一先づお取り止めになされましてはいかがでございませう。

秀次　わしは父上のお心を信じてゐる。それに何故やら今朝ほどから急に父上に逢ひたくなつた。三四日うちにぜひお目にかゝりにゆく。

常陸介　では道中の警護の者を殖やしませう。それに小荷駄を作りまして具足一と通りは中に隱してなりとお持た

なさる方が宜しいかと存じます。

秀次　常陸介、お前はまだそんなことを考へる齢でもないに。子が父の家を訪ねるのに何の具足などの仕度がいらうはゝはゝは……

常陸介　太閤は御存じないことですが、石田、増田などの小人輩がどのやうな策を弄せぬものともかぎりませぬので。

秀次　恐らくあちらでも今ごろは父上の周圍のものどもがお前と同じやうな心配をして寄り〳〵いろんなことを考へてゐることであらう。父上とわしの心とは百年經つても變らぬ筈だ。何も心配しないでおいてくれ。

常陸介　はい……

秀次　（空を見ながら。）明日もお天氣らしい。天の川の鵲があのやうに美しう飛んでゐる。

常陸介　（ちつと空を眺める。）

同　第二場　淀の城の一室

前の場面より數日の後

人物　豐臣秀吉
羽柴秀俊
淀君
拾（後に秀頼）

侍女等

うしろに淀の川瀬が見える。

秀吉と秀俊が向ひ合つて坐つてゐる。どちらも激してゐる。

秀俊　あなたは尙少し兄のことを思つてやつてください。あなたは亡くなられた姉さんのことをお考へになりませぬか。あなたはわれ〳〵一家の者のことを思つてくださらぬのですか。ゆかりもないものばかり大切になすつて……

秀吉　馬鹿なことをいふな。わしが何時秀次やお前をないがしろにした。

秀俊　それはあなたの良心にお聽きになつたらわかりませう。

秀吉　何だと！

秀俊　ともかくこの御殿の美しさだけでもよくごらんなさい。これはあの女のための御殿でせう。北政所の御殿とくらべてごらんなさい。何といふ贅澤な豪奢な生活です。

秀吉　なまいきなことをいふな。わしはわしの力でやつてゐるのだ。埒もない女をあさることのみを武士の心懸のやうに考へてゐる。きさまのやうな男は豐臣家一門の恥辱だ。

秀俊　そのお手本は伯父さまが見せてくだすつたのでせう。あんな女にたぶらかされて。

秀吉　もう、きさまは二度とわしの前に立つな。

秀俊　わたしのいふことが一々お胸を刺すのでございませう。

秀吉　もう一言いつて見ろ。(刀を握つて立ち上る。)

秀俊　わたしをお切りになるんですか。よし、それなら。(刀を掴む)

淀君奥より走り出て秀吉の手にすがる。

淀君　何をなさるのです。大人氣もない。(秀俊に向つて。)あなたもお止しなさい。わたしがこれくらゐの生活をしてゐますのがあなた方には贅澤だとか豪奢だとかに見えるのでせう。やはり失禮ですが御先祖から代々田舍でお育ちのお方の眼にはねえほゝほゝほゝ……

秀吉　ともかくきさまのやうな人間は二度と顔を見せるな。

秀俊　見せてくれと仰つしやつても二度と來ませぬよ。

淀君　お二人ともまるで野武士のやうに勇敢でおいでになりますねほゝほゝほゝ……今日はあなたもおかへりなすつてまた伯父さまの御機嫌のいゝ時おいでになつたがいゝでせう。

秀俊下手へ退場。秀吉なほ憤り秀俊を見送る。

淀君　あの方はこのごろ一層變ですね。あの方一人のお考であんなことをわざと大きな聲でこゝに來て仰つしやるのではありますまい。

秀吉　……………(不愉快な顔をする。)

淀君　わたくしはこのごろ人を疑ふことを知るやうになりました。若い人の美しい眼にも年一年と曇りがかゝつてまいります。わたくしはあなたにかうやつていたゞくのをたいした出世とは思ひませぬ。秀俊さまや北政所さまの眼から御覧になつたら出世したとも、贅澤とも思はれるかも知れませぬが、信長の姪が人の妾風情に落ちてゐるとさげすむ人もありませう。あなたの御情に惹かされてかうやつてはゐますものゝわたしは………(くやしさうに涙を拭く)

秀吉　まあ、そんなことはどうでもいゝわ。あれはあの馬鹿奴がいふことだ。氣にかけてくれるな。

淀君　あなたはいつたいあまり身びいき過ぎます。お身内のかたには寛大過ぎるのです。

秀吉　さうかも知れぬが、またさうでないところもあるよ。まあさつきのあの馬鹿奴のことは考へずと放つといてくれ。

淀吉　大政所さまがお亡くなり遊ばした時もあなたは名護屋の御陣からあたふたとおかへりなさいました。しかしお氣の毒なことにあなたはお母さまの御臨終の間にお會ひなさいませんでした。あなたはあの時もまた悲しみのあまり氣絶なさいましたね。

秀吉　もうあの時のことならくりかへしてくれるな。わしはなぜ名護屋へ出かけて行つたらう。鶴松が死ぬ、わしは淸水にも行き、東福寺にもはいつて見た。しかし鶴松の俤が目について仕方がなかつた。わしは戰場にさへゐればあの悲しみも忘れることができると思つたので名護屋までも出かけて行つた。しかし鶴松の俤はどこまでもこびりついてゐた。わしは鶴松が眠つてゐる京の山を見ることができないのを寂しいと思つた。そこへ母上の病氣のことが秀次から知らせて來た。わしは飛んでかへつて來た。それだのにたうとうお目にもかゝれなかつた……太閤は朝鮮へわたつて行つたにちがひない……母上はさう言ひながらお亡くなりなすつたといふではないか。わしは取りかへしのつかぬことをした。何で母上を置いてわしが朝鮮へ渡らう。

淀君　あなたはそれほどの親思ひでいらつしやるのです。ですがついぞ一度だつてわたくしの不幸な母についてお話なすつたことがございましたか。結局人間はつながる血でなくつては情愛といふのも嘘でございます。お亡くなり遊ばした大政所さまやあなたが秀次をいとしいと思ひなさいますのは無理もありません。わたくしはそんなことを何とも思つてはゐませぬ。たゞわたくしはそこいらに嫉妬なんか知らぬといふやうな貞女顔をしてゐる人を憎いと思ひます。北

政所さまはお賢い、お氣の毒だといはせては加藤だの、福島だの誰れ彼れといつの間にかお味方をお作りなさいます。御卑怯ぢやありませんか。鶴松が死んだのも誰かの呪ひぢやとさへまうすものもございます。

太閤　それは飛んでもないひがごとだ。

淀　いゝえ、さうはいはせませぬ。鶴松は大政所さまにも北政所さまにも心からやさしいお聲一つかけられないで亡くなつたのでした。名護屋からの今度のお歸りにだつて秀次が大阪へ御出迎へしなかつたのも北政所さまのお指圖だとまうすものもございます。みんながあなたを袖にしてゐるのではございませんか。

太閤　いや、そんなことはない。わしは秀次がそんな男だとは信ぜぬ。あれはまつたく來れない事情があつたのだ。

淀君　あなたはお身内の方のことだとみんなそんな風にいゝ方にばかりおとりなさるのです。あなたのお留守中に、わたくしが大阪へかへりましても、北政所さまの思はくを憚つてか、誰れ一人心からわたくしをいたはつてくれるものもありませんでした。治部だけが何かと相談相手になつてくれました。すると直ぐわたくしと治部がどうだのといふやうなはしたないことをまうします。醜い女ならともかく、自分の美しさを信じてゐる女は男を弄びものにこそすれ、自分のほこりを男に踏みにじられるやうな愚なことはいたしませぬ。あなたは拾を可哀さうだとはお考へになりませぬか。

太閤　今になつて、秀次を說いて秀頼に關白をゆづらせるわけにも行かぬではないか。

淀君　わたくしはそんなことをまうしてゐるのではありません。わたくしが三十になり、四十になり、わたくしの心がますます疑ひふかくなり、わたくしの魂が萎つたらそのやうなあさましい男のやうな野心を抱くことがあるかも知れませぬ。わたくしはまだ若いのでございます。わたくしは日本國中の物ともかへがたいほこりを持つてゐます。わたくしは天下を失ふことよりもわたくしのこの若い美しいほこりを失ひたくないのでございます。

秀吉　いかにもお前は美しい。その美しさがわしのすべてを奪つたのだはゝはゝは……。今思ひ出したが、お前はこのほどお前の腕の肉を殺いで修驗者に持たせ武州の高雄山へつかはしたといふことではないか。大蛇にその肉を喰はせるのだとかいふ噂を聽いたがはゝはゝは……。

淀君　世の中の噂といふものはたいていそんなものです。わたしの腕の肉が切りとられてあるか、切りとられてゐないかはあなたお一人がよく御存じの筈です。

太閤　いかにもはゝはゝは……

淀君　わたくしのこの黒い美しい髮を切つて持たせてやりました。拾の蟲氣を封じていたゞきたいからでございます。

太閤　同時にいつまでもお前自身が若く美しくあるためにだらうはゝはゝは……

淀君　若く美しいといふことはわたくしにとつては一番大事な武器ですから。

太閤　どうぞそれはわしに對してだけの武器にしてくれよはゝはゝは……

淀君　あなたはいつもおとぼけなさいますね。わたくしは眞劍なんでございます。わたくしはいつまでも拾と二人で安穏に生きてゆくことさへ保證されますれば、もうわたくしはたゞ愚かな母になつてしまひます。世間ではわたくしのことを氣位が高いだの、氣が強いだのとまうします。それはわたくしが母になつたからでございます。弱い蟲でも子を育てるためには強くなります。命をかけてゆきます。わたくしは弱くては拾を守り育てゝゆくことはできませぬ。わたくしの強い心も、たかぶつた心も一人の拾を育てゝゆくための母の情だとおもへば神佛もおゆるし下さるでせう。子を育つる蝮は人を嚙みます。蝮をすら神佛の慈悲は放し飼ひになされます

太閤　いかにも……

淀君　まして天下の一人子を育て上げまする母の情愛のためには、たとへ十人や二十人の人の命を犧牲にしましたところで、何で神佛のとがめがありませう。

太閤　わしは何だかお前の言葉が恐ろしい。

淀君　あなたは拾をわたしが思つてゐるほど深く思つておいでにならないのです。

太閤　わしは朝鮮の戰を捨てゝ拾を抱きに歸つて來たではないか。

淀君　母が一人の子を思ふ心がそれくらゐのものだと思つておいでになるのですか。

太閤　しかしありやうはお前の言葉を聽いてゐると何だか恐ろしい結果が生まれて來さうな氣がする。

淀君　いゝえ、わたくしはたゞ拾一人を安全に守り育てゝゆく道さへつきますればいゝのでございます。誰れにも彼れにも眼のかたきにされてゐるわたくし母子をあなたは何とも思つてはいらつしやらぬのでございますか。

秀吉　だからわしは秀次の娘蘭と拾を許婚にして置くつもりだ。

淀君　お蘭坊と拾とを……（急に小娘のやうになつて。）［お蘭坊は可愛い子でございます。

秀吉　蘭と一緒にしてやればいまに可愛いゝ夫婦が出來るであらう。そして秀次を二人の後見にして置けば豐臣の家は萬代不易だ。

淀君　それでしたら拾の安全も保證されるでせうか？

秀吉　これより確かな保證はあるまい。

淀君　たしかにさうでございませうか。

秀吉　たしかに。

淀君　もしさうでしたらわたくしはどんなにうれしいか知れません。早くさうお決めなすつてください。大丈夫でございませうね。（よろこぶ）

秀吉　大丈夫とも。聚樂へ行つて直ぐに披露の宴を開くことにしやう。豐臣の家は萬々歳だ。

淀君　その御披露の宴ではあなたと秀次さまと御一緒に久々でお舞ひになつてはいかがです。

秀吉　さうだ。それはよい思ひつきだ。秀次もわしの留守中に大部謡ひの方も上手になりをつたであらう。ぜひ一緒に舞はうよ。拾はまだ眠つてゐるかのう。

淀君　もうお眠さめでございませう。（女を呼ぶ。）

秀吉　早う抱かしてくれ。

淀君　すぐにつれてまいります。

侍女、拾を抱いて來る。

秀吉　飛びつくやうに立ち上つて拾をうけとり抱く。頰擦りをしてよろこぶ。

うむ、父がわかるか。腕白さうな顔をしてゐるわい。おう笑ふてゐる。お前はよう生まれて來ておくれだつたのう はゝはゝは。おう笑へ、笑へ。腕白な奴ぢや。お父さんはなお前の兄さんと一緒に聚樂へ行つて舞ふのぢや、お前が生まれたお祝ひに。早うお前さんも大きくなつて兄さんと舞へ。ほらとんとんとんと床を踏んで………

拾を抱きつゝ足拍子をとりて可笑しく舞ふ。

淀君手を打ちて笑ひこける。

同　じくかへし　聚樂第の一室

時　前の場面より數日後の午後夜に入る

人物　秀吉
　　　秀次
　　　秀俊
　　　狂へる女
　　　木村常陸介
　　　小姓武士甲乙丙丁等

秀次櫻川の能衣裳のまゝ、ひどく疲れたる體にて上手より出て來る。つゞいて秀俊。
奥から時々能の囃の音が聞える。

秀次　どうかしばらく靜かにさしといてくれ。わしはひどく疲れたから。

秀俊　でも、兄さん、あなたは伯父さまとあの女にすつかりごまかされてゐるんですね。拾とお蘭を一緒にする。今日はこの芽出度い披露か……はゝはゝは……うまくたくらんだなあはゝはゝはゝは……

秀次　もうそんな話はよしてくれ。わしは疲れてゐるから。今に雨でも降つて來るのぢやないかなあ。

秀俊　疲れてゐると仰つしやるが、兄さんは、あなたの魂が疲れてしまつてるのぢやありませんか。

秀次　さうだ、わしはこのころ魂まで疲れてしまつた。あゝ頭がばかに痛む。

秀俊　さうでせう。でなくつちや、伯父さまの恐ろしいたくらみがおわかりにならぬ筈はないでせう。伯父さまはあの女にたぶらかされて、われ〳〵一族の者を根絶やしにしようといふのですよ。頼朝の故智を倣はうといふのですよ。伯父さまには美しい政子が附いてゐるんですからなあ。

秀次疲れてぢつと顔を伏せてしまふ。奥の鼓の音が聞えて來る。

兄さん、もう大抵分に腹を決めてかゝられてはどうです。

秀次　お前は今日殿下にお目にかゝつたのか。まだお祝ひの御挨拶はまうしてゐないのだらう。

秀俊　そんな形式的なことはしなくつたつていゝでせう。今日の披露の宴そのものがたゞ政策のためなんですから。お蘭と拾を一緒にするといへば體裁がいゝが、實はあなたの物をすべて拾にゆづらせやうといふことになるのです。

秀次　もし、さうならそれでいゝではないか。

秀俊　わたしは兄さんのやうにそんなに思ひ切りよくあきらめはしませぬ。わたしはわれのものはどこまでもわれのものとして主張します。われ〳〵は血縁の伯父甥の間だ。よしんばわれらに何の戰功もないにしても伯父のものはわれらのものだ。伯父の天下はわれらの天下だ。それだのにいつもあの女にたぶらかされてわれらを疎んじられる。わたしはもし太閤へ弓を引くものがあつたら、眞つ先にその仲間へはいつて伯父の胸に刃を擬して見せる。あの女奴は何とかいへば直に信長の姪をかつぎ出してたかぶつた口を利く。今は太閤の天下だ。太閤の手にあればこそあんな贅澤なことができるのだ。勝手なことがいへるのだ。他人に疎じられるのはさまで腹も立たぬが、伯父甥の間でこのやうに冷淡にされると十倍も百倍も腹が立つ。

小姓（登場）たゞ今、殿下がお見えになります。

秀次　父上が？さうか……

秀俊　わたしは彼の人の顏を見るのもいやだ。（下手へ退場。）

　秀吉、能衣裳をつけたまゝ登場。

秀吉　お疲れであつたらう。わしはまたあれから勘右衞門を對手に芽出度く一番舞ふた。お前は疲れたやうだなあ。

秀次　たいして疲れもいたしませんでしたが、しばらく休息いたしてをりました。お父さまはお丈夫でいらつしゃいますな。

秀吉　あゝ若い人たちに比ぶれば丈夫だなあはゝは……わしも名護屋の陣中でつれづれのまゝに五十番上げたが、わしのは亂暴な稽古ぢやから。わしと一緒に舞つてもらつては氣の毒ぢや。お前は實にうまく舞ふやうになつたな、つくづく感心した。

　さつきお前がひとりで櫻川を舞つてゐた時だ、わしは見物をしてゐて思はず泣かされてしまうた。とにかくこのごろは愚にかへつたか涙もろくなつていけない。さつきもお前と舞台に立つてゐると、お前の聲なり、後姿なりがいかにも亡くなられた姉さんにそつくりだ。五十年も昔にかへつて故郷の山でも歩いてゐるやうな氣がした。

秀次　父上は、よく母と鮒釣りにお出かけなされたさうでございますね。

秀吉　さうだ。お前のおつ母さんもお轉馬だつたからなあはゝは……。ところが祖母さまと來たらあの通りの念佛狂人だらう。お前のおつ母さんとわしがせつかく釣つて來た鮒をいつの間にか魚籠ごと川へ持つて行かれて、魚を一疋つまんでは南無阿彌陀佛、一疋つまんでは南無阿彌陀佛といつて川へ逃がしてをられるのだはゝはゝは……

秀次　父上は魚を釣ることはそんなにお好きでしたか。

秀吉　好きであつたよ。今でも好きだが、どうも暇がないのでのうはゝはゝは……いまに天下の政事も何も彼もお前にやつてもらふやうになつたら、わしも昔の腕白時代にかへつて魚でも釣りに出かけようよ。早くそんな日が來るやうにしたいものだ。

秀次　でも、わたくしには父上のお仕事を受けついでゆく力はないやうに思はれますが。

秀吉　馬鹿なことを。お前でなくて誰がわしの後を繼いでくれる者があらう。わしがどれほどお前を愛してゐるかといふことはお前にもわかつてゐる筈だ。正直なわたしの心を打ち明けて見ると拾(ひろひ)だけはゆるしてくれ。わしは拾(ひろひ)を除いて、お前ほどいとしいと思つてゐるものはない。拾(ひろひ)が生まれたのでいろ〳〵な世間の噂もあるやうぢや。しかしお前はわしを信じてくれ。

秀次　もつたいなく思ひます。

秀吉　來年の春はぜひ吉野の花を觀に行かうと思ふが、お前も一緒に行つてくれることになつてゐたな。

秀次　ぜひお伴さしていたゞきます。

秀吉　お前は北政所に吉野行きの火打袋をねだつたさうぢやないか。

秀次　はい、この前お目にかゝりました時おねだりいたしました。

秀吉　お前はうまいことをした。あの火打袋はわしもかね〳〵欲しいと思つてゐたのぢやはゝはゝ……。

秀次　はゝはゝ……。

秀吉　ではまた近いうちに一度ゆつくり話すとしよう。(立ち上る。)

秀次　わたくしの方からおたづねいたします。

秀吉　それでもいゝ。ではなるたけ早く逢ふことにしよう。關も連れて來てくれ。今日からはもう關奴もわしの可愛い嫁ぢやてのうはゝはゝ……（秀次の肩に兩手を置きてしみじみと）いゝかわしはお前を一番いとしいと思ふてゐるからのう。

秀次　はい。（俯向いてそつと眼を拭ふ。）

秀吉退場。秀次じつと見送つてゐる。秀俊下手より登場。何となく落ちつかないで、あたりをきよろきよろながめてゐる。

秀俊　兄さん、やつぱりあなたは太閤にうまうまとごまかされてしまひましたね。彼の人はあの手で英雄でも美人でもほろりとさせるのだから。まつたく不思議な魔法使ひだ。魔法の網にかゝつた兄さんにはもう何をまうし上げても駄目だ。ばかばかしいことだ。（何か決心したらしく部屋を出ようとする。）

秀次　どこへ行く。

秀俊　いやどこへも行きませんな。わたしも、しばらく病氣保養かたがた吉野へ行つて見ようと思ふのです。

秀次　吉野へなら、秋になつたらわしらも行くから一緒に行つた方がいゝだらう。

秀俊　太閤と一緒にですか。またあの高慢な女奴にあてられますからねえ。わたしは少し氣ざますからお暇いたします。（なほ落ちつきなく廊下や、庭の方を見る。遠雷の音。）

秀次　お前はどうかしてゐるね。何をそんなにきよろきよろしてゐるのだ。誰かをさがしてゐるのか？

秀俊　えゝ探してゐますよ。家康を探してゐますよ。あの男も今日こゝで會つた筈ですね。

秀次　あの男を探してどうするのだ。

秀俊　あの男がゐれば、きつとその山名とかいふ男が隨いて來てゐる筈です。

秀次　お前はまだあの女に未練を持つてゐるのか。
秀俊　太閤が手に入れえなかつた利休の娘をわしの手に入れて見せますよ。太閤の鼻をあかしてやります。
秀次　だつてあの女にはその男がちやんと附いてゐるといふではないか。
秀俊　男が附いてゐようとゐまいと、わたしの刃にかけても奪つて見せます。
秀次　馬鹿なことをいふものではない。お前はわたしのたゞ一人の弟ではないか。わしはたゞお前一人を頼つてゐるのではないか。父も持たず、母も持たぬたゞ二人きりの兄と弟ではないか。お前にもしものことがあつたらわしは氣が狂ひさうだ。もしお前がそんなことをしてくれたら、わしが今日までぢつと抑へてゐるわしの胸の中の炎が眞つ赤に燃え出してしまひさうだ。どうぞわしのために忍んでくれ。
近習　（登場）殿下のお立ちでございます。
秀俊　太閤はお立ちか。お客さまたちは？
近習　お客さま方もたいてい御一緒でございます。
秀次　ではわしもお見送りをしよう。（立ち上らうとするが眼がくらみ倒れかゝる。）わしは頭が重くてならぬ常陸介にお見送りいたすやうにいつてくれ。まことに失禮でございますがおゆるし下さいと申しあげてくれ。
秀俊　では、兄さん失禮いたします。急ぎますから。
秀次　もうすこしゆつくり遊んでからかへつたらどうだ。
秀俊　兄さんそんなにお加減がおわるいのですか。
秀次　いやわしのことは案じないでもいゝ。たゞほんの眼まひだから。

秀俊　ではちよつと行つてまいります。また直ぐに歸つてまいりますから。

秀次　何だかお前は今日はそは〳〵してゐて變だ。わしは心配でならぬ。

秀俊　直ぐかへつて來ます。

秀次　ほんたうに氣をつけてくれ。

秀俊刀を掴みあわてゝ、廊下に出る。

秀次侍女を呼んで能の衣裳を脱がせる。侍女等能衣裳を抱へ退場。

舞臺やゝ暗くなる。遠寺の音。

秀次　あゝ、何だかすつかり疲れてしまつた。今日父上と久し振りで一緒に舞ふたが、今日ほど父上を懷かしいと思ふと同時に、何とも知れぬ暗い洞の中へでも引き込まれてゆくやうな寂しさを感じたことはなかつた。父上のうたふてをられる聲がわしから離れて遠くへ遠くへと流れてゆく。またわしのうたふ聲が父上の聲とは反對の方へ遠くへ遠くへと離れてゆく。父上は東の空を向いてうたはれる、わしは西の空を向いてうたふ。歌が遠ざかる。父上とわしは歩、一歩うたひながら遠ざかつてゆく。しまひには父上のお聲ばかりが聞えてお姿は見えぬ。わしはこれではならぬと思つてうたひながら父上を追ふてゆくと、二人の間はさらに遠ざかつてゆく。ぐら〳〵として眞つ暗になつてしまつた。氣を取り直して、つと眼を開くと、そこに父上が立つてわしを見てをられる。あゝうれしいと思つて一つ強く足拍子を踏むその刹那に父上は東へ、わしは西へ遠ざかつてゆく。父上はわしの名を呼んでをられる。わしは父上を呼んでゐる。そのまゝたゞ二人は遠ざかつて行くばかりであつた。わしは今日ほど寂しい氣分で舞ふたことはなかつた。大分空も曇つて來たやうだ。いつもの憂欝な病氣がわしの魂を喰ひはじめたやうだ。わしには世の中のことが何も彼もつまらなくなつた。わしは父上のやうに人おどしの兜を冠つて眞面目くさつた顔をして京の町を乘りまはすやうな氣にはどうしてもな

れぬ。わしにはやはり山寺にでもはいつてひとり靜かに考へて生きて行くのがふさはしいことかも知れぬ。

間。舞臺ますく暗くなる。稻妻の光り。
狂女の歌の聲が聞えて來る。

唄

山こえて雨がふる
山こえて日がくるゝ
わしのなみだに日がくるゝ
暮れた山路をたれがゆく

雨が降りはじめる。侍女燭を持つて來る。

秀次　あの歌はたれがうたつてゐるのだ。

侍女　もと淀の近くにゐたさうでございますが、このごろよく大佛殿のほとりを歩いてゐる狂女だといふことでございます。

秀次　狂女か？狂女がこの聚樂第にまぎれこんで來るとは面白いなあ。京中を步いたところでこの雨が降るのに泊めてくれる場所もあるまい。勝手にそこいらにやすませて雨が止むまで自由に歌をうたはせて置いたがいゝ。何か喰べさしてやれ。それから雨に濡れては寒いであらう。何か着せてやれ。そこいらにさつき脫ぎ捨てたものがあらう着せてやれ。

侍女　かしこまりました。どんなによろこびますことか知れませぬ。（退場。）

秀次　悲しいことのために氣が狂れて歌をうたふのが仕合せか。悲しいことに氣も狂はずぢつと見つめてゐなければならぬものが不運か。わしは人間の生死について考へる。わしは人間そのものについて何も考へてゐない今の世の人たちが不思議でならぬ。わしは關白などの高い地位に落ちつく前にもつとわし自身について考へねばならぬことがある。わしはあの人たちのやうに何の疑もなく平氣で生きてゐることはできぬ。わしの心はいつも暗い。わしは笑ふことを知らぬ。わしは關白を捨てよう。わしは寺の中へはいつて行かなければならぬ。……秀俊はこの雨の中をどこへ行つたのだらう。

木村常陸介（急いで登場）大變なことになりました。

秀次　大變なこと？

常陸介　御舎弟さまが。

秀次　弟がどうした。

十五六人の男たちが秀俊の屍體を運んで來る。中には腹卷をつけたるものもある。槍を持つたものもある。刀を拔いたまゝのものもある。武士甲乙丙等屍骸の前で無念さうに泣く。

常陸介　何ともお氣の毒に存じます。（俯向いてしまう。）

秀次　弟！……秀俊！何といふ死に方だ！お前はわしを置いて死んだのか！誰が何でお前を？

常陸介　徳川さまのお小姓山名新助らしい男と何か一言二言仰つしやつてゐたさうでございますが、かれは餘程の手きゝと見えまして秀俊さまと二三合打ち合せましたばかりで、さすがの秀俊さまも受け損じて肩先をお切られなされましたさうでございます。

武士甲　大變だと思ひましたのでわたくしどもはおつ取り刀で驅けつけましたが、德川さまのお伴にさへぎられまして、みすく秀俊さまを討たせてしまひました。
秀次　その山名某らしい男はどうした。
武士乙　德川さまのお伴の方々へ交渉いたしましたが、いつの間にか隱しましたものと見えてどうしてもわかりませぬ。そこへちやうど殿下のお行列が見えました。
秀次　父上がお通りがかりになつたのか。父上はどうなされた。
武士丙　殿下は……
秀次　父上はどうなされた？
常陸介　お駕籠の中からぢつと御覽になつておいでになりましたさうでございますが、この人たちに向つて、お前たちは關白の手の者か、それなら早くあの醜い屍骸をどこかへ捨てゝしまへ。と仰せられましたさうでございます。
秀次　父上は、秀俊の屍骸を御覽なされて、あの醜い屍骸を捨てゝしまへと仰つしやつたのか？
武士丁　はいお屍骸を捨てゝしまへと仰つしやいました。
秀次　あの父上がか？・・・・そして秀俊の屍骸であることも御存じだつたのか。
常陸介　無論御承知の上のことでございます。治部、右エ門等がお側にゐました筈でございますが、殿下をおなだめいたすこともしなかつたのでございませう。
秀次　で、父上はそのまゝお歸りになつたのか？
武士乙　殿下はわたくしどもを御覽なさいまして、早く屍骸を捨てゝしまへ。對手が惡いのではない。武士の心懸と

して到らぬところがあるから、人の前でこんなあさましい死様をしなければならぬのだ。と仰つしやいました。

常陸介　對手の男を探す必要はない。恥の上に恥を重ねるなと仰つしやつたさうでございます。

秀次　…………

武士丙　わしの名をはづかしめる馬鹿奴だとも仰つしやいました。

秀次　父上がか？

武士丙　はい。

常陸介　そのまゝお駕籠の簾をさつとお卸しになつておかへりなされたさうでございます。

秀次　秀俊はもうその時は縡切れてゐたのか。

武士丁　まだお苦しさうにお呻きになつてをりました。

秀次　父上は弟には一言もお聲をおかけにならなかつたのか？

武士甲　はい。たゞ馬鹿者と仰つしやつたばかりでございます。

秀次　わしに信ずることができない。わしも父上のやうにそんな強い人間になりたい。平氣で、のたうちまはつて呻いてゐる弟の死を見てゐることのできるやうな強い人間になりたい。（狂女の唄がしづかにふたゝび聞える。）

お前は世界にたゞ一人の弟であつた。わしはお前のたゞ一人の兄であつた。秀俊！何とかたゞ一言いつておくれ。このあさましい死に方は…………お前はほんの今そこに坐つてわしと話してゐた。お前の影はさつきちやうどその壁に映つてゐた。まだあの時のお前の影がその壁に取り殘されてゐるやうな氣がするに、お前はもう冷たくなつて何も言つて

くれぬ。…………おう、このむごたらしい殺し方、お前のこの恐ろしい傷口がわしに何か話しかけてゐる。………さうだ、わしは乾度お前の仇をとりかへしてやる。父上はお前を憎んでをられたのだ。わしのたゞ一人の弟のお前を……。父上はお前が言つたやうにわれ／＼の一族を憎んでをられるのだ。徳川や諸侯の御機嫌を取るためにはお前一人の屍骸を野天に捨てるくらゐのことは平氣でなさるおつもりだ。わしはお前の言葉を疑つてゐたが、お前は正しい言葉を語つてゐたのだ。徳川が何だ。諸侯が何だ。わしは天下を對手にあばれて見せるぞ。父上も諸侯も見てゐるがいゝ。

ふたゝび弟の屍體を見て泣く。雷鳴はげしくなる。

さうだ、父上はやがてわしをも秀俊と同じやうにお捨てなさるであらう。わしの妻子の屍骸をもお捨てなさるであらう。父上には天下が大事なんだから。

弟！わしはお前の言葉を今はじめて思ひつくほどのお目出たい人間であつた。でも秀俊安心しろ、お前の仇はわしがきつと取つて見せる。お前はたつた一人の弟だつたに！お前は死んだ。殺されたのだ！

わしも人を殺して見たい。わしは關白だ。何で天下を恐れる必要があらう。わしもそんな冷靜な心で人を殺して見たい。殺すぞ。殺すぞはゝはゝはゝ誰れも彼れも殺すぞはゝはゝはゝ……（狂人のやうに興奮する。）

廊下にちかく狂女の唄がふたゝびきこえる。

秀次刀を拔き夢遊病者のやうになつて雨の中を出てゆく。人々驚き後をつけてゆく。常陸介一人殘る。間もなく突然狂女の唄の聲が止む。けたゝましい女の叫び聲。ものゝ倒れる音。

關白さまがッ！

大變でございます！

あの狂女を！

秀次血刀をさげて登場。片手には血のついた柳川の能衣裳を掴んでゐる。

雨ひどく降る。風吹く。稲妻の光り。

木村常陸介ぢつと秀次を見てゐる。

同　第三場　比叡山上の或る御堂

時　文祿三年の秋の夜

人物　豐臣秀次

木村常陸介

中村式部少輔

老法師

大木野三郎

侍女武士勢子等數多

十日ころの月が木の間に照つてゐる。具足をつけ鐵砲、槍などを持ち、鹿、兎などの獲物を勢子にかつがせた武士七八名下手より堂の前庭へかゝる

武士甲　いゝ月だなあ。西に京中を一目に見、東に坂本から三井寺、粟津、瀬多と繪のやうな景色だなあ。朝鮮の野陣に苦しんでゐる仲間のことを思ふと勿體ないなあ。

武士乙　だが今夜あたりまたずた〳〵に人を切りさいなむやうな役目が廻つて來ねばいゝがなあ。

武士甲　まつたくだ……おや（奥の方を指さし急ぎ退場。）

平家琵琶の音が奥から聞えて來る。間。

秀次奥より登場。つゞいて中村式部少輔。

秀次　では平家も止めろといふのか。

式部少輔　はい。まことに恐れ入りますが院の御所お崩れなされまして間もございませぬので、世間の憚りもございますれば。

秀次　では平家も止めにしよう。

式部少輔　失禮な言葉をお叱りもなく、ありがたう存じます。（退場。）

秀次　わしも秀俊が殺された夜、誤つてあの氣の毒な狂女を殺してから、今日までもう幾人の人を殺したであらう。あれから約半年のあひだわしはほとんど一日でも人を殺さぬ日はなかつた。わしはもう人を殺すことには倦いた。思ひ出したゞけでもいやだ。

大木野三郎等數名上手より老法師を一人引きつれて來る。

三郎　先刻狩場で悪態をつきました法師でございます。

秀次　あの老法師か。

三郎　はい。

秀次　今後を戒めてゆるしてやれ。

三郎　綱を解きますか。

秀次　解いて逃がしてやれ。

三郎　(綱を解く。)さあ歸れ。これからおとなしくしてをれ。お慈悲だ。

老法師　何だ、人を散々こらしめて置いて罪もないのに、お慈悲だと。誰れのお慈悲だ。

三郎　關白さまのお慈悲ではないか。

老法師　今の世で生殺の權をお持ちの方は太閤の他にあるべき道理がない。それを自分一人で決めこんで豪さうな顏をしてお慈悲だなんてはゝはゝは……

秀次　法師、太閤には生殺の權はあるがわしにはないといふか。

老法師　あたりまへぢやありませんか。

秀次　きさまはわしに助けられたのをありがたいとは思はぬか？

老法師　生殺の權を持たぬ人が、勝手にわしを捕へて苦しめて置いてから、ゆるしてくれたところで何がうれしからう

秀次　きさまはわしに生殺の權がないといふのか。

老法師　あたり前なことではありませぬか。罪もない人を殺す、罪もない野山の禽獸を屠る。無慈悲な殺生をなさる。まことにあなたは殺生關白と誰れも彼れもまうしてゐるがはゝはゝは……

秀次　きさまのやうな老ひぼれまでがわしを馬鹿にするのか。わしは太閤のたゞ一人の後繼者だ。わしは關白だ。關白の權威を知らぬか。三郎、裏の崖の上へ引け。胸も胴もずたずたに切つてわしの權威を見せてやる。さあ引け。

老法師　罪もない叡山の法師一人殺したら、わしの血で叡山を汚したら、お前こそ太閤のお咎をうけなければならぬぞ。わしとお前の生命を取りかへにするのか。面白いぞはゝはゝは……

秀次　二言目には太閤、太閤といふ。

老法師　太閤さまのおかげではないか、かうやつてみなが安穩に生きてゐるのは。それに太閤さまはな、いつも手强い男を對手に戰をなさる。お前さんは女寅だのわしのやうな老人を對手にしか戰はできぬのではないか。それで何の關白ツはゝはゝは……殺生關白がこの老人を殺さうといふのだ。みんな褒めてやつてくれその勇氣をはゝはゝはゝ……

秀次　もう我慢ならぬ。三郎裏の崖へ引け！

三郎　はい。(老法師を引き摺つてゆく。秀次刀を拔きうしろより追つかけてゆく。)

間。

御堂一面に月の光りが射し込んで來る。御堂の暗い奥より若い侍女たちが手をつなぎ輪を描きて廻りつゝうたをうたひつゝ來る。

唄

おつきさまいくつ
十三七つ
七つ屁やら
夜霧やら
背戸の柿の木
千なれ
萬なれ
千萬なれや
お月さまいくつ

幾度も廻りながらうたつてゐる。

裏の木立の中にて人の苦しみ喚く音が聞える。侍女たちあわてふためきて御堂の奥へ逃げゆく。

虫の鳴く音が聞える。

秀次血に染みたる刀を提げ蒼白い顔をして下手より登場。呆然としてゐる。

秀次 （月の光りで刀を見る。） やつぱりあの男を切つたのだ。あゝ何といふ恐ろしいことをしたのであらう。今日こそはどのやうなことがあつても人を切るまいと思つてゐたに。もし人を切るのなら、わしはもつと勇氣を持たなければならぬ。今の世に生きてゆくためには強い心を持たなければならぬ。わしは死んだ弟がうらやましい。わしは今日までわし自身として生きて來たことは一日もなかつた。弟は見事に父上に叛いて生きてゐた。弟は死ぬ日まで弟自身の生活を生きてゐた。かれは勇氣を持つてゐた。この兄はどうだ。わしは一日でも父上から離れて生きてゐたことがあつたか。わしの一擧一動はみな太閤に支配せられてゐた。わしは太閤の日陰を呼吸して生きてゐたのであつた。わしは關白だ。だけど一日でも關白らしい生き方をしたことがあつたか。關白といふ名だけはあるがたゞ一人の弟の仇さへ返すことはゆるされてゐないのではないか。わしは一日でも自分の力で生きてゐたい。一日でも自分が自分の主權者でありたいのだ。わしは人を切つた。人を殺した。わしは人を木につるして鐵砲で撃ち殺した。わしが何でそのやうな殘忍なことを喜ばう。しかしわしは關白といふわし自身の力を完全に感ずるためには、それより他に方法はないのだ。わしは人を切る。殺す。しかしわしを牢舍に投げ込み得る者は一人もない。わしははじめて關白といふわし自身を完全に生き得たのだ。さあ、わしは今あの老法師を切つて、裏の崖から突き落してやつた。わしの刀はこのやうに血を吸つてゐる。わしを捕へ得るものがあるか。日本中に誰もありえない筈だ。わしは關白だ！わしは關白として完全に生きえたのだ。わしは完全な人間として今生きてゐるのだはゝはゝは……。

嵐の聲聞ゆ。

しかしなあ…………、京の町の方を眺める。あゝあれが三條だ。あれが東寺の塔であらう。伏見はあの見當であらう。鴨川の水が眞つ白に流れてゐるのが見える。久しく逢はなかつたが父上もこのころはわしのことをいろ〳〵に案じてをられるであらう。わしは人を殺した。父上にそむいてもわし自身を生きてゆきたかつた。しかし果してわしは自分を生きえたか。父上にそむくことはそんなに必要なことだつたのか。わしはどこまでも父上の子であつてはならぬのか。わしは何で人を殺したのだ。（あわてゝ刀を投げ棄てる。）父上、わたしはもし今一息にこの山を下ることができるなら、きつとあなたの懷に飛んでかへりませうに！

木村常陸介　（しばらく前から上手に佇んで見てゐる。）今になつてお弱い心をお出しになつてはなりませぬ。

秀次　わしはお前のその言葉を聽くのが恐ろしい。しかしお前から離れては一時も賴りなくて生きてはをれぬやうだ。

常陸介　たゞ今叡山の法師たちからわたくしへお取り次ぎを願ひました。用件は、この比叡山は皇城の守護であり、開山以來殺生禁斷の地でございますればどうぞ明日から山狩りをおとり止め下さいますやうにとまうすのでございます。

秀次　わしに山狩りを止めろといふのか。

常陸介　さようでございます。

秀次　わしに止めろといふのか。

常陸介　はい、さようでございます。

秀次　（反抗的になり。）法師どもまでがわしを自由にしようとするのか。よしそれならばその願ひは諾かぬ。わしの思

ふ存分にする。わしがわしの領分で何をしようと勝手だといつてくれ。誰かそこにゐるか。

武士甲　お呼びでございますか。

秀次　うむ、貝を吹け。そして谷々に屯してゐる人たちを寄せてくれ。

武士甲　はい。

常陸介　いかゞなさいます。

秀次　あまりに月がいゝのでこのまゝ寝るのは惜しい。みなを集めて、月明の下で山狩りをやるのだ。猪、鹿一疋残らず狩り盡してやるのだ。

常陸介　そのやうな御輕卒なことをなさいましてはます〳〵敵方に口實を設けさせることになります。それに萬一……

秀次　何が輕卒だ。わしには天下に一人の敵もない。おい貝を吹け。早く。わしは關白だ。父上とわしの間は父とわしだけが知つてゐる。（武士甲退場。間もなく法螺貝の音聞ゆ。）常陸介もう二度と敵などといふ言葉を使つてくれるな。

常陸介　殿下の御心を誰が疑ひませう。もつたいないことでございます。たゞしかし君側にをります者どもの中には夜晝虎視耽々として關白さまの御樣子をうかがつてをりますものもございますので、どうぞ輕卒なお振舞だけはお止しなされますやう。

秀次　萬一のこともあればそれは天運とあきらめる。

具足をつけた武士松明を焚き、武器を持ち數多庭前に集まつて來る。侍女たちは奥より燭をかゝげて來る。

秀次　今夜直ぐこの月明の下でふたゝび山狩りを催したいのだ。山の法師たちが殺生關白と呼んでゐるさうだから、

その名に恥ぢぬほどの殺生をして見たいのだ。木の上の梟一羽逃がすな。谿の子鹿一頭撃ち洩らすな。

皆々頭を垂れ、さゝやく。中村式部少輔あわてゝ上手より登場。

式部少輔　たゞ今伏見からの早飛脚でございます。（武士たちを少しはなれて遠退させる）

秀次　伏見から！

式部少輔　太閤殿下昨夜より御發熱、度々御意識をお失ひあそばされ、少々お小用をお洩らしなされました御様子でございます。お目ざめになりましてはたび〳〵拾さまのお名と關白さまのお名をお呼びなされますとのことでございます。

秀次　父上がたび〳〵わしの名をお呼びなされたか！（潸然として）

式部少輔、常陸介、人々頭を垂れる。

秀次　わしは今夜直ぐ山を下る。

常陸介　夜道は御警護も行きとゞきませんし、何かと御危険でございますから、明早朝お立ちになりました方が……

式部少輔　常陸介がまうします通りになされました方が……

秀次　いや、父上がわしの名をお呼びになつてゐる。わしは何も恐れはせぬ。わしは一刻も早く父上にお逢ひまうしたい。みんな、山狩は止めにした。直ぐ山を下る仕度をしろ。

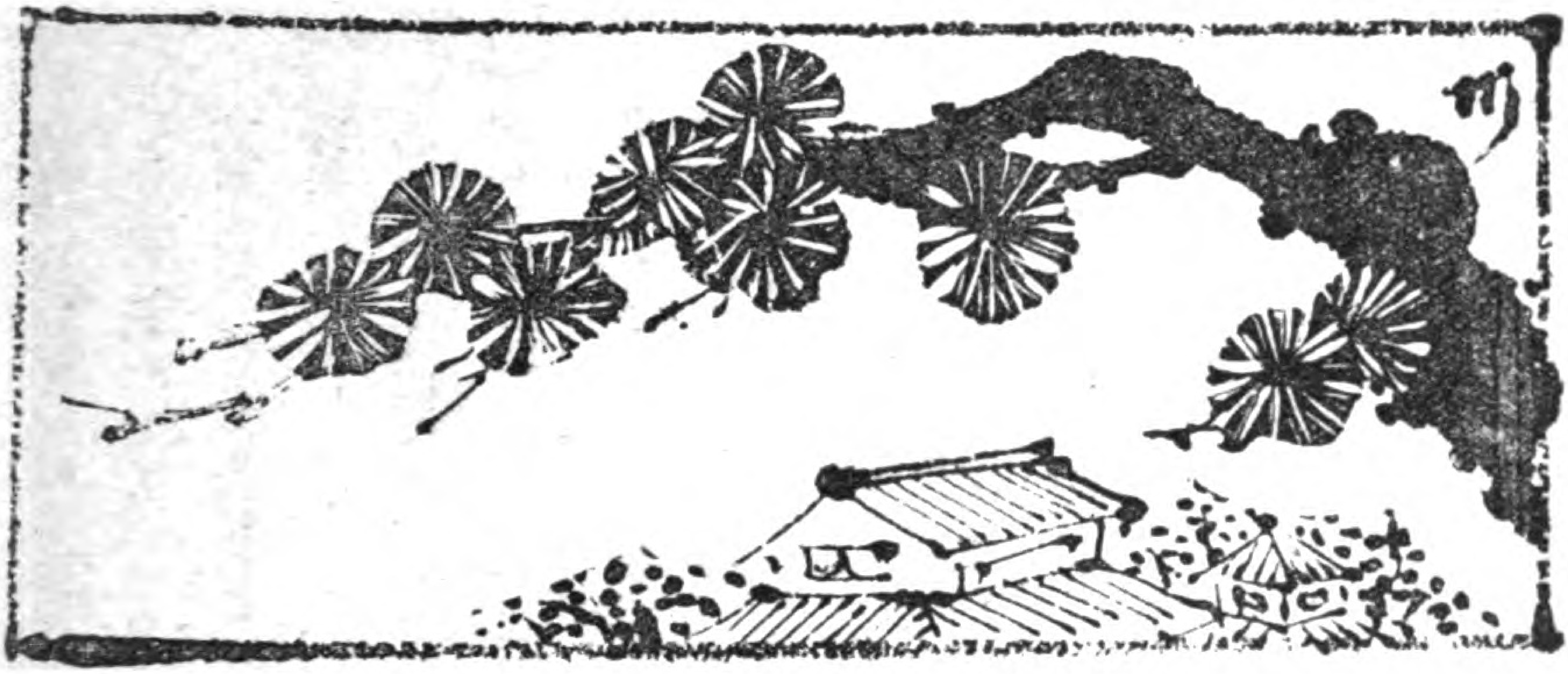
常陸介　でも、もし山をお下り遊ばされまして……（不安さうな顔をする。）

秀次　わしはこのやうな暗い生き方をしてゐるくらゐならむしろ父上御自身の刃にこの胸を刺された方が仕合せだ。

人々頭を垂れ、さゞやく。

法螺貝の音山に響く。

――幕――



あかつきを待つ（一幕）

關口次郎

夫

妻

彼等の家。

玄關の間と茶の間。

何れも電燈が消してあつて暗い。

——深更。

暗がりの中で、玄關の戸をあく音がする。つゞいて戸締りをするらしいガタガタいはせる音。

と、一方の襖をあけて、妻が茶の間の方へ出て來る。寢衣の上に羽織を引掛けな

から。すぐ、手探りで電燈をつけて、玄關の方へと出て行く。玄關の電燈もつける。

妻。あなたですの。

格子を明める音。それから障子があいて、夫、玄關の間へ姿を現はす。

妻。隨分長い間歩ていらつしたんですわね。

夫、默つて茶の間へ入つて行く。

妻も、玄關の電燈を消してつゞく。

妻。そんななりで、お寒かありませんでした?——夜更けなんですのに。(後ろをふりかへり、時計を見上げながら)あら、もう三時前。夜明けの方に近いんですわ。

夫、長火鉢の側に座り、マッチで煙草を吸ひつける

妻もその向ふ側に座る。

妻。一時も、二時も、時計の音聞きましたの。ねられなかつたんですもの。あなたがお出かけになると、すぐ一時を打つたんですわ。あれから——そんなになるのかしら。

間。

妻。でも何方へいらつしつたんですの。あすこの原つぱ?——巡査にでも怪しまれやしませんでした?——こんな夜中に、散歩だなんて云つたつて、本當にしてくれるでせうか。

夫。(むつつりと)職業を云へばいいぢやないか。

妻。だつて——

夫。書き物が、何うしても出來ないから……

妻。……

夫。あゝ。(溜息する)

妻も默つて面を伏せる。

遠くで鈍い汽車の音。それから寢ぼけたやうな汽笛が聞こえる。

夫。書けないと、何うしても困るんだがなあ。

妻。――それはね。

夫。雜誌社へも惡いし……

妻。締切はもう一昨日。

夫。それに金の方だつて――(妻の方を見る)

妻。……(目を外らす)

再び、汽笛の聲。やがてまた汽車の響。それが次第に遠ざかつて行く。

妻。(氣をかへるやうに)あなた。まだおやすみになりません?

夫。……

妻。少し、横におなりでしたら。

夫。何だか、ねられさうもない。

妻。でも、――

夫。……

妻。でしたら、――お茶でも淹れませうか。

夫。お湯がありやしないだらう。

妻。わかしますわ。

夫。いや、お茶はいい。それより、――ウヰスキーをくれ。そして水。

妻。これから？

夫。いゝんだよ。出してくれ。――（獨り言のやうに）氣がかはるかもしれない。

妻、一寸夫の樣子を見て、默つて立つ。茶簞笥からウヰスキーの壜、グラスなどを取り出して、用意をする。

それから部屋を出て行く。

夫、ごろりと橫になる。默つて天井へ向けて、煙草の煙を吐く。

妻、コップに水を汲んで來る。そしてみんな一緒に盆にのせて、夫の前にもつてくる。

夫。（起き上つて）お前寒くないかい。

妻。いゝえ。

夫、ウヰスキーをつぎ、默つてのむ。

妻、淋しさうな顏をして、その樣子を見てゐる。

夫。（ふと妻の方を見て）お前ねないか。俺にかまはず……

妻。いゝえ、いゝんですの。

夫。だつて、起きてたつて仕方がないぜ。

妻。でも……

夫。少しでも、ねた方がいゝ。

妻。……

夫。本當にさ。

妻。……

　夫、また自分にかへり、默つてのむ。と、何處か近所で、赤ン坊の泣く聲がする。暫くつゞく。

妻。お隣りの赤ちやん、また病氣なんですつて。

夫。……

妻。お二人とも心配してらつしやいましたわ。

夫。（氣のない聲で）さうかい。

妻。お醫者樣も見えてましたの。お晝。

夫。……

妻。それに、あすこのお祖母さんも、あの赤ちやんのことでは、夢中なんですものね。

夫。（突然）お前本當にもうねないか。

妻。え？

夫。俺は本當にかまはないんだよ。

妻。(怖えたやうに口を噤む)

夫。え?

妻。(微かに)えゝ。

か、妻は別に立たうとしない。

夫、一寸その様子を見ただけで、またのみ出す。

妻、ちつと考へに沈んで稍長い沈默。

妻。(ふと顔を上げて)あなた。

夫。(見る)

妻。(先をつゞけないで目を落として了ふ)

夫。何だ。

妻。(口篭りつゝ)えゝ。

夫。何だ。何でもないのか。――何でもないことなんか、話しかけないでくれ。俺はのみながら、考へごとをしてるんだ。

妻。………

間。

妻。(遂に思ひ切つたやうに)いゝえ、あなた。あたしあなたにお詫びしなければならないことがあるんですの。――

あたし悪いことをして了ひました。

夫。悪いこと？

妻。（低く）えゝ。

夫。何を。

妻。（俯向きつゝ）あたし、あなたの原稿を拜見しましたの。

夫。原稿を？——あの小說の？

妻。えゝ。今書きかけていらつしやる。

夫。（鋭い眼差で一寸見る）

妻。惡うございましたわ。そんなことをして、ほんとにあたし——でも………

夫。………

妻。『或る結婚』さういふ題がふつと目に入りましたの。そして、それを書くのに、あんたが毎日、あんまり苦しんでゐらつしやいましたから。つい………

夫。………

間。

妻。でも、あれは——かう申しては何ですけれど、拜見した方が、よかつたのかもしれませんでしたわね。——あたし實は、あれをよんで、今までいろんなことを考へてゐましたの。

夫。………

妻。あなた、隨分苦しんでゐらつしやるのね。——恐らく書くことより、書かれてゐることに。——私達の結婚のこと

で、そんなにもあなたが……
夫。お前、すつかり讀んだのか。
妻。えゝ。
夫。終ひまで？
妻。終ひまでつて、あれでお終ひなんですの？
夫。……
妻。（讀むやうな口調で）――彼は、この苦しい氣持を何うして切拔けていゝのか分らなかつた。何につけても自分の心持を押し隱して、たゞいかにも信頼し切つてるやうな顏をしながら、毎日妻と……
夫。（突然遮るやうに）あれは小說だ。
妻。でも書いてあることは……
夫。小說なんだ。事實をそのまゝ書くとは限つてやしない。
妻。だつて――
夫。まるつきり反對の場合をだつて書くことがある。境遇だけは似たものを借りて來ても。
妻。……
夫。何うせ人間だ。さう始終飛び離れた想像ばかり出て來やあしない。自分の生活の間から、いろんな場合も考へつくんだ。
妻。それはさうでせうけれど。

夫。（投出すやうに）氣にすることはないさ。
妻。……

間。

妻。でも、――ね、あなた。
夫。何だ。
妻。（ぢつと夫の顏を見つめてゐる）
夫。え？
妻。何うか、隱さずに仰しやつて下さい。本當のことを。何方にしても、あれは、私も考へなくてはならないことだと思ひますの。
夫。……
妻。違つてゐるとしても、あの中の妻は、あんまり私の場合とよく似てゐます。
夫。………
妻。では、あれは私でないとして、あたしあの小說の場合を考へて見たいと思ひます。
夫。………
妻。――彼は、何うしても、その妻を本心から愛することが出來なかつた。もともと、二人の結婚は、理解と愛とから生れたものではなかつた。たゞ、理解して愛しようとする意志だけから生れて來たものだつた。それは單なる媒酌結婚に過ぎなかつたから。すでに、ことの起りはそこにあつたのだ。……さうも書いてありましたわね。

夫。（頑なに口を噤んでゐる）

妻。あたし達の結婚も、やつぱりさうでした。それから——彼女は、南國の片田舍に生れた。近所の少い一軒家に、花畑の世話などをしながら暮らして來た女だつた。あまり人に接せず、信仰心の厚い父の下に、たゞ靜かに平凡に育つて來ただけの女だつた。

夫。………

妻。——ほんの結婚間際の一二年、東京の伯父の許にひきとられて、少しばかり世間といふもの、他人といふものに觸れただけだつた。だから………

夫。一々暗記するまで見てゐたのか。

妻。だつて、それもそつくりあたしの場合と違つてはゐません。一度でもすつかり覺えられます。

夫。だつて……（明らかな狼狽を强いて隱しつゝ）いや、だから先刻からも云つてゐるんぢやないか。境遇だけは、同じやうなものを借りて來ても、種々の事件や、主人公の氣持などゝいふものは、全然違へて書くこともあるんだつて。作品に眞實らしさを與へるための手段として、寧ろさういふ場合の方が多いんだ。それを一々事實と混同されては堪りやしない。それ位のことが分らないのか。

妻。………

夫。殊に文學も分りもしない癖に、あてずつぽうなことをいふのは止してくれ。第一、絶對に俺の書くものなんか見てくれるなつて云つてあるんぢやないか。

妻。………

夫。書いてゐる途中を人に見られるといふことは、俺は大嫌ひなんだ。それがたとひ誰にしたつて、そのために、書いて行く氣持が、何れだけこはされるかしれやしない。そんなことは聞かしてある筈だ。

妻。それは承知してゐます。

夫。承知してゐて、何故そんなことをするんだ。いや、見たなら見たで仕方がないとして、何故そんなことを云ひ出すんだ。殊に俺が、現在書けないで弱つてゐることを充分知つてゐるんぢやないか……

妻。えゝ。でも、それが……

夫。もういゝ。止してくれ。

夫、つと向きをかへて、手荒くウヰスキーをついでのむ。

妻、悄然として、それを見守る。

夫。お前もうねないか。俺は一人の方がいゝんだ。

妻。………

夫。おかげで、あの原稿をつゞける氣も何もなくなつて了つた。俺の頭は、なほさらむしやくしやして來ちまつた。

妻。……すみません。

夫。すむもすまないもありやしない。もうねてくれ。

妻。………

夫。もうねてくれといふんだよ。

妻。………

夫。なぜ、ねないんだ。
妻。もう、夜があけるまで大して間がありません。
夫。だが、まだ二時間位はねられる。
妻。あたし、ねられさうもありません。
夫。なぜだ。
妻。(ぢつと夫の顔を見つめる。と、突然そこに突伏して泣き出す)
夫。(流石に驚いたらしい表情を以て見る)
妻。あんまりです。あんまりです。(更に激しく泣きつゞく)
夫。(その樣子をぢつと眺める。眺めてゐる中に段々俯向いて行く)
長い間。
妻。(漸く顏を上げる。何處かにきつとした表情がある)あなた。
夫。………
妻。あたしにもう一度だけ聞かして下さい。それがまた、あなたの書き物の上に障るかもしれませんけれど、——でも私にしても、何うしてもこの場合默つてゐられない氣がするんですもの。
夫。………
妻。あの小說は、あの小說でようございます。あれが事實でないと仰しやるなら、それもようございます。でも、あの中にはまた、かういふことも書いてありましたわね。——彼は彼女を、妻としてもまだ愛する氣持になれなかつ

た。それは苦しいことだつた。だが、仕方はなかつた。だから、彼は彼女とは、この時までもなほ、夫婦の交りも…

…つていふところ……

夫。(ぎよつとしたやうに妻を見る)

妻。(その眼をさけて、膝の上を見つめる)私達についても——おんなじことが云へますわね。

夫。……

妻。(靜かに泣く)あなたが、事實でない、事實でない、と仰しやつても、……そんなことまでお書きになつてゐるものを……あたし、たゞさうですかと云つて、默つてゐるわけには參りませんもの。現に、小説の中で、さうした種々の事實に、隨分苦しんでゐると書きながら、それとそつくり同じ事實のある實生活の上では、少しも俺は苦しんでゐないのだと、あなたはつきり仰しやるつもりなんでせうか。私、考へて見ずにはゐられません。……たとひ、あなたがさうなんだと仰しやつても、私の身として、何うしてもそれを信ずる氣には、なれませんもの。……

夫。……

妻。それはあたし、何もあなたが私に……いゝえ、私達夫婦が……夫婦らしくないといふことを……それを何とかいふのではありません。……けれど、なぜ、實際にそんなに苦しいことがおありなら、それをさうと仰しやつて下さらないんでせう。何故苦しいんだか、私の何ういふ處のためにあなたがそんなにお苦しみになるのだか、それを聞かして下さい。……私、それはつまらない女です。でも私だつて……考へることは考へなければならないのです。

(泣く)

稍長い間。

夫。(つと顔を上げて、妻の方を向く)いや、これは俺が惡かつた。たゞ無暗に、小說だ小說だと云つて、殊更に隱し立てして、その問題に觸れまいとしたのは、たしかに俺が惡かつた。
妻。(顏を上げる)
夫。だが、これはお前には話したくなかつたのだ。今のお前には、……何うしてもね……
妻。だつて、小說にはお書きになる……
夫。さうだ。それなんだ。――だが、それはそれとして理由がある。
妻。でも、あれが發表されたら、遲かれ早かれ、結局私の目にだつて觸れることになりますわね。
夫。………
妻。お隱しになつたにしても。……伯父の家のものか、友達の誰かゞ、きつと見るに違ひありません。見れば必ず、私に知らしてくれます。
夫。それはさうだらう。
妻。それでしたら……
夫。でも、俺のあれを書くといふ氣持は全然別のものなのだ。……俺はあゝした問題に、あの小說の中だけで、解決をつけやうと思つてゐたのだから。
妻。……
夫。それでいゝと思つたのだ。
妻。では、あれからさき……何うなるんです。

夫。（苦しさうに）出來ないんぢやないか。それが……

妻。………

夫。あゝ。（深い溜息をする）

妻。解りますわ。あたし、――あなたの心持が……

夫。………？

妻。他の場合は知りません。でも、あの小説の場合では……

夫。………

妻。二重の苦しみですもの、それは。

夫。………

妻。小説の中で、解決つけようとなさることは、實際の上でもなさらなければなりません。

夫。………

妻。それでなければ、あなたの今の苦しみは決してなくなりはしないでせう。

夫。………

妻。離婚――

夫。（驚いて）何をいふんだ。お前は。

妻。（興奮しつゝ）いいえ、云ひます。云ひます。あなたの考へはたしかにそこにあるのです

夫。ばかな。

妻。あたし、あの小説をよんでゐる中にはつきり分りました。あなたは、たゞそれをはつきり書くのを恐れてゐらつしやるだけです。

夫。そんなことがあるものか。結婚してまだ半年足らず。——そんなことが考へられるものか。

妻。いゝえ。さうです。さうです。それより外に行き道がありません。

夫。(自分で自分の心に反抗するやうに)。——単快だ。——馬鹿げてゐる。

妻。でも、氣持は、頭は、すつかりその方に向いてゐます。それがはつきり分ります。

夫。それなら——それなら——俺は、何もこんなに苦しみはしないかもしれない。

間。

妻。あなた。——あなたといふ人は…………

夫。……？

妻。私ばかりでなく、あなた自身にも嘘を吐かうとしていらつしやることが、お分りにならないんでせうか。——あなたは隠したつもりでも、言葉や態度、それにすつかり露き出しになつてゐるものがあるのに氣がつかないんでせうか。

夫。何が。

妻。あなたの本心。

夫。俺の本心？

妻。さうですわ。

夫。（苦しさうに）出來ないんぢやないか。それが……

妻。………

夫。あゝ。（深い溜息をする）

妻。解りますわ。あたし、——あなたの心持が……

夫。………？

妻。他の場合は知りません。でも、あの小說の場合では……

夫。………

妻。二重の苦しみですもの、それは。

夫。………

妻。小說の中で、解決つけようとなさることは、實際の上でもなさらなければなりません。

夫。………

妻。それでなければ、あなたの今の苦しみは決してなくなりはしないでせう。

夫。………

妻。離婚——

夫。（驚いて）何をいふんだ。お前は。

妻。（興奮しつゝ）いいえ、云ひます。云ひます。あなたの考へはたしかにそこにあるのです

夫。ばかな。

妻。あたし、あの小說をよんでゐる中にはつきり分りました。あなたは、たゞそれをはつきり書くのを恐れてゐらつしやるだけです。

夫。そんなことがあるものか。結婚してまだ半年足らず。――そんなことが考へられるものか。

妻。いゝえ。さうです。さうです。それより外に行き道がありません。

夫。(自分で自分の心に反抗するやうに)。――卑怯だ。――馬鹿げてゐる。

妻。でも、氣持は、頭は、すつかりその方に向いてゐます。それがはつきり分ります。

夫。それなら――それなら――俺は、何もこんなに苦しみはしないかもしれない。

間。

妻。あなた。――あなたといふ人は………

夫。……！

妻。私ばかりでなく、あなた自身にも嘘を吐かうとしていらつしやることが、お分りにならないんでせうか。――あなたは隠したつもりでも、言葉や態度、それにすつかり露き出しになつてゐるものがあるのに氣がつかないんでせうか。

夫。何が。

妻。あなたの本心。

夫。俺の本心！

妻。さうですわ。

夫。……

妻。ね、あなた、私何んなことでも伺ひます。おちついて。——そして、その上できめるものなら、私の態度もきめたいと思ふのです。

夫。……

妻。あたし、それでなくては安心が出來ないのです。ですから何うか聞かせて下さい。あたしが何うすればいゝのだか……

夫。だが、俺は今、差し迫つてお前に云はなければならないものを、何も持つてゐないのだ。

妻。だつて、何うしたつて、このまゝではひきませんわ。

夫。だから、俺はいふのだ。お前の思ひ過ごしだつて。あの小說は、あの小說として唯俺に任しておけばいゝのだ。

妻。……

夫。俺は、あの小說を、あの一つの心境を切りぬけるために、書いてゐるのだ。なるほど、あれは幾分事實にあつたことかもしれない。しかし、あの氣持の中から、俺は最も正しい道を、切り開かうと思つてゐるのだ。最もいゝ路を見つけ出さうと苦しんでゐるのだ。

妻。……

夫。そして、その路は、お前の考へてゐるものとは違つた方向のものだ。それだけはたしかに云へる。

妻。でも、あたしは……

夫。もういゝ、何うか、もうその話を打ち切つて吳れ。

妻。……

氣拙く、二人は口を噤んで了ふ。

夫、頻りに煙草を吸ふ。

長い間。

妻、不意に立ち上る。立つて隣室の方へ行かうとする。

夫。何うするのだ。——ねるのか。
妻。私、あちらへ參ります。あちらでもつとよく考へたいと思ひます。
夫。考へることは、もうないぢやないか。
妻。でも——
夫。お前は、俺を信用してはくれないのか。

間。

妻、急に顏を蔽ふて、隣室に馳け去らうとする。

夫、つと立つて引きとめる。

夫。まて。まて。——まつてくれ。
妻。(顏を背けて泣く)
夫。ま、座つて、座つて。(引き戻して元へ來させ)座つて、もう一度よく聞け。
妻。……

夫。何もそんなに思ひ詰めることはないのだ。誤解してくれては困る。

妻。……

夫。俺はその誤解を避けるために、先刻からその譯を一心に話してるのだ。

妻。あなたは何にも、仰しやつてはゐません。あんなにも夫の意にみたない妻が、何うすべきであるのか、それについては何にも仰しやつてはゐません。

夫。分らないなあ。今は、それをいふ場合ではないからだ。その必要がないからなんだ。――恐らく、その中に何もかも、何でもなく過ぎて去つて了ふだらうとも俺は思つてゐる。

妻。――、さうでせうか。

夫。またさうしなければならないとも思ふ。

妻。でも、その時、他の何もかもまで、すつかり一緒に過ぎ去つて行つて了つてるかもしれませんね。苦しむにも、喜ぶにも、何にもなく……

夫。お前には、何うしても俺の氣持は分らないのかなあ。

妻。あなただつて、――私の氣持をちつとも考へては下さいません。

夫。あゝあ。

妻。……

間。

夫。(考へつゝ)仕方がないのかなあ。―だが、お前も誤解しないで、氣持をこじらさないで、きいてくれなくては。……

妻。（頷く）

夫。たしかに、あの小説の氣持は、俺にもあつたことだ。事實俺は、お前と一緒にはなつたが、お前と逢つたつて、別に愛などといふものは、少しも感じられはしなかつた。――が、これは無論、仕方もないことだらう。結婚の成り立ちが成り立ちである以上はね。――それは充分、俺も豫期してゐたことだ。二人が理解し合ふといふことさへ、かなり時間を要することなのだから。が、それにしても、俺がお前と一緒になつて、初めて、感じたことは、實はまるで反對のものであつたかもしれないのだ。お前の感情、お前の頭、お前の動作……それに俺の心と合へさうなものが、何處にも見出されないやうな氣さへしたのだ。

妻。………

夫。亂暴なことを云ふのを許してくれ。だが、それは事實だつた。何も、お前がそれほど見苦しく、愚かしく見えたといふのでは決してない。が、俺の心持や氣質との離れ方だ。……俺は、全くとりつく島もなく、一時は茫然として了つた。

妻。………

夫。誰でも、かうした結婚をしたものは、きつと感じることに違ひない。無論、それは男が感じると同じやうに、女の方にも感じられるに違ひないのだ。きつとお前だつて、何んなことを感じたか、しれやしないのだ。……

妻。（何か云はうとする）

夫。いやいゝ。とに角、俺だけのことを先きに云はしてくれ。――が、それでもお前は何處までも一生懸命に、たゞ、俺の方の生活に順應して行かうと努めてゐるのだ。何も云はないで、意外なやうな不服なやうな顔一つしないで、

新しい生活に、たゞ一心に首を突込み切つてゐるのだ。俺はその妻を見るのが堪らなかつた。いぢらしい氣がしてならなかつた。そしていぢらしければ、いぢらしいだけ堪らない氣がした。それでも俺の初めの氣持は何うにもならないのだから。……俺は飛んでもない誤算をして了つたのではないか。俺は人生の一大事に、いきなり失敗して了つたのではないか。……俺は當時全く暗い谷底へでも落されて了つたやうな感じさへしてゐた。

妻。(顔を伏せて了ふ)

夫。みんな自分のしたことなんだ。自分の責任なんだ。それは知つてゐる。それでゐて、俺は唯かつとして、家にゐても少しもおちつけない。頭はたゞ混亂して焦々するのみで、お前と一緒にゐて口を利いたり、ぢつと向き合つてゐるのは堪へられない。……俺は毎晩毎晩、つゞいて遲くなつたことがあつたね。……あれは必ずしもさう續いて會があつたりしたのではなかつた。……

妻。……

夫。慘酷だ。こんなことをお前にいふのは。でもあの時俺は他に何うしようもなかつたのだ。全くあの當時の自分のおちつけない苦しい氣持を消すためには。……俺は、「この頃君は急に顔色が惡くなつたね」とか「何だかやせたやうだぜ」と新婚者がきつといはれる人の冗談にも、笑へもしなかつた。却つて、人間の心の苦しみが、それほどまでに隱し切れないものかと思つて、ひとりでぞつとした位だ。(彼は自分の興奮に吾を忘れてゐるやうに喋べりつゞける)……

妻。(聲を忍んで泣き出す)

夫。許してくれ、許してくれ、俺は本氣で喋べり出すと、何もかも隱しては置けない性質なのだから、……だが、お前

にいふが、この息苦しい焦立つた感情は何も、お前に向つてぢやなかつた。いや、全然さうぢやなかつたと云つてもいゝ。**事實は俺は何より自分に向つて怒つてゐたのだ。何よりもさういふ立場に導いて了つた自分へ對してなんだ。**

妻。……

夫。元來が理窟から云つたつて、何したつて、**媒酌結婚**なんてものが、欠陥が多過ぎるのは分り過ぎた話ぢやないか。それを知りつゝ、俺は結局それにたよつたのだ。たとひ、事情が何うあつたにしろ、俺はたしかに自分で選んで、その方法をとつたのだ。若し、不幸にして、結果に思はしいものがなかつたとしたつて、それは誰のせいでもない。全くみんな自分のせいぢやないか。……そしてあの時みすみすその結果を見たのではなからうか、さう思つた。小説でも書かうといふ俺が！ばかな奴！俺は自分自身の愚劣さに對する悔と怒りとを感じずにゐられなかつたのだ。そして只一圖に一人で苦しんでゐたのだ。……

妻。（きつと顏を上げる。そして再び何かいはうとする）

夫。いや、分つてゐる。お前の言はうとすることは、さういふことは結局お前に對する激しい侮辱だ。お前といふものを頭から否定してかゝつてゐることだ。……が、俺はあの當時、一時の食ひ違ひに全く、度を失つて了つてゐたのだ。唯かつとしてゐたのだ。何といふ人間の出來てゐないことだらう。俺は淺慕にも、自分の最初に考へてゐた筈の考へも心持もすつかり忘れて了つてゐたのだ。

妻。……

夫。が、その中俺の感情も次第におちついて來た。落ちついて周圍を見廻すことになつた。穩かな心、穩かな眼で、お前

といふものに改めて對することになつた。……また。また明らかに自分でくぢをひいた運命に向つて、もつと愼重な態度をとるやうに自分の心に命じもした。さうして俺は漸く自分を返した。それからお前のことが少しづゝ理解されて來るやうに思つた。何もかも穩かに受け入れることが出來た。

妻。……

夫。もともと俺だつて、無鐵砲に無考へにこの結婚をしたのではない。かなり理解のある人達が、その間に立ち合つて、成立つたことぢやないか。……殊にお前を預つてゐた伯父さんといふ人は私の信頼する人だつた。理解が行き屆いて、囚はれない意味での道徳家でもあつた。そして少しも嘘の云へない人だつた。……あの人から一切のことを知ることが出來た俺は、少しも不安を感じてはゐなかつた筈だ。さうして事實お前はやつぱりあの伯父さんの云つたとほりの女に違ひなかつたんだから。心も身體も、何處までも素直で健康な、——俺にしたつてそれ以外の何物を求めたのではない。それなのに、俺は一時の自分の狼狽のために、お前の正體をすつかり見失つて了つて、そして、獨りで無暗に苦しんでゐたのだ。

妻。……

夫。自然、今は俺はそのことについては安心はして來てゐる。——けれども、お前を理解し、俺の豫期にさして誤算のないことは分つたにしても、俺の心はそれ以上には何故か働きかけては行かうとしない。そしてまた、それがいつの事か、さういふ時機が來るか來ないか、それも分らない。問題はそこなのだ。そこでは俺の頭と心は全く別なものがあるんだ。……それがやつぱし俺を苦しめずには置かない……

妻。」……

夫。俺は元來が感情の冷たい人間なんだらう。俺は計畫のたたない所に、決して進まうとしなかつた。それは、決して打算的な意味からではない。無意味なことを極端に避けたい性質からだつたのだ。それは俺だつて矢張り人間だ、一時的な感情で昏めくことはある。が、一度本來の性質にかへると、俺はやつぱり俺のコースをとつてゆく。俺のための路筋を辿つて行く。……今度の結婚だつて、無論俺のその計畫によつてのことだ。俺はたしかに、それによれると、自分の性癖からそれを考へてゐたに違ひなかつた。……そして、俺達の家庭の現在を考へて、それで行かなければならないのだと思つた時、やつぱり俺は唯寂しい氣がしたのだ。愛のない家庭、愛するものによつて結びつけられてゐない結合。——かう云つたとて、俺は今、お前を疎んじてゐるのでも嫌つてゐるわけでもない。——唯、理解から愛が生れて來る、理解さへあれば愛が生れてくる、さう信じ切つて、他を考へようとはしなかつたらしい俺の頭に、ともすれば何かしら暗い溝が劃れて來さうに思へてならないのだ。そして今もその感情を何うすることも出來ないのだ。……

妻。…………

夫。俺が、お前と夫婦になり切らないといふのも、一つはこの計畫好きな俺の心から來てゐたことに違ひない。俺は、初めから、お前を愛する心の自然に湧いて來るまでは、俺はお前との肉體的の交渉はもたないつもりだつた。既に形式にはきつぱり結びついてゐながらと、人は嗤ふかも知れまい。けれども、俺は、俺の最も親しい道伴れと選んだお前に對してだけは、せめて心の純潔さを失ひたくないと思つたのだ。そして、それが既に種々の過去をもつてゐる俺として、お前に對するせめての誠實だとも思つてゐたのだ。また、唯因襲的に無意味に肉から入つて平然としてゐる媒酌結婚をせめても有意義にするものだとも思つたのだ。——……

妻。………

夫。初めつから手段を誤まつた世界から入つて來て、逃れられない場合になりながら、なほそんなことを考へずにゐられない俺なんだ。その癖自分の愚かさから、若しかしたら、他人の生活をも全然こはして了はないとも限らないことには少しも反省はしてゐない。却つて平氣で人を何んな不幸にまでも捲き込んで行くだけの冷酷さだけは、決して捨てはしないのだ。——

妻。………

夫。實際、不足をいふのは今では俺ではなくお前でなければならないのだ。自分の愚かさを棚に上げておいて、唯自分で自分達の生活を黒く塗りつぶしてばかりゐるのだ。そして、何處までも平氣で、お前の生活は俺と一緒に引づつて行くつもりらしい。それが俺の計畫なのだらうか。何が計畫だ。何が純潔だ。ばかげたことを!……考へて行くと俺は全くその冷酷なエゴイスチックな心をお前の方から、怨まれなければならないのだと思ふ。それこそ幾ら恨まれても仕方がないことなのだ、けれどもやつぱり何處までも俺はそれを隠さうとしてゐる。本心をお前に知られまいとしてゐたのだ。……小説だつて、何をかいてゐるか分りやしない。嘘つぱちの小説に何の解決があるものか。……

妻。………

夫。さうだ。俺は俺の馬鹿さこそ寧ろ憐まるべきだ。俺の卑怯さこそ笑はれなければならないのだ。それでゐて、傲然として俺を信用しろなどゝ、いゝ氣なことをいつてゐる。何て奴だ。……

妻。あなた。

夫。全く、俺こそ欠點だらけなのだ。物分りがいゝと己惚れて、計畫などゝ騒いでゐても、結局、物分りの惡い、ドク

ン場でいつでも顚倒しては、唯苦しんでばかりゐる意氣地なしなんだ。：[illegible]

妻。あなた。

夫。それに、お前に文句をいふ俺自身の過去は何だ。怠け者で、始末の惡い浪費者で、のみすけで……。そして、こんなにも大馬鹿で、嘘つきなんぢやないか。

妻。あなた、もう止して下さい。そんなことを考へるのを止して下さい。私、もう澤山です。澤山です。

夫。しかし、俺は……

妻。(涙ぐみつゝ)いゝんです。いゝんです。もう、何うか、そんなことばかり云ふのは止して下さい。私、――私何だか悲しくなります。

夫。…………

妻。そんな風に、唯自分で自分を罵つたり、苦るしめたりして、それが何うにもなることではないぢやありませんか。

夫。さうだ。それは俺にも分つてゐる。が、それがどうにもならないのだ。俺の性格が急に變りでもしなければ……

妻。そんな……駄目。そんなことばかり考へて、……それより、そんならこれから、何うすればいいのか、せめてそれでも……

夫。………

妻。それは、あなたの氣持は分つて居ます。分りました。――でも、何うしたら、あなたの苦しい氣持を逃れられることになるんですか。私、それが知りたいと思ふんですわ。

夫。………

ね。

夫。俺には、何うしていゝのか分らない。……たゞ、この儘でやつて見られればやつて見るといふだけだ。

妻。やつて見る……

夫。或は、この苦しい氣持が、案外何でもなく過ぎて行つて了ふかもしれない。……

妻。（無理に愁眉を開くやうに）さうでせうか。

夫。だが、或は……過ぎ去らないかも……

妻。あなた、駄目ですわ。……さう。それで何でも問題を難かしくするの。あなたは何でも考へ過ぎるんですわ。

夫。しかし、ごまかしたつて駄目だ……

妻。また、そんな……。あたしもう聞きませんわ。

夫。………

妻。あなた、今日は興奮してらつしやるの。――きつとお休みにならないからですわ。

夫。………

妻。本當に。私あんまり、氣にかゝつて、しつッこく聞いたのがいけなかつたんですわね。……私こそ本當に馬鹿でしたわ。

夫。でも、本當に俺達は何すればいゝのだらう。本當にこのまゝで、俺達は何うなつて行くのだらう。

妻。また。いゝえ、いゝの。もう本當にいゝの。……私、そんな難かしいこと考へません。又考へられもしないんですの。――あたしたゞやつて見ますわ。

夫。………

妻。そして、たゞ、その時をまちますわ。

夫。その時。……そんなものが來るだらうか。

妻。來るかもしれないと思ひますわ。

夫。來なかつたら。

妻。……それは……仕方がありません。

夫。お前は、それで何とも思はないのか。

妻。……

二人とも考へ込んで了ふ。

長い間。

夫。(考へあぐんだ顏をあげて獨り言のやうに)……まつのか……

妻。……

夫。……それより外に仕方がないのか。

妻。(夫を見て無理に笑ふ)あなた本當に駄目。もう何にも仰しやらないで下さい。私、それが堪らないんですわ。

夫。………

妻。そんなに考へて考へて……毒ぢやありませんか。

夫。………

妻。本當に、そのあなた自分で自分を苦しめる心さへなくなれば、何もかも、無理に過ぎて行つて了ふかもしれませんわ。

夫。お前、さう思ふかい。

妻。え〻。……きつと……私のことなんぞでそんなに氣をもむなんてばかげてゐますもの。………

夫。(たゞ妻の顏を見てゐる。)

妻。……?

夫。さうか。……そんな風に思つてゐてくれてるのか。(目を外らして了ふ。)

妻。だつて………

夫。(不意に聲を立てずに笑ふ。)……はツはツは。………はツはツは。

妻。あら、だつて……

夫。いや、い〻んだよ。い〻んだよ。それで――

妻。……

夫。俺はお前が羨しい。

妻何ですの、こんな(返事がないので)あ〻あ本當に、――早く夜があければい〻んですわ。何もかも、きつと、夜のせいよ。

長い間。

夫、ふとぼんやり小さい欠伸をする。

妻、意外な顏で、それを見る。そして、何となく微笑む。

不意に何處かで雞の聲がする。

妻。あ、雞の聲がしますわ。――(ふと氣がついたやうに部屋の中を見廻はす)あら、ひどい煙り、少しあけませう。

夫。――

妻。ね、あなた。

妻、立つて障子をあけて椽側に出る。

妻。あら、もう幾らか白んでるんですわ。雨戸もあけて了ひませう。

夫。………

妻。ね。

夫。何うでも……

妻、雨戸をあけ始める。

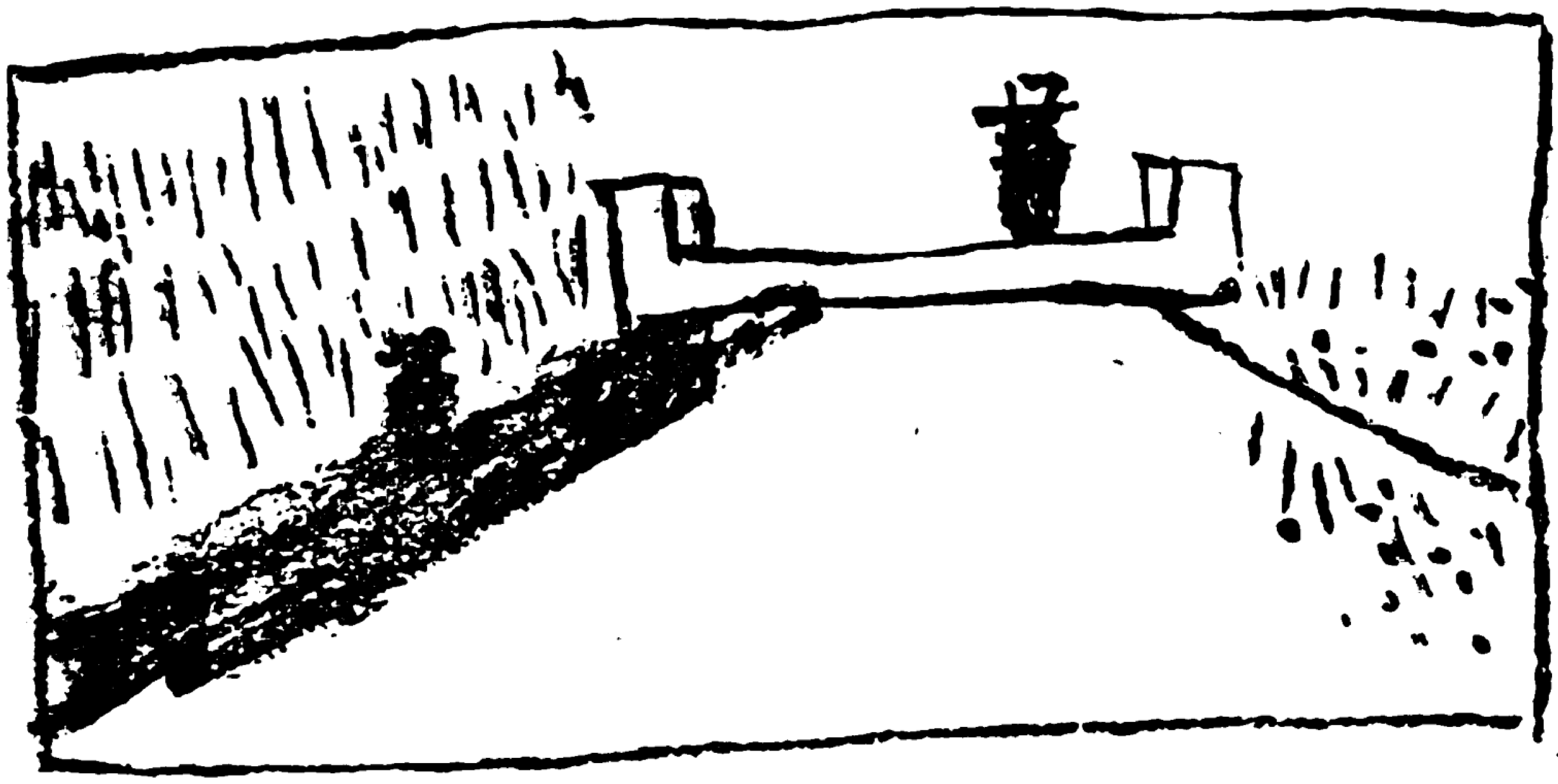
外、余程白んでゐる。

妻。(自ら、氣持を引き立てるやうに)あゝ煙がみんな出て行きますわ。それ、こんなにずんずん、冷たい、いゝ空氣……

……

夫、一寸妻の方を見る。それからぼんやり、外の方へ目をそらして了ふ。

――幕――



この三つのもの

佐藤春夫

一二

「わたし、お待ちしてゐたのですよ」
「何か、新らしい相談事でも出來たのですか」
「いいえ、でもあなたが今日もお出になると、北村が言つてゐましたから」
「で、北村は」
「多分、來やしませんわ」
彼等はさう言ひながら二階へ昇つた。
そこに座布團が一つ置かれてゐたところを見ると、お八重は昨日と同じやうに椽側にゐたらしい。
座敷に落着くとすぐに赤木は言つた「どうしました。北村とはよく話しましたか」
「え、ともかくも話はしました。――でもどちらからも別に何も言ひはしません

お。何を尋ねても、あなたに話してあるから、あなたから聞くがいいといふのです」

「さうして、あなたは何か言つた？」

「いいえ。言ひません。言つたつて仕方のない事ばかりなのです」

「それはいけない。何でもいい。ともかくも言つて見れば良かつたですね」

「駄目です。言へません。言ひたくなかつたのです。わたしはもう別れることにしてゐるのです」お八重の言葉は冷たげで殆んど無表情に近かつた。さうしてたうとう沈黙してしまつた。「あ、さう、さう」彼女は、ややしばらくして言ひ出した「あなたが御出になつたら一度お目にかかりたいとお婆さんが言つてゐますわ。会つてやつて下さいますか。どうせ年寄の愚痴に極つてゐるのですから、さう言つたのだけれどお婆さんは聞かないのです。うるさいと思はずに会つてやつて下さいますか」

「ええ。会ひますとも。お婆さんにも意見もありませう。一度は聞いてみなくてはいけないだらうから」

「では、今呼んで来ますね」

お八重はおりて行くと直ぐ、お婆さんをつれて来た。赤木はこのお婆さん、――お八重のほんとうの伯母で、養母であるといふ人に会ふのは初めてであつた。見るから利かぬ気らしい頑丈な年寄であつた。

「お婆さん」お八重が言つた「赤木さんはくどい事はお嫌ひなのだから、あんまりぐづ〳〵言はないやうになさいね」

お八重は、さう言つて赤木の顔を見て笑つた。お婆さんも笑つて見せた。お八重などよりずつとしつかりした顔つきを持つたこの人を、お八重が労はるやうにまた教へるやうに言ふのが赤木には頬笑まれた。お八重がかういふ言葉つきや表情をも持つてゐることを見るのは赤木にはめづらしかつた。さうしてそれはお八重らしい温みと親しみとの籠つた

ものであつた。それは分別に滿ちた賢い娘が耄碌した母にいふやうな溫和と優越とを混合したもので、お八重には柄にないことだのに、それがしかし一向不自然でなかつた。いつもお八重がかういふ風にこのお婆さんに對してゐることがわかる。しかも、このふたりの顏形を見てゐると、お八重のそんな口調を却つて笑ひたいぐらゐこのお婆さんは表情も姿勢も確りしてゐた。それでもお婆さんはお八重の言葉をごく素直にうけた。

「あいよ。どなただつてそれやお若い方はくどい話はおきらひだよ。でも、申し上げたい事だけは一とほり聞いていただかなくちや――赤木さんには、もう御迷惑序なのですからね」

お婆さんは世間慣れた調子で頭を一つさげた。お八重の養母だといふからには、田舍で藝者屋をしてゐた人に相違ないのだが、客商賣を永くしたといふところは、自づと現はれてゐた。

「わたし、下へ行きますよ。お婆さんがどんな事をいふか、聞いてゐてきまりが惡いから」

お八重は再び笑つて赤木を見た。それは寧ろ快活な蓮葉なところさへある調子だつた。無意識に養母に甘えてゐるといふ風であつた。さうしてお八重は言葉どほり下へおりて行つた。

「今度はまた本當に飛んだ御迷惑な事をお八重がお賴みしましたさうで」お婆さんは、聲を低めてさう言つてから、三度頭を下げた「全く、あなた、お恥かしい。淺ましい。血で血を洗ふやうな騷ぎで。あなたならばこそですが、これがどうしてまあ、ひと樣のお耳に入れられますものか。尤もお隱し立てをしましたところが、何ね、世間は早うございますから、あなた、もうどなた樣だつてお氣がついてゐますよ。それこそ知らないのはお八重ばかりぐらゐなもので」

お婆さんは一息に達者な口調でさう述べた。それから咳をした。聲もさうであつたが、その咳もどうやら喘息病みらしかつた。同じ病人をよく知つてゐる赤木には直ぐにさう解つた。お婆さんはその赤木の思つたことをすぐ感じでもし

たやうに言ひつゞけた。

「わたしは、喘息持ちでございましてね。――さういふ病氣には海岸がいいと言つてお八重が呼んでくれたものですから、去年の冬からあなた、こゝへ世話になつて居りますが、こゝへ來たばつかりに、わたしは思ひがけない苦勞をしましてございますよ。わたしは厄介に來てゐるんでございますから、何も出しやばつたことは申しません。それでも龜の甲か年の効か、一目見れば何もかも直ぐにわかつたのです。ああ、困つた事が出來てゐるとね。あなた、わたしはひとりで氣を揉みましたよ。それを一向お八重が氣がつかない。知らなければそれでいいやうなものの、わたしの胸は納まりません。見るに見兼ねて、それでもわたしは、氣のいい子だからお八重には何も言へませんでしたから、或る時一遍お雪の方をつかまへましてね、思ひ切つて言つてみたのでしたよ。すると、あなた、お雪が怒るの怒らないのではない、火のやうになりましてね。年寄りといふものはいけ好かないものだ、何かといふとそんな風に考へるのだからイヤになつてしまふ。今の世の中はそんなものではない。と、それこそはあなた、逆に向ふから吐鳴りつけられるやうな始末で、お雪などに吐鳴られたからと言つて誰が、おそろしいわけのものでは御座いませんけれど、あんまり荒い聲で言ひ合つたので御近所にも惡し、御近所ばかりではない、それが家の者にだつて惡いやうな事なのだから、わたしも思ひかへして、この奴が盗人猛々しい何を言ふかわたしの目の黒いうちはとは思ひながらも、口では、さうかい。それは濟まん事を言ひました。そんな間違がなければもうそれは何よりうれしいのだからと、さう言つて却つてお雪を宥めてあやまつた事もありました」

お婆さんの言葉と表情とは生々として、憎惡の感情に充ちてゐた。この人は小さな鋭い目を持つてゐた。男まさりな氣質だといふことが赤木にだんだんわかつた。

「でもわたしは、どうも腑に落ちない事ばかりではあり、」お婆さんは言ひつづける「それに遠慮するどころか、徐々増長するばかりなのですから、もう默つてばかりはゐられたいと肚を据ゑて、たうとうお八重にさう言つてみたのでございましたよ。ゑ。まだ、つひこの間のことで。……」

お婆さんの言ふのは、この間お八重から聞いたのと同じ事であつた。――北村とお雪とはこの町を素通りして東京の方からH溫泉へふたりづれで出かけた。半月も家をあけて置いた揚句であつた。急いだから家へは寄らなかつたと言つたけれども、何を急ぐのか、急ぐと言つてもただ門の前で十分かそこら自動車を停めればいいだけの事、それをしないといふのはつまり、その車にお雪が一緒だからで、怪しいと思つてゐるから、お婆さんはそれを睨んでゐると、お雪はある夕方ひよつくり歸つて來て、「兄さんがH溫泉にゐるから姉さんとお婆さんと一緒に遊びにお出つて、わたしも今朝行つて今かへつて來たところよ」といふやうなことを言つた。

「それでも、北村もまだお八重が可哀さうぐらゐな事は時たま思ひもするのか、とわたしはさう思ひましてね、お八重に、『わたしは行きたくはないからお前だけ言つてお出で』といふと、お八重はお八重で『でも向ふではお婆さんと一緒にお出でといふのだから、わたしひとりでは叱られるから、お婆さんも行かう』と誘ふので、わたしはあなた。面白くもない、そんなところへなんぞ出かけたくはないのに、お八重が不憫で――自分の亭主のところへひとりで行けないかと思ふと、わたしがつれて行つてやる氣で、それぢやといふので一緒に出かけたのでございましたよ。旦那の顏をわたしが一目見れば何もかもわかります。さすがに氣が引けるものだから、滅多に口など利かない人が、いつになくわたしにお世辭などを言つて、それから瀧などを案內してくれましたつけが一晚そこへ泊つたので、をかしな話ではありますがわたしは案ぜられるからその晚中よく氣をつけて見るけれども、どうもふたりで夫婦らしいやうなことがあつた樣

子もない。半月ぶりに會つて、これでは夫婦の情愛も何もあつたものではない。お八重が可愛さうだと思つて歸つて來て、その事からわたしはお八重に日頃思つてゐることを皆打明けたのですよ。するとお八重は、顔の色は變へたやうでしたけれど『お婆さん、そんな馬鹿な事があるものか、お雪はわたしの妹ではありませんか。——それにお雪には橘さんといふ人があるぢやないか』と、さう打消すから、『それぢや、お前は、わたしがさう言つても別に心當りはないかい』といふと『えゝないわ』と強くうなづくものだから、わたしとしてももうそれ以上には言つていいものやら惡いものやら判らず、『それならいいけれどもね』とさう言つて、それきり言はなかつたものです。——あなた、橘さんといふ方は御存知でせうね」

「え、知つてゐますよ」赤木は始めて口を利いた「どうしてですか」

「あれはお雪の何なのです」

「さあ。——ともかく以前に一度、お雪ちやんを嫁に欲しいと言つた事がありましたよ」

「それが何故、行かなかつたのです。いづれ北村がやらなかつたのでせうが。——その橘さんですよ、それがからくりなので、やつぱり曲者なのをお八重は知らなかつたのです。お八重と世間とをちよろまかす爲めの埋合せに、北村は橘さんとお雪とを見て、見ぬふりに見逃してゐるんです。わたしは、本當に呆れてしまひますよ、あなた。わたしはお承知でもありませうが花柳界の方でも、いろいろ見て來た事もありますけれど、あんな社會でだつてこんな事がもち上ればみんな爪彈きをします。それにちやんとした人たちが一たい何事だと思ふとわたしは、昔者のせいか見兼ねてたらないのですよ。——いいえ。わたしは何もそん固いことをいふ柄ではありません。ですから、たとひお雪にしたところが、北村が仕外したものなら仕方がない。別に圍ふなり何なり、いやそれも出來なけや出來ないで、何とかお八重に濟

「でもわたしは、どうも腑に落ちない事ばかりではあり、」お婆さんは言ひつづける「それに遠慮するどころか、益々増長するばかりなのですから、もう默つてばかりはゐられないと肚を据ゑて、たうとうお八重にさう言つてみたのでございましたよ。ゑ。まだ、つひこの間のことで。………」

お婆さんの言ふのは、この間お八重から聞いたのと同じ事であつた。――北村とお雪とはこの町を素通りして東京の方からH温泉へふたりづれで出かけた。半月も家をあけて置いた揚句であつた。急いだから家へは寄らなかつたと言つたけれども、何を急ぐのか、急ぐと言つてもただ門の前で十分かそこら自動車を停めればいいだけの事、それをしないといふのはつまり、その車にお雪が一緒だからで、怪しいと思つてゐるから、お婆さんはそれを睨んでゐると、お雪はある夕方ひよつくり歸つて來て、「兄さんがH温泉にゐるから姉さんとお婆さんと一緒に遊びにお出つて、わたしも今朝行つて今かへつて來たところよ」といふやうなことを言つた。

「それでも、北村もまだお八重が可哀さうぐらゐな事は時たま思ひもするのか、とわたしはさう思ひましてね、お八重に、『わたしは行きたくはないからお前だけ言つてお出で』といふと、お八重はお八重で『でも向ふではお婆さんと一緒にお出でといふのだから、わたしひとりでは叱られるから、お婆さんも行かう』と誘ふので、わたしはあなた。面白くもない、そんなところへなんぞ出かけたくはないのに、お八重が不憫で――自分の亭主のところへひとりで行けないかと思ふと、わたしがつれて行つてやる氣で、それぢやといふので一緒に出かけたのでございましたよ。旦那の顏をわたしが一目見れば何もかもわかります。さすがに氣が引けるものだから、滅多に口など利かない人が、いつになくわたしにお世辭などを言つて、それから瀧などを案内してくれましたつけが一晩そこへ泊つたので、をかしな話ではありますがわたしは案ぜられるからその晩中よく氣をつけて見るけれども、どうもふたりで夫婦らしいやうなことがあつた樣

子もない。半月ぶりに會つて、これでは夫婦の情愛も何もあつたものではない。お八重が可愛さうだと思つて歸つて來て、その事からわたしはお八重に日頃思つてゐるとを皆打明けたのですよ。するとお八重は、顏の色は變へたやうでしたけれど『お婆さん、そんな馬鹿な事があるものか、お雪はわたしの妹ではありませんか。——それにお雪には橘さんといふ人があるぢやないか』と、さう打消すから、『それぢや、お前は、わたしがさう言つても別に心當りはないかい』といふと『え〻ないわ』と强くうなづくものだから、わたしとしてももうそれ以上には言つていいものやら悪いものやらも判らず、『それならいいけれどもね』とさう言つて、それきり言はなかつたものです。——あなた、橘さんといふ方は御存知でせうね」

「え、知つてゐますよ」赤木は始めて口を利いた「どうしてですか」

「あれはお雪の何なのです」

「さあ。——ともかく以前に一度、お雪ちやんを嫁に欲しいと言つた事がありましたよ」

「それが何故、行かなかつたのです。いづれ北村がやらなかつたのでせうが。——その橘さんですよ、それがからくりなので、やつぱり曲者なのをお八重は知らなかつたのです。お八重と世間とをちよろまかす爲めの埋合せに、北村は橘さんとお雪とを見て、見ぬふりに見逃してゐるんです。わたしは、本當に呆れてしまひますよ、あなた。わたしはお承知でもありませうが花柳界の方でも、いろいろ見て來た事もありますけれど、あんな社會でだつてこんな事がもち上ればみんな爪彈きをします。それにちやんとした人たちが一たい何事だと思ふとわたしは、昔者のせいか見兼ねてたらないのですよ。——いいえ。わたしは何もそん固いことをいふ柄ではありません。ですから、たとひお雪にしたところが、北村が出來(でか)したものなら仕方がない。別に圍ふなり何なり、いやそれも出來なけや出來ないで、何とかお八重に濟

まぬながらにも済む方法がありさうなものではありませんか。ちやんと一とほりはお八重を立てての上での事にしたらばどうでせう。それならそれで、世間にはいろんな事もある。わたしもあきらめて胸に納めようもある。それがどうでせう、あなた。お峯と北村とがお取膳か何かでお八重をまるで女中のやうに、こき使つてゐるんです。わたしは、このとほりの氣性ですから、何かにつけて業が煮えて煮える」

お婆さんは事實、憤懣に堪へぬらしく、その小さな目には涙が光つてゐた。さうしてなほも何か言ひつづけようとして、また咳に妨げられたがしばらくして、今度は落着いて出直すのであつた。

「でもわたしは今度のことを、お八重から聞きまして安心をいたしました。別れてもいいといふ氣に、お八重もなつてゐるやうで、わたしもあたり前だから別れさせたいと思ふのです。あれはこの家へ來る時には、ともかくも一揃は何もかも冬は冬夏は夏と不足せぬだけのは簞笥に一ぱい持たせてよこしたのです。今ではどうでせう。何一つ殘つてゐます。こりや、あなた、夫婦仲よくしてそれで亭主が思はくでも違つた仕事のためだとでもいふのなら、それこそ女房のものは亭主のもの質ハチ置かうが、賣拂はうが、どんな苦勞もするのが夫婦ですけれど、お八重のはまるで違ひます。——旦那はお八重の來た當座には、そんなことを言ふのぢやありませんが、柳行李一つしかなかつたものです。聞けばえらい人だといふのに、とわたしは一時は呆れたものです。尤も、まだ年は若くそれに下宿にゐるやうな書生さんかたぎなら、そんなことは當前だとみんなが言ふものだから、成程さうだ、女房でも持つて、何かとこれから身のまわりも氣をつけるだらうと思つて安心をしてゐたのです。それがどうでせう。お八重のものは何一つ滿足に殘つては居ない。時計だつて指輪だつて、いづれは大したものではないまでもみんな揃へてやつたものが、そんなものはおろか普段着一枚着支へる始末です。——きのふもさう言つたら、お八重は、そんな事など言ふのではないとは言ひましたけれども、あなた、本

當でございますよ。それも、今ほども申すとほり、貧をしてさうならばこれは運ですもの、そんな事を言ひ出せばそれこそ愚痴。でも、お八重のは違ひます。北村は自分のものやお雪のもののためなら、いくらでも金は惜まないのです。それがどうでせう。これは百合子に、これはお八重にと言つて、いつ何を買つてくれてやつたといふのをわたしはまるで見た事はないのです。――いや／＼、こんな事はお耳に入れても、もう仕方がない。ただわたしは、お八重が不憫なばかりなのですよ、あなた、あれは、御覧のとほり、わたしの口から申してはをかしいかも知れませんけれど、ほんとうに優しい氣のいい女なのです。わたしは實の子でこそは無いのですけれど、血はつながつてはゐるし、それに永いこと育てたのですもの、わたしにとつては愛(いと)しくて、おとなしい子だけに不憫が增すのでございますよ、あなた。これがお雪のやうな奴なら、わたしはたとひ、實の子だつたにしたつて何とも思やしません。――幸、北村がいやだといふなら返して貰ひますとも。何の出もどりであらうと、子供のひとりぐらゐあらうと、あの子ならあなた、わたしは大手を振つてどこへでも押賣に出かけてでも行きたいくらゐです」

お婆さんは不意に口をつぐんだ。赤木はふと北村が、もう既に赤木のお八重に對する感情をお八重に打明けてしまつて、それでお婆さんがそんな事をいふのぢやないかと、思つてみた。お婆さんの口にかかつては北村はまるで市井の無頼漢と選ぶところがないやうに言はれた。赤木はそれを聞く間は、お婆さんとしては尤もなと思ひながらも多少、閉口しないではなかつたが、さうしてお婆さんのなかなか鋭利な舌鋒を喜ぶわけには行かなかつたけれども、しかし彼女がお八重を愛してゐることを言ふ時の言葉は、赤木にはそつくり同感で、むしろ自分の代辯者を得たやうな心持さへした。

「あなたの仰言るとほりです――僕も感心してゐます」

赤木は、さう言つて、ふと彼の顏が赧くなつたのに氣づいてうつ向いた。

まぬながらにも済む方法がありさうなものではありませんか。ちやんと一とほりはお八重を立てての上での事にしたらばどうでせう。それならそれで、世間にはいろんな事もある。わたしもあきらめて胸に納めようもある。それがどうでせう。あなた。お雪と北村とがお取膳か何かでお八重をまるで女中のやうに、こき使つてゐるんです。わたしは、このとほりの氣性ですから、何かにつけて業が煮えて煮える」

お婆さんは事實、憤懣に堪へぬらしく、その小さな目には涙が光つてゐた。さうしてなほも何か言ひつづけようとして、また咳に妨げられたがしばらくして、今度は落着いて出直すのであつた。

「でもわたしは今度のことを、お八重から聞きまして安心をいたしました。別れてもいいといふ氣に、お八重もなつてゐるやうで、わたしもあたり前だから別れさせたいと思ふのです。あれはこの家へ來る時には、ともかくも一揃は何もかも冬は冬夏は夏と不足せぬだけのは簞笥に一ぱい持たせてよこしたのです。今ではどうでせう。何一つ殘つてゐます。こりや、あなた、夫婦仲よくしてそれで亭主が思はくでも違つた仕事のためだとでもいふのなら、それこそ女房のものは亭主のもの質ハチ置かうが、賣拂はうが、どんな苦勞もするのが夫婦ですけれど、お八重のはまるで違ひます。――旦那はお八重の來た當座には、そんなことを言ふのぢやありませんが、柳行李一つしかなかつたものです。聞けばえらい人だといふのに、とわたしは一時は呆れたものです。尤も、まだ年は若くそれに下宿にゐるやうな書生さんかたぎなら、そんなことは當前だとみんなが言ふものだから、成程さうだ、女房でも持つて、何かとこれから身のまわりも氣をつけるだらうと思つて安心をしてゐたのです。それがどうでせう。お八重のものは何一つ滿足に殘つては居ない。時計だつて指輪だつて、いづれは大したものではないまでもみんな揃へてやつたものが、そんなものはおろか普段着一枚整へる始末です。――きのふもさう言つたら、お八重は、そんな事など言ふのではないとは言ひましたけれども、あなた、本

當でございますよ。それも、今ほど申すとほり、貧をしてさうならばこれは運ですもの、そんな事を言ひ出せばそれこそ愚痴。でも、お八重のは違ひます。北村は自分のものやお雪のもののためなら、いくらでも金は惜まないのです。それがどうでせう。これは百合子に、これはお八重にと言つて、いつ何を買つてくれてやつたといふのをわたしはまるで見た事はないのです。――いや〳〵、こんな事はお耳に入れても、もう仕方がない。ただわたしは、お八重が不憫なばかりなのですよ。あなた、あれは、御覧のとほり、わたしの口から申してはをかしいかも知れませんけれど、ほんとうに優しい氣のいい女なのです。わたしは實の子でこそは無いのですけれど、血はつながつてはゐるし、それに永いこと育てたのですもの、わたしにとつては愛(いと)しくて、おとなしい子だけに不憫が增すのでございますよ、あなた。これがお雪のやうな奴なら、わたしはたとひ、實の子だつたにしたつて何とも思やしません。――幸、北村がいやだといふなら返して貰ひますとも。何の出もどりであらうと、子供のひとりぐらゐあらうと、あの子ならあなた、わたしは大手を振つてどこへでも押賣に出かけてでも行きたいくらゐです」

お婆さんは不意に口をつぐんだ。赤木はふと北村が、もう既に赤木のお八重に對する感情をお八重に打明けてしまつて、それでお婆さんがこんな事をいふのぢやないかと、思つてみた。お婆さんの口にかかつては北村はまるで市井の無頼漢と選ぶところがないやうに言はれた。赤木はそれを聞く間は、お婆さんとしては尤もなと思ひながらも多少、閉口しないではなかつたが、さうしてお婆さんのなかなか鋭利な舌鋒を喜ぶわけには行かなかつたけれども、しかし彼女がお八重を愛してゐることを言ふ時の言葉は、赤木にはそつくり同感で、むしろ自分の代辯者を得たやうな心持さへした。

「あなたの仰言るとほりです――僕も感心してゐます」

赤木は、さう言つて、ふと彼の顏が赧くなつたのに氣づいてうつ向いた。

「お力に思ふのは」と年寄は言つた「あなたばかりだと、お八重も申してゐます。どうぞ、お八重の事はよく北村とも相談をしてやつて下さいませ。わたしはそれをお頼みしたくて、つひ永話をしましたが、お八重が申しますには、北村は別れても當分、お八重の世話はするとか言つたさうですが、それはどういふわけでせうね」

「さあ」赤木は胸がとどろくのを感じながら答へた「それは北村君には、きつと何か考へがあるのでせうが……」

「その考へを、あなたは御存知ではありませんか。——わたしには、それがどうもちと腑に落ちないのです。別れるなら別れるで何も今更そんな事をして貰はないでも、一時も、早くきつぱりと型がついた方がいいとわたしは思ふのですがね。お八重から聞いたやうでは、まるで生殺しのやうなわけですものねえ」

「いいえ。さうではありません」赤木は言つた「さういふ點は、きつぱりと型がつく筈です。ただこれから後をどうすればお八重さんの爲めにいいか、北村もそれが苦になるので考へるのでせう。あれで、そんなに惡黨でもありませんから」

「それはね、もと／＼惡黨といふわけでは無いかも知れませんさね。でもかういふ事は出來た事で見るより外に仕方もありませんし、何しろ、わたしは、早く北村からお八重を離して貰ひたいのが山々なのですよ。もうかうなつては。——なまなか、ぐづ／＼してゐてまたへんな事にならうよりは、お八重ももう決心のついた折から、ただ別れさせて貰ひたいのが私たちの望みなのですがねえ。どうぞ、あなたから北村によくさう仰言つて下さいませ。お八重も申すとほり、全く、力に思ふのはあなたばかりなのでございますからね。くど／＼と申しますれど、どうぞよろしくお願ひ申しますから」

年寄は丁寧に頭を下げると、目がくしやくしやとしでもするのか、袖口で目頭を拭うた。それから冷え切つてお茶の

のこつてゐたのをきれいに啜り上げると、またもう一度丁寧にお辭儀をして立上つた。話しぶりもさうであつたが、動作も男性的ながつしりとした感じの人である。北村もこの人をよく言はなかつたが、きつと、惡いことをしてゐるだけにこのお婆さんに壓迫を感ずるのであらう。ありさうなことである。しかし孫木は、この老婆がお八重を限りなく愛してゐるらしいのを見たことは樂しかつた。

お婆さんと入れ代りにお八重が再び座敷に歸つて來た。

「お力に思ふのは」と年寄は言つた「あなたばかりだと、お八重も申してゐます。どうぞ、お八重の事はよく北村とも相談をしてやつて下さいませ。わたしはそれをお頼みしたくて、つひ永話をしましたが、お八重が申しますには、北村は別れても當分、お八重の世話はするとか言つたさうですが、それはどういふわけでせうね」

「さあ」赤木は胸がとどろくのを感じながら答へた「それは北村君には、きつと何か考へがあるのでせうが……」

「その考へを、あなたは御存知ではありませんか。――わたしには、それがどうもちと腑に落ちないのです。別れるなら別れるで何も今更そんな事をして貰はないでも、一時も、早くきつぱりと型がついた方がいいとわたしは思ふのですがね。お八重から聞いたやうでは、まるで生殺しのやうなわけですものねえ」

「いいえ。さうではありません」赤木は言つた「さういふ點は、きつぱりと型がつく筈です。ただこれから後をどうすればお八重さんの爲めにいいか、北村もそれが苦になるので考へゐるのでせう。あれで、そんなに惡黨でもありませんから」

「それはね、もと〳〵惡黨といふわけでは無いかも知れませんさね。でもかういふ事は出來た事で見るより外に仕方もありませんし。何しろ。わたしは。早く北村からお八重を離して貰ひたいのが山々なのですよ。もうかうなつては。――なまなか。ぐづ〳〵してゐてまたへんな事にならうよりは、お八重ももう決心のついた折から、ただ別れさせて貰ひたいのが私たちの望みなのですがねえ。どうぞ、あなたから北村によくさう仰言つて下さいませ。お八重も申すとほり、全く。力に思ふのはあなたばかりなのでございますからね。くど〳〵と申しますれど、どうぞよろしくお願ひ申しますから」

年寄は丁寧に頭を下げると、目がくしやくしやとしでもするのか、袖口で目頭を拭うた。それから冷え切つてお茶の

のこつてゐたのをきれいに啜り上げると、またもう一度丁寧にお辭儀をして立上つた。話しぶりもさうであつたが、動作も男性的ながつしりとした感じの人である。北村もこの人をよく言はなかつたが、きつと、惡いことをしてゐるだけにこのお婆さんに壓迫を感ずるのであらう。ありさうなことである。しかし赤木は、この老婆がお八重を限りなく愛してゐるらしいのを見たことは樂しかつた。

お婆さんと入れ代りにお八重が再び座敷に歸つて來た。

「お力に思ふのは」と年寄は言つた「あなたばかりだと、お八重も申してゐます。どうぞ、お八重の事はよく北村とも相談をしてやつて下さいませ。わたしはそれをお頼みしたくて、つひ永話をしましたが、お八重が申しますには、北村は別れても當分、お八重の世話はするとか言つたさうですが、それはどういふわけでせうね」

「さあ」赤木は胸がとどろくのを感じながら答へた「それは北村君には、きつと何か考へがあるのでせうが……」

「その考へを、あなたは御存知ではありませんか。――わたしには、それがどうもちと腑に落ちないのです。別れるなら別れるで何も今更そんな事をして貰はないでも、一時も、早くきつぱりと型がついた方がいいとわたしは思ふのですがね。お八重から聞いたやうでは、まるで生殺しのやうなわけですものねえ」

「いいえ。さうではありません」赤木は言つた「さういふ點は、きつぱりと型がつく筈です。ただこれから後をどうすればお八重さんの爲めにいいか、北村もそれが苦になるので考へるのでせう。あれで、そんなに惡黨でもありませんから」

「それはね、もと〳〵惡黨といふわけでは無いかも知れませんさね。でもかういふ事は出來た事で見るより外に仕方もありませんし、何しろ、わたしは、早く北村からお八重を離して貰ひたいのが山々なのですよ。もうかうなつては。――なまなか、ぐづ〳〵してゐてまたへんな事にならうよりは、お八重ももう決心のついた折から、ただ別れさせて貰ひたいのが私たちの望みなのですがねえ。どうぞ、あなたから北村によくさう仰言つて下さいませ。お八重も申すとほり、全く、力に思ふのはあなたばかりなのでございますからね。くど〳〵と申しますれど、どうぞよろしくお願ひ申しますから」

年寄は丁寧に頭を下げると、目がくしやくしやとしてでもするのか、袖口で目頭を拭うた。それから冷え切つてお茶の

のこつてゐたのをきれいに啜り上げると、またもう一度丁寧にお辭儀をして立上つた。話しぶりもさうであつたが、動作も男性的ながつしりとした感じの人である。北村もこの人をよく言はなかつたが、きつと、惡いことをしてゐるだけにこのお婆さんに壓迫を感ずるのであらう。ありさうなことである。しかし赤木は、この老婆がお八重を限りなく愛してゐるらしいのを見たことは樂しかつた。

お婆さんと入れ代りにお八重が再び座敷に歸つて來た。

「お力に思ふのは」と年寄は言つた「あなたばかりだと、お八重も申してゐます。どうぞ、お八重の事はよく北村とも相談をしてやつて下さいませ。わたしはそれをお頼みしたくて、つひ永話をしましたが、お八重が申しますには、北村は別れても當分、お八重の世話はするとか言つたさうですが、それはどういふわけでせうね」

「さあ」赤木は胸がとどろくのを感じながら答へた「それは北村君には、きつと何か考へがあるのでせうが……」

「その考へを、あなたは御存知ではありませんか。――わたしには、それがどうもちと腑に落ちないのです。別れるなら別れるで何も今更そんな事をして貰はないでも、一時も、早くきつぱりと型がついた方がいいとわたしは思ふのですがね。お八重から聞いたやうでは、まるで生殺しのやうなわけですものねえ」

「いいえ。さうではありません」赤木は言つた「さういふ點は、きつぱりと型がつく筈です。ただこれから後をどうすればお八重さんの爲めにいいか、北村もそれが苦になるので考へるのでせう。あれで、そんなに惡黨でもありませんから」

「それはね、もと／＼惡黨といふわけでは無いかも知れませんさね。でもかういふ事は出來た事で見るより外に仕方もありませんし、何しろ、わたしは、早く北村からお八重を離して貰ひたいのが山々なのですよ。もうかうなつては。――なまなか、ぐづ／＼してゐてまたへんな事にならうよりは、お八重ももう決心のついた折から、ただ別れさせて貰ひたいのが私たちの望みなのですがねえ。どうぞ、あなたから北村によくさう仰言つて下さいませ。お八重も申すとほり、全く、力に思ふのはあなたばかりなのでございますからね。くど／＼と申しますれど、どうぞよろしくお願ひ申しますから」

年寄は丁寧に頭を下げると、目がくしやくしやとしでもするのか、袖口で目頭を拭うた。それから冷え切つてお茶の

のこつてゐたのをきれいに啜り上げると、またもう一度丁寧にお辭儀をして立上つた。話しぶりもさうであつたが、動作も男性的ながつしりとした感じの人である。北村もこの人をよく言はなかつたが、きつと、惡いことをしてゐるだけにこのお婆さんに壓迫を感ずるのであらう。ありさうなことである。しかし赤木は、この老婆がお八重を限りなく愛してゐるらしいのを見たことは樂しかつた。

お婆さんと入れ代りにお八重が再び座敷に歸つて來た。

編輯後記

◇熱鬧裏に八月號の編輯は終了した。又明日から九月特別號の編輯にかからねばならぬ。今度は必ずいいものが出來る。イイ加減の作は斷じて淘汰することにしたから各方面第一義的の力作のみが得られる。

◇英國總罷業は、露國革命以來の注目すべき大事件である。鰀山教授の通信はその人を得たるの感がある。今後續々として至る通信は我誌に異彩を放つであろう。文獻として有價値であることは一讀した人々のみは首肯が出來るだろう。

◇本社へ向つて論文小說等の閲讀を希望する方は必ず返送料を封入すること。でなくば返送はお斷りする。うぬぼれの出鱈目の原稿は受付けず、自信あり、責任のもてる原稿に限つて送つて下さい。

◇本誌臨時「現代支那號」は現代支那を研究せんと欲する人々の唯一の伴侶であり、標燈である。支那現下の社會運動が軍閥と對峙して奈何なる地位に居るか。そしてヤング支那の勞働運動者、新人等はいかに我青年を考察しているか。そして次時代を準備する青年の思想・運動が奈邊に及んでいるかを深く觀察した。

◇支那小說家は肉慾の取扱に於て、到底他国人の模倣すべからざる境地、筆力をもつている。この點を深く支那號で味はつて下さい。何にせよ今後支那の交通が內國的にならねばならぬのだから、それにはどうしても現下の支那の各社會に通曉するの要が切である。本誌の愛讀をぜひおすすめする理由はここにある。

◇本誌の發賣禁止に關する諸方面の同情感謝の外なし、此問題に關しては或る運動が起りかけているがそれは次號で報告することとする。

◇細井和喜藏著「無限の鐘」が發賣されて三日目泥沼呪文の一時其筋より切取を命ぜらる

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	[illegible]共 郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	[illegible]共 郵稅不用

大正拾五年七月十九日 印刷納本
大正拾五年八月一日 發行

(價八拾錢)

編輯發行兼印刷人 東京市芝區愛宕下町一ノ一 山本三生
印刷所 東京牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍
發行所 東京芝區愛宕下一ノ一 改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八

編輯後記

◇熱鬧裏に八月號の編輯は終了した。又明日から九月特別號の編輯にかからねばならぬ。今度は必ずいいものが出來る。イイ加減の作は斷じて淘汰することにしたから各方面第一義的の力作のみが得られる。

◇英國總罷業は、露國革命以來の注目すべき大事件である。蠟山教授の通信はその人を得たるの感がある。今後續々として至る通信は我誌に異彩を放つであろう。文献として有價値であることは一讀した人々のみは首肯が出來るだろう。

◇本社へ向つて論文小説等の閲讀を希望する方は必ず返送料を封入すること。でなくば返送はお斷りする。うぬぼれの出鱈目の原稿は受付けず、自信あり・責任のもてる原稿に限つて送つて下さい。

◇本誌臨時「現代支那號」は現代支那を研究せんと欲する人々の唯一の伴侶であり、標燈である。支那現下の社會運動が眾問と對峙して奈何なる地位に居るか。そしてヤング支那の勞働運動者、新人等はいかに我青年を考察しているか。そして次時代を擔荷する青年の思想・運動が奈邊に及んでいるかを深く觀察した。

◇支那小説家は肉慾の取扱に於て、到底他日人の模倣すべからざる境地、筆力をもつている、この點を深く支那號で味はつて下さい。何にせよ今後支那の交通が内國的にならねばならぬのだから、それにはどうしても現下の支那の各社會に通曉するの要が切である。本誌の愛讀をぜひおすすめする理由はここにある。

◇本誌の發賣禁止に關する諸方面の同情感謝の外なし、此問題に關しては或る運動が起りかけているがそれは次號で報告することとする。

◇細井和喜藏著「無限の鐘」が發賣されて三日目泥沼呪文の一詩其筋より切取を命ぜらる

大正拾五年七月十九日　印刷納本
大正拾五年八月一日　發行

(價八拾錢)

編輯兼發行人　東京市芝區愛宕下町一ノ一　山本三生
印刷人　東京牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八


滋養飲料
カルピス
夏はよし
青葉カルピス
ほとゝぎす
Calpis

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

